

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第40集

瀬名遺跡 I

(遺構編 I)

昭和61・62・63・平成元・平成2年度静岡バイパス(瀬名地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第40集

瀬名遺跡 I

(遺構編 I)

昭和61・62・63・平成元・平成2年度静岡バイパス(瀬名地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

1992

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



静岡平野北部には北の山塊から数条の長い丘陵が伸びている。長尾川は、瀬名、沼上岡丘陵（写真右半）の間を扇状地を形成して流れている。麻機低地（写真上方）から流れる巴川は、大きく方向を変え、長尾川と合流して清水の折戸湾へと向かう。（写真手前）急流の長尾川に対し、巴川の流れは停滞しており、長尾川は巴川との合流地点手前で幾度となく大きな洪水害を起こしてきた。

瀬名遺跡は、そのような長尾川扇状地南側に位置し、バイパスの建設工事に伴い調査がなされた。（写真中央）

洪水堆積砂礫が幾度にもわたり地表を埋没させ、現在も伏流水がそこを流れているため、発掘調査は非常に深さにまで及び、湧水とそれに伴う地盤の崩壊に苦しめられたが、遺構の保存状態は良好で、十数面もの生活面（水田跡が中心）と2万点に及ぶ木製品が検出された。



上、瀬名遺跡遺景（東より）

手前を横切る道路は東名高速

右、瀬名遺跡全景（西より）

長尾川堤（10区画）より清水方面を臨む、左前方は瀬名丘陵



上、試掘抗土層断面観察 (8区)
 中左、弥生末～古墳初水田の畦畔杭列
 (10区33番)
 下左、弥生中期方形周溝墓群
 (7区12層)

中右、弥生末～古墳初水田の畦畔から船部材出土
 (2/3区12層)
 下右、8・9・10区担当の作業員さん
 (10区26層水田にて)

序

瀬名遺跡の埋蔵文化財発掘調査は、一般国道1号静岡バイパス建設工事に伴うもので、清水市能島遺跡、静岡市川合遺跡について本研究所在同バイパス関連調査で三番目に着手した事業である。

低湿地に存在する遺跡という性格上、最終遺構面までの発掘深度が6mと深く、膨大な土量や地下からの激しい湧水など、調査には大きな労力と時間を要した。

瀬名遺跡は、弥生時代から近世に至るまでの各時代の水田跡を中心とした遺跡といえるが、弥生中期の層からは、盛土及び主体部が残存する方形周溝墓群も検出されている。

水田跡では、弥生時代中期に遡り、この地域の水田農耕の開始時期を検討できるものや、古墳時代初頭の非常に密度で打たれた杭列水田、平安時代における条里型地割に沿った水田を含め、各調査区7～10数面に及ぶ数の遺構が検出されており、出土した約2万点にも及ぶ膨大な数の木製品資料とともに、広がりつつある水田研究の一役を担うであろう。

また、「西奈」「五百原」など地名の記された木簡も出土し、地域の歴史時代を検証する上でも、貴重であると思われる。

本報告書は、瀬名遺跡の調査報告の第1冊目にあたり、各区で検出された水田跡を中心にしている。検出された個々の水田跡のデータに限らず、低湿地の調査方法や水田遺構検出の実際を知る上でも注目してもらいたいものである。

現地調査並びに本書の作成にあたっては、建設省・静岡県教育委員会・静岡市教育委員会をはじめとする関係機関各位のご理解とご協力に感謝を申し上げます。また、長い期間調査に参加された作業員の方々、様々なかたちで助言・指導を賜った方々に深くお礼申しあげるとともに、教職員から派遣され、不安ながらもよく奮闘してくれた担当調査員の労をねぎらいたい。

平成4年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所 長 齋 藤 忠

例 言

1. 本書は、静岡県静岡市瀬名に所在する瀬名遺跡の発掘調査報告の第1分冊である。
2. 本書は、本文編、遺構図（1/250の遺構全体図）、図版編の3部から構成される。
3. 調査は、昭和61年度静岡バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関静岡県教育委員会、調査実施機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で行った。
4. 現地発掘調査は、昭和61年4月から平成2年11月まで行い、現地発掘調査に並行して一部資料整理を実施した。

5. 調査体制は、次の通りである。

昭和61年度	所長 斎藤忠 常務理事 八代龍一 調査研究部長 岡田恭順 調査課長 植松章八 調査研究員 森下春美 足立順司 曾根辰雄
昭和62年度	所長 斎藤忠 常務理事 大石保夫 調査研究部長 山下晃 調査研究2課長 平野吾郎 主任調査研究員 佐野五十三 調査研究員 宮村典雄 小柴秀樹
昭和63年度	所長 斎藤忠 常務理事 亀山千鶴男 調査研究部長 山下晃 調査研究2課長 栗野克己 主任調査研究員 佐野五十三 調査研究員 曾根辰雄 杉浦高敏 宮村典雄 杉澤正敏 木下智章
平成元年度	所長 斎藤忠 常務理事 亀山千鶴男 調査研究部長 山下晃 調査研究2課長 栗野克己 主任調査研究員 伊藤豪 調査研究員 守谷孝治 竹山喜章（9月まで）宮村典雄 杉澤正敏 中山正典 内藤朝雄 縄巻強 木下智章 村瀬隆彦 小林孝誌 嘱託技術員 前嶋秀張
平成2年度	所長 斎藤忠 常務理事 亀山千鶴男 調査研究部長 山下晃 調査研究2課長 栗野克己 調査研究員 宮村典雄 杉澤正敏 中山正典（10月まで）伊林修一 笹原芳郎 塚本裕己 小林孝誌（10月まで）
平成3年度 （室内整理）	所長 斎藤忠 常務理事 鈴木勲 調査研究部長 山下晃 調査研究2課長 栗野克己 主任調査研究員 宮村典雄 調査研究員 中山正典（11月より）一杉高德（9月まで） 伊林修一（9月まで）小林孝誌 嘱託技術員 中鉢賢治

6. 本書は、静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆し、栗野克巳が統括した。
それぞれの担当者は目次に示した通りである。
第IV章第4節（6区）については、技術職員石井弘道が執筆を担当した。
中鉢賢治は1区の17c層掘立柱建物跡と28層下層木棺、5区の13層掘立柱建物跡、7区の10a層と12層上面、8区の18層上面、9区の41層上面について執筆を担当した。
7. 執筆担当者が必ずしも現地調査を担当したわけではなく、その場合、各年度に刊行された【調査概報】、内部資料として各月毎に作成した【調査概要】を参考に執筆した。
8. 各年度に刊行している【調査概報】『瀬名遺跡』昭和61年度、62年度、63年度、平成元年・2年度）と本書の記述に差がある場合は、本書の記述をもって報告とする。
9. 遺構写真については主に現地調査担当者が撮影し、一部の空中写真については（株）富士ロードサービス、（株）サンシャイン工業、（株）フジヤマに委託した。
10. 遺構の実測には一部写真測量をとりいれ、（株）フジヤマ、（株）シン航空写真に委託した。
11. 土壌のプラントオパール分析は（有）古環境研究所、花粉珪藻分析については（株）バリノサーヴェイに依頼した。
12. 調査・整理の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏・諸機関より御指導、御教示を賜わった。記して謝意を表するものである。（五十音順、敬称略）
石野博信 市原壽文 大塚初重 長田賢 加藤芳朗 鬼頭清明 金田章裕 工業善通 近藤友一郎
瀬川裕一郎 高橋学 田辺昭三 原秀三郎 福永伸哉 藤田等 松木哲 向坂綱二 森勇一
山内文 山口敏 山田昌久
13. 報告書遺構編作成に関わる資料整理作業（下野整理事務所）については下記の方々の協力を得た。（五十音順、敬称略）
青島久仁子 浅野富恵 池田きよ子 石井弘道 石原茜 伊藤美智子 井上のり子 岩石文江
榎本喜代子 小澤いづみ 落合高志 加藤百合子 川口しげ子 木村泰代 劔持富枝 後藤輝乃
酒井敦子 酒井春江 佐藤静枝 佐藤容子 杉原正憲 杉山すず代 竹下寿之 竹中比呂美
辻澤久江 中川里美 夏目景五 早瀬容子 望月寿美子 脇田千晶
14. 最後に、瀬名遺跡の現地調査に作業員というかたちで協力していただいた4年8ヵ月間実質約300名に及ぶ方々にあらためて感謝したい。

凡 例

1. 本書は、各調査区で検出された遺構をそれぞれ堆積状況を推定しながら下層から順に記述する形をとっている。
2. 本書は、各調査区毎に検出遺構を報告する形をとっており、瀬名遺跡全体を面的にとらえたものではない。瀬名遺跡では、8分割した調査区の工程的な調整、調査員の体制、氾濫原にあたる複雑な堆積状況、オープンカット工法でしかも各調査区を区分する現道路下を調査しなかったため調査区と調査区の間未調査部分が大きくなった等の理由で、現地調査の段階で、同一遺構面の追跡、統一視点をもった面的調査を行えなかった。今回の報告では、各調査区毎でも膨大にある調査記録を基礎データとして報告し、遺跡全体を面的にとらえる報告は、検討を重ね『遺構編Ⅱ』として刊行する予定である。
3. 用語と基本的な文章構成は統一を図ったつもりであるが、前述したような問題に起因して、担当者毎の報告の視点、ひいては本質的な遺構認識まで統一を図れなかった部分がある。
4. 全調査区を通じて、建設省の設けたバイパスセンターラインに合わせた方向で10m×10mのグリッドを表示した。南北方向の軸は真北より西へ7°24'37"ずれている。
 現地調査では、5区のみ国土方眼に合わせたグリッドを使用していたが、この報告では他調査区に合わせてグリッドを置き換えた。
5. グリッド杭とグリッドの名称については下記のように設定した。

例) 24 ←10m→ 23



C24グリッドとはC24グリッド杭の北西に位置する。

逆にいうと、

南西の角にあるグリッド杭の位置がそのグリッドの名称となる。

6. 各区毎の基本土層について【土層観察表】を作成した。

(1)層位については、層数が多いためローマ数字で示さず、アラビア数字を用いた。

当初一層と考えていたものが後に細分された場合、～a層～b層～c層と示した。

(2)イネのプラントオパール数値については、1層の中を上下3段以上にわたって資料採取した場合、最小値～最大値のように表現した。

(3)同一層で遺構を二面検出した場合については遺構の欄を二段にわたって記述した。

(4)年代観のうち、()をつけたものは、その遺構に伴う遺物では推定が困難で、層序的な観点や隣接調査区との遺構形態の比較から推定しているものである。

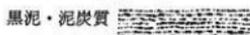
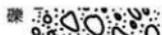
また、～の表現は、その間継続したという意味ではなく、その間のいずれかの時期になるであろうというものである。

7. 【土層観察表】に対応し、土層の堆積状況を示す【基本土層模式図】を作成した。

(1)縮尺は東西トレンチ北側土層断面の垂直1/50、水平1/500とし、地形の起伏を強調した。

(2)調査最下面より下の土層をトレンチ調査した場合は、図で表記し、注記を添えた。

(3)礫、砂、黒泥・泥炭質については次に示したスクリーントーンを貼った。



8. 各調査区の遺構の変遷の項では、文章記述の前に1/1000の遺構模式図を検出順に上層より並べて〔遺構変遷図〕として示した。(杭●、立木★等のシンボルを使用)
9. 遺構模式図は基本的に遺構の外側ラインのみを図化しており、浸食痕跡、トレンチ等を省略している。資料化のための計測、図による検討等は、添付の1/250〔遺構図〕を使用していただきたい。また、本文記述のなかのグリッド位置の表現はこの〔遺構図〕を基本としている。
10. 本文記述に伴う部分図〔挿図〕のなかには、遺物を一定のシンボルで表現したものがある。(杭● 立木★ 土器× 木製品○ 骨△ 種子▲ 金属器■ 石器★ 等)
11. 本文記述に伴う水田面のエレベーション図は、地形の起伏を強調するために基本的に垂直方向：水平方向を10：1または5：1の縮尺にして作成した。
12. 添付の〔遺構図〕は、瀬名遺跡各調査区全ての遺構面を一枚づつ縮尺1/250に統一して図化した。
- (1)10cm間隔のコンターを別色で示した。流路等の急斜面ではコンターの間隔を大きくしている。
 - (2)基本的に遺構の一部ととらえられるもの(杭・横板・芯材)以外の遺物出土地点は表記しなかった。
 - (3)杭列は全てドットで表現し、位置、疎密が明確になるようにした。
 - (4)杭列・横板・芯材のなかには、表面には出ておらず解体中検出されたものを表記したものがある。
 - (5)流路、溝、洪水痕跡の縁には落ちマークをつけ、上層からの下刻で下層まで影響が及んでいる部分は、その範囲を破線で示した。
13. 遺構番号には、頭に次の略号を付けた。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構
SD	溝状遺構	SH	掘立柱建物	SP	小穴・土坑	ST	水田
SE	井戸	SK	畦畔	SR	自然流路・河道	SX	その他の遺構

(1)略号の後に調査区、検出層、遺構番号を組み合わせた。

例) 2/3区3層検出の溝状遺構1は、SD20301。(検出層と遺構番号は二ケタにして、一ケタの場合前に0をつけた)

(2)水田番号のみ、調査区、検出層を省略した。例) ST1 ST100(ケタは揃えなかった)

(3)本報告書で使用している遺構番号は、各年度発行の〔調査概報〕で使用されていた遺構番号とは異なるものがある。

14. 水田1枚毎の標高と面積、形状については、〔水田計測表〕を作成した。

(1)面積は、畦畔の下端のなす範囲を計測した。

プランメーター(タマヤ製)を用い、3回計測した平均値(小数点第2位を四捨五入)を記した。

(2)形状も畦畔の下端のなす部分で観察し、明らかに正方形、長方形の範囲に入らないものは台形、菱形、四辺形、扇形、亀甲形(多角形)、三角形等の名称を付けた。

四隅のコーナーが検出されていない区画で、推定できるものは()で表記した。

(3)最長辺、短辺については、区画をなす辺の中で最長のものの長ささとそれに隣り合う辺のうち短いもののほうの長さを計測した。

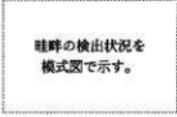
15. 水田の基本データをまとめる意味で、〔水田観察表〕を作成した。

この水田観察表は、「東日本の水田跡を考える会」資料集で作成された水田カードの書式を参考にして作成してみた。

記入要項・内容については次頁の表に示した通りである。

<水田観察表記入内容>

瀬名遺跡 ○区 ○○層水田(時期 直接的あるいは間接的な推定)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向範囲(約900m)内での調査区の地点を示す。遺跡周辺の現地形についても触れ、現在の調査区のおおよその位置、地形環境について簡単に記述する。
	② 地形面の変化	調査区内の地形面の変化について記述する。傾斜の方向と度合いを具体的な数字で示した。
	③ 水田の範囲と面積	検出された水田の調査区内における範囲と面積を示す。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	水田面を覆う堆積物を示す。水田露地、浸食状況等の推定は本文で記述した。
	⑤ 水田土壌	土色、粘性、攪拌状態、酸化鉄・マンガン結晶等の成分について記述する。層厚、攪拌部の厚さ、分層の様子などにも触れる。
	⑥ イネのプラントオパール	試料採取地点を地点別(グリッド)に全て記入する。例) <B18地点> 1層の中を2段にわたって試料採取した場合は①、②で示した。 ①1,400個/8 1層の中を4段以上にわたって試料採取した場合は数値を〜を使って示した。 ②1,500個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘性、攪拌状態、成分などについて述べる。分層の様子や自然層かそうでないかなどについても触れる。
	⑧ 畦畔の規模	畦畔の大きさ(大、中、小)の種類を記述する。幅、高さについては概略を数字で示した。
	⑨ 畦畔の構造	盛土の状況、杭・矢板や横板、芯材等構造について記述する。杭のある場合、杭の材質(針葉樹・広葉樹)や打たれ方、また、圧密化された様子などにも触れる。
	⑩ 水田区画の方法	区画の大きさの大小、特徴について記述する。また、畦畔の基軸の方向、規格性などにより、畦畔そして区画を構築した順序も推定する。
	⑪ 水田区画の形	1枚の平均的な平面形態(正方形・長方形・台形・四辺形等)、全体の配列について観察。
	⑫ 枚数と面積	検出された区画の総枚数と面積の確定できた枚数、平均面積(ばらつきの大きい場合は最大・最小も)について記述する。
	⑬ 田面の状態	足跡、稲株痕、獣・鼯鼠跡、浸食の状況等について観察する。
用排水の状態	⑭ 水源	水田への水供給源と推定できる流路・湧水などを記述する。
	⑮ 自然流路	水田とともに検出された流路の位置・方向・規模、水田との関係について触れる。
	⑯ 水路	位置・方向・規模、水田面の取水用か排水用かについて記述する。
	⑰ 水口	畦畔の一部を切断して設ける水口、水堰、暗渠などの数、位置や構造について記述する。水田面を流れる水の方向も推定できれば触れる。
遺物	⑱ 遺物の種類	土器、木製品、金属製品など、出土した主要な遺物の種類、量、場合によっては特徴、年代観についても触れる。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	年代の推定できる遺物の種類と出土状態について記述する。そうした遺物がない場合は、層序的な推定、隣接調査区との土壌や遺構の比較もまとめる。
	⑳ 隣接区との対応関係	出土した遺物の年代観、土壌の色調・成分の類似性、遺構形態の類似性などから、隣接する調査区において、対応関係について触れる。
その他	㉑ 自然科学的分析	花粉粒種の種類分析、プラントオパール分析、昆虫化石同定等のデータから、当時の水田面、水田土壌の状況、周辺の自然環境について推定還元できる部分に触れる。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  <p>(説明) ・何をもって水田として認定したか。断面、平面での畦畔の探査。 ・水田面はどこか。地層関係と実際の検出状況、プラントオパールの量。 ・区画、畦畔、杭、土壌、攪拌状況はどんな様子か。 ・疑似畦畔である可能性はどうか。 ・酸化鉄(藍鉄、管鉄、皮酸鉄)、マンガン結晶等の有無と様子はどうか。 以上のような観点から、検出面を水田遺構としてとらえた根拠について述べる。</p>

目 次

序

例言・凡例

第I章	はじめに	(栗野克巳)	1
第II章	位置と環境		
第1節	地理的環境	(宮村典雄)	5
第2節	歴史的環境	(小林孝誌)	8
第III章	調査の概要		
第1節	調査の方法	(小林孝誌)	13
第2節	調査の経過	(〃)	19
第IV章	各調査区で検出された遺構		
第1節	1 区	(一杉高德、一部中鉢賢治)	24
第2節	2 / 3 区	(宮村典雄、小林孝誌)	68
第3節	5 区	(〃 、一杉、小林、一部中鉢)	120
第4節	6 区	(石井弘道)	168
第5節	7 区	(伊林修一、中鉢賢治)	212
第6節	8 区	(〃 、一部 〃)	266
第7節	9 区	(小林孝誌、一部 〃)	320
第8節	10 区	(〃)	384

挿 図 目 次

第 1 図	静岡平野地形模式図
第 2 図	周辺遺跡地図
第 3 図	瀬名遺跡位置図
第 4 図	瀬名遺跡グリッド配置図
1 区挿図目次	
第 5 図	1区基本土層模式図 (水平1:500垂直1:50)
第 6 図	1区遺構変遷図 1
第 7 図	1区遺構変遷図 2
第 8 図	35層土層断面図
第 9 図	35層出土状況位置図
第 10 図	35層出土坑断面図
第 11 図	28層下面木棺高出土位置図
第 12 図	28層下面木棺実測図
第 13 図	28層水田土層出土状況図
第 14 図	28層水田出土土器実測図
第 15 図	28層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:20)
第 16 図	22層水田出土土器実測図
第 17 図	22層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:40)
第 18 図	22層水田SK12201実測図
第 19 図	22層水田SK12202実測図 (1)
第 20 図	22層水田SK12202実測図 (2)
第 21 図	22層水田SK12203実測図
第 22 図	22層水田SK12205実測図
第 23 図	20層SR12001土層断面図 (N5トレンチ部分)
第 24 図	20層SR12001遺物出土状況図
第 25 図	20層SR12001実測図
第 26 図	20層SR12001出土木棺実測図
第 27 図	20層SR12001出土人形実測図
第 28 図	20層青銅等出土状況図
第 29 図	19層水田SK11901・2/3区6層水田SK20601位置図
第 30 図	19層水田地区区分図
第 31 図	19層水田水口上自然石出土状況図
第 32 図	19層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:20)
第 33 図	17c層孤立柱建物跡SH11702実測図
第 34 図	17c層孤立柱建物跡SH11701実測図
第 35 図	17b層水田水口上自然石出土状況図
第 36 図	17b層水田水口上自然石・足跡検出状況図
第 37 図	17b層水田SD11701土層断面図
第 38 図	16層水田立木・杭出土状況図
第 39 図	16層水田出土土器実測図
第 40 図	13層水田水口検出状況図
第 41 図	13層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:20)
第 42 図	10層水田SK11003実測図
2/3区挿図目次	
第 43 図	2/3区基本土層模式図 (水平1:500垂直1:50)
第 44 図	2/3区遺構変遷図 1
第 45 図	2/3区遺構変遷図 2
第 46 図	21a層上流路・溝・環状杭列実測図
第 47 図	21a層上流路・溝・環状杭列断面図
第 48 図	20層水田実測図
第 49 図	20層上流路内杭列実測図
第 50 図	16層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:80)
第 51 図	16層水田上足跡実測図
第 52 図	16層水田SD21601実測図

第 53 図	14層水田・12層水田区画階級状況図
第 54 図	14層水田畦畔断面図
第 55 図	14層水田上農具痕実測図
第 56 図	12層水田SK21206内木桶状遺構実測図
第 57 図	12層水田SK21201断面図
第 58 図	12層水田SK21201内枕列・舟材実測図
第 59 図	12層水田SK21201内出土舟材実測図
第 60 図	12層水田SK21204内枕列実測図
第 61 図	10層中SR21001断面図
第 62 図	10層中環状遺構実測図
第 63 図	10層中環状遺構断面図
第 64 図	9層上SR20902内環状枕列実測図
第 65 図	9層上SR20901断面図
第 66 図	9層上木村出土状況図
第 67 図	9層上土器出土分布図
第 68 図	8層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:160)
第 69 図	8層水田実測図
第 70 図	6層水田SK20602実測図
第 71 図	6層水田SK20601木桶状遺構実測図
第 72 図	3層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:80)
第 73 図	3層水田SK20302・20304枕列実測図
第 74 図	3層水田SK20301・20306実測図

4区挿図目次

第 75 図	5区基本土層模式図 (水平1:500垂直1:50)
第 76 図	5区遺構変遷図 1
第 77 図	5区遺構変遷図 2
第 78 図	14層水田エレベーション図 (水平1:250垂直1:50)
第 79 図	14層水田水口・足跡検出状況図
第 80 図	青灰色粘土層出土土器実測図
第 81 図	13層遺構当時の風景想像図
第 82 図	13層土器出土状況図
第 83 図	13層SR51301・51303実測図
第 84 図	13層SR51301土層断面図
第 85 図	13層1・3号壕実測図
第 86 図	13層2号壕実測図 (1)
第 87 図	13層2号壕実測図 (2)
第 88 図	13層SR51303土層断面図
第 89 図	13層4号壕実測図 (1)
第 90 図	13層SR51303支流土層断面図
第 91 図	13層4号壕実測図 (2)
第 92 図	13層5号壕実測図
第 93 図	13層孤立柱建物跡実測図
第 94 図	12層水田実測図
第 95 図	12層水田足跡検出状況図
第 96 図	12層水田・10層水田区画階級状況図
第 97 図	10層水田エレベーション図 (水平1:500垂直1:100)
第 98 図	10層水田断面図
第 99 図	10層水田SK51001・51002実測図
第 100 図	10層水田SK51003実測図
第 101 図	10層水田SK51005遺物出土状況図
第 102 図	10層水田SK51004実測図
第 103 図	10層水田SK51006実測図
第 104 図	8層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:160)
第 105 図	8層遺下SR5080i遺物出土状況図
第 106 図	5層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:40)
第 107 図	5層水田獣骨等出土状況図 (グリッドG30付近)
第 108 図	3層水田実測図

■ 区 検目目次

- 第109図 6区基本土層模式図(水平1:500垂直1:50)
 第110図 6区遺構実測図1
 第111図 6区遺構実測図2
 第112図 23a層 遺物分布図
 第113図 19層水田 凹地内土器片分布図
 第114図 6区19層-5区13層 遺構関連図
 第115図 19層水田 調査区西端の土層図
 第116図 18層水田 足跡・敷底分布図
 第117図 18層水田 杭列展開図
 第118図 19層-18層 畦畔配置図
 第119図 16層水田杭列畦畔 タイプ別分布図
 第120図 16層水田 遺物分布図
 第121図 16層水田杭列畦畔 タイプ別典型例実測図1
 第122図 16層水田杭列畦畔 タイプ別典型例実測図2
 第123図 16層水田 遺物出土状況図
 第124図 14層 遺物出土状況図1
 第125図 14層 遺物出土状況図2
 第126図 13層水田 畦畔断面図、田面標高比較図
 第127図 11層水田 足跡分布図1(部分・方向分布)
 第128図 11層水田 足跡分布図2(全景)
 第129図 11層-5層 畦畔配置図
 第130図 5層水田 全杭列配置図
 第131図 5層水田 畦畔展開図

7区検目目次

- 第132図 7区基本土層模式図(水平1:500垂直1:50)
 第133図 7区遺構実測図 1
 第134図 7区遺構実測図 2
 第135図 15層遺構概念図
 第136図 13層杭列実測図
 第137図 1号方形周溝基主体部実測図
 第138図 1号方形周溝基平面実測図
 第139図 2号方形周溝基実測図
 第140図 3号方形周溝基平面実測図
 第141図 3号方形周溝基周溝断面実測図
 第142図 3号方形周溝基主体部実測図
 第143図 4号方形周溝基実測図
 第144図 5号方形周溝基平面実測図
 第145図 5号方形周溝基主体部実測図
 第146図 6号方形周溝基実測図
 第147図 7号方形周溝基実測図
 第148図 7号方形周溝基主体部実測図
 第149図 8号方形周溝基平面実測図
 第150図 8号方形周溝基主体部実測図
 第151図 9号方形周溝基実測図
 第152図 10号方形周溝基実測図
 第153図 11号方形周溝基平面実測図
 第154図 12号方形周溝基平面実測図
 第155図 11号方形周溝基周溝断面実測図
 第156図 12号方形周溝基主体部実測図
 第157図 13号周溝基土層断面実測図
 第158図 13号方形周溝基実測図
 第159図 14号方形周溝基平面実測図
 第160図 14号方形周溝基主体部実測図
 第161図 溝状遺構実測図
 第162図 10a層水田SK71004墳丘接続部分平面実測図
 第163図 10a層水田エレベーション図(水平1:400垂直1:20)

- 第164図 10a層水田西側グループ畦畔実測図
 第165図 9層水田遺構実測図
 第166図 8層水田エレベーション図(水平1:400垂直1:40)
 第167図 8層SR70801断面実測図
 第168図 8層SR70801内1号堰実測図
 第169図 8層SR70801内2号堰実測図
 第170図 8層SR70801内遺物出土状況実測図
 第171図 8層SD70801・70802土層図
 第172図 7層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第173図 7層SD70701断面実測図
 第174図 2層杭列実測図

8区 検目目次

- 第175図 8区基本土層模式図(水平1:500垂直1:50)
 第176図 8区遺構実測図1
 第177図 8区遺構実測図2
 第178図 24層SX82401実測図
 第179図 22層SX82201ピット土層図
 第180図 22層SD82201実測図、土層図
 第181図 21層SX82101実測図、エレベーション図(泳形・跡・跡1)
 第182図 21層出土器拓影
 第183図 21層SR82101土層図
 第184図 21層杭列実測図
 第185図 21層出土器実測図
 第186図 20層SD82001実測図
 第187図 20層出土木材実測図
 第188図 1号方形周溝基平面実測図
 第189図 1号方形周溝基第1主体部実測図
 第190図 1号方形周溝基第2主体部実測図
 第191図 2号方形周溝基平面実測図
 第192図 2号方形周溝基主体部実測図
 第193図 方形周溝基土層断面実測図
 第194図 3号方形周溝基平面実測図
 第195図 18層SD81801・SK817a01西側杭列実測図
 第196図 17a層・17b層畦畔踏襲図、17b層水田エレベーション図
 第197図 17a層水田SK817a05実測図、木樋出土状況図
 第198図 17a層水田SK817a06杭列実測図
 第199図 16層SX81601実測図
 第200図 16層SX81602実測図
 第201図 15層水田遺構実測図
 第202図 14b層輪かんじ型田下駄出土状況図
 第203図 15層~13層堆積状況模式図
 第204図 14a層・13層畦畔踏襲関係図
 第205図 13層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第206図 13層水田SK81301修復状況実測図
 第207図 10b層水田畦畔詳細図
 第208図 10b層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第209図 10b層直上土器出土状況図
 第210図 10a層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第211図 10a層水田SK810a01・SK81301踏襲状況土層図
 第212図 10a層水田浸食痕跡土層図
 第213図 8層水田水口実測図
 第214図 8層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第215図 8層水田SX80801土層図
 第216図 6層水田水口実測図
 第217図 6層水田エレベーション図(水平1:800垂直1:80)
 第218図 6層水田SX80601実測図

9区 神岡目次

第219図 9区基本土層模式図 (水平1:500垂直1:50)

第220図 9区遺構変遷図1

第221図 9区遺構変遷図2

第222図 42層上SR94201内出土土器拓影

第223図 42層上SD94203実測図

第224図 1号方形周溝基平面実測図

第225図 1号方形周溝基主体部実測図

第226図 2号方形周溝基第1主体部実測図

第227図 2号方形周溝基平面実測図

第228図 2号方形周溝基第2主体部実測図

第229図 方形周溝基土層断面実測図

第230図 41層上SD94101実測図

第231図 40層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第232図 40層水田SK94001・SK94002杭列実測図

第233図 38層水田SK93801杭列実測図

第234図 38層水田SK93802西半部杭列実測図

第235図 38層水田SK93803杭列実測図 (1)

第235図 38層水田SK93803杭列実測図 (2)

第236図 38層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第237図 37a層上SR93701・SD93701・93702実測図

第238図 37a層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第239図 37a層水田畦畔上木製品出土状況図

第240図 37a層水田水門状遺構実測図

第241図 35層中水道状遺構実測図

第242図 33a層上SR93303西岸木群実測図

第243図 22層・25層杭列平面合成図

第244図 25層上SR92503北西部杭列5周辺遺物出土状況図

第245図 25層上SR92503南半部杭列実測図

第246図 25層上SR92501内壕状遺構周辺実測図

第247図 22層上杭列実測図

第248図 20層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第249図 20層上SR92001内遺物出土状況図

第250図 20層水田畦畔水口実測図1

第251図 20層水田畦畔水口実測図2

第252図 13層水田SK91301杭列実測図

第253図 13層水田SK91302・91303杭列実測図

第254図 13層水田・10層水田エレベーション図 (水平:800垂直:80)

第255図 13層水田・10層水田平面合成図

第256図 5層水田畝状遺構実測図

10区 神岡目次

第257図 10区基本土層模式図 (水平1:500垂直1:50)

第258図 10区遺構変遷図1

第259図 10区遺構変遷図2

第260図 40層中打製石斧出土状況図

第261図 39層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第262図 39層水田SK103903実測図

第263図 SK103903内出土土器実測図

第264図 39層水田SD103901周辺実測図

第265図 36層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第266図 35層水田SK103506内遺物出土状況図

第267図 35層水田SK103503・103504横板列実測図

第268図 35層水田SK103503南側欠板列実測図

第269図 33層水田SK103301杭列実測図

第270図 33層水田SK103302・103303杭列実測図

第271図 33層水田SK103302と103304の交差部杭列実測図

第272図 33層水田SK103305杭列実測図

第273図 33層水田SK103306周辺杭列実測図

第274図 31a層水田畦畔中木製品出土状況図

第275図 31a層水田畦畔断面図

第276図 30b層水田SK103003内木道・遺物出土状況図1

第277図 30b層水田SK103003内木道・遺物出土状況図2

第278図 30b層上木道状遺構実測図1

第279図 30b層上木道状遺構実測図2

第280図 26層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第281図 26層水田畦畔補強杭列実測図

第282図 26層水田畦畔上田下駄出土状況図

第283図 23層水田東西トレンチ断面図

第284図 23層水田SK102306杭列実測図

第285図 23層水田SK102301付近杭列実測図

第286図 23層水田SK102306周辺実測図

第287図 23層水田畦畔水口実測図

第288図 23層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第289図 23層水田畦畔上木製品出土状況図

第290図 19層水田西側排水溝断面図

第291図 16層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第292図 16層水田島状微高地南側水口実測図

第293図 16層水田畦畔水口2実測図

第294図 16層水田浸食痕跡内杭列実測図

第295図 16層水田上 (15層中) 出土土層実測図

第296図 14a層・14b層水田畦畔断面図

第297図 14b層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第298図 11層溝状遺構・柱穴群実測図

第299図 6層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

第300図 6層水田埋礫土抗群実測図

挿表目次

第1表 瀬名遺跡担当調査区分担状況一覧

第2表 周辺遺跡地名表

第3表 発掘調査(外業)工程表

第4表 瀬名遺跡主要遺構一覧

第5表 瀬名遺跡主要遺物一覧

1区挿表目次

第6表 1区土層観察表

第7表 19層水田地区別・規模別面積表

第8表 1区水田計測表1

第9表 1区水田計測表2

第10表 1区水田計測表3

第11表 1区水田計測表4

第12表 1区水田観察表1

第13表 1区水田観察表2

第14表 1区水田観察表3

第15表 1区水田観察表4

第16表 1区水田観察表5

第17表 1区水田観察表6

第 18 表 1 区水田観察表 7

2/3 区挿表目次

- 第 19 表 2/3 区土層観察表
- 第 20 表 2/3 区水田計測表 1
- 第 21 表 2/3 区水田計測表 2
- 第 22 表 2/3 区水田観察表 1
- 第 23 表 2/3 区水田観察表 2
- 第 24 表 2/3 区水田観察表 3
- 第 25 表 2/3 区水田観察表 4
- 第 26 表 2/3 区水田観察表 5
- 第 27 表 2/3 区水田観察表 6
- 第 28 表 2/3 区水田観察表 7

5 区挿表目次

- 第 29 表 5 区土層観察表
- 第 30 表 10 層水田畦畔杭列整理表
- 第 31 表 5 区水田計測表 1
- 第 32 表 5 区水田計測表 2
- 第 33 表 5 区水田観察表 1
- 第 34 表 5 区水田観察表 2
- 第 35 表 5 区水田観察表 3
- 第 36 表 5 区水田観察表 4
- 第 37 表 5 区水田観察表 5
- 第 38 表 5 区水田観察表 6

6 区 挿表目次

- 第 39 表 6 区土層観察表
- 第 40 表 6 区 16 層水田 畦畔補強材の呼び分け
- 第 41 表 6 区 16 層水田 杭列・芯材による畦畔類型分類
- 第 42 表 6 区 16 層水田 畦畔一覽表
- 第 43 表 6 区 11 層水田 足跡方向分布計測表
- 第 44 表 6 区水田計測表 1
- 第 45 表 6 区水田計測表 2
- 第 46 表 6 区水田観察表 1
- 第 47 表 6 区水田観察表 2
- 第 48 表 6 区水田観察表 3
- 第 49 表 6 区水田観察表 4
- 第 50 表 6 区水田観察表 5
- 第 51 表 6 区水田観察表 6
- 第 52 表 6 区水田観察表 7

7 区挿表目次

- 第 53 表 7 区土層観察表
- 第 54 表 7 区水田計測表
- 第 55 表 7 区水田観察表 1
- 第 56 表 7 区水田観察表 2
- 第 57 表 7 区水田観察表 3
- 第 58 表 7 区水田観察表 4

8 区挿表目次

- 第 59 表 8 区土層観察表
- 第 60 表 21 層出土遺物一覽表
- 第 61 表 8 区水田計測表 1
- 第 62 表 8 区水田計測表 2
- 第 63 表 8 区水田観察表 1
- 第 64 表 8 区水田観察表 2
- 第 65 表 8 区水田観察表 3
- 第 66 表 8 区水田観察表 4
- 第 67 表 8 区水田観察表 5
- 第 68 表 8 区水田観察表 6
- 第 69 表 8 区水田観察表 7

第 70 表 8 区水田観察表 8

9 区 挿表目次

- 第 71 表 9 区土層観察表
- 第 72 表 40 層水田畦畔杭列整理表
- 第 73 表 38 層水田畦畔杭列整理表
- 第 74 表 9 区水田計測表 1
- 第 75 表 9 区水田計測表 2
- 第 76 表 9 区水田観察表 1
- 第 77 表 9 区水田観察表 2
- 第 78 表 9 区水田観察表 3
- 第 79 表 9 区水田観察表 4
- 第 80 表 9 区水田観察表 5
- 第 81 表 9 区水田観察表 6
- 第 82 表 9 区水田観察表 7
- 第 83 表 9 区水田観察表 8

10 区 挿表目次

- 第 84 表 10 区土層観察表
- 第 85 表 36 層水田畦畔杭列整理表
- 第 86 表 35 層水田畦畔杭列整理表
- 第 87 表 33 層水田畦畔杭列整理表
- 第 88 表 10 区水田計測表 1
- 第 89 表 10 区水田計測表 2
- 第 90 表 10 区水田計測表 3
- 第 91 表 10 区水田計測表 4
- 第 92 表 10 区水田計測表 5
- 第 93 表 10 区水田観察表 1
- 第 94 表 10 区水田観察表 2
- 第 95 表 10 区水田観察表 3
- 第 96 表 10 区水田観察表 4
- 第 97 表 10 区水田観察表 5
- 第 98 表 10 区水田観察表 6
- 第 99 表 10 区水田観察表 7
- 第 100 表 10 区水田観察表 8
- 第 101 表 10 区水田観察表 9
- 第 102 表 10 区水田観察表 10
- 第 103 表 10 区水田観察表 11
- 第 104 表 10 区水田観察表 12
- 第 105 表 10 区水田観察表 13
- 第 106 表 10 区水田観察表 14
- 第 107 表 10 区水田観察表 15

第I章 はじめに

第1節. 調査に至る経過

静岡市・清水市は安倍川扇状地と巴川低地帯が共有する平野部が連続するため静岡地区あるいは静岡平野と呼ばれている。一般国道1号をはじめ主要幹線道路の交通量は経済発展にともない年々増加している。また、東名高速道路の開通（昭和39年）以来交通混雑が市街地に集中し、交通渋滞が著しくなってきた。このため、市街地の交通緩和、計画的な都市開発等、今後の経済発展と都市環境整備に欠くことのできない道路として昭和38年度の道路調査以来整備計画がすすめられた。

静岡バイパスは清水市興津から静岡市丸子二軒屋まで延長24.2kmの道路である。昭和46年度から清水I.C～興津I.C間の工事に着手して以来20年が経過している。この間、埋蔵文化財の取扱いについて建設省と静岡県教育委員会（文化課）や地元教育委員会との協議がすすめられ、清水市内では尾羽庵寺跡、寺崎1遺跡、山鼻遺跡、太田切遺跡、下野遺跡、飯田遺跡などが清水市教委によって発掘調査された。その後、当研究所が能島遺跡（昭和60～62年度）を担当したほか、昭和61年度に清水市教委が予備調査した長崎遺跡の発掘調査（昭和62年度～継続）を担当している。

静岡市内では、静岡市教委によって昭和50年度に安倍川右岸の千代遺跡、昭和56～58年度に丸子地区で泉ヶ谷・稲荷神社古墳群と丸子城・泉ヶ谷砦の二ヶ所が調査されたほか、昭和58年度に川合遺跡、59年度に瀬名遺跡、昭和62年度に池ヶ谷遺跡、昭和63年度に上土遺跡の四ヶ所の予備調査が実施された。上土遺跡の東半部の一区画は静岡市が平成2年度に発掘調査したが、残り1区画の調査区も市教委により平成4年度に調査が予定されている。一方、上土遺跡の西半部の3区画の発掘調査は当研究所が担当し平成4～5年度に調査する予定である。その他、当研究所は川合遺跡（S59～62年度）、瀬名遺跡（S61～H2年度）、池ヶ谷遺跡（S63～H2～継続）を担当したほか、新たに発見された岳美遺跡の調査を平成4～5年度に担当する予定である。

以上のように、静岡バイパス関係の埋蔵文化財は清水市内で7ヶ所、静岡市内で8ヶ所が調査対象となった。それぞれ調査が完了した遺跡はバイパス工事がすすめられ供用されている。供用開始時期が設定され隣接ヶ所まで工事が差し迫る限られた時間内の調査では、工事担当者や施工業者との調整をはかりながらすすめた。用地買収に関しては、原則として契約が済んだ状態で発掘調査にはいることになっていたが、未契約の状態でも一部借地して発掘に入ったほか、地上物件（農作物・立木・工作物＝建物など）の撤去が済んでいない場合の対応には苦慮した。用地取得の進捗状況に合わせて調査計画もかなり変更しながら対応してきた。

静岡バイパス関係の遺跡の特徴として、沖積平野に深く埋蔵された遺跡の問題があげられる。昭和40年代に調査対象となった遺跡は、深さ1mほどでいずれも古くから知られている埋蔵文化財が主体であった。昭和50年代には地震対策事業による防火貯水槽建設工事により、5～6mの深度まで埋もれた弥生時代の遺跡が発見されるなど、埋蔵文化財に対する認識が変わったことによる新遺跡の認定があげられる。瀬名遺跡・川合遺跡・上土遺跡・池ヶ谷遺跡などがそうである。安倍川水系の沖積平野における、弥生時代以降約二千

年間にわたる供給土量が極めて多いことがうかがえる。この厚い堆積土層は砂礫の多い自然堤防とシルトや粘土層が互層になったり腐植物の堆積の見られる後背湿地などの地形が重層して成り立っている。数十枚になる堆積土層のなかから縄文晩期・弥生中期から古墳時代・奈良平安時代・中世～近世に至る遺構が断続的に発見されるのである。



区	10区	9区	8区	7区	6区	5区	2/3区	1区
調査年度	昭和63年度 平成元年度 平成2年度	平成元年度 平成2年度	昭和63年度 平成元年度 平成2年度	昭和63年度 平成元年度	昭和63年度 平成元年度	昭和61年度 昭和62年度	昭和63年度 平成元年度	昭和63年度

第1表 瀬名遺跡担当調査区分担状況一覧 ()は補助、下線は整理作業

	昭和60年度 1985	昭和61年度 1986	昭和62年度 1987	昭和63年度 1988	平成元年度 1989	平成2年度 1990	平成3年度 1991	今後の予定
予備調査 1区～6区	静岡市 杉山 長谷川							
予備調査 7区～10区			栗野 志村 村 瀬					
1区				曾根 佐野			一杉 4～9月 (中鉢)	
2区				宮村 杉浦				
2/3区(合区)				(表土除去)	宮村 内藤	宮村	宮村	
5区		森下 足立 曾根	佐野 宮村 小 柴				宮村	
6区				木下(杉澤)	木下(竹山)	(石井)	(石井)	
7区				杉澤	杉澤 縄巻	杉澤(宮村) (縄巻)	伊林 4～9月 (中鉢)	
8区				(表土除去)	前嶋 中山	中山 伊林	伊林(中鉢)	
9区					村瀬(小林)	笹原 塚本	小林(中鉢)	
10区				(表土除去)	守谷 小林	小林(塚本)	小林	
担当主任	(横瀬 栗野)	森下	佐野	佐野	伊藤	宮村	宮村	
担当課長	(植松)	植松	平野	栗野	栗野	栗野	栗野	
調査研究部 長	(岡田)	岡田	山下	山下	山下	山下	山下	
出土品整理 等							中山11～3月	
刊行物		61年度概報	62年度概報 試報報告書	63年度概報	元年度～2年度 概報	遺構編Ⅰ	遺構編Ⅱ 遺物編Ⅰ	

第2節. 瀬名遺跡の発掘調査

静岡バイパス建設工事に伴う瀬名遺跡の現地発掘調査は、平成2年度まであしかけ6年間で完了した。瀬名遺跡は西に隣接する川合遺跡とともに、長尾川の扇状地の末端に発達した自然堤防・後背湿地帯に立地する。地表面からの深さ約6mまでの間に、弥生時代中期から近世まで8～16面の遺構面が検出される、水田を主体とする遺跡である。

予備調査、その1

予備調査その1

昭和60年度に静岡市教育委員会が1区～6区に坪掘りによる予備調査を実施1区の東半分は砂礫層が堆積し遺跡の東端部であること、6区の西半部は砂礫層が深く包含層が断絶している可能性があること、いずれも最下層まで掘りきれなかったものの古墳時代初頭の土器、弥生中期の土器片が発見されたことなどから下層にも遺構の存在する可能性が指摘されている。用地買収の状況により十分な範囲の調査ができなかった。

5区の調査

5区

昭和61年度～62年度に発掘された。はじめて瀬名遺跡の構造が明らかにされたもので最下層に縄文晩期の火山灰「カワゴ平バミス」「大沢スコリア」を確認し、その上部に東海地方で最古の弥生中期の小区画水田を確認したこと。弥生後期の河川と大型の堰、掘立柱建物、栗林(根株跡)と登呂式土器群の一括資料、弥生後期後半の水田と水路と堰。古墳時代前期の水田と木製品。古墳時代中期の流路と柄が装着された状態の鍬。平安時代水田。平安～鎌倉時代水田。中世～近世水田と重層的に重なる水田遺構が確認されたことが特徴である。弥生中期～近世までの水田を主体とする遺構が確認される遺跡として次年度以降の調査の基準となった。

予備調査、その2

予備調査その2

昭和60年度に行われた予備調査の結果、当初計画では、調査対象範囲は1区～6区までであり、7区～10区までは試掘調査を実施していなかった。しかし、西側へ遺跡の範囲がひろがっている可能性があるということが予備調査の意見として指摘されていたことと、西に隣接する川合遺跡の調査結果からも長尾川を隔てた東側の瀬名地区にも連続する可能性のあることが指摘されていたため、昭和62年度末に西側区域の予備調査を実施した。その結果、全域で遺構が確認されたため、川合遺跡1区と隣接する10区までの調査をすることとなった。

1区から10区までの調査

1区から10区の調査

供用開始をにらんでの工事工程との関係で未調査部分を短期間で終了させねばならないため、昭和63年度～平成2年度にかけて、静岡県内でかつてない大規模な調査体制をとることとなった。

特に平成元年度は6区画分の調査を実施、現地では調査員等12名、登録作業員約450名余という大所帯になった。平成2年度は工事の進捗にともなう調査区の明け渡し・工用道路の共用、建設省や施工業者との調整、順次調査終了にともなう作業員の段階的減員、整理作業用プレハブの新設など。これらにともなう雇用関係の事務量の増加、また物品の調達、残土処理や埋め戻しの管理、騒音・振動・ほこり・用排水関係等の苦情処理、見学者への対応など運営上の仕事に忙殺されることが多く、調査の内容について必ずしも十分な検討が行えなかった面も存在することが悔やまれるが、それにも増して、多様な成果をあげることができた。

成果抄

弥生中期初頭の土器と石器を伴う包含層から、数本の杭と稲のプラントオパールが検出され、東海地方最古の水田の可能性を示唆させられたこと。弥生中期の方形周溝墓や人骨の発見。弥生後期～古墳時代の水田と多量の木製品。古墳時代初頭の水田畦畔より発見された準構造船。紡織具のカセ。輪かんじき型の田下駄の組み合わせが明らかにされたこと。五百原（いほはら）西奈（せな）という文字の書かれた木簡と人面が描かれた人形木製品・斎串などの奈良時代以降の祭祀遺物群。斎串は万葉集にでてくる記述通り、地面に突き立てた状態で出土した。特筆される成果は、池ヶ谷遺跡とともに確認された静岡平野北部の平安時代の条里型水田である。度重なる河川の氾濫と地形変化を克服して、各時代の水田が構築されている様子を明らかにしたことである。

法面養生の問題

5区の調査状況から、最下層までの調査をオープンカット法面で発掘すると①法面崩壊が予想され、安全確保上問題であること。②最下層まで掘り下げた場合に調査面積が縮小され検出された水田区画の全体をとらえられないことから昭和63年度以降は調査区の周辺に鋼矢板を打ち込んで調査面積の確保をはかることが検討された。鋼矢板を設置した場合、①多大の経費が必要なこと。②面積が広いので自立鋼矢板にはできない、中間にH鋼を打ち込み地中梁で倒壊を防ぐ必要があること、そうした場合、梁がじゃまで作業性が悪くなることが指摘された。建設省は特に費用の点で1区画あたり1億円単位の金がかかるということで鋼矢板はあきらめざるを得なかった。

第II章 位置と環境

第1節. 地理的環境

静岡平野は北を南アルプスから延びる安倍山地、東を有度丘陵（日本平）、西を丸子丘陵、長田丘陵といった山塊によって囲まれており、南は駿河湾に面している閉鎖された地形である。そこを安倍川と中小の河川が開谷して流れ、複合扇状地を形成している。平野部は面積にして約115km²である。平野北の山地からは、賤機丘陵、麻機丘陵、南沼上丘陵、そして瀬名丘陵という4本の細長い丘陵が延びている。特に西側にある賤機丘陵は安倍川の東に沿って最も南まで延びており、静岡市街地の中心、駿府城はこの延長上の微高地にのっている。瀬名丘陵は平野北の丘陵の中で最も東にあり、その尾根線が清水市との境になっている。平野部にはこれら丘陵の延長である谷津山（108m）、八幡山（65m）、有東丘陵（30m）が島状に存在している。

静岡平野

閉鎖的地形

瀬名丘陵に面するように静岡平野と清水平野を分断する有度丘陵がある。有度丘陵は他の山塊、丘陵とは成因を異にしており、独立して隆起したものである。駿河湾に面して隆起したために強い沿岸流の浸食を受け、丘陵の平面形が南側では海岸に沿って直線的になっており、切り立った海食崖（久能海岸）が続く。安倍川河口からこの久能海岸にかけては、河川の運搬と前述した激しい海食作用によって海への砂の流出が多く、砂は沿岸流に運ばれて、有度丘陵東側に大きな砂嘴（三保半島）を形成している。

有度丘陵

瀬名遺跡は瀬名丘陵先端部の南西に位置し、すぐ南東に有度丘陵の北端を臨む。

静岡平野の形成には安倍川が大きな役割を果たしており、安部川によって運ばれた厚い砂礫層が高燥な扇状地性の平野となって、下流に広がっている。

安倍川は、富士川、大井川、天竜川などととも「東海型の川」（洪水による狂暴さや荒れ狂う濁流などを特徴とする）と呼ばれ、旺盛な堆積作用を見せる。安倍川扇状地が形成され始めたのは、今からおよそ2万年ほど前、洪積世最後の氷期（ヴェルム氷期）の終り頃とされる。安倍川水系の源流には「大谷崩」という巨大な崩壊地があるため、この付近からは今でも多量の土砂が川に運びこまれ、下流での河川の維持・管理を困難なものにしている。

安倍川

静岡平野は、賤機丘陵先端と有度丘陵西側の小鹿地区をむすぶラインでおおまかに地形、水系が分かれている。このラインより南側は安倍川扇状地の影響が強い地域で、北側は北の山塊を開谷して流れてきた巴川等の中小河川の影響により各所で自然堤防等の地形を発達させている複合的な扇状地地形であるといえる。

平野の水系

安倍川扇状地の先端は賤機丘陵先端部の浅間神社付近にあり（海拔約30m）、ここを扇の要にして南、東、北東方面に向けて同心円上に地形が緩く傾斜している。砂礫層から成る扇状地は、その周縁部にむかうにつれて低平になり、やがて軟らかい泥の層よりなる低湿な平地へと移り変わっていく。このような低湿地は安倍川左岸では、北東の麻機付近「麻機低地」と南東の高松付近「高松低地」にみられる。

複合扇状地

低湿地

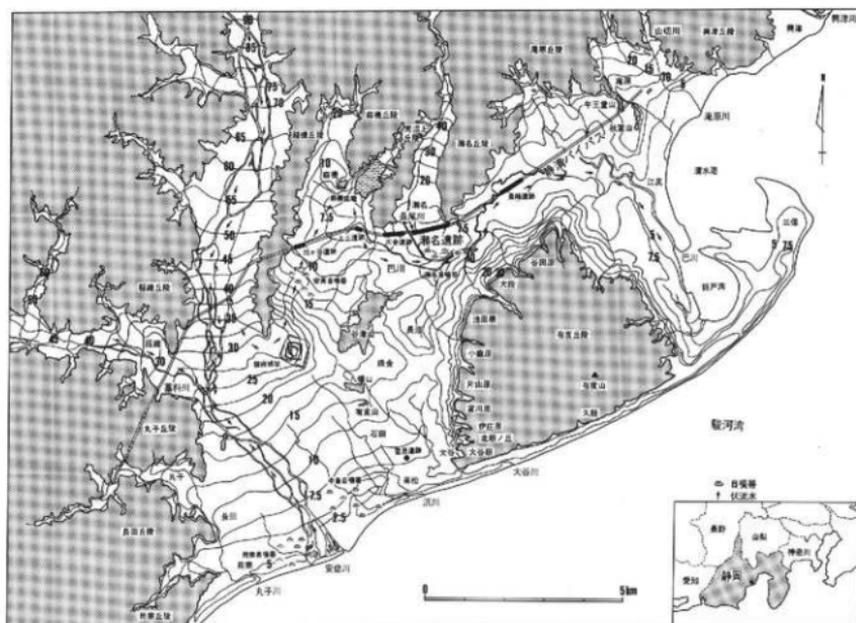
賤機丘陵と南沼上丘陵の間にある「麻機低地」は、巴川の形成した谷が平野部へさしかかる地域だが、海拔高度が非常に低く、最も低いところは6m前後にすぎない。しかも賤機丘陵と谷津山の北側の間までは安倍川扇状地の堆積が行なわれるため、南側のほうが地

形が高くなってしまっている。このため、ここには扇状地からの湧水と北の山地から流れ出る河川の水とが集まって滞り、「麻機沼」を形成している。

安倍川扇状地の東南端と有度丘陵西麓との間に広がっている「高松低地」は、安倍川によって運ばれた土砂が駿河湾の沿岸流によって運ばれつくられた東西に長い砂堤の影響で、その内側（北側）にラグーン状の浅い入江が形成され、その後やわらかい泥で埋められていくという過程で産まれたものである。

このような低湿地と扇状地との境はほぼ海拔13mの等高線に対応しているが、安倍川扇状地東縁部では、扇状地堆積の上に更に安倍川の洪水流によって堆積した周囲の低湿地よりはわずかに高い自然堤防状の高まりが細長く張り出している。扇状地に続くこういった東西方向の微高地は、全部で6～7本あり、蛸足のような平面形をみせている。現在これらの微高地は駿府城付近から放射状に伸びる数本の街道として確認することができる。

東西微高地



第1図 静岡平野地形模式図

〔静岡・清水平野の弥生時代〕1988登呂博物館 所収の図（明治22年測量）に加筆

瀬名遺跡は、以上のような形成過程、特徴をもつ静岡平野の東端に位置する。現在は行政上静岡市瀬名地先（字汐出～柳原）に所在するが、かつては庵原郡西余村に属し、昭和23年4月10日、隣接の平山、長尾、瀬名川の3地区とともに静岡市に合併されている。

瀬名遺跡

地形的には、二つの丘陵に挟まれた部分に位置し、東は竜爪山・文珠山から続く山地の一部である瀬名丘陵の南端に、西は竜爪山に源を発する現長尾川に接する。その長尾川を挟んだ西側には、南沼上丘陵の南端に接する内荒・川合・宮下等の遺跡が存在する。瀬名遺跡は現長尾川の左岸側にあたり、右岸側の宮下遺跡とは区別して調査されている。

瀬名丘陵

長尾川は竜爪山に源を発し、その長さはほぼ20km、巴川の支流で県の管理下にある二級河川である。この川の上流域は竜爪・文珠の前山が谷間に迫り、山腹が急傾斜をなしている。その上、脆弱な地質条件によって山腹に亀裂を生じ、山崩れや地すべりの多い山地崩壊地域の特性をもっている。また、河床が1/300という急勾配という理由からも、多量の降雨によって大量の土石流を押し出し、天井川を形成している。現在の長尾川は下流の北街道地先付近で押し流された土砂の厚い堆積がみられる。北街道長尾川橋付近の川堤から周囲の住宅地を見回すことで、周辺の低地より河床が約2mほど上床していることが一目でわかる。そのため普段はほとんどが流水が見えず、伏流水となって地下を流れている。この伏流水は、現在でもこの地区の多くの民家の生活用水としてポンプで汲み上げられ、利用されている。

長尾川

天井川状

伏流水

また、長尾川は瀬名遺跡の南方約2km地点、清水市長崎地先で巴川と合流し、緩やかな流れとなって清水港のある折戸湾に注いでいる。この巴川は、前述した麻機沼にたためられた水を清水港の折戸湾まで13～14kmの間を押し流す形をとるが、河床勾配が0.4/1000～0.5/1000程度と緩やかで、排水機能が非常に悪い。特に長尾川と巴川が合流し、巴川となって清水港に達する河口地帯は海拔ゼロメートル地帯となっている。そのため、ひとたび大雨が降ると麻機低地一帯は一面泥海となり、長尾川沿いの地域も上流から流れ出る土砂のために、堤防の決壊を繰り返した歴史をもつ。

巴川と合流

水害の歴史

近世期の長尾川洪水や長尾川の付替などの願書については、近世文書の「東田堤切入諸日記帳」（川合名主久右衛門）などにその事例があげられるが、最近では、昭和33年の台風によって勘南久地先、川合地先と連続して破堤、昭和49年には俗に「たなばた豪雨」とよばれる集中豪雨によって川合地先が破堤するなどして、多くの耕地や家屋が災害をこうむっている。

瀬名遺跡付近は、長尾川扇状地のすぐ南にあたり、扇端の湧水が主な灌漑用水となって下流域一帯に水田が拡大していた。瀬名地区も昭和40年代前半頃まではほとんどが水田地帯であったが、40年代後半以降は水田上に客土され、宅地化が進んだ。現在では、長尾川下流一帯は住宅、団地、学校などが集中し、往昔の自然環境の復元は困難である。また、地元の地籍図からは土地割りの変形が読み取れ、かつてはこの川が扇状地を蛇行・乱流していたことが想像できる。これは今回の発掘調査でも、調査区間約900mの間に何本にも及ぶ旧河道が確認されていることからわかる。瀬名遺跡の遺構は、これらの旧河道に削られながら、ひとりで状に広がる自然堤防と、それに続く微高地および後背低地等に広がっている。とりわけ約70面に及ぶ水田跡は後背低地部分から間層を挟んで重複する形で検出されている。

水田地帯

長尾川蛇行

後背低地



第2図 周辺遺跡地図

第2節. 歴史的環境

瀬名遺跡は、静岡平野の北東隅に位置している。北の竜爪山塊から伸びる瀬名丘陵、南沼上丘陵の間を開谷し小扇状地を形成して流れる長尾川が平野部へさしかかるあたりである。現在、長尾川河道は南沼上丘陵に沿っているので、瀬名遺跡はその東岸ということになる。現地形は長尾川の後背低地にあたり、遺跡のすぐ北までが扇状地である。遺跡の西端(10区)は長尾川自然堤防にあたるといえる。また、南東約3kmのところには有度丘陵の北縁があり、その間の狭い低地に古くから東西の主要交通路が集中している。

長尾川
後背低地

＜縄文時代＞

瀬名遺跡周辺で縄文時代にまで遡ることのできる遺跡は、南沼上丘陵西麓、その対岸にあたる賤機丘陵東麓、そして有度丘陵北麓といった丘陵部に分布し、平野部には存在して

丘陵部

番号	遺跡名	時代	遺跡・遺物
1	瀬名遺跡	弥生(中)～近世	水田跡、方形周溝墓、木製品
2	瀬名古墳群	古墳	前方後円墳、円墳、木炭椀、大刀
3	瀬名川遺跡	弥生(後)	弥生土器、木製品
4	宮下遺跡	奈良～平安、近世	住居跡、水田跡、弥生土坑群
5	川合遺跡	弥生(中)～近世	住居跡、水田跡、方形周溝墓
6	川合八反田遺跡	古墳～平安、中近世	住居跡、水田跡、木製品
7	内常遺跡	奈良～平安、近世	住居跡、水田跡、「造大神印」銅印
8	羽高古墳	古墳(後)	横穴式石室、須恵器
9	有永前田遺跡	縄文(後)	縄文土器
10	有永古墳	古墳(後)	前方後円墳、須恵器
11	平山古墳	古墳(後)	横穴式石室
12	八井口古墳	古墳	横穴式石室
13	谷久保古墳	古墳	横穴式石室
14	マルゾッコ古墳	古墳	横穴式石室
15	時ヶ谷遺跡	縄文(甲)、弥生	縄文土器、石鏝、石鏝、打製石斧
16	瀬崎古墳群	古墳(後)	横穴式石室、玉類、須恵器
17	池ヶ谷古墳	古墳(後)	横穴式石室
18	池ヶ谷遺跡	弥生(後)～近世	水田跡
19	永ヶ島遺跡	弥生、平安	水田跡
20	上土遺跡	弥生、平安、中近世	水田跡、鳥居
21	「安徳郡印」出土地	古代	—
22	敷ヶ谷古墳群	古墳(後)、中世	円形銅鏡、鉄鏝、刀子、玉類
23	小滝ヶ谷古墳群	古墳	須恵器
24	三ヶ谷古墳群	古墳(後)	須恵器、土師器、耳環
25	上坂古墳群	古墳(後)	—
26	井ヶ谷古墳群	古墳(後)	横穴式石室、須恵器
27	龍岡谷古墳群	古墳(後)、中世	横穴式石室、須恵器、中世鎌骨器
28	佐倉堂遺跡	縄文～古代	住居跡、縄文土器、弥生土器
29	南沼上諏訪神社古墳	古墳	—
30	長崎鼻遺跡	縄文(中)	縄文土器
31	南沼上古墳群	古墳	土師器
32	木梨古墳群	古墳	横穴式石室
33	利倉神社上古墳	古墳	—
34	切石遺跡	古墳	須恵器、土師器
35	壺下遺跡	古墳	須恵器、土師器
36	大在家遺跡	古墳	土師器
37	賤機山城	中世	曲輪跡、土塁、堀、櫓切
38	北川殿屋敷	中世	—
39	賤機山古墳群	古墳(後)	横穴式石室、冢形石椁

番号	遺跡名	時代	遺跡・遺物
40	大谷遺跡	弥生	弥生土器
41	静岡高校校地内遺跡	弥生(後)	弥生土器
42	西千代田遺跡	弥生(後)	弥生土器、矢筈等、木製品
43	駿府城内遺跡	弥生(中)～古代	住居跡、溝、弥生土器、土師器
44	駿府城	中世～近世	石垣、水堀、陶磁器、土師器
45	赤津山古墳群	古墳(前・後)	前方後円墳、聖穴式石室、円墳
46	千代田遺跡	弥生(後)	弥生土器
47	井上塚古墳	古墳(後)	横穴式石室、耳環、須恵器
48	愛宕山城	中世	曲輪跡、土塁、堀、堀段、空堀
49	長沼古墳(長沼寺)	中世	—
50	高石山古墳	古墳(後)	大刀、玉類、須恵器
51	船木瓦葺跡	古代	平瓦
52	古ノ口坪遺跡	弥生	弥生土器
53	道下遺跡	弥生	弥生土器、磨製石斧
54	栗原遺跡	弥生	弥生土器
55	桃原寺前遺跡	弥生(後)	弥生土器
56	谷田古墳群	古墳	横穴式石室、石椁、耳環、須恵器
57	宮ノ後遺跡	縄文	縄文土器
58	上中林遺跡	縄文	縄文土器、石鏝
59	寺ノ久保遺跡	弥生、古墳、中世	住居跡、溝、弥生土器
60	五輪平遺跡	縄文	縄文土器、打製石斧、石砦
61	滝田山古墳群	古墳	横穴式石室、冢形
62	門前坪古墳	古墳	横穴式石室、人刀、鉢、玉類
63	滝田丸山古墳	古墳(後)	—
64	本堂寺裏遺跡	縄文	縄文土器、打製石斧、石砦
65	曲山日遺跡	古墳、古代	住居跡、須恵器、土師器
66	曲山A遺跡	弥生、古墳	弥生土器、土師器
67	三葉工場内遺跡	古墳、古代	須恵器、土師器
68	豊田遺跡	弥生、古墳	住居跡、溝、弥生土器、土師器
69	小黒遺跡	弥生(末)、古墳(初)	住居跡、高床倉庫跡、弥生土器
70	中山古墳群	古墳	横穴式石室、塚状大刀形跡、勾玉
71	阿山遺跡	縄文	磨製石器
72	向山経塚	中世	—
73	石舟形	中世	—
74	長崎遺跡	弥生、古墳、中世	水田跡、墳丘墓、木製品
75	上野敷	中世	—
76	大和製糖南遺跡	弥生	弥生土器、土師器
77	西の瀬古墳群	古墳	円墳
78	龍見前古墳	古墳	円墳

第2表 周辺遺跡地名表

〈弥生時代〉

丘陵部 中期前半：静岡平野における弥生時代の萌芽は、中期前半頃と考えられる。この時期の遺跡は、安倍川西岸の丸子セイゾウ山・佐渡遺跡や清水平野側の天王山遺跡といった平野外縁の高い丘陵部に分布しており、まだ縄文的な伝統を色濃く残す条痕紋系の土器や打製石斧を出土している。

平野高地 中期後半：弥生時代中期でも後半の時期の遺跡は、平野部にも立地しており、駿府城内、有東、鷹ノ道、川合、清水平野でも能島、長崎等、平野部でも若干の微高地に方形周溝墓の墓域や住居域が確認されている。遺跡の平野部への拡大については、当然水田稲作の本格的な開始が要因として考えられるが、この時期までの明確な水田跡は従来報告されていなかった。

墓域 後期：後期になると、平野部の遺跡は倍増しており、中期後半からの遺跡が拠点的に継続し、その周辺にも登呂、有東梶子、豊田、曲金、沙入等に水田跡や住居跡が確認されるようになった。特に水田跡の存在が明確になり始めるのはこの時期からである。細かい時期は確定できないが、弥生時代の水田跡は、近年、池ヶ谷、永ヶ島、上土等、静岡平野北部の旧麻機沼縁辺の排水性の悪い低湿地でも確認されてきている。

水田跡 川合遺跡は、瀬名遺跡から長尾川を挟んで西へ約0.7kmの距離にあり、弥生時代中期の方形周溝墓と弥生時代中期～古墳時代の集落跡、古墳時代中期の低墳丘墓、古墳時代後期と中・近世の水田跡が検出されている。また、集落内において、弥生時代中期には石器製作を、古墳時代には玉類を製作していたような状況もみられ、多量の土器の出土とともに地域拠点的な集落であったことが推測される。

低湿地 また、瀬名遺跡から南へ約0.5kmの距離にある瀬名川遺跡では、地表下約3mの深さから弥生時代後期の土器が多量出土し、集落の存在も推定されている。瀬名川遺跡のある北街道周辺は安倍川扇状地から東西に伸びる微高地のひとつである。

〈古墳時代〉

川合遺跡 静岡平野最古の古墳は、平野中央部の谷津山山頂を占地する前期中頃の前方後円墳、谷津山1号墳（柚木山神古墳）である。これにつづく前期後～中期前半の有力古墳は清水平野北部の庵原地域に移っていくようだが、静岡平野では、中期に入ってから、平野を囲む丘陵に散在的に比較的有力な古墳が築造され、それらを盟主にして、後期の小規模古墳群が形成されていく。

瀬名川遺跡 瀬名遺跡の東北約0.5kmの瀬名丘陵南端尾根上に位置する瀬名古墳群は、中期の有力な前方後円墳（1号墳・8号墳）、円墳（2号マルセッコウ古墳）を中心としており、後期の横穴式石室墳まで継続している。中期の早い段階としては、静岡平野において最も有力な一群といえる。

南沼上古墳群 瀬名古墳群の対岸にあたる南沼上丘陵南端尾根上の南沼上古墳群の中にも中期的な要素の強い大型の円墳（1号墳）がある。その他、南沼上、瀬名両丘陵の奥部には数群の小群集墳が分布しており、後期～終末期の様相を示している。

**切石遺跡
東下遺跡** 古墳時代の集落については、川合遺跡、川合八反田遺跡で確認されている他、瀬名遺跡から北へ約1.5～2kmの長尾川扇状地上に切石遺跡、東下遺跡があり、古墳を造営した集団の居住域の一端が想定できる。川合、そして今回瀬名で確認した水田跡と合わせて、扇状地上の居住域、下部後背低地の生産域、それを見降ろす丘陵上の墓域といった古墳時代のこの地域の景観が大まかに復元できそうである。

〈歴史時代〉

古代の瀬名遺跡周辺は、平安時代の『和名抄』にみえる駿河国蘆原郡西奈郷と安倍郡川津郷に比定されるが、蘆原郡と安倍郡の境を乱流がちであった旧長尾川とするならば、瀬名遺跡はちょうどその境界あたりにあると思われる。

蘆原郡
安倍郡

瀬名遺跡から現長尾川をはさんで西対岸にあたる宮下遺跡、約0.8kmにある内荒遺跡、川合八反田遺跡では、律令期の掘立柱建物群が検出されており、この時期の集落と考えられる。特に内荒遺跡では、「造大神印」銅印が掘立柱建物群に伴って出土し、更にそこから約2kmの地点から出土した「安倍郡」印とともに、周辺の遺構が安倍郡衙に関わっている可能性も考えられる。

内荒遺跡

瀬名遺跡から南約0.5kmのところを東西に走る現在の北街道は、中世東海道にあたり、宿駅であった瀬名川の地名は、中世を通じて紀行文等にしばしば顔を出し、交通の要地であったことがわかる。戦国時代の瀬名遺跡周辺は、今川氏の支配をうけており、当地に住んだ一秀の一族は瀬名氏を称した。

中世東海道

瀬名氏

〈水害との闘い〉

静岡平野では、地形上の特徴から、安倍川、巴川、そしてその支流である長尾川による水害が近年まで毎年のように起こっていた。特に天井川である長尾川では昭和40年代あたりまで破堤して一帯が浸水したり、水位が急激に上昇して避難命令が出たりしている。

天井川

中世：中世近世史料には主に安倍川の決壊、麻機沼～巴川の満水による被害と普請の様子が数多く記録されているが、瀬名遺跡周辺（長尾川）の洪水と水田経営の苦闘の状況も、戦国時代からすでに文献の中に見出すことができる。すなわち、この地域に駿河国浅間宮流鏡馬郷役を賦課する天文18年（1549）の今川義元の朱印状に、杵谷郷、中瀬郷とならんで「杵貫五百文 瀬名郷 本式貫百文 河なりとて如此候」とあり、永禄元年（1558）の今川氏真の朱印状にも同様の内容がみられる。『静岡県史料』第3編 旧村岡大夫文書]

河なり

近世：東海道が南に移り北街道が脇街道となった近世、瀬名遺跡周辺は中村氏領、駿府徳川氏領を経て、幕府天領や旗本知行地、小島藩領の入り組んだ地域となった。

名主日記

嘉永2年（1849）8月に起こった長尾川東堤決壊に際し、小島藩領川合村の名主右右衛門が、同川の氾濫の様子から水防工事の過程について詳細な日記を残している。そこからは、深夜村民総出で護岸工事を行ったり、村を越えて人足を出し合っていること、検分に来た役人が舟を使ったことなど生々しい状況を知ることができる。『静岡市史料』第2編 東田堤切人諸日記帳]

名主日記

巴川と長尾川の例年の水害に対し、村々は負担を分担して護岸と川底の浚渫を繰り返していた。巴川の浚渫に関しては、享保年間（1716～）以降、流域の村々が組合的結束をして負担を分担していたことが、享保15年（1730）に出された「定後御普請」の規定の中にも読みとれる。『巴川治水沿革誌』1916] また、莫大な工事費捻出のために、村々と駿府の有力町人層、代官所が元金を出し合って積み立てを行なう計画などもあった。

浚渫組合

一方、水害が岡河川のルート地形と合流場所に起因するものであることは早くから知られていたようで、長尾川の河道付け替えなど、抜本的な解決を図るべく大規模な土木工事も計画されていた。

大規模計画

享保9年（1724）8月、巴川・長尾川流域19ヶ村が相談し、「長尾川一之瀬」（現在の瀬名新田）から「島坂村二の宮」まで、南沼上丘陵沿いにある河道を反対側の瀬名丘陵側に「川違へ」（付け替え）をする計画をたてた。もっとも、長尾川はある時期瀬名丘陵側に流

川違へ

れていたこともあるようで、「古川通り」河道を戻すというものである。比高差や流域距離を明示し、完成後は「万石之御田地水損仕らず」、干拓地によって「六百石余開発仕り差上げ」、また、今後の水防工事は「御新田出来仕り候はば、巴川御普請の儀、自分入用を以て」（農民が自費で）やっていけるという条件の揃った計画であった。村々の代表は、国役の普請をかちとろうと江戸へ訴願に出、一時は駿府代官まで動いたものの、結局実現をみなかった。『岩崎文書』名主覚と同じ内容の請願は数回出されている。

ほりぬき

この他にも、長尾川の水を「ほりぬき」（トンネル）によって南沼上丘陵を貫いて麻機沼に流し込み、逆に排水を促そうという発想などあったらしい。

瀬直し

天保10年（1839）、流域43ヶ村から非常に具体的な巴川の「瀬直し」（河川改修）計画が幕府に提出されたが、幕府は財政困難を理由に許可しなかった。その4年後、水野幕政はやっと大規模な改修工事に着手しようとするが、やはり財政のゆきづまりは深刻で、すぐに全国的な土木工事の中止令の中に消えてしまうことになる。

両河道並行

結局、流域農民たちが熱望していた抜本的な解決法に一応の実現がみられたのは近代に入ってからのものであった。明治40年（1907）、長尾川と巴川の合流点を清水市長崎まで下降させ、瀬名川、烏坂では河道を並行させるという現在のようなプランで工事が始まった。

宮下遺跡

宮下遺跡の近世水田面では、礫を埋棄した土坑群が多く検出されている。これは瀬名遺跡の西端（9区、10区）にも確認できる。長尾川の破壊による洪水堆積物に覆われた水田面をなんとか使い続けようとしたものであろう。史料に描かれたような生々しい復旧作業の苦勞がそのままオーバーラップされる。

厚い砂礫層

瀬名遺跡では、厚い砂層や礫層に挟まれて各調査区少なくとも7面、多くて実に16面の遺構面が良好な残存状態で検出された。その大半が水田跡である。このように明確なかたちを残す生産遺跡を調査できたのは我々にとって幸運なことではあったが、同時に、水田上の厚い堆積物はそこを耕作していた人々の生活基盤の放棄を示しており、毎年のように水害に苦しめられながらもそこを離れられなかった「土と直接向き合っていた」人々の姿が思われてならないのである。

参考文献

- ・『静岡県文化財地名表Ⅰ』1988 静岡県教育委員会
- ・『静岡市史 近世』1984
- ・『静岡市史 中世・近世史料2』1981
- ・『静岡北部土地改良誌』1984
- ・『千代田誌』1984
- ・『静岡・清水平野の弥生時代』1988 登呂博物館
- ・『静岡・清水平野の古墳時代』1990 //
- ・矢田勝 「静岡平野北部における糸車型地割の復元と立地環境の変遷」『研究紀要Ⅲ』1990 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・『宮下遺跡（遺構編）』1985 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・『内荒遺跡（遺構編）』1986 //
- ・『平成2年度の発掘調査』1991 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・『瀬名遺跡発掘調査概報』昭和61年度 1987～平成元年・2年度 1991 静岡県埋蔵文化財調査研究所

第三章 調査の概要

第1節. 調査の方法

調査の範囲は、道路建設に伴う調査という性格上、南北約50~60m、東西約900mと非常に横長なものであった。このため、調査範囲を横切る現況の道路を境として、東から順に1区から10区まで便宜的に調査区を分割した。このうち、4区には、事務所と作業員用のプレハブを設置した。また、2区と3区間の道路が付け替えられることになったため、両調査区をあわせて2/3区とし、途中から1つの調査区とした。調査は、1区、2/3区、5区、6区、7区、8区、9区、10区の8区画で行なった。

全調査区を通じて、建設省の設けたバイパスの直線部分のセンターラインに合わせた方向で、10m×10mのグリッドを設定した。このグリッドの南北方向の軸は真北より西へ7°21'37"ずれたものである。61年度、他調査区より先行して始まった5区の調査では、当初国土方眼を基軸としていたが、63年度になって、複数の調査区が同時展開するにあたり、全調査区が一定規準で比較できるようにグリッドを変更することにした。

グリッドには、南東隅を起点として、南から北へA、B、C…～Hとアルファベットを東から西へ1、2、3、…～87と数字を付け、例えばグリッドA1、グリッドH87というように座標で表記するようにした。〔第5図〕

調査の実施にあたっては、各調査区をガードフェンスで囲い、安全対策に努めた。

掘削は、全調査区オープンカットで、安全を考慮し法面に約30°の角度を保って掘りすすむことにした。

昭和60年度の静岡市教育委員会、昭和62年度の当研究所による試掘調査の結果を参考にして、まず、現地表面から近世以降の客土層までをバックホウで除去した。その後、調査区の四周に排水溝を掘削し、更に調査区中央には、全調査区に渡って東西に貫く基本トレンチ（東西トレンチ）を設けた。国土方眼を基軸にした5区、分かれていた2/3区上層を除いて、バイパスのセンターラインに沿って南側に設



1. 表土除去



2. 法面養生



3. 試掘坑にポンプ設置



4. 大型ポンプによる排水

けた。また、この他にも必要に応じて東西トレンチに直交するトレンチ（南北トレンチ）を設けた。

四周の排水溝と東西・南北のトレンチは、土層の体積状況を観察するためだけではなく、瀬名遺跡の調査にとって調査区の排水上重要なものであった。長尾川は瀬名付近では天井川となっており、流水の大部分が伏流水となって地中の砂礫層中に存在しているのである。遺跡全体を通じて、洪水の運んできた砂礫の堆積は水田の営まれた粘土層と互層構造を成しており、掘削が砂礫層に達する度に、勢いよく水が湧出するという状況であった。このため常に四周と東西・南北のトレンチを排水溝として兼用させ、試掘調査の際に掘削した試掘坑に水を集め、4インチという大型の水中ポンプで吸い上げて区外へ排出するようにした。

それでも、集中豪雨、台風等の際には排出能力を越え、調査区が度々水没してしまった。

前述したように、瀬名遺跡では洪水堆積物が厚く、現地表面から各調査区の最終調査面である弥生中期遺構面まで約5～6mの深さがあった。1回の洪水によるものと考えられる砂礫層の厚さが、最大で2mに達することもあった。このため、一層一層手掘りで層位的発掘を行なうことを基本としながらも、数十cm以上の厚い礫層に関しては、中間層としてしばしばバックフォーで除去した。

平成元年度には、6調査区が同時展開したので、常時いずれかの調査区で複数のバックフォーが稼働し、排土運搬のダンプカーが往復した。排土は、遺跡内で処理できる量ではなく、遺跡の東約1kmの清水市島坂地先のバイパス用地に排土置場を設定した。排土置場の周囲にもガードフェンスを並べ、安全対策に努めた。

バイパス路線の中でも瀬名地区は、住宅街の中を貫くような状況であり、地元の方々と様々な議論のなされたところでもあった。調査に先だち、沿線のご家庭を一軒一軒まわり、調査の主旨を説明し、ご理解をいただいた。

調査が始まっても、排土運搬のダンプカーの速度制限や工事用道路の水まき、横切る一般道路の清掃、交通整理、そして排水先水路の清掃等を欠かさず行なった。



5. 調査水没



6. 調査風景



7. 排土処理



8. 中間層除去と排土運搬

〈水田遺構の検出〉

瀬名遺跡では、各調査区で少なくとも7面、多くて実に16面もの遺構面が層位的に検出された。その大半が水田遺構であった。水田遺構は、盛土、杭・矢板・横板の列等をともなう畦畔とそれに囲まれた区画、水路やそれに沿った堤等により構成されている。また、本来水を得やすい低湿地に選地されたものであることから、遺構は非常に柔軟な粘土層にあるという特徴をもつ。

砂層や礫層に被覆されている場合を除けば、畦畔と水田区画の確認は容易ではない。

瀬名遺跡では、まずトレンチと調査区四周の排水溝の土層断面を観察し、細かく分層しながら畦畔の盛り上がりを探していった。畦畔は、砂層や礫層に被覆された水田跡の場合、約10～30cm程の明確な盛り上がりを示したが、粘土層に被覆されている場合は、一般的に高さ5cmにも満たない低いものであった。これは被覆している粘土層も水田であることが多かったため、上層から遺構面を巻き上げてしまい、本来の畦畔の盛り上がりが失われてしまったものと考えられる。また、水を含んだ粘土層が重層的に堆積していく過程で、土圧によって脱水され、収縮・変形を受けたものとも考えられる。ともかく、土層断面では高まりのはっきりしないものも多かった。

土層断面で畦畔の確認できなかった場合でも、精緻な平面の検出でとらえられる場合もある。瀬名遺跡では、作業員にトレンチ縁に1列に並んでもらい、よく砥いで刃先をつけたジョレンで一斉に粘土層を薄く削っていってもらった。そして、土層断面で分層した下層の粘土層まで2～5cm程残した一定レベルで止めてもらった。この時、下層の粘土層に若干の高まりをもつ畦畔があれば、粘土の色または粒子の異なる部分が帯状に現われてくる。若干の時間をおいて見えてくる場合もある。調査担当者は、この段階で広く周囲を観察し、水田区画を想定しながら畦畔を認定していく。認定すると釘等で線を引き、畦畔以外の部分は更に削ってもらった。下層の粘土層が半分以上現われたところで、よく砥いだ手鋸（両刃のものを特注した）に持ち替えてもらい、丁寧に、残った上層の粘土を削りとった。この時、上層の粘土や砂の残り方をよく観察すると足跡等も確認でき



9. 排土運搬に伴う交通整理



10. 排土運搬に伴う道路清掃



11. 調査区周辺水まき



12. 周辺水路清掃



13. 水田面精査 (畦畔探査)



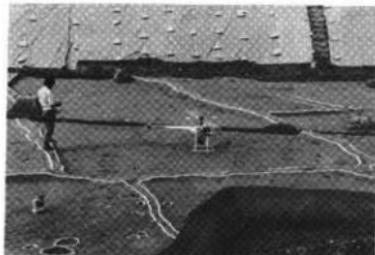
17. 東西トレンチ土層断面実測



14. 遺構マーキング



18. 畦畔杭列の実測



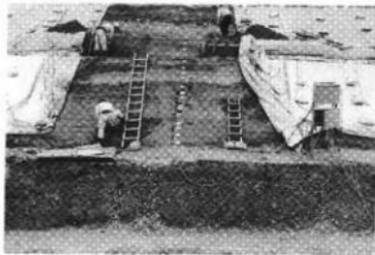
15. ラジコンヘリによる遺構写真測量



19. 杭・木製品の取り扱い



16. 簡易遣り方による遺構実測



20. 自然科学分析のための土壌サンプリング

た。

厚い礫層に被覆された水田遺構の場合、遺構直上の礫を中間層としてバックフォーで除去せざるを得ない場合があった。この時、慎重を期さないと、遺構面を壊したり、バックフォーの重みで遺構面を变形させてしまう。そこで、大型のバックフォー（バケツ容量0.7m³）の使用は、遺構面から約40～50cm残して止め、そこからは掘りにくくても人手で行い、一部小型のバックフォー（バケツ容量0.1m³）を利用した。小型のバックフォーはトレンチを崩さずに調査区内を移動でき、作業員と同様にベルトコンベアに排土をのせることができた。

水田土壌の
特 徴

検出された水田遺構を改めて断面で観察すると、水田遺構のある層の土壌（つまり耕作土）には一定の特徴がありそうであった。

①攪拌されたような状況で、自然堆積層にみられるラミナ状堆積（混入植物質等の水平堆積層理）がみられない。

②下層との境界線が直線的ではなく、巻き上げられたような状況がみられる。耕作に伴う足跡や鋤線先が下層にまで及んでいるものと考えられる。

③イネのプラントオパール値が高い。瀬名遺跡では、各調査区とも標準土層断面（試掘坑であることが多い）をつくり、分層されたほとんど全ての層の土壌について、プラントオパールの分析を行った。（IV章の各調査区の冒頭【土層観察表】参照）このうち、水田遺構の検出された層からは、数百～数千のプラントオパール値が得られた。ただし、水田遺構以外の層にもプラントオパールは認められ、一部には非常に高い値を示すものもあり、一定の値以上が水田というような規準は示すことができない。あくまで、遺構の明確な水田について、傍証となるものと考えている。

④イネ科植物の根の痕跡が認められる場合がある。

土層断面を慎重に解体すると、上層とは断絶した垂直方向の微細な根の痕跡又は、その存在を示す鉄、マンガンの斑状沈着が見えることがあった。しかし、大抵の場合そこまで確認はできなかった。

現在水田面で「稻株痕」が検出された事例が増えてきているが、瀬名遺跡では明確なものを確認することができなかった。

録 録
取 取
り 上 げ

瀬名遺跡では、基本的な遺構平面図を縮尺1/20で作成した。5区と7区の一部と8区、9区、10区の大部分を空中写真測量で作成し、その他を人手で作成した。空中写真測量は、バルーン又はラジコンヘリコプターによって撮影し、解析図化機で描いた素図を校正していった。写真測量における遺構ライン読取りを確実にするためあっても、瀬名遺跡では、検出した遺構の上端にはスポーツ石灰でマーキングし、下端には釘等によって刻線していった。人手では、グリッド基準杭に従って1mメッシュを組み、簡易遣り方方式で行なった。コンターは、10cm間隔でつなぎ、必要に応じて5cm間隔のものも記入した。

また、1/20の図面を編集して1/100の遺構全体図を作成した。この全体図には、国土方眼の目盛りを枠外に表記した。

遺構平面図に対応する1/20の土層断面図を東西中央トレンチで作成した。5区を除き、バイパス路線のセンターに沿って土層断面図をつなごうとするものである。また、必要に応じて南北トレンチ、調査区四周の排水溝の土層断面も実測した。

遺構面を様々な方向から横切るような、エレベーション図も作成した。特に水田遺構の

場合、水田面の段差や微妙な傾きが問題となる場合があり、重要である。瀬名遺跡では、エレベーションの水平方向と垂直方向を1:5または1:10にして遺構面の凹凸を強調した編集図も作成した。

この他、必要に応じて1/10や1/5、1/2の縮尺で遺構部分図や遺物出土状況図を作成した。その際、対応する断面図も併せて作成した。基本的に人手の簡易遣り方で実測したが、5区と7区の一部では、クレーンやケーブルを利用した写真測量を行なった。水田遺構の場合、部分的に細かく実測すべきものとして、畦畔中の杭・矢板列、芯材等が考えられるが、瀬名遺跡では基本的に、盛土解体後の平面と杭列の縦断面、盛土と杭列の横断面といった3方向から実測図を作成した。

なお、図面は全てマイクロフィルムに撮影し、アバチュアカード化して保管している。

遺構の写真撮影は、基本的には6×7版の中型カメラで行い、白黒フィルム（一部カラーフィルム）を使用した。同時に、35mmの小型カメラで、白黒、リバーサル、カラーの3種類のフィルムで撮影し、カラーでは作業工程の記録も必要に応じて撮影していった。

各調査区の遺構全景は、ローリングタワーからの他、地上27mまで伸尺できる高所作業車を利用し、斜め写真を撮影した。また、一部ヘリコプターやラジコンヘリコプターにより垂直写真も撮影した。

出土した遺物は、土器、木製品、石製品、金属製品、自然遺物、その他に分けた台帳に登録して取り上げた。

瀬名遺跡では、低湿地の遺跡という性格上、木製品の数が多く、全体で2万点を越えた。地中の保水と空気からの遮断によって良好な残存状態であった木製品は、掘り出された時点から日に見えて劣化していく。そこで、実測や写真撮影のため、すぐには取り上げられない遺物には、常に水またはPEG（ポリエチレングリコール）を噴霧したり、濡らした布等を被せる等の処置をした。また、直射日光に当たらぬようテント等で覆うこともあった。取り上げた木製品のうち、大型のものは1つ1つ真空パックし、仮収納と運搬の便を図った。また、広葉樹材等で非常に脆弱な遺物は、発泡ウレタンを吹き付けて梱包してから取り上げることにした。特に、7、8、9区で検出された方形周溝墓の木棺の一部は、工程の関係上、取り上げた後に改めて細部を調査した。



21. 高所作業車による遺構撮影



22. 発泡ウレタンによる脆弱遺物の取り上げ



23. 調査終了後の埋め戻し

第2節. 調査の経過

瀬名遺跡では、4年8ヶ月間の現地発掘調査が行なわれた。しかし、各調査区が同時進行したのではなく、用地買収とバイパス工事の工程の関係上、まず5区のみが先行して行なわれ、2年後に東側の1区と2/3区、その半年後に中央の6区と7区、更にその半年後(5区の開始から3年後)に西側の8区、9区、10区というように、開始時期と期間が一定していない。最後に開始した8区、9区、10区の調査では、30数面から40数面の層位的発掘を工程の関係上1年半程で完了せざるを得ず、1ヶ月の間に複数の遺構面の調査を終えなければならない状況であった。(遺構の空中写真測量化もこのような状況で取り入れられたのである。)

簡単に各年度の事業をまとめてみる。

●昭和61年度 5区の調査が行なわれた。4月4日から準備に入り、5月1日から本格的な調査を開始した。年間の調査面積は8,211㎡で、約30名の方々に作業員として参加していただいた。 5 区

●昭和62年度 5区の調査が継続し、年度末には2区の表土を重機により除去した。5区は63年3月までに調査が終了、埋め戻しが完了した。年間の調査面積は8,950㎡で、約40名の方々に作業員として参加していただいた。

●昭和63年度 年度の前半(4月)から1区と2区の調査が開始され、年度の後半(10月以降)から3区と6区、7区の調査が開始された。1区は平成元年3月までに調査終了、埋め戻しが完了した。2区と3区は、間を横切っていた道路が付け替えられたことにより、年度末には2/3区として調査することになった。年間の調査面積は31,494㎡で、約190名の方々に作業員として参加していただいた。 1 区
2 / 3 区
6 区
7 区

●平成元年度 2/3区、6区、7区の調査が継続し、西側の8区、9区、10区の調査が本格的に始まった。6調査区が同時に進行する大規模な調査となった。排土は、遺跡内で処理しきれず、清水市鳥坂地先に排土置場を設定運営することになった。2/3区と6区の調査は元年度末までに一応は終了したが、埋め戻し等が次年度まで残った。年間の調査面積は、110,922㎡に及び、調査に参加していただいた方々も日に300人を超えた。 8 区
9 区
10 区

●平成2年度 2/3区、6区の埋め戻しが完了し、7区も8月までには全て完了した。元年度に始まった8区、9区、10区の調査も10区が8月、8区と9区が11月までに全て完了した。年間の調査面積は23,257㎡で、調査に参加していただいた方々は約230名であった。

現地終了後、清水市下野地先のバイパス高架下に整理事務所を設け、室内整理作業に移行した。室内作業では、各調査区数百枚に及ぶ図面、写真を整理し、特に、工程上現地校正のできなかった写真測量図の確認、校正には時間を費やした。また、2万点に及ぶ木製品は、洗浄し、分類・実測をすすめ、完了したものからPEG含浸処理を行なった。含浸処理を待つ木製品には全て真空パックを行ない仮収納した。

年月	1 区	2 / 3 区	5 区	6 区	7 区	8 区	9 区	10 区
61 4								
5				表土				
6								
7			3層					
8								
9			5層 8層	中間				
10								
11								
12			室内整理					
1								
2								
3								
4			10層杭列	中間				
5								
6			12層	中間				
7				中間				
8								
9			13a層					
10								
11			地路内埋		試掘	試掘		
12			14層				試掘	試掘
1				埋戻				
2								
3								
4		表土	2区自	表土				
5	10層	3層						
6	13層							
7	17b層	6層						
8	19層							
9	19層下層	9層						
10	23層杭列	3区側	3区	表土				
11			5層	表土				
12			11層		表土			
1	28層	6層			2層			
2	木控	8層				中間		
3	25層	9層						
4								
5	10層						表土	表土
6								
7	12層杭列	中間				6層		6層
8								
9						8層	10層	9層
10							13層	11層
11						10層杭列	20層	14a層
12							中間	14b層
1								16層
2								19層
3								23層
4								中間
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								
12								
1								
2								
3								
4								
5								
6								
7								
8								
9								
10								
11								

第3表 発掘調査（外業）工程表

推定時期	10 区	9 区	8 区	7 区	6 区	5 区	2/3区	1 区
中・近世	6層水田 9層水田 11層溝・柱穴	5層甃築溝 10層水田 13層水田	6層水田 8層水田	2層水田	5層水田	3層水田	3層水田	10層水田 13層水田 16層水田
平安時代	14 a 層水田 14 b 層水田 16層水田 19層水田	20層水田 22層水田 25層瓦片・溝	10 a 層水田 10 b 層水田 13層水田 14 a 層水田	7層水田	11層水田	5層水田 8層水田	6層水田	17 b 層水田 17 c 層甃築溝 19層水田
奈良～古墳	23層水田 26層水田	33層水田		8層水田	13層水田		8層水田	20層流路 鉄甲中柱
古墳時代(中期)	30 b 層木道 水田	35層木道	15・16層木道	9層木道	14層木道	8層直下流路	9層流路・杭列 土葺集中地点 10層流路・堰	流路
古墳前期～ 弥生後期	31 a 層水田 31 b 層水田 33層水田 35層水田 36層水田	37層水田 38層水田	17 a 層水田 17 b 層水田	10 a 層水田	16層水田 18層水田	10層水田 12層水田 13層甃立柱建替 流路 葺瓦片・溝	12層水田 14層水田	22層水田
弥生中期	39層水田	40層水田 41層上方形溝溝 42層流路・溝	18層上方形溝溝 21層杭 22層上方小穴溝 23層柱痕	12層上方形溝溝 13層杭列 15層溝	19層水田 23 a 層杭	14層水田	16層水田 20層水田・堰 21 a 層溝・溝	28層水田 28層下層木道溝 35層杭列

第4表 瀬名遺跡主要遺構一覽

(土層の対応を示すものではない。各調査区におけるおおよその推定時期でまとめている。)

遺物名	10 区	9 区	8 区	7 区	6 区	5 区	2/3区	1 区
土器	弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪 緑釉 山茶碗 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土師 土師器 灰輪 緑釉 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪	弥生土器 古式土師 土師器 須恵器	弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪 緑釉 山茶碗 陶磁器	縄文土器 弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪 緑釉 山茶碗 陶磁器	弥生土器 古式土師 土師器 須恵器 灰輪 緑釉 山茶碗 陶磁器
木製品	杭・矢板 建築部材 鐵線・田下駄 [L]状木製品 曲物・挽物 木屐 鳥形・舟形 斎串	杭・矢板 建築部材 梯子・田舟 鐵線・箸手鐵 田下駄・梓 漆塗輪・羽物 曲物・挽物 刀形・斎串 木棺	杭・矢板 建築部材 鐵線 泥除・堅杵 田下駄 曲物 木棺	杭・矢板 建築部材 鐵線 田下駄・箸 田下駄・挽物 羽物・曲物 付札・鞍 斎串・木棺	杭・矢板 建築部材 梯子 鐵線 田下駄 田下駄・箸 漆塗輪 曲物 平塔婆	杭 建築部材 梯子 鐵線 請手鐵 田下駄・箸 高坏・曲物 盾 扇物	杭(線刻含) 建築部材 梯子 鐵線 田下駄 田下駄・挽物 付札・鞍 舟部材・權 舟形	杭・矢板 建築部材 梯子 鐵線 田下駄・箸 曲物・羽物 木棺 人形・斎串 木棺
金屬製品	錢貨 鉄線	錢貨 鐵線	鉄線	銅鑼 鉄線 刀子	馬線の歯		錢貨 馬線の歯 袋状鉄斧	
自然遺物 石製品 その他	獸骨・昆虫 種子 銅代 石斧	人骨・昆虫 獸骨 種子 石斧 黒曜石・石	人骨・昆虫 種子 磁石 石斧・石鏡	人骨・昆虫 獸骨 種子 石斧・凹石 黒曜石	人骨・昆虫 獸骨・種子 磁石 石斧・磁石	馬骨・歯 種子 磁石 銅代 白玉	昆虫 銅代 磁石 石斧	人骨・昆虫 種子 石鏡

第5表 瀬名遺跡主要遺物一覽

●平成3年度 木製品の実測、保存処理を中心としながら、土器、その他の出土遺物の整理を展開した。遺構に関しては、報告書遺構編Ⅰの刊行に向け、各調査区毎に版下図を作成しトレースをすずめた。

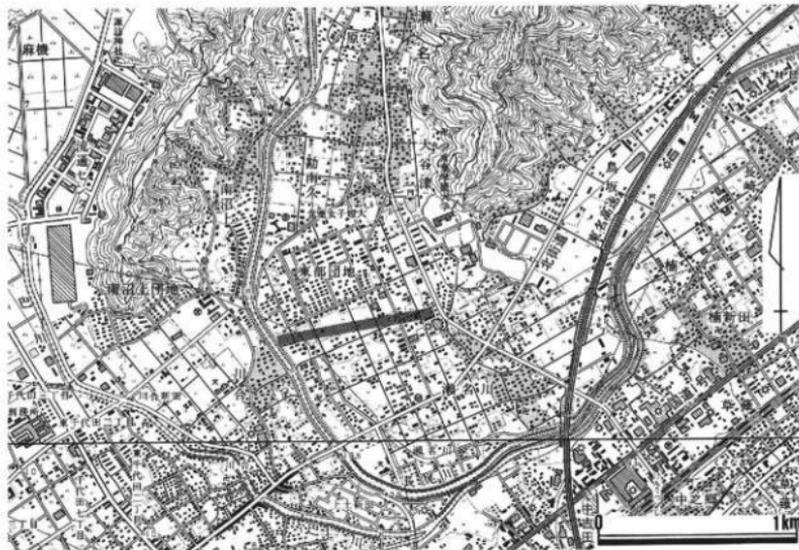
〈遺構整理について〉

調査体制 前述したように瀬名遺跡では、同じ遺跡とはいっても、開始時期・期間が異なり、年度によって調査担当者が異なるという状況もあった。また、流路（現長尾川・巖川）が頻繁に河道を変えたり、洪水堆積物をもたらしたという地形上の特徴から、東西方向の地層堆積状況の対応は困難であった。各調査区を区切る道路下を調査しなかったことで、法面に約30°の角度をつけて掘削していくと、下層になるにつれ調査区間の空白部分が大きくなったことも土層対応の困難さの要因のひとつであった。

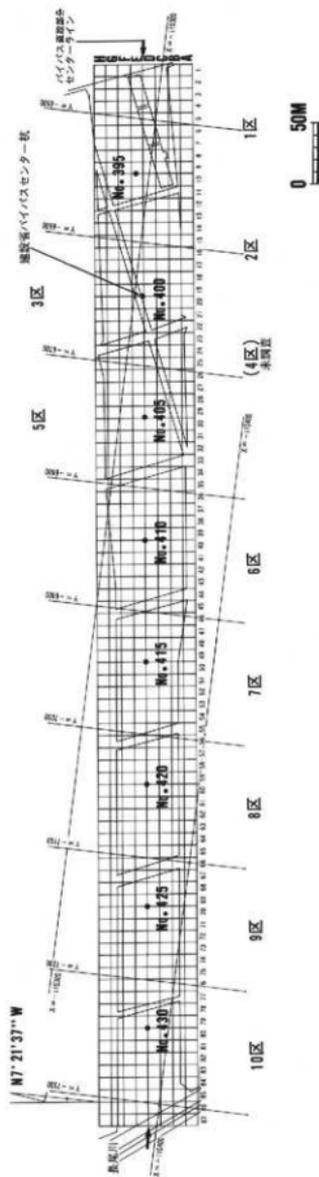
統一観希薄 こうした状況から、各調査区現場での土層対応を基本とした遺構認識の統一観は希薄で、『遺構編Ⅰ』では、用語等の基本的な統一は図ったものの、調査内容・遺構認識に関しては整理の段階では統一できなかった部分が、少なからず残ったことを認めざるを得ない。各調査区毎の土層堆積過程の復元に沿った遺構報告、いわば、それぞれ独立した遺跡群に近いものとして、捉えていただいたほうがわかりやすいかとも思われる。

各調査区毎

ただし、方形周溝墓の検出された前後の弥生時代中期と考えられる遺構面、大規模な畦畔に杭列を伴う古墳時代初頭と考えられる水田面、条里型地割のとらえられる平安時代の水田等、各調査区の遺構整理のなかから、瀬名遺跡全調査区を通じて形態的に同質と認識できる遺構面もとらえられたので、次回刊行を予定している『遺構編Ⅱ』では、それらを中心に、瀬名遺跡全体の遺構変遷、各段階の特徴について検討するつもりである。



第3図 瀬名遺跡位置図



第4図 瀬名遺跡グリッド配置図

第IV章 各調査区で検出された遺構

第1節. 1区において検出された遺構

1. 基本層序

1区は、現地表面（海拔約12m）より地表下約7mまでを、38層に区分し調査を実施した。調査区の東側は、各時代により多少河道を変更するものの、北から南への流路SR1-01（旧長尾川か）となっており、砂礫層が厚く堆積している。この流路がいつからいつまでこの位置にあったかは確定できないが、調査区は、全体に自然堤防状に高くなっており、流路の氾濫・洪水の影響を常に受けているような状態がみられた。層序にもそれが明確にあらわれ、砂礫層と粘質土層が互層をなし、氾濫後に形成される自然堤防から後背低地にかけての地形での水田耕作、再氾濫による廃絶の繰り返しを窺う事ができる。

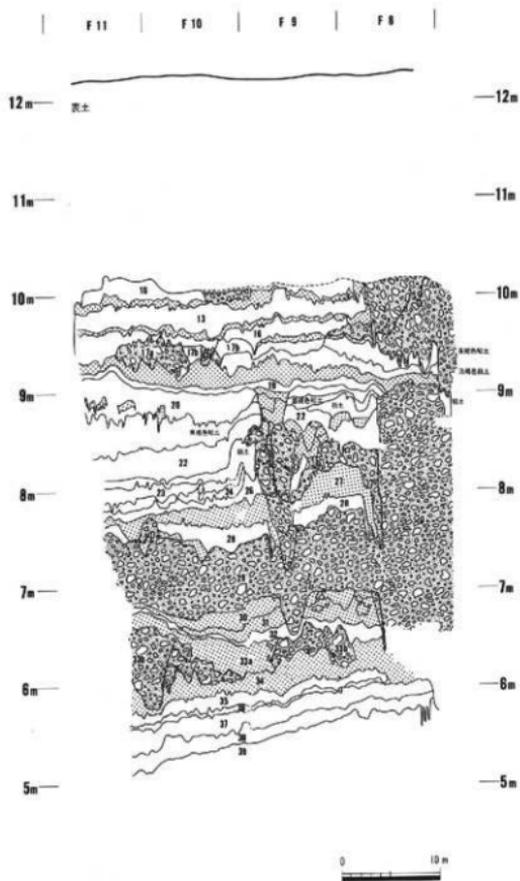
大規模流路

自然堤防
後背低地

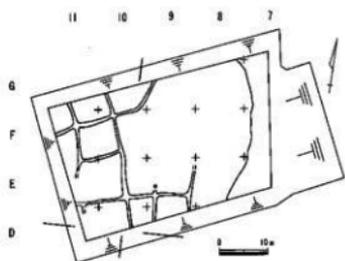
層序	土色および土質		説 明	プラントオパール		遺 構	年代 観
				BIT	GS		
層 土				(単位は個/g)			
1層	暗青灰色	粘土	旧水田跡				近現代
2層	赤青色	礫	管蝕が発達				
3層	赤褐色	礫	礫量の少ない風化が進んだ円礫				
4層	赤青色	粘土					
5層	暗青褐色	礫	風化層少量混入、管蝕が発達				
6層	赤褐色	砂礫	3層に類似				
7層	暗青色	粗砂	下部に灰色粘土				
8層	青褐色	粘土	風化層少量混入				
9層	灰色	礫	下部に多量の砂				
10層	灰青色	礫	風化層混じり、耕作土	400 0	1400	水田	(近世)
11層	黒褐色	礫	5cm以下程度の円礫				
12層	青色	砂礫					
13層	青灰色	粘土	下部に微砂の層、耕作土	900 2800		水田	(中世)
14層	暗褐色	砂質粘土	細かい礫が微量混入	900 0			
15層	青色	砂		0			
16層	暗褐色	粘土	風化層が少量混入、耕作土	400 0	800 0	水田	平安後期～中世
17a層	礫	砂礫					
17b層	赤褐色	粘土	耕作土	3000		水田	平安
17c層	赤褐色	礫					孤立柱建物跡
18層	青色	砂	3mm程度の礫が少量混入			水田	(平安前期)
19層	淡茶褐色	粘土	灰白色の粘土ブロックを含む耕作土	900		溝(木製)	奈良～平安
20層	灰色	砂質粘土					
21層	黒褐色	粘土	植物遺体を含む				
22層	灰茶褐色	礫	2～3mmの礫少量混入	1900	3500 900	水田	弥生終末～古墳
23層	暗褐色	粘質土	耕作土	3500			
24層	礫	粘土	有機質を含む、下部灰色帯層	900			
25層	暗青色	粘質土	植物遺体を含む	2700	0		
26層	暗褐色	粘土	礫混じり	0	0		
27層	礫	砂	植物遺体を含む		0		
28層	礫	粘質土	有機質を含む、耕作土	400	0	水田 木棺墓(下層)	弥生中期
29層	青色	礫	10mm程度の大きなものあり				
30層	青灰色	砂	植物遺体を含む				
31層	暗褐色	礫					
32層	礫	粘土	有機質を含む				
33a層	礫	粗砂	植物遺体を含む				
33b層	青灰色	礫					
34層	礫	砂	有機質を含む				
35層	暗褐色	粘土	植物遺体を含む		3700 800	水田? (耕作)	
36層	黒色	礫	灰色粘土ブロックを含む	900			
37層	礫	礫	分解質灰炭	0			
38層	暗褐色	礫		0			

第6表 1区土層観察表

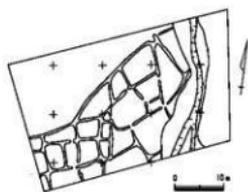
(1区)



第 5 图 1 区基本土层模式图 (水平1:500垂直1:50)



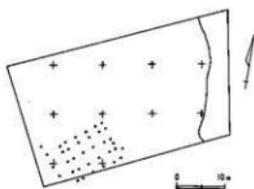
10層 水田跡



17b層 水田跡



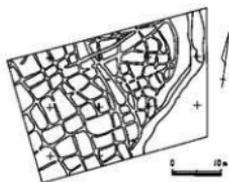
13層 水田跡



17c層 掘立柱建物跡

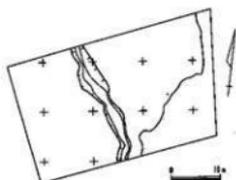


16層 水田跡

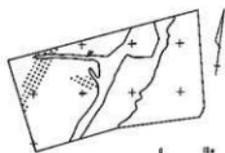


19層 水田跡

第6図 1区遺構変遷図 1



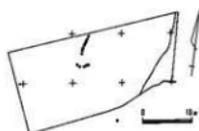
20層下面 溝



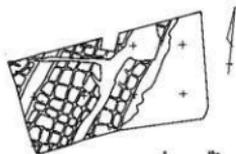
28層下面 木棺墓



22層 水田跡



35層 杭列



28層 水田跡

第7図 1区遺構変遷図 2

2. 遺構の変遷

35層で検出された遺構 杭列

〈杭列〉 [第8・9・10図, 図版19]

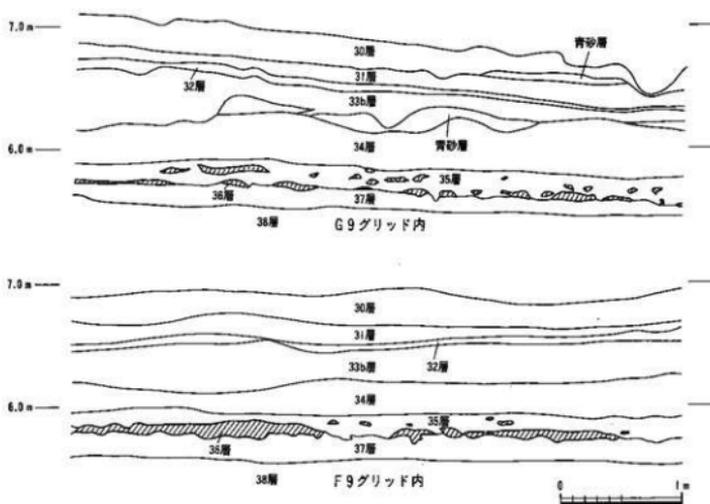
調査区の中央部北側、グリッドF9において、南北方向に8本、東西方向に4本、計12本の杭を検出した。南北列は、0.2~2.5m間隔、東西列は、0.2~1.0m間隔である。杭は東側に傾くが、何れも部分的な検出で、最長でも17cm、多くは5~10cmしかなく、先端加工など杭としての明かな形状を残しているものはない。

水田跡としての可能性

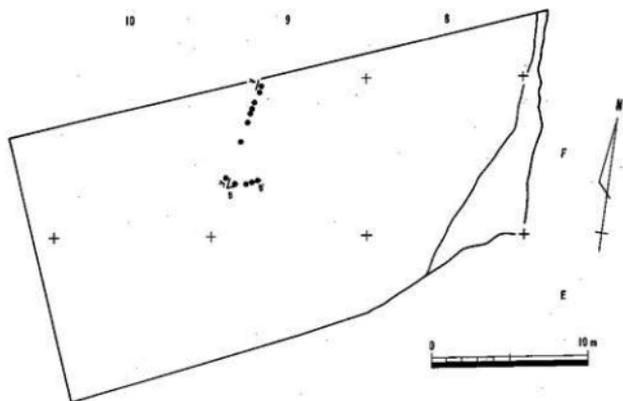
35層は、植物遺体を含む暗褐色粘土の層であるが、部分的に下層36層に含まれる白色粘土が35層中にブロック状に混入しており、それが、耕作痕による攪拌ともとらえることができる。また、プラントオパール分析では、1区で水田跡と認定できた層と比べても高い、P. O. 値 3,700個/g、800個/gといった数値が示されている。それらのことから、35層が水田として利用された可能性が考えられる。しかし、35層の表面は非常に凹凸が目立ち荒廃が激しいため、明確な畦畔を検出することができず、水田跡としての認定をすることはできなかった。

KgP, Os

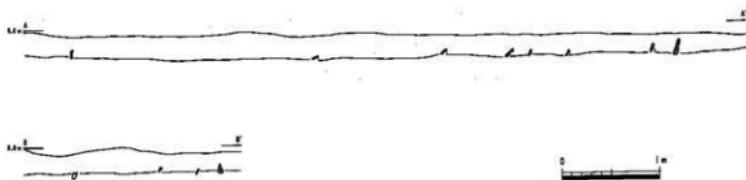
なお、35層の直下の黒色土層には、大沢スコリア及びカワゴ平パーミスといった縄文時代晩期の降下火山灰が入っており、28層水田の弥生時代中期後葉という年代説と合わせ考えると、35層は弥生前期から中期前半の層と考えられる。



第8図 35層土層断面図



第9图 35层出土坑位置图



第10图 35层出土坑侧面图

28層下部で検出された遺構 木棺墓

〈木棺墓〉 [第11・12図, 図版17・18]

調査区中央北側グリッドF 9内に位置する木棺である。28層水田耕作土を解体中に偶然検出する事ができたものであり、当初木棺を流木と認識していたため墓域を破壊してしまった。そのため、墓域は南側部分で底部と小口溝の一部を検出したにとどまった。確認部分で深さ約30cm、小口溝の深さ約10cmを計測することができたが、全体の形態は不明である。木棺は蓋板・側板・小口板・底板の6枚を検出する事ができた。小口板は腐植が進み、また土圧により内側に傾斜するなど保存状態が悪かったが、他の部分は比較的良好であった。全長207cm、幅63cm、主軸方位はN7°Eである。小口板は東側板端部より、北側で約20cm、南側で約37cm内側に位置しており、内法寸法は全長約150cm、幅約55cm、高さ約20cmである。材は板目取りの杉が用いられている。木棺は平面的には両側板が小口板を挟んでさらに棺長軸方向に突出するものであり、構造的には小口板を埋め込むタイプと捉える事ができる。墓域内小口板外側部分からは裏込めに用いたと思われる粘質土を含む砂礫を検出する事ができた。

木 取 り

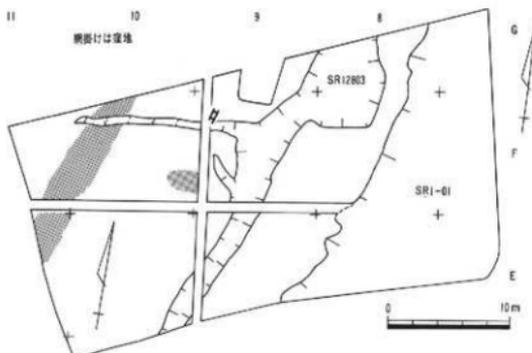
横臥屈肢姿勢

木棺内部からは顔を右に向けた横臥屈肢姿勢の成人男子と考えられる人骨一体分が検出された。頭位は木棺主軸に対してやや西に傾いており、N12°Wである。上肢・下肢ともに左右の屈曲度が異なるが、屈曲の強い方の数値は上肢で12°下肢で21°を計測する。副葬品等は発見する事ができなかった。

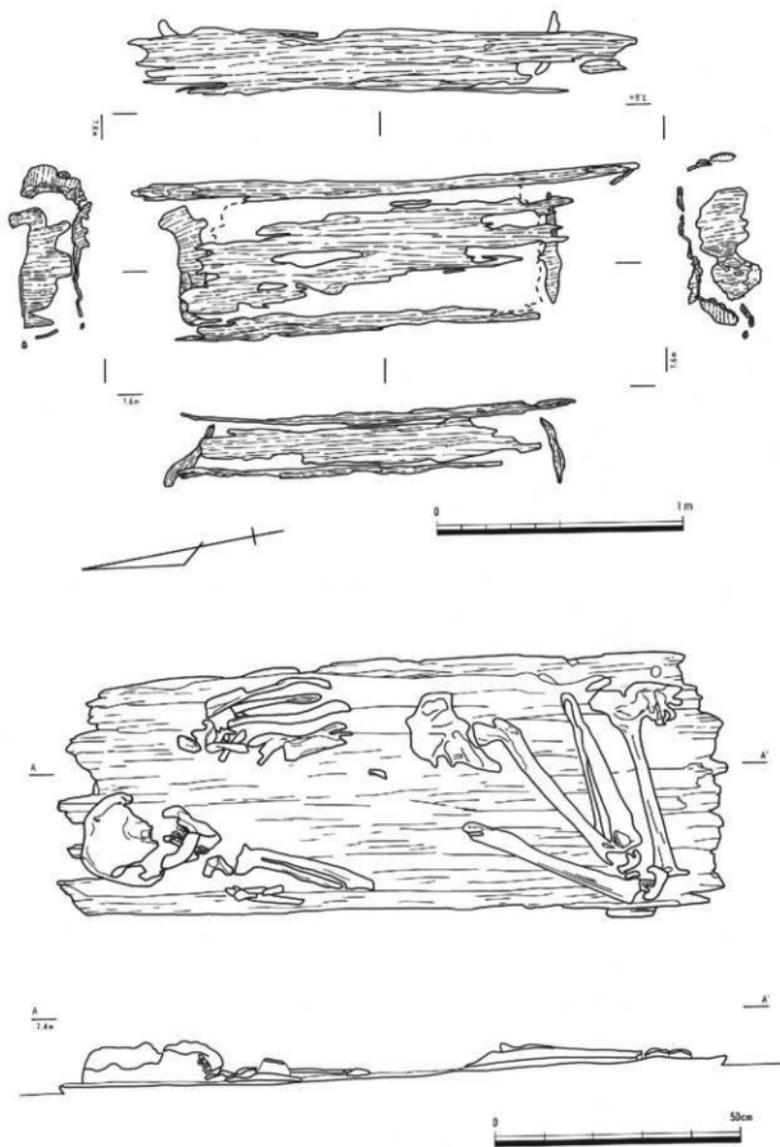
浅い溝状の凹み

本木棺は29層の砂礫を掘り込んでおり、28層が堆積していく段階で構築されたと考えられる。本来28層には木棺が埋設された面及び水田が区画された面の最低2面が存在したはずだが、28層水田耕作時の攪拌により、均一化してしまい、墓域の検出を困難にした。木棺の南側約6m付近には幅1.6m、深さ15cm程の浅い溝状の凹みが確認されており、青色砂が堆積している。方向は木棺短辺に対し、やや西に振れるが、位置から木棺に伴うものと想定する事もできよう。東側・西側は後世の溝や削平により確認できないが、木棺周辺から他の埋葬施設を確認できなかった点で、ある程度広い墓域を持っていたと考えられ、断定はできないものの、本木棺が方形周溝墓の主体部である可能性は高いといえよう。

時期を判断する材料は少ないが、上層の水田の年代観から弥生時代中期後葉以前と考えられる事ができる。



第11図 28層下面木棺墓出土位置図



第12图 28層下面木棺基实测图

28層で検出された遺構 水田跡、流路跡、水路跡

〈水田跡〉 [第13・14・15図, 図版16]

一部、中央部を流れる後世の流路SR12801によって破壊されているが、調査区東側の流路SR1-01を除く調査区全域で水田跡が検出された。

畦 畔

畦畔は、調査区北西隅を切る様に流れる水路SD12801の堤防と考えられる畦畔SK12801, SK12802を除くと、他は、上端幅25~30cm、下端幅30~35cmを測る小さな畦畔で、全て盛土だけによるものである。小さな畦畔は、流路SR1-01または水路SD12801と平行する様に南北

小規模区画
格子状配列

方向が造られ、それと直交して東西方向が規則的に造られている。そのため、水田の形はどれも正方形あるいは長方形で、平均面積約4.09㎡の水田が格子目状に整然とした配列を

水 口

見せている。水口は、東西畦畔には一様に認められ、北から南へ順送りに行われた用排水の様子が見えてくる。

土 壌

水田土壌は、有機質を含む暗褐色粘土層で、よく攪拌されている。28層水田は、暗褐色砂層によって被覆されており、洪水・氾濫による廃絶が窺える。

遺 物

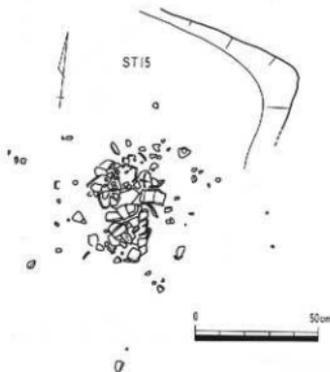
遺物は、田面より、長床式土器併行と思われる壺が出土しており、水田経営の時期は弥生時代中期後葉と考えられ、5区14層水田と近い時期と推測される。

〈流路跡〉

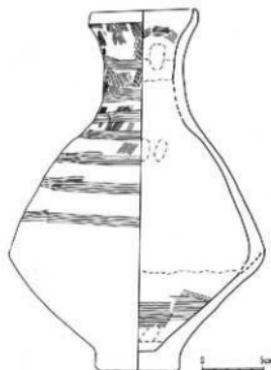
流路SR1-01の西側に並んで流れるように検出された。グリッドF9で西に15m程延びる筋を持ち、深さは最大で0.25m、平均で0.1~0.15mを測る。西に延びる筋は、水路SD12801を切り、その先端部には6本の杭が打たれている。また、分岐点付近でも、流路内に8本、流路のすぐ際に8本の杭が打たれていた。底面のレベル等から考えると、恒常的な流れではなく、洪水時の礫の流れ込み跡とも考えられる。

〈水路跡〉

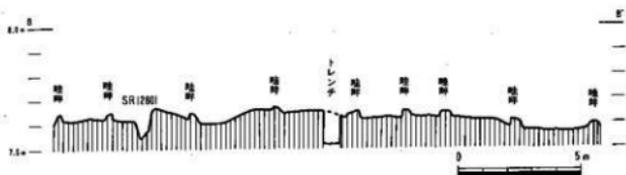
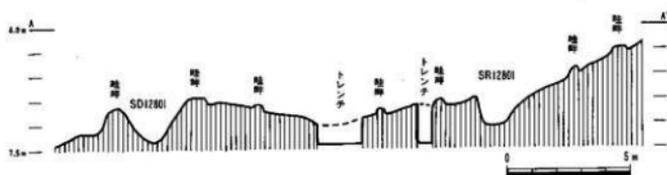
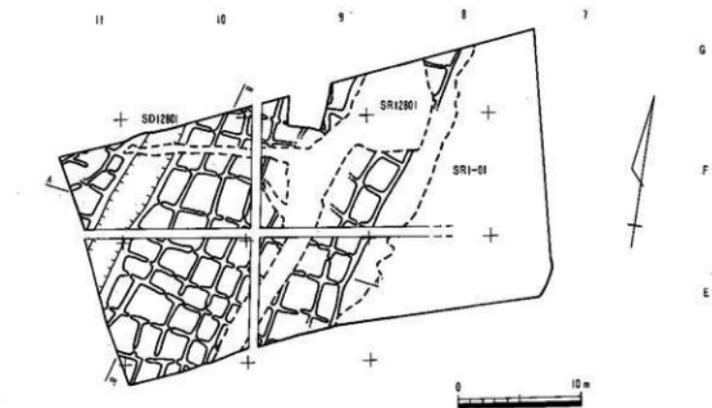
水路SD12801が調査区北西隅を切る様な形で検出された。上端幅2.3~2.8m、下端幅1.2~1.6m、深さは0.15~0.2mを測る。両岸に、堤防としての役目をもつ盛土畦畔SK12801, SK12802が築造され、上端幅60cm前後、下端幅100cm前後、高さ15~20cmを測る。水路東側の水田に対し、西側の水田はやや低いことから考えると東側水田の排水路、西側水田の用水路としての機能を兼ねそなえていた可能性がある。



第13図 28層水田土器出土状況図



第14図 28層水田出土土器実測図



第15図 28層水田エレベーション図 (水平1:200 垂直1:20)

22層で検出された遺構 水田跡、水路跡

〈水田跡〉 [第16・17・18・19・20・21・22図, 図版13・14・15]

水田跡が調査区のほぼ全域で検出された。東西方向1本、南北方向5本の杭列を伴う大きな畦畔と、下端幅40~50cmを測る簡単な盛土による小さな畦畔からなる。

畦畔 水田土壌は、灰茶褐色の粘土で、イネのプラントオパール分析では高い数値を示している。層厚は20cmを測り、特に調査区西側では50cmの厚みを持つ部分もある。

黒泥被覆 上層21層は、洪水・氾濫により廃絶した他の層の水田とは異なり、植物遺体の有機質を多く含む黒褐色粘土あるいは黒泥である。そのため、22層水田に限っては、何らかの理由で水田経営が放棄され、その後湿地化した様子が窺える。この湿地化は、隣接する2/3区12層水田跡でも見られ、かなりの広範囲で、一時水田経営が途絶えてしまったと考えられる。

小規模区画 水田は、大きな畦畔が東西方向に1本、南北方向に3本構築されており、その内部が小さな畦畔によって区切られ、平均約4.66㎡の小さな区画の水田105枚からなる。大きな区画は、四周を確定する面がないため明らかではないが、畦畔SK12201と畦畔SK12202で区画される調査区南西部は、少なくとも18×18m以上の規模を持つ。

大規模区画 水源 水源は、他の層と同様、調査区東側を流れる流路SR1-01と考えられるが、22層水田では、流路SR1-01の西に水路跡が検出され、水路として利用されていたと予想される。水口は25ヶ所で確認されている。

遺物 遺物は、梯子、四本鎌、鎌先、田下駄、挽物、刎物等の木製品が、杭列畦畔の部材として畦畔から多数出土している。また、土器は、畦畔の芯材とともに弥生後期末とみられるものおよび古式土器器が出土しており、22層水田は、弥生終末から古墳初頭にかけて営まれていたと推測できる。

大規模畦畔 以下、かなり計画的に構築されたと考えられる大きな畦畔について列記する。

(1) 畦畔SK12201 [第18図, 図版13]

調査区中央を南北に走る大きな畦畔で、約14mの長さを検出した。上端幅1m前後、下端幅1.4~1.6mを測る。杭は、中央部を含めると3列に分けることができ、東側部は平均長39cmの杭が18本打たれ、平均長185cm、平均幅16cmの横板を5枚伴う。一方、西側部は、平均長71cmの杭が91本打たれ、平均長100cm、平均幅6cmの横板を9枚伴う。つまり東側部は、広い間隔に杭を打ち、そこに大きな横板を備えているのに対し、西側部は、長杭を非常に密に打ち込むという全く違った構造となっている。これは、第17図で明らかな様に畦畔SK12201の東側水田面と西側水田面とでは、約20cmの比高差があることに起因すると考えられ、東側部は、水を溜めにくい東側水田面に水を溜めるといった目的、西側部は、田面よりかなり高くなっている畦畔の崩れを防ぐという目的の違いが、杭の打ち方に影響したと推測される。

(2) 畦畔SK12202 [第19・20図, 図版13・14・15]

大きな畦畔の中で、唯一東西方向のものである。約30mを検出したが、グリッドF9の西部からグリッドF10の間は、上端幅約1.1mと幅もかなり広く造られている。杭は、畦畔全体を通し打たれているが、幅の広がり具合に合わせる様に杭の打ち方も変わっており、広い部分には1.5mくらいの杭を南北2列に非常に密に打ち込んで、横板も長さ3~4m、幅10~15cmのものを伴っている。しかし、そこから、東西それぞれに行くに従い、杭列は南側1列のみとなり杭の長さも短く、しかも打ち方が疎らになっている。また本畦畔は、築造当

初打たれたと思われる杭列以外にも多くの杭が存在する。畦畔造成の土が軟弱な粘質土であることから、その崩壊を防ぐために、数次に渡り増強のための手直しを行ったものと考えられる。

数度増強

(3) 畦畔SK12203 [第21図, 図版14・15]

畦畔SK12202から北へ分岐する畦畔で、上端幅0.6~0.9m、下端幅1.1~1.3m、高さは2~5cmを測る。杭は、基本的に1列で1m前後のものが多く、横板を併い打たれ方も密である。畦畔SK12221同様、複数の杭列が認められ、修復作業が何回か行われたことが窺える。

(4) 畦畔SK12205, 畦畔SK12206 [第22図, 図版15]

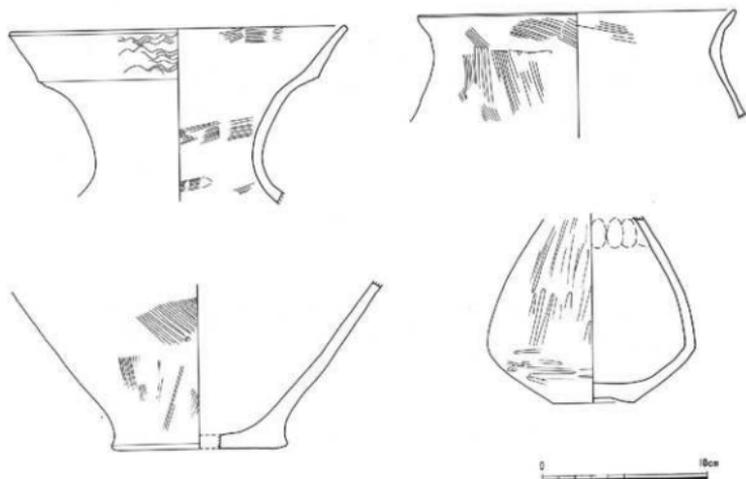
水路SD12201に沿って築造されている。水路SD12201および流路SR1-01の堤防としての役目を持つと考えられる。SK12205は杭列が併い、杭の平均長は約65cm程度で、そう長いものは使われていない。これは、畦畔SK12202部分に比べるとやや土質も乾燥気味であることに起因すると思われる、横板も部分的に使用されているだけで、平均長約55cm、幅約5cm程のものである。

堤防

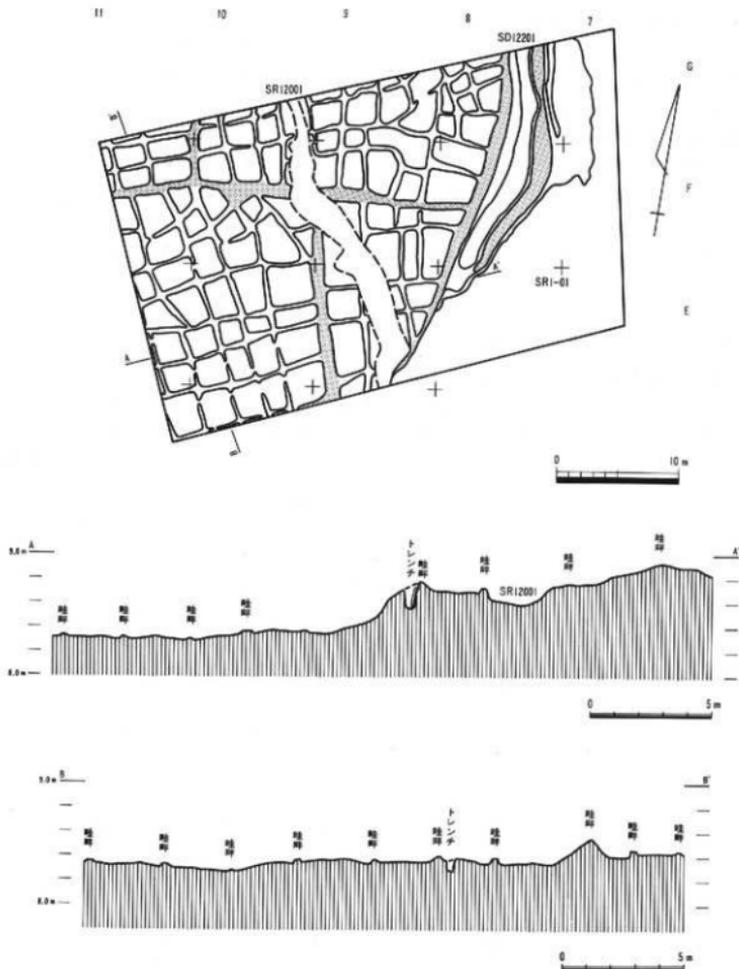
〈水路跡〉

流路SR1-01のすぐ西で2本の水路跡を検出した。そのうち、水路SD12201は、上端幅約1.0~1.7m、下端幅約0.5~1.0m、深さ約0.1~0.15mを測る。水路SD12201は、そのまま流路SR1-01には流れ込まず、流路SR1-01にぶつかる手前で終焉しているが、その北側7~8m付近の底部は、終焉部より5cmくらい低くなっており、SR1-01の伏流水を溝に溜め水田へ引水していたと考えられる。

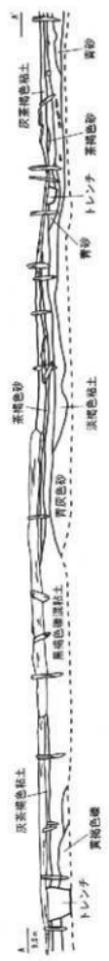
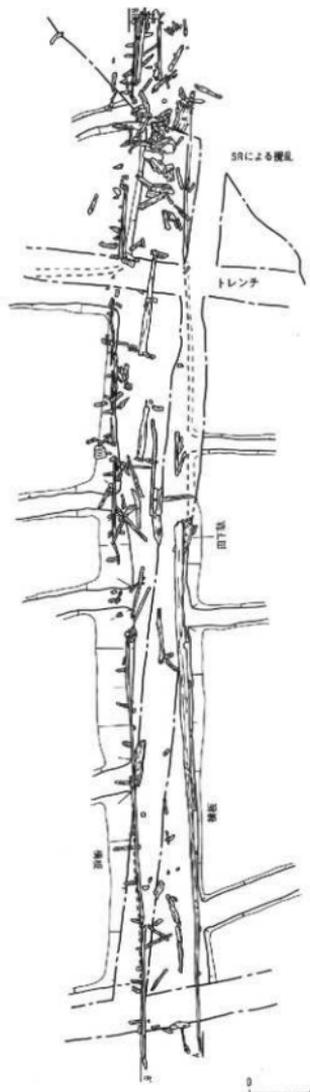
導水路



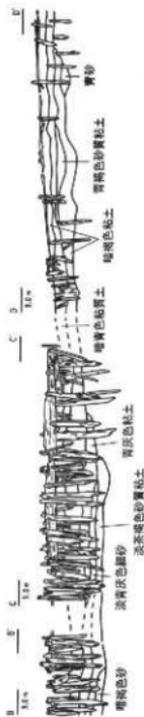
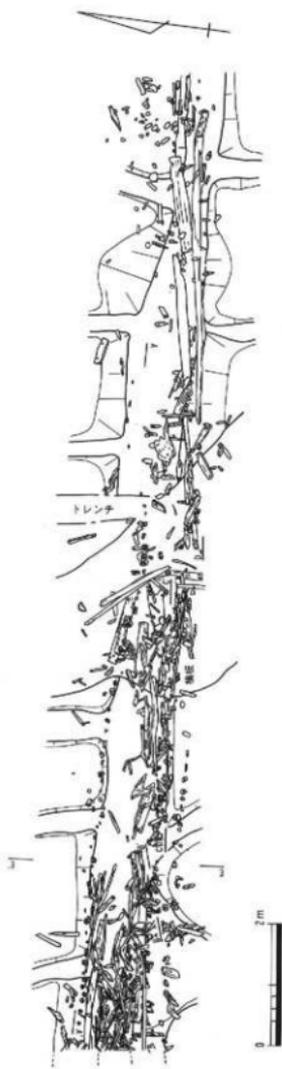
第16図 22層水田出土土器実測図



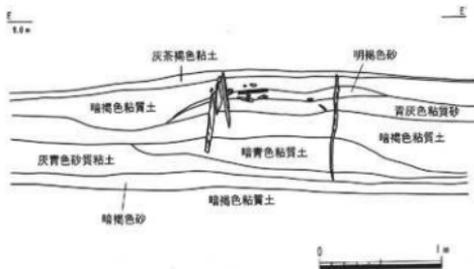
第17図 22層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:40)



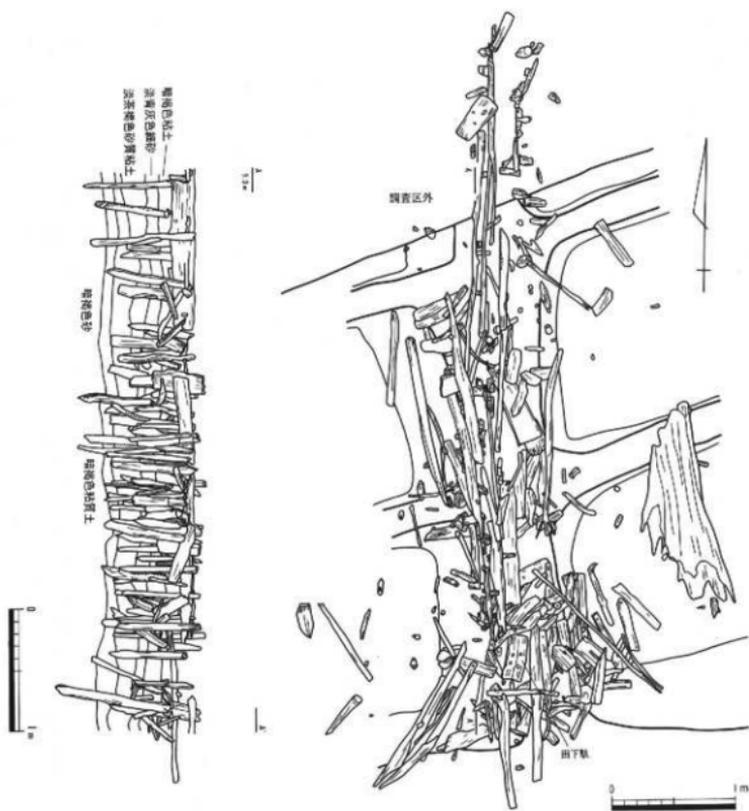
第18図 27層水田SK12201実測図



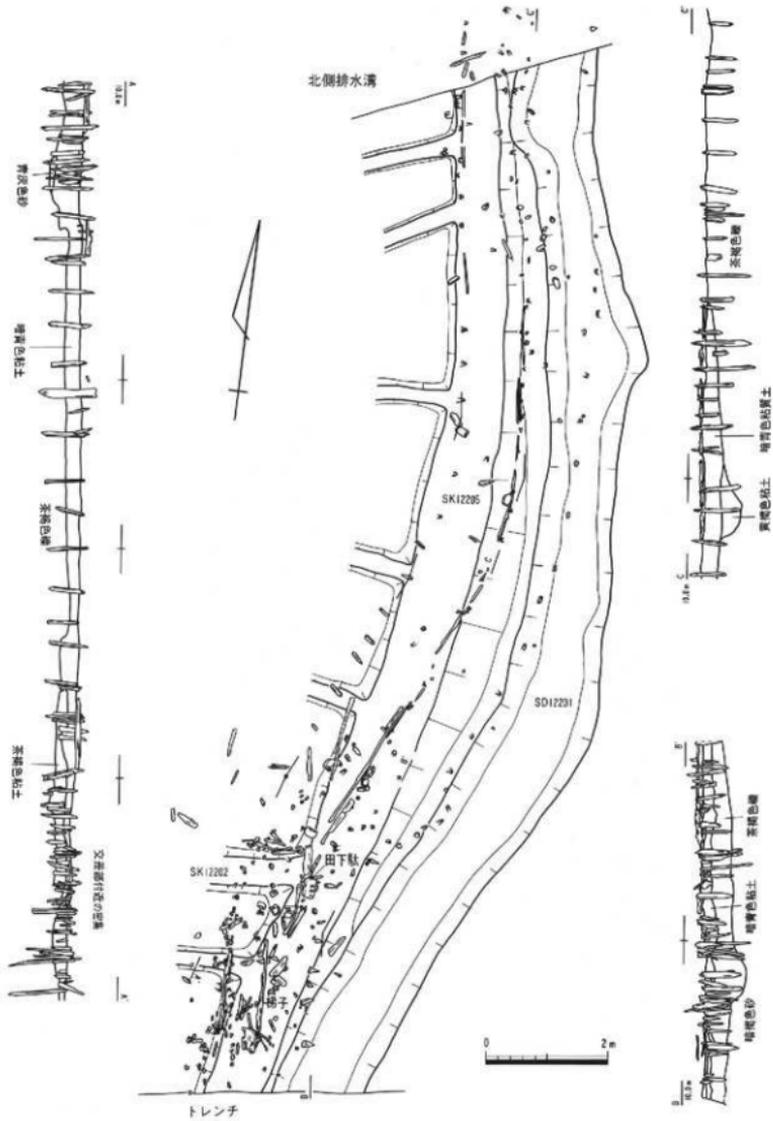
第19圖 22層水田SK12202実測図(1)



第20图 22層水田SK12202実測図 (2)



第21图 22層水田SK12203実測図



第22図 22層水田SK12205実測図

20層で検出された遺構 溝、斎串等集中出土地点

〈溝〉 [第23・24・25・26・27図, 図版11・12]

調査区の中央を北北西から南南東へ貫流する溝が検出された。

灰色砂質粘土である20層から切り込まれ、21層および22層の一部まで削り込んでいる。川幅は、上端幅で1.8~4.7m、下端幅で0.6~2.1mを測り、グリッドF9・10では、一時、川幅を広げる。川岸から河床への落ちは比較的緩やかで、深さは、平均0.3~0.4mである。また、北側左岸よりには段丘面をもつ。覆土は、流れによって運ばれた青砂層また21層の黒褐色粘土層との混土が下層に、19層水田の床土になったと思われる茶褐色の粘質砂および粘土が上層に堆積している。

覆土中からは、木簡1点、斎串2点が出土している。そのうち、木簡は、流路の調査区北端で出土し、上下とも折損、左右も欠落している。材質は杉で、現存長は約404mm、現存幅約56mm、厚さ約10mmを測る。出土層位は、青砂層でほぼ河床に着く様な状態で発見されている。表面には上部1行・下部3行の文字列、裏面には2ヶ所の墨痕がある。表面の文字では、「鷹」「五百原」「人」「戸」「廣」「西奈」「五」「女」を判読できる。(鬼頭清明東洋大学教授・原秀三郎静岡大学教授・向板綱二浜松博物館長のご教示による。)

その他、覆土からは、田下駄、横槌等の農工具、朝物、曲物底板、直径9cmのしっかりとした穿孔の施された板材などが出土しており、杭、加工木片等を含めると500点余りの木製品が出土している。土器は、9世紀頃と考えられるものが出土しているが、破片が多い。そのため、溝SR12001の年代観は不確定だが、上層の掘立柱建物跡、下層の22層水田からすると、8世紀後半から9世紀頃と考えられる。

〈斎串等集中出土地点〉 [第28図, 図版12]

溝SR12001の右岸側、グリッドF10において、手捏土器1点、斎串15点(接合後)、人面墨描人形1点が集中して発見された。出土地点は、川岸より0.2~1.5mとほぼ川辺りで、やや北にある1点を除くと南北2.5mの範囲に集中している。特に、川岸から1.0mの位置には、斎串よりも約20cm高いレベルで手捏土器が出土し、そこから川岸に向かい斎串が集中している。斎串には、地中に突き刺さった状態で出土しているものもあり、当時祭祀的行事を行った痕跡をそのまま残したと思われる。しかし、斎串の出土状況が様々で、祭祀的行事を行ったと思われる明確なレベルがつかみにくく、SR12001の検出面との上下関係をはっきりとおさえることができなかったため、いわゆる“川辺の祭祀”としてSR12001とこの祭祀的行事が関連づけられるものと断定はできなかった。そのため、祭祀的行事がこの場で行われたことは可能性が高いものの、後にその脇をたまたまSR12001が流れたと考えることもできる。

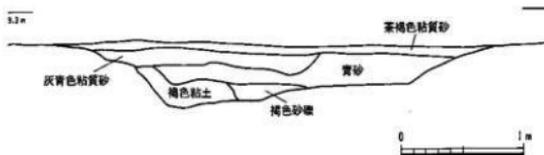
木簡

木製品
土器

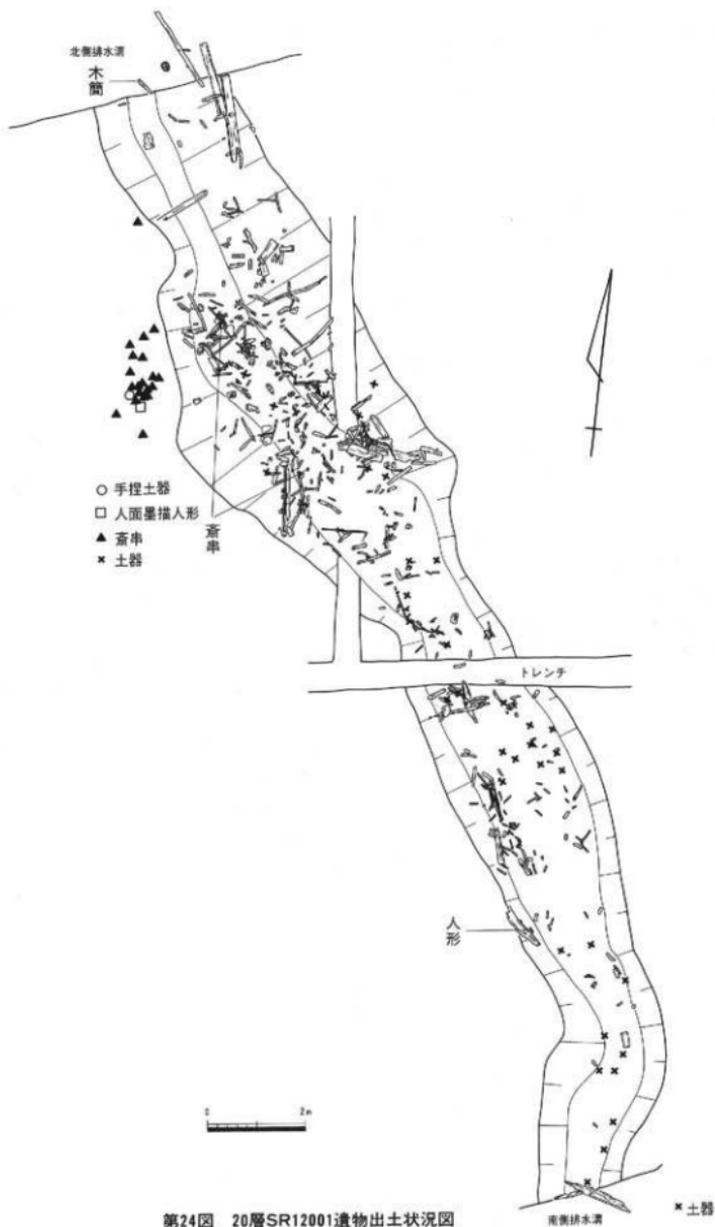
手捏土器
人面墨描人形

斎串

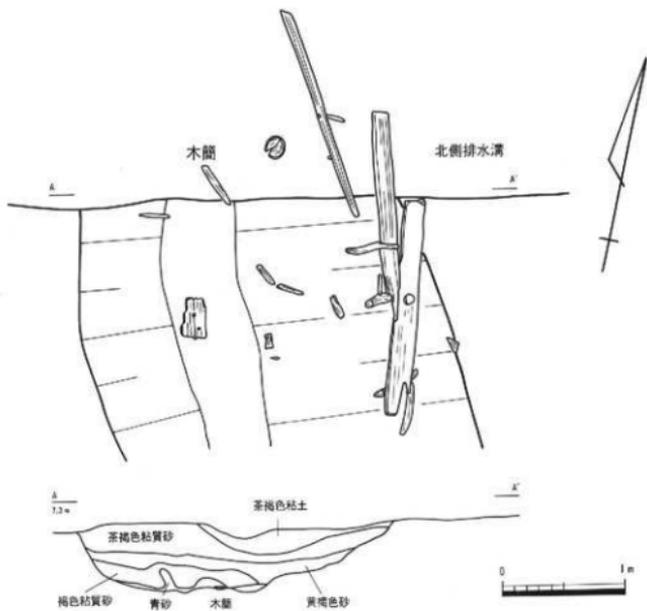
祭祀的性格



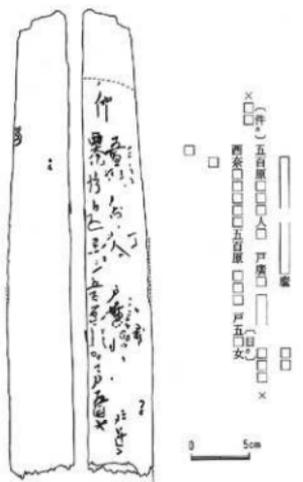
第23図 20層SR12001土層断面図 (No.5 トレンチ部分)



第24図 20層SR12001遺物出土状況図



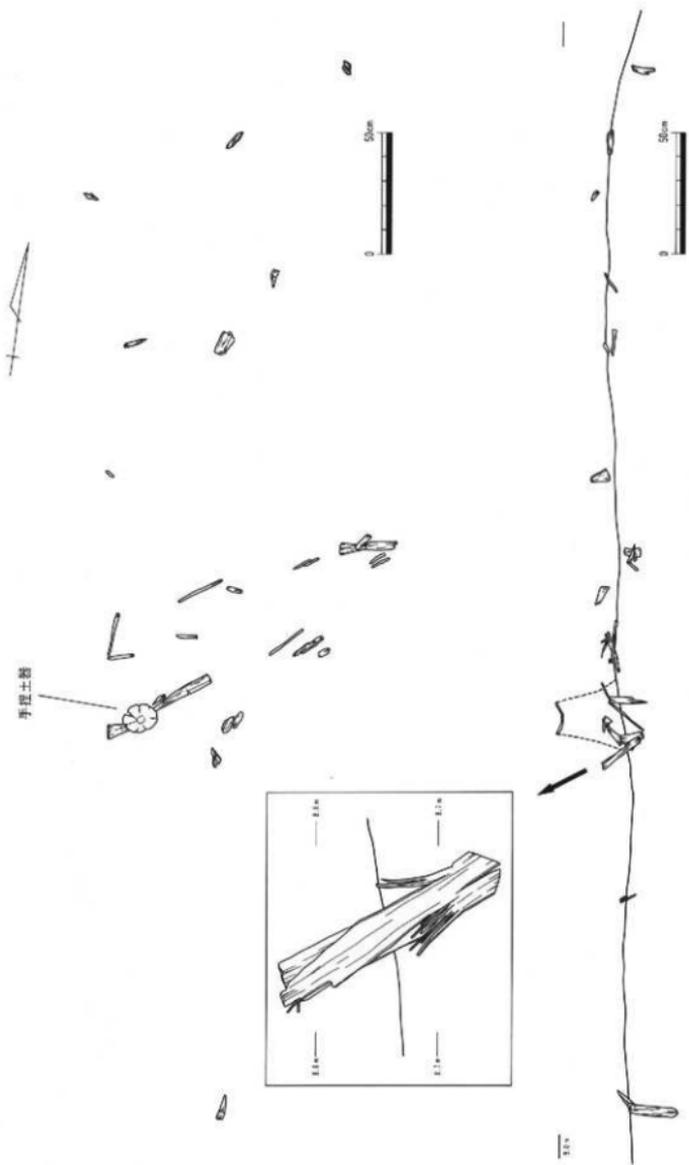
第25图 20層SR12001実測図



第26图 20層SR12001出土木簡実測図



第27图 20層SR12001出土人形実測図



第28图 20层遗址出土状况图

19層で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉 [第29・30・31・32図, 図版10]

調査区のほぼ全域で検出された。畦畔は、上端幅約40cm前後、下端幅約100cm前後、高さ約8cmを測る大きな畦畔5条と、上端幅約25~30cm、下端幅約40~45cmを測る小さな畦畔があるが、ともに簡単な盛土によるものである。

19層水田は、灰色砂質粘土の上層で営まれ、土壌は淡茶褐色の粘土である。層厚は、10cm前後だが、足跡状の凹みも見られ安定した堆積状況を見せる。

水田は、大きな畦畔で区画された内部を、小さな畦畔でさらに細かく分ける様につくられ、22層水田の区画と類似している。ただ、調査区の中央部には、2本の畦畔が狭い間隔で並列して造られているが、その位置は木簡等の出土した溝SR12001の流路とほぼ一致しており、その堤防をそのまま畦畔として利用したものと考えられる。

第30図のように大きな畦畔で区分すると、大きな区画は、流路SR1-01の堤防的役割を持つ流路SR1-01沿いの畦畔で囲まれるC地区を除いて、四周を確定出来るものが無いため、その規模は明らかではないが、B地区では、少なくとも20×20m以上(400㎡以上)の規模をもつ。水田1枚当たりの面積は、C地区は流路SR1-01の制約を受けているため、A・B地区に比べ大変小さく、5㎡に満たない水田が計測可能な29枚のうち8割以上を数える。

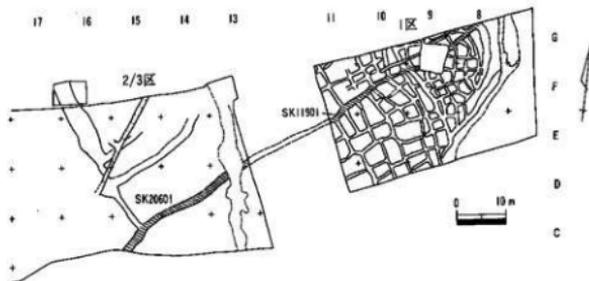
水口は、45ヶ所で確認された。小さな畦畔の水口には、25cm×15cm程の偏平な自然石が水口を塞ぐように置かれているものがあり、水利調節あるいは水口付近の水流による田面の侵食・破損防止のための置き石として使用されたと考えられる。

水田面の直上は、3mm程度の礫を少量含む青砂層によって被覆されており、洪水による水田の廃絶が窺える。

なお、19層水田は条里型地割に規制された水田と考えられ、東西軸の坪境線と考えられる畦畔が検出されている。以下、その畦畔について簡単に記したい。

畦畔SK11901 [第29図]

グリッドG8からグリッドE11にかけて、約36mを検出した。2/3区の6層水田で検出された畦畔SK20601と延長線上でつながると考えられる畦畔であるが、1区での規模は2/3区に比べ小さく、上端幅0.3~0.5m、下端幅0.7~1.0m、高さ3~8cmを測る。一部、試掘坑で途切れてしまっているが、ほぼ直線で、正方位の東方向に対し北へ約39°の傾きをもつ。畦畔内からは、杭等の検出はなかった。



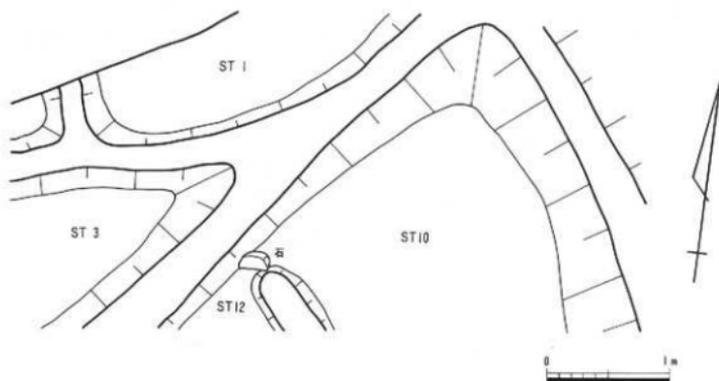
第29図 19層水田SK11901・2/3区6層水田SK20601位置図



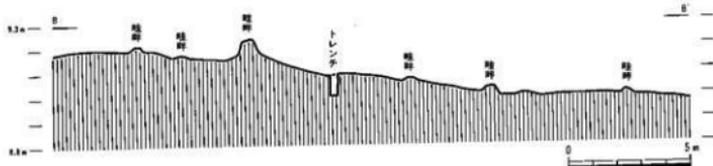
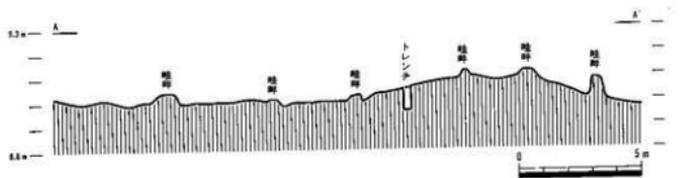
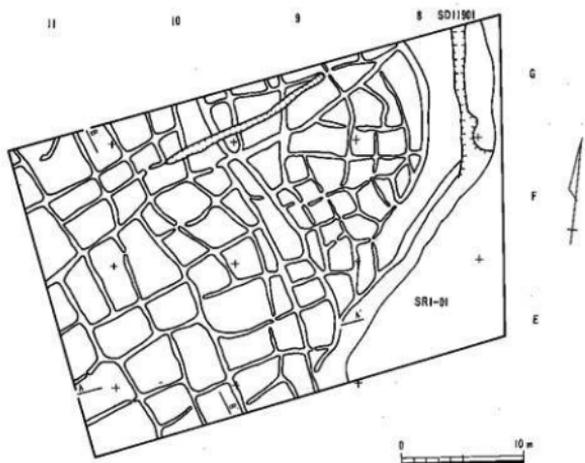
第30图 19層水田地区区分図

地区	5 m ² 未満	5 m ² 以上10 m ² 未満	10 m ² 以上15 m ² 未満	15 m ² 以上	合計
A	5枚 (72%)	2枚 (28%)	0枚 (0%)	0枚 (0%)	7枚
B	5枚 (23%)	11枚 (50%)	4枚 (18%)	2枚 (9%)	22枚
C	25枚 (86%)	4枚 (14%)	0枚 (0%)	0枚 (0%)	29枚
計	35枚 (60%)	17枚 (29%)	4枚 (7%)	2枚 (4%)	58枚

第7表 19層水田地区別・規模別面積表



第31图 19層水田水口上自然石出土状況図



第32図 19層水田エレベーション図 (水平1:200 垂直1:20)

17c層で検出された遺構 掘立柱建物跡

18層と17b層の間層である淡褐色粘土層上面から2棟の掘立柱建物跡を確認した。この層は試掘時には確認されず、本調査において調査区南西域のみにみられたものであり、建物群は調査区外南西域にさらに拡張する可能性がある。時期は出土した灰釉陶器より10世紀に比定される。

(1) SH11701 [第34図, 図版9]

グリッドD9、E8・9で検出された東西棟の掘立柱建物で、柱穴数31より構成され桁行9.92m、梁間8.16mを計測する。総柱式の建物だが、建物の形状としては東・北・西3面庇付3間×3間あるいは南北方向の柱間寸法から4面庇付の2間×3間が想定できる。全ての柱穴の中で、柱穴4は、柱穴3と柱穴5とのほぼ中間に位置し、東側にずれていることから建物に付帯する施設の存在が考えられる。柱穴の堀方は円形ないし楕円形であり、確認面での径28~38cm、深さ15~38cmを計測する。柱穴17より柱根を、柱穴11・13・14・16・18・21・22・23で礎板を、柱穴2・5・11・12・14・16・20・24・25・27・28で根固め用の自然石を検出している。柱穴17より検出した柱根は、長さ52.5cm、径9.7cmを計測する側面未加工の丸木材で、末端部分を杭状に加工している。礎板の多くは加工された転用材である。また柱穴31の中層より、底部に「前」と墨書された灰釉陶器が1点出土しており、形態から折戸53号窯式期のものと判断した。

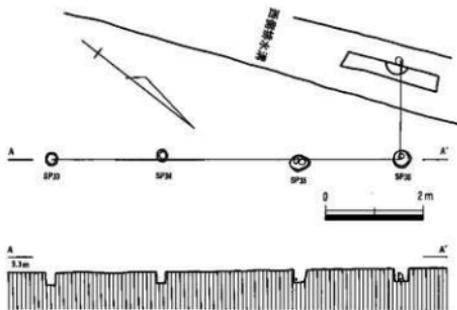
(2) SH11702 [第33図, 図版9]

調査区南西隅グリッドD・E10から検出した。調査区外となるため、柱穴5穴のみの確認であり、全体の規模は確定できないが、東西棟と考えた場合、梁間は7.14m、3間の建物となる。柱間寸法は中央部分が2.80mと大きく、他は2.02~2.27mである。柱穴の堀方は円形で、柱穴35のみ楕円形である。径は22~33cm、深さ24~28cmだが、柱穴37は径44cm、深さ55cmと規模が異なっている。柱根が柱穴35・36・37より、根固め石が柱穴35・36より出土している。

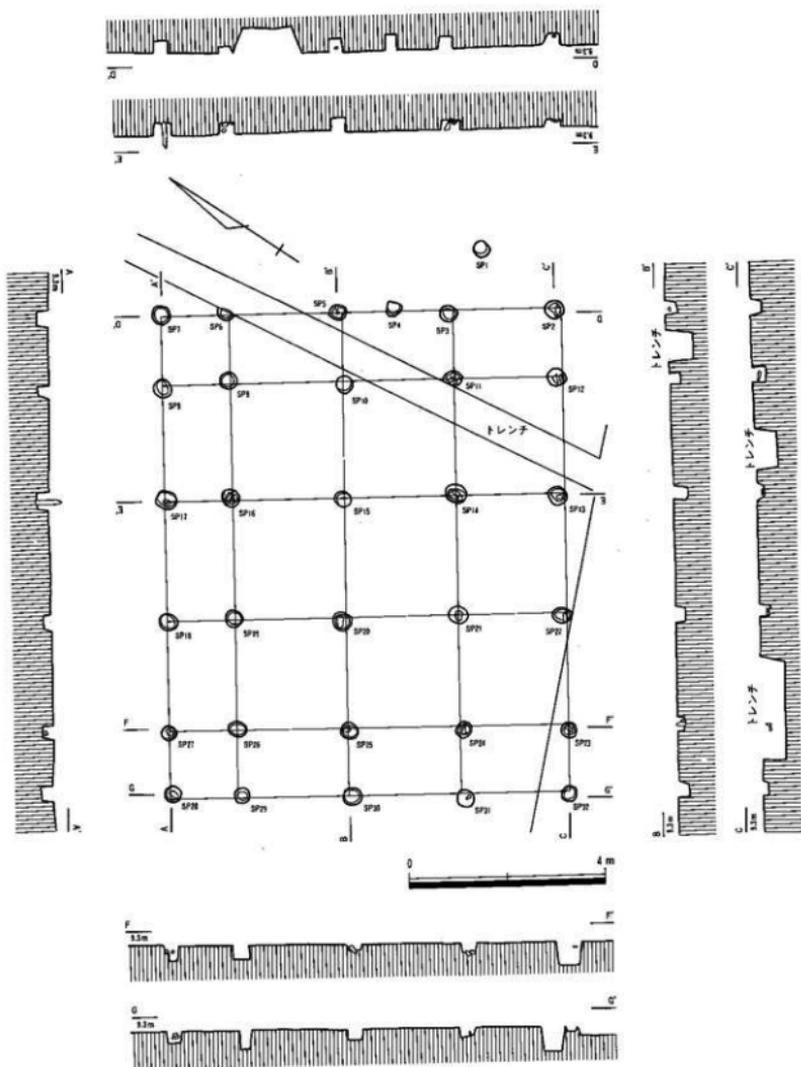
柱根・礎板
根固め石

墨書灰釉

柱根・根固め
石



第33図 17c層掘立柱建物跡SH11702実測図



第34図 17c層据立柱建物跡SH11701実測図

17b層で検出された遺構 水田跡、水路跡

〈水田跡〉 [第35・36・37図, 図版8]

畦 畔 暗褐色砂礫層の存在する調査区北東域を除く地域で検出され、平安後期と考えられる水田跡である。畦畔は、全て盛土だけによる構造で、上端幅40~50cm、下端幅70~80cm、高さ3~5cmを測る比較的大きなものと、上端幅20~30cm、下端幅40~60cm、高さ2cm程度を測る小さなものがある。畦畔の方向は、調査区東側と西側では趣を異にし、西側では、ほぼ東西南北方位に沿うのに対し、東側では、東西方向のもので、約50°北に傾いている。

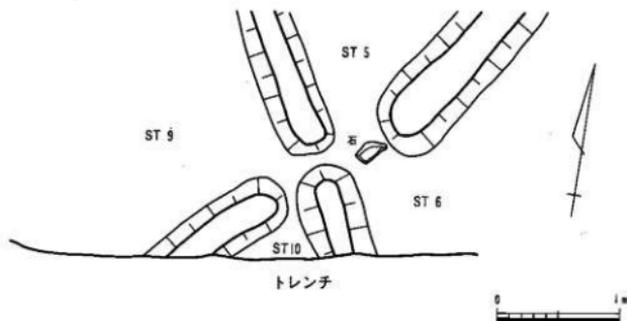
土 壌 17b層は、調査区北側の試掘坑では確認されなかった層で、17a層に連続する茶褐色粘土である。耕作土は、青砂層の上のの部分と、淡茶褐色粘土層の直上の部分とがあり、19

砂 被 覆 層水田と連続している地域もある。上層は、青砂層（流路SR1-01付近は茶褐色砂礫層）で、流路SR1-01の洪水・氾濫による廃絶が窺える。

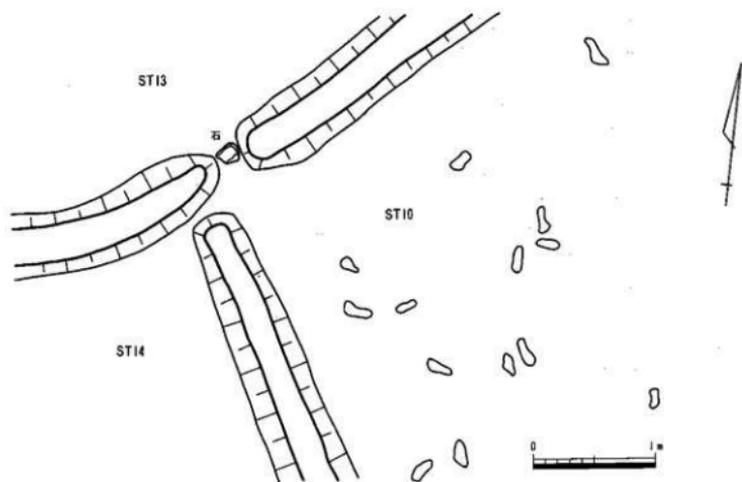
水 口 水田の面積、区画は、東西方向の畦畔が調査区中央付近での字状に曲がり、ともに一定していない。水口は、16ヶ所で確認されているが、グリッドE9とグリッドF8において、丁度、畦畔の交差点に設けられている水口2ヶ所には長辺約20cm、短辺約12~15cmの偏平な自然石が置かれていた。19層水田同様、水利調節および水口付近の水圧による田面の浸食・破損防止のためと考えられる。また、水田の東端部、流路SR1-01との境界線上を北から南へ流れる水路跡が検出されている。

〈水路跡〉 [第37図, 図版8]

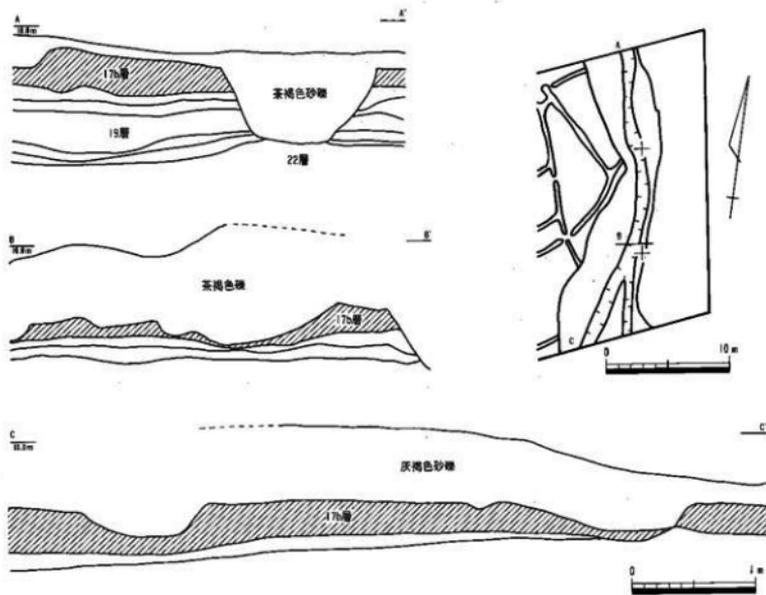
調査区東側の流路SR1-01の西側を、流路SR1-01と平行するようにして北から南へ流れる水路SD117b01が検出された。上端幅1.0m前後、下端幅0.5m前後を測り、グリッドE8に入りY字状に分流する。覆土は茶褐色及び灰褐色砂礫層で、この砂礫層は17b層上面よりも厚いところでは1m以上も堆積しており、本流路が洪水により一気に埋められたことが窺える。水路の底面レベルは、田面より0.2~0.3mほど低く、田への引水のための施設があったことが窺えるが、井堰・用水車等のもの、また取水口も検出されなかった。しかし、この水路が、当時から天井川であったと思われる流路SR1-01の伏流水を集めていた可能性は十分あり、本水路が17b層水田の導水路の役目を果たしていたと考えられる。



第35図 17b層水田水口上自然石出土状況図



第36图 17b層水田水口上自然石・足跡検出状況図

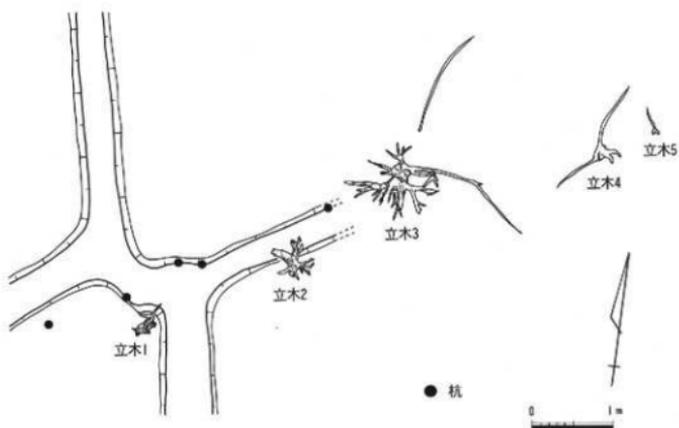


第37图 17b層水田SD117b01土層断面図

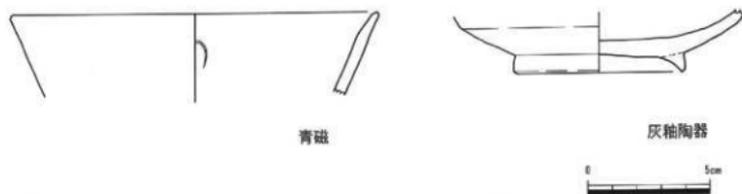
16層で検出された遺構 水田跡、立木

〈水田跡〉 [第38・39図, 図版7]

- 畦 畔** 調査区の西半域において検出された。畦畔は、上端幅約25~30cm、下端幅約45~50cm、高さ2~7cmを測る簡単な盛土による畦畔が主体で南北方向の畦畔は、西に約10°傾き、それに対応し東西方向のものは、北に約10~20°傾いている。なお、杭は、畦畔SK11602と畦畔SK11601との交差部付近で5本出土したのみである。
- 土 壌** 16層水田は、暗褐色砂礫層および青砂層の上層で営まれているが、一部は17b層水田に連続している。水田土壌は暗褐色粘土で、珪藻分析の結果、好流水性種や流水性不定性種は多産するが好止水性種は少ないこと、また陸性珪藻が比較的多く検出されていることから、沼沢地のような状態ではあるものの1年のうちのある期間は冠水しない水田であったと想定される。
- 区 画 規 模** 1枚当たりの面積は、上層水田の17b層に比べ狭く、29枚のうち面積の求められる7枚の平均面積は約10.92㎡しかない。
- 水 口** 畦畔には、水口が4ヶ所で確認されたが、水口を持たないと断定できる田面もある。そのため、用排水は、水口使用と田越しによるものが混在していたのではないかと考えられる。
- 青 磁 灰 輪** 遺物は、田面より龍泉窯期の青磁が、耕作土中より猿投窯編年折戸53号窯期の灰釉陶器が出土しており、水田経営の時期は、平安後期から中世にかけてと思われる。
- 〈立木〉 [第38図, 図版7]
- 畦畔SK11602付近において5本の立木を検出した。畦畔SK11601との交差部に1本、畦畔SK11602脇に1本をみる。残りの3本も、畦畔SK11602が明確に検出できたのは2m程のため、畦畔の脇とは言い切れないが、ほぼその延長線上にある。そのため、利用目的は稲架木である可能性も考えられるが、地境を示す傍示木ではなかったかとも考えられる。
- 立木の用途**
- (1) 立木1
幹の残存していた部分は高さ約40cm、幅約12×25cm程である。根の張り出しは殆ど残っておらず十数cmのものが3本のみである。
 - (2) 立木2
5本の中では最も幹の部分がしっかりしていた。やや北西方向に傾き、高さにして約30cm、一辺約20cm角程度残存していた。根は、放射状に張り出しているがどれも20cmほどである。
 - (3) 立木3
幹の部分は殆ど残っていないが、根の張り具合は最もしっかりとしている。縦根は、30cm近く入るものもある。立木2と同様放射状に張り出しているが、特に北に伸びるものと東に伸びるものは長さが2m近くある。なお、先端は元の部分に比べ約20cm地中に入り込んでいる。
 - (4) 立木4
根の部分しか残存していなかった。二方向に0.6mと1.0mの張り出しが残り、元の部分と先端では20~30cmの比高差がある。
 - (5) 立木5
根の張り出し部がわずかに検出されたのみである。



第38图 16層水田立木・杭出土状況図

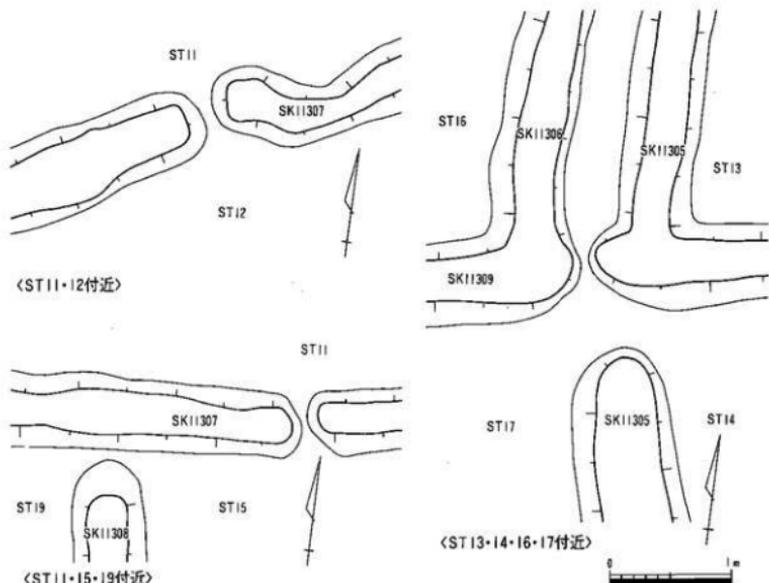


第39图 16層水田出土土器実測図

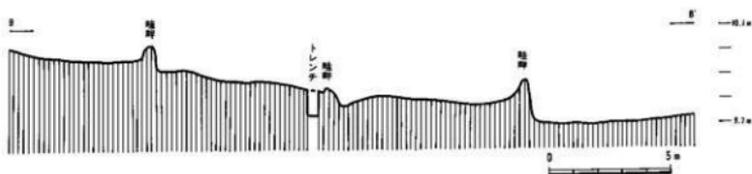
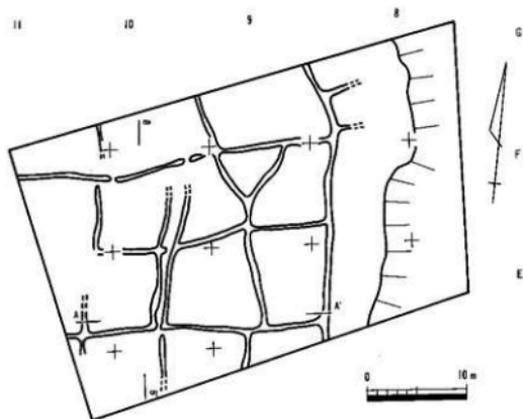
13層で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉 [第40・41図, 図版6]

- 畦 畔** 調査区のほぼ全域で検出された。上端幅約30cm前後、下端幅約50cm～1000cm、高さ2～10cmを測る多少湾曲したりY字状に分岐する一定の方向性のない南北方向6本、ほぼ東西方向に平行する東西方向4本の畦畔を伴う。杭は、畦畔SK11306で2本、畦畔SK11309と畦畔SK11310の交差部で1本が検出されたのみである。
- 土 壌** 13層水田は、暗褐色砂質粘土および青砂層の上に存在するが、一部16層水田の直上の部分もある。水田土壌は、青灰色粘土で、北側部分で10cm前後と薄い、平均20～30cmの厚みを持ち、中央部のF9杭付近部分では40cm前後まで厚みを帯る。直上の層は黒褐色礫層および青砂層で、13層水田もやはり、流路SR1-01の洪水・氾濫による水田の廃絶が窺える。
- 区画規模** 水田の枚数は21枚を数えるが、面積の求められる4枚の1枚当たりの平均面積は約54.18㎡で、比較的大きな区画で経営されている。
- 水 口
水路の構造** 南北方向の畦畔のうち、畦畔SK11306と畦畔SK11305は、中心間の距離が約90cmと狭く、その北端に畦畔SK11307の水口が丁度造られていることから考え、南流する水路の堤としての役割を両畦畔がもっていたと推測される。水口は、全体では5ヶ所で確認されている。
- 立 木** なお、16層水田上に存在した立木5本のうち、畦畔SK11304と畦畔SK11310の交差部付近の2本は13層水田上まで残存していた。



第40図 13層水田水口検出状況図



第41図 13層水田エレベーション図 (水平1:200縦直1:20)

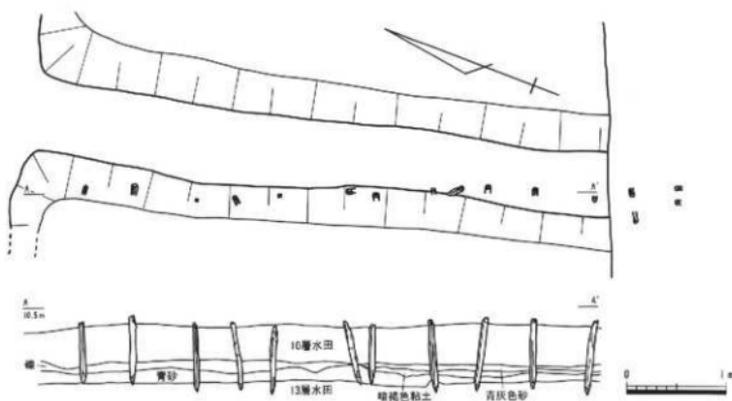
10層で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉 [第42図, 図版5]

- 畦 畔** 調査区西半域において検出された。南北方向に4条、東西方向に3条の畦畔を認めることができたが、杭が打たれていたのは、畦畔SK11003の一部のみである。
- 土 壤** 水田土壌は、青灰色粘土層で、層厚は平均20～30cmを測り、攪拌の状態も顕著である。田面は、荒廃が激しいものの、足跡状の凹みも検出されている。水田1枚あたりの面積は、明確に推定する事は出来ないが、一辺が9～10m前後の比較的大きな区画の水田と考えられる。
- 区画規模** 畦畔SK11003の西側では、南北に4つの水田区画が推定されるが、最北とその南では約10cm、さらにその南とでは15cmの比高差をもつ。また、東西の水田面を比較しても、東側水田面のほうが西側水田面より高くなっており、北から南、東から西へと低くなるいわゆる棚田の形態になっている。それは、どの層の水田でもそうであるが、調査区東側を北から南へ流れる流路SR1-01の自然堤防から後背低地にかけての地形に水田が立地することであると考えられる。また、そのため、鹿絶も流路SR1-01の洪水によると考えられ、青灰色砂層および茶褐色砂層で被覆されている。
- 遺 物** 遺物は、箸、曲げ物底板といった木製品および若干の土器が出土しているが、年代を比定する様な遺物はない。しかし、層序から考えると、时期的には近世の水田と推定できる。

(1) 畦畔SK11003 [第42図, 図版5]

- 部分的杭列** 上端幅60cm前後、下端幅180cm前後、高さ4～7cmを測る。南端部西側にはのみ杭列を伴い、杭は0.6～1.4m間隔に打ち込まれ、18本を数える。杭は、下層の雑層・砂層を買き13層水田の耕作土である青灰色粘土層に先端部が達している。用材には、針葉樹の割り材、広葉樹の丸材両方が使われており、それぞれ12本、6本を数える。先端部は、何れも工具などで、丁寧に鋭利な加工が施されている。また、その北端から6m程度北にも2本の杭が出土しているが、その2本は畦畔に並列して打たれてはいない。
- 杭の材質**



第42図 10層水田SK11003実測図

水田計測表(1区 28層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.99	--	--	--	--	一部区外
2	7.96	--	--	2.2	--	浸食
3	7.84	--	--	--	--	"
4	7.86	4.9	長方形	2.3	1.8	
5	7.89	5.1	長方形	2.6	1.6	
6	7.89	3.9	長方形	2.2	1.5	
7	7.86	3.2	長方形	2.1	1.2	
8	7.80	3.2	長方形	2.6	1.2	
9	7.76	--	--	1.4	--	一部区外
10	7.86	--	--	--	--	浸食
11	7.87	--	--	2.5	--	"
12	7.85	--	--	2.5	--	"
13	7.74	--	--	2.3	--	"
14	7.72	推 6.3	(正方形)	2.7	2.5	"
15	7.70	推 6.5	(正方形)	(2.6)	2.3	一部区外
16	7.64	--	--	--	--	"
17	7.87	--	--	--	0.8	"
18	7.86	--	--	--	--	浸食
19	7.86	--	--	--	--	"
20	7.71	--	--	--	--	"
21	7.67	--	--	2.7	--	"
22	7.60	--	--	--	--	"
23	7.57	--	--	(2.2)	--	"
24	7.58	--	--	--	--	一部区外
25	7.65	--	--	(3.1)	--	"
26	7.68	--	--	(1.4)	--	"
27	7.67	--	--	(1.8)	--	"
28	7.51	--	--	--	--	一部区外
29	7.77	--	--	--	--	一部区外
30	7.77	--	--	--	1.4	部分的検出
31	7.76	--	--	(3.3)	--	浸食
32	7.60	--	--	2.9	1.8	"
33	7.58	--	(長方形)	--	1.6	部分的検出
34	7.68	3.2	長方形	2.2	1.2	
35	7.65	2.0	正方形	1.4	1.5	
36	7.59	2.6	長方形	1.8	1.3	
37	7.54	1.9	長方形	1.7	1.2	
38	7.49	--	--	--	--	一部区外
39	7.73	--	--	--	2.0	"
40	7.68	2.6	正方形	1.6	1.5	
41	7.60	6.0	長方形	3.0	1.8	浸食
42	7.58	6.9	長方形	3.2	2.1	
43	7.60	5.2	長方形	3.0	1.6	一部トレンチ
44	7.67	4.0	長方形	2.2	1.5	
45	7.67	2.6	長方形	1.8	1.2	
46	7.60	3.4	正方形	2.0	1.9	
47	7.53	4.1	台形	2.3	1.9	
48	7.49	--	--	--	0.9	一部区外
49	7.60	--	--	--	--	"
50	7.62	2.3	正方形	1.6	1.3	
51	7.63	5.0	長方形	3.0	1.5	浸食
52	7.63	6.4	台形	3.0	1.8	
53	7.64	6.6	正方形	2.5	2.4	
54	7.63	5.0	台形	2.4	1.5	
55	7.64	3.0	長方形	2.4	1.1	
56	7.62	7.5	長方形	3.2	2.0	
57	7.57	3.7	長方形	2.5	1.4	
58	7.62	--	--	--	1.6	一部区外
59	7.58	--	(台形)	2.5	1.6	"
60	7.57	--	--	--	--	"
61	7.67	--	--	--	1.4	"
62	7.60	5.6	長方形	3.2	1.5	浸食

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
63	7.65	4.0	長方形	2.9	1.4	
64	7.68	630	台形	2.7	1.5	
65	7.66	3.3	長方形	2.3	1.3	一部トレンチ
66	7.64	2.6	長方形	2.0	1.0	
67	7.64	3.0	長方形	2.7	1.0	
68	7.62	--	--	--	--	一部区外
69	7.67	0.9	長方形	1.2	0.8	
70	7.60	1.8	台形	1.5	1.0	
71	7.56	--	(台形)	--	1.9	一部区外
72	7.65	--	--	--	--	"
73	7.60	--	--	--	--	"
74	7.62	--	--	--	--	"
75	7.57	--	--	--	--	"
76	7.53	--	--	--	--	"

水田計測表(1区 22層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.97	--	--	2.7	--	一部区外
2	8.97	2.2	台形	2.5	0.6	
3	8.93	3.6	四辺形	2.6	1.1	
4	8.87	--	--	1.4	--	一部区外
5	8.91	1.8	正方形	1.3	1.2	
6	8.92	1.6	台形	1.4	0.8	
7	8.90	5.9	四辺形	3.0	1.7	
8	8.85	1.9	四辺形	2.1	0.4	
9	8.86	2.2	台形	1.5	1.2	
10	8.92	8.3	長方形	4.3	1.6	
11	8.90	9.5	長方形	3.8	2.3	
12	8.36	--	--	--	--	一部区外
13	8.38	--	--	2.7	(1.5)	"
14	8.36	--	--	3.2	--	一部区外
15	8.40	--	(台形)	2.3	1.4	"
16	8.82	3.8	長方形	2.1	1.4	
17	8.32	--	--	--	--	一部区外
18	8.34	--	--	--	(1.8)	一部区外
19	--	--	--	--	1.7	"
20	8.28	--	--	2.1	--	一部区外
21	8.33	--	--	(2.2)	1.9	一部区外
22	--	--	--	--	1.2	"
23	--	3.6	長方形	2.4	1.2	
24	8.33	--	--	2.4	--	一部区外
25	8.33	4.5	長方形	2.4	1.7	
26	--	2.8	長方形	2.1	1.3	
27	--	--	--	--	--	浸食
28	--	--	--	--	--	"
29	--	--	--	--	--	"
30	--	--	--	--	--	"
31	--	--	--	--	--	"
32	--	--	--	--	--	"
33	--	--	--	--	1.2	一部区外
34	--	2.7	正方形	1.7	1.4	
35	--	3.7	長方形	3.1	0.8	
36	--	--	--	2.2	--	一部区外
37	--	3.7	長方形	2.1	1.6	
38	--	5.1	台形	2.5	1.8	
39	--	--	--	--	(1.6)	一部区外
40	--	2.9	台形	1.9	1.5	
41	--	3.9	台形	2.4	1.3	
42	--	--	--	3.6	--	一部区外
43	--	3.6	長方形	2.7	1.2	
44	--	3.3	長方形	2.5	1.2	
45	--	--	--	--	--	一部区外
46	--	3.6	長方形	2.2	1.3	
47	--	2.5	長方形	2.3	1.0	

第8表 1区水田計測表1

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
48	—	—	—	1.7	—	一部区外
49	—	—	—	1.0	—	—
50	8.91	3.0	長方形	3.2	0.9	—
51	—	—	—	(2.3)	—	部分的検出
52	—	2.1	台形	1.6	1.2	—
53	—	—	—	1.0	—	部分的検出
54	—	4.4	台形	2.5	1.8	—
55	—	1.6	三角形	1.9	1.3	—
56	—	3.6	長方形	2.0	1.7	—
57	—	推 9.7	長方形	3.9	2.4	浸食
58	—	推 6.5	長方形	3.2	1.9	—
59	—	—	(長方形)	3.9	3.1	—
60	—	—	—	—	—	一部区外
61	—	—	(長方形)	6.2	3.1	浸食
62	—	5.7	正方形	2.4	2.3	—
63	—	9.6	長方形	4.3	2.2	—
64	—	—	—	(2.1)	—	一部区外
65	—	—	—	(3.1)	—	浸食
66	—	2.1	—	—	—	一部トレンチ
67	—	2.2	台形	1.6	1.2	—
68	—	8.7	四辺形	4.2	1.6	—
69	—	10.0	台形	3.4	2.6	—
70	—	3.5	長方形	3.0	1.1	—
71	—	7.4	長方形	2.9	2.4	—
72	—	7.3	長方形	2.9	2.2	—
73	—	2.8	四辺形	1.7	1.0	—
74	—	4.2	台形	2.4	0.9	—
75	—	5.9	台形	3.0	1.7	—
76	—	7.7	台形	3.4	1.8	—
77	—	2.8	長方形	1.9	1.2	—
78	—	5.4	長方形	2.8	1.7	—
79	—	3.7	長方形	2.5	1.3	—
80	—	—	—	2.0	—	一部区外
81	—	1.9	台形	1.7	1.4	—
82	—	3.2	正方形	1.8	1.4	—
83	—	6.0	長方形	2.8	1.9	—
84	—	6.2	長方形	3.3	1.8	—
85	—	3.1	正方形	1.8	1.4	—
86	—	4.3	長方形	2.7	1.6	—
87	—	5.2	長方形	2.6	1.8	—
88	—	—	—	2.3	—	一部区外
89	—	6.4	台形	3.1	2.2	—
90	—	5.8	長方形	2.8	1.6	一部トレンチ
91	—	6.0	長方形	2.8	1.8	—
92	—	7.3	正方形	2.7	2.7	—
93	—	5.0	正方形	2.2	2.2	—
94	—	5.1	台形	2.3	1.8	—
95	—	6.5	正方形	2.8	2.1	—
96	—	—	—	2.3	—	一部区外
97	—	—	—	2.0	—	—
98	—	—	—	3.0	—	—
99	—	3.1	長方形	2.2	1.3	—
100	—	3.7	四辺形	2.3	1.4	—
101	—	5.0	台形	2.5	2.0	—
102	—	4.3	長方形	2.2	1.8	—
103	—	—	—	2.5	—	一部区外
104	—	—	—	1.9	—	—
105	—	7.7	長方形	3.2	2.1	—

水田計測表(1区 19層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.20	—	—	—	—	一部区外
2	9.17	—	—	—	(2.6)	—
3	9.17	3.8	三角形	3.1	1.8	—
4	9.11	—	—	—	(3.2)	一部区外
5	9.12	—	—	—	2.2	一部区外
6	9.11	—	—	—	(3.9)	一部区外
7	9.14	—	—	4.0	(3.6)	一部区外
8	9.10	—	—	—	(1.5)	一部区外
9	9.14	3.1	三角形	3.5	1.4	—
10	9.23	9.5	—	—	0.5	—
11	9.20	0.7	三角形	1.4	0.7	—
12	9.17	4.1	—	4.4	1.1	—
13	9.13	5.0	四辺形	—	2.1	—
14	9.14	4.1	正方形	2.0	1.8	—
15	9.13	3.4	長方形	2.1	1.6	—
16	9.15	2.1	四辺形	1.8	—	—
17	9.12	4.1	四辺形	—	1.8	—
18	9.14	1.8	三角形	—	1.6	一部区外
19	9.09	—	—	—	(2.1)	—
20	9.12	—	—	—	1.2	—
21	9.11	—	—	—	(1.4)	—
22	9.13	2.4	正方形	1.6	1.5	—
23	9.18	—	(四辺形)	3.0	—	—
24	9.18	0.7	四辺形	1.0	0.6	—
25	9.18	1.7	菱形	—	—	—
26	9.16	2.0	四辺形	—	—	—
27	9.13	4.2	五角形	—	—	—
28	9.10	2.7	正方形	1.8	1.8	—
29	9.09	2.0	正方形	1.4	1.3	—
30	9.13	1.7	長方形	2.3	0.7	—
31	9.13	3.6	四辺形	—	1.2	—
32	9.15	4.0	台形	4.0	0.9	—
33	9.09	2.0	台形	1.4	1.1	—
34	9.10	3.7	台形	—	1.7	—
35	9.09	1.6	—	3.0	0.5	—
36	9.14	4.3	四辺形	3.2	1.5	—
37	9.13	—	(台形)	—	(2.5)	一部区外
38	9.19	—	—	—	1.3	—
39	9.17	—	—	—	(0.9)	浸食
40	9.21	—	—	—	1.1	一部区外
41	9.17	2.1	長方形	1.8	1.1	—
42	9.14	—	(長方形)	3.2	1.7	浸食
43	9.20	—	—	—	2.2	一部区外
44	9.18	2.8	長方形	2.4	1.0	—
45	9.16	推 4.6	(台形)	2.4	1.4	部分的検出
46	9.23	—	—	—	—	一部区外
47	9.22	—	—	—	3.8	—
48	9.21	推 5.8	長方形	4.0	1.2	部分的検出
49	9.17	推 8.9	長方形	(3.6)	2.0	—
50	9.24	—	—	—	—	一部区外
51	9.25	—	—	3.0	—	—
52	9.18	—	—	—	(4.3)	—
53	9.18	3.2	長方形	3.5	0.7	一部トレンチ
54	9.23	8.6	長方形	5.7	1.3	—
55	9.10	2.1	長方形	1.8	0.9	—
56	9.06	3.8	長方形	2.0	1.5	—
57	9.06	6.7	長方形	3.5	1.7	—
58	9.00	1.0	三角形	1.8	1.0	—
59	9.13	3.2	台形	2.1	1.6	—
60	9.11	3.3	台形	3.2	0.4	—
61	9.00	2.0	長方形	3.5	0.5	—

第9表 1区水田計測表2

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
62	9.20	3.3	四辺形	3.2	0.7	
63	9.10	5.1	台形	2.6	1.9	
64	9.02	—	—	(1.5)	—	一部区外
65	9.10	7.5	臺形	2.8	2.3	
66	9.07	推 7.2	臺形	3.2	(2.6)	一部トレンチ
67	9.08	6.4	台形	2.9	2.1	"
68	9.13	2.4	台形	2.5	0.7	
69	9.06	5.0	台形	2.9	1.4	
70	9.05	6.4	正方形	2.6	2.3	
71	9.04	17.8	長方形	5.4	3.3	
72	9.07	9.2	台形	3.9	2.1	
73	9.03	7.4	台形	3.9	1.3	
74	9.02	—	—	3.8	—	一部区外
75	9.08	15.3	台形	6.0	1.8	
76	9.03	9.5	長方形	3.5	2.3	
77	9.00	13.6	長方形	4.9	2.2	
78	8.98	—	—	—	2.5	一部区外
79	9.12	1.6	長方形	5.5	1.7	
80	9.13	9.0	長方形	4.8	1.7	
81	9.07	11.8	五角形	4.3	2.2	
82	9.01	12.3	台形	3.8	2.7	
83	8.98	6.8	台形	3.2	1.7	
84	8.96	—	—	—	—	一部区外
85	9.13	—	—	—	(3.1)	"
86	9.06	—	—	—	(3.4)	"
87	9.00	—	—	—	—	"
88	8.98	—	—	—	—	"

水田計測表 (1区 17b層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.57	—	—	—	—	一部区外
2	9.53	—	—	—	2.7	"
3	9.56	—	—	9.4	—	部分的検出
4	9.57	—	—	—	1.0	"
5	9.55	37.2	四辺形	11.8	(1.0)	
6	9.42	—	—	—	—	浸食
7	9.54	—	—	—	(6.0)	部分的検出
8	9.53	18.0	台形	5.6	4.3	
9	9.49	推 5.1	台形	3.3	1.8	一部トレンチ
10	9.44	—	(正方形)	7.7	7.0	浸食
11	9.42	—	—	—	—	一部区外
12	9.53	—	(台形)	4.1	—	一部試験坑
13	9.52	37.1	長方形	—	—	
14	9.49	19.9	—	—	6.8	
15	9.38	—	—	—	(7.3)	一部区外
16	9.50	1.9	三角形	4.3	(1.1)	
17	9.49	4.3	長方形	3.2	1.2	
18	9.44	5.8	台形	3.6	0.9	
19	9.46	—	—	—	3.0	部分的検出
20	9.50	15.5	台形	4.7	3.0	
21	9.40	16.3	台形	4.7	3.5	
22	9.30	—	—	(4.7)	—	一部区外
23	9.50	12.5	台形	6.4	1.2	
24	9.40	10.3	長方形	4.7	1.8	
25	9.43	14.4	長方形	4.5	2.6	
26	9.36	—	—	(5.8)	—	一部区外
27	9.49	—	—	—	(2.5)	"
28	9.45	—	—	—	(3.7)	"
29	9.43	—	—	—	—	"

水田計測表 (1区 16層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.90	—	—	—	—	部分的検出
2	9.75	—	—	(11.6)	—	"
3	9.75	—	—	—	—	"
4	9.85	—	—	—	(7.1)	"
5	9.75	—	—	—	—	一部区外
6	9.77	—	—	—	—	部分的検出
7	9.74	—	—	6.4	1.8	
8	9.68	—	—	6.6	5.4	"
9	9.65	—	(長方形)	—	1.9	"
10	9.62	推 14.4	四辺形	4.9	3.2	一部トレンチ
11	9.64	7.6	長方形	3.6	1.7	
12	9.58	12.2	正方形	3.2	3.2	
13	9.57	—	—	(6.0)	—	一部区外
14	9.76	—	—	—	—	"
15	9.70	—	—	—	4.0	部分的検出
16	9.64	—	—	—	1.5	"
17	9.66	—	—	(9.0)	—	"
18	9.62	推 18.5	台形	5.5	2.5	"
19	9.61	9.6	四辺形	3.2	2.8	
20	9.63	6.2	長方形	3.3	1.7	
21	9.60	8.0	台形	3.2	1.9	
22	9.52	—	—	—	(3.0)	一部区外
23	9.66	—	—	—	—	"
24	9.67	—	—	3.5	—	"
25	9.61	—	—	—	—	"
26	9.56	—	—	—	—	"
27	9.50	—	—	—	—	部分的検出
28	9.52	—	—	—	(2.8)	"
29	9.60	—	—	—	—	"

水田計測表 (1区 13層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	10.22	—	—	—	—	一部区外
2	10.23	—	—	—	(2.2)	"
3	10.10	—	—	—	(2.4)	部分的検出
4	10.03	—	—	—	—	"
5	10.06	—	—	—	—	"
6	10.03	—	—	—	(11.2)	一部区外
7	10.09	推 44.6	台形	7.4	3.9	一部試験坑
8	10.00	—	(三角形)	—	—	"
9	9.98	推 56.4	台形	9.2	5.0	
10	9.94	—	—	—	—	一部区外
11	9.96	—	—	(10.4)	—	"
12	9.90	—	(台形)	—	—	部分的検出
13	9.84	68.3	四辺形	9.4	7.0	
14	9.75	—	—	—	(8.0)	一部区外
15	9.90	—	—	—	—	部分的検出
16	9.82	推 47.4	長方形	7.3	6.1	
17	9.70	—	—	—	(7.1)	一部区外
18	9.95	—	—	—	—	"
19	9.87	—	—	—	6.4	"
20	9.80	—	—	—	—	"
21	9.73	—	—	—	—	一部区外

第10表 1区水田計測表 3

水田計測表 (1区 10層水田)

地	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	10.13	--	--	--	--	部分の換出
2	10.10	--	--	--	(6.1)	"
3	10.14	--	--	--	(5.8)	一部区外
4	10.30	--	--	--	--	"
5	10.10	--	--	16.0	4.6	部分の換出
6	10.20	--	--	--	4.5	一部区外
7	10.24	--	--	--	(6.9)	"
8	10.16	--	(長方形)	(8.2)	6.1	部分の換出
9	10.07	--	台形	--	8.4	"
10	10.13	--	--	--	(7.7)	一部区外
11	10.15	--	--	--	--	"
12	10.10	--	--	--	--	"
13	10.14	--	--	--	--	"

第11表 1区水田計測表 4

瀬名遺跡 1区 28層水田(時期 弥生時代中期後葉)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路SR1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の変化	北東から南西に向け緩やかに低くなる傾斜面。平均10cm/10mの傾斜。
	③ 水田の範囲と面積	流路SR1-01を除く調査区のはほぼ全域。約450㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	暗褐色砂層で被覆される。
	⑤ 水田土壌	有機質を含む暗褐色土。よく攪拌されている。厚さ10~20cmを測る。
	⑥ イネのプラントオパール	400個/E(E11) 北壁では検出されず。
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	青色礫層(29層)、所によって暗褐色あるいは暗青色シルト層(28層と29層の間層)。
	⑧ 畦畔の規模	大きなもの2本は、水路SD12801の堤防と考えられ、上端幅約60cm前後、下端幅約100cm前後、高さ15~20cmを測る。小さなものは、上端幅約25~30cm、下端幅約30~35cmを測る。
	⑨ 畦畔の構造	盛土だけによる畦畔のみ。
	⑩ 水田区画の方法	東西方向および南北方向にほぼ規則的な格子目状の水田区画。
	⑪ 水田区画の形	長方形あるいは正方形で、南北を長辺、東西を短辺とするものが多い。
	⑫ 枚数と面積	78枚。うち面積の推定可能なもの35枚の1枚あたりの平均面積は4.09㎡。最大は7.5㎡、最小は0.9㎡を測る。
	⑬ 田面の状態	後世の流路の氾濫による破壊を受けている。
用排水の状態	⑭ 水源	SR1-01と推定できる。
	⑮ 自然流路	SR1-01と推定できる。
	⑯ 水路	SD12801。両側に畦畔を兼ねた堤を伴う。
	⑰ 水口	50ヶ所で確認。東西方向に造成された小さな畦には一様に認められる。
遺物	⑱ 遺物の種類	水田面より、弥生時代中期後葉(長床式併行)と思われる査出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	弥生時代中期後葉と思われる査。
	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の16層水田に相当すると思われる。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 
	(説明)	27層暗褐色砂層によりバックされており、畦畔の高まりも比較的明確に検出することができた。 格子目状の小さな区画を造る畦畔には、水口も一様に認められる。また、土壌も良く攪拌されており、水田面として認定できる。

第12表 1区水田観察表1

瀬名遺跡 1区 22層水田（時期 弥生時代終末～古墳時代前期）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路S R1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の変化	東北東から西南西に向け緩やかに低くなる傾斜面。南北に走る畦畔S K12201の東と西では約20cmの比高差がある。平均14cm/10mの傾斜。
	③ 水田の範囲と面積	流路S R1-01を除く調査区のほぼ全域。約710㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	植物遺体の有機質を多く含む黒褐色粘土あるいは黒泥で被覆される。
	⑤ 水田土壌	植物遺体を若干含む灰茶褐色粘土（2～3cmの礫を部分的に含む）。厚さ20cm前後を測るが、調査区西側では40～50cmと厚くなる。
	⑥ イネのプラントオパール	1,900個/ℓ（E11） 3,500個/ℓ、900個/ℓ（G9）
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	青灰色粘質砂層（22層と23層の間層）、所によって直接暗褐色粘質土層（23層）。
	⑧ 畦畔の規模	大きなものは、上端幅90cm前後、下端幅180cm前後、高さ10cm前後を測り、東西方向に1本、南北方向に3本。小さなものは、上端幅25～30cm、下端幅35～40cmを測る。
	⑨ 畦畔の構造	大きなものからは、杭・横板ともに多数出土。 小さなものは盛土だけによる畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大きな区画の内部を細かく区画した水田。
	⑪ 水田区画の形	小さな区画は、正方形あるいは長方形で方向は一定しない。
	⑫ 枚数と面積	105枚。うち面積の推定可能なもの65枚の1枚あたりの平均面積は4.66㎡。ただし、5㎡以下のものが40枚で、最大は10㎡を測る。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	一部の水田跡は、後世の自然流路によって破壊されている。
	⑭ 水源	S R1-01と推定される。
	⑮ 自然流路	S R1-01と推定される。
	⑯ 水路	堤を兼ねている畦畔S K12205とS K12206の間に流路S D12201が検出された。
遺物	⑰ 水口	25ヶ所で確認。特に、調査区南西部の水田域では南北方向の畦畔が切断されるものが集中している。
	⑱ 遺物の種類	土器片多数、木製品多数出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	畦畔の芯材に伴う弥生後期末の土器あるいは古式土器。
	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の12層水田に相当すると思われる。全調査区に広がる杭列水田の一部か。
その他	㉑ 自然科学的分析	イネ科花粉中イネ属30%以上。 他の層と異なり、好止水性種の佳産が多産する。
	⑳ 水田遺構としての認定根拠	（模式図）
（説明）		プラントオパールの数値も高く、大きな畦畔には多くの杭が打たれ横板を伴う。水田跡として確実に認定できる。

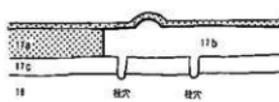
第13表 1区水田観察表2

瀬名遺跡 1区 19層水田(時期 平安時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路S R1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の变化	北東から南西に向け緩やかに低くなる傾斜面。平均5cm/10mの傾斜。
	③ 水田の範囲と面積	流路S R1-01を除く調査区全域。約810㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	3m程度の礫を少量含む青砂層(18層)で被覆される。
	⑤ 水田土壌	淡茶褐色粘土。厚さ10cm前後を測る。
	⑥ イネのプラントオパール	900個/g (E11)
	⑦ 直下の層の土壌	灰色砂質粘土層(20層)。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	大きなものと小さなものが残存。大きなものは、上端幅40cm前後、下端幅100cm前後、高さ8cm前後を測り、小さなものは、上端幅約25~30cm前後、下端幅約40~45cm前後を測る。
	⑨ 畦畔の構造	盛土だけによる畦畔のみ。
	⑩ 水田区画の方法	大きな区画の内部を細かく区画した水田。大きな畦畔のうち、東西方向のS K11901は、正方位の東から約39°北へ傾き、その位置と方向から条里型地割に対応するものと考えられる。
	⑪ 水田区画の形	概ね長方形だが、流路S R1-01沿いでは河道の制約を受け形を崩している。また、規模も小さい。
	⑫ 枚数と面積	88枚。うち面積の推定可能なものは58枚で、1枚あたりの平均面積は約5.26㎡。ただし、5㎡未満のものが半数以上で、10㎡以上のものは6枚しかない。最大は17.8㎡を測る。
⑬ 田面の状態	足跡状の窪みが畦畔上や田面に多くみられる。また、一部に洪水の流水痕跡がみられる。	
用排水の状態	⑭ 水源	S R1-10と推定される。ただし、調査区北西域ではさらに北西の水源も考えられる。
	⑮ 自然流路	S R1-10と推定される。ただし、調査区北西域ではさらに北西の水源も考えられる。
	⑯ 水路	検出できず。
	⑰ 水口	45ヶ所で確認。交差する部分が切断されているものも目立ち、一定の方向性等はわからない。水利調節及び田面の浸食防止用の自然石が置かれている水口が1ヶ所ある。
遺物	⑱ 遺物の種類	灰釉陶器破片少量出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	年代決定できるような遺物はない。17層・20層の年代観による。
	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の8層水田に相当すると思われる。瀬名遺跡全体に広がった条里型地割による水田域か。S K11901は、2/3区の大きな畦畔からの延長と考えられる。坪界線か。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 
		(説明) 青砂層でバックされ、畦畔は高さはないもののしっかりと残存しており、水田面として認定できる。

第14表 1区水田観察表3

瀬名遺跡 1区 17b層水田(時期 平安時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路S R1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の変化	北北東から南南西に向け緩やかに低くなる傾斜地。平均5cm/10mの傾斜。
	③ 水田の範囲と面積	流路S R1-01及び17b層の存在しない調査区北西域を除く範囲。約560㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	青砂層で被覆される(ただし流路S R1-01付近は茶褐色砂礫層)
	⑤ 水田土壌	茶褐色粘土 厚さ15~20cmを測るが、一部厚みのある部分もある。
	⑥ イネのプラントオパール	2,000個/8(E11)
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	青砂層(18層)、淡茶褐色粘土層(19層)
	⑧ 畦畔の規模	上端幅40~50cm、下端幅70~80cm、高さ3~5cmの比較的大きなものと、上端幅20~30cm、下端幅40~60cm、高さ2cm程の小さなものがある。
	⑨ 畦畔の構造	盛土だけによる畦畔のみ。
	⑩ 水田区画の方法	小さな区画の水田が多いが、40㎡前後を測るものもあり一定しない。
	⑪ 水田区画の形	一定しない。S R1-01に近い部分に変形。規模は大きくなっている。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	29枚。うち面積の推定可能なもの13枚。1枚あたりの平均面積は15.25㎡で、最大は37.2㎡、最小は1.9㎡を測る。
	⑬ 田面の状態	調査区中央部には若干の足跡状の窪みあり。
	⑭ 水源	S R1-01と推定される。
遺物	⑮ 自然流路	S R1-01と推定される。
	⑯ 水路	水田と流路S R1-01の境界線上を北から南へ流れる水路S D117b01。上端幅100cm前後、下端幅50cm前後を測り、南へ行くくとY字状に分流する。洪水で一部決壊。
	⑰ 水口	16ヶ所で確認された。水利調整及び田面の侵食防止の為と考えられる個平な自然石が置かれている水口が2ヶ所ある。
年代観	⑱ 遺物の種類	耕作土中より土師器丸底甕破片(折戸53号窯期併行)・緑釉陶器出土。
	⑲ 年代推定の根拠	折戸53号窯期併行と考えられる土師器丸底甕破片。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の6層水田に相当すると思われる。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 試掘時には確認されなかった層で、流路S R1-01付近および17a層の存在する北西域を除く部分で検出された。薄い青砂層でバックされ、畦畔の高まりも認定できた。

第15表 1区水田観察表4

瀬名遺跡 1区 16層水田(時期 平安時代後期~中世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路SR1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の変化	北東から南西に向け緩やかに低くなる傾斜面。平均12cm/10mの傾斜。
	③ 水田の範囲と面積	西半域約450㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	青砂層で被覆される。
	⑤ 水田土壌	暗褐色粘土。 厚さ10~20cmを測る。
	⑥ イネのプラントオーバー	400粒/8(E11) 800粒/8(G9)
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	暗褐色砂礫層(17a層)青砂層(18層) 一部では、17b層水田土壌が連続している。
	⑧ 畦畔の規模	小さな畦畔のみ。上端幅約25~30cm、下端幅約45~50cm、高さ2~7cmを測る。
	⑨ 畦畔の構造	簡単な盛土だけによる畦畔。 畦畔SK11601とSK11602の交差付近で杭5本出土。
	⑩ 水田区画の方法	水田1枚あたりの面積が狭い小さな区画の水田。
	⑪ 水田区画の形	東西方向に長辺、南北方向に短辺をもつ長方形のものが多い。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	29枚。うち面積が求められる7枚の1枚あたりの平均面積は約10.92㎡で、最大は18.5㎡、最小は6.2㎡を測る。
	⑬ 田面の状態	整立った特徴はなし。
	⑭ 田面の種類	田面より龍泉窯系の青磁片、耕作土中より猿投窯編年折戸53窯期と考えられる灰釉陶器出土。
年代観	⑮ 年代推定の根拠	猿投窯編年折戸53窯期と考えられる灰釉陶器。
	⑯ 隣接区との対応関係	2/3区の6層水田に相当すると思われる。
その他	⑰ 自然科学的分析	13層水田から検出された立木と思われる自然木の根が及んでおり、畦畔SK11601とSK11602の交差部に位置する。また、その東側から同様の木が3本見つかる。
遺構確認面とその図	⑱ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 調査区の南西域では、畦畔の高まりも比較的明白で、その交差部付近からは杭も数本出土している。しかし、北東域については畦畔も不明確ではっきりとした区画は認定できない。

第16表 1区水田観察表5

瀬名遺跡 1区 13層水田(時期 中世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	流路 S R1-01 の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の变化	北東から南西に向け緩やかに低くなる傾斜面。平均10cm/10mの傾斜。北から南へ低くなる棚田の様相も見られる。
	③ 水田の範囲と面積	流路 S R1-01 を除く調査区ほぼ全域。面積約960㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	黒褐色礫層及び青砂層で被覆される。
	⑤ 水田土壌	青灰色粘土。厚さ平均20~30cmを測るが、10cm前後の薄い部分、40cm前後の厚い部分もある。
	⑥ イネのプラントオーバー	2,800個/区、900個/区 (E11)。
	⑦ 直下の層の土壌	暗褐色砂質粘土層 (14層) 及び青砂層 (15層)、または16層水田土壌。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	南北方向 6本、東西方向 4本。上端幅30cm前後、下端幅50~100cm、高さ 2~10cmを測る。東半の方が大きい。
	⑨ 畦畔の構造	南北方向の畦畔 S K11306 と S K11306 から枕 3本出土。全体は盛土のみによるもの。
	⑩ 水田区画の方法	比較的大きな区画のみで、細分はされない。
	⑪ 水田区画の形	一部を除きほぼ方形と推定される。三角形のものもある。
	⑫ 枚数と面積	21枚。うち面積の求められるもの4枚の1枚あたりの平均面積は約54.18㎡で、最大は68.3㎡を測る。
⑬ 田面の状態	明確な足跡と認定できないが凹凸が目立つ。	
用排水の状態	⑭ 水源	S R1-01 と推定される。
	⑮ 自然流路	S R1-01 と推定される。
	⑯ 水路	南北に平行に敷造されている畦畔 S K11306 と S K11305 の間は、幅が約90cmと狭く明確な凹みが確認されなかったものの、水路であった可能性も考えられる。
	⑰ 水口	5ヶ所を確認。地形から考えて、北北東より南南西への取水関係が推定される。
遺物	⑱ 遺物の種類	土器片 9点。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	年代決定できるような遺物はない。下層16層水田の年代観による。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	立木と思われる自然木の根が畦畔 S K11304 と S K11310 の交差部付近で2ヶ所検出された。イネ科花粉中のイネ属30%以上。
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 黒褐色礫層及び青砂層でバックされており、部分的には畦畔としての高まりを明確に捉えることができる。足跡状の窪みも見られ、水田面として認定できる。

第17表 1区水田観察表 6

(1区)

瀬名遺跡 1区 10層水田(時期 近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	調査区西半域。流路SR1-01の西岸に広がる自然堤防から後背低地にかけての土地。
	② 地形面の変化	北東から南西に向け緩やかに低くなり、水田は種田の様相を呈している。北側部分では、30cm/10mの傾斜をもつ。
	③ 水田の範囲と面積	西半域約730㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	青灰色砂層及び茶褐色砂層(礫混じり)で被覆される。
	⑤ 水田土壌	青灰色粘土。 よく攪拌されている。厚さ20~30cmを測る。
	⑥ イネのプラントオーバー	400個/区(E11) 1,400個/区(G9)
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	黒褐色礫層(11層) 青砂層(12層)
	⑧ 畦畔の規模	南北方向4本、東西方向3本。上端幅60cm前後、下端幅180cm前後、高さ1~12cmを測る。
	⑨ 畦畔の構造	調査区を南北に貫くSK11003の南端部西側のみに杭列を伴う。杭は20本出土。その他は、盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	比較的大きな区画で、細分されていない。北側の区画から南に行くにしたがい、10cm・15cmといった比交差をもつ種田の状態になっている。
	⑪ 水田区画の形	畦畔が洪水流によって寸断されており、明確でない。
	⑫ 枚数と面積	13枚。面積は、どれも推定しがたい。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	洪水によって荒廃しているが、調査区西側SK11002・11007の交差部付近には十数個の足跡状の窪みが見られる。
	⑭ 水源	SR1-01と推定される。
	⑮ 自然流路	SR1-01と推定される。
	⑯ 水路	検出できず。
遺物の状況	⑰ 水口	検出できず。
	⑱ 遺物の種類	木製品(箸、曲げ物底板、黒漆碗破片)、土器片若干出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	年代決定できるような遺物はない。隣接区との対応関係による。
	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の3層水田に相当すると思われる。
その他	㉑ 自然科学的分析	イネ科花粉中のイネ属30%以上。
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 田面の荒廃が激しく、一部途中で高まりが切れてしまう畦畔もあるが、南北を貫通するSK11003は、杭列も見られ、はっきりと畦畔として認定できる。

第18表 1区水田観察表7

第2節. 2/3区において検出された遺構

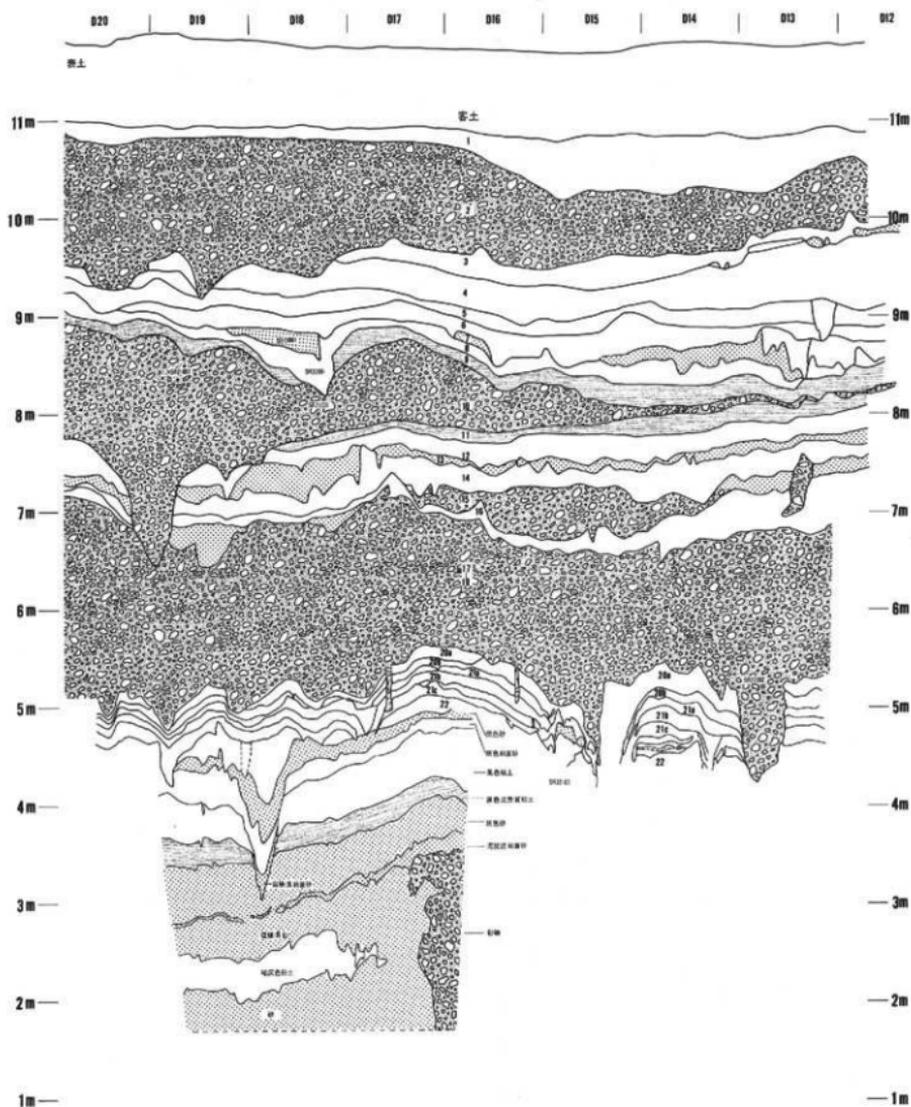
1. 基本層序

2/3区の基本的な土層は大別して22層である。現地表面（海拔約12m）から、縄文時代晩期頃と考えられているカワゴ平バミス・大沢スコリアを含む黒色粘土層までは約6mの深さであった。大きな洪水による堆積層（礫層）が調査区西側に厚く、微高地を形成する形をとるため、調査区東半部は西半部に比べ、小さな洪水の氾濫による砂層が数多くみられる。

水田跡7面、その他の遺構が3面（自然堤防上土器集中地点、流路と堰跡、溝と流路及び堰・杭列が各1面ずつ）、計10面の調査が実施された。

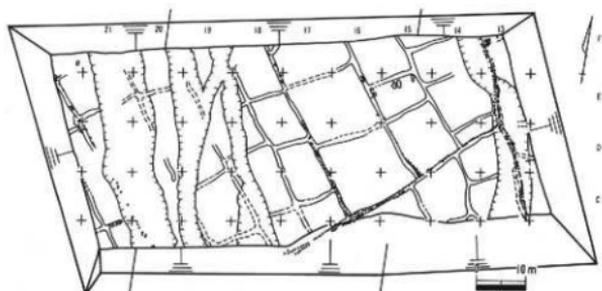
層序	土色および土質	観 察	イネのプラントオーバー B14, B18, E22 (単位は 個/㎡)	遺 構	年 代 観
客 土		表土(宅地)			
1 層	灰褐色 粘土	耕作土の可能性あり			
2 層	砂礫	部分的に礫と砂の互層構造 礫径5~8cm			
3 層	暗褐色 粘土	耕作土 酸化鉄・酸化マンガンを含む	1300, 1400, 1500,	水田	近世~近代
4 層	黄褐色砂質粘土	部分的に上部に砂を含む 酸化鉄が発達 耕作土の可能性あり	1800, 900, 0 900, 900		
5 層	淡茶褐色 粘土	耕作土の可能性あり 上部が攪拌された状況	5000, 1000, 1900		
6 層	淡黄褐色 粘土	植物遺体を多く含む グリッド16列以東上部 に薄い黄褐色粘土層が存在	2900, 5000, 4500 1800, 2500, 2600	水田	平安後期
7 層	砂	東半部のみに存在 西半部は微高地			
8 層	灰褐色 粘土	耕作土 植物質含む	3000, 3000, 900 4400, 1700, 4500	水田	(古墳後期~奈良)
9 層	黒泥	調査区西半は粘土質強い 東側はど堆積厚い		流路、木材・杭列 土器集中地点	古墳中期
10 層	砂礫	調査区西半部は堆積が厚く、東側は堆積は薄い		流路、堰	古墳中期
11 層	黒泥	裏積質のラミナが数層にみられる			
12 層	黄褐色 粘土	耕作土	3800	水田(杭列)	弥生末~古墳前
13 層	砂	西側ほど堆積が厚くなり、下部に小礫を含む			
14 層	暗褐色 粘土	耕作土	5100, 3900 4800, 1900	水田	弥生後期
15 層	砂礫	東半部のみに存在			
16 a 層	茶褐色 粘土	耕作土	1900, 900	水田	弥生中期後葉
16 b 層	茶褐色 粘土	グリッド15列以東、間層に砂を挟み分層可能			
17 層					
18 層	砂礫	一部で礫・砂・礫に分層可能			
19 層					
20 層	灰褐色 粘土	耕作土	7800 2800	水田、流路、杭列	弥生中期
21 a 層	黒色 粘土	黒色が強い	1800		
21 b 層	黒色 粘土	上部より色が浅い 大沢類似スコリアを含む	0	流路、溝、堰	弥生中期前葉
21 c 層	黒色 粘土	大沢スコリア、カワゴ平バミスを含む	0		
22 層	青灰色 粘土				

第19表 2/3区土層観察表

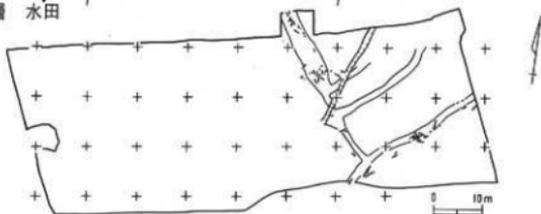


第43图 2/3区基本土层模式图 (水平1:500垂直1:50)

(2/3区)



3層 水田



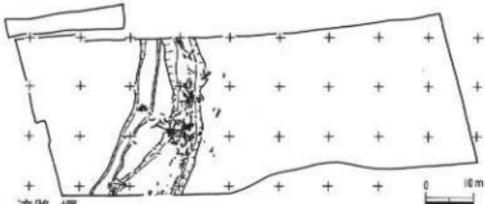
6層 水田



8層 水田



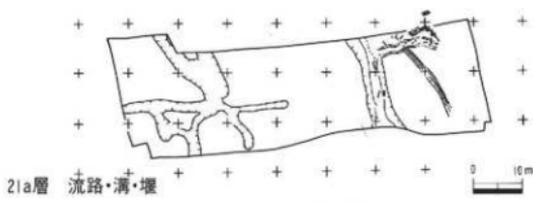
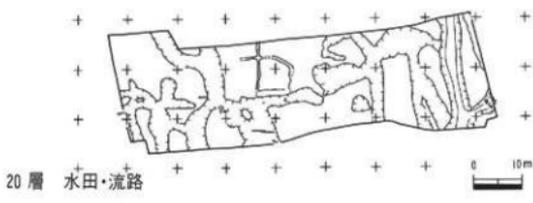
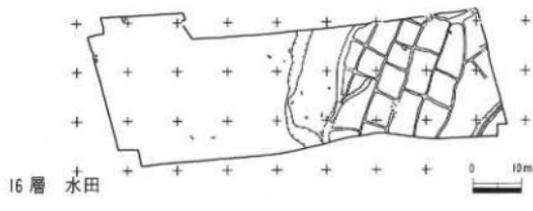
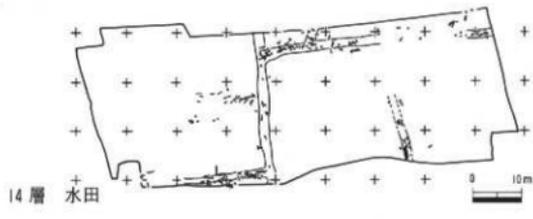
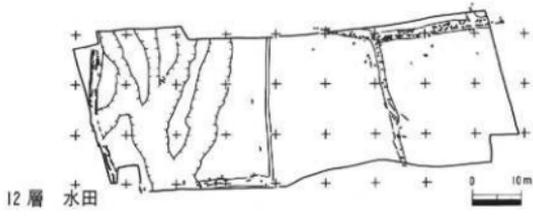
9層 流路・杭列・木材・土器集中



10層 流路・環

第44図 2/3区遺構実測図1

(2/3区)



第45図 2 / 3 区遺構実遷図 2

(2/3K)

2. 遺構の変遷

21a層上で検出された遺構 流路・溝・堰

弥生時代中期以前の遺構面であろう。この層下層より静岡平野という丸子式の段階（弥生時代中期前半）と考えられる条痕文系の土器片と打製石斧が出土している。

検出された遺構は、東西南北に走る自然流路と堰及び杭列、網代である。調査区の大半が19層の礫層を運んだ洪水流によって20層、21層が削りとられているため、遺構の全容、性格等をつかむのはむずかしい。

〈流路跡〉

(1) SR22103 [第46図]

南北方向の広く深い流路で、川幅約4.5m、深さ約80~100cm。南側に行くほど深くなるようで、北から南に向かって流れていたと考えられる。

(2) SR22101 [第46図, 図版58]

東西方向の流路で、北岸は調査区北側排水溝にかかり、川幅はわからない。SR22003から東へ枝分かれするような形で存在し、20層上の流路SR22001の下刻によって東への延長がわからなくなっている。流路の覆土は主に砂層で、その上を20層の灰褐色粘土が被覆している。

ちょうどSR22001の下刻にかかる部分（グリッドE14）には、堰とみられる杭列、網代破片が検出された。

(3) SR22102 [第46図, 図版57]

SR22101の覆土南岸に沿っており、SR22101の新しい段階の河道にあたるものと考えられる。川幅は約2m、深さは約25cmと浅い。深く掘り込まれた溝SD22101とつながっており、流路から南へと導水されていたことが想像される。

流路内、SR22101では堰のあった辺りから、河道に直交するような形で堰状の9本の杭列が検出された。

〈堰〉 [第47図, 図版58]

SR22101に直交するような方向で約4.5mにわたって検出された。合掌形に組まれた44本の杭に三段に横木が掛け渡されている。

網代

周辺から覆土中に浮いたような状況で網代と思われる破片が2個体みつきり、堰との関連が考えられる。

〈堰状杭列〉 [第47図, 図版57]

SR22102に直交するような方向で9本の杭が打たれている。残存状態は悪く細部の構造はわからないが、杭の打たれた角度（合掌形か）からも堰の可能性が高い。ここで流れを塞ぎ止めてSD22101へと水の方向を変えていたのであろう。

文様彫刻杭

杭の中には水平線と同心円状の文様が彫刻されているものが2本あり、何か特殊なものからの転用材と考えられる。

〈矢板状の木製品並列〉

SR22103内グリッドD15には、残存状態が悪いが少なくとも6枚の広葉樹の板材が並べられ、1本の丸太材が渡してあるような遺構があった。板材の方向は流路の方向と一致していた。流路底に横になっていたが、これももともとは流路に直交するような方向で打たれていた矢板列による堰の一部ではなかったのだろうか。

堰

〈溝SD22101〉 [第46図, 図版58]

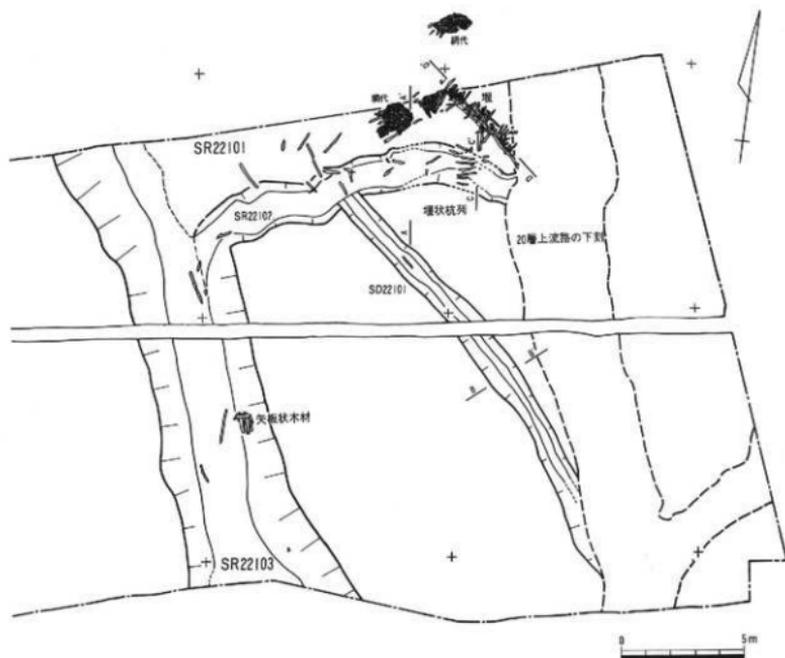
SR22102から南東方向に向けてつくられている。幅約1m、深さ約40cmで、底がていねいに掘り込まれている。溝の南への延長は20層上のSR22001の下刻によりわからなくなっている。

溝の底部のレベルが北から南にやや下がるため、水は北から南に向って流れていたことが考えられる。おそらくSR22102を前述の杭列によって塞ぎ止め、南の方向へと導水していたのであろう。

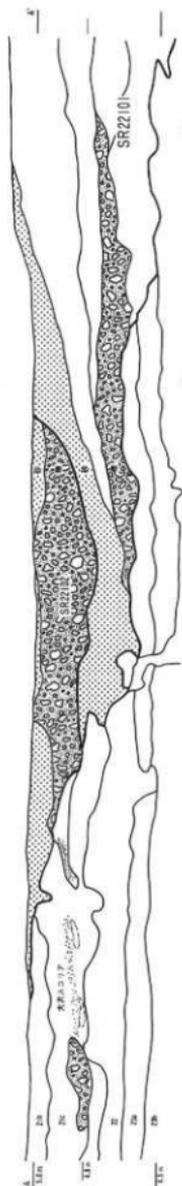
21a層の土壌からはイネのプラントオパールが検出されているものの、水田の区画らしきものは確認されなかった。しかし、SD22101の伸びる先にはいかなる遺構が存在したのだろうか。

導水路

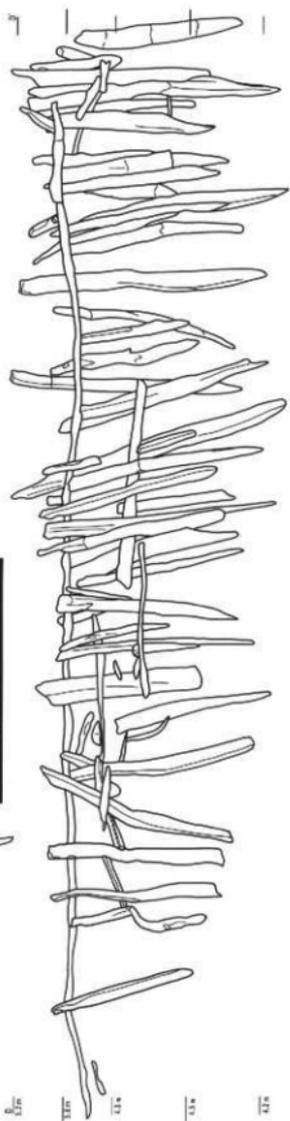
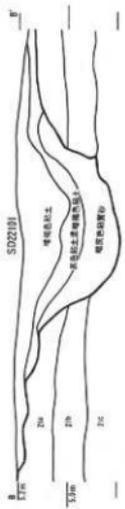
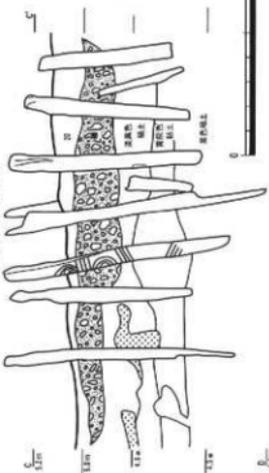
P・O



第46図 21a層上流路・溝・塚状杭列実測図



彫刻のある杭



第47図 21a層上流路・溝・堰杭列断面図

20層上で検出された遺構 水田跡・流路・環状杭列

20層は21a層直上に堆積した厚さ10~15cmの粘土層である。調査区のほとんどが19層礫層を運んだ洪水流によって浸食されており、特に21a層上で流路、落ち込みのあった部分は深く浸食されていた。遺構は、杭列の打たれた流路と水田跡の一部が検出された。

〈水田跡〉 [第48図、図版54]

調査区中央部のグリッドE18付近に直交する2本の畦畔 (SK22001、SK22002) と、調査区東北隅に前の2本の畦畔に比べて比較的大きな畦畔 (SK22003) が認められた。

田面の残存状態は悪く、完全な姿での水田の形態はとどめないが、土壌からイネのプラントオパールが非常に高い値 (2/3区で最高値) で検出されている。

P. O. 高値

(1) 畦畔SK22001

グリッド18列を南北方向に走る上端幅約10cm、下端幅約50cm、高さ約5cmの比較的小さな盛土畦畔である。

(2) 畦畔SK22002

グリッドE18を東西方向に走り、SK22001と直交する。上端幅約10cm、下端幅約30~60cm、高さ約4cmの小さな盛土畦畔で、グリッドE17、南北トレンチを越えた辺りから幅が広がっている。

畦畔の交差

SK22002は東にいくにつれ次第に南のほうに曲がっているようにみえる。もし、この部分が南北方向の畦畔としてとらえられるならば、SK22001とあわせて、一辺約6.5mの水田区画が想定できる。

(3) 畦畔SK22003 [図版56]

グリッド14列を南北に走り、他の2本の畦畔に比べて大型の盛土畦畔である。上端幅が約85cm、畦畔の高さが約10cm。下端幅については東側が浸食されているため不明確だが、1m以上あることは確実である。

大規模畦畔

なお、SK22001・SK22002周辺より多数の凸凹が検出されたが、足跡とは明確に断定はできなかった。

遺物については、土壌中からは土器は出土せず、グリッドC18より建築材と思われる大型の木製品のみ見つかったのみである。遺構面を深く抉っている洪水流の痕跡からは、数点の土器片、打製石斧が出土している。土器片の中には条痕文系の土器や縄文土器があった。

条痕文土器

〈流路跡〉 [図版55]

20層表面には、洪水流によって抉られた大きな浸食痕跡が多数残っているが、その中でも調査区東側の浸食痕跡は他のものに比べてたいへん深く、もともとこの辺りには自然流路 (SR22001) が存在していたことが考えられる。

調査区東端部には南北方向の自然流路、調査区中央部から西へかけては水田地帯、といった20層当時の景観が想像される。

なお、グリッドD19では洪水の浸食痕跡の脇から立木の根株が見つかった。

立木の根株

(1) SR22001

グリッド14列を南北に流れる流路で、川幅約4m、深さ約1.2mを測る。兩岸の壁には、水流が激しかったことを物語るように、多数の浸食痕がみられた。西岸の方が立ち上がり急で、東岸は緩やかである。

(2) SR22002

グリッドD14付近でSR22001と合流する流路で、川幅約2.5m、深さ約0.9mを測る。調査

区東南隅に検出されたため、全体的な特徴はつかみにくい。SR22002と同様に、兩岸壁面に浸食による穴が多く空き、水流の激しさを物語っている。

〈堰状杭列〉 [第49図, 図版55]

グリッドD13付近の流路内部から、河道と直交した状態で東西2列の杭列が検出された。

(1) SX22101

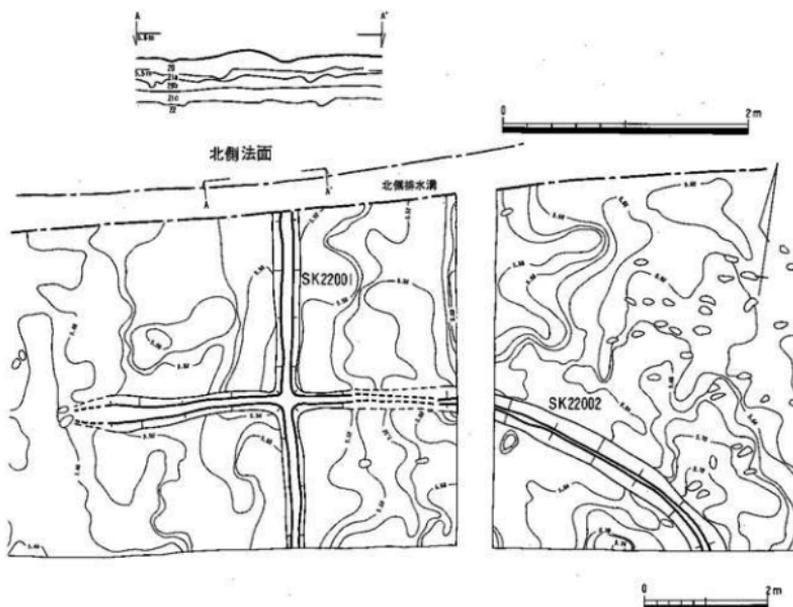
西側の杭列。杭が7本、垂直方向よりやや東側に傾いて打たれている。7本のうち1本は広葉樹で、残り6本は針葉樹である。川底から杭の頭までの高さは80~90cmで、比較的しっかりと打たれている。

(2) SX22102

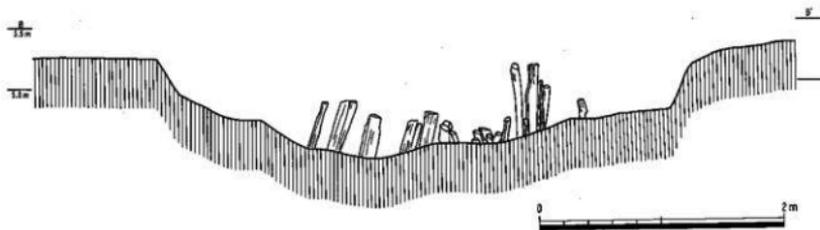
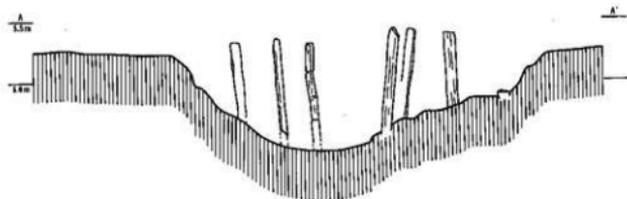
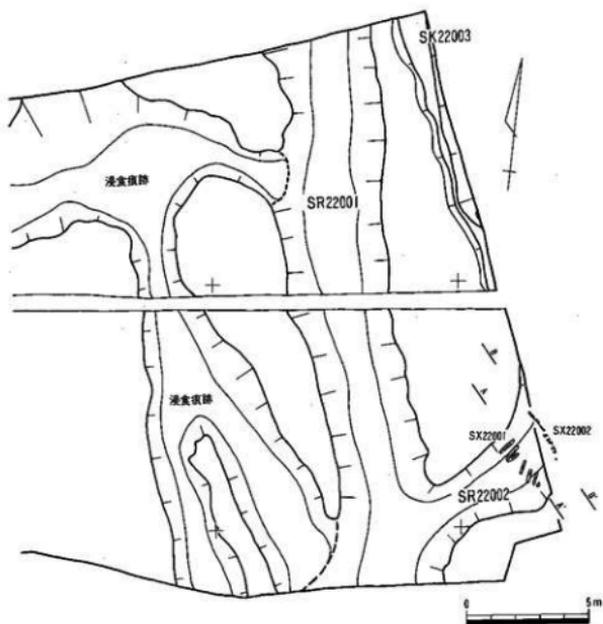
東側の杭列は、東側排水溝外の壁面から検出され、保存状態はあまりよくない。検出された杭は計16本で、広葉樹と針葉樹が半々である。若干西に傾いて打たれているようであった。

SX22101とSX22102の間隔は1~1.2mでほぼ平行している。もしこの2列が一對のものになるとすると、「ハの字」形で打たれていたことになる。残存状態が悪く細部の構造はわからないが、これらも流路を塞ぎ止める堰、しがらみの一部であったのではないだろうか。

環しがらみ



第48図 20層水田実測図



第49圖 20層上流路内杭列実測圖

16層上で検出された遺構 水田跡

- 17～19層 厚い砂礫層(17～19層)を堆積させた大きな洪水の後、10cmから40cm程の厚さで16層粘土層が堆積している。厚い部分では5～10cmの砂層を間層として挟むところもあり、上層を16a層、下層を16b層として細分した。遺構は16a層にあった(以下16層上と呼ぶ)。16層上では、下層の17～19層の堆積の高まりによって調査区西側は微高地になっている。水田跡は調査区東半部、微高地から低くなっていく部分に広がっている。全面、15層の砂層によって被覆されており、畦畔、水田面とも良好な形で検出された。

〈水田跡〉〔第50図、図版50・51〕

- 小規模区画 大規模な畦畔によって囲まれた内を東西南北に走る小規模な畦畔によって細かく区画された水田区画である。

水田面は北隅の標高7.24mを最高点とし、一番低い南端部で標高6.75mである。その間には6枚の水田が造成されており、一枚毎の平均レベル差は約8cmである。東西方向については西側の微高地部分が一番高く、東にいくにつれて順次低くなる形で造営されている。一番高いレベルで西端の7.38m、一番低いレベルで東端の6.97mである。その間に5～6枚の水田が造成されており、一枚の水田面の平均レベル差は約7cmである。

16層水田は調査区の東半部についてのみ遺構が検出されたが、調査区西側は下層の19層礫層が大きく盛り上がる影響で、微高地を形成しているため、この水田はこの地形に沿って低地にあたる東側部分に造成されたものであることが考えられる。

水田区画の形は南北に長い長方形が多く、小規模な畦畔は、南北方向のものがみな交差部を直線的に貫いているのに対して、東西方向のものは交差部で位置がずれているものが多い。南北方向を基軸に区画をつくっていったことを示しているのであろうか。

区画基軸

(1) 大規模な畦畔SK21601

水田区画の西端を南北方向に走る。下端幅約1.2m、高さ約25cmの盛土畦畔である。東側の小規模な区画の畦畔のように直線的ではなく、地形に応じて曲線的になっているようであった。西側の微高地と東側の水田域を画する、つまりこの水田域の西の限界を示す性格のものではないだろうか。

水田域の堺

(2) 大規模な畦畔SK21602

調査区東北隅に一部分のみ確認された東西方向の盛土畦畔である。下端幅約1.2m、高さ約15cmの規模で、ST4～6とST8～10の北側で途切れ、南北方向の3本の畦畔に枝分かれするようなかたちでつながっている。

(3) 水口〔第51図〕

ST16とST20の間の南北方向の畦畔、ST12とST13の間の東西方向の畦畔の交差部では、盛土が切断されたような状況であった。また、ST11とST12の間の東西方向の畦畔でも盛土が途切れたような状況で、その南側には砂の詰まった落ち込みがみられた。これらは水口であったことが考えられる。畦畔脇の落ち込みもおそらく水口を越えた水が水田面を浸食してきたのであろう。落ち込みの方向から推測すると、水田面の水は北西方向から流れていたようである。他にも、数ヶ所で畦畔の盛土の低くなっている部分があったが、水口であるかははっきりしなかった。

水口陥没食

(4) 水田面の足跡〔第51図、図版52〕

足跡は特にST1～3とST11～13・16・17・20・21にみられ、大規模な畦畔SK21602が枝分かれしたような南北方向の畦畔に囲まれたST4～10にはほとんど確認できなかった。大

きな地形の違いがみられないことから、同じ水田域にありながらも区画のブロック単位のようなものが存在することを想定できるのであろうか。

また、ST11~13・16・17・20・21に残る足跡には、歩行の連続が追いかけられるものがあつた。大規模な畦畔SK21601からST 8~10とST11~15を画する畦畔の間をほぼ畦畔に平行して東西方向に、一定間隔で歩行している状況がとらえられた。それ以外の足跡は、前述の足跡とほぼ同じ方向に集中するか、畦畔脇に沿っているようにみえる。

一定間隔

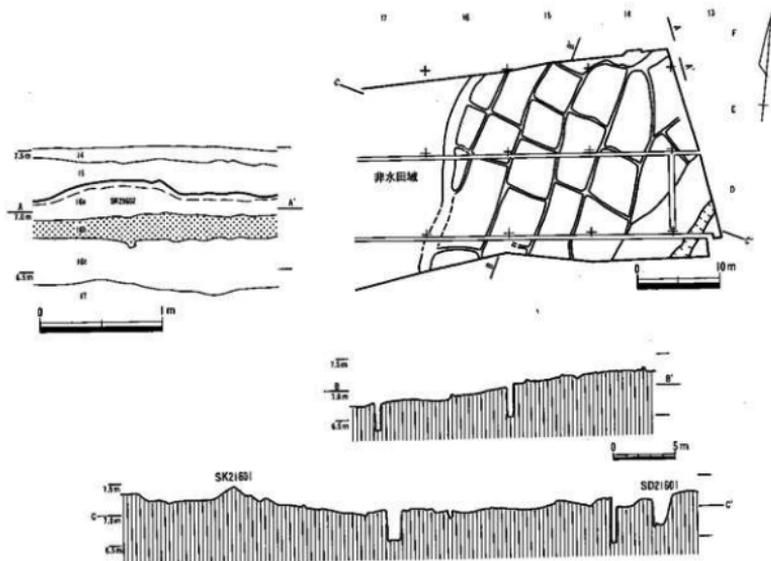
これらの足跡により復元される埋没直前に行なわれていた農作業とはどのようなものであつただろうか。どのような作業であつたにせよ、水田面にはイネが東西方向に一定間隔で存在していたことが推測できるのではないだろうか。

イネの存在

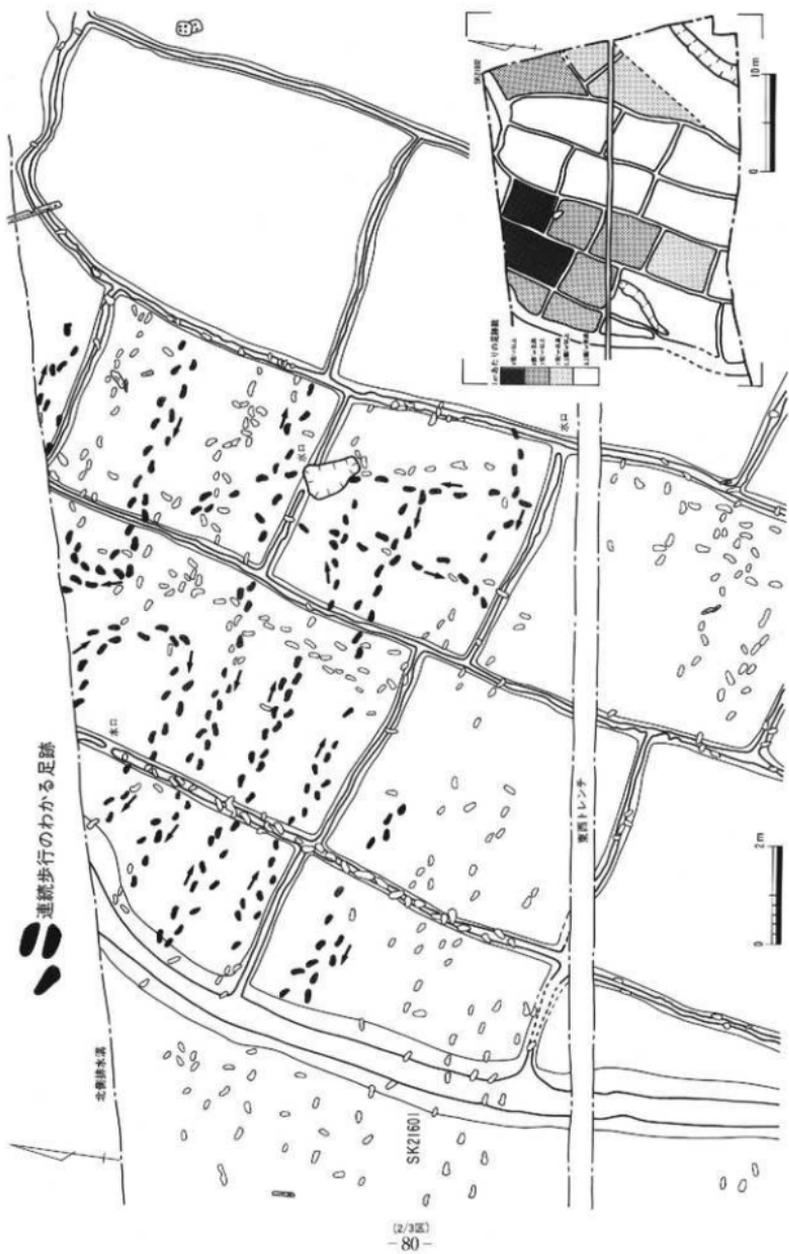
(5) 溝SD21601 [第52図, 図版52・53]

水田区画から離れて調査区東南端に検出された。水田区画のある部分より若干高い微高地である。上層15層の段階の流水で溝の上面は削られ、幅は広くなつてしまっているが、本来の幅は約70cm程、深さ約30~50cm、底はていねいに成形されていた。溝の縁には川原石を集中して埋め込んだような部分があつた。地形の変化から水田区画とのつながりがはっきりしないが、水路の可能性が考えられる。なお、この溝の縁からは壺の口縁部のみが1個体出土している。弥生時代中期後葉(有東式)あたりのスタイルを示していた。

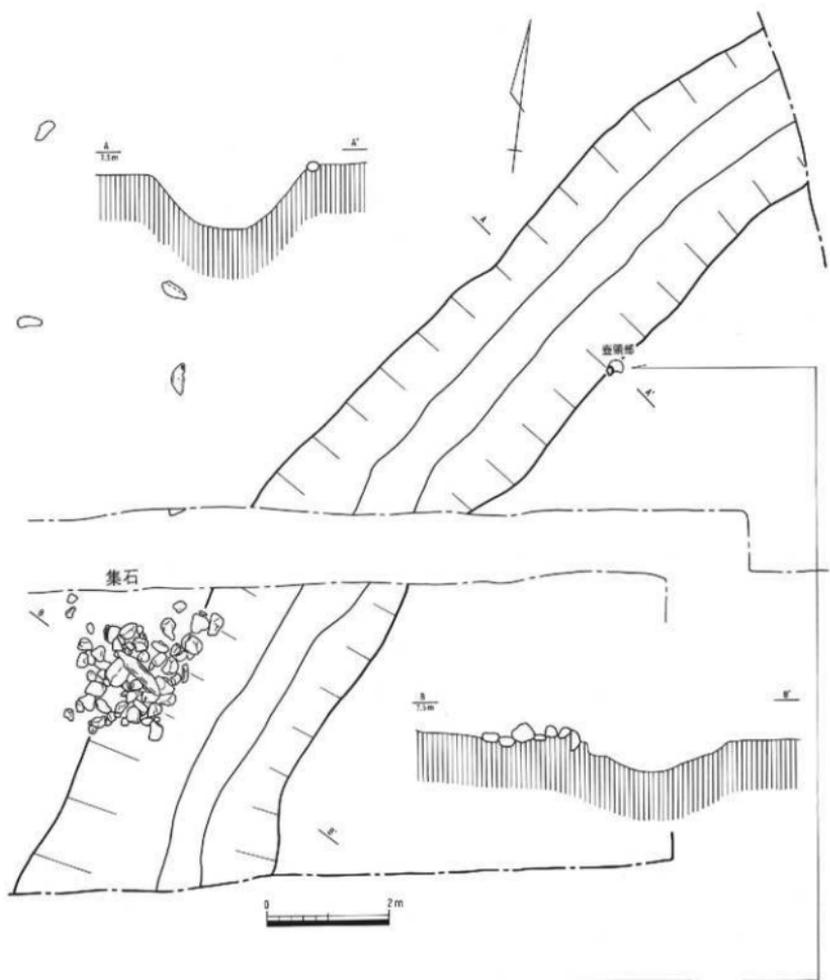
水路



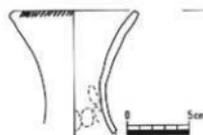
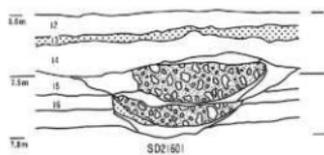
第50図 16層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:80)



第51図 16層水田上足跡実測図



南側排水溝法面



第52図 16層水田SD21601実測図

14層上で検出された遺構 水田跡

14層は下層の15層砂層、上層の13層砂層とに挟まれる形で存在し、度重なる洪水と洪水の間の一時期であることがわかる。厚さ20cm程の粘土層である。

〈水田跡〉

13 層

14層水田を被覆する上層の13層砂層は平均10cm程で、場所によってはかなり薄くなったりが存在しなかったりする箇所もある。これは、12層の水田造営時にこの14層にまで攪拌の影響が及び、その結果、この砂層が上層に巻き込まれたものとも考えられる。また、調査区西側ではその逆に砂から礫層に変化している箇所もみられ、洪水の勢いが強かったことが推測される。そのため、14層上部が削りこまれ、畦畔の検出状況も不明瞭な部分が多い。

洪水浸食

上層の踏襲 大規模畦畔

14層水田では東西方向2本、南北方向4本の計6本の大規模な畦畔が検出された。これらの畦畔はほぼ上層の12層水田に踏襲されていくようである。[第53図、図版44] この6本の畦畔について、その特徴を下記に列記する。

(1) SK21401 [第54図、図版44・45]

調査区の中央(グリッド18列)を南北に走る畦畔である。下端幅が約1m、高さ約20cmを測り、残存状態は良好であった。

(2) SK21402 [第54図、図版44・45]

調査区の東から西に向ってほぼ直線的に延び、SK21401に直交する。残念なことにグリッド16列以東は上面の12層水田の調査時に設定したトレンチによって攪乱され、盛土の高まりは検出できなかった。交差点を中心に1~2列、広葉樹の杭列が検出された。

交差点杭列

(3) SK21403

SK21401より西へ直交して延びる。上層の13層砂層が厚く堆積しており、洪水の流れが激しかったことが想像される。その結果、畦畔の頭がかなり削り取られ、高まりはとらえられない。交差点周辺に不規則だが2列の杭列が伴っていた。広葉樹材が使用されていた。

交差点杭列

(4) SK21404

SK21402から南へ直交して延びる。盛土の高まりは検出できず、部分的に、2列の広葉樹の杭列が検出された。土壌中より、田下駄や梯子をはじめ、多くの木製品が出土した。

部分的杭列

(5) SK21405

SK21403からほぼ直角に南へ延びる。検出されたのはわずか2mほどにすぎない。盛土の高まりは15cmほどあって明瞭である。

(6) SK21406

SK21402から北へ向って直角に延びる。上層の13層砂層が礫に変わっていく位置にあたり、14層水田を被覆した洪水の流れの最も強い部分にあたると思われる。畦畔の残存状態は悪く、西側の杭列と畦畔内に埋め込まれたと思われる木片等が検出されたにとどまった。

交差点杭列

畦畔の痕跡

なお、グリッドD18において、SK21401に直交するような方向で西へ伸びる木材の集中がみられた。これは、盛土は失われているが芯材が残って、ここに東西方向の畦畔があったことを示しているのではないだろうか。

〈列石遺構〉[図版48]

グリッドC17には、南北方向の列石遺構が検出された。全長約6m、幅30~40cmの間に多数の川原石が敷き込まれているような状況であった。部分的なので、SK21401とは平行になっているかは判断できない。石は水田面より若干低いレベルにあるようで、周囲に他の遺構は確認できなかったが、この部分には溝のようなものがあったのではなかろうか。

〈14層水田の杭列〉 [図版46]

14層水田の畦畔には、多くの杭が打たれているが、材質は前述のとおり、広葉樹材がほとんどで、14層以降多くの杉材の杭が出土する状況とは異なっている。土層の圧密の影響で曲がった杭もみられる。SK21401とSK21402の交差部分とSK21403において、広葉樹の杭材が非常に屈曲した状態で検出された。堆積層の境目毎に力がかかったようで、数箇所ですれたように折れ曲がっている。このような圧密杭は長崎遺跡でも報告されている。

広葉樹の杭

圧密杭

〈農具痕〉 [第55図, 図版47]

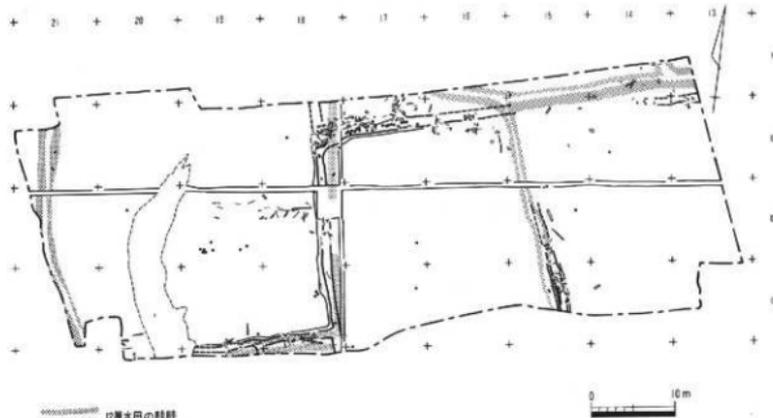
14層の水田面からは、足跡と共に農具の耕作痕跡が良好な形で検出された。調査区西側グリッドC19、D19あたりに集中してあり、形状は三日月形、または半月形を呈し、直線部分が10～15cm、深さは5cm前後で、中には13層の砂が入り込んでいた。直線部分は断面も平坦で、水田跡から約40～70°の角度をもっている。直線部分は刃の入った部分で、弧の部分は土を掘り起こし刃を抜いた部分ではないだろうか。

同様の農具については、これまでに藤枝市下藪田遺跡の平安時代の水田跡からのものが鋤の使用痕として報告されている。しかし、瀬名遺跡では、出土する農具は鋤ばかりである。

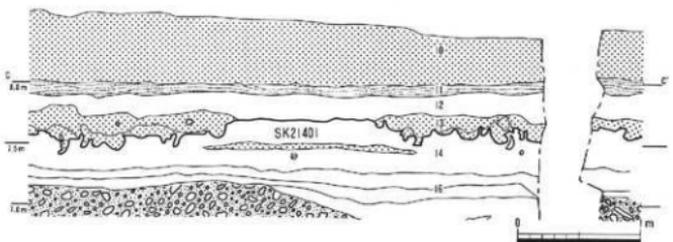
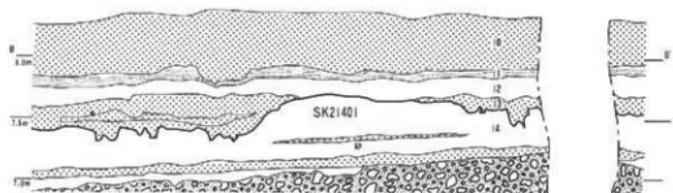
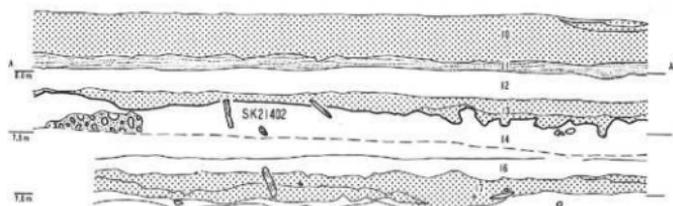
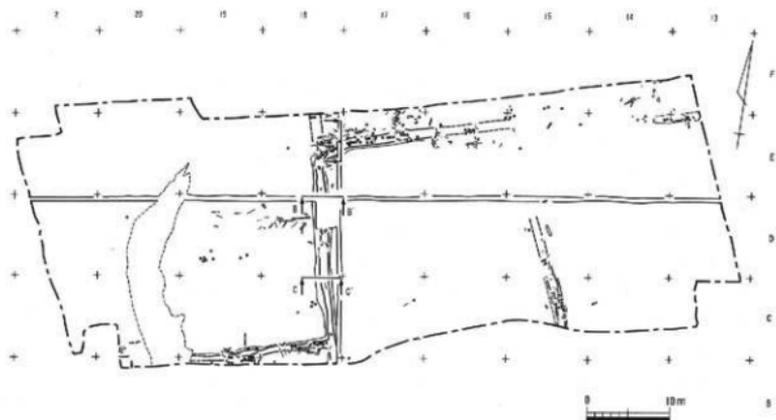
鋤か鋤か

〈出土遺物〉 [図版48・49]

前述したように、14層水田の畦畔に伴って、多数の田下駄や木製農具、建築部材が出土している。土器では、弥生時代後期でも前半の段階と考えられるものが含まれていた。



第53図 14層水田・12層水田区画踏襲状況図



第54图 14層水田畦畔断面图

(2/3区)



第55图 14層水田上 農具痕跡測図

- 12層上で検出された遺構 水田跡**
- 黒泥被覆** 12層は14層の水田が洪水で廃絶した後に堆積した粘土層で、下層には厚さ5cm程の13層砂層が存在し、上層は厚い黒泥層で覆われている。調査区西半は広く10層の段階からの流
- 洪水浸食** 路や洪水流によって下刻されている。
- 〈水田跡〉〔図版34〕**
- 大規模区画「杭列水田」** 12層上で検出された水田跡は、大規模な畦畔によって区画された水田跡で、畦畔にはい
- 田下駄多数** ずれも杭や横板が伴う。また、こぶし大の石を埋めて補強している部分もみられた。畦畔内には、それ以外にも田下駄、農具をはじめとして多種多様な木製品が埋め込まれていた。12層中だけでも出土した田下駄は50点近く、明確な数は6本であった。
- 大規模畦畔** 畦畔は東西方向に2本、南北方向に4本である。下記に個々の畦畔の特徴を列記する。
- (1) SK21201 [第57・58図, 図版35・38]
- 14層水田の畦畔SK21402をほぼ踏襲した位置にあり、調査区北側をやや湾曲しながら東西方向に延びている。下端幅約1m、高さ約30cm。畦畔には南北2列の杭列が伴い、南列は密集し、横板も伴っていた。多くの建築部材、埋石、また木製農具等が芯材とされていた。
- 南列密集** 特に、調査区東端グリッドF13からは大型の船材が検出された。
- 船材** (2) SK21202
- 14層水田のSK21404を踏襲しており、SK21201より南へほぼ直交した形で延びる。盛土の高まりは検出できず、盛土のあったと思われる位置に沿って、向き合った2列の杭列が疎らながらほぼ等間隔で打たれている。2列は断面がほぼ「八の字」形に向き合った形で打たれている。西側の杭列のほうがより太い杭が使用されていた。
- 等間隔2列八の字構造** (3) SK21203 [図版40]
- SK21201に対してT字形に交わり、北に延びる。調査区の北隅にあたるため、検出された畦畔は全長で2mほどである。14層水田では、この位置には畦畔は検出されていない。内部には倒れた矢板列、簾状遺構があり、堰を芯材として再利用した可能性もある。
- 堰材埋込** (4) SK21204 [第60図, 図版39]
- 調査区西端を湾曲しながら南北に走る。SK21201と同様に畦畔内部より多数の杭や木製品が出土している。盛土の高まりも明瞭だが、南へいくほど浸食を受け、残存状態は悪くなる。これも、14層水田ではこの位置には畦畔は検出されていない、踏襲されなかった畦畔である。杭は東西2列で、西列がより密集している。大型の芯材が埋め込まれていた。
- 大型芯材** (5) SK21205
- 調査区中央をほぼまっすぐ南北に延びる畦畔である。盛土の高まりは確認できず、8本の杭が西側一列にほぼ等間隔でならんでいる。14層水田のSK21401を踏襲した位置である。
- 等間隔1列** (6) SK21206
- 調査区南端、14層水田のSK21405を踏襲した位置であり、SK21205よりT字型に西へ延びる。畦畔内部からは杭や数多くの加工木片等が出土しているが、検出された盛土の高まりと杭列は若干ずれている。盛土がつくり直されたことを示しているのだろうか。
- 木通** 畦畔を横断するような形で、盛土の内部より組み合わせ式の木樁状の施設が検出された。以上、各畦畔の特徴について述べたが、畦畔の高まりと杭列が一部で一致していないこともあり、畦畔盛土を幾度かにわたって修復・移動したことが想像される。
- 盛土移動** 〈大型船材の出土〉[第58・59図, 図版36・37]
- 船材は2枚で、SK21201の盛土のほぼ中央の位置で、南側の杭列に沿っていた。畦畔構築

の際の敷板にされたのか、盛土の下層から上下に重なりあって出土した。

2枚とも、一方の面がていねいに割り買かれており、その割り買かれた面を裏にしてあった。正面、断面の形態から、これらが船材らしきことはすぐにわかった。

上になっていた船材は、一辺がはっきりした曲線を描くのに対して、もう一辺が緩やかな曲線を描く細長い三日月形をした板材で、長さ6 m 36cm、幅32cmである。

下になっていた船材は、一辺が直線であるのに対して他の一辺は緩やかにカーブし、先端が細くなるナイフ形をしている。長さ4 m 12cm、幅37cmである。

2枚とも、一方の側に一定間隔で長楕円形または長方形の小さなホゾ穴が空けられていた。これは、丸木舟ならばないもので、他の部材と組み合わせるために木の皮等を通したものと考えることができる。同じ割り船でも、なんらかの構造を持った船、いわゆる準構造船の部分なのではないだろうか。

準構造船の出土は、大阪府八尾市久宝寺遺跡をはじめ、静岡県でも葦山町山木遺跡などで知られるが、まだ全国で数例と少ない。しかし、それらは皆弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものとして報告されている。

なお、2枚は全体の規模・形態からホゾ穴の形態まで異なり、別個体の部分であることも考えられる。

船材の出土した畦畔内部からは田下駄や建築材等が埋め込まれるような形で多数出土している。盛土補強のため、転用されて芯材・敷板とされたのであろう。

〈木種状遺構〉 [第56図、図版41・48]

SK21206の盛土内に畦畔と直交するような方向で埋め込まれていた。

5枚の板材を細長い直方体の箱形に組み合わせている。底の部分の板材は長さ約120cm、幅約15cm程、襷状に割り買かれており、そこへ側板2枚をあてがい、蓋板2枚を被せている。畦畔の盛土を貫いて北から南へと通水させる導水管の役割をしていたのだろう。

〈水田の時期と廃絶状況〉 [図版41・42・43]

土壌中より出土した土器片の中には、S字状口縁をもつ台付き甕に復元できるものがあり、この水田が営まれた時期は古墳時代初頭あたりと推測される。

このような形態の杭列水田は瀬名遺跡の1区から10区までの全調査区で検出されている。この時期に広範囲にわたって画一的な水田が造営されていたことが窺える。なお、この12層は全面厚さ約30cm程の黒泥層によって被覆されていることから、水田が放棄された以後のある期間、湿原になっていたことが推測される。

畦畔敷板

ホゾ穴

準構造船

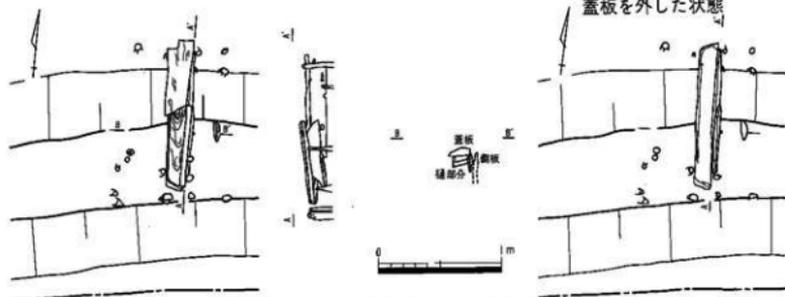
転用芯材

箱形

導水管

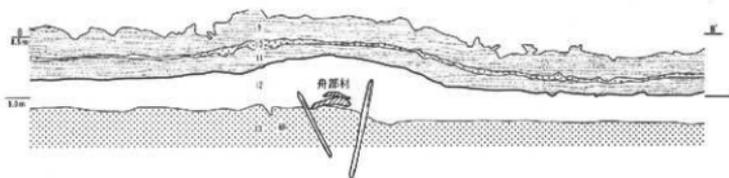
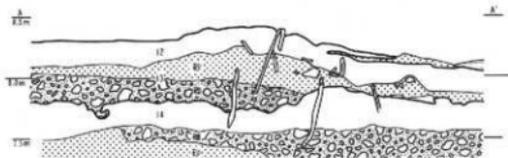
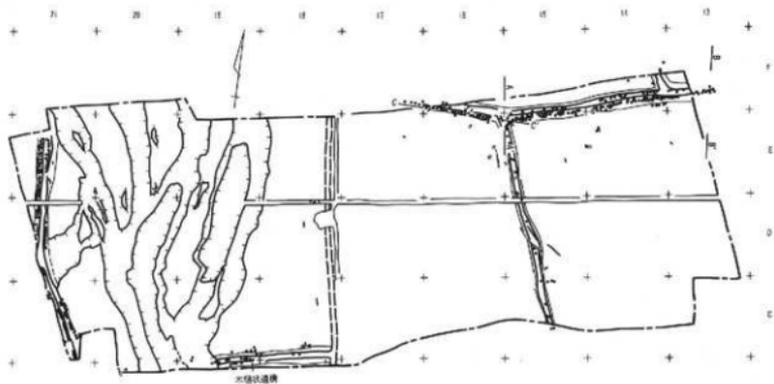
S字甕

湿原化

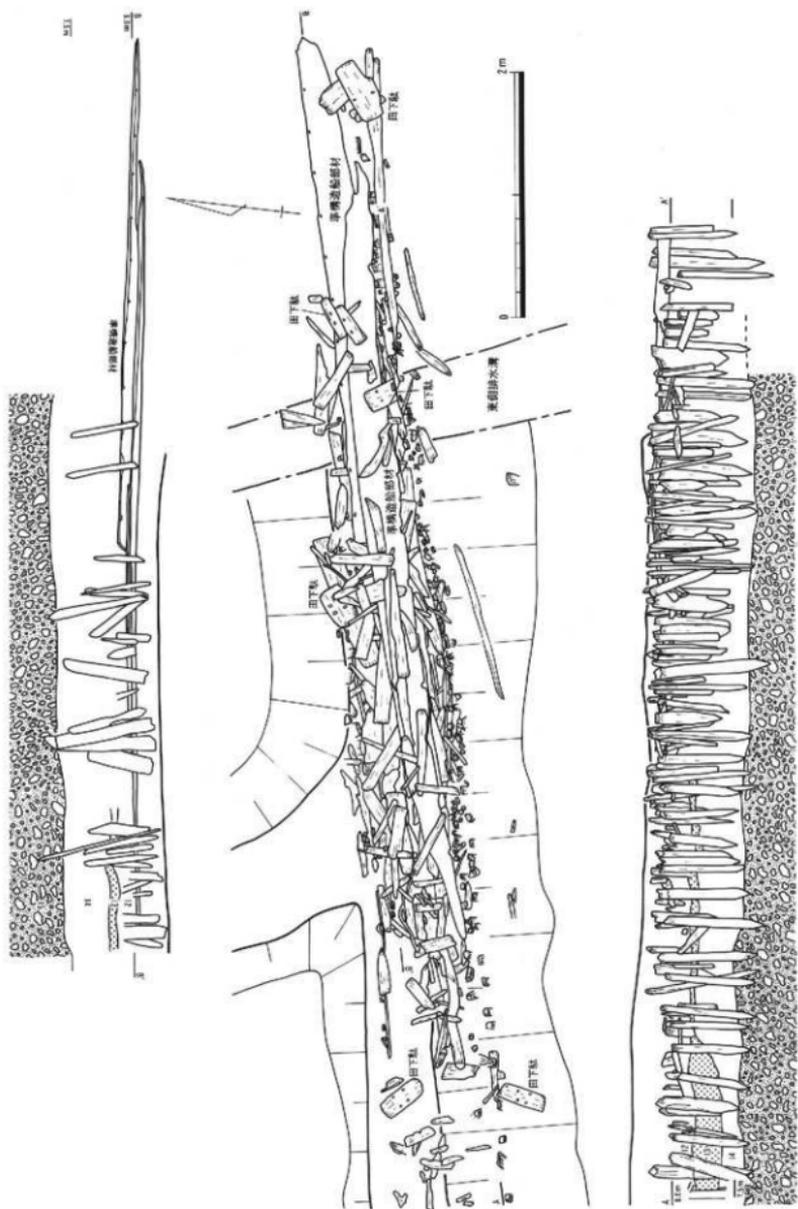


第56図 12層水田SK21206内木種状遺構実測図

(2/3頁)

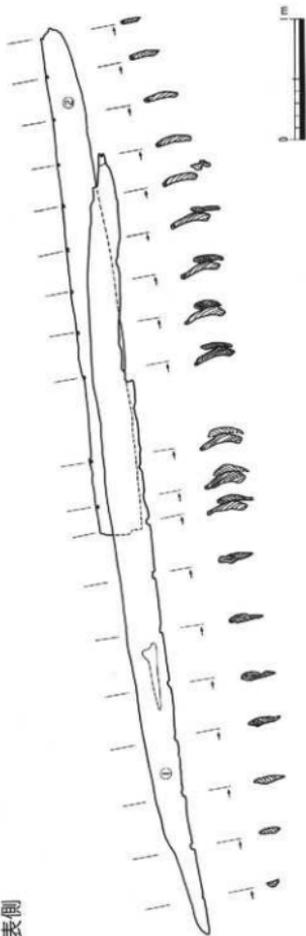


第57图 12層水田SK21201断面図

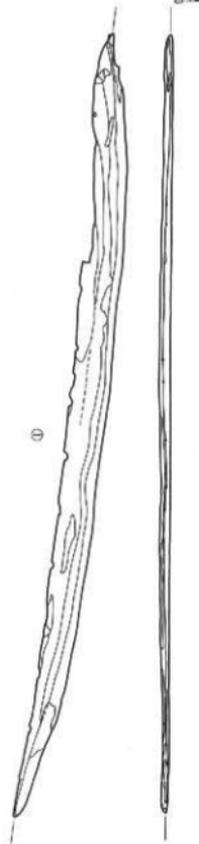
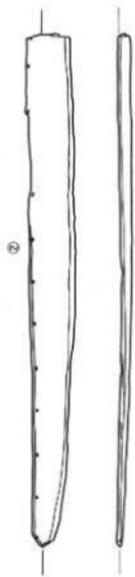


第58图 12層水田 SK21201 内杭列・舟形美濃図

表側



裏側



第55図 12層水田SK21201内出土舟材実測図



第60図 12層水田SK21204内杭列実測図

10層中で検出された遺構 流路・堰

黒泥被覆 漫地中流路

10層は上下を黒泥質の層に挟まれた砂礫層で、12層上の杭列水田が放棄され湿地化した期間の一時期に、流路や洪水によって堆積したものである。この砂礫層は調査区の西側ほど厚い堆積を示し、1m~1.5mに及んでいる。粒子の大きい礫を含む西側に比べ、東側では10層は砂層へと変化し、洪水流の勢いが西側に比べ比較的弱かったことが窺える。

<流路>

(1) SR21001 [第61図]

堰 3 列

調査区内を南北に緩やかに蛇行して流れていた流路である。川幅は最小で約5.5m、最大で約10m、南にいくほど広がっている。深さは約60~70cmである。川底には多くの流木が残っていたが、調査区中央部、ちょうど川幅が最も狭くなる部分には、河道と直交するような方向で、堰とみられる杭列と横木の組み合わせられた遺構が3列検出された。

(2) SR21002

堰 1 列

川幅は最小で約2m、最大で約4m、深さは約10~40cmの浅い流路である。常時水流のあった流路というより、一時期SR21001から溢れ出た洪水流の痕跡とみることもできる。やはり調査区の中央部に堰とみられる遺構が1列存在している。

<堰> [第62図]

流路内より検出された4列の堰は、それぞれ規模、残存状態とも異なっていた。検出順に1号~4号堰とし、以下に特徴を記述する。

(1) 1号堰 [第63図, 図版32]

スギの杭

SR21001河道に直交するような方向で構築されている。河道底から西岸にかけて横断するよう約5.5mにわたって杭列が打たれ、そこへ長い横木を掛け渡している。杭は、樹皮を取ったスギの丸太材の先端を鋭く加工したものが使用されている。杭列は、河道底の群と西岸に近いほうの群とに分かれ、西岸の群のほうが約1m南にずれるように打たれている。また、杭の長さが異なり、西岸の群より河道底の群のほうに長いものが多く、最大で3m近いものもあった。杭は皆、もとより南へ傾斜して打たれていたとみられるが、その後更に倒れたようで、先端が浮いてしまっているものもあった。北からの激しい流れを受けたことを示しているのであろう。残存状態が悪く明確にはわからないが、掛け渡された横木

横木 3 段

は大きく南北3段に分かれているようで、1段ずつ河道中央から西岸へと次第に位置をずらしている構造が確認できた。水流を西岸へと導く構造なのであろうか。横木の1段毎には3~4本の長大な木材を束ねている。横木の中には広葉樹材も含まれていた。長いもので4m近いものがあり、建物の屋根材とみられる先端に加工を施されたものもあった。なお、横木の1段めの東端には網代の破片が絡み付いていた。

転用材 網代

(2) 2号堰

広葉樹の杭

1号堰の5mほど上流に構築されている。残存状態は悪く、原型をとどめていない。河道中央部に約4mにわたって杭列が打たれ、杭列の方向は河道の方向より約30°西へずれている。杭には広葉樹材が使用されているようであった。杭列の南端部には、抜けた杭や横木と思われるものが集まっており、長さ3mを超えるものも数本あった。

(3) 3号堰 [図版33]

梯子転用

浅い流路SR21002に構築されている小規模なものである。河道の中央に、直交するように約1.5mにわたって杭列が打たれ、その北側に1本の横木が渡されている。この横木は梯子を転用したものであった。他の堰より新しく一時的につくられたものであろう。

(4) 4号堰 [第63図]

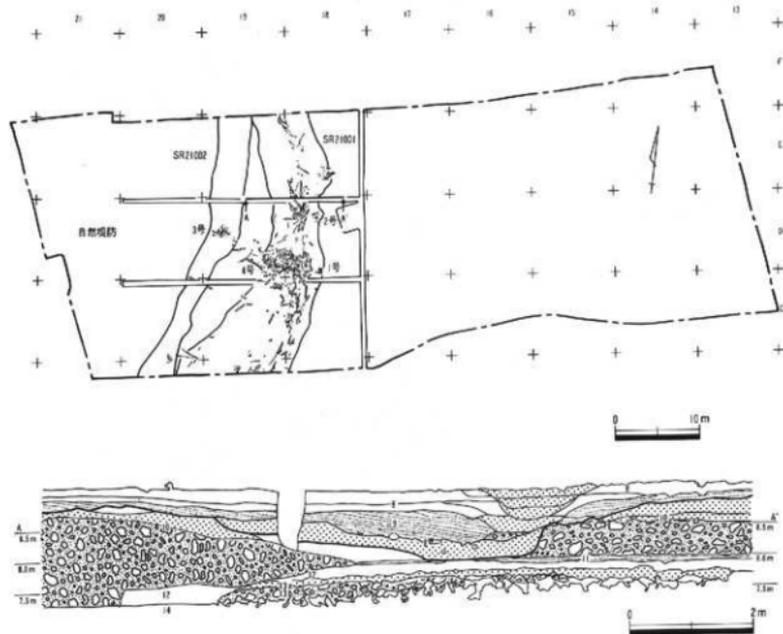
1号堰のすぐ西側、一部は重なった形で検出された。SR21001の河道中央から西岸にかけて約7mにわたって杭列が打たれ、その北側に3~4本の横木が掛け渡されている。河道に対して約40°西へ傾いた方向であり、1号堰とは食い違っている。材質の点でも違い、杭にも横木にも広葉樹材が使われており、樹皮をつけたままの自然木をそのまま使っているものもあった。残存状態が悪くはつきりしないが、1号堰より短かめの杭が使用されているようである。1号堰を取り除いた後に確認されたもので、杭先端のレベルも低く、材質も異なることから、1号堰より早い段階に構築されたものと推測される。河道との角度のずれは、4号堰が構築された当時、河道の方向そのものが違っていたのではないだろうか。

広葉樹の杭

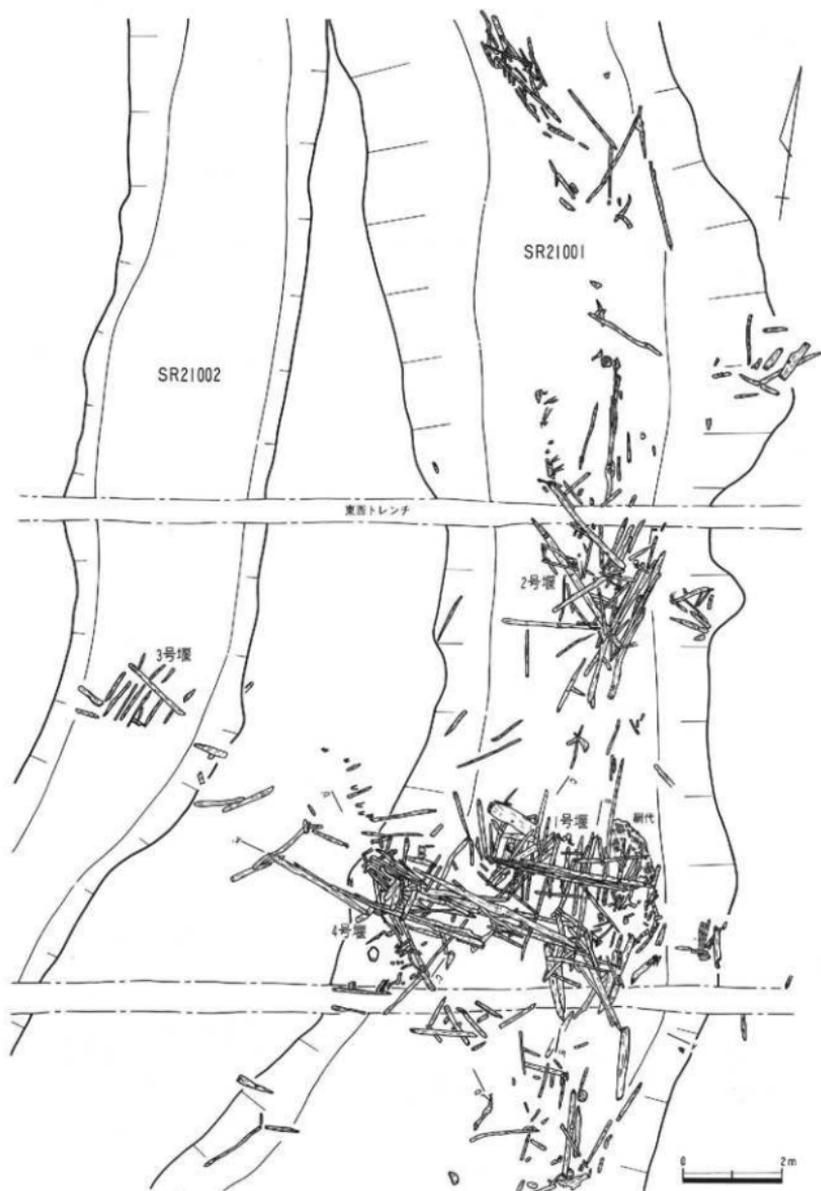
1号堰以前

〈出土遺物〉 [図版33]

流路内からは、堰の周辺から舟形木製品や矢等の木製品や多くの木片が出土し、土器では、丸底の壺、小型埴、高杯が多数出土し、高杯はその特徴から、古墳時代中期の段階になるものにまとめられそうであった。

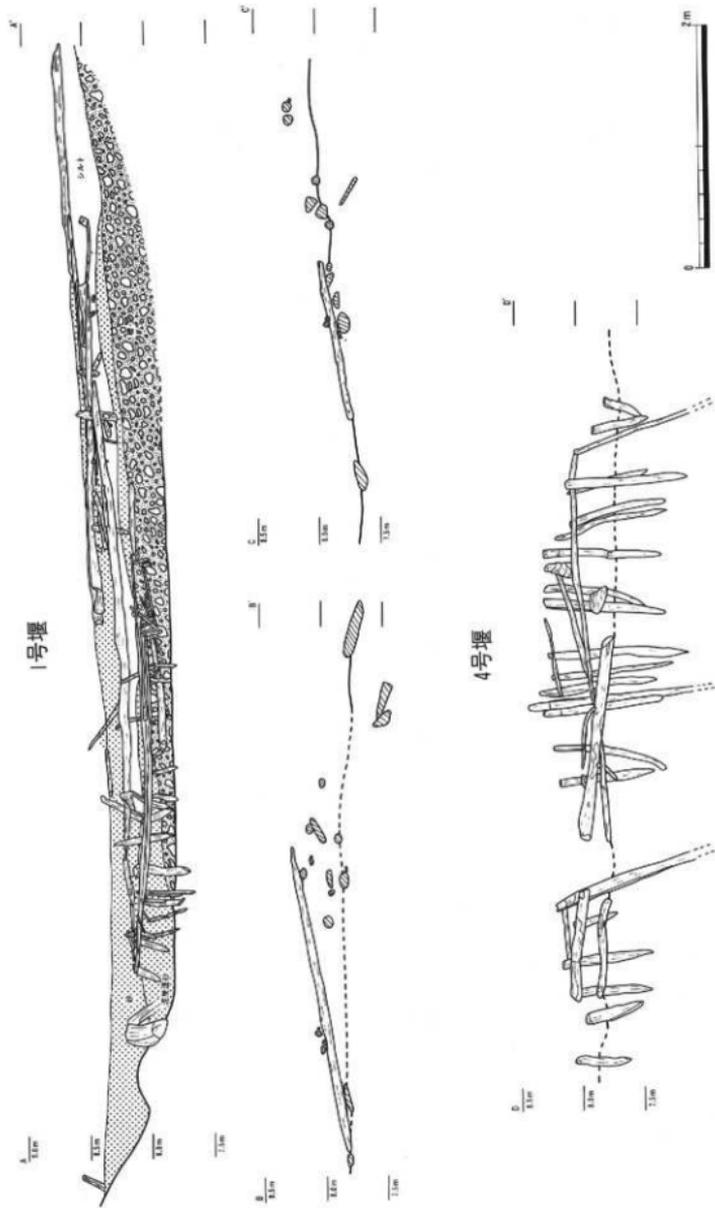


第61図 10層中SR21001断面図



第62図 10層中塚状遺構実測図

(2/3R)



第63图 10層中堰状遺構断面図

9層上で検出された遺構 流路・木材杭列散在・土器集中群

黒泥層

11層黒泥質層上に堆積した10層の礫層は、再び9層の黒泥質層により被覆されている。10層は、湿地帯になっていた期間の間に一時期流れていた流路によって形成されたものである。9層は調査区全域にわたって確認されるが、グリッド17列以西の調査区西半では若干黒泥質は弱く粘性の強い土壤になっている。調査区西側全体は10層の流路がもたらした礫層が自然堤防を形成しており、微高地になっている。

西側微高地

<流路>

(1) SR20901 [第65図, 図版29]

9層が堆積した後も10層の流路SR21001は完全には埋没せず、小規模な流路として踏襲されたようである。川幅は最も狭いところで約2m、最も広いところで約5m、深さは約20~50cmであった。ちょうどSR21001河道の東側を踏襲している。川岸は東岸が高く急に落ち込み、西岸が低く緩やかに微高地へと上がっていく。南側へいくと、ちょうどSR21001河道の西側にあたる場所に深さ約10cm程の浅い落ち込みがある。

(2) SR20902

SR20901に合流する屈曲した浅い流路で、幅約3~4m、深さ10~20cm、合流部に近づくほど深くなっている。下層の河道とは関係のない位置に流れている。

<壙状杭列> [第64図]

SR20902が屈曲する地点とSR20901とSR20902の合流地点には、それぞれ残存状態は悪いが河道に直交した杭列があり、横木のようなものも伴っていた。明確に判断はできないが、その位置と方向からは堰であったことが考えられる。

<木材・杭列の散在> [第66図]

転用材

SR20901から東側の調査区中央部辺り(グリッドE16、D17・18、C17・18)にかけて、大型の木材が散在しており、数本の杭列も確認された。木材の中には、建築部材であったと思われる加工の残るものが多かった。木材の出土状況は、散在とは違ったものの、グリッドE16ではおおよそ南北方向を向いており、グリッドD17ではおおよそ東西方向、そしてグリッドC18・D18ではおおよそ南北方向をそれぞれ向いているようで、場所によってまとまっているようにもみえる。また、杭列は、皆南北方向に並んでいるようであった。

方向性

木道状遺構

こうした黒泥質層中からの木材出土は、瀬名遺跡の他の調査区でも確認されており、一定の方向性をもった「木道状遺構」といえるものもあった。また、木材に伴う杭列も6区、9区、10区で確認されている。

<土器集中群> [第67図, 図版30・31]

微高地頂上

SR20901内部、東岸のグリッドC17とC18の境目付近、そして西岸の微高地上より大量の土師器が出土した。特に西岸の微高地上、地形のピークにあたるグリッドE20・21・F20・21付近に集中しているようであった。破片が一箇所にまとまっているものが多く、それぞれ完形であったものがその場で押しつぶされたような出土状況を示していた。グリッドF18のSR20901内では、逆さ向きになった高環が出土したが、脚部が中心から四方に割れて広がったような状況で、ちょうど真上から力がかかったことがわかる。また、何点かが並べて置かれていたり、集められたような状況を示すものもあった。

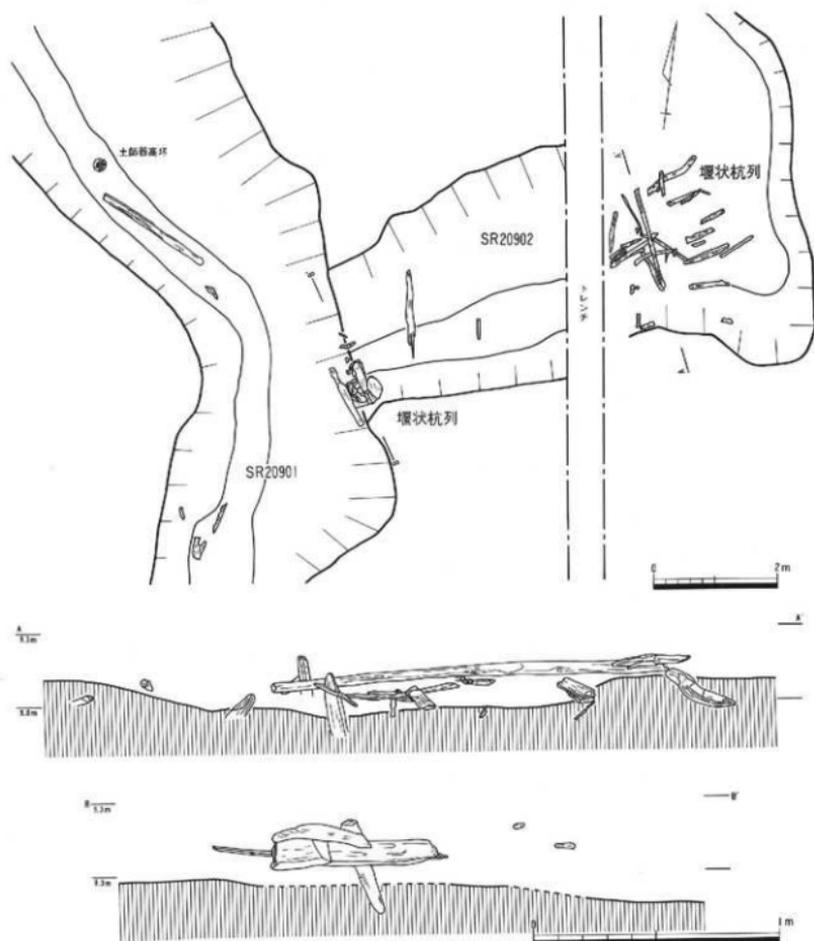
出土した土器には、高環、壺、台付き甕、小型の丸底埴などの器種があった。高環は、脚部が中膨らみの柱状で裾部が外反するという古墳時代中期に特有なスタイルであった。

大型壺

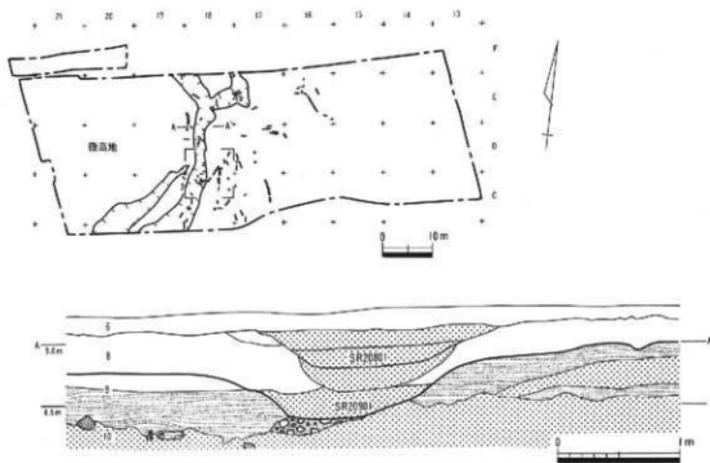
壺は、複合口縁または単純口縁で太く短い頸部に球形の胴、細めの底をもった無紋のもの

であった。大型のものが目立ち、その中の数点は、特殊ともいえる粒子の粗い白色系胎土をもつ器職の厚いもので、ほぼ同形で同規格のものようであった。

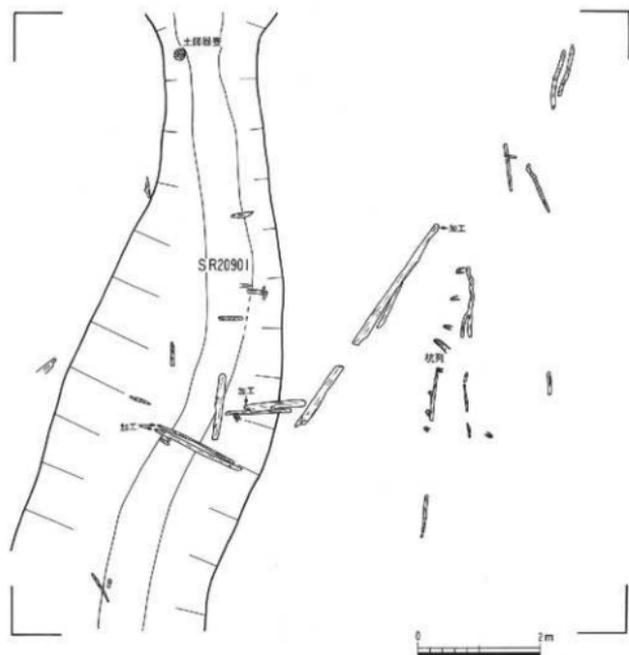
流路の辺の微高地上で高坏、大型の壺、小型の罎、甕等が並べられていたのであろう。土器を使用した何らかの祭祀が行なわれていたのであろうか。



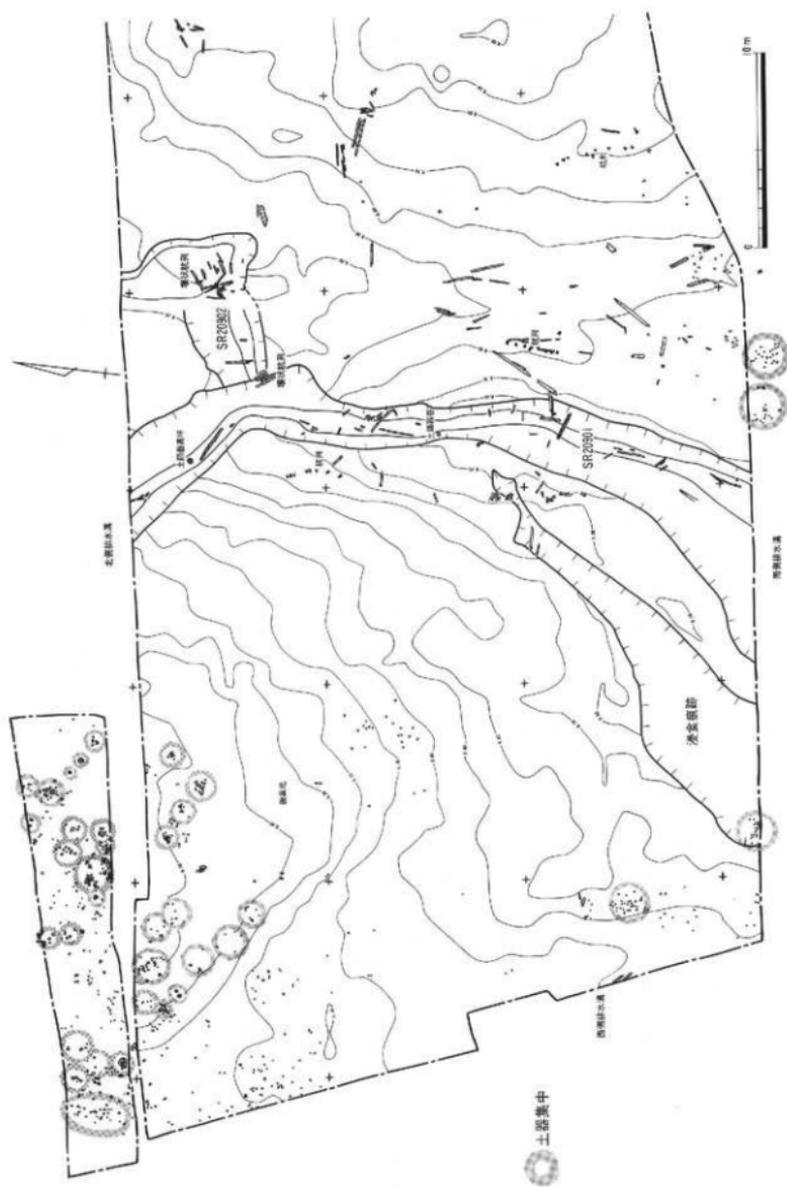
第64図 9層上SR20902内壙状杭列実測図



第 65 图 9 層上SR20901断面図



第66图 9層上木材出土状況図



第67圖 9層土器出土分布圖

8層上で検出された遺構 水田跡

9層黒泥層上に堆積した厚さ10~20cmの粘土層が水田土壌として耕作され、小規模な区画の水田が造られている。8層上の地形は、9層と同様、10層礫層の厚い堆積によって調査区西側(グリッド17列以西)が微高地になっており、調査区東側へと次第に低くなる地形になっている。8層上で検出された水田跡は、この東側の低い地形に広がっている。

西側微高地

水田跡の範囲は西へグリッド16列辺りで途切れており、16層水田の状況と似ている。ただし、16層水田のように水田域の限界を示すような大規模な畦畔はなく、洪水流によって浸食されており不明確な途切れ方をしている。地形の上から考えると、やはりこの辺りで耕作域と非耕作域に分かれていた可能性があるだろう。

〈水田跡〉[第68・69図、図版25・26・27]

砂被覆

水田域全体が砂層に被覆されているため、畦畔、水田面とも残存状態は良好で、水田面に残されていた足跡なども明確に検出できた。

小規模区画

水田区画はほとんどが一辺2~3mの正方形か、若干南北に長い長方形の小規模なものであるが、水田域を南北方向に走った洪水流の痕跡を境に、東側では南北に非常に長い大きな区画が多いようであった。西側の微高地からなだらかに下がってくる地形が、この洪水流痕跡のある部分を境に平坦な地形に転換している。低平な地形には比較的大きな区画の水田がつくられるのであろうか。そのような地形上の要因があるものだろうか。

畦畔は、下端幅約40~60cm、高さ約5cmの小規模な盛土畦畔である。畦畔の方向は、南北方向のものが正方位の北より若干西へ(15~20°と)傾いており、東西方向のものがこれに直交している。南北方向の畦畔に比べ、東西方向の畦畔は高まりがはっきりしないようであった。また、南北方向の畦畔が一定間隔にあるのに対し、東西方向には畦畔がつかない部分があった。これらのことから、水田区画は南北方向の畦畔を基軸に造られており、まず南北に畦畔を設定した後に、その間を東西の畦畔で区切っていったことが推定できる。

区画基軸

(1) 大規模な畦畔SK20801 [図版28]

調査区東端にあり、南北に延びる。下端幅約1m、高さ約20cmの盛土畦畔である。

(2) 水路SD20801 [図版27]

南北方向の水路。幅約0.8~1m、深さ約30cmで、両側に堤をもっている。底のレベルが北から南へ低くなっており、水は南へと流れていたと考えられる。水田面には畦畔を切断した水口が数多くあるが、この水路の堤には水口らしきものはみられず、取水用か、排水用か判断できない。

(3) 水路堤を兼ねた畦畔SK20802・SK20803

下端幅約50~70cm、高さ約5~10cmで、小規模な畦畔とあまりかわらない。

(4) 水口

畦畔の中央や交差部が切断され、水口であったと考えられる部分が3ヶ所あった。そのうち南北方向の畦畔にあるものは3ヶ所だけで、その他は全て東西方向の畦畔にあった。ST50~56を画する東西方向6本の畦畔は、全てSK20802との交差部が切断され、水がSK20802の東側に沿って直線的に流れていくようになっている。

東西畦畔

ST70~72とST80~82の間には、南北方向の畦畔に沿って約40~50cm東にもう一本畦畔があり、水田区画(ST78)と考えるにはあまりにも細長い空間をつくっている。南側にはST73との間に水口があるところからも、ここは水田域の中の水まわしのため一時的に畦畔を

水路的区画

つくり、水路のような機能をもたせていたと考えられる。

(5) 水田面の状況

水田面には多数の足跡が残っており、特に微高地と水田域の境目あたりと、水田域の中でも地形が低い、洪水流の痕跡のある辺りに集中していた。明確に歩行方向等の確認できるものはなかったが、おおよそ南北に長い範囲に分布しているようであった。

また、足跡には見えない直径約10cm程の円形または半円形の凹みも無数散在していた。現地では意識的に調査しなかったが、これらは稲株痕であった可能性もある。

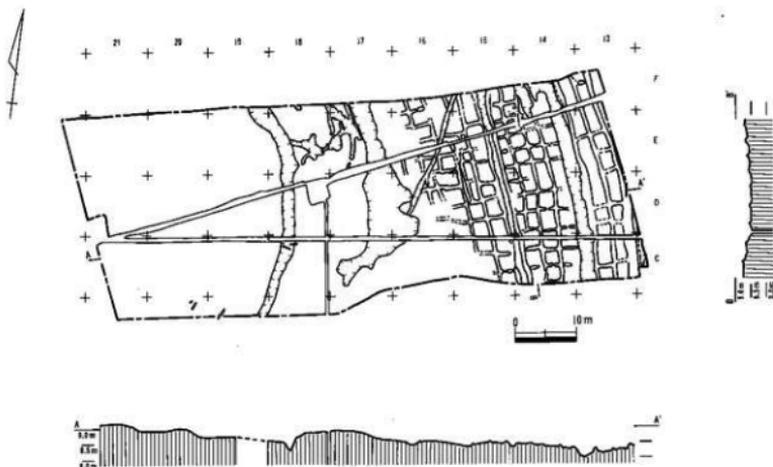
8層上には数本の洪水流の浸食痕跡があり、全て北から南北方向に走ったものである。そのうち1本は前述したように水田域の地形転換点にあり、その他水田域の西端グリッドE16辺りを北東から南西へと走っている幅の狭いもの、また、水田域と西側の微高地の境目辺りにあるもの等があった。

〈流路SR20001〉〔図版28〕

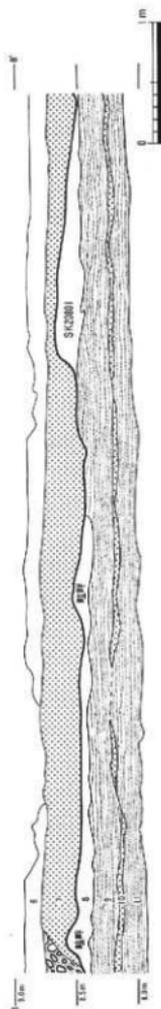
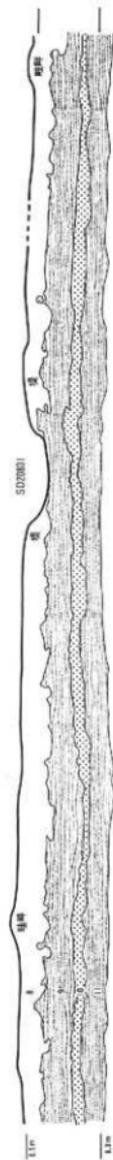
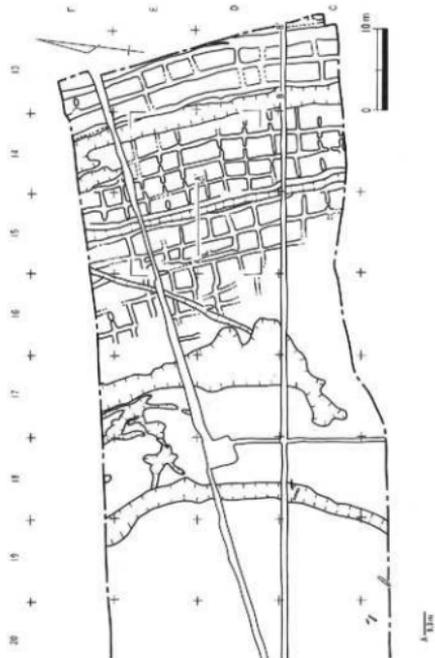
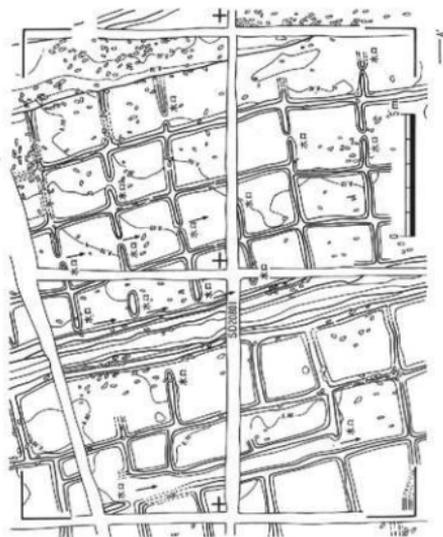
下層9層のSR20901の河道を踏襲している川幅約1.5~2.5m、深さ約30~40cmの小規模な流路である。西岸が低く緩やかに微高地へと上がっていくのに対し、東岸が高く急上がっているところも下層の状況と同様である。

〈出土遺物〉

8層の水田に伴って出土した遺物はきわめて少なく、土師器数片と木製品数点であった。木製品の中には、曲物の底や鞍の一部と考えられるものがあった。



第68図 8層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:160)



第69図 腐水田実測図

6層上で検出された遺構 水田跡

8層水田上を覆った砂層(7層)の上に堆積した厚さ20cm程の粘土層が6層である。ここに再び水田が営まれていた。6層上の地形は8層水田と同様に、調査区西側が微高地を成し、検出された遺構はグリッド16列以東の東半部に限られた。水田域は微高地の縁辺部から東へかけて広がり、2/3区の調査区内では地形変化に相応して西側と東側で、非耕作地と耕作地部分に分かれていたのであろう。

<水田跡> [図版23]

4本の大規模な畦畔による区画が確認された。3本は平行する東西方向の畦畔で、1本はそれらに直交する南北方向の畦畔である。下端幅は狭いところで約1m、広いところで約4mあり、高さは約10~30cmであった。畦畔の方向は南北方向のものが正方位の北より約35°西へ傾いている。これは静岡平野北部でみられる条里型地割の方向とほぼ一致している。畦畔の規模、方向とも下層の8層水田を全く踏襲していない。

(1) SK20602 [第70図, 図版23・24]

南北方向の畦畔で、最大で下端幅約4m、高さ約30cmを測る最も大規模なものである。東西方向の畦畔SK20604以北で特に大きく、南へいくと下端幅約1m、高さ約10cmと小さくなっているようであった。北側の断面を観察したところ、畦畔の盛土は、水田面と同じ粘土を盛り上げただけでなく、小礫を多く含む緑灰色の砂層を客土して埋め固めているようであった。また、盛土内からは加工木片や多くの板材、自然木の小枝等が出土しており、構築の過程で芯材として埋め込まれたものと考えられる。木片等に混じって、土師器や灰釉陶器の破片も多数出土した。

グリッドE16の畦畔盛土西側には直径約50cm、深さ約50cm程のピットがあったが、中には何も入っておらずその性格は不明である。

(2) SK20601

東西方向の畦畔のうち最も南にあるもので、SK20602はこれに交差して途切れている。下端幅約1.3m、高さ約10cmの規模である。

グリッドD14では、畦畔に直交し盛土を横断するような杭列と横板の一部を検出したが、周囲に南北方向の畦畔らしき高まりはみあたらなかった。

(3) 木桶状遺構 [第71図]

グリッドC15のSK20601盛土南側に沿うように、木桶状遺構が検出された。各部品は散在してしまっているようだが、底板・側板が短い杭で支えられている状況がみられる。ちょうどSK20602との交差部にあたり、ST3の西南隅とST4との間で畦畔の盛土を貫いて通水させていたものと考えられる。前途の盛土を横断する杭列と横板も同様のものではあった可能性がある。また、SK20602の芯材とした中にも含まれていた可能性がある。

<出土遺物と水田の営まれた時期>

前述したSK20602盛土内、そして土壌中から数点の木製品が出土した。その中には鎌に取り付ける泥除けと思われるもの、下駄等があった。また、6層直上の5層中からは全長約20cm程の付札状の木製品が出土している。(グリッドE18)

6層水田の営まれた時期は、SK20602盛土内から出土した灰釉陶器片から復元された碗や壺によって、平安時代後半あたりと推定できる。

6層上には5~3層と粘土層が重層的に堆積しており、水田として連続的に耕作されていった可能性が高い。

7 層

西側微高地

大規模区画

畦畔方向
条里制地割

大規模畦畔

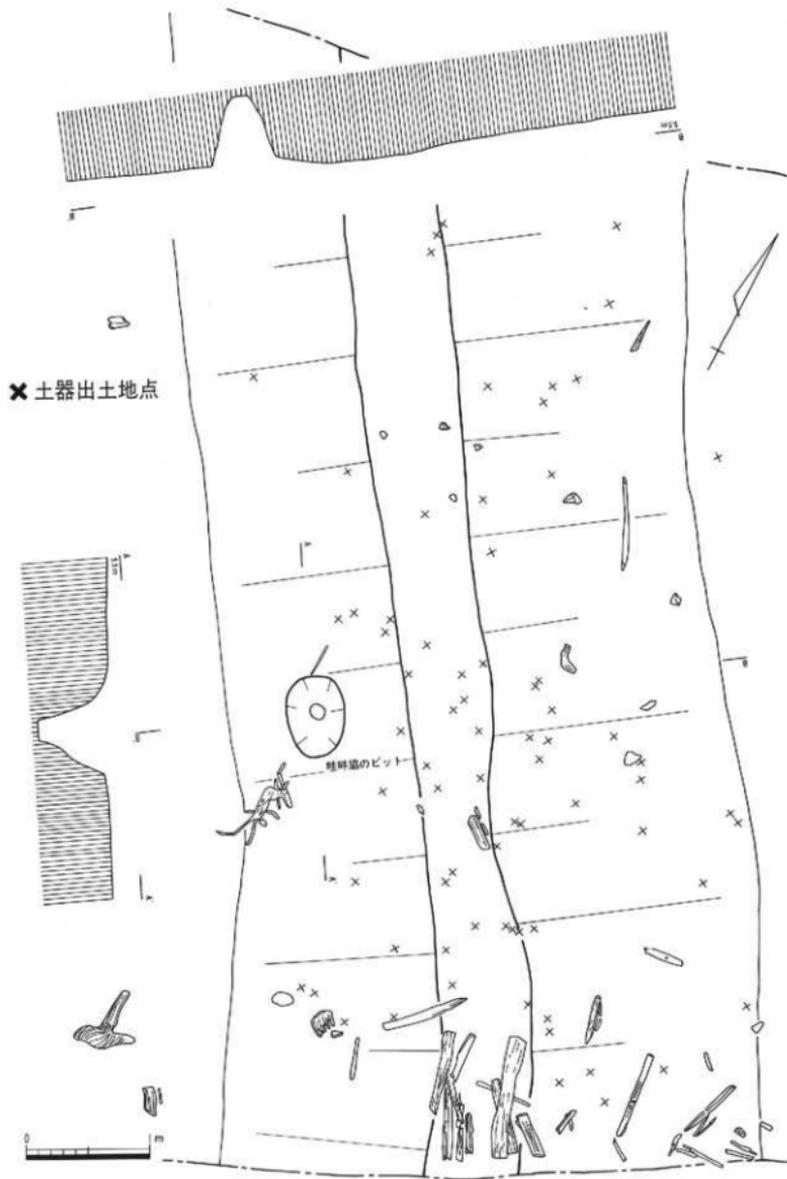
客 土

芯 材

畦畔ピット

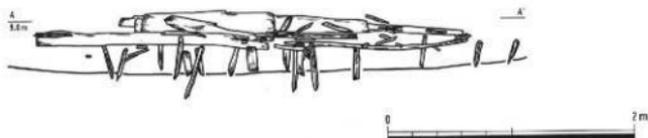
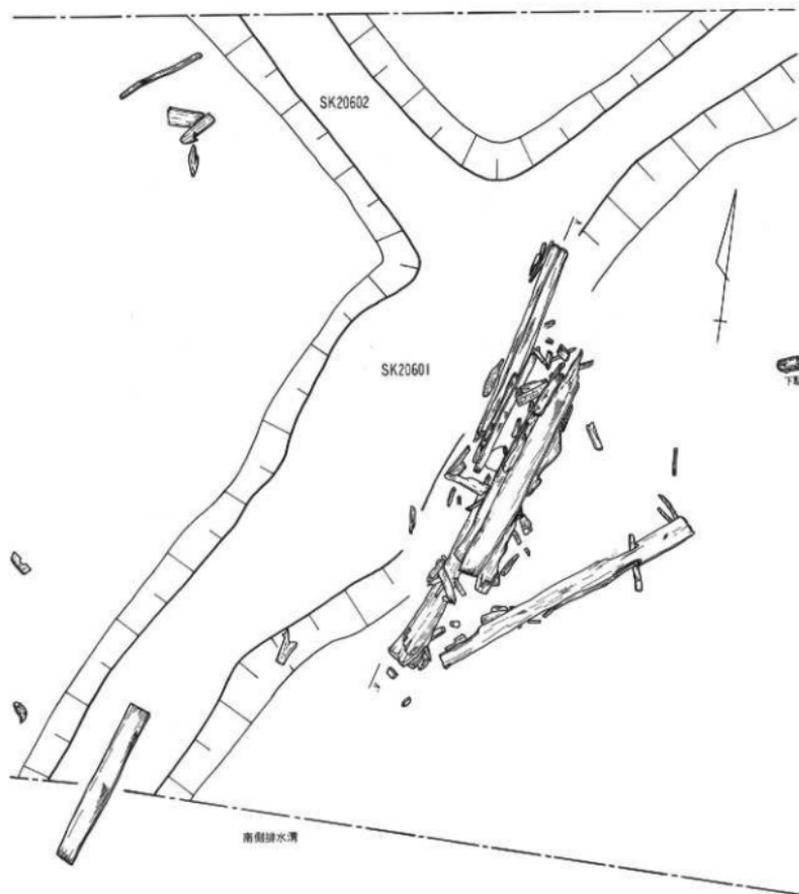
SK11901と対応するか

灰 釉



第70図 6層水田SK20602実測図

(2/3区)



第71図 6層水田SK20601木柱状遺構実測図

3層上で検出された遺構 水田跡

2/3区において最も新しい遺構面である。

6層水田以後、大規模な洪水等による砂礫の堆積がなかったようで、6層、5層、4層、3層と厚さ約1m~1.2mの間に粘土層が連続して堆積している。(正確には3層と4層の間に部分的に薄く砂層が存在する。)5層、4層とも遺構は検出できなかったものの、ラミナのみられない攪拌されたような土壌を呈し、6層以後長期間にわたって水田として連絡と耕作されていたことが考えられる。洪水流をもたらす流路の河道が変わったのであろうか、それとも一般的に気象の安定していた時期であったのだろうか。平安時代後期以降近世まで明確に時期の特定できる水田跡は確認されない。瀬名遺跡の他の調査区でも同様の状況がみられるようである。

2 層 砂礫被覆

3層水田は大規模な洪水により埋没、放棄されたのであろう。全面厚さ約1~1.5mの砂礫によって被覆されている。砂礫は西側へいくほど厚くなっている。調査区西半に2本、東端に1本、南北方向に洪水流が走った痕跡があり、水田面が深く抉られているが、その他の部分では畦畔の高まりは良好な状態で残存しており、明確な水田跡が検出された。

〈水田跡〉[第72図, 図版20・21]

棚田状構造

水田面の地形は、東から西へ、北から南へと低くなっている。特に、ST22~25とST27~30の間には段差ができており、ST22~25では北から南へと一段づつに低くなっている状況がみられる。

1つ1つの水田区画の形状、規模は均一でなく、例えば、調査区中央のST18・19が正方形で一辺約13~14mと大規模なものに対して、それに隣接するST12は東西に長い長方形で約7m×9m、ST23は南北に長い長方形で約10m×7.5mであり、面積は三分の一以下になっている。

畦畔に杭列

畦畔の規模は、調査区全体にわたってほぼ均一なようで、下端幅約60~80cm、高さ約15cmを測る。南北方向に4本、東西方向に2本、杭列を伴う畦畔がある。杭列は、畦畔毎に疎密の度合いが異なり、2列~3列で打たれているものもあれば、部分的にのみ打たれているもの(SK20303)もある。畦畔の方向は、南北方向のものが正方位の北より約35°西へ傾いており、東西方向のものはそれに直交している。これは6層水田の場合と同様、現在確認されている静岡平野北部における条里型地割の方向に一致している。

畦畔の方向

(1) 水田区画の構築順序

区画軸輪

南北方向の畦畔が幾つもの交差点を貫いて直線的に伸びているのに対し、東西方向の畦畔は交差点でずれているものが多いことに気が付いた。南北方向の畦畔が優越している状況である。ただ、例外的に、畦畔SK20302に交差する南北方向の畦畔はずれているようであった。このSK20302は、南北方向のなかでも杭列を伴っており、交差点も直線的に貫いている。このことから、杭列畦畔→南北方向の畦畔→東西方向の畦畔という水田区画の構築順序が推定できる。

(2) 南北方向の畦畔SK20301の杭列

針葉樹の杭

東西2列の杭列が打たれている。杭は、2列とも針葉樹材が中心で若干広葉樹材が含まれており、長さは約60~80cmのものが多い。杭と杭との間隔は、2列とも、部分的には密集しているもの、おおよそ40~50cmのところが多いようであった。ただ、杭頭のレベルは東西で異なっており、西側の杭列の方が平均して約20cm高いようであった。

芯材

盛土の中には粗朶や石を埋め込んで芯材としているようであった。

(3) 東西方向の畦畔SK20302の杭列 [第73図, 図版22]

グリッドC15、SK20304との交差部付近、グリッドB17でそれぞれ一ヶ所ずつ2列になっている部分があるが、その他の部分は基本的に1列である。SK20304との交差部付近では、部分的に3列になっている。平面的な位置からすると、基本的に盛土の北側の1列はつながら、南側に1列または2列が追加されているようである。杭の材質は針葉樹材が中心で、広葉樹材が若干加わっている。長さは約60~100cmで、西側へいくと若干長いものが使われているようであった。杭と杭との間隔は、部分的な密集を除けばおよそ20~30cmのところが多いようであった。

(4) 南北方向の畦畔SK20303の杭列

SK20302との交差部近くに20数本の杭が集中して打たれており、他の部分では数本が散在しているのみであった。

(5) 南北方向の畦畔SK20304の杭列

ほとんどが長さ約70~90cmの針葉樹材の杭で、杭と杭との間隔が約30~40cmに揃っている。全体的に杭頭が若干東に傾いているようにみえる。

(6) 南北方向の畦畔SK20305の杭列

グリッドE22で部分的に2列となっているが、全体的に1列で疎らに打たれている。2列になっている部分では、西側にある杭の方が杭頭のレベルが高いようであった。

(7) 東西方向の畦畔SK20306の杭列 [第74図, 図版22]

SK20301から東へ伸びる畦畔で、調査区北東隅に一部のみ検出された。盛土の高まりはほとんど残っておらず、2列の杭列のみ確認された。杭の材質は、2列とも、針葉樹材が中心で広葉樹材が若干含まれている。長さは約60~80cmのものが多かった。杭と杭との間隔は、SK20301との交差部近くでは隙間のないほど密集しており、交差部から離れると約15~20cmであった。狭い範囲のなかではあるが、南側の列の方が北側の列よりも密集して打たれているようであった。

杭列周囲の土中からは多数のこぶし大の川原石や粗朶が検出され、畦畔の構築過程において、石や粗朶を敷き込んで芯材とし、補強していたことがわかる。

芯材

(8) 水口

明確なものは3ヶ所に確認される。SK20305の西側に沿った部分で、東西方向の畦畔がそれぞれ交差部で切断されている。その他ははっきりしなかった。

東西畦畔

(9) 足跡

ST17・18・22・23に集中して検出された。しかし、2/3区では、8層より上層(8層、6層、3層)は南側の2区と北側の3区に分かれて調査しており、それぞれの調査時期も異なっていた(斜めに通じるトレンチはその境界線である)ので、正直なところ調査精度に違いがあったことも考えられ、全体的な分布状況を考察することは避けたい。

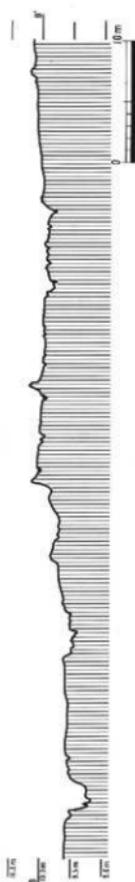
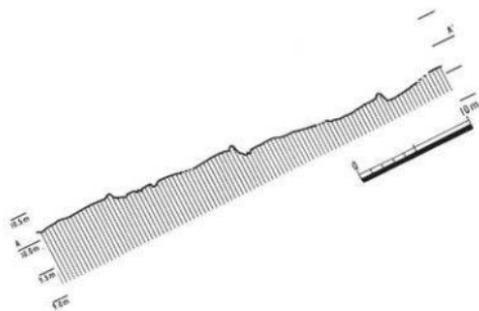
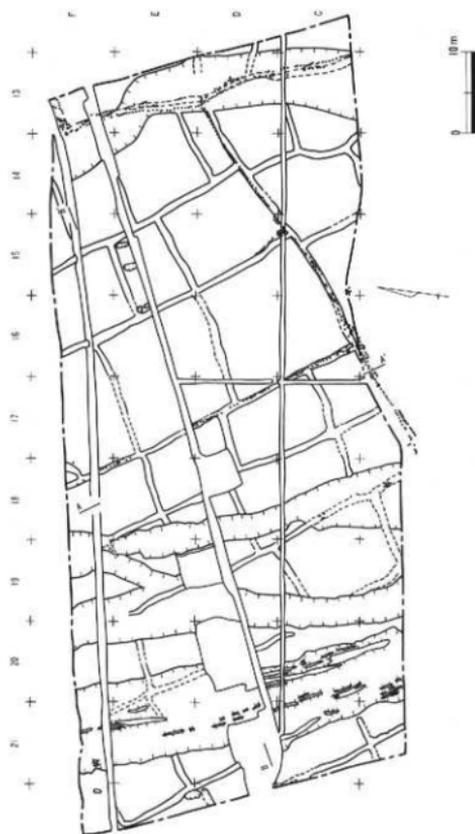
調査精度

<出土遺物>

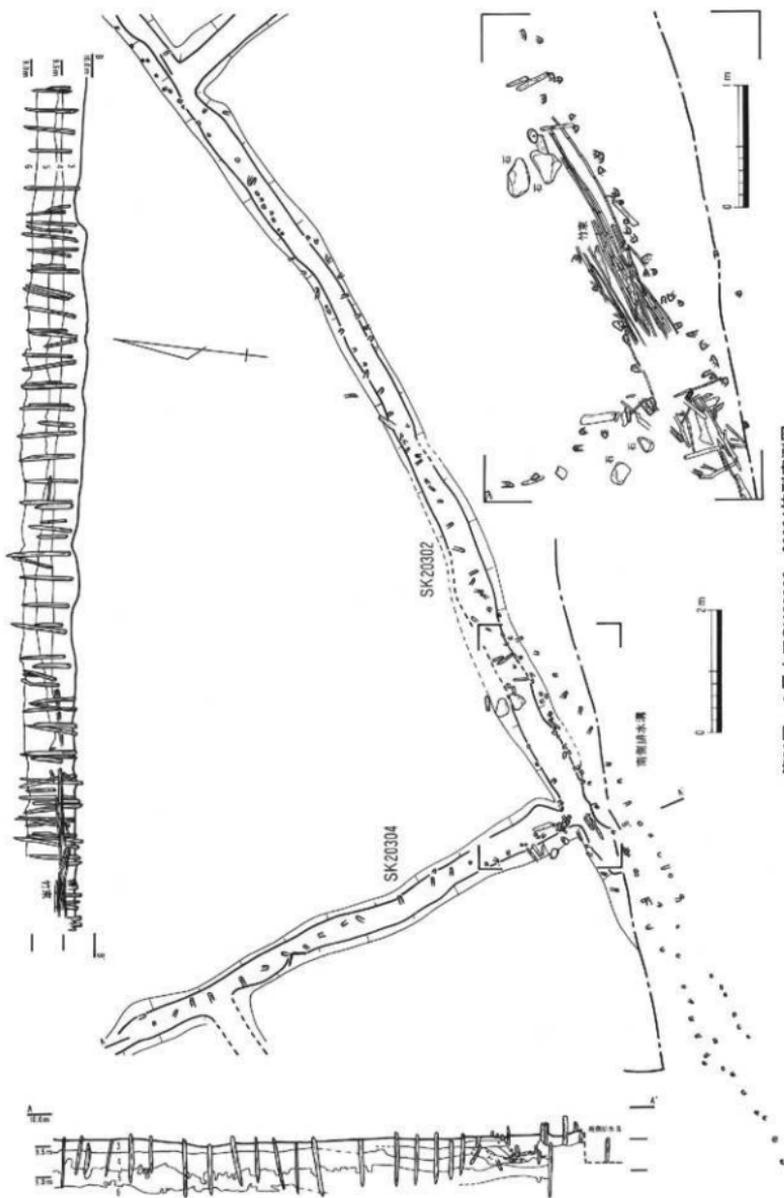
3層水田上からは、多数の素焼きの土器片に混じって、緑釉の碗や高坏の破片、青磁の碗の破片等が出土している。また、漆塗りの碗の破片も出土している。しかし、水田面には激しい洪水流が走っており、遺物がもともと水田に伴うものかはわからない。

3層水田廃絶以後、厚い2層砂礫層の上には再び粘土層(1層)が堆積している。現地表面では、その上に更に1m近い厚さで客土されており、宅地となっていた。

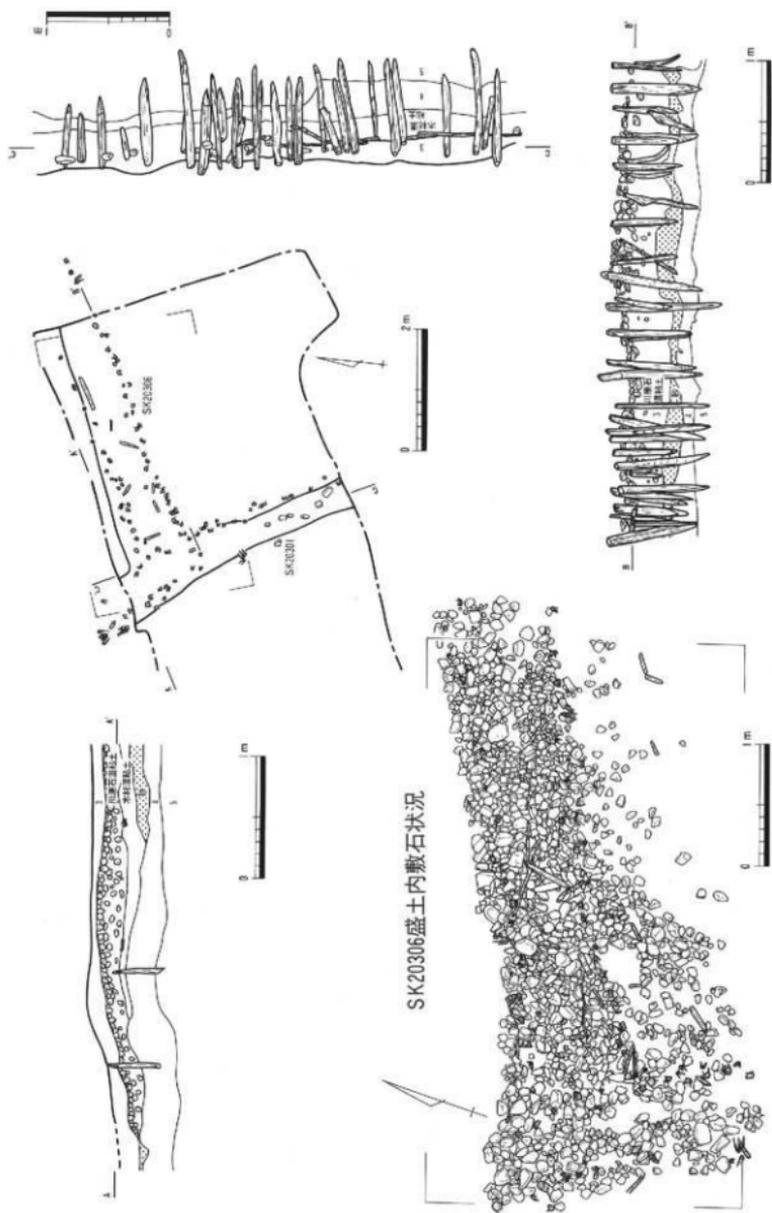
1層



第72図 3層水田エベレベーション図 (水平: 400縮率: 80)



第73図 3層水田SK20302・20304坑列実測図



第74図 3層水田SK20301・20306実測図

水田計測表 (2/3区 16層水田)

No	標高 m	面積 ㎡	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.05	--	--	8.0	--	一部区外 変形
2	7.00	--	--	--	--	"
3	7.00	--	--	--	1.4	南側斜面なし 変形
4	6.98	42.3	台形	10.5	2.0	"
5	6.97	29.0	四辺形	5.5	5.1	"
6	6.97	--	--	--	(5.7)	一部区外
7	7.00	--	--	--	--	" 変形
8	7.02	31.6	台形	7.3	3.5	"
9	6.98	39.8	長方形	8.4	4.5	"
10	6.81	--	--	--	4.3	一部区外
11	7.24	18.4	長方形	4.9	3.8	"
12	7.15	18.9	正方形	4.5	4.2	"
13	6.97	28.1	長方形	6.1	4.7	"
14	6.82	28.6	長方形	6.4	4.7	"
15	6.80	--	--	--	4.7	一部区外
16	7.15	--	--	--	4.3	"
17	7.02	22.7	長方形	5.1	4.4	"
18	6.77	横 96.5	長方形	12.3	4.8	"
19	6.82	--	--	--	4.8	一部区外
20	7.17	--	--	--	(3.0)	" 変形
21	7.11	14.1	台形	5.6	2.0	"
22	7.00	6.6	三角形	5.3	1.9	"

水田計測表 (2/3区 14層水田)

No	標高 m	面積 ㎡	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.90	--	--	--	--	一部区外
2	7.65	--	--	--	--	大
3	7.30	--	--	--	8.6	横
4	7.55	--	--	--	(25.0)	横
5	7.30	--	--	--	--	区
6	6.80	--	--	--	8.5	画
7	7.05	--	--	--	--	"

水田計測表 (2/3区 12層水田)

No	標高 m	面積 ㎡	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.13	--	--	--	--	一部区外
2	8.80	--	--	--	--	大
3	7.85	--	--	--	--	横
4	7.85	--	--	--	(20.0)	横
5	7.75	--	--	--	--	区
6	7.55	--	--	--	--	画
7	7.70	--	--	--	--	"

水田計測表 (2/3区 8層水田)

No	標高 m	面積 ㎡	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.62	--	--	--	--	一部区外
2	8.64	--	--	--	--	"
3	8.60	--	--	--	(0.5)	"
4	8.58	--	--	--	--	"
5	8.74	--	--	--	1.9	"
6	8.49	14.8	長方形	8.1	8.1	"
7	8.31	5.5	長方形	2.7	2.1	"
8	8.28	6.1	長方形	2.9	2.0	"
9	8.30	10.2	長方形	5.3	1.8	"
10	8.39	4.5	長方形	2.4	1.5	"
11	8.50	9.4	長方形	5.9	1.4	"
12	8.60	--	--	--	(2.0)	一部区外
13	8.60	--	--	--	(2.2)	"
14	8.27	24.5	長方形	11.2	2.2	"
15	8.35	4.3	正方形	2.1	1.9	"
16	8.46	15.6	長方形	6.8	2.2	"
17	8.57	--	--	--	2.3	一部区外
18	8.50	--	--	(4.9)	--	田面浸食
19	8.49	--	--	4.9	2.6	"
20	8.37	--	--	4.6	(2.0)	"
21	8.36	--	--	4.8	4.6	"
22	8.34	--	--	5.0	2.8	"
23	8.35	--	--	5.2	2.8	"
24	8.52	--	--	5.5	3.0	"
25	8.58	--	--	5.3	2.3	"
26	8.67	--	--	5.6	--	"
27	8.85	--	--	--	--	"
28	8.63	--	(正方形)	2.0	2.0	"
29	8.57	4.8	長方形	2.4	2.0	"
30	8.48	4.8	正方形	2.1	2.1	"
31	8.49	9.3	長方形	4.6	2.0	"
32	8.45	7.0	正方形	2.7	2.6	"
33	8.45	7.9	長方形	3.3	2.5	"
34	8.61	6.8	長方形	2.7	2.3	"
35	8.68	4.9	正方形	2.2	2.1	"
36	8.74	4.9	正方形	2.3	2.1	"
37	8.76	--	--	--	--	一部区外
38	8.98	--	--	--	2.0	"
39	8.84	4.8	正方形	2.2	2.0	"
40	8.82	5.0	正方形	2.3	2.1	"
41	8.78	5.4	正方形	2.4	2.1	"
42	8.60	4.9	正方形	2.2	2.2	"
43	8.55	4.7	正方形	2.2	2.1	"
44	8.48	4.6	正方形	2.1	2.0	"
45	8.52	4.5	長方形	2.7	1.7	"
46	8.63	5.0	長方形	2.7	1.8	"
47	8.51	7.5	台形	3.1	2.6	変形
48	8.57	7.1	正方形	2.7	2.6	"
49	8.76	--	--	2.4	(2.2)	"
50	9.06	--	--	--	1.6	一部区外
51	8.95	4.0	長方形	2.5	1.5	"
52	8.83	3.8	長方形	2.3	1.6	"
53	8.74	3.5	長方形	2.0	1.5	"
54	8.61	4.2	長方形	1.9	1.7	"
55	8.59	4.0	長方形	2.1	1.9	"
56	8.58	3.7	長方形	2.0	1.7	"
57	8.56	--	--	2.6	1.5	"
58	8.56	3.7	長方形	2.8	2.2	"
59	9.03	--	--	2.4	--	一部区外
60	8.79	9.6	長方形	3.5	2.4	"
61	8.72	4.8	長方形	2.5	1.8	"
62	8.67	8.0	四辺形	3.2	2.4	"

第20表 2/3区水田計測表 1

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
63	8.64	4.4	台形	2.2	1.7	
64	8.57	6.5	台形	2.9	2.2	
65	8.58	推 13.9	長方形	5.9	2.4	
66	8.65	推 5.8	正方形	2.5	2.2	
67	8.68	—	—	—	2.4	一部区外
68	9.07	—	—	—	—	部分検出・一部区外
69	8.79	2.1	長方形	2.5	0.6	変形
70	8.74	1.8	台形	1.5	1.1	〃
71	8.65	4.3	台形	3.1	1.5	〃
72	8.59	3.9	台形	3.1	1.1	〃
73	8.57	6.1	正方形	2.5	2.3	
74	8.54	12.7	長方形	5.3	2.3	
75	8.55	—	—	(2.9)	—	部分的検出
76	8.63	—	—	—	—	〃 一部区外
77	9.00	—	—	—	(2.9)	一部区外
78	8.73	—	短長方形	—	—	変形 水路の可能性
79	8.70	—	—	—	—	部分的検出
80	8.67	4.9	台形	2.3	2.0	
81	8.55	推 8.5	(台形)	—	2.2	変形
82	8.52	推 9.3	(台形)	3.4	2.8	〃
83	8.46	—	—	—	(2.5)	〃 部分的検出
84	8.52	—	—	—	—	〃
85	9.13	—	—	—	2.3	一部区外
86	8.92	推 5.2	正方形	2.5	2.0	
87	8.81	—	—	2.6	2.1	部分的検出
88	8.77	—	—	—	—	〃
89	8.70	推 5.0	長方形	2.5	2.0	〃
90	8.67	—	(長方形)	—	(1.0)	変形
91	8.66	—	—	—	1.1	〃
92	9.17	—	—	—	—	一部区外
93	8.98	—	—	—	1.9	〃
94	8.85	—	—	—	—	〃
95	8.80	—	—	(4.6)	—	〃
96	8.65	—	—	—	—	〃
97	8.80	—	—	—	—	〃

水田計測表 (2/3区 6層水田)

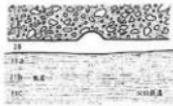
No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.38	—	—	—	—	大 一部区外
2	9.02	—	—	—	3.3	根 部分的検出
3	8.99	—	—	—	9.5	横 〃
4	9.05	—	—	—	—	区 一部区外
5	—	—	—	—	—	画 部分的検出

水田計測表 (2/3区 3層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.99	—	—	—	—	一部区外
2	10.10	—	—	—	—	〃
3	9.9	—	—	—	(5.5)	田面浸食
4	10.14	—	—	—	—	〃
5	(10.33)	—	—	—	—	一部区外
6	10.06	—	(長方形)	—	—	一部トレンチ
7	9.84	—	(台形)	(13.5)	10.5	田面浸食
8	9.72	—	台形	(9.0)	3.0	〃 変形
9	9.82	—	台形	(10.2)	6.0	〃
10	10.02	—	—	—	(9.0)	一部区外 変形
11	10.09	—	—	—	9.3	〃
12	9.84	61.1	長方形	9.7	5.7	
13	9.63	120.4	長方形	12.7	9.7	
14	9.79	—	—	(12.0)	—	一部区外 変形
15	10.03	—	—	—	—	〃
16	10.10	—	—	—	—	〃 変形
17	10.13	—	—	14.4	7.0	〃
18	9.83	182.2	正方形	14.2	12.6	
19	9.50	205.8	正方形	15.2	14.0	
20	9.62	—	—	—	—	一部区外
21	10.05	—	—	—	—	田面浸食
22	10.12	—	—	—	7.0	〃
23	9.97	推 73.0	長方形	10.0	7.0	一部トレンチ
24	9.68	83.8	長方形	11.4	6.5	
25	9.59	—	長方形	7.7	5.9	一部区外
26	10.05	—	—	—	(8.5)	〃
27	9.92	—	—	8.7	7.0	田面浸食
28	9.82	—	(正方形)	9.1	8.1	〃
29	9.67	推 114.0	長方形	12.7	7.4	
30	9.67	—	—	—	(7.8)	一部区外
31	10.22	—	—	—	(9.7)	田面浸食
32	9.59	—	長方形	(20.5)	(9.3)	〃 (2枚の明確性)
33	9.40	—	長方形	12.6	8.4	田面浸食
34	9.45	—	—	—	—	一部区外
35	10.15	—	—	—	—	〃
36	10.09	—	(長方形)	12.2	8.6	田面浸食
37	9.98	—	(長方形)	33.8	12.0	〃 (3枚の明確性)
38	10.06	—	—	—	—	一部区外
39	9.76	—	(長方形)	20.0	(4.5)	〃 (2枚の明確性)
40	9.60	—	—	—	—	〃
41	9.77	—	—	—	—	一部区外
42	9.62	—	—	—	—	〃

第21表 2/3区水田計測表 2

瀬名遺跡 2/3区 20層水田(時期 弥生時代中期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向の東端に近い。
	② 地形面の変化	調査区全体に洪水流により深く抉られた痕跡が残り、はっきりとわからない。おおよそ西から東へと緩やかに低くなる地形が推定される。
	③ 水田の範囲と面積	浸食痕跡が多く、畦畔の一部のみ検出されたので、不明。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ1~1.5mの砂礫層。
	⑤ 水田土壌	灰褐色粘土層。
	⑥ イネのプラントオパール	<D18地点> ①7,800個/区 * 2/3区で最高値 ②2,900個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	黒色粘土層。調査区によって黒泥層と呼んでいるが、瀬名遺跡を通じて存在。
	⑧ 畦畔の規模	調査区中央に下端幅約50cm、高さ約5cmの畦畔が2本。また、調査区東南隅に下端幅1m以上、高さ約10cmの畦畔と思われる高まりの一部が検出された。
	⑨ 畦畔の構造	いずれも簡単な盛土による。
	⑩ 水田区画の方法	2本の小畦畔が一部で直交するように検出されたので、区画等ほとんどのことが不明である。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	不整形の落ち込みが多数みつけたが、足跡とは断定できない。調査区全体に洪水流により深く抉られた痕跡が残っている。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	調査区東端を流れるS R22001とそれに合流するS R22002。
	⑯ 水路	S R22002には堰と考えられる杭列があり、ここから何処かに導水していたのであろう。
道物	⑰ 水口	なし。
	⑱ 遺物の種類	浸食痕跡中から弥生土器片、縄文土器片、打製石斧が出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	浸食痕跡中から出土した条痕文の付いた弥生土器片と上層16層水田の時期との関係より推測。
	⑳ 隣接区との対応関係	1区の35層(杭を12本検出)、6区23a層等、水田区画は検出できないものの、導水路や堰など水田の存在を想定させる遺構面である。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 17~19層の厚い砂礫層によってバックされている。洪水流はかなり激しかったとみられ、20層上面は、ほとんどが浸食されてしまっており、畦畔も一部分で検出されたのみである。20層上面が当時、水田として使用されていたかは確実ではないが、イネのプラントオパールは非常に高い値を示した。

第22表 2/3区水田観察表1

瀨名遺跡 2/3区 16層水田(時期 弥生時代中期後葉)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向の東端に近い。					
	② 地形面の変化	調査区の西半部は下層の17~19層砂礫層の影響で微高地を形成し、水田は東半部の地形の低いところで検出され、西から東へ、北から南へと低くなる。(8層水田の状況と類似している) 東西方向で約10cm/10m、南北方向で約20cm/10mの傾斜を示す。					
	③ 水田の範囲と面積	調査区東半部のみで、面積にして約750㎡。 微高地との間に大規模な畦畔があり、これが水田域と非水田域を面していると考えられる。					
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ20~60cm程の砂礫層(15層)によって被覆される。					
	⑤ 水田土壌	茶褐色粘土層。厚さ10cm前後。					
	⑥ イネのプラントオパール	<table border="0"> <tr> <td><B14地点></td> <td><D18地点></td> <td><E12地点></td> </tr> <tr> <td>1,900個/g</td> <td>900個/g</td> <td>① 0個/g ② 0個/g ③ 0個/g</td> </tr> </table>	<B14地点>	<D18地点>	<E12地点>	1,900個/g	900個/g
<B14地点>	<D18地点>	<E12地点>					
1,900個/g	900個/g	① 0個/g ② 0個/g ③ 0個/g					
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	17~19層は厚さ1m以上もある砂礫層。一部で礫と砂は分離できるが、17~19層では一括して砂礫層と呼ぶ。					
	⑧ 畦畔の規模	水田城西側の南北方向の畦畔、調査区北東隅に一部みられる畦畔は、下端幅約1.2m、高さ15~25cmと大規模。その他は下端幅約40cm程の小規模な畦畔。					
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。					
	⑩ 水田区画の方法	大規模な畦畔で囲まれた区画の内側を東西南北に小規模な畦畔に沿って細かく区画している。小規模な畦畔は、南北方向が基軸になっていると考えられる。					
	⑪ 水田区画の形	南北に長い長方形。					
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	総枚数は22枚。そのうち面積を確定しうるものは12枚。最大約43㎡、最小5.4㎡、平均約28㎡。					
	⑬ 田面の状態	水田面には多くの足跡が残されていた。区画により疎密が異なり、東西方向に一定間隔で歩行するもの、畦畔に沿っているものがわかり、埋設前の作業や水田面の状態が程度推測できる。					
遺物の種類	⑭ 水源	不明。					
	⑮ 自然流路	なし。					
	⑯ 水路	S D21601。幅約0.7m、深さ約0.5m、底は丁寧に成形されている。南東の微高地を北から南に向かって緩やかに凹曲しながら流れている。					
年代観	⑰ 水口	明確なものが3カ所に認められる。一部には畦畔壁に水の落ちた痕跡もみられる。					
	⑱ 遺物の種類	弥生土器片。田下駄、鍬、曲物等の木製品。					
遺構確認面とその図	⑲ 年代推定の根拠	S D21601の緑より出土した壺の口縁部は、有東式土器の段階と思われる。					
	⑳ 隣接区との対応関係	1区の28層水田、5区の14層水田、また10区の99層水田でも有東式段階の土器を伴う。この時期の水田は、水路や水口を伴い、整然とした小規模な区画のようである。					
その他	㉑ 自然科学的分析						
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	<p>(模式図)</p> <p>(説明)</p> <p>15層の砂層によってバックされた状態で検出され、断面、平面精査でも畦畔の高まりを良好な状態でとらえることができた。大規模な畦畔と小規模な畦畔に明確に区別されているように感じられた。</p>					

第23表 2/3区水田観察表2

瀬名遺跡 2/3区 14層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西範囲の東端に近い。
	② 地形面の変化	北から南へと低くなる。東から西へは若干低くなる。水田面の標高は東端で7,816m、西端で7,549m、北端で8,014m、南端で7,772m。此高差は東西方向がほぼ平坦で3.3cm/10m、南北方向で8.1cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区ほぼ全域にわたって検出された。面積にして約3,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	調査区東側では水田直上を13層砂層が被覆するが、西側については砂層が存在せず、12層水田の土壌と分層が困難な部分もある。(12層の耕作時に砂層がまきあげられた可能性が考えられる)
	⑤ 水田土壌	暗茶褐色粘土層 厚さ20~30cm。
	⑥ イネのプラントオパール	<B14地点> ①5, 100個/8 ②4, 800個/8 <D18地点> ①3, 900個/8 ②1, 900個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	厚さ30~60cmの砂層
	⑧ 畦畔の規模	東西方向2本、南北方向3本の大規模な畦畔を検出。幅約1m、高さ約20cm程度。一部、畦畔の高まりは確認されず、杭列のみの検出箇所もある。小規模な畦畔は検出できなかった。
	⑨ 畦畔の構造	畦畔には杭列、芯材を伴う部分が多い。杭は広葉樹材が多く使われていて、12層水田の多数の杉材の角杭とは異なるのが特徴である。広葉樹の杭の圧密化された様子も見る事ができる。
	⑩ 水田区画の方法	東西方向2本、南北方向3本の大畦畔がT字形にほぼ直交するような形で大規模な区画をなす。杭は南北方向の畦畔より東西方向の畦畔に多いようで、東西方向を基軸にしていたと考えられる。
	⑪ 水田区画の形	四周を畦畔で囲まれた区画が検出されていないことから、形、規模とも不明である。しかし小規模な区画は確認できなかった。
	⑫ 枚数と面積	検出された枚数は7枚。面積は不明。ただ、調査区中央のST4は一辺25m、面積625㎡以上の規模と推定できる。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	調査区西側の水田域に、足跡と共に三日月または半月形の農具痕跡が検出された。痕跡中には13層と思われる砂層が入りこんでいる。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
年代観	⑰ 水口	不明。
	⑱ 遺物の種類	畦畔の芯材等にされた建築部材、田下駄(10枚以上)と木製具類。弥生土器片。
	⑲ 年代推定の根拠	畦畔内部より登呂式段階と思われる土器片が出土した。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	5区13層(森林、掘立柱建物跡、流路とその中の埋跡)、6区18層水田。S字を伴う杭列水田直下の遺構面。杭列水田にそのまま踏襲される大規模な区画をもつようだ。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	⑳ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) <p>(説明) 調査区東側では畦畔の上面を13層の砂層が被覆するが、西側には間層を挟まずに直上が12層水田。12層水田の畦畔の位置とはほとんど変わらず、検出できなかった14層水田の畦畔の高まりは、12層水田の畦畔解体、杭取り上げの際に削ってしまった可能性がある。</p>

第24表 2/3区水田観察表3

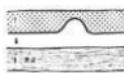
(2/3区)

瀬名遺跡 2/3区 12層水田(時期 弥生時代末~古墳時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西範囲の東端に近い。
	② 地形面の変化	北から南へ、東から西へと低くなる。水田面の標高は東端で8,156m、西端で7,719 m、北端で8,414m、南端で8,040m。比高差は東西方向が5.5cm/10m、南北方向が12.4cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区西側は洪水による浸食を受けているが、調査区内ほぼ全域にわたって検出された。面積にして約5,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ5~10cmの黒肥層。
	⑤ 水田土壌	黄褐色を呈し、植物遺体を含む粘土層。平均して15cm~20cmの厚さ。
	⑥ イネのプラントオーバー	<B14地点> ①3,800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	厚さ5cm程の砂層(13層)が直下。しかし、この砂層は調査区東半部のみ存在し、西半部では12層水田の直下に14層水田が存在する形をとる。
	⑧ 畦畔の規模	下端幅約1m、高さ30cm程の大規模な畦畔。一部、杭列のみの検出にとどまった畦畔もあるが、小規模な畦畔は確認できなかった。
	⑨ 畦畔の構造	6本のうち、ほとんどの畦畔に杭列、横板、盛土内の芯材等の補強が伴う。特にS K21201には密集して杭が打たれ、大型の舟材等が埋め込まれていた。
	⑩ 水田区画の方法	南北方向4本、東西方向2本の畦畔がT字形にほぼ直交し大規模な区画をなす。
	⑪ 水田区画の形	畦畔がほぼ直交するが、西側の畦畔がみつかった区画はないため大きさ、形とも不明。しかし小規模な区画は確認できなかった。
	⑫ 枚数と面積	7枚。面積は推定で500~600㎡以上と考えられる。
	⑬ 田面の状態	足跡等特に認められない。
用排水の状況	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	S K21206盛土内を横切るように木樋状遺構がありST5とST6の間を通水していたと考えられる。
遺物	⑱ 遺物の種類	畦畔内を中心に農具をはじめ大量の木製品が検出された。特に40枚数にも及ぶ田下駄の出土、また単構造船の部材の出土は特筆すべきことである。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	S字状口縁壺形土器が土壌中にある排水溝より出土した。
	⑳ 隣接区との対応関係	1区の22層水田、5区の10層水田、ともに大規模な区画をなす畦畔に杭列を伴う水田。瀬名遺跡全体に同様の形態をもった水田が広がっている。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 畦畔は黒泥に被覆される形で検出され、高まりも明瞭なものがあつた。また、杭列も伴っており、明確に大規模な区画をなしていることがわかつた。

第25表 2/3区水田観察表4

漸名遺跡 2/3区 8層水田(時期 古墳時代後~奈良時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西範囲の東端に近い。									
	② 地形面の変化	調査区西半部は下層10層礫層の影響で微高地を形成する。水田跡は東半部のみであり、1区の方向へ向かって低くなっている。水田面は北から南へ18~38cm/10m、西から東へ6~10cm/10mの割合で低くなっている。									
	③ 水田の範囲と面積	調査区の東半部のみで、面積にして約1,600㎡。									
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ10~20cm程の砂層(7層)によって被覆されている。この砂層はおそらく流路S R 20801の洪水によって運ばれたものと考えられる。									
	⑤ 水田土壌	灰色粘土層。厚さ15~20cm。									
水田の状況	⑥ イネのプラントオペール	<table border="0"> <tr> <td><B14地点></td> <td><B18地点></td> <td><E22地点></td> </tr> <tr> <td>①3,000個/8</td> <td>①3,000個/8</td> <td>① 900個/8</td> </tr> <tr> <td>②4,400個/8</td> <td>②1,700個/8</td> <td>②4,500個/8</td> </tr> </table>	<B14地点>	<B18地点>	<E22地点>	①3,000個/8	①3,000個/8	① 900個/8	②4,400個/8	②1,700個/8	②4,500個/8
	<B14地点>	<B18地点>	<E22地点>								
①3,000個/8	①3,000個/8	① 900個/8									
②4,400個/8	②1,700個/8	②4,500個/8									
⑦ 直下の層の土壌	厚さ30~50cmの黒泥層。										
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	調査区東南隅に、幅約1m、高さ約20cmを測る南北方向の大規模な畦畔がある。その他には、全体に幅約40~60cm、高さ約5cmの畦畔が多数検出された。									
	⑨ 畦畔の構造	杭、矢板は無く、全て盛土による。									
	⑩ 水田区画の方法	南北方向の大規模な畦畔の他は、やや湾曲しながらほぼ南北に延びる10本の畦畔を基軸として、東西に枝畦畔をだす形で小規模な区画を形成する。水路の両側には堤を兼ねた若干大さめの畦畔が左右に造られている。畦畔の方向は正方位に近い。									
	⑪ 水田区画の形	正方形ないし南北に長い長方形の小規模な区画。									
	⑫ 枚数と面積	検出された水田の枚数は約110枚。そのうち面積が確定しうるものは60枚あまり。1辺が2~3m、面積は10㎡を越えない程度の小規模なものがほとんどである。最大29㎡、最小2㎡、平均約8㎡。									
⑬ 田面の状態	無数の足跡および10cm程の円形又は楕円形の落ち込みがみつかった。足跡の規則性や歩行単位はつかめていない。										
用排水の状態	⑭ 水源	不明。									
	⑮ 自然流路	S R 20801。									
	⑯ 水路	南北方向のS D 20801。幅約1m、深さ約30cm程で、両側に畦畔を兼ねた堤を伴う。									
	⑰ 水口	畦畔の中央部や交差部で盛土が切断されたところが多い。ほとんどが東西方向の畦畔であった。しかし、水路S D 20801と水田面の間には水口らしきものはなかった。									
遺物	⑱ 遺物の種類	ほとんどなし。水田面直上7層砂層中より土師器片と曲物、鞍の一部が出土。									
年代観	⑲ 年代推定の根拠	時期を決定できる遺物がなため、6層(平安後期)と9層(古墳中期)の時期から考えるほかない。									
	⑳ 隣接区との対応関係	1区19層水田下面、6区13層水田と対応できそうである。この時期は、奈良制地割の方向でなく、正方位に近い方向をもった畦畔による区画になりそう。									
その他	㉑ 自然科学的分析	花粉分析の結果、木本花粉ではスギ属が40%、アカガシ亜属が20%、草本花粉ではイネ科が約30%を示す。									
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	<p>(模式図)</p>  <p>(説明)</p> <p>7層の洪水砂によってバックされた状態で検出され、断面平面とも畦畔の高まりをとらえることができた。堤をもった水路を伴い、多くの畦畔によって碁盤目状の区画を形成している。</p>									

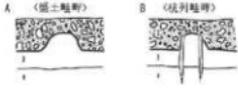
第26表 2/3区水田観察表5

瀬名遺跡 2/3区 6層水田(時期 平安時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西両側の東端に近い。		
	② 地形面の変化	調査区西半部は微高地を形成し、東側へ向かって低くなっている。水田域は北から南へ3cm~4cm/10m、西から東へ8cm~14cm/10m低くなっている。		
	③ 水田の範囲と面積	調査区東半部の低地のみで検出された。水田の範囲は面積にして約1,800㎡。		
土層の状態	④ 直上の層の土壌	6層上面には厚さ5cm程の黒泥層が覆う。この層は1区でも確認されている。(19層黒色土層)		
	⑤ 水田土壌	淡黄褐色粘土。根などの植物遺体が一部みられる。厚さ20~25cm。		
	⑥ イネのプラントオパール	<B14地点> ①2,900個/区 ②1,800個/区	<B18地点> ①5,000個/区 ②2,900個/区	<E22地点> ①4,500個/区 ②2,600個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	厚さ10cm前後の砂層(7層)。		
	⑧ 畦畔の規模	南北方向1本、東西方向3本の畦畔。南北方向の畦畔(S K20602)は下端幅2.5~4m、高さ30cm程を測り、大規模。		
	⑨ 畦畔の構造	盛土によるものだけで、杭、矢板は伴わない。S K20602の盛土中には多くの木片や根茎が芯材として埋め込まれていた。		
	⑩ 水田区画の方法	直交する南北方向のS K20602、東西方向のS K20601がまずつくられたようである。南北方向の畦畔の方向は正方位の北より約35°西へ傾いている。これは条里型地割の方向と一致する。		
	⑪ 水田区画の形	四周の畦畔が検出された水田区画はなく、形、面積とも不明。		
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	5枚には分けられる。各水田毎の面積は不明。		
	⑬ 田面の状態	足跡等の凹凸は、ほとんど検出されない。		
	⑭ 水源	不明。		
遺物の種類	⑮ 自然流路	なし。		
	⑯ 水路	なし。		
	⑰ 水口	S K20601にはS K20602との交差部付近とそこから12m程東に木樋状遺構があり、S T3とS T4の間の通水をしていたと考えられる。S K20602の北半にも同様の遺構があった。		
年代観	⑱ 年代推定の根拠	畦畔内部より出土した灰輪陶器(碗)のスタイルより平安時代後期と推定。		
	⑲ 隣接区との対応関係	5区8層水田、1区19層水田。いずれも条里制地割の方向に一致した区画をもつ。		
その他	⑳ 自然科学的分析	水田の指標昆虫であるミスマシの化石がみつかり、6層は水田であった可能性が高い。愛知県農林事務所よりご教示を受けた。		
	遺構確認面とその図	⑳ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 	
		(説明)	6層内に客土する形で盛土をしてある。粘土(6層)に粘土(5層)が被覆する状態の中で検出されたが、高まりが20cm程認められ、畦畔としては明確であろう。畦畔の規模もかなり大型で、南北方向1本に3本の東西方向の畦畔がほぼ平行するような形で区画をなしている。	

第27表 2/3区水田観察表6

瀬名遺跡 2/3区 3層水田(時期 近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西範囲の東端に近い。
	② 地形面の変化	遺跡の東方、瀬名丘陵の付け根付近の微高地から西へ低くなっていく地形上にあると考えられる。水田域は北から南へ2~3cm/10m、東から西へ7~14cm/10mと低くなっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区西半部で概30m程にわたって、洪水流で遺構面が削りとられているが、調査区のほぼ全域で検出された。面積にして約4,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ約1~1.5mの砂礫層(2層)。
	⑤ 水田土壌	暗褐色粘土層。厚さ20~25cm。
水田の状況	⑥ イネのプラントオーバー	<B18地点> ①1,400個/g ②1,500個/g <B14地点> ①1,300個/g
	⑦ 直下の層の土壌	黄褐色砂質粘土層(4層)。東半部では3層との間に薄い砂層を挟んでいる箇所もあり、4層も水田であった可能性が考えられる。しかし、遺構検出はできなかった。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	検出された畦畔はいずれも下端部で60~80cm、高さ15cm前後。盛土だけのものと杭を伴うものとの2種類がある。
	⑨ 畦畔の構造	畦畔によっては1~3列の杭を伴う。特にSK20302には部分的に3列、数にして約300本という多量の杭が打たれている。また、盛土の中に石や粗梁を埋め込んで補強するものもみられる。
	⑩ 水田区画の方法	まず杭列を伴う畦畔が中心的につくられたようである。その他の南北方向の畦畔は1区画毎にほぼ直線的に伸びるが、東西方向の畦畔はT字状に交わるものが多く、基軸は南北方向と考えられる。南北畦畔の方向は正方位の北より約35°西へ傾いている。これは条里型地割の方向と一致。
	⑪ 水田区画の形	長方形ないし正方形に近い方形。規模も形も均一でない。
	⑫ 枚数と面積	全体で26枚の水田跡を確認した。そのうち面積が確定しうるものは9枚。最大182㎡、最小34㎡、平均約110㎡。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	田面には5cm前後の深さで、砂をかぶった状態で落ち込みが検出された。足跡と思われるが、指先まではっきり確認できるものはなく、まとまった歩行単位としてもとらえられない。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
遺物の種類	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	明確なものは3ヶ所。SK20305に沿って西側に、東西方向の畦畔が切断されている。
年代観	⑱ 遺物の種類	水田面直上の2層砂礫中より、素焼きの土器片に混じって、陶磁器碗・高坏片、青磁碗片が出土。漆碗破片も出土している。
	⑲ 年代推定の根拠	水田面直上からの陶磁器・青磁片の出土と隣接区5区3層水田との土層対比による。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	5区の3層水田(近世)、1区の10層水田(近世)と対応できるか。
	㉑ 自然科学的分析	花粉化石 <B14地点> 木本花粉(37%)…スズメ属多い。 草本花粉(55%)…イネ科多い。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 2層の砂礫層(1m~1.5m)によってバックされており、一部(洪水による浸食痕跡の深い箇所)以外、畦畔の高まりも明瞭に検出された。また、畦畔には多くの杭を伴うものもあり、畦畔としての認定は容易であった。

第28表 2/3区水田観察7

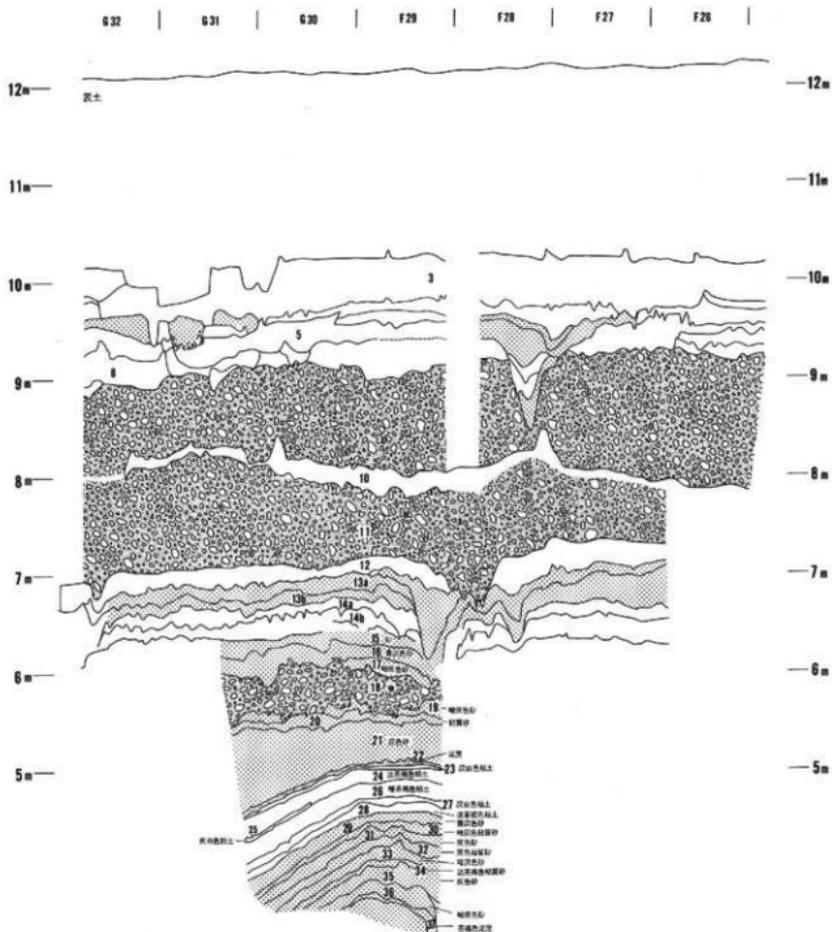
第3節. 5区において検出された遺構

1. 基本層序

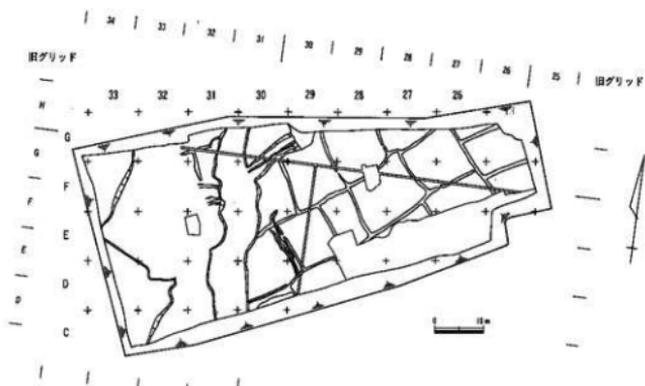
5区の基本的な層は大別して14層である。現地表面(海拔約12m)に対し、縄文時代後・晩期頃といわれるカワゴ平パーミス、大沢スコリアの降灰は約5mを示す。火山噴出物を含む14層下部から盛土下の旧表土までは基本的に粘土と砂礫の互層からなる。14層から8層下層(弥生時代中期～古墳時代中期)の間は、9層、11層とした砂礫層を挟んで、最も急速に埋没化が進行した時期で厚さ約3mを示す。その後、粘土、砂を主として緩やかに堆積し、現在の地形が形成されている。

層序	土色および土質	観 察	イネのアラントオパール (G2S) (E32) (単位は層/g)	遺 構	年 代 範	
客土		表土(宅地化のための客土)			現代	
1層		近・現代の水田層				
2層	青灰色砂質粘土	乾くと貫鉄が発達し、黄褐色を呈す。	0 1099			
3層	青灰色粘土	保水性の良好な土壌	1249	水田	中世～近世	
4層	青灰色砂	乾くと黄褐色を呈す。南側に移るにつれて青灰色砂質粘土に変化する。	0, 0			
5層	青緑色砂質粘土	保水性のある土壌。東側に移るにつれて淡青色粘土層となる。	939,	水田	(平安後～中世)	
6層	暗青灰色砂質粘土	砂と粘土の互層。西側に移るにつれて礫層となる。	0, 1224			
7層	青緑色砂	調査区西側部のみ存在する。	2096, 1032,	0 0		
8層	暗褐色粘土	保水性の良好な土壌。下層には泥炭質強い	5168 4520 3370	水田 流路	平安 古墳中期	
9層	青灰色砂礫					
10層	淡茶褐色粘土	上部に厚さ5cm程の濃い茶褐色泥炭質粘土の帯。	3887	水田	(弥生末～古墳前)	
11層	青灰色砂礫					
12層	灰褐色粘土		<G26> 2400,	<F32> 1100	水田	弥生後期
13a層	青灰色粘土		0, 2800 0, 4000	森林跡 流路・塚 籬立柱建物	弥生後期	
13b層	緑灰色粘土	上層より粘性が高い。調査区東側には存在せず、砂に変わる。	0, 1400 0, 5900			
14a層	淡黒色粘土		14200, 6600,	800 0	水田	弥生中期後葉
14b層	黒色粘土	上層より色調が濃くなる。	0, 0 0, 0			
15層	砂礫	—カワゴ平パーミス、大沢スコリアを含む—			縄文晩期	

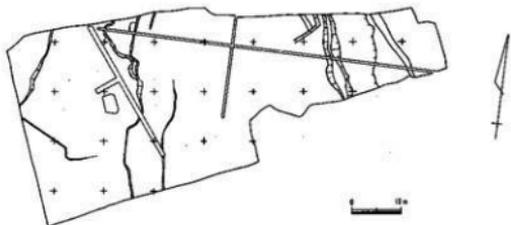
第29表 5区土層観察表



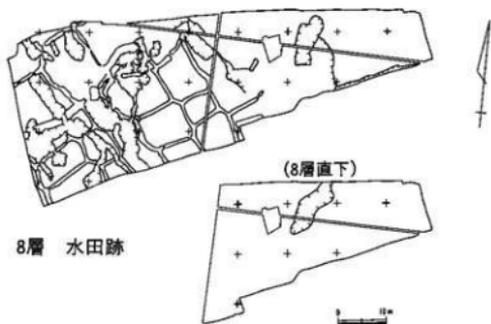
第75图 5区基本土层模式图 (水平1:500垂直1:50)



3層 水田跡

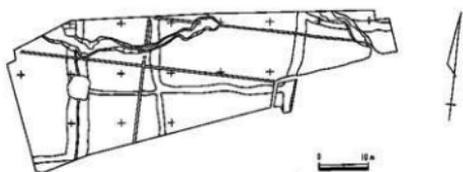


5層 水田跡

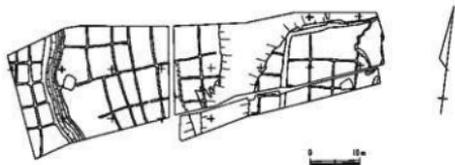


8層 水田跡

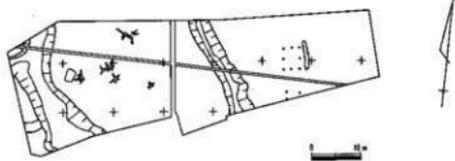
第76図 5区遺構変遷図 1



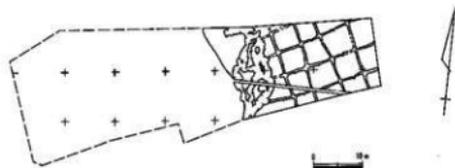
10層 水田跡



12層 水田跡



13層 森林・流路・掘立柱建物跡



14層 水田跡

第77図 5区遺構実測図 2

2. 遺構の変遷

14層上で検出された遺構 水田跡

14層は黒色の粘土層で縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての土層である。14層は、土色の若干の変化によって14a層と14b層とに細分され、14a層の上面より水田跡が確認された。14b層には縄文晩期と考えられているワゴ平パーミス、大沢スコリアの火山灰が含まれている。

KgP, Os

14層は調査区全域で確認されるが調査区中央あたりは凹地にあたり、土層も幅5~6mにわたってなだらかにU字形に落ち込んでいる。そのため、その部分は上層へも影響を及ぼし、古墳時代頃に至るまで、流路(SR51301・SR51201)の河道となっていた。

〈水田跡〉 [第78・79図, 図版91・92・93]

14a層の上面より、比較的小さな区画を示す水田跡が検出された。

洪水浸食

調査区中央部が前述の凹地にあたり、14層を覆う砂層を運んできた強い流れの流路にあたるため、水田跡も流水で削りとられた形となり、検出された水田跡は調査区東半部のみ部分的なものである。

砂被覆

水田面は隙を含まない洪水砂で覆われていたことから、小さな畦畔の残存状態も良く、遺構の検出、認定は比較的容易であった。

(1) 畦畔と区画

小規模区画

検出された畦畔は、小型のもののみで大型のものは検出されなかった。大型の畦畔も本来は存在すると思われるが、調査面積の関係上、大きな区画の範囲等についてはつかめていない。小型の畦畔は、東西方向のもので約E-30°Nの方向で並行し、南北方向のものもほぼそれに直交し並行するため、正方形に近い小さな区画が格子目状に整然とした並びを見せている。畦畔の多くは扁平化しているが、遺存状態が良好なもので上端幅13~15cm、下端幅35~40cm、水田面との比高差が5~10cmで、断面は台形を呈するものが多い。

正方形区画

検出された水田は22枚で、そのうち面積を確定しうるものは7枚である。一枚一枚の水田は、一部南北畦畔の湾曲により形を崩すものもあるが、前述の通り基本的にはほぼ正方形に近い区画で、約17㎡から26㎡の面積を示す。

(2) 水口 [第79図]

東西畦畔

水口は、東西畦畔上中央部に検出されたものが多く、区画内の配水についてはこの水口を通じて各南北列ごとに北から南に向かい、順次小さな区画を通して行ったものと思われる。

水口脇浸食

水口と思われる部分には、水の流れによって田面が削られ扇形に凹んだ状態の箇所がみられ、多くは小さな畦畔を幅約10~20cm程削り取ってつくられている。しかし、最も東よりの田面においては、南北畦畔との交差部に切られている水口が2ヶ所検出されており、南北の列により水口設置の形態を変えたことも考えられる。

水田面の全体的な地形は、北西から南東にむかって緩やかに傾斜しており、最高点の北西隅の標高6.65mに対し、南東隅は標高6.24mと、26mで約40cmの比高差をもつ。

(3) 足跡

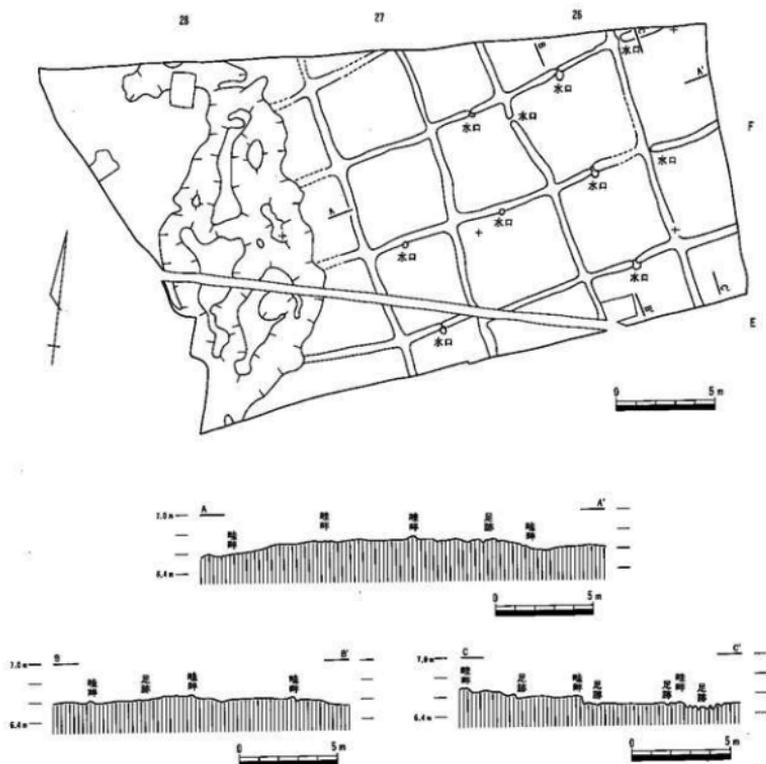
水田内には、3~5cmほどの高さの凹凸が多く認められる。凹みの多くは、人間の歩行によるものか、あるいは他の原因によるものか判断し兼ねるが、不鮮明ながらも足跡と認められる凹みも検出されている。その足跡状の凹みは、多くが不規則に歩き回っている様相を呈しており、歩行単位として明確につかめるものは殆どないが、東西方向に歩行して

いると思われるものも一部みられた。

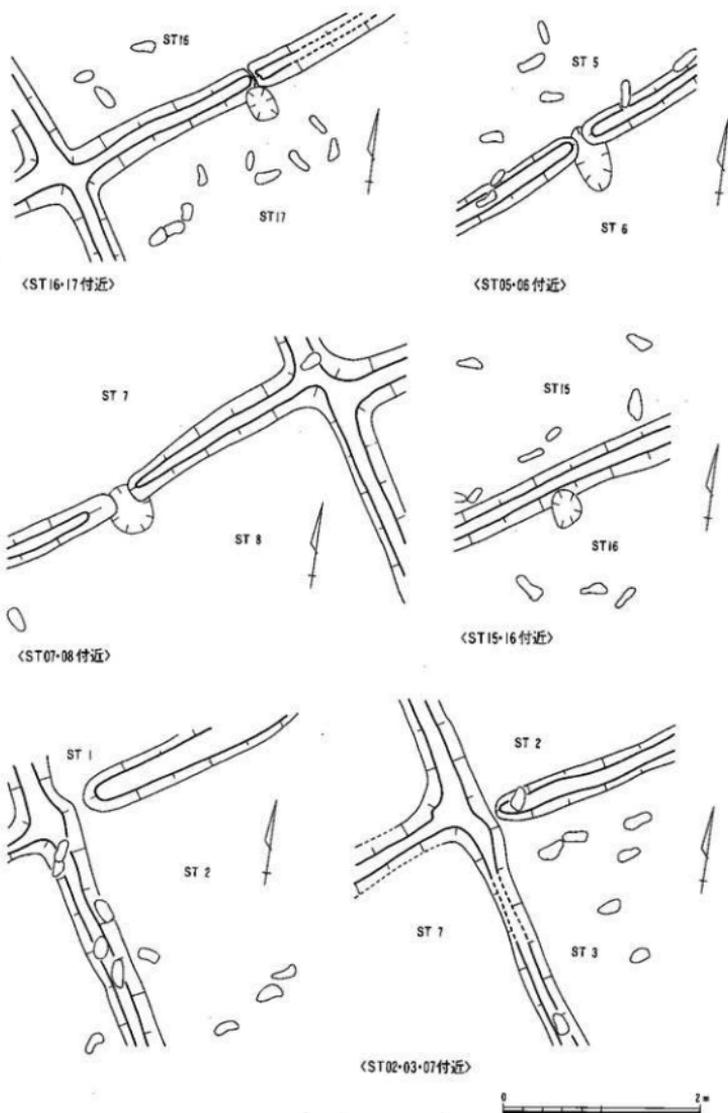
(4) 出土遺物と年代 [第80図]

出土遺物は、水田表面及び畦畔内部からはなく、14層水田の時期の認定は困難であるが、上層の13層検出流路SR51301西側部分に存在する13b層と14層にはさまれた暗青灰色粘土層より、弥生中期の特徴をもつ壺、甕などの土器が数点出土している。この暗青灰色粘土層は、13層流路SR51301が流れる以前にあった凹地に堆積したものと思われ、14層水田はこの粘土層との土層対比からも、弥生中期後葉（静岡平野でいうところの有東式段階）と考えることができる。

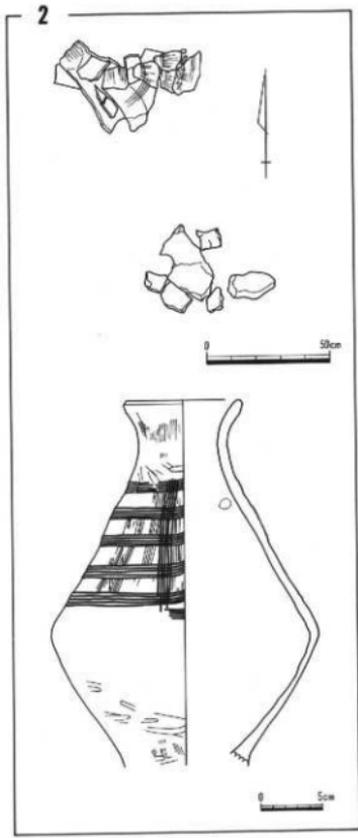
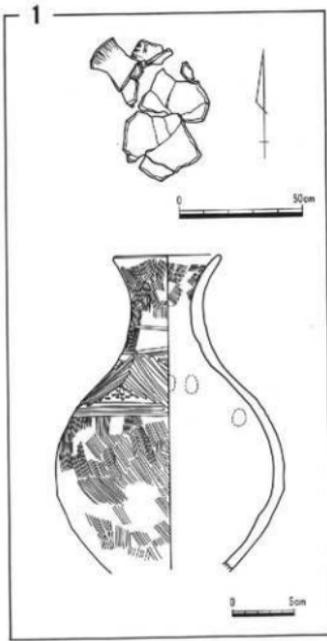
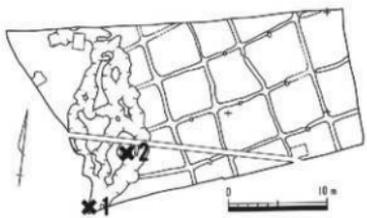
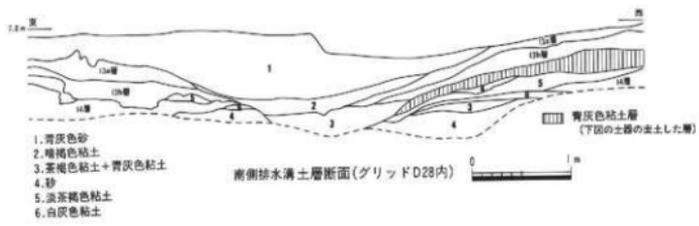
この水田跡はやがて、厚さ約30cmの洪水砂によって埋没し、廃絶されている。



第78図 14層水田エレベーション図 (水平1:250 垂直1:50)



第79図 14層水田水口・足跡検出状況図



第80図 青灰色粘土層出土土器実測図

13層で検出された遺構 森林跡、流路及び堰跡、掘立柱建物跡

調査区東側で検出された14層水田が洪水によって廃絶された時、調査区西側では、その洪水による砂の影響は受けず、14層の直上に粘土層が堆積する。これが13b層とした粘土層である。13b層は、緑色あるいは青色に近いグライ化した粘土層であり、調査区東側には存在しない。調査区東側には洪水がもたらした青灰色砂層が堆積している。

13 b 層

13 a 層

この調査区東側と西側とで異なる土層の上に、全体的に堆積した粘土層を13a層とした。この13a層上面で3本の流路跡 (SR51301・51302・51303)、そしてその内部より5列の堰跡、流路と流路の間の部分からは森林跡などの遺構が検出された。

〈流路跡〉

(1) 流路SR51301 [第83・84図, 図版78・85・86]

堰 2 列

調査区中央部、グリッドF29からD28にかけて北西から南東に流れる幅4m、深さ80cmを測る流路跡である。本流路の調査区南端からは、上層部より1号堰、下層部より3号堰が検出されている。覆土は大きく2層に分けられ、上層が青灰色砂層、下層が有機質を含む茶褐色粘土層である。上層の砂層内部からは、登呂式期と思われる比較的小型の台付甕、頸部から上を欠くが頸下部に櫛指き波状文が施されている厚手の壺の他、有台式の田下駄、三又鍬、刺物の破片などの木製品、数多くの胡桃等種子が出土している。

種 子

(2) 流路SR51302

崖 岸 境

調査区西側グリッドF32からD31にかけて南北に流れる幅2m、深さ15~30cmを測る流路跡である。SR51302はSR51303の最終の流れの部分としてとらえられ、SR51303に比べ幅を狭め、河道をSR51303の左岸付近にとる。また、上層の12層水田の水路SD51201とほぼ同じ位置にある。地形が踏襲されたのであろう。このSR51302の右岸には、長さ2~4mほどの丸太材が南北に途中流木をはさみほぼ一列に配置されており、流路に堤があって、その芯材であった可能性が考えられる。流路内からは四又鍬の一部が出土している。

(3) 流路SR51303 [第83・88・90図, 図版78]

北西に支流

堰 3 列

SR51302の下層部にあたり、調査区西側グリッドF32からD31・32を緩やかに湾曲しながら南北に伸びる幅9m、深さ50cm程度の比較的水深の浅い自然流路と考えられる。覆土は、下層が植物遺体を多量に含む茶褐色泥炭層、上層が灰色砂質粘土層の2層に分けられた。このSR51303には、調査区北西隅右岸より上端幅4m弱の支流があり、本流との交差部には上下2列の堰(4号・5号堰)が検出されている。また、本流のグリッドD31・32においては長さ12m、高さ0.7mを測る非常に大規模な2号堰を検出している。

以上のように3本の流路跡のうち、SR51301・SR51303より5列の堰跡が検出された。以下、それぞれについて概略を記す。

〈堰跡〉

(1) 1号堰 [第85図, 図版78・85]

櫛の転用

SR51301より検出された。流路底に倒れた状態で検出されたが、本来は流路内に直立していたと思われる。8枚の板材とそれを下流側で支える3本の横木とで構成されている。8枚の板材の長さは一定していないが、下端はそろって流路覆土の下層、茶褐色粘土層につきささる状態で検出された。板材はほとんどが建築材等の転用と考えられ、そのうち2枚は接合でき(図中央印)全長1m、中央部幅45cm、厚さ2cm、上縁部の両肩がゆるく内湾する長方形を呈し、下縁部の幅は上縁部に比べてやや広がり、中央部には三角形に配置された3つの孔もみられる。奈良国立文化財研究所の工業普通氏の御教示によれば櫛と考え

ることができるそうだ。一方、堰の裏から長さ158cm、幅35cmを測る4段の幅広の梯子が流路に掛け渡されたような方向で出土した。堰の横板として使用されていたのであろう。

梯子の転用

(2) 2号堰 [第86・87図, 図版78・79・80・81・82]

SR51303より検出された。全長約12m、高さ0.7mを測る大型のものである。使用目的については一部梁としての使用なども考えられるが、流路を全幅にわたって閉塞すること、取水口・導水路をもつこと及びその構造等からみて取水用の堰(井堰)と判断できる。構造的には堰中央部あたりの一箇所のみ合掌堰形態をとめているが、他は堰体前面に密に打たれた杭とその背面の河岸にある立木株を利用して、前後から横木を挟みこむような形をとっている。また、横木に沿って上・下流へ打ち込まれた直立杭、斜材は径5~8cm程の丸太材がほとんどであり、堰体前面には杭が密に打ち込まれているのに対し、背面には支えとなる杭が一部にしか認められず(流失した可能性も考えられるが)、流れの力に対して弱さを感じる。なお、堰体前面には部分的ではあるが、竹などの禾本科植物が斜材に平行し簾状に整然と被覆しており(一部では編んだ状態の箇所も認められ)、所謂「目つおし」によって各杭間の空隙を埋め、漏水防止と塞き上げを行い、水位が上昇したところを堰上流側で確認された西へのびる幅2mの導水路SD51301によって水田域へと水が引かれた可能性が考えられる。井堰構築によってそれまで放置されていた可耕地への積極的な拡大が行われていったことをうかがわせる。

簾状の構造

導水路

(3) 3号堰 [第85図, 図版90]

SR51301下層部より検出された。上層部で検出された1号堰を取り上げた後、流路の下層部調査を実施したところ、1号堰上流側1.5mほどのところに茶褐色粘土層に埋没する形で検出された。全長約1mほどで、規模的には1号堰より小型である。構造的には縦材を背後の横木で支える1号堰とほぼ同じ状況を示す。流水等により埋没時に元の位置より動いたと思われる部材もあるが縦材と思われるものが11本、横木と思われるものが2本ある。材の多くは炭化している。

(4) 4号堰 [第89・91図, 図版88・89]

SR51303の北端、右岸よりの支流内で検出された。全長約3mの小型の堰である。構造的には流路の肩に太い丸太材の横木を渡し、その上流側に立てかけるように細い丸太材を斜めに打ち込んでいる。2号堰と似た構造をもつ。

(5) 5号堰 [第92図, 図版90]

4号堰と同様に、SR51303に合流する支流内より検出された。位置的には4号堰の直下にあたり、覆土の様子も上層とほとんど違いがないため、4号堰との大きな時期差はないものと考えられる。残存状態は悪く、構造を推定するのは困難であるが、おそらく合掌形態の堰であったと思われる。なお、部材の間より木製高環の脚部が検出されている。上部と底部がやや欠損しているが、現状で底径19cm、高さ18cmを測り、上部に穿たれた穴に環部と連結する芯棒が残存している。

木製高環

<森林跡> [第81・82図, 図版80・83・84・88]

東西の流路(SR51301とSR51303)にはさまれた微高地状の地域から、立木株が5本と数個体の土器が検出された。立木株は全て栗の木で、幹の直径部分が50cm程である。根の張り出しは、ほぼ水平に浅く直径2~3mに広がり、切り口の高さは13層の上面でそろっている。その周囲とSR51301周辺からは壺・甕が集中して出土したが、一箇体づつがその場でつぶれたような状態のものも多くみられた。土器は弥生時代後期前半段階のものが中心で

栗の木

土器の集中

あった。流路に挟まれた栗林の中に壺・甕の類がまとめられていたという状況はいかなるものだったのか。堰・専水路が集中している地域だけに、何か水利に関わるような祭祀的な行為の痕跡なのであろうか。

祭祀的性格

〈掘立柱建物跡〉〔第93図、図版78・87〕

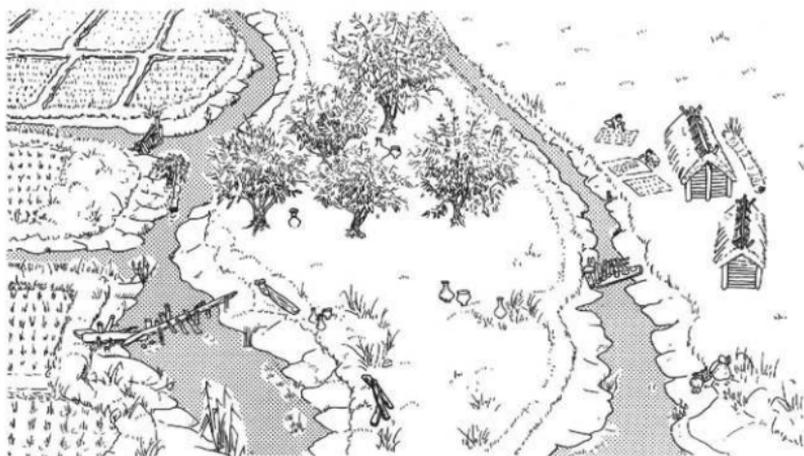
調査区東側にのみ存在する青灰色砂層上面で2棟の掘立柱建物跡を確認した。13a層の出土土器よりこれも弥生時代後期頃に比定されるものである。SH51301より北側に建物跡の検出がなかったことから集落の北端部分のものと考えられる。

(1) SH51301

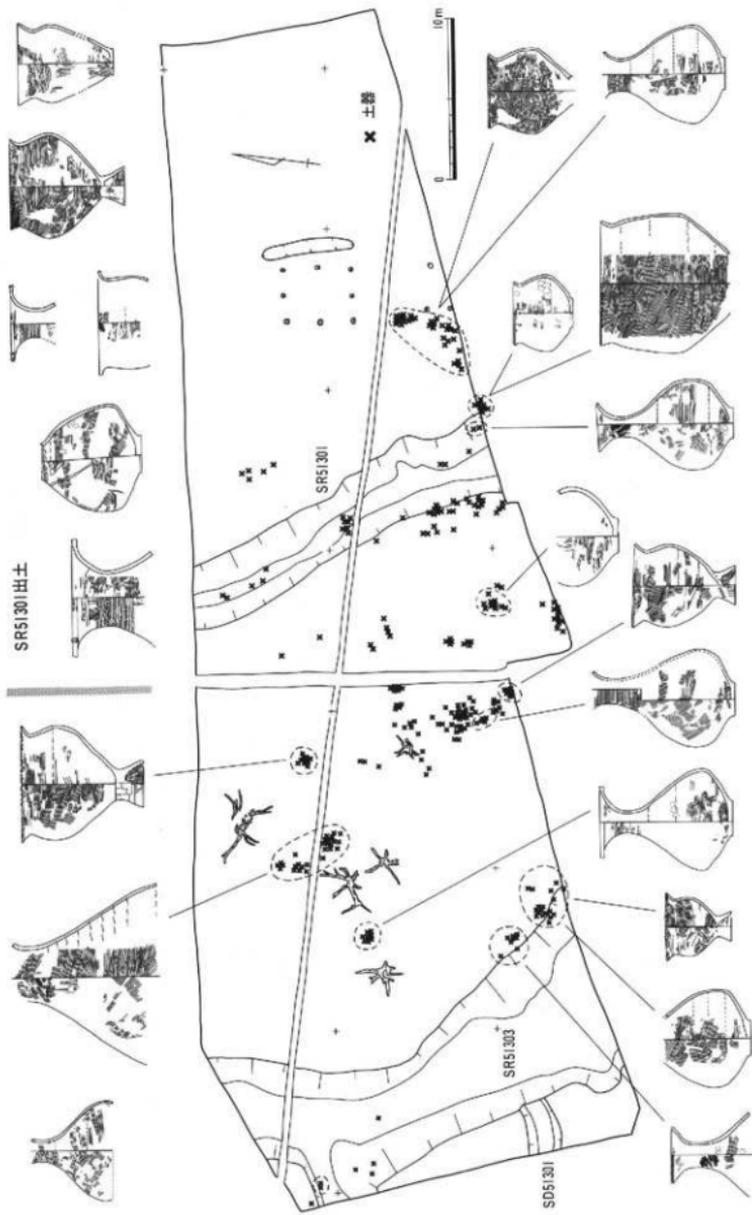
南北棟 グリッドE・F27を中心に検出された2間×2間の南北棟の掘立柱建物跡で、柱穴数8、桁行4.28m、梁間3.30mを計測する。柱間寸法は不等間隔（東西1.54～1.69m、南北2.08～2.20m）で、若干のずれを持つ。柱穴の掘方は隅丸方形が主で、他に円形と槽円形が加わる。径は最小のものが17×20cm、最大のものは30×34cmである。覆土は青灰色砂と淡灰色粘土が主体である。柱穴4より柱根を検出したが、長さ45cm、直径20cmで底部のみを斜めに加工した丸太材である。また東側に約20cmの間隔をおいて、SX51301が検出されている。緩やかに屈曲する溝で、全長5.76m、幅0.94mを計測する。覆土は柱穴と同様であり、内部から数点の木片を確認することができた。覆土の状況からSH51301と同時期のものであり、建物の付帯施設として排水・雨落ちなどが想定できるが、その機能を確定できるものではない。

(2) SH51302

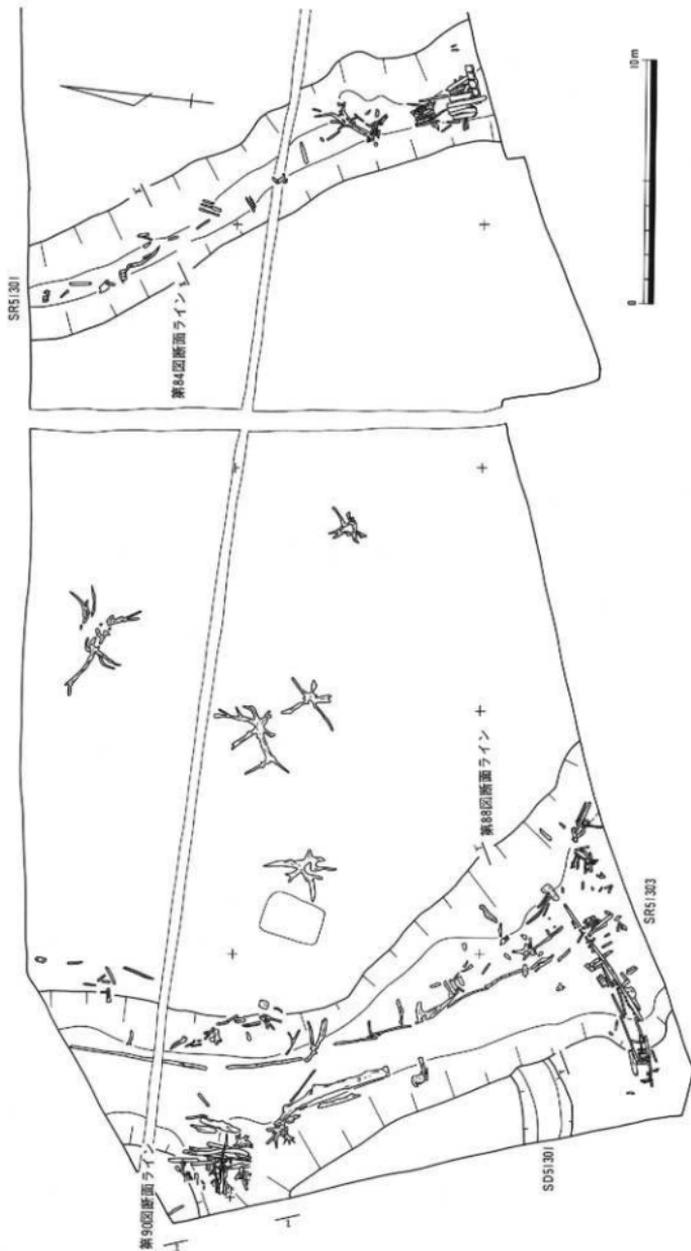
掘方 調査区南端グリッドE27より検出されたものである。調査区外となるため全体の規模形態は不明である。柱間寸法は東西2.87m、南北1.48mである。柱穴の掘方は隅丸方形で規模は径25cm前後、深さは23～30cmである。



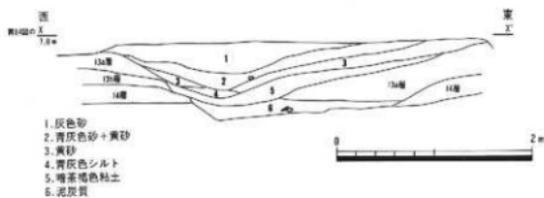
第81図 13層遺構当時の風景想像図



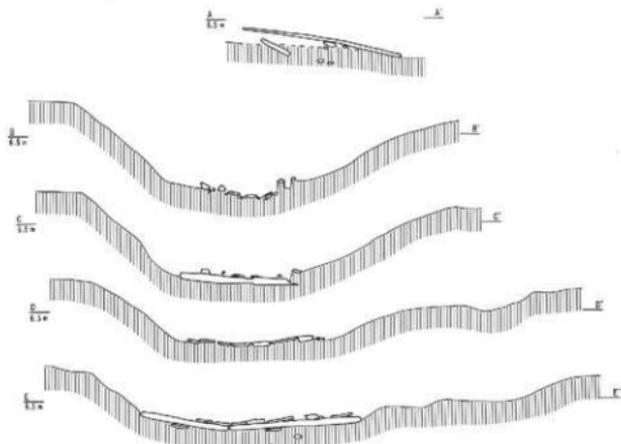
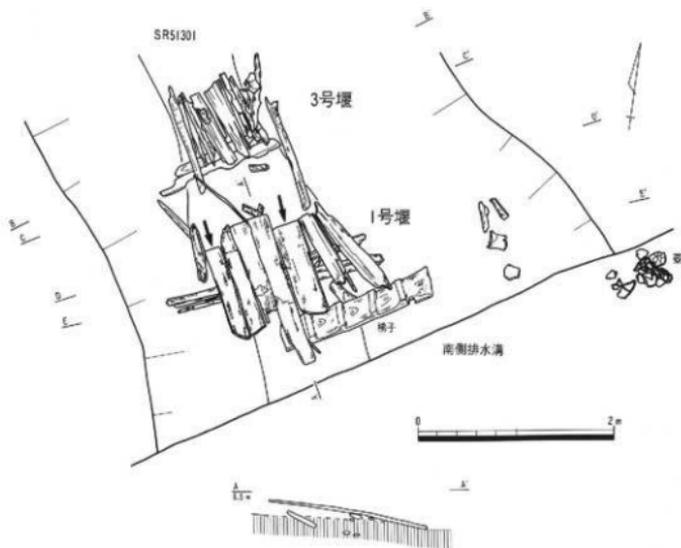
第13期土器出土状況図



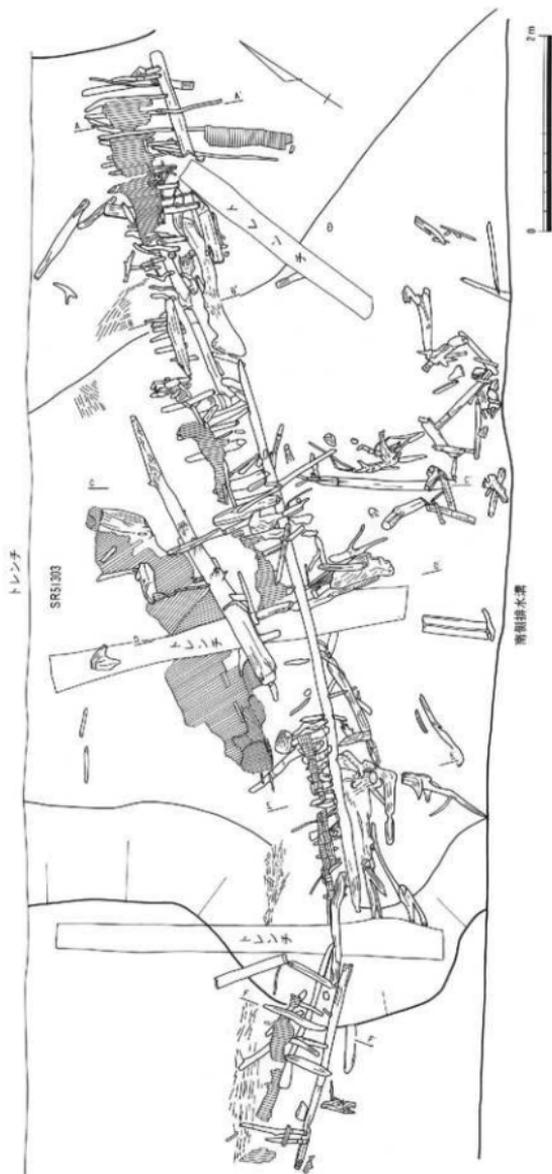
第83図 13層SRS1301・51303実測図



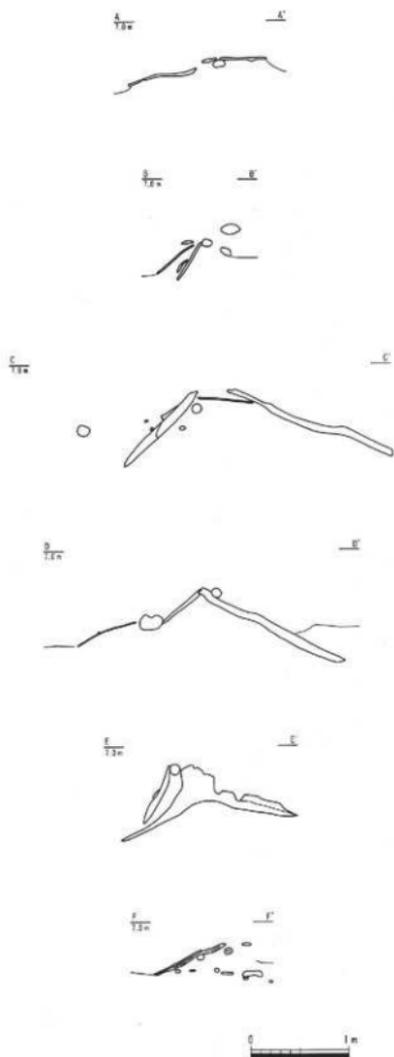
第84图 13層SR51301土層断面図



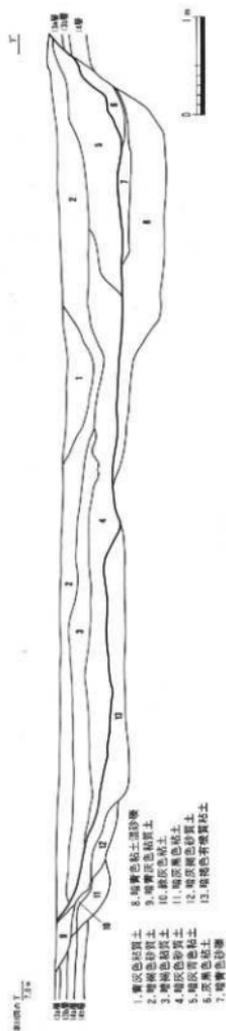
第85图 13層1・3号塚実測図



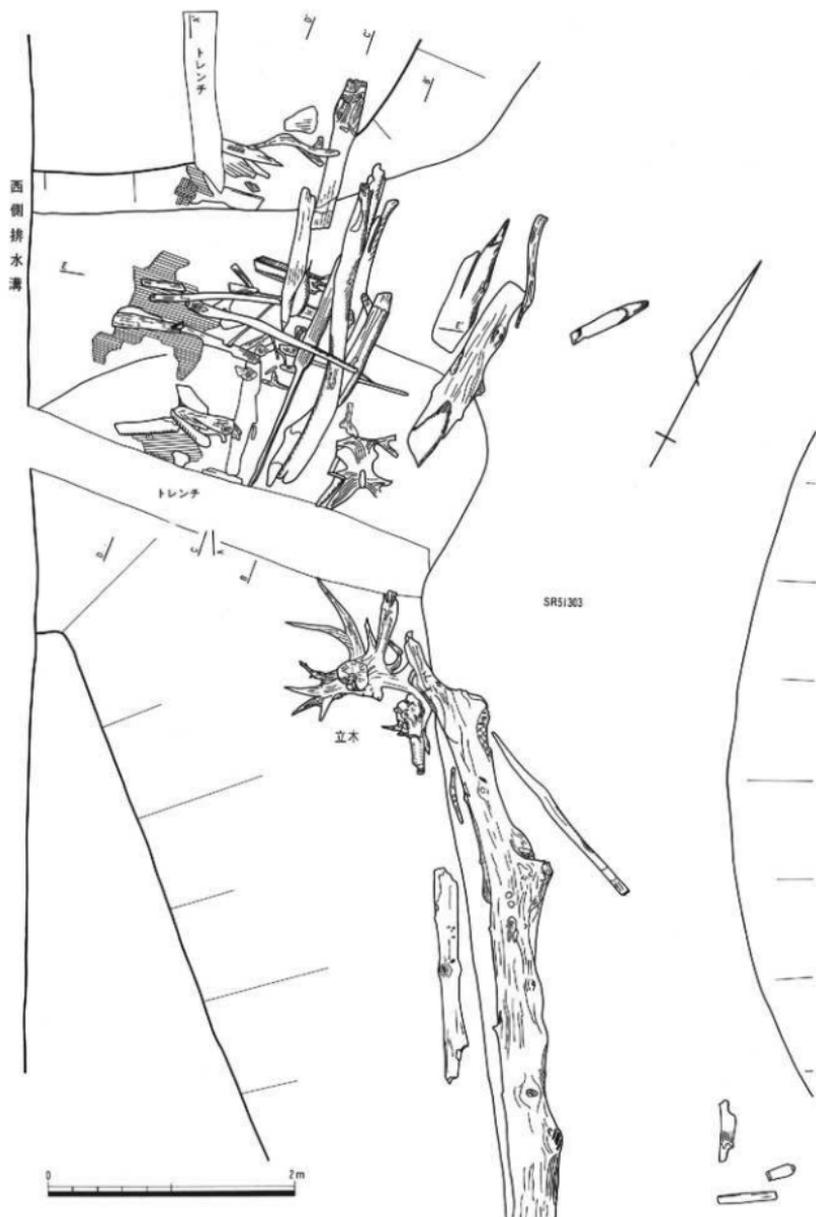
第86図 13層2号壕突測図(1)



第87图 13层2号埋穴测图(2)



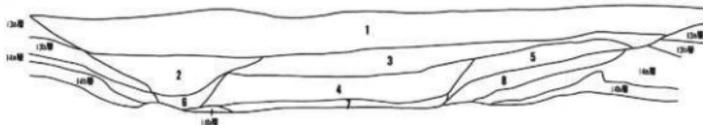
第88图 13层SR51303土层断面图



第89図 13層4号堀実測図(1)

(9区)

第90図の7
1:1



- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. 暗青灰色砂質シルト | 5. 青灰色砂 |
| 2. 多砂暗青灰色砂質粘土 | 6. 淡褐色粘土 |
| 3. 暗青灰色砂質粘土+淡茶褐色粘土 | 7. 青灰色粘土+粗砂+黒色粘土ブロック |
| 4. 淡茶褐色粘土 | 8. 114層+黄灰色砂質粘土 |

第90図 13層SR51303支流土層断面図

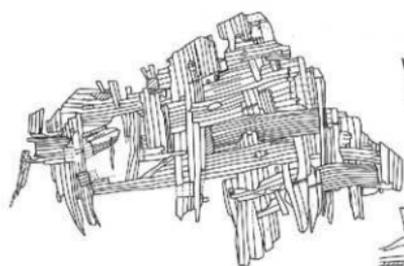
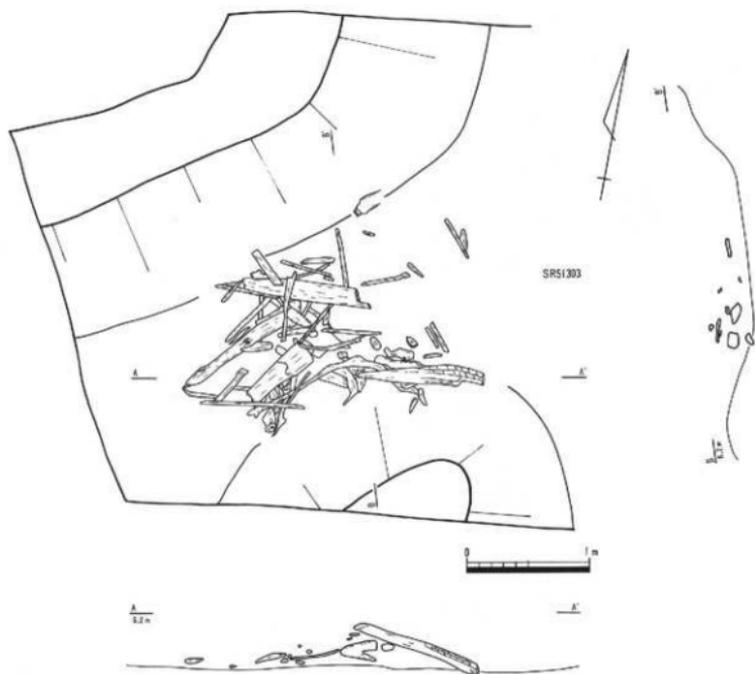
A
1:1



- | |
|------------|
| 1. 青灰色砂 |
| 2. 暗青灰色シルト |
| 3. 暗褐色シルト |
| 4. 暗褐色砂 |
| 5. 暗青色砂 |
| 6. 暗黒褐色砂 |
| 7. 暗褐色粘土 |

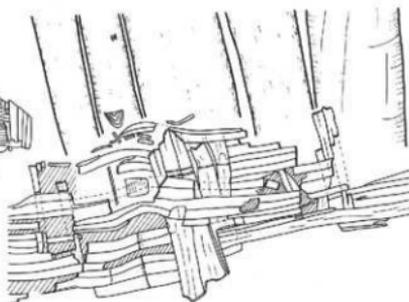


第91図 13層4号塚実測図(2)

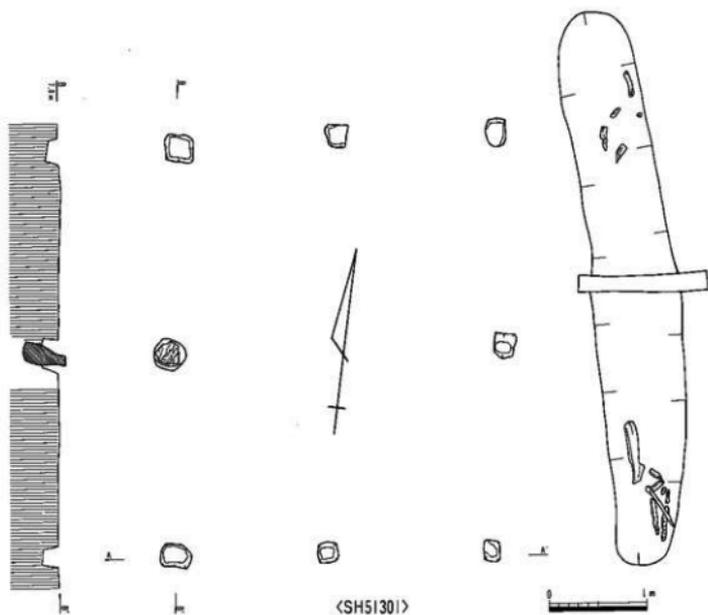


網代状部微細図(1)

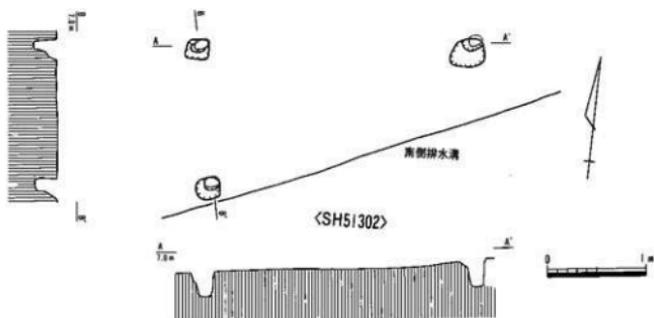
網代状部微細図(2)



第92図 13層5号塚実測図



<SH51301>



<SH51302>

第93图 13層掘立柱建物跡実測図

12層上で検出された遺構 水田跡、流路、水路跡

13層で検出された覆跡をもつ流路が埋没したあと、森林跡も放置される。しばらくの間、粘土層が堆積する落ち着いた時期が訪れ、次の時代にこの粘土層が水田層として使用される。この粘土層が12層で、12層上面で検出された水田を12層水田と呼称した。

〈水田跡〉〔第94図、図版74・75・76・77〕

砂 被 覆

12層水田は上面を厚い砂礫層によって覆われているが、その中でも水田面直上は礫層下の薄い砂層に被覆されている。そのため、砂パックの状態で水田が残されていたこともあって、粘土層の微妙な起伏、畦畔の検出も比較的容易であった。

12層水田は4本の大きな畦畔で区画された中を小さな畦畔で区画するという形をとり、水田面は調査区全体で54枚を確認している。

大規模畦畔

大きな畦畔は、調査区西側に並行して南北に走る2本（SK51201・SK51202）、東側に東西と南北の2本（SK51203・SK51204）が設けられている。以下、その概略を記す。

（1）畦畔SK51201

上端幅50～60cm、下端幅1.5～2m、高さ10～20cm。SK51202と水路を挟んで並行。

（2）畦畔SK51202

水路の境

上端幅約30cm、下端幅約1m、高さ5cm前後を測り、僅かに湾曲して南北に伸びている。SK51201と水路を挟んで並行しており、堤として機能していたようである。SK51201には若干の矢板、SK510202には若干の杭列が伴っていた。

（3）畦畔SK51204

上端幅約50cm、下端幅0.8～1m、高さ約20cm。調査区を南北に走る畦畔で、東西に走るSK51203と交わる。

（4）畦畔SK51203

上端幅約40cm、下端幅0.6～1.2m、高さ10～20cmを測り、グリッドF27でSK51204と交わる。2本の畦畔が交わった西側は水田造成後の流路SR51201のため、検出はされなかったが、畦畔SK51203とSK51204の交点付近からSR51201を横切って若干の杭列がみられ、その延長線上のグリッド29列の排水溝壁に木片の埋め込みと土層の盛り上がり確認されている。おそらくSK51203はもともとSR51201を横切って西へ伸びる大きな畦畔で、洪水流に浸食されやすい場所のため杭によって補強されていたが、結局SR51201によって破壊され、杭列のみがその跡をとどめたものと理解される。

部分的杭列

以上の大きな畦畔によって区画された地域は、大きくSK51201以西（調査区西側部分STⅢ）、SK51202とSK51204によって区切られた部分（調査区中央部STⅡ）、SK51203とSK51204によって区切られた部分（調査区東側部分STⅠ）の3つに分けられる。その3区画の水田造成の在り方を地点別に記述する。

（5）調査区西部の水田区画（STⅢ）

大規模区画

畦畔SK51201、51202および水路SD51201によって区切られた西側の区画では12枚の水田が検出されている。面積が確認できるもののうち、大きなものは14㎡、小さなものは8㎡にすぎない。南北にやや長い長方形をしており、SD51201の湾曲に沿って配置されているようである。

（6）調査区中央部の水田区画（STⅡ）

畦畔SK51202と畦畔SK51204によって区切られた区画は東西46mを測るが南北幅は特定できない。この区画の東半は、南北方向の流路あるいは大規模な洪水流の痕跡（SR51201）に

よって水田面が大きく破壊されており、正確な水田の数は把握できないが、それでも29枚の水田を数えることができる。区画の中央を東西に貫く畦畔があり、その北側と南側では区画の仕方が異なっているようである。さらに北側の区画のグリッドF30中央部の西側と東側では区画の大きさが異なり、南側の区画の中央排水溝付近から西側では南北に長い長方形、東側ではほぼ正方形に近い区画をつくっている。これら4つの区画が経営単位の違いとしてとらえられるかどうかは即断できないが、興味深い事例である。面積は、確認できるもので北西の区画が16㎡～37㎡、南西の区画が18㎡～28㎡、南東の区画が19㎡で、北東の区画は不明だが他の区画よりかなり大きいことは確実である。

小規模区画
のグループ

(7) 調査区東部の水田区画 (ST1)

畦畔SK51203とSK51204によって区切られた区画は、東側が流路によって荒らされているが、9枚の水田を確認することができる。一部区画が乱れているが、ほぼ正方形に区画しようとしたあとがみられ、ひとつの水田の面積は約22～23㎡である。

以上3つの大きな区画の間の標高差をみると、東から西へと傾斜しており、そのうちわけは東側ST Iと中央ST IIとの差が約10cm、中央ST IIと西側ST IIIとの差が約10～20cmである。また、中央の区画だけを見ても、わずかながら調査区全体の地形変化と同じように東から西へ傾斜している。これらのことから、水田の造営は、まず大きな畦畔で急傾斜を区切り、ほぼ水平にならした後、小さな畦畔によって緩傾斜を補正していったと考えられる。

区画構築順

(8) 畦畔の構造

畦畔の構造については、全体としては単純で、基本的には盛土によるもののみである。大きな畦畔においても、SK51203、SK51204の交点付近に杭や木片の埋め込み、SK51201の南端に数枚の矢板がみられたが、ほとんどは盛土によるもののみであった。

(9) 水路SD51201 [第94図]

SK51201とSK51202を堤にして南北に流れる。幅1.5～1.8m、深さ40～50cmであった。

(10) 水口

東西方向の畦畔の中央部が切断されているもの、交差部が切断されているもの、大規模な畦畔と接する部分が途切れているものがある。特に、ST26・29・33・37の南北両側には13ヵ所集中していて、他の区画との違いが感じられた。これは前述したST II内の区画のグループの違いとも関係しているようで、4つのグループのうち南西にあたる区画の周囲にだけ水口が集中していることになるのである。

東西畦畔

水口の集中

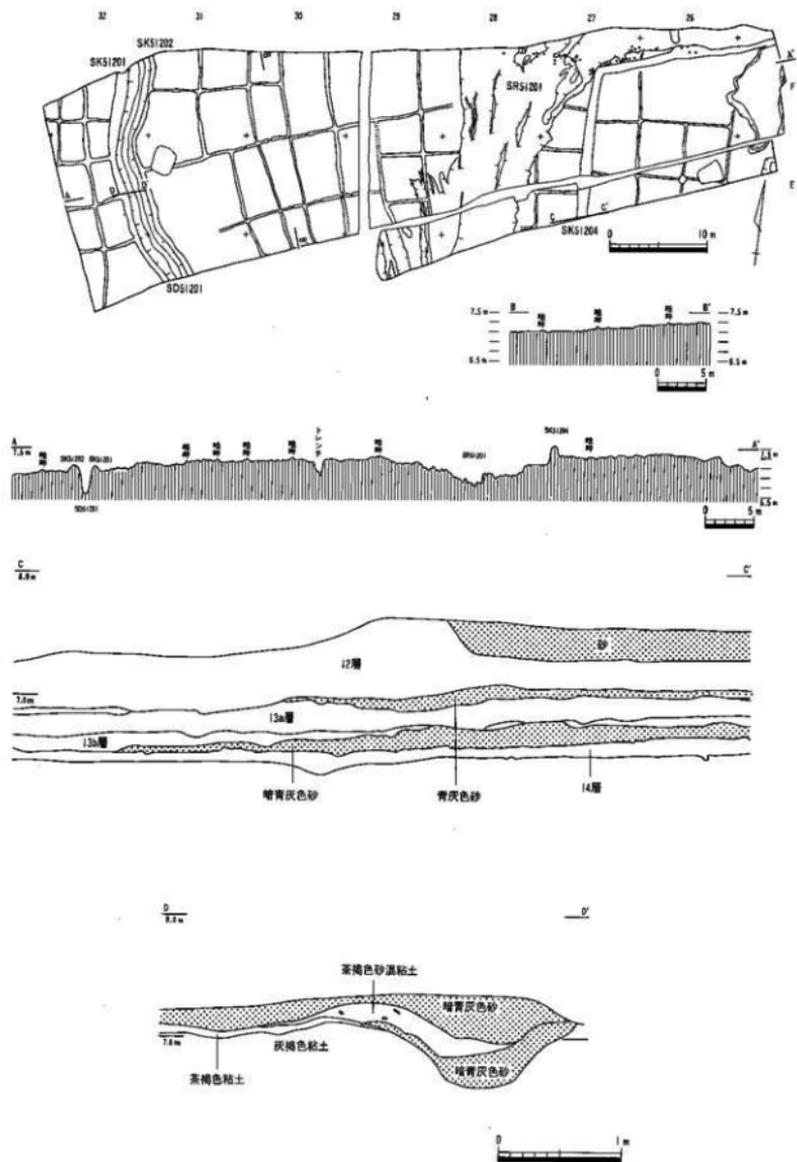
(11) 足跡 [第95図]

足跡については、調査区全体で砂をかぶった状態で検出された。多くは深さ3cm程の楕円形に凹んだものが多いが、中には指先跡まではっきりと確認できるものもある。つま先部分は他に比べ8cm前後と深く、重心を前に置いて踏張った様子が想像できるものもある。歩行の状態については区画ごとに特徴がみられ、中央の大きな区画の南西区画や東側の大きな区画ではほぼ南北に平行な歩行状態を示し、西側の大きな区画と中央の大きな区画の南東区画では水田を斜めに横切っている。平行な足跡は稲株等で規制されたためだろうか。

平行な足跡

〈水田の年代観〉

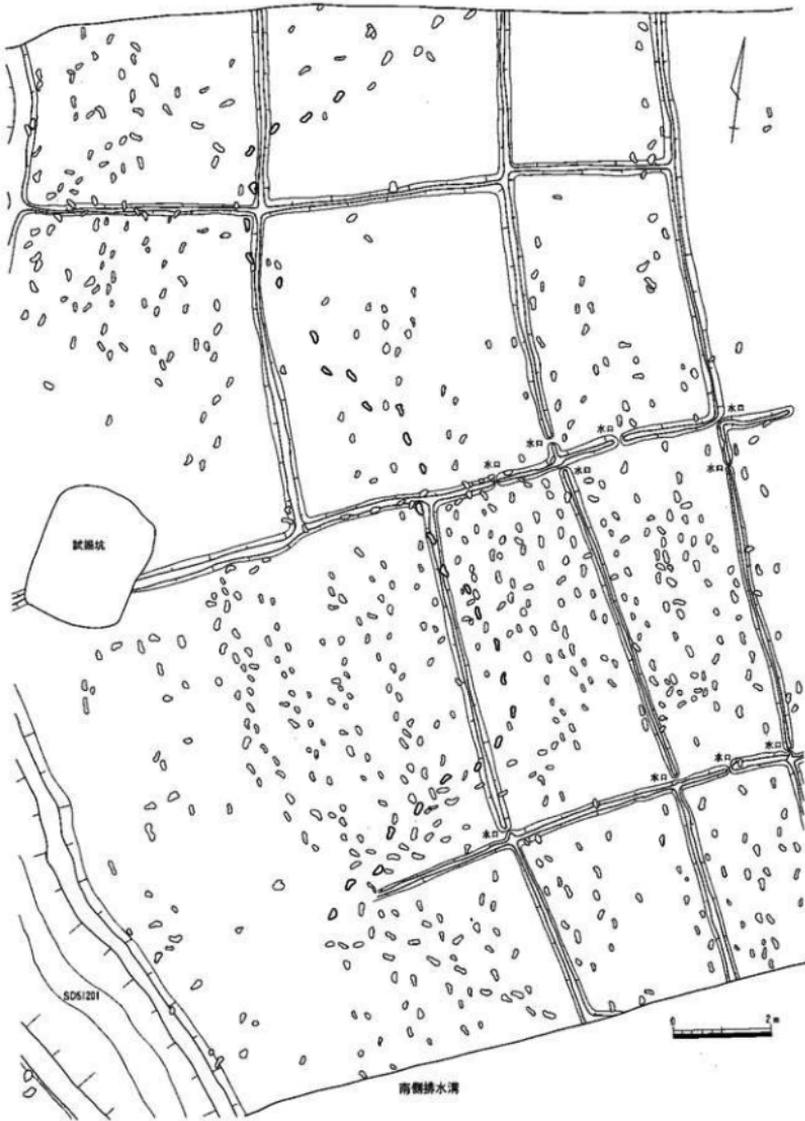
水田の年代観については、確定できる遺物がいないためはっきりとはさせられないが、12層を覆う砂礫層の上から検出された流路から弥生時代後期段階と思われる壺の破片が出土していること、下層13層も弥生時代後期段階と推定できることなどから、12層水田の営まれた時期も弥生時代後期と考えられる。



第94图 12層水田実測図

(5区)
-142-

北側排水溝



第95圖 12層水田足跡檢出狀況圖

10層上で検出された遺構 水田跡

11 層 12層水田は厚さ60～70cmの砂礫層によって覆われ廃絶している。その後、淡茶褐色の粘土層が約20cm程堆積し、水田として利用されたようである。この淡茶褐色粘土層が10層、この淡茶褐色粘土層上面で検出された水田跡が10層水田である。

〈水田跡〉 [第96・97・98図, 図版66・67・68・69・70・71・72・73]

砂 礫 被 覆 10層水田も12層水田と同様に厚い砂礫層(9層)によって被覆されており、遺構の検出は比較的容易であった。検出された水田跡は調査区全域に広がり東西方向3本、南北方向4本の大規模な畦畔による区画である。南北方向の水路も併っている。水路と畦畔の一部はおおよそ下層12層の位置を踏襲しているが、全く新たに設定された畦畔もある。畦畔には盛土のみによるものと、内部に杭・横板等の構造を持つものがあるが、杭列・横板のなかには畦畔盛土からずれたものがあり、杭頭のレベルが水田面より低いものもあった。

踏襲と新設 南北方向の畦畔の周辺には杭列が多く、方向・位置も下層からの踏襲と考えられるのに対して、東西方向の畦畔は一部を除いて杭列も少なく、規模も小さい。また、下層からの踏襲ではない。南北方向が区画の基軸であった可能性がある。

「杭列水田」 以下、各畦畔の特徴を列記する。[第30表]

(1) 畦畔SK51001・SK51002と水路SD51001 [第99図, 図版67]

水路の境 SK51001とSK51002は並行して南北に走る2列の畦畔で、いずれも上端幅約1.2m、下端幅約2m、高さ約20cmを測る。2本の畦畔の間は幅約1m、深さ約40cmほどの溝状になっており、水路とされていたと考えられる(SD51001)。SK51002の西側とSK51001の東側では約30cmほどの比高差があり、傾斜の変換点にこのような大きな畦畔及び水路が築かれたことがわかる。この畦畔と水路のおおよその位置、構造は下層12層の場合と類似している。

地形転換点 これらの畦畔の解体の結果、内部から芯材に用いられたと思われる多数の木片、木製品や杭列を検出した。まずSK51001では、長さ2～3mと長大なものを含む多くの板状の木片がほぼ畦畔の方向に沿って埋め込まれており、その間に田下駄、三又鍬などの木製品が含まれていた。特に南側排水溝に接した部分には数多くの木片とともに径10～20cmほどの礫が埋め込まれており、嚴重に補強した様子がうかがわれる。

芯 材 2列の杭列 SK51002では、水田面よりやや低い位置から数多くの杭が検出された。南側の部分では明確でないが、北側では畦畔に沿って2列の杭列が確認された。2列とも畦畔の中央から西側にあり、より西側にある杭列(A)は杭の長さ1.5m程でほぼ等間隔に打たれていた。そのすぐ東に打たれたもう1列(B)は杭の長さ1m前後で不規則に打たれていた。どちらも先端を尖らせた針葉樹樹材が使用されていた。杭頭のレベルが低いことから、2列とも以前の杭列 検出された畦畔には伴わず、それ以前に盛土が若干西にあった時期があり、その際に補強していたものと考えられる。検出された位置になるまで少なくとも1回は畦畔の補修、盛土土替 盛土の付け替えが行なわれたのであろう。

(2) 畦畔SK51008と畦畔脇の溝

畦畔脇の溝 グリッドD32に東西に走る畦畔で、西端部は西(6区側)の調査区外へと延びる。上端幅約80cm、下端幅約1.4mで、畦畔SK51002に直交する。南に沿って浅い溝があり、水路SD51001に接続するようにみえる。溝をはさんで南側に併行する畦畔(堤)は検出できず、同様の水路ではなさそうだが、水田内と水路とを連絡するものとも考えられる。

以前の杭列 畦畔下層からは少なくとも3列のほぼ並行する杭列が検出されたが、杭頭のレベルが低く、盛土の方向とも僅かにずれていることから、検出された畦畔とは構築の段階が異なる

ものと考えられる。これも盛土付け替え以前の段階の補修が残っていたのであろう。

(3) 畦畔SK51003 [第100図, 図版68]

グリッド30列に南北に走る形で検出された。下層12層ではこの位置には大規模な畦畔はなかった。踏襲されずに新たにつくられたものである。この畦畔は、グリッド30では上端幅80~100cm、下端幅1.5~2m、高さ10~20cmを測るが、東西方向の畦畔SK51005・SK51007との交差以南では次第に盛土を失い、高まりをとらえるのが困難であった。

解体の結果、頭部を露出させていたものも含めて、下層より少なくとも4列の杭列を認認している。南半の最も東側にある杭列(D)、横板を伴い南北へ連続する杭列(北-A)(南-B)、北半にしかない杭列(E)、最も西にあり南北で若干通りがずれる杭列(北-C)(南-F)である。このうちA、BとDのみが表面に頭を出しており、他の列は杭頭レベルが水田面より低かった。

Dは最も杭頭のレベルが高く、長い杭が使われていた。DとBは畦畔南半の盛土に沿っているようであるが、Bの北への延長であるAは畦畔北半の盛土からはずれている。逆にCは畦畔北半の盛土に沿っているようだが、その延長とみられるFは完全に畦畔南半の盛土からずれている。また、杭列中に建築部材等の転用材の含まれる割合を観察してみると、全体的に何故か南に行くほど多い傾向がみられた。特にFには多いようであった。

こうした杭列の平面的位置、杭頭レベル、長さ、転用材の割合の違いは、その打たれた時期、施工者等の違いを示している可能性がある。おそらくこの畦畔は検出された位置になるまで、少なくとも北半で2回、南半で1回は盛土し直されていると考えられる。北半と南半とで盛土の規模が異なるのは、それぞれ修復の時期が異なり、全体が一度に盛土されたのではないことを示しているのではないだろうか。このような大規模な区画の畦畔は、それほど大きな位置の変化をもたずに、短い期間の間に何度も修復されていったものと考えられる。

(4) 畦畔SK51005、SK51007 [第97図, 図版72]

グリッドE列を東西に走る。SK51005とSK51007とは同じ延長線上の畦畔だが、南北方向のSK51003を挟んで盛土の中心線が若干ずれ、盛土の規模もSK51007のほうが2倍近く大きくなっている。

両者とも盛土のみの構造で杭列等の補強は認められない。ただグリッドE29のSK51005内部より、大型の曲物の底と思われる木製品が2分割の状態出土した。2次的な穿孔が施されており、そこに棒状の木製品が差し込まれた状態で検出されている。周辺にも若干の木片が埋め込まれているが、畦畔の補強芯材として利用されたのであろうか。

(5) 畦畔SK51004 [第102図, 図版69・70・72]

グリッド27列を南北方向に直線的に延び、上端幅0.8~1m、下端幅約2m、高さ約20cmほどの大きな畦畔である。その位置は下層12層の畦畔SK51204をほぼ踏襲している。

グリッドG27で直角に交わる畦畔SK51006との交差部分には数多くの木片が集中して埋め込まれていた。なかには建築材と思われる加工木片や田下駄敷点、梯子(長さ約150cm、幅約15cm、4段)などが含まれていた。また交差部に長さ40~50cm、幅2~3cmの割り材(一部先端を尖らせている)が13本、半円形の列をつくって密集して打たれている部分があり、補強だけの目的にしては特異な状況であった。

(6) 畦畔SK51006 [第103図, 図版71・72]

グリッドF・G列の境目を東西方向に走る畦畔で上端幅約50cm、下端幅1~1.2m、高さ

4列の杭列

異時期の杭

盛土付け替

大型曲物底

交差部密集

約10cmほどの規模である。下層12層の畦畔SK51203から若干北へずれた位置にある。

この畦畔には横板を伴う数多くの杭が打たれており、内部には多くの木片が埋め込まれていた。田下駄、舟形（長さ約32cm、巾約6cm）などの木製品が出土している。

2列の杭列 SK51004の北半からSK51006にかけて、盛土より低い位置に2列の杭列があり、それぞれ交差部付近で「L」字形に曲がって連続している。一方は横板を伴い、一方は伴わない。

横板列 横板を伴うものはSK51004の盛土の西側に沿うような位置（A）から交差部の中央を通りSK51006の盛土北側に沿って（B）連続している。しかし、横板を支える杭が横板の内側にある

ようであり、盛土に伴うものとは考えにくい。もう一方（C）は、畦畔盛土とは全くずれて連続しており、前述の杭列も横切っている。この2列の杭列とも検出された畦畔に伴うもの

以前の前杭列 ではなく、また2列が同一時期に打たれたとは考えにくい。検出された畦畔の以前の段階に少なくとも2回は盛土し直され、その都度補修されたものなのではないだろうか。

盛土付替 (7) 畦畔SK51009（杭列のみ）

盛土は検出されず、グリッド28列を南北方向に走る3列の平行な杭列である。5m程東に離れたSK51004とほぼ平行な方向である。杭頭レベルは水田面とほぼ同じぐらいであった。

3列 東側の列（C）は長さ130～180cmの杭を用いている。中央の列（B）は杭の長さ約120～130cm程度、西側の列（A）は杭の長さ約110cm程度で、東にいくほど長い杭が使われている。また杭頭のレベルも高いようであった。検出された水田面より以前の段階にはここに南北方向の畦畔があり、そこへ杭列を何度か打ち直していたと考えることができる。

(8) 水田の年代

水田の年代観については、判断材料となる遺物が少なく、明確にすることはできないが、畦畔SK51004で出土した台付き甕や壺口縁等の形態、また他調査区との対応関係から、弥生末から古墳前期にかけて瀬名遺跡全体に広がる「杭列水田」の一部だと推定される。

杭列と検出した面違う しかし、5区の場合、畦畔に杭列を集中的に伴う段階の水田面ではなく、幾度も補修・付け替えがなされて最終的にはほとんど杭列を伴わなくなった段階の水田面を検出したのである。結局、検出された畦畔に伴う杭列は、SK51003南半に沿って打たれていた2列（BとD）だけではないだろうか。このSK51003南半部は北半部に比べ規模は小さいようであった。この部分だけが盛土し直されずにそのまま使われていたとも考えられる。

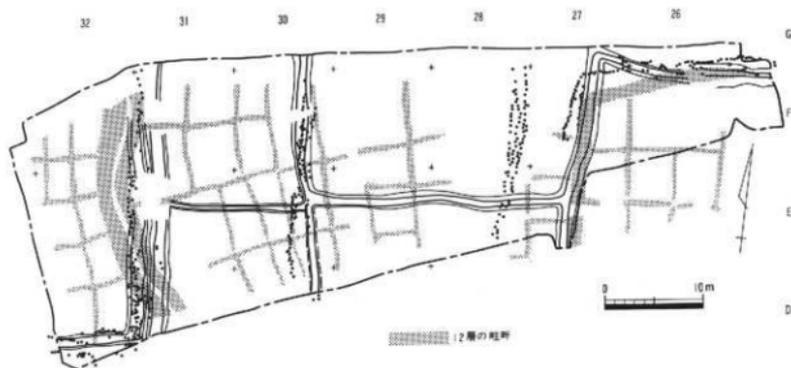
9区、10区では、杭列を伴う段階の区画と伴わない最終段階の区画とをそれぞれ異なる層として検出している。また、10区では杭列の杭頭レベルと細分した耕作土層との対応から畦畔への少なくとも2段階の補修状況をとらえ、これも層を分けて報告している。

9層 10層水田は廃絶後しばらく湿地帯になり、そこを大きな洪水にみまわれたようだ。これは10層水田上面が5cm程の泥炭質層そしてさらにその上を1m近い砂礫層（9層）が覆っていることから推測される。

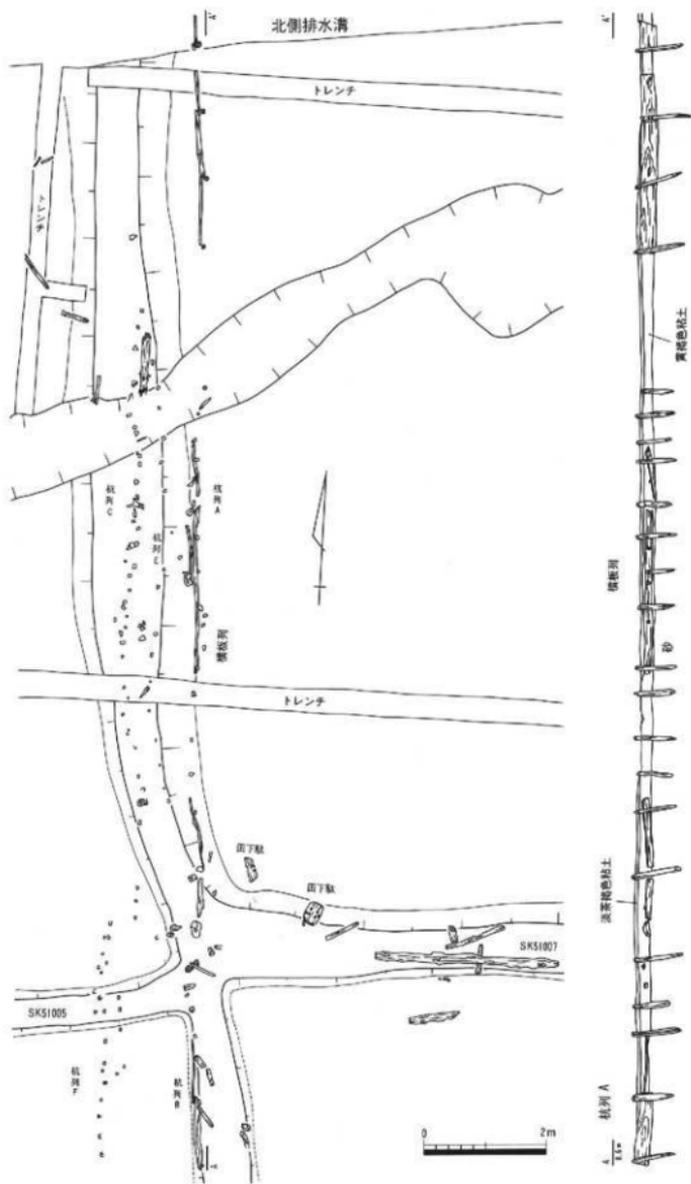
S K No	列	相対的な位置	観測 (m)	総数 (本)	転用材の使用割合	間隔 解	頭のレベル 平均(m)	ばらつき度* (m/本)	杭の長さ 平均(m)	ばらつき度* (cm/本)	織網・傾斜 状況	備 考		
1002	2列	西 A	15	26	27%	等間隔	7.884	0.065	141.8	21.6		盛土より下層	堤を兼ねた畦畔	
		東 B	7	8	25%	不規則	7.679	0.097	90.9	46.8		"		
1008	3列	北 A	3	19	0%		7.841	0.045	36.1	13.6		盛土より下層		
		中 B	4	11	0%		7.896	0.043	79.4	14.6		"		
		南 C	3	12	8%		7.816	0.120	90.8	19.6		"		
1003	4列	東北半 A	13	17	24%		8.190	0.060	68.8	15.9		横板列		
		東南半 B	11	12	33%		8.286	0.034	63.3	12.4		"	畦畔南半に伴うか	
		最東南半 D	7	14	43%		8.280	0.037	112.5	14.3		"		
	6列	中北半 E	7	14	14%		7.790	0.102	90.5	8.8		盛土より下層		
		西北半 C	10	38	21%		7.960	0.087	97.8	16.2		"		
		西南半 F	8	30	60%		8.014	0.101	98.5	15.7		"	畦畔から完全にずれる	
1004 ~ 1006	2列 3列	1004 A	8	16	38%		8.185	0.023	62.3	8.5		横板列	盛土より下層	
		1006 B	17	55	23%		8.006	0.142	60.0	15.9		"	"	互いに横切っている
		C	25	89	1%	等間隔	7.937	0.067	85.5	21.0		"	"	
1009 畦畔のみ	3列	西 A	8	15	79%		7.892	0.153	110.2	27.4			畦畔の盛土が全くない	
		中 B	14	25	64%		7.946	0.137	126.3	22.8				
		東 C	12	33	58%		8.011	0.108	148.2	16.9				

ここでいう転用材とは、杭先端以外に加工痕のみられるもの、ホツ穴、切り込みの他、表面の面取り調整も含んでいる。
*ばらつき度とは、平均値からひとつずつだけ離れているかの平均。

第30表 10層水田畦畔杭列整理表

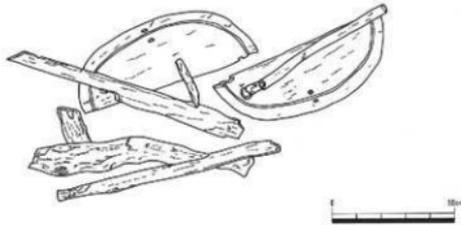


第96図 12層水田・10層水田區画踏襲状況図

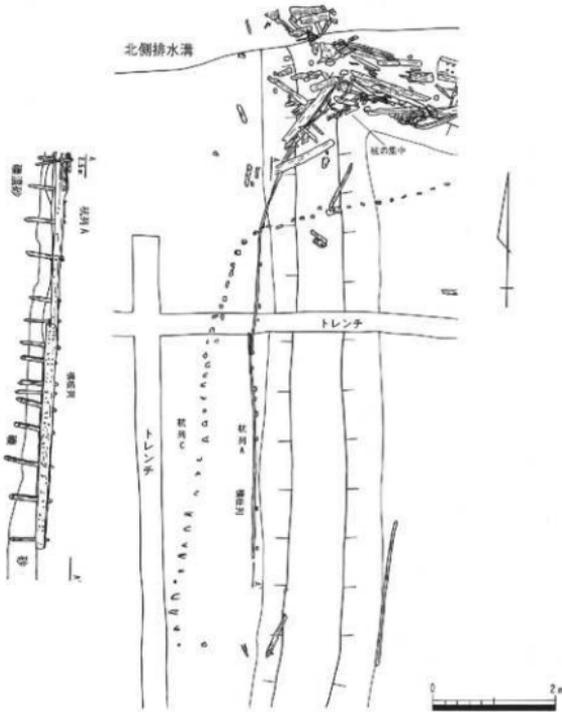


第100図 10層水田SK51003実測図

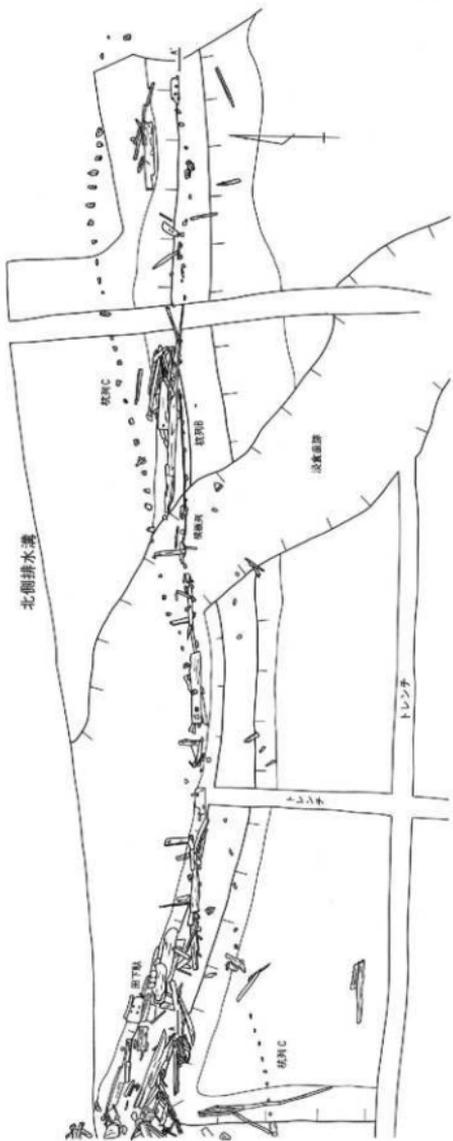
曲物



第101図 10層水田SK51005遺物出土状況図



第102図 10層水田SK51004実測図



第103図 10層水田SK51006実測図

8層上で検出された遺構 水田跡、流路跡

層厚約1mの厚い砂礫層(9層)に覆われた後、やがて湿地化していったようである。その湿地化の過程で流れていたとみられる流路の河床の部分のみが凹地として確認された。これをSR50801とした。天井川状であったらしく流路の周囲は微高地となっており、河床が高い位置にある。SR50801からは土師器、木製品が多く出土している。SR50801が埋没後、調査区全域には厚さ40cm程の暗褐色粘土層が堆積し、やがて水田として使用されはじめたのであろう。この粘土層上面で検出された水田跡を8層水田と呼称した。

〈8層下部の流路跡SR50801〉[第105図, 図版65]

流路SR50801の河床はグリッド27列の微高地上において幅約3m、深さ約60cmの南北方向に細長い凹地として検出された。流路内は底面が透水する礫層であるが、覆土は池沼性の粘土であり植物遺体も残されていた。流路内から高坏、埴、壺、甕など多くの土師器、諸手鍬、火鑽臼、欵柄などの木製品が出土している。また、土器の種類では高坏の割合が多いことや、流路内の覆土中から果実の種が出土していること、炭化物が認められることも特筆される。遺物の出土状態は出土レベルからおおまかに上層からのものと下層からのものとに分けられるようで、上層と比較して下層からのほうが土器を中心とした遺物が多く出土している。しかし、下層から出土した遺物も底面よりわずかに浮いた位置から出土しており、流路が埋没していく段階で流れ込んだものと考えられることができる。また上層部、下層部とも覆土に大きな違いはなかった。土器も一括とらえられそう大きな年代差はなく、木製品と土器も同一時期と判断される。いずれにしてもここだけに土器が集中していることや周囲に種子や炭化物も確認されていること、また周囲より高い自然堤防上の位置にあるなどのことから祭祀的な性格が考えられるのではないだろうか。

〈水田跡〉[第104図, 図版62・63・64]

8層(暗褐色粘土層)上面より、水田跡が検出された。調査区東半部は10層水田を埋没させた砂礫層の影響で微高地を形成しているためか、この8層水田は調査区西半部でしか確認されなかった。検出された水田跡は、低地から微高地縁辺にかけての緩傾斜地を水田化したもので、地形の自然傾斜にそって東から西へ段差をもってつくられたいわゆる棚田である。水田面上部は洪水による砂礫層によって被覆されており、田面もこの砂礫層を取り除くことで姿を現わした。上部を砂礫層で被覆されている場合、上層水田の耕作による影響を受けて畦畔の高まりも削り取られてしまうことがないため、畦畔の残存状態も比較的に良好であるが、8層水田においても畦畔の検出は明瞭であった。しかし、田面の一部は、洪水流の影響でかなり深く浸食されており、浸食痕跡を多く残す。

(1) 畦畔と区画

検出された畦畔はその規模から2種類に分けられ、大きな畦畔は下端幅約1.5m、上端幅60~90cm、高さ約15cm前後を測り、調査区中央部をやや斜めに東西に走る。小さな畦畔は下端幅約60cm、上端幅約20cm、高さ10cm前後を測り、大きな畦畔を挟んで北側と南側の両区域の水田を区画している。いずれの畦畔も盛土しただけの簡単な築造であり、杭などの補強材は伴わない。大きな畦畔は緩く蛇行する形で東西に走るSK50801のみが検出されている。その方向は正方位の東から約40~45°北へずれている。この畦畔は、現在、静清平野北部で確認されている条里型地割にあてはめると、瀬名遺跡の他の調査区の同時期の大規模な畦畔とともに約107~109m間隔とされる坪境線上の上ってくる畦畔である可能性がある。小さな畦畔はお互いに直交するものは少なく、T字状またはY字状に交わる。また、畦畔

湿地中流路
天井川

土器 農具
土産 炭化物
農具 土器

棚田状構造

砂礫被覆

洪水浸食

大規模畦畔

条里型地割
坪界線

亀甲形区画 は蛇行するものが多く、形成される水田区画はいわゆる亀甲形の区画に近いのではないかと考えている。

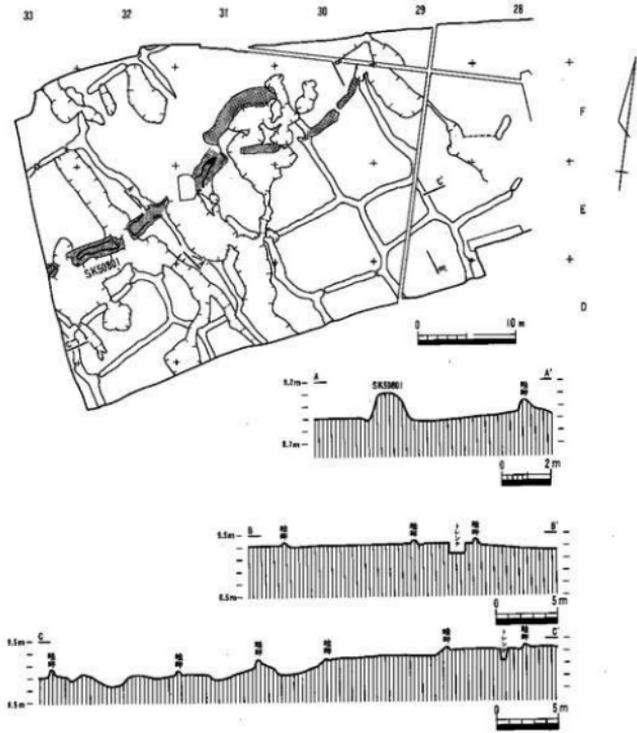
水田は全部で27枚確認され、そのうち面積が確定できるものは7枚である。111㎡という突出したものを除くとおおむね50㎡近辺である。

(2) 水田面の状況と水まわし

水口 SK50801を境にして北側では、水田面が西方に向かって緩やかに傾斜し、南側では南西方向にむかって緩やかに傾斜している。各水田への水まわしについては、畦畔がとぎれている部分が十数ヶ所に認められ、水口と考えられる。東西方向の畦畔に多いようである。洪水流による浸食とも考えられ水口とは断定できないものもあった。水田面からは一部(ST9・12)で足跡が検出されているが、歩行状態としてはとらえられない。

(3) 出土遺物と年代

灰釉陶器 灰釉陶器、須恵器などの土器、田下駄などの木製品が出土しているが、水田の時期決定には、畦畔内部より出土した10世紀後半の灰釉陶器をあてて考えている。



第104図 8層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:160)



第105図 8層直下SR30801遺物出土状況図

5層上で検出された遺構 水田跡

- 7 層 8層水田は青灰色砂層（一部粘土層）によって被覆される形で廃絶され、上部には暗青灰色砂質粘土層（6層）、青緑色砂質粘土層（5層）と堆積していく。この間厚さ約1mにわたって11層、9層にみられたような厚い礫層は存在しておらず、気候的にも比較的安定した状態にあったことが推測できる。6層とした暗灰色砂質粘土は正確には砂と粘土の互層で、しばしば冠水状態となっていたことを示しているのではないだろうか。

5層上では調査区東側の一部で水田遺構が検出されたが調査区中央部以西では遺構は確認されていない。調査区西側から中央部にかけて上層に複数の流路（SR50502等）が複雑に切り合った形で存在したようで、遺構は破壊されている。これらの流路がもたらしたと考えられる調査区中央部の砂礫の堆積の中から木製品と伴に獣骨が散乱した形で出土した。獣骨はその形態から馬骨と考えられ、なかには歯の残った頭骨も存在している。頭骨の数は2頭分以上あるようであった。〔第107図〕

〈水田跡〉 〔第106図，図版60・61〕

調査区東側に水田土壌に相当すると思われるグライ化した淡青色粘土層が存在し、南北方向の2本の畦畔が検出された。流路の氾濫・洪水による砂層（4層）によって被覆されていた。

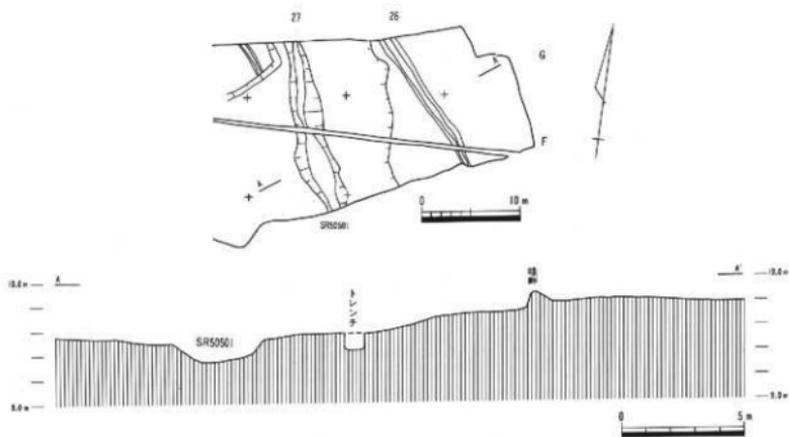
（1）畦畔と区画

2本の畦畔の大きさは異なり、SK50501は上端幅約60cm、下端幅約140cm、高さ約10cm、SK50502は上端幅約35cm、下端幅約70cm、高さ約4cmである。2本の畦畔は、間隔を約12mおいて、いずれも北西から南北方向へと走り、ほぼ平行している。真北より約35°~40°西へ傾くような方向である。SK50501は調査区の北端から南端まで確認されたが、SK50502は調査区北側から南へ約4mほど検出されたにすぎず、あとは流路に削られていた。したがって水田跡といっても、このような2本の畦畔だけで、その2本の間隔も大きく、2本の畦畔に交差する東西方向の畦畔も存在しないことなどから、水田区画の形について推定はできず、水田遺構全体の概要はつかむことはできない。

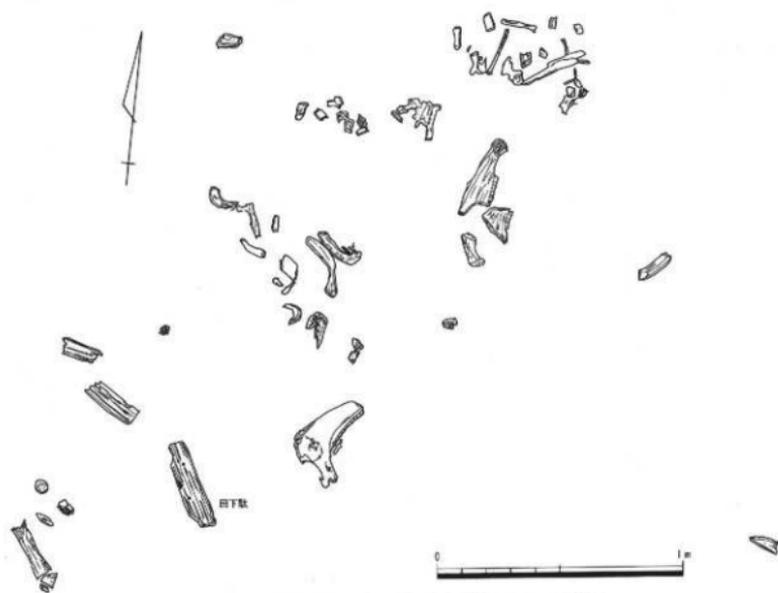
しかし、この2本の畦畔は上層で検出される3層水田の畦畔とほぼ同一の位置と方向を示していることから、実際には3層水田と同様な水田区画があって、それが踏襲されていたことが考えられる。

（2）水田の年代

水田の年代観についても年代を決定できるほどの資料に恵まれず、5層に連続する土層中より灰釉陶器が出土したにすぎない。他に年代を推定できる伴出遺物もみられないが、ほぼ11世紀以降ではあると考えている。



第106図 5層水田エレベーション図 (水平1:200垂直1:40)



第107図 5層水田獣骨等出土状況図 (グリッドG30付近)

- 3層上で検出された遺構 水田跡
- 4 層 5層で水田が営まれたあと、流路の氾濫によると思われる厚さ10～15cmの砂層（4層）が堆積し、その後厚さ20～30cmの青灰色粘土層が堆積する。この粘土層が3層で、この3層上面より水田跡が検出された。

〈水田跡〉 [第108図、図版59]

流路 3層水田は調査区の東半部において、青灰色砂層に被覆された状態で検出された。調査区西半部には流路SR50301が存在し、その西側は洪水流の浸食によって遺構面が削られている。したがって調査区西側では畦畔などの遺構は検出されなかった。

(1) 畦畔と区画

- 2 層 東側地域では、水田区画を形成する畦畔が砂層（2層）を除去することによって、明瞭な高まりをもって検出された。多くの畦畔が上端幅20～30cm、下端幅50～60cmなのに対して、グリッドD30付近で検出された東西に走るSK50301は上端幅約1m、下端幅約1.3mを測り、他に比べて大規模なものである。この畦畔の西側は流路SR50301により削平されているため、途中で途切れているが、おそらく西方へそのまま延びていたのだろう。

また、グリッドG30の浸食痕跡の内には数本の杭が打たれていた。杭列の方向は東西方向の畦畔にほぼ平行しており、ちょうど南から南北方向の畦畔が交差する部分である。ここにも畦畔があり、杭列で補強されていたのだろう。

検出された20枚の水田区画は、全体的に近似した形状・規模を示している。田面のレベル差をみると、調査区東端部で約10.26m、そしてその地点より西へ約50m離れた地点でも約10.14mというようにほぼ平坦である。前述した畦畔は、いずれも補強の杭列・矢板などは伴わず、盛土しただけの簡単なもので、ほぼ直線的に走行している。しかし、畦畔は多くが十字ではなく丁字形に交差しており、交差部を直線的に貫いてはいない。方向的には畦畔の軸が南北方向で西に約30～40°、東西方向でも北に約40°傾いている。

畦畔の方向

水田区画のうち、面積を推定できるものは5枚で、100m前後である。形状はおおむね正方形に近い形である。

(2) 水口

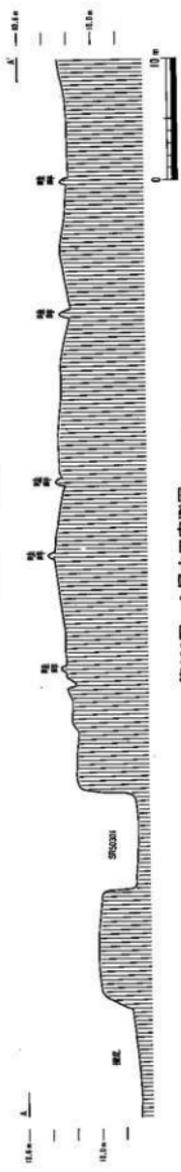
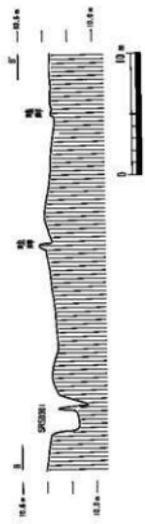
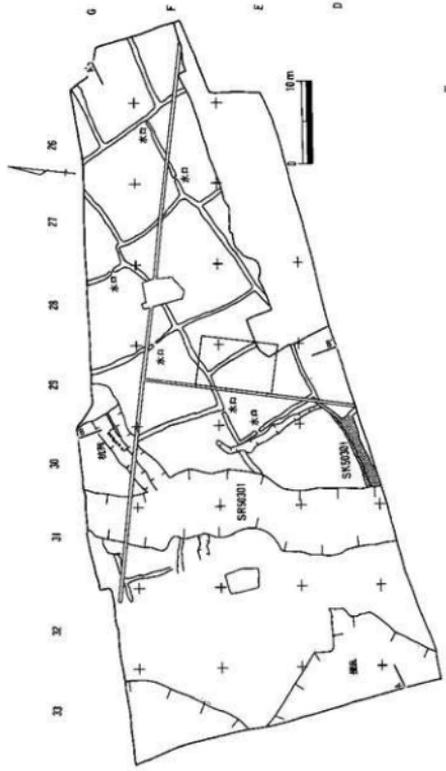
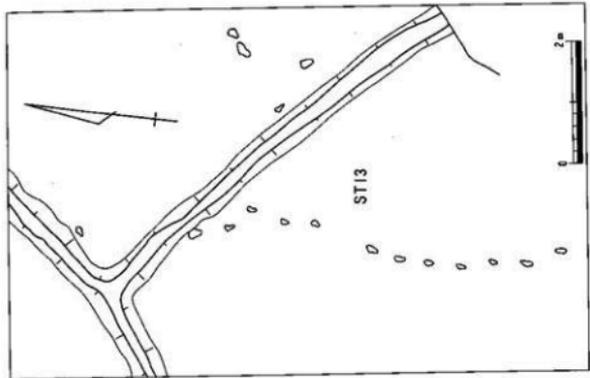
水路などの灌溉・配水施設は検出されていないが、畦畔の一部を切る形で水口が検出された。東西方向の畦畔で3箇所、南北方向の畦畔で3箇所の計6箇所である。水口は畦畔が幅20cm程に途切れる状態で存在するが、位置的には畦畔の交差部付近にあるもの、交差部より若干中央部によったものの2種類がある。

(3) 足跡

水田面には、足跡と推測される痕跡も検出された。水田面に疎らに存在し、部分的には列になり歩行状態を示しているものもみられる。(ST12・13)

(4) 水田の年代

明確に水田面に伴うという遺物はないが、下層からは龍泉窯系とみられる型押し蓮弁文の青磁碗、13世紀と考えられる甕器系陶器が出土している。



第108図 3層水田築洲区

水田計測表 (5区 14層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	6.65	—	—	—	—	一部区外
2	6.60	—	—	(5.4)	—	—
3	6.46	—	—	(4.7)	—	—
4	6.44	—	—	—	—	—
5	6.62	—	—	(5.7)	—	—
6	6.64	26.4	台形	5.7	4.8	—
7	6.64	21.8	正方形	4.5	4.5	—
8	6.64	—	—	(4.5)	—	一部区外
9	6.61	—	—	—	3.5	—
10	6.66	19.2	台形	4.7	3.6	—
11	6.68	24.5	台形	5.2	4.4	—
12	6.65	—	—	(5.3)	—	一部区外
13	6.46	—	—	—	—	—
14	6.63	19.4	台形	4.5	3.7	—
15	6.63	19.6	正方形	4.5	4.3	—
16	6.69	16.8	台形	4.2	3.7	—
17	6.65	—	—	—	(3.7)	一部区外
18	6.46	—	—	—	—	—
19	6.54	—	—	—	(3.7)	浸食
20	6.55	—	—	—	(3.9)	—
21	6.65	—	—	—	(4.4)	—
22	6.66	—	—	—	—	一部区外

水田計測表 (5区 12層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	7.40	—	—	—	—	一部区外
2	7.57	—	—	—	—	浸食
3	7.50	—	—	—	—	—
4	7.54	—	—	—	5.2	—
5	7.54	22.9	長方形	5.4	4.2	一部試験坑
6	7.39	—	—	—	—	一部区外
7	7.31	23.8	長方形	5.4	4.1	—
8	7.27	—	—	—	4.5	一部区外
9	7.27	21.0	長方形	5.3	4.4	—
10	7.31	23.4	長方形	5.2	4.4	一部トレンチ
11	7.30	—	—	—	4.6	一部区外
12	7.13	—	—	—	—	浸食
13	7.14	—	—	—	3.9	—
14	7.20	21.6	正方形	4.4	3.8	一部トレンチ
15	7.15	—	—	4.0	—	一部区外
16	7.20	—	—	—	—	浸食
17	7.17	—	—	—	3.5	—
18	7.13	—	—	—	—	一部区外
19	7.12	—	—	—	—	浸食
20	7.16	—	—	—	4.9	浸食
21	7.23	—	—	—	—	—
22	7.15	—	—	—	8.5	一部区外
23	7.22	15.9	台形	4.4	3.2	—
24	7.25	19.1	正方形	4.6	4.3	—
25	7.51	—	—	—	4.1	浸食
26	7.23	25.8	長方形	7.0	3.9	—
27	7.27	—	—	—	3.8	一部区外
28	7.16	—	(長方形)	—	4.4	—
29	7.23	26.9	長方形	7.2	3.7	—
30	7.50	—	—	—	(3.7)	一部区外
31	7.12	—	—	—	(3.0)	—
32	7.12	17.3	長方形	5.7	3.1	—
33	7.12	18.4	長方形	6.8	2.2	—
34	7.26	—	(長方形)	—	2.2	一部区外

第31表 5区水田計測表 1

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
35	7.07	—	—	—	(4.6)	一部区外
36	7.10	30.6	長方形	6.2	4.7	—
37	7.10	20.8	長方形	6.8	2.5	—
38	7.17	—	—	—	(3.2)	一部区外
39	7.10	—	—	—	(4.5)	—
40	7.10	42.7	—	—	(8.2)	4.6
41	7.05	推 63.3	(長方形)	8.9	7.0	一部検出不可
42	7.10	—	—	—	(7.5)	一部区外
43	6.98	—	—	—	2.4	—
44	6.95	8.0	長方形	3.7	2.0	—
45	6.97	8.7	長方形	4.0	2.1	—
46	7.05	12.5	長方形	4.3	2.6	—
47	7.10	—	—	—	—	一部区外
48	6.94	—	—	—	2.2	—
49	6.90	9.5	長方形	3.9	2.3	—
50	6.92	—	—	—	(4.2)	一部区外
51	6.99	—	—	—	(4.2)	—
52	7.11	—	—	—	—	—
53	6.98	—	—	—	—	—
54	6.93	—	—	—	—	—

水田計測表 (5区 10層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	8.06	—	—	—	—	一部区外
2	8.00	—	—	—	—	大
3	8.20	—	(長方形)	(10.0)	—	浸
4	8.25	—	—	—	—	浸
5	8.20	—	(長方形)	—	4.6	浸
6	8.15	—	—	—	4.7	区
7	7.80	—	—	—	—	浸
8	8.05	—	—	—	—	浸

水田計測表 (5区 8層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.40	--	--	--	--	浸食
2	9.35	--	--	--	--	"
3	9.30	--	--	--	--	一部区外
4	9.25	--	--	--	--	"
5	9.33	61.2	四辺形	11.2	6.8	"
6	9.35	25.6	長方形	6.6	3.3	"
7	9.28	--	--	--	7.7	一部区外
8	9.21	--	--	--	--	"
9	9.24	--	--	(9.7)	--	"
10	9.20	--	(台形)	(8.8)	(4.3)	浸食
11	9.15	推 78.9	--	(10.2)	(7.0)	"
12	9.25	64.7	(長方形)	9.2	6.7	"
13	9.24	--	--	--	(6.6)	一部区外
14	9.04	--	--	--	(7.5)	"
15	9.06	111.1	(長方形)	13.0	7.4	浸食
16	9.28	--	--	--	--	"
17	9.10	--	--	--	--	"
18	9.13	--	--	--	--	一部区外
19	9.06	--	--	--	--	"
20	8.93	--	--	--	9.2	"
21	8.89	--	--	--	--	浸食
22	8.96	35.8	亀甲形	7.3	(3.8)	"
23	9.00	--	--	--	(3.5)	一部区外
24	8.88	--	--	--	(3.1)	"・浸食
25	8.90	47.7	長方形	9.7	4.5	"
26	8.96	--	--	(9.7)	--	一部区外
27	8.96	--	--	--	--	"

水田計測表 (5区 8層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	10.24	--	--	--	--	一部区外
2	10.23	--	(長方形)	--	7.7	"
3	10.16	--	--	--	--	"
4	10.30	--	--	--	--	"
5	10.25	推 109.3	(正方形)	11.0	9.9	"
6	10.24	--	--	(11.9)	--	"
7	10.28	--	--	--	9.7	"
8	10.26	推 132.9	長方形	13.8	10.4	"
9	10.24	--	--	--	--	一部区外
10	10.25	推 120.7	長方形	12.6	9.2	浸食
11	10.30	推 63.9	長方形	10.1	6.4	一部区外
12	10.17	--	--	--	3.7	浸食
13	10.34	推 92.1	長方形	10.6	8.8	一部区外
14	10.26	--	--	--	--	"
15	10.14	--	--	--	--	浸食
16	10.20	--	--	--	--	一部区外
17	10.14	--	--	--	--	"
18	10.00	--	--	--	--	浸食
19	9.77	--	--	--	--	"
20	10.15	--	--	--	--	部分的検出

第32表 5区水田計測表 2

瀬名遺跡 5区 14層水田(時期 弥生時代中期後半)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向ほぼ中央部にあたる。								
	② 地形面の変化	西から東へ、北から南へと緩やかに傾斜する。比高差は北西から南東方向で約23cm、傾斜の度合いは8~9cm/10mである。								
	③ 水田の範囲と面積	調査区の東半部分の検出で、面積にして約550㎡である。								
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ約20cmの砂層。								
	⑤ 水田土壌	淡黒色粘土層。								
	⑥ イネのプラントオパール	<table border="0"> <tr> <td><E31地点></td> <td><D90地点></td> <td><F25地点></td> </tr> <tr> <td>① 800個/g</td> <td>① 1,200個/g</td> <td>① 14,200個/g</td> </tr> <tr> <td>② 0個/g</td> <td>② 2,300個/g</td> <td>② 6,600個/g</td> </tr> </table>	<E31地点>	<D90地点>	<F25地点>	① 800個/g	① 1,200個/g	① 14,200個/g	② 0個/g	② 2,300個/g
<E31地点>	<D90地点>	<F25地点>								
① 800個/g	① 1,200個/g	① 14,200個/g								
② 0個/g	② 2,300個/g	② 6,600個/g								
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	黒色粘土層。								
	⑧ 畦畔の規模	小規模な畦畔のみで、上端幅13~15cm、下端幅約30cm、高さは5~10cmで断面はカマゴコ状を呈する。大規模な畦畔は検出されていない。								
	⑨ 畦畔の構造	盛土による簡単なもの。								
	⑩ 水田区画の方法	畦畔は途中で切れることがなく、東西方向にほぼ規則的に走行することにより、格子目状の小規模な区画を形成する。大規模な区画の存在については不明。								
	⑪ 水田区画の形	ほとんど一様な正方形に近い区画。								
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	22枚。そのうち面積を確定しうるものは7枚。最大面積26.4㎡、最小面積16.8㎡、平均面積21.1㎡。ある程度均一な規模。規格外性が感じられる。								
	⑬ 田面の状態	3~5cmほどの深さの凹凸が数箇所認められる。不鮮明ながらも足跡らしいものも一部確認されている。								
遺物の種類	⑭ 水源	不明。								
	⑮ 自然流路	なし。								
年代観	⑯ 水路	なし。								
	⑰ 水口	10カ所。ほとんどが東西方向の畦畔中央部、幅10~20cmの土を削りとって造られた水口が確認された。また、水口の両側には水の流れて田面が削られ凹んだ状態の箇所もみられた。水田面の水まわしは北から南へと推測される。								
その他	⑱ 遺物の種類	洪水流で削りとられた西側部分の凹地より、弥生式土器の蓋が出土している。								
	⑲ 年代推定の根拠	上記の土器が弥生時代中期後半の有東期と考えられることによる。しかし、浸食部分からなので確定はできない。								
遺構確認面とその図	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の16層水田								
	㉑ 自然科学的分析									
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	<p>(模式図)</p>  <p>(説明)</p> <p>上面が礫を含まない砂層によって被覆されているため、畦畔の残存状態も良好で、高まりも明確に検出できた。区画等の面的な広がりもおさえられ、水田跡としては確実である。</p>								

第33表 5区水田観察表1

瀬名遺跡 5区 12層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向、ほぼ中央部にあたる。
	② 地形面の変化	東から西へ、北から南へと緩やかに傾斜する。比高差は東西方向で45cm、南北方向で17cm、傾斜の度合いは東西方向で5~9cm/10m、南北方向で1~9cm/10mである。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の全域にわたって検出されたが、中央部は洪水流によって遺構面が削り取られている。面積にして約1,300㎡。
	④ 直上の層の土壌	厚さ1m近い砂礫層が被覆される。
土層の状況	⑤ 水田土壌	厚さ20cm前後の灰褐色粘土層。
	⑥ イネのプラントオパール	<E31地点> 1,100個/g <F25地点> 2,400個/g
	⑦ 直下の層の土壌	暗青灰色を呈する粘土層。弥生時代後期前半(登呂式期)の遺物包含層。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	大小の規模の差の畦畔がみられる。大規模な畦畔は上端幅40~50cm、下端幅約1m、高さ約20cm、小規模な畦畔は上端幅10~15cm、下端幅約30cm、高さ5cm。
	⑨ 畦畔の構造	大規模な畦畔の一部に杭列が伴う。他は盛り土だけのもの。
	⑩ 水田区画の方法	等高線に沿って配置された大規模な畦畔によって大きな区画が構成され、その中を小規模な畦畔によって更に細かく区画される。格子目状に整然と区画されている。大規模な畦畔の一部は上層10層水田へと踏襲されている。
	⑪ 水田区画の形	大規模な区画については四隅が検出されていないので、正確にはわからない。小規模な区画については、正方形または南北に細長いほぼ長方形を示す。
	⑫ 枚数と面積	4枚の大規模な区画については面積は不明。小規模な区画については全体で54枚が確認され、面積が確定できるもので、大規模なものが42㎡、小規模なものは8㎡。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	人間の足跡が部分的に認められ、歩行状態を認定できるものもある。一部、指先跡まで明確なものがある。全体的に、南北方向に歩行している傾向がみられる。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然水路	なし。
遺物	⑯ 水路	S D51201。グリッド32・31列にある。2本の大規模な畦畔(堤)に挟まれ、南北に延びる水路が検出されている。上端幅1.5~1.8m、下端幅0.5m、深さ0.5m。
	⑰ 水口	明確なもので15カ所。特にグリッドE30のS T26・29・33・37の南北両側では、東西方向の畦畔の中央または交差点が切断されている。他に、大規模な畦畔に接する部分で切れているものがある。
年代観	⑱ 遺物の種類	12層の上面の流石より弥生時代後期段階と思われる壺の破片が出土している。
	⑲ 年代推定の根拠	12層上面流石から出土した土器片と13層(登呂期)との土層対比による。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	6区の18層水田、2/3区の14層水田に対応するか。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  11
		(説明) 11層の砂礫層によってバックされており、大きな畦畔にかぎらず小さな畦畔も明確な高まりを確認できた。また、大きな区画の中をさらに分ける小さな区画も確認され、区画等の在り方からも水田跡と認定できる。

第34表 5区水田観察表2

瀬名遺跡 5区 10層水田(時期 弥生時代末~古墳時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向、ほぼ中央部にある。
	② 地形面の変化	水田跡は東西方向の中央部が最も高く、中央部から東西に向かって西側へ傾斜する。比高差は中央部を頂点にして、東西それぞれ約40cm。傾斜度は約13cm/10mである。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域にわたって検出された。面積にして約1,800㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	上層は厚さ約1m程の砂礫層が覆う。ただし、水田直上には砂礫層との間に厚さ5cm程の薄い泥炭層が存在する。
	⑤ 水田土壌	厚さ20cm前後の淡茶褐色粘土層。
	⑥ イネのプラントオペール	<G25地点> 3,887個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	河川の氾濫によって運ばれてきた砂礫層が50cm前後の厚さで堆積する。
	⑧ 畦畔の規模	平均して上端幅1m、下端幅1.5m、高さ30cmの大規模な畦畔のみ検出。しかし、若干規模の小さな(中間的な)畦畔もみられる。水路の境を兼ねたものもある。
	⑨ 畦畔の構造	杭・横板で補強された畦畔と盛土のみの畦畔とが共存する。盛土のみの畦畔は若干規模が小さくなっている。全体に、盛土と杭列とは時期が異なる可能性が高い。
	⑩ 水田区画の方法	東西方向3本、南北方向4本の大きな畦畔がほぼ直交する形で、大規模な区画を作る。その内を更に細分するような区画は検出されなかった。畦畔からずれた位置にも杭列があり何段階かにわたって区画の位置が変わり、それらがその都度杭列によって補強されていたと考えられる。
	⑪ 水田区画の形	完全に四隅が検出されていないので、正確にはわからないが、検出された畦畔の方向からは長方形に近い形が推測できる。これは築造時の姿で、それ以前に何段階か区画は変更されていた。
	⑫ 枚数と面積	大規模な区画の水田跡が8枚。東西畦畔の間隔が判明しないため推測しがたいが、南北畦畔の間隔からみて、少なくとも100~150㎡以上あると考えられる。
用排水の状態	⑬ 水源	不明。
	⑭ 自然水路	なし。
	⑮ 水路	S D51001。グリッド31列に2本の大畦畔(堤)に挟まれて南北に延びる水路。上端幅1.3m、下端幅0.3m、深さ0.3mを測る。また、これに直交するように畦畔壁に溝がつくられており、水田内と水路を連絡するものとも考えられる。
	⑯ 水口	不明。
遺物	⑰ 遺物の種類	土師器片。畦畔内より大量の木製品(田下駄、鎌、舟形、梯子、曲物の底板等)が出土。
年代観	⑱ 年代推定の根拠	年代決定にいたる土器に恵まれないため、上下層及び隣接区の土層との対比による。
	⑲ 隣接区との対応関係	6区の16層水田、2/3区の12層水田。瀬名遺跡全体に広がる杭列水田の一部か。
その他	⑳ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉑ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  ⑩ (説明) 9層の砂礫層によってバックされており、畦畔の高まりも明確に検出できた。また、面的に9枚の区画が確認され、畦畔の中にも多くの杭・横木を伴うものがあり、畦畔としての認定も容易である。しかし、杭・横木は畦畔の盛土からずれていたり、レベルが低いものが多く、検出された盛土と補強材はそれぞれ異なる時期のものであった可能性が高い。

第35表 5区水田観察表3

瀬名遺跡 5区 8層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向はほぼ中央部。
	② 地形面の変化	地形面は東から西に傾斜し、比高差は約60cmである。傾斜度は約11~13cm/10mである。水田は地形の自然傾斜にそって東から西へ向けて段差をもったいわゆる棚田状を呈する。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の西半部で検出され、総面積約1,400㎡に及ぶ。水田は低湿地から微高地縁辺部にかけての緩傾斜地に造られたもの。
土層の状態	④ 直上の層の土層	砂礫および砂層。
	⑤ 水田土層	暗褐色粘土層。厚さ約40cmで保水性の良好な土層。
	⑥ イネのプラントオーバー	<D30地点> ①5,168個/8 ②4,520個/8
	⑦ 直下の層の土層	砂礫層。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	中央部東西方向に上端幅約60~90cm、下端幅約150cm、高さ約15cmの大規模な畦畔が1本、他は上端幅約20cm、下端幅約60cm、高さ約10cmの小規模な畦畔。
	⑨ 畦畔の構造	畦畔はいずれも盛土だけのもの。
	⑩ 水田区画の方法	畦畔の多くは直線的に延びるが、蛇行するものもみられる。大規模な畦畔によって、区画が形成され、その中をさらに小規模な畦畔で細かく区画している。畦畔の方向は、東西方向が正方位の東より約40~45°北へずれている。規模と方角から、条里型地割の坪境の可能性もある。
	⑪ 水田区画の形	方形ないし亀甲形。交差が直線的でない。
	⑫ 枚数と面積	27枚の水田跡のうち面積を推定できるものは7枚。面積は111㎡という突出したものを除くと、おおむね50㎡前後。
⑬ 田面の状態	足跡群は検出されたが、歩行状態とは考えられない。ST12に集中していた。	
用排水の状態	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然水路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	畦畔のときれが10カ所で認められたが、ほとんど東西方向の畦畔である。洪水流による浸食の痕跡で水口とは断定できないものもあった。
遺物	⑱ 遺物の種類	畦畔内部より灰輪陶器碗(0-53窯期併行)。田面上より須器(7~8世紀)。田下駄・大足。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	上記の畦畔内部より出土した灰輪陶器碗から推定。
	⑳ 隣接区との対応関係	6区の11層水田。2/3区の6層水田。条里型地割の約109m間隔という坪境線に対応する可能性の高い大規模畦畔が確認されている。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 
		(説明) 田面を砂礫層でバックされているため、畦畔の高まりも明確で、水田跡としての多くの区画も検出された。

第36表 5区水田観察表4

瀬名遺跡 5区 5層水田(時期 平安時代後期以降)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向ほぼ中央部。
	② 地形面の変化	調査区中央部は広い範囲で流路跡が不明。調査区東端の水田面は東から西へと傾斜している。
	③ 水田の範囲と面積	調査区東側で2本の南北方向の畦畔のみの検出。枝状の畦畔が検出されないので平面的な広がりもよくわからない。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	青灰色砂層。流れによる砂の堆積状態を示し、河川の氾濫・洪水によるもの。
	⑤ 水田土壌	淡青色粘土層。厚さ約15cmの保水性のある土壌で、グライ化している。
	⑥ イネのプラントオパール	<G25地点> 939個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	暗青灰色砂質粘土層。西側に移るにつれて礫層となる。
	⑧ 畦畔の規模	2本の畦畔のうち1本は上端幅約60cm、下端幅約140cm、高さ約10cmの畦畔、もう1本は上端幅約35cm、下端幅約70cm、高さ約4cmの畦畔。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみによるもので杭等の補強材はなし。
	⑩ 水田区画の方法	南北方向の畦畔が2本のみで、これに伴う枝状の畦畔が検出されていないので、区画については不明。畦畔の方向は、真北より約35~40°西へ傾斜しているようである。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	特になし。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	調査区西側にSR50502が存在するが、一部を残すのみで年代観は不明。水田跡とは共存しない。
	⑯ 水路	なし。
遺物	⑰ 水口	不明。
	⑱ 遺物の種類	5層に連続する土層中より灰軸陶器の碗と甕形土器。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	上記の灰軸陶器による。しかしこれだけでは確定的な根拠にはならない。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明確。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 上層を砂層によってバックされる。調査区東側のみの検出で、しかも遺構としては南北方向の2本の畦畔(高まり)しか確認されず、区画等も不明である。したがって水田跡としての明確な根拠はない。ただし、上部遺構の3層水田と畦畔の位置、方向が重なることで水田跡としての可能性が考えられる。

第37表 5区水田観察表5

瀬名遺跡 5区 3層水田(時期 中世～近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の東西方向ほぼ中央部。	
	② 地形面の変化	比高差は東西方向で約7cm。傾斜は南北方向で約4cm。東から西へ1～1.5cm/10m、北から南へ1.5～2cm/10mで、ほぼ平坦といえる。	
土層の状況	③ 水田の範囲と面積	調査区東半部で検出された。面積にして約1,500㎡。西側は流路によって破壊されており、遺構は検出されていない。	
	④ 直上の層の土層	青灰色砂層。	
	⑤ 水田土層	青灰色粘土層。厚さ約20cmで、保水性に良好な土層。	
	⑥ イネのプラントオーバー	<G25地点> 1,249個/8 <F25地点> 2,200個/8	
	⑦ 直下の層の土層	青灰色砂層。流れによる砂の堆積状況を示し、河川の氾濫・洪水によるものと考えられる。南側部分に移るにつれて粘性を帯びた青灰色砂質粘土となる。	
	水田の状況	⑧ 畦畔の規模	上端幅約1m、下端幅約1.3m、高さ約5cmの大きな畦畔が1本みられるが、その他は、上端幅約20cm、下端幅約50cm、高さ6～9cmの畦畔。
		⑨ 畦畔の構造	盛土しただけのもので、枕・矢板等の補強材はみられない。
⑩ 水田区画の方法		直線的に配列された畦畔によって仕切られ、全体的にはほぼ近似した形状の水田跡が隣接しあい、整然としている。畦畔の方向は、南北方向で真北より約30～40°西へ傾いている。	
⑪ 水田区画の形		正方形または長方形。	
⑫ 枚数と面積		検出された水田は20枚。そのうち四面を畦畔で囲まれ面積が推定できるものは5枚。水田1枚あたりの面積は約60～130㎡。	
⑬ 田面の状態		水田面に散在して人間の足跡と推定される痕跡を検出。歩行状態を示していると思われる規則的な配列をしているものも認められる。	
用排水の状態	⑭ 水源	不明。	
	⑮ 自然流路	なし。	
	⑯ 水路	なし。	
	⑰ 水口	明確なものが6カ所。交差部にあるものと交差部から若干内側にあるものの2種類がみられる。	
遺物	⑱ 遺物の種類	3層下位で龍泉蒸気とされる型押し蓮弁文青磁碗、13世紀と考えられる瓷器系陶器が出土。	
年代観	⑲ 年代推定の根拠	3層下位出土の青磁片から推測。	
	⑳ 隣接区との対応関係	6区の5層水田、2/3区の3層水田。いずれも現地表面の客土がなされる以前まで続いていた水田区画であろう。	
その他	㉑ 自然科学的分析		
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 流路S R50301の洪水によって冠水したため、水田の上面を砂層が被覆している。 そのため畦畔の検出は比較的容易で、高まりも明瞭にとらえることができる。	

第38表 5区水田観察表6

第4節. 6区において検出された遺構

1. 基本層序

6区は海拔標高12mの現地表面から海拔4mまでを1～43層に分層して調査を行なった。この内遺構を検出したのは5層・11層・13層・14層・16層・18層・19層・23a層の8面であった。他の調査区と同じく、遺構面のほとんどは砂または砂礫の自然堆積に被覆されて良好な状態で検出できた。

層序	土色・土質	観	察	イネのプラントオーバー	遺構	年代観
1層		客土。		— (0/023層/a)		現代
2層	水田土壌	昭和60年代まで耕作されていた水田。6区東端で10数cm。		—		近現代
3層	砂礫	粒径10cm以下。4～8層の土塊を含む。		0 ①		
4層	砂～砂泥			800 ①		
5a層	茶褐色粘土	砂が斑状に混入する。		2900 ①	水田	(近世)
5b層	茶褐色粘土	砂が斑状に混入しない。		—		
6層	暗茶褐色粘土	主として5層水田の水路東側に分布。		1000 ①		
7層	砂～砂質粘土	水性堆積。		0 ①		
8層	明茶褐色粘土	直上直下とは平坦明瞭に接する。層内に層理なし。		0 ①		
9層	砂礫	粒径3～4cm以下。		—		
10層	砂	粒径0.1mm以下。		—		
11層	明茶褐色粘土	耕作面で10～30cm厚。		1900 ①	水田	(平安後～中世)
12層	砂	粒径0.1mm程度。		—		
13層	灰色粘土	調査区西部に分布。下部は自然堆積的。		0～300 ②	水田	(古墳中～平安末)
14層	暗茶褐色粘土	腐植質。上面は平坦明瞭の区域と波状不明瞭の区域あり。		900 ①	木道・杭列	古墳中期
15層	砂～砂礫	礫はS R 61601に集中。大半は砂の水平堆積。		—		
16a層	暗赤褐色粘土	砂泥～粘土の間に数層～10数層の断続的な黒色ラミナ。		0 ①		
16b層	暗青灰色粘土	砂泥が斑状に混入する。		2700 ①	水田・流路	(弥生後期～古墳前期)
16c層	明茶褐色粘土	砂泥が斑状に混入しない。		2600 ①		
16d層	明茶褐色粘土	16c層と同質の粘土。礫質。		—		
17層	砂礫～砂	調査区東部のみ。水性堆積砂礫の一部を礫層が切る。		—		
18a層	暗灰色粘土	炭化植物の細片～粉末粒が散在する。		900 ①	水田	(弥生後期)
18b層	灰褐色粘土	暗灰色粘土に明青灰色粘土(19層)が斑状に混入。		—		
18c層	明緑灰色砂泥	層厚最大8cm。水平、断続的に存在。		—		
19a層	明青灰色粘土	触感で砂粒の混入なし。		6100 ③	水田?	(弥生後期)
19b層	明青灰色粘土	砂質。20層上部と19層下部が湿り合い均質化。		900 ③		
20層	砂～砂泥	水性堆積。		0 ①		
21層	明茶褐色粘土	20層最下部同様の青灰色砂泥を薄層として含む。		900 ①		
22層	暗茶褐色粘土	21層にある砂泥薄層なし。下部で23a層が斑状に混入。		0～1800 ③④⑤		
23a層	黒色粘土	23b層との境界にO s、k g pが単粒化して混入する。		1800～2000 ③④⑤	杭	弥生中期
23b層	暗茶褐色粘土	上部では23a層が斑状に混入する。		0 ③④⑤		
23c層	黒色粘土			0 ③④⑤		

(24層以下はトレンチによる断面観察のみを行った)

24層	砂礫	33層	黒泥
25層	砂	34層	泥炭質粘土
26層	砂	35層	泥炭質砂質粘土
27層	砂	36層	泥炭質粘土
28層	砂～暗褐色粘土	37層	暗灰色高泥炭質砂泥
29a層	緑灰色シルト	38層	泥炭質粘土
29b層	明茶褐色粘土	39層	砂
30層	暗茶褐色粘土	40層	明茶褐色砂泥
31層	暗茶褐色粘土 (灰白色粘土混入)	42層	灰白色砂泥
32層	淡黒色粘土	43層	泥炭質粘土

※プラントオーバーの分析試料は以下の6地点で採取した。
 ①C 3 5 N ②C 3 5 N
 ③B 3 5 N ④C 4 1 S
 ⑤B 3 5 N ⑥D 4 3 N

第39表 6区土層観察表

D 43

D 42

D 41

D 40

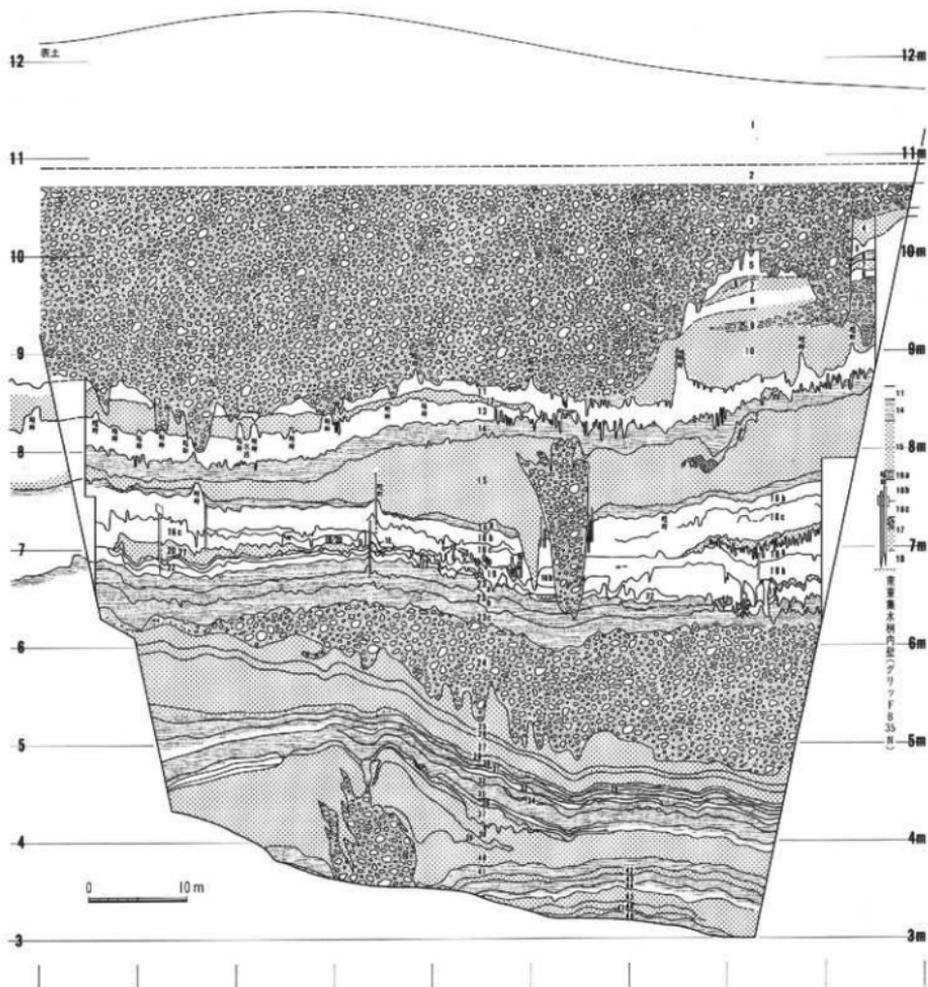
D 39

D 38

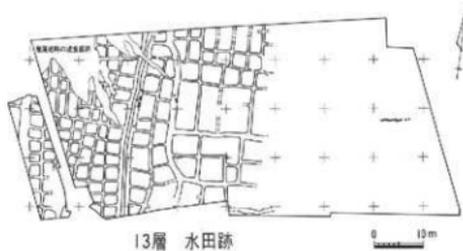
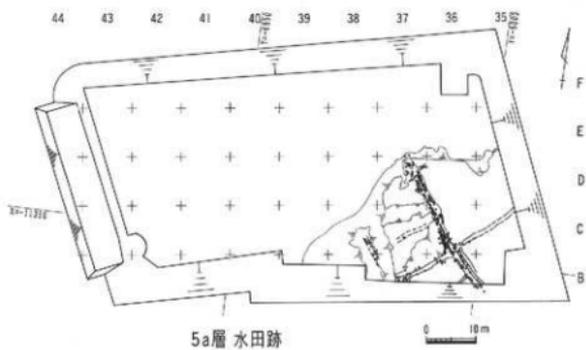
D 37

D 36

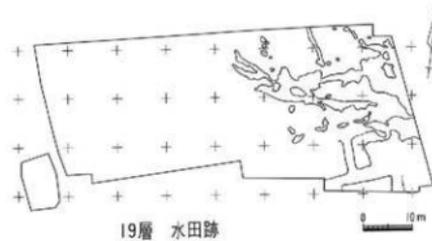
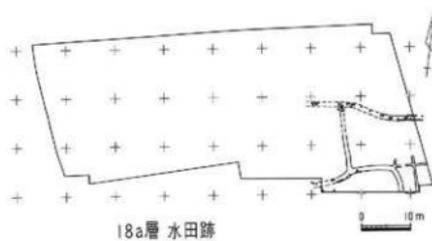
D 35



第109図 6区基本土層模式図 (水平1:500 垂直1:50)



第110図 6区遺構変遷図1



第111図 6区遺構変遷図2

2. 遺構の変遷

23a層上で検出された遺構 凹地・打製石斧の散在

黒泥層 検出された遺構は、流水痕跡に類似した入り組んだ凹地と杭である。凹地は調査区東部に広がり、それ以外の遺構面は浸食されないままの黒泥が広がっている。検出された杭2本と周辺との関連は不明である。イネのプラントオパールは3地点の試料から1,800~2,000個/gが検出されており、水田耕作が行なわれていた地域の一部であった可能性を窺わせている。精査面積約2,400㎡。

(1) 流水痕跡類似遺構SX623a 01 [図版116]

精査面の北東部約1/3の範囲に入り組んだ凹地が広がっていた。凹地は調査区東部で深く、約20cmを測る。覆土は22~19層のブロック群(粘土~砂泥)である。凹地については19層上面でも同様の凹地をほぼ同じ範囲で検出しており、19層凹地の深い部分は23c層に達していたことから、一部では23a層にもその影響が及んでいたと考えられる。

(2) 杭 [図版116]

杭2本が調査区の北辺中央で検出された。杭はいずれも丸太材で残存長はそれぞれ30cmと34cm。直径は5cmと9cm。1本は上端を23a層上に突き出し、下端を23c層直上にとどめていた。別の1本は23c層上面付近で折損し、折損した上半部を23c層内に横たえていた。乾燥による収縮変形の大きさ、断面の状況などから広葉樹材と推定した。

他の遺構との関連は不明であるが調査区北方に関連する遺構が隠されている可能性もあろう。

<出土遺物> [図版116・117]

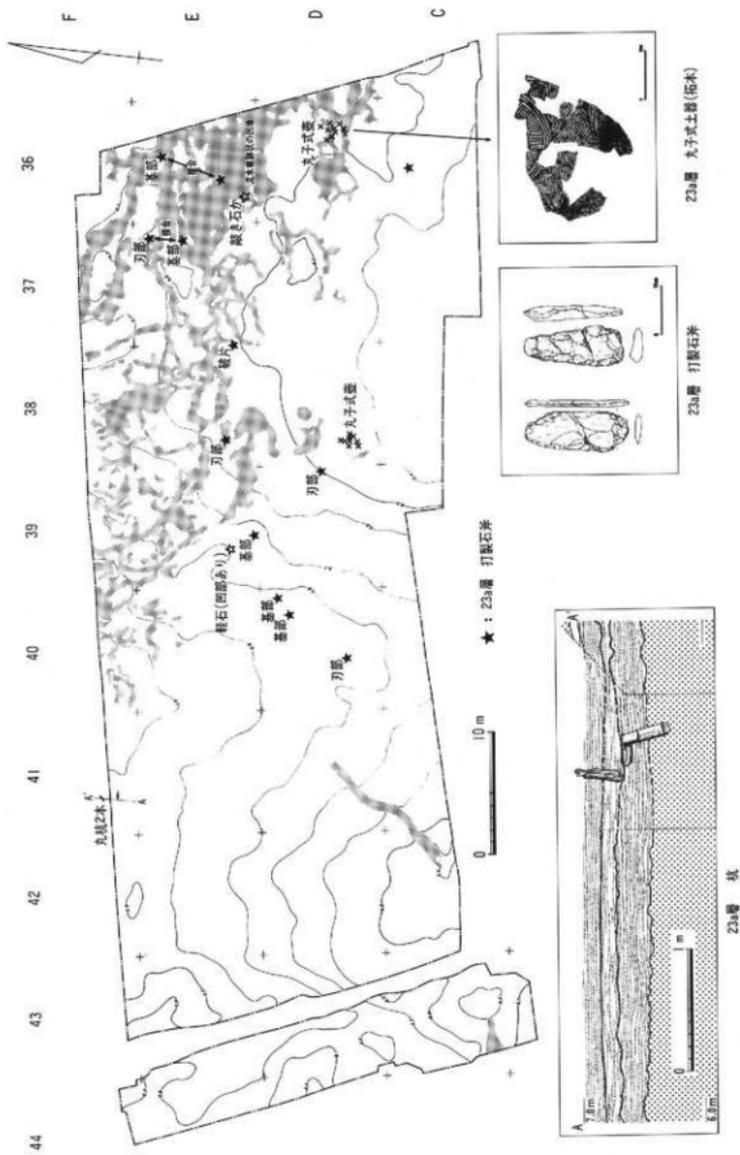
打製石斧が12点、壺(丸子式)の土器片2個体分が検出された。

打製石斧のほとんどは中程で折損した半分ずつとして検出されている。うち4点は、刃部と基部が接合されて完形の2個体となった。接合された2組の破片はそれぞれ2.8mおよび5.2m離れた場所で検出された。

壺 壺2点はそれぞれ2~3mの範囲に散乱していた。調査区東部で検出された壺は流水痕跡類似の凹地(SX623a 01)南縁から、検出されたものであるが、土器片の殆どは23a層に埋没していた。

丸子式土器 23a層上面から検出された土器片2個体分が、丸子式土器であることから、弥生中期初頭までさかのぼり得る遺構であるとした。

KgP, Os また、既に降下年代の測定が行なわれている火山灰として、23a層とb層との境界付近を中心に大沢スコリア(約2,700年前)が、また23c層を中心とする範囲にはカワゴ平バミス(約2,900年前)が、それぞれ分散した状態で検出された。これは、加藤芳朗氏(静岡大学名誉教授)の御教示による。



第112図 23a層 遺物分布図

19層で検出された遺構 水田跡・凹地群

凹地群と畦畔状の高まりが検出された。6区では最もグライ化の強い粘土層である。プラントオパールは6区で最も高い値を示した(6,100個/g)。精査面積約2,200㎡。

P. O. 高値

〈堆積状況〉 [第115図]

基盤層は全面にわたって直下に広がる20層(青灰色砂、自然堆積)である。19、20層の境界は漸移的であり、20層は上部ほど自然堆積が攪乱されて均質化している。

土 壤

19層は青灰色の粘土である。触感では砂粒の混入が認められなかった。この粘土は調査区東部に広がる。粘土の厚さは最も厚い部分で30cm、平均的には10cmであった。

19層上面には調査区の大半で18層粘土の下部(18b層)が直に接するが、調査区東部中央ではその間に明緑灰色砂泥(18c層:厚さ1~8cm)が存在し、19層上面との間に平坦明瞭な境界をつくる。

基盤層攪乱

調査区西部には19層の粘土が存在せず、16層が20層上に平坦明瞭な境界を示して接する。ただし、西側法面南端で土層を見ると20層(水性堆積砂礫層)の中が上部ほど攪拌均質化されているのがわかる。20層の中は攪拌の程度によって三分することができ、最下部を自然堆積層、中層をブロック状攪拌層、最上部を均質砂層とした。20層内に残るこの痕跡は19層と同じ時期に印された人間による働きかけの痕跡であろうか。

〈水田跡〉 [第113・114・118図, 図版115]

19層上面の大半は18b層に接して粘土同士の境界をつくっていたため、平面精査に際しては色調の相違(18b:明青灰色、19:暗灰色)のみを頼りに検出した部分が多い。

19層を水田としたのは以下の状況からである。

5区と対応

すなわち、①調査区南東部で畦畔状の高まりが検出され、②その東方の5区13層西部では、堰を伴って南流する流路の西岸に6区の方へ伸びる水路状の遺構が2本検出されており、6区北東部には、それに対応するような流水痕跡状の地形がある。これは6区の南東部および南東方に広がる水田のための導水路ではないだろうか。また、③イネ属のプラントオパールが高い値を示している(6,100個/g:調査区南東端試料)。

〈畦畔状遺構 SX61901~03〉 [第113・118図, 図版115]

畦畔状の高まりは、上面平坦で下端幅2~3m。田面からの比高差は最も大きな部分で10cm余りであった。19層の畦畔状の高まりは上層の18層水田の畦畔とは規模が相違するものの配置としては重なる部分が多い。18層の耕作による疑似畦畔である可能性も残る。

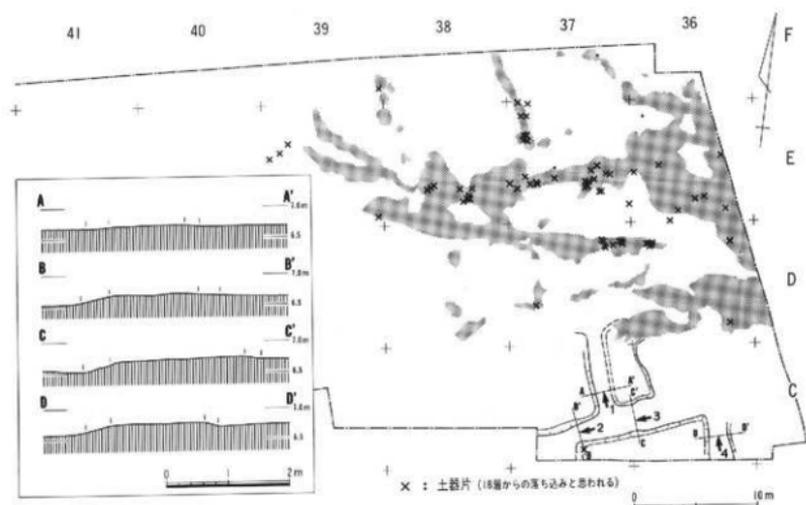
上層の位置

〈凹地 SX61901〉 [第113図, 図版115]

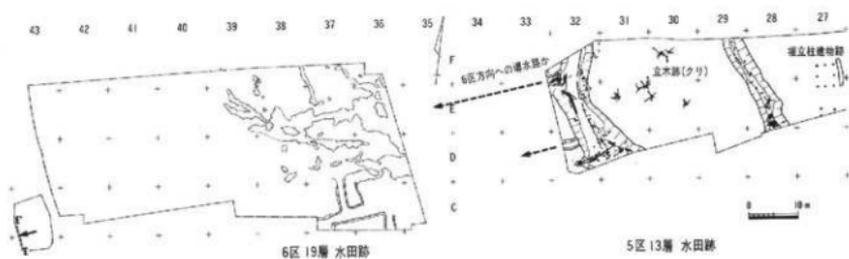
調査区北西部に広がり、不規則な形ながら東西方へ方向性が感じられる。東側排水溝に見られる断面がほぼ最深部に相当し、幅3m弱、深さ約50cmを測る。最深部は23c層に達する。凹地の覆土は18b層~19層のブロック群である。19層ではこれらの凹地の中のみから土器片が検出されている。

〈出土遺物〉 [第113図, 図版115]

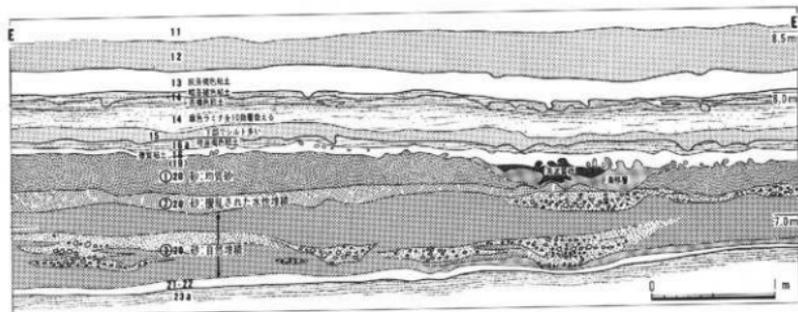
調査区北東部の凹地内を中心として、破片の数にして約100点の土器片が検出されたが、その大半は18層の耕作土内から検出された土器片と接合されており、接合されなかった土器片も18層の土器との間に時期的な差は認められないことから、18層水田からの沈み込みによるものと考えられる。



第113図 19層水田 凹地内土器片分布図



第114図 6区19層-5区13層 遺構関連図



第115図 19層水田 調査区西端の土層図

18層上で検出された遺構 水田跡

18層水田は大きな畦畔と小さな畦畔とによって区画される。畦畔の一部は16層水田に踏襲される。密集した足跡群の中に鉄痕と見られる凹みを検出した。精査面積約800㎡。

〈堆積状況〉

基盤層は厚さ数cmの明緑灰色砂泥である(18c層)。18層と19層の境界は18c層を挟む部分ではほぼ平坦明瞭である。この18c層が存在しない区域では18層粘土が19層に直接接する。

土 壤

18層は茶褐色粘土質の土壌である。18層の分布は東部で厚く、西部では殆どその痕跡もない。最大の層厚は調査区南東部で、40cmを測る。この周辺では植物の炭化碎片の混入により暗い色を示す下部(18b層)と、混入のない上部(18a層)とに分層できる。上部と下部が明瞭な境界を持つのは一部である。調査区中央付近では18a～19層までがともに攪拌されており、西部においては16層水田の畦畔下部において19～20層の上に散在する暗褐色の粘土が18層の痕跡である。

砂 礫 被 覆

被覆層である17層(水性堆積砂礫層)と18層との境界は波状明瞭である。

〈水田跡〉 [第116・117・118図, 図版113・114]

部分的杭列

18層水田を区画する畦畔は一部に杭列を伴う。杭の密度は精査面中央を東西に走る畦畔(SK1801)の東端で最も高く、次の時代の16層水田の畦畔はほぼ同様の補強型で同じ位置に築かれている。杭列に用いられた木材は残存強度等から見て針葉樹材が大半を占めること、角材を主として用いていることなども16層水田と同様である。

〈足跡群〉 [第116図, 図版114]

18層の田面からはヒトの足跡と思われる凹みが密度高く検出されている。北東部では多数が重なり合い、個々に分別することはほとんどできない。南東部では南北方向に帯状の密集部分が3～4条数えられる。ヒト以外のものと認定できる足跡は検出されなかった。

〈鉄痕群〉 [第116図]

鉄痕入刃角

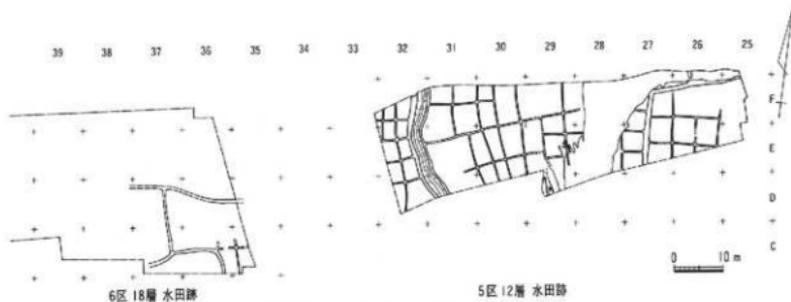
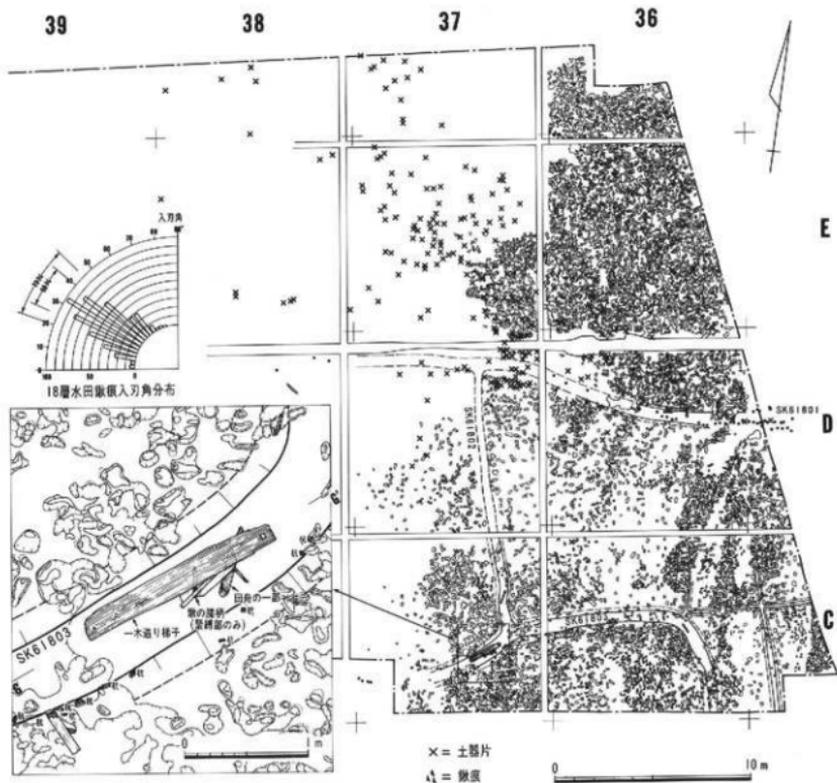
18層水田の精査面南東部では半月形の平面形を持つ凹部約500個を検出した。典型的なものでは凹部の一面が平面的になっており、それを鉄が打ち込まれた際に刻まれた面と想定し、この面が現水平面に対してとる鋭角を鉄の「入刃角」として計測した。グラフを見ると、30～35°を中心としてその前後25～40°の範囲に計測値の50%が集中するのがわかる。検出された鉄痕の分布は精査面南部に偏り、隣り合う鉄痕が同じ方向に並ぶのが一部に見られる。

〈出土遺物〉 [第116図, 図版113]

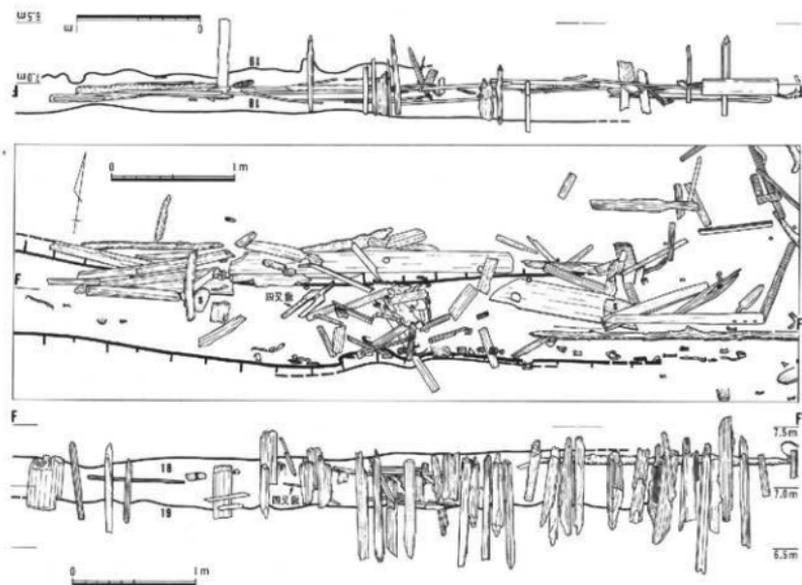
土器については数個体分の破片を主として耕作土中から検出した。散乱の仕方は一様でなく、大半の土器片が精査面中央から北西部にかけての範囲に偏って分布する。中央の大きな畦畔SK61801付近の一群は焦土を交えた中に検出した。接合復元の過程では19層上面の凹地に落ち込んだ粘土の中からの土器片が18層の土器片と接合されて1個体となる例も見つっており、19層上面の凹地遺構が18層上面からの何らかの働きかけによるものである可能性を窺わせている。弥生時代後期前半くらいとした。

農具・梯子

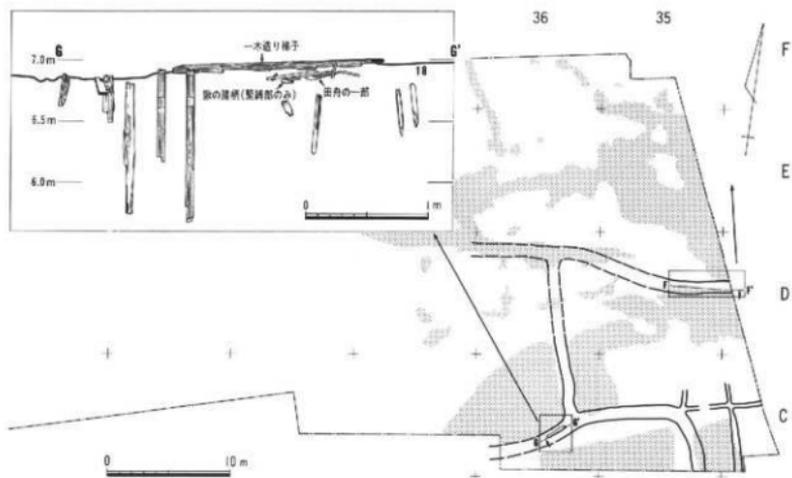
木製品としては、調査区南部の畦畔SK61803の盛土上面から一本造りの梯子を、梯子の下からは田舟の一部、鉄の膝柄の一部を検出した。東部中央の杭列畦畔SK61801盛土内からは四又鉄、鉄の膝柄の一部(緊縛部)が検出された。



第116図 18層水田 足跡・畝痕分布図



第117図 18層水田 杭列展開図



第118図 19層-18層 畦畔配置図

16層上で検出された遺構 水田跡

全域で水田遺構を検出した。ほぼ全ての畦畔が杭や敷き込み材で補強されていた。精査面積約3,000㎡。

〈堆積状況〉

16層水田の直下に接するのは17層～20層である。東部では17層砂礫、中部～西部にかけては19層粘土または20層砂礫である。16層と17層とはほぼ平坦明瞭な境界をつくるが、部分的には17層上部の砂礫が16層に巻き上げられる。17層は南東部で最も厚く、最大約40cm、その周辺では平均20～30cmである。17層の主たる堆積は水平堆積砂層（粒径1mm以下）であるが、これを切る流路断面状の礫の堆積も見られる。

16層水田の主たる部分をa～c層に三分した。a層は厚さ数cmの砂泥質の土壌である。土 壌
植物に由来すると思われる黒色～茶褐色のラミナを含み、全体としては茶褐色～暗赤褐色を呈する。b層は暗青灰色粘土層。c層は茶褐色粘土、下部は一部で礫質となっていた。

16層の層厚は平均的には30～40cm程度である。調査区南西端の田面（ST19）では特に土壌が薄く、部分的には2～3cmしかない部分もあったが、上下の層との境界は他の区域同様に平坦明瞭であった。この部分に限って耕作土が顕著に薄い理由は不明である。

16層水田は全域を15層（砂礫）に被覆される。この6区15層は杭列水田を被覆廃絶させた砂礫層（2区～6区に広がる。確認範囲約300m）の一部である。6区15層の大半は砂の水性堆積（粒径1mm以下）だが、遺構中央を南流する流路沿いに砂礫（粒径5～6cm以下）が集中しており、6区における氾濫流の中心であったと推定できる。15層の層厚は最大約1m80cm（SR61601内の砂礫部分）、流路周辺で約70～80cm、流路から西へ遠ざかるにつれて漸減し、西側田面では厚さ10cm前後の砂泥として、存在するのみである。

〈水田跡〉 [119・120・121・122・123図、図版105・106・107・108・109・110・111・112]

16層水田では畦畔20本を検出し、田面は19面とした。畦畔20本の中には盛土を検出できなかった杭列、わずかに方向性を感じられるだけの小さな杭列も含めている。

畦畔は十字形に交差することはなく、必ずT字形またはY字形で交差する。これらにより水田区画の形は正方形に近い不等辺の四角形となっている。区画の中を更に細分するような小規模な畦畔は検出されなかった。

調査区中央を東西に走る畦畔（SK61601）とそれが突き当たる南北畦畔（SK61605）は、他に比べて長く直線的である。

16層の畦畔は調査区東端中央では18層水田の杭列畦畔と同じ位置に築かれている。18層の畦畔の痕跡はグリッドE39におけるSK61601の断面下部に見られたものが西限である。16層、18層の標高差は、調査区東端の畦畔周辺で最も大きく、50～60cmを測る。田面数は19面になるが、面積が確定できるのはその内の2面のみである。この2面のみで平均すると田面1区画の面積は約240㎡（正方形に換算して一辺約15m）となる。

（1）畦畔

16層水田の畦畔は盛土とその内部の杭列からなる。畦畔盛土の大きさは下端幅が約2m、高さは最も高く残存している部分で田面からの比高が30cmを越え、大半は20cm以下となる。畦畔のうちの1本（SK61604：精査面中央北部）は、明確な盛土を持ちながら杭列を伴わなかった。16層の厚さは畦畔部分で最大60cm、耕作面においては10～50cmであった。

以下に各畦畔について列記する。遺構番号に対応させた各畦畔の範囲については挿図を

砂礫被覆

区画踏襲

大規模区画

参照してもらいたい。

SK61601 typeA・B・西端で典型的C

走向は東西。検出長約70m。精査面西部の南北畦畔（SK61605）とのT字路から東に向かい、南北に畦畔を分枝させつつ、ほぼ一定の走向で伸び、東端は法面の下に隠れる。同時期に比定した5区10層西部の水路の堤を兼ねた畦畔までは伸びていないように見える。

SK61602 typeA

交差部寄集

走向は南北。SK61601の6区における東端から北に分枝する。交点付近の杭列は密である。伴出遺物は田下駄、四又鉞。

SK61603 typeA

走向はほぼ南北。SK61601から北に分枝する。杭列は分枝点から遠ざかるにつれて疎らになる。盛土を検出できなかった。

SK61604 typeD

走向は南北。SK61601から北に分枝する。杭1本を検出した。ほとんど盛土のみの畦畔。

立木跡

SK61601との交点付近に立木跡を検出した。盛土の大きさは平均から見ればやや小規模（下端幅1.5m以下）。

SK61605 typeA・C

走向はほぼ南北。検出長約35m。東西方向に長く直線的に伸びるSK61601の西端に接し、南北端はそれぞれ調査区外に消える。

SK61606 typeA・B・C

傾く杭列

走向は南北～東西に屈曲する。走向が南北方向の部分では杭列が東に倒れる傾向を顕著に示す。

SK61607 typeA

走向はほぼ東西。盛土は検出されず、杭列は疎ら。

SK61608 typeB

矢板列

走向は南北。SK61606南東部の矢板列と連続する矢板列が田面ST14を囲んで並ぶ。

SK61609 typeA・C

小型塔

走向はほぼ東西。伴出遺物はほぼ完形の小型塔ほか土器片多数。

SK61610 typeB

矢板列

走向はほぼ南北。SK61605から約60°の角度で田面ST17内に分枝する矢板の短い列として、田面解体の過程で検出した。

SK61611 typeC

走向はほぼ東西。SK61605より西へ分枝する。西端は法面下に隠れるが、田面ST17の北辺をほぼ確定する。

SK61612 typeA的

走向はほぼ東西。SK61605より西へ分枝する。杭列は疎らな上に、SK61605との分枝点付近に見られるのみ。盛土は検出できなかった。

SK61613 典型的typeC

走向は南北。

SK61614 typeC

走向はほぼ南北。

SK61615 type不明

走向はほぼ南北。針葉樹材の角材杭列の頭部までを検出した。矢板と思われるものの頭部も検出したが、いずれも取り上げ不能。

SK61616 type A

走向はほぼ南北。盛土は残存せず、解体の過程で点在する杭列のみを検出した。

SK61617 type不明

走向は推定南北。中央流路沿いの狭い範囲に、やや方向性のある杭列を検出。伴出遺物は田下駄。

SK61618 type不明

走向はほぼ南北。SK61601から06へつながるように見える。廃絶時に浸食されたものか、盛土は検出できなかった。

SK61619 type不明

走向はほぼ南北。中央流路沿いの狭い範囲に、方向性のある杭列を検出。倒伏した矢板も交じる。

SK61620 type不明

走向はほぼ南北。盛土不明。粗い砂の中から貧弱な杭列と粗朶のような敷き込みを検出 芯 材 した。

(2) 6区16層水田における畦畔の類型 [第119図、図版107・108・109]

6区16層水田の畦畔では盛土には大きな変異は認められない。ここでは畦畔の補強構造に注目して畦畔の分類を試みる。

すなわち、「杭列」と総称してきたものを細分して杭・矢板・横板・芯材と呼び分け、16層水田において実際に検出されたこれら個々の補強材の組み合わせ方を畦畔の類型として分類する。以下に、個々の補強材呼び分けの基準・タイプ分けの基準・各畦畔のタイプについてそれぞれ表に示す。

①杭	畦畔盛土に垂直に近い角度で打ち込まれた補強材。(針葉樹の角材が大半を占める。畦畔の交点周辺は密に打ち込まれている。)
②矢板	畦畔盛土に垂直に近い角度で打ち込まれたもののうち断面が扁平なもの。(6区16層ではしばしば矢板のみの列が見られ、矢板の形態は矢板列ごとに異なる傾向がある。例えば矢羽根状に下部の尖った矢板以外に、長軸に対して直角に下部を切り落とした長方形の矢板があり、長方形の矢板は6区16層では中央流路と畦畔との交点付近のみで見られた。16層の矢板は大きなものでは残存長1mに及び、70~80cm前後のものが多い。)
③横板	畦畔盛土を側面から支えるように埋め込まれた板。杭により外側から支えられる。
④芯材	平面図での位置は畦畔の中軸周辺、土層断面での位置は16b層とc層の境界周辺に平面的に敷かれた板材・角材など。

第40表 6区16層水田 畦畔補強材の呼び分け

タイプA：杭列	畦畔側面を主として杭列により補強する。
タイプB：矢板列	畦畔側面を主として矢板により補強する。
タイプC：横板を伴う杭列	畦畔側面を杭に支えられた横板により補強する。
タイプD：盛土のみの畦畔	補強材が芯材も含めてほとんどない。

第41表 6区16層水田 杭列・芯材による畦畔類型分類

遺構番号 SK616__	堰ねの 走 向	タイプ	盛 土	伴 出 遺 物	備 考
01	E-W	A・B・C	残存	田下駄・二又鎌・梯子	長く直線的 立木1 長く直線的 屈曲する 貧弱な杭列
02	N-S	A	残存	田下駄・四又鎌	
03	N-S	A	残存	なし	
04	N-S	D	残存	なし	
05	N-S	A・C	残存	二又鎌・刺物	
06	N-S～E-W	A・B・C	一部残存	なし	
07	E-W	A	不明	なし	
08	N-S	B	残存	なし	
09	E-W	A・C	残存	田下駄・小型埴・土器片多数	
10	N-S	B	不明	なし	
11	E-W	C	一部残存	なし	
12	E-W	A?	不明	なし	
13	N-S	C	残存	なし	
14	N-S	C	残存	田下駄	
15	N-S	不明	不明	なし	
16	N-S	A	不明	なし	
17	N-S	不明	全部流失	田下駄	
18	N-S	不明	全部流失	なし	
19	N-S	不明	全部流失	なし	
20	N-S	不明	不明	なし	

第42表 6区16層水田 畦畔一覧表

(3) 流路 SR61601および02・03 [図版106]

SR61601は16層水田遺構の中央を南流する流路で、壁面には流水による浸食痕と思われる凹凸が無数にみられる。幅は3～5m、深さは水田面から100～130cm。北西から2本の支流SR61602・SR61603が合流している。これらが水田廃絶時に形成されたものであるのか、あるいは16層水田経営時既用排水等の目的で利用されていたものかは決定的な判断材料に欠けるが、関連する事実としていくつかを列記する。①流路沿いに部分的に検出した杭列(SK61617・SK61619)には流路に沿った方向性がある。また、②流路に直交する畦畔SK61601の芯材は流路周辺で流路の落ち込みに向かって低くなる状況があり、同畦畔と流路との交点付近の流路底では流路に直交して横たわる木材も検出していることから、廃絶時の水流によって破壊されたなんらかの遺構があったという可能性もある。③周辺の地形を見渡すとこの流路に下る傾斜が東西幅約150mにわたって広がっており、周辺の水田の排水路となし得る立地である。以上のような状況を踏まえて、16層水田経営時にすでに存在した流路と考えたい。

水路として
利用したが

(4) 田面の状況

残存状態の良好な田面においても足跡は検出されなかった。

16層水田は全体に中央の流路に向かって地形が緩く傾斜する傾向が見えるが、流路周辺の田面は傾斜が比較的大きく、その範囲では畦畔の残存状況も良くない。

〈出土遺物〉 [第120・123図, 図版110・111・112]

完形に近い土器として調査区南西部の畦畔交点から小型の埴が検出されたことにより、弥生時代後期後半～古墳時代初頭くらいとした。

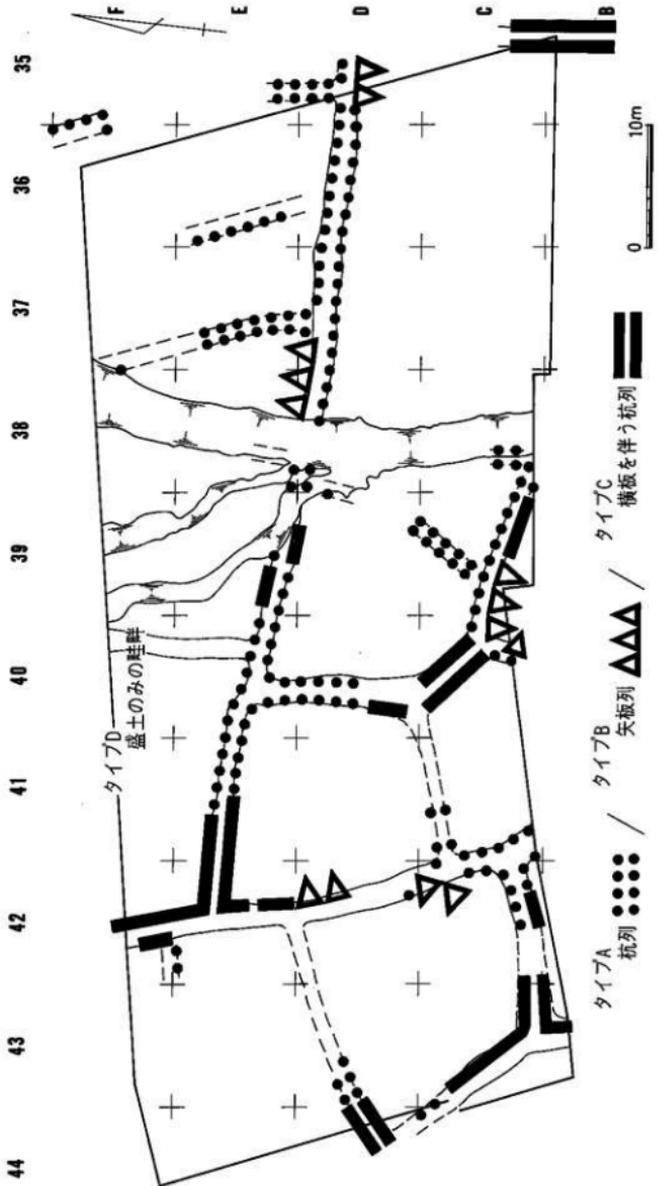
小型埴

木製品は畦畔の構築に用いられたものが量としては圧倒的である。それらに混じって多種、多数の穿孔材、はつりの痕が残る材などが見られる。これらは最終的には畦畔の芯材として用いられたものであるが、転用以前の痕跡をとどめたものであろう。しかし、転用以前の用途を推定できるものはまれである。樹種はほとんどが針葉樹材である。畦畔の芯材に混じって検出された農具以外の木製品としては朝物の一部、鼠返しの一部等がある。

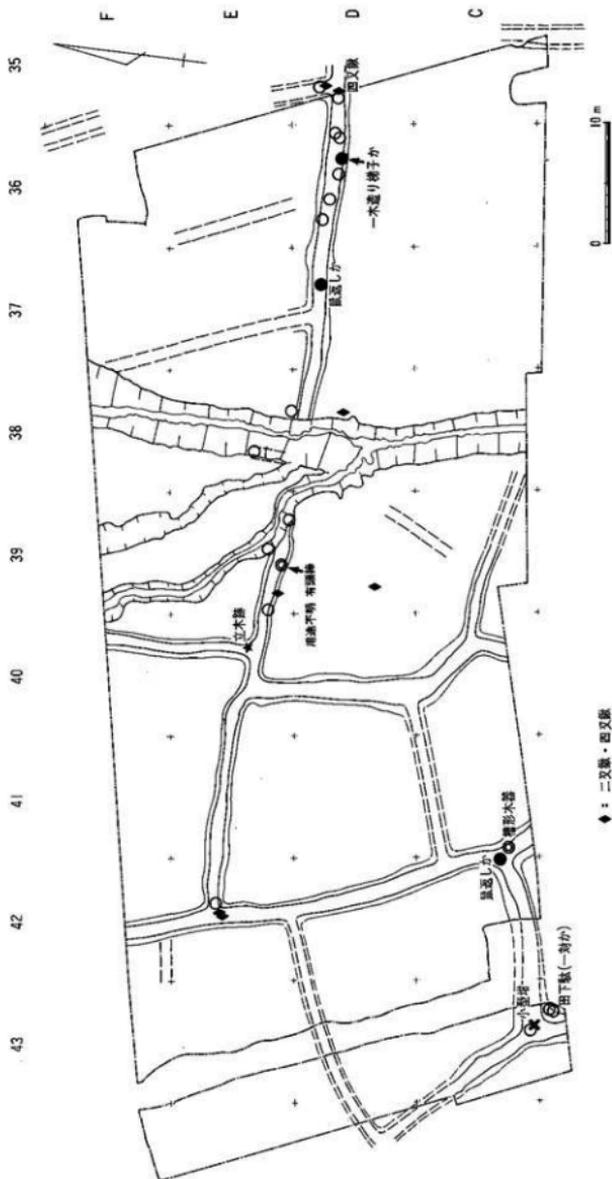
転用材

木製農具として田下駄17点、二又鍬7点、四又鍬1点が検出されている。これらは主に畦畔の盛土内から検出された。

農具

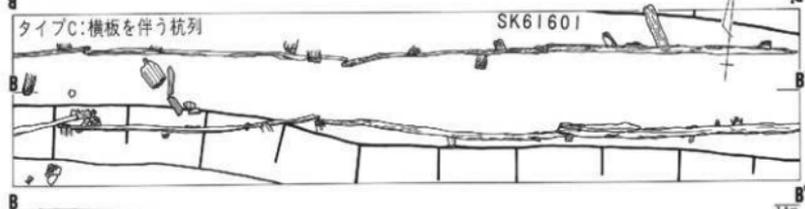
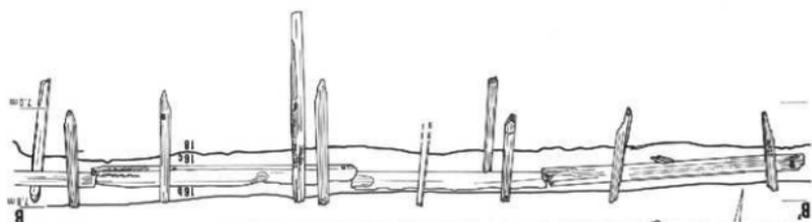
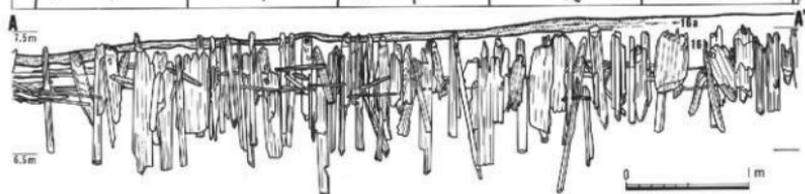
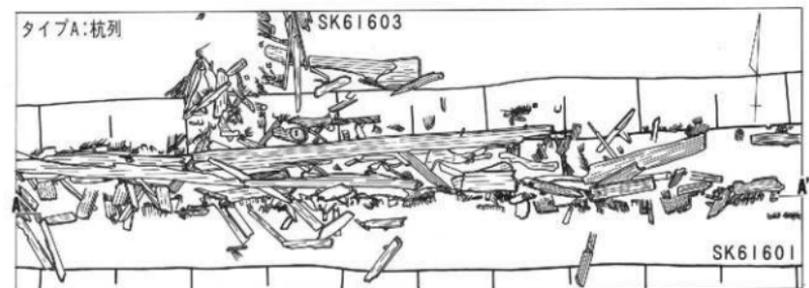


第119図 16層水田杭列畦畔 タイプ別分布図

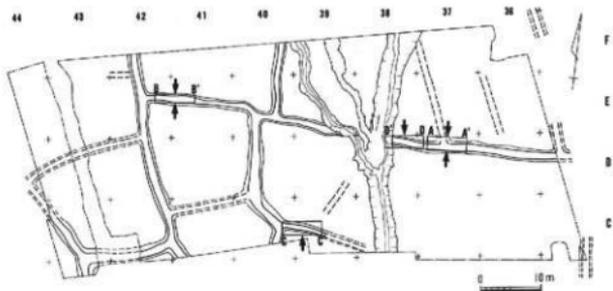
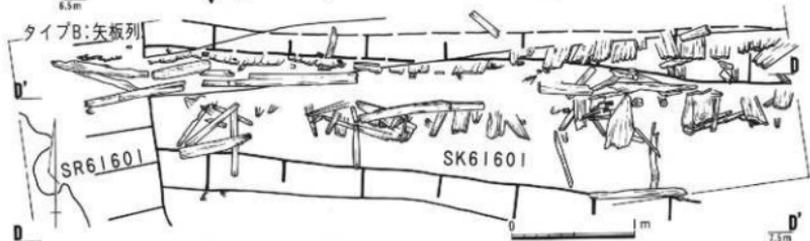
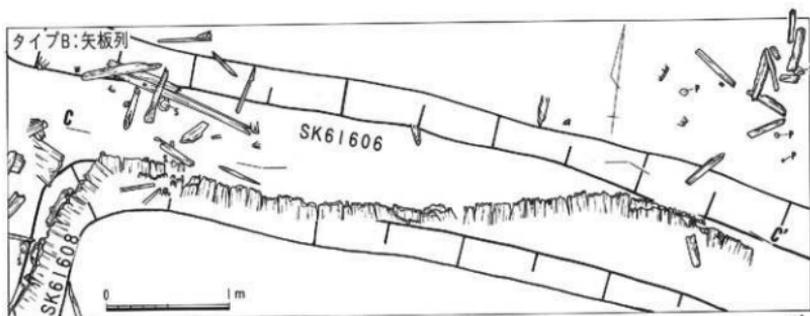


- ◆ : 二又塚・西又塚
- : 田下駄
- : 田舎部村
- ✕ : 土器

第120図 16層水田 遺物分布図



第121図 16層水田杭列畦畔 タイプ別典型例実測図1



第122図 16層水田杭列畦畔 タイプ別典型例実測図 2

14層上で検出された遺構 木道状遺構

精査面の全域に腐植質の茶褐色粘土が広がり、木道状の遺構、散在する杭を検出した。

精査面積約2,700㎡。

〈堆積状況〉

基盤層は精査面全域において砂礫層（15層）である。中央を南北に貫く砂礫部分の他は水平に堆積した砂であり、この砂礫層の広がりを隣接調査区に見ると、5区9層（砂礫）、2/3区10層（砂礫）に約300mの範囲にわたって対応する。これは、層厚から見て5区東端付近に中心を持つ南北方向の洪水流の痕跡で、この一部が6区に流れ込んで、砂層中を南北に貫く砂礫を堆積させ、緩い尾根状の地形として14層上面にもその影響を残していると考えられる。

14層の土壌は精査面全域に広がる茶褐色粘土である。未分解の植物遺体を多く含む。15層との境界付近では黒色～茶褐色の粘土と灰色の砂泥とが互層をなし、14層上面へ漸移して最上部で暗茶褐色の粘土となる。土層断面でみると14層上面は大きく波打つ区域と平坦な区域とがある。14層全体の層厚は10～40cm。平均的には約20cm。精査面全体としては北東から南西方向に向かって緩く傾斜し、勾配は10cm/10m前後。地形的な起伏は前段で述べたように基盤層の起伏をほぼそのまま反映する。14層上面の波状の乱れは、直上の13層が比較的薄い部分の下に分布する傾向にある。

14層下部の漸移層で見られる黒色ラミナの一部には灰化した部分も見られる。黒色ラミナは炭化植物の破片であろうか。

14層を覆うのは、精査面東部では11層水田、西部では13層水出であるが、西部における13層下部は自然堆積の様相を示す。

〈木道状遺構〉 [第125図]

木道61401 [第125図, 図版104]

検出長約7.5m、幅は木片が並ぶ範囲を測って約60cm。杭は検出されなかった。針葉樹材と広葉樹材とが混じる。木道南端で扉板と思われる針葉樹の板材が、その北方では古墳時代中期の高坪が検出された。

木道61402

検出長5～6m。長さ1～2mの丸材数本が等高線に沿った方向に並び、これを南東に延長した調査区南部で約5m四方の範囲に、輪かんじき型田下駄、古墳時代中期の壺型土器、杭7本が検出されている。

木道61403

検出長約4m、幅約70cm。14層上の緩い凹地を跨ぐ位置にあたる。

杭列SX61401 [第125図, 図版104]

検出長4余m。杭8本が東西に直線的に並び、圧密化を受けて屈曲したものも見られる。杭の大半は残存強度から見て広葉樹材と推定する。杭の残存長は10数cm～40数cm。この杭列の南東に隣接して検出された杭は、矩形の四隅に配置されたようにも見える。これらもまた広葉樹材と推定する。

〈断面で見られる凹地〉

平面的には検出できなかったが、いくつかの土層断面に15層上面の地形をひきついで14層上面の凹地が見える。これらをつなぐと調査区北東部から流入し、杭列SX61401の東端をかすめ、南側排水溝のグリッド37列付近へ抜ける緩い凹地の連続が浮かび上がる。凹地の

泥炭質土壌

扉板

方向性

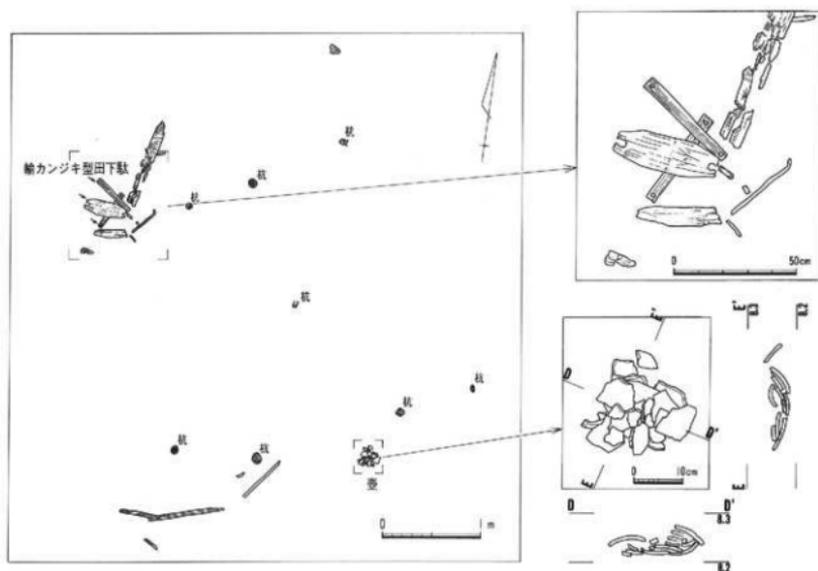
杭

沈み込みは、東側排水溝と杭列SX61401の東に絡む断面では特に明瞭で、東側排水溝の断面では15層上面の凹地をそのまま引き継いでいることがよくわかる。

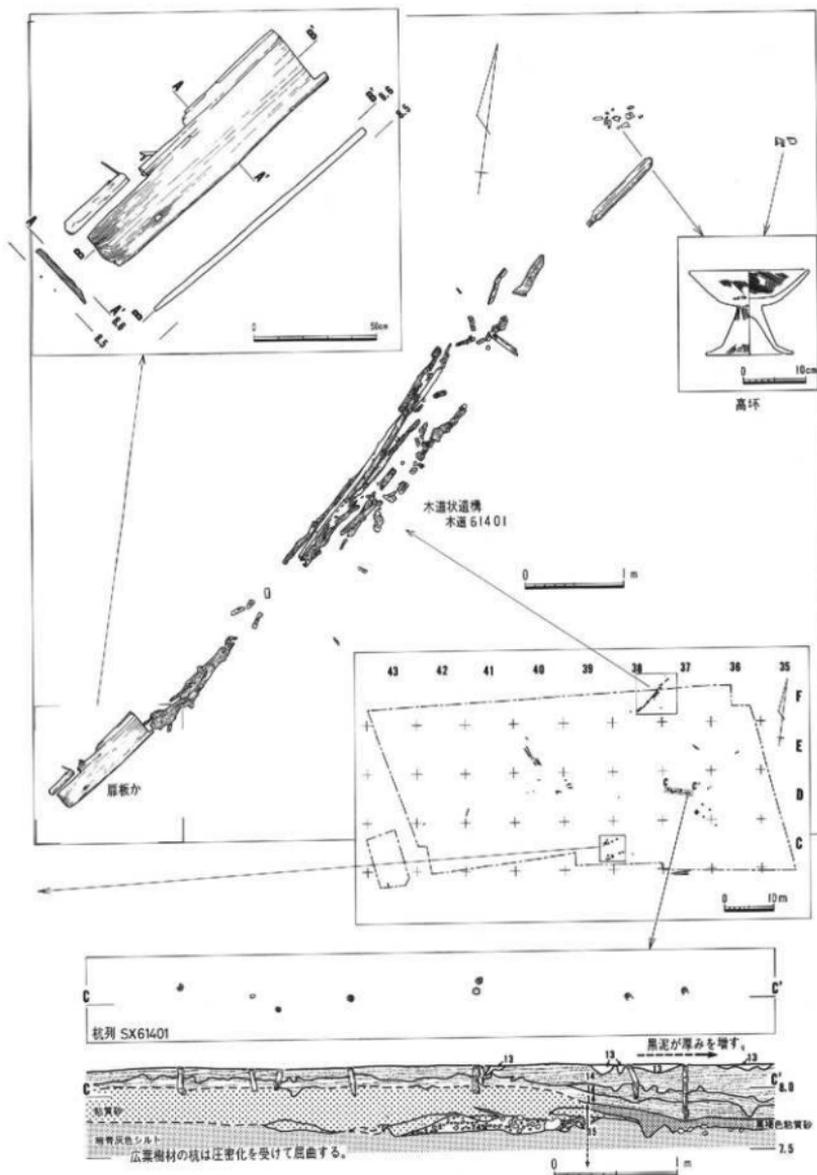
〈出土遺物〉

木道61401内からは敷板に転用された扉板（推定。残存長約110cm）、同じ木道の延長線上から古墳中期の高環1点を検出した。調査区南部からは、輪カンジキ型田下駄と古墳中期の壺型土器を検出した。

広葉樹の杭 杭は木道状遺構以外から主として検出し、主に広葉樹材である。



第124図 14層 遺物出土状況図 1



第125図 14層 遺物出土状況図 2

13層上で検出された遺構 水田跡

調査区の西半分で水田遺構を検出した。3形態の大きな畦畔が区画する中を小さな畦畔が細分する。大きな畦畔のなかには南流する水路の堤を兼ねているものがある。精査面積約3,200㎡。

〈堆積状況〉 [第126図]

基盤層は調査区全域で腐植質の黒褐色粘土(14層)である。13層が20~30cm以上の厚さを持つ西部では14層上面はほぼ平滑であったが、他の区域では波状に乱れていた。

土 塚

13層水田は灰色粘土である。最上部数cmの範囲で、斑状または均質に細砂の混入があり、西部での13層下部は黒色ラミナを疎らに含む水性堆積である。層厚は西部で20~30cmを測り、東に向かって漸減する。東部では上面の遺構はもちろん、11~13層の土壤を断面で分別することさえ不可能であった。

13層水田は自然堆積の細砂(12層:粒径0.1mm以下)によって被覆される。厚さは、西部で40~50cm厚。12層は13層上面の遺構と同じ範囲に分布し、東部では11~13層が分層不能となる。なお、13層北東部の浸食痕跡は11層水田を廃絶した水流によるものであり、水田遺構東部は被覆層が薄かったため畦畔の検出は困難であった。

〈水田跡〉 [第126図, 図版102・103]

大きな畦畔と小さな畦畔が検出された。大きな区画の中を小さな畦畔が更に区画している。中央の大きな区画では同形同大の田面が一様に並ぶ傾向がある。

区画配列 小規模区画

小さな畦畔に区画される一筆ごとの形は長方形または正方形に近いものが多い。蛇行する畦畔に隣接する田面の形はそれに応じて変化する。検出された田面は140面。そのうち面積を計測できたものは74面。平均面積は約8.4㎡である。

大規模畦畔

大きな畦畔の上面はいずれも平坦である。盛土には細砂が斑状に混入する。耕作面や小さな畦畔の下ではこのような状況はない。杭は主として大きな畦畔に散見するが、一本一本はごく小さなものである。蛇行する大きな畦畔以外はほぼ南北に走る。

小規模畦畔

小さな畦畔は盛土のみからなり、下端の幅40~50cm、田面からの比高は多くが2~3cmで5cmを越える部分は少ない。大きな畦畔の間を真直ぐにつなぐもの、他の小さな畦畔に突き当たって終るものがある。走向は大きな畦畔の蛇行部分ではやや乱れるものの、ほぼ南北または東西に田面を区画する。

以下にそれぞれの大きな畦畔について列記する。

(1) 蛇行する畦畔SK61302~04

下端の幅は約130~160cm(小さな畦畔の2倍強)。上面の平坦部は幅80~120cm。この畦畔よりもやや細い畦畔SK61301が、小さな畦畔の配列と一致する方向で東へと分岐している。

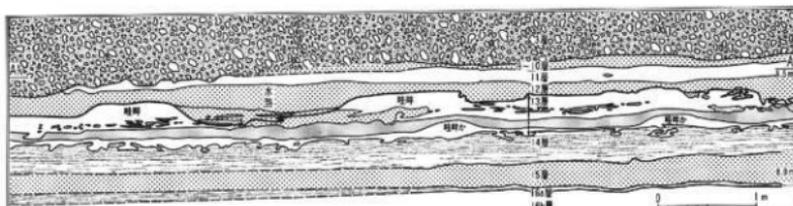
(2) 水路を挟む畦畔SK61305・06

両岸に堤

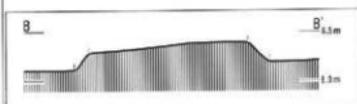
緩い曲線を描いて遺構面を南北に貫き、水路の両側の堤を兼ねる。水路と畦畔2本とを合わせた底辺の幅は約2.5m(畦畔1本分では小さな畦畔の2倍弱)。上面の平坦部は幅40~100cm。両畦畔に挟まれる水路SD61301の幅は両側の畦畔上端の間隔を測って70~80cm。深さは両側の畦畔の水路側上端から測って10~20数cm。

(3) 農道状の畦畔SK61307

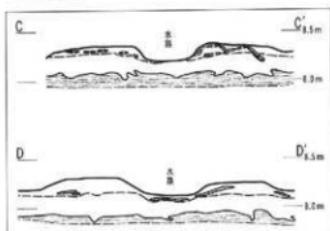
検出長は約16m。検出された範囲では直線的に南北に走る。畦畔底辺は幅約2mで最も大きい(小さな畦畔の約3倍)。上面の平坦部は幅150~190cm。



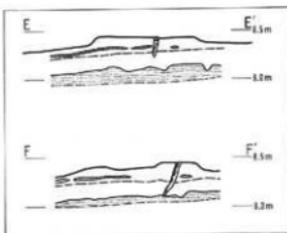
水路を挟む畦畔 (北側田層の上層)



農道状の畦畔

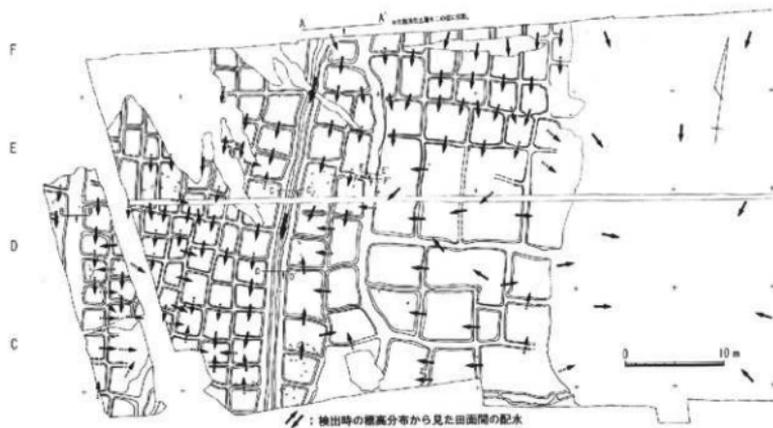


水路を挟む畦畔



蛇行する畦畔

44 43 42 41 40 39 38 37



第126図 13層水田 畦畔断面図、田面標高比較図

11層で検出された遺構 水田跡

11層は茶褐色の粘土層である。大きな畦畔と小さな畦畔とに区画された水田を調査区のほぼ全域で検出した。大きな畦畔同士は調査区内で交差し、これは次の時代の5層水田に踏襲される。田面からは多数の足跡を検出した。精査面西部には河川の氾濫による浸食痕跡が広がる。精査面積約3,400㎡。

〈堆積状況〉

基盤層は13層水田を覆う細砂(12層)である。東部では13層と共に11層水田に同化されたとしく、断面においても検出できなかった。

被覆層は砂礫(9、10層)である。これらを堆積させた水流は調査区の北西から侵入して南西に抜けたらしいことが、西部に広がる浸食痕跡からわかる。

〈水田跡〉 [図版98・99・100・101]

大きな畦畔と小さな畦畔が検出された。大きな畦畔はそれぞれ北西-南東、および北東-南西の走向を示し、小さな畦畔は大きな畦畔の走向に沿って各田面を長方形または長方形に近い亀甲形に分ける。杭列は大きな畦畔同士の交点付近で主に検出したが、畦畔から外れた位置の田面に突出(40~100cm)しているものも目立った。これらの杭の中には、廃絶時の水流とほぼ一致する方向に倒伏しているものが見られたことから11層水田のものとした。

(1) 大きな畦畔 [図版100]

11層における大きな畦畔はこれを踏襲する次の時代の水田(5層)のように畦畔盛土への周到な補強が見られない。11層にも杭列が検出されているが、畦畔の補強を目的としたものとするにはあまりに疎らであるといえる。それにもかかわらず11層の大きな畦畔の盛土(下端幅約120cm、高さ30cm)は5層のそれに比して高く築かれた部分が多いことから、5層水田の盛土よりも堅質な土壌であったと思われる。盛土側壁を中心に、足跡大の凹凸多数が残る。

(2) 小さな畦畔 [図版98・101]

小さな畦畔は、大きな畦畔による区画の中を長方形または長方形に近い亀甲形に区画する。したがって、小さな畦畔同士の交点はしばしば三叉路となる。盛土は下端幅60~80cm、高さ10数cm。

(3) 大きな畦畔同士の交点 [図版98・99・100]

11層では直交する大きな畦畔が検出された。それぞれの畦畔は互いに直交する走向で調査区外に伸びているが、交点は単純な十字形をなさず、北西-南東方向の畦畔が交点手前でY字形となって2又に分かれる。このように大きな畦畔同士の交点が、単純な十字形をなさない例は池ヶ谷遺跡・永ヶ島遺跡でもみられ、なんらかの意図的な構造であることがうかがえる。また、交点に重なるように小凹地(SX61101)が広がっているが、凹地の中にも足跡を検出していることから、廃絶以前からほぼこのような形であったとしてよいであろう。小凹地は田面からの深さ約40cm。最深部でも15層の砂礫には達していない。

(4) 水口

北西に伸びる大きな畦畔とそれから分岐する小さな畦畔との交点に接して楕円形の凹地がある。その延長部分は大きな畦畔を横切り、その大きな畦畔の西側に沿って伸びる。周辺の遺構が良好に残っていることから廃絶時の痕跡とは考えにくく、数本の杭が凹地に集まる水流を受ける位置に打たれていることも考えあわせると、水口である可能性が大きい

亀甲形交差

補強なし

特殊な形態

と言えよう。この他小さな畦畔が途切れている部分も数箇所で見られた。

(5) 足跡群 [第127・128図, 図版101]

11層水田のほぼ全域から約3,600個の足跡を検出した。踏みだされた方向を判別できるもの、同一人物による一連の歩行と判定できるものもあり、田面により動態や密度に相違がある。足跡群の様相は、当時の農作業風景への想像を膨らませるが、具体的にどのような作業に関わるものであるかについては不明である。以下に分布図から気付いた点をいくつか指摘する。

① 往復する直線的な動態 [第127図]

調査区中央部では畦畔に沿った方向の動態を示す足跡群が見られる。歩行の痕跡は畦畔に突き当たってその手前または畦畔上で折り返し、それまでの足跡と1.5m程度の間隔を以て往復している。これらの足跡群には他の足跡の交錯が少ない。この中から同一人物による一連の歩行と断定できるものを選んで計測した歩幅は平均約50cmであった。

② 空白部周辺の迂回・周回的な動態 [第127図]

周囲に足跡が存在しながら、足跡が検出されなかった空白部が何箇所も見られる。空白部の形を、足跡が迂回・周回する内側の円形部分として捉えると、その大きさは直径2～4m程度である。

③ 不規則に入り乱れる動態

大きな畦畔の交点北西に接する大面積の田面 (ST18) では、南西に突き出た区域で畦畔に並走する動態が明らかであるが、北東および南東の部分では入り乱れた状況を示して動態がはっきりしない。方向分布を見ても顕著な傾向は見えない (ST18①、②)。

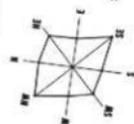
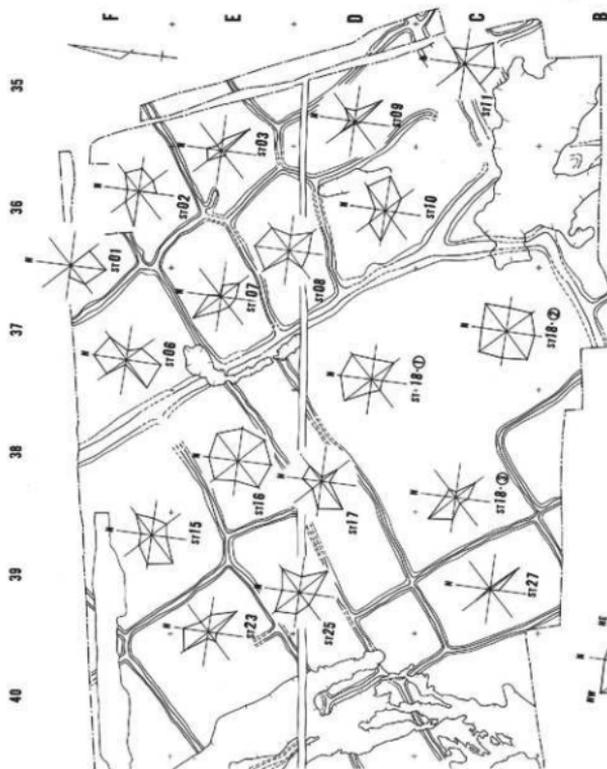
<出土遺物> [図版101]

同型の環3点が大きな畦畔同士の交点付近、被覆砂礫層から検出された。被覆層からではあるが、11層田面の上数cmの位置であり、3点を数十cmの範囲内で検出したことから11層の遺物として扱っている。

畦畔の交点周辺からは曲物の底板4点が検出された。

方位	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西	不明	合計
STV1	3	0	0	4	6	4	2	0	3	2	3	3	0	20	ST17	5	5	1	5	2	9	7	3	42	42	40	95	3	249					
STW2	2	4	4	3	3	0	8	3	3	2	8	9	0	49	18①	44	45	29	38	14	19	18	49	54	47	90	84	1	532					
STW3	7	3	5	17	2	3	3	8	17	15	15	28	0	121	18②	33	47	32	41	38	47	36	45	32	44	35	40	4	474					
STW4	0	0	1	0	0	0	1	0	1	1	6	3	0	12	18③	16	8	11	22	5	7	4	19	8	6	7	13	1	127					
STW6	14	12	4	8	15	15	2	10	22	41	66	43	2	244	STW	1	0	2	2	0	1	2	0	2	2	2	1	4	0	17				
STW7	7	1	6	12	8	7	8	19	30	18	21	55	5	206	STW1	0	2	1	1	2	3	2	4	20	4	21	0	63						
STW8	18	15	8	15	10	11	4	16	4	14	14	19	1	149	STW2	11	11	6	25	12	7	22	35	13	18	8	38	0	204					
STW9	2	6	4	12	2	1	1	6	1	0	0	2	0	38	STW4	0	1	0	1	0	1	1	1	5	8	4	11	0	81					
ST10	2	6	7	4	2	3	6	4	10	3	3	5	0	84	STW5	9	15	8	18	8	11	16	8	6	6	6	9	0	121					
ST11	1	4	3	7	6	5	0	2	0	1	3	2	0	34	ST16	0	0	0	0	1	0	0	0	4	4	3	6	0	18					
ST15	9	22	14	15	12	29	24	12	27	27	61	42	0	305	ST17	1	1	1	17	4	0	0	9	13	15	11	45	9	117					
ST18	15	18	17	17	17	17	10	15	9	4	7	9	0	155	合計	200	226	164	285	169	186	173	275	331	335	403	876	17	3350					

第43表 6区11層水田 足跡方向分布計測表



： 8方位に分けて計測された足跡
 全ての平均（第41家の範囲）

第127図 11層水田 足跡分布図1（部分・方向分布）



第126図 11層水田 足跡分布図2 (全葉)

5層上で検出された遺構 水田跡

5層水田は調査区の南東部約1/5の範囲で検出した。調査区北西部は、5区北西部から7区南東部に及ぶ洪水流によって北東方向から削りとられている。残存する田面上にも塵絶時のものと思われる水流の痕跡が一面に広がる。精査面積約700㎡。

洪水浸食 杭列密集

調査区内で直交する大きな畦畔は密集した杭列に補強され、それらがつくる区画の中を小さな畦畔が細分する。北西-南東方向の大きな畦畔は、大きな畦畔同士の交点を貫く水路を挟んで並走していたと思われる。これらの大きな畦畔の配置は11層水田の大きな畦畔の配置に一致しており、交点付近の様相は異なるものの11層水田の大きな区画を踏襲しているものと推定する。小さな畦畔の踏襲関係は明瞭でない。

区画の踏襲

<堆積状況> [第129図]

5層水田の基盤層の最下部は11層水田を被覆した砂礫(9、10層)である。5層と11層とは耕作面同士の標高差にして120~130cmほど隔てられており、11層水田の大きな畦畔でも頂部から40cm以上を砂礫に被覆されている。9、10層の砂礫直上には自然堆積的な様相を示さない明茶褐色粘土(8層)が全面に分布しその上面を砂(7層)が覆う。6層は暗茶褐色粘土であるが、水路を挟む大きな畦畔の東側に主として分布する。

土 壤

5層水田の土壌は灰褐色粘土である。耕作面では水田土壌の上半分に細砂の斑状混入が見られる。耕作によって混入したものであろうか。

5層水田を最初に被覆したのは厚さ約30cmの粗砂(4層)である。この被覆層が残るのは遺構を検出した範囲の東部のみである。

5層水田は4層と共に別の洪水流によってさらに浸食されている。この洪水流による堆積(3層)に含まれる礫は最大粒径10cm程度。5層を中心とした粘土塊も本流部に流出している。3層をもたらしたこの水流は、6区にとどまらず5区の北西部から7区の南東部にかけてその痕跡を残している。3層の上面は6区東端で標高10.7mに至り、その上に近現代の水田が営まれていた。

<水田跡> [第129・130・131図、図版94・95・96・97]

7区2層

3層をもたらした氾濫の本流SR60501の対岸にあたる7区2層からは6区5層と同時期の水田遺構が検出されている。

水 路

6区5層水田の大きな畦畔に伴う水路SD60501はおそらく北方からの導水路であり、水源となる小河川が上流方向に存在したはずである。また、前の時代の11層水田の標高は5区、7区の同時代の水田よりも全体的に低くなっており、上層にも類似した標高分布を残していた可能性が大きい。6区3層の氾濫流はこのような地形に導かれて流入し、6、7区を分断したと考えることが出来る。

明治期の地割り分布図では、条里の区画は小河川の河道と交差しながらも坪境の方形を崩さずに展開している様子が少なからず見られることから、約109mの間隔にある7区2層の畦畔と6区5層の大きな畦畔とは互いに隣り合った坪界の畦畔である可能性がある。

境 界 線

(1) 大きな畦畔

大きな畦畔は、盛土の肩に打たれた杭と敷き込まれた粗礫とによって補強される。6区5層の杭列は7区2層の杭列(SK70201)のように左右1列づつに並んで打たれた杭列ではなく、ある程度の幅をもって重ね打たれており、数度にわたる追加補修を思わせる。畦畔の芯材は、第131図のように少なくとも2度にわたって敷き込まれた形跡がある。

杭 列

杭は、小枝を粗く切り落とされた細目の丸太材が枝先側を下にして打ち込まれたものが

目立つ。芯材として敷き込まれた粗朶は、杭材から切り落とされた小枝に相当するような細い材が多くを占める。また、杭と同様の丸太材や角材が少々、所々にタケも見られ、芯材の密集部分ではマツと思われる針葉樹の葉が一面に敷き込まれているのが枝材の間に見られた。材に残存する強度、しばしば伴っていた樹皮等からみて、杭・芯材の多くはマツの仲間を主とした針葉樹材と考えられる。

このことと細目の丸太材が多かったことを考えあわせると、6区16層に見られた弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての杭列畦畔に用いられていたスギの大径木からの裁ち割り材をふんだんに用いた杭列水田との対照が思われる。

(2) 小さな畦畔

大きな区画のなかで一筆ごとを分ける小さな畦畔はいずれも疎らな杭列を伴い、一部に芯材を伴う。

田面の一筆ごとは、小さな畦畔によってほぼ長方形に区画されていたと推定する。四周を確定できる田面は検出されていないが、検出された大小の畦畔はいずれも互いに直交する走行を示しており、同時代とされる東隣の5区3層で、検出された田面がいずれも長方形または亀甲形であることを考えあわせても矛盾はない。

田面からはヒトの足跡も検出された。

SK60501 (大きな畦畔) [第129・130・131図, 図版96]

11層の大きな畦畔SK61105・06を踏襲する。走向は北東-南西。畦畔SK60502との交点周辺で杭列・芯材が密である。交点東側における畦畔補強の状況を図に示す。

SK60502・03 (大きな畦畔) [第129・130図, 図版94・95・96]

畦畔SK60501と同様に11層の大きな畦畔SK61101・04を踏襲する。走向は北西-南東。水路SD60501を挟んで2本の畦畔が並走する。盛土が残存する交点以南では水路西側の畦畔の盛土が明瞭であり、東側の畦畔の盛土は大きな畦畔同士の交点付近以外では不明瞭である。これらを補強する杭列も水路西側の畦畔に伴う杭列の方が盛土と同様堅固であり、用いられた杭自体もより大きな角材が用いられていた。この盛土西側に沿って打たれた杭列は、大きな畦畔同士の交点の南西側の外縁を支える形で交点部分の盛土の下端付近に沿っており、5層水田において検出された杭列の中では最も整然と打たれているという印象を受けた。

SK60501との交点以北の畦畔は、廃絶時の水流によって全ての盛土を失っているが、残存する杭列の配置から、交点以南と同様あるいは更に堅固な2列並走の畦畔が存在したことを推定できる。

SK60504

走向は北東-南西。杭3本を検出。断面で確認した盛土には疎らな芯材が見られ、マツ葉と思われるものも含まれる。

SK60505

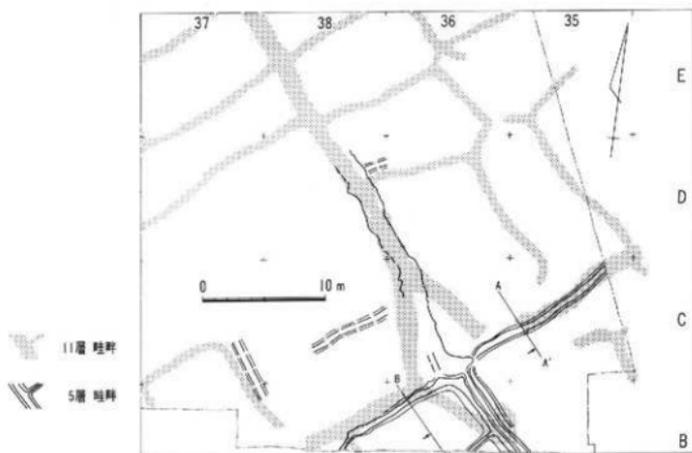
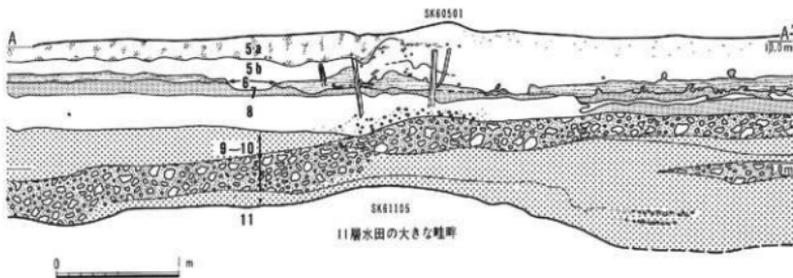
走向は北東-南西。杭1本を検出した。流水痕が交錯する中に畦畔盛土が残る。

SK60506

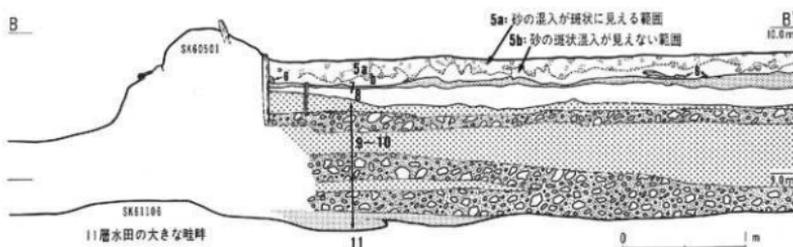
走向は北東-南西。残存状況良好。盛土の高さは10cm前後。杭を全く伴わない。

SK60507

疎らな杭列のみが検出された。走向は大きな畦畔SK60502・03と同様北西-南東。畦畔の盛土のみならず水田土壌自体がほとんど失われている。



5層水田の大きな畦畔は11層水田の大きな畦畔を踏襲する。
11層水田は氾濫に伴う土砂の流出によって厚く被覆されているが、
大きな畦畔の配置は5層水田へ複製に還元されている。



第129図 11層—5層 畦畔配置図

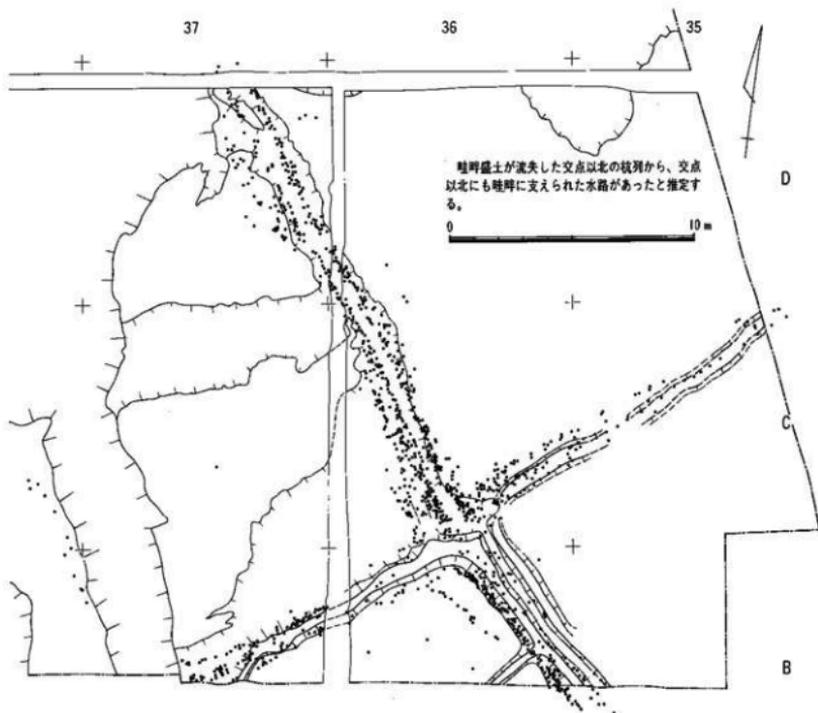
〈出土遺物〉 [図版96]

大きな畦畔同士の間を交点以北の水路を挟む畦畔の杭列内から鍬の刃先1点、馬鍬の刃部が1点、同じ畦畔の杭列の下(9層)と水路畦畔の杭列の間の雑層中(2層)から漆碗がそれぞれ1点ずつ検出されている。

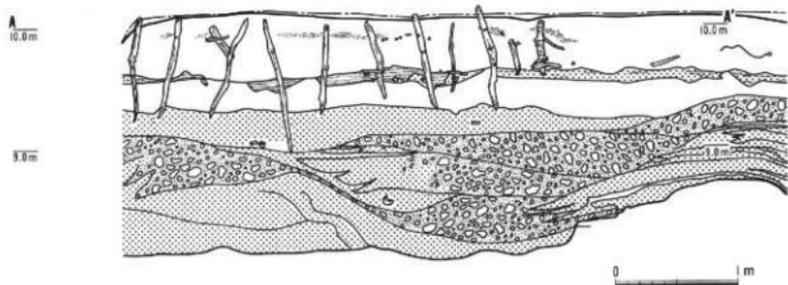
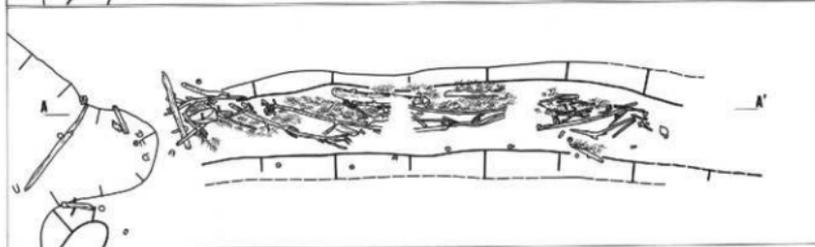
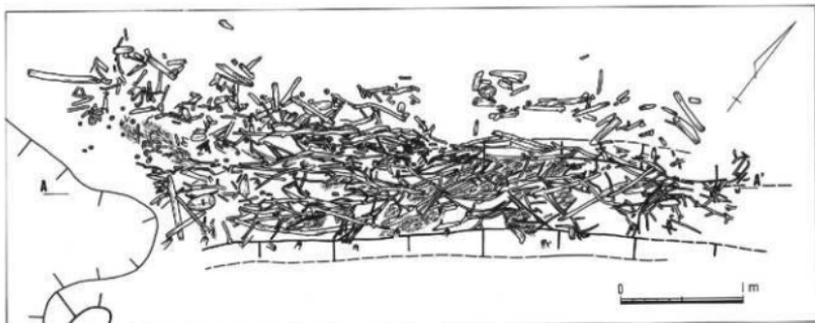
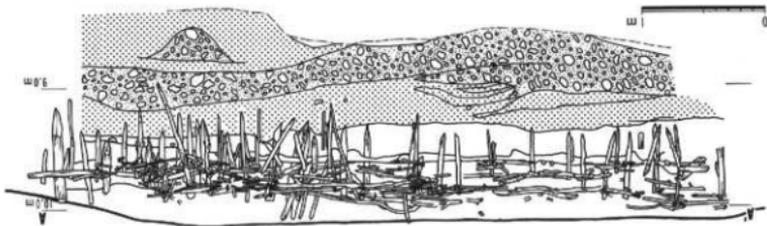
被覆層からではあるが卒塔婆1点、ヒトの頭骨の一部も検出された。

5層水田は、年代観の材料となる遺物を全く伴わなかった。隣接調査区との土層の対応関係から推定して、5区3層、7区2層に相当するとして、中世から近世とした。

農
漆
具
碗



第130図 5層水田 全杭列配置図



第131圖 5層水田 畦畔展開圖

水田計測表(6区 19層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	6.68	—	—	—	—	一部検出不能
2	6.66	—	—	—	—	—
3	6.74	—	—	—	—	—
4	6.53	—	—	—	—	一部調査区外

水田計測表(6区 18層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.10	—	—	—	—	—
2	7.30	—	—	—	—	一部調査区外
3	7.57	—	—	—	—	一部検出不能
4	7.00	—	—	—	—	—
5	7.00	—	—	—	—	一部調査区外
6	6.94	—	—	—	—	—
7	6.90	—	—	—	—	—
8	6.85	—	—	—	—	一部検出不能

水田計測表(6区 16層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	推 7.90	—	—	—	—	前面調査区外
2	—	—	—	—	—	—
3	7.78	—	—	—	—	一部検出不能
4	7.60	—	—	—	—	—
5	7.49	—	—	—	—	—
6	7.47	—	—	—	—	田面浸食
7	7.80	—	(四角形)	—	—	一部調査区外
8	—	—	—	—	—	—
9	7.90	—	—	—	—	—
10	7.15	—	—	—	—	田面浸食
11	7.37	推(183.9)	台形	15.0	12.5	一部検出不能
12	7.53	推(233.6)	(台形)	17.5	12.0	一部調査区外
13	7.50	—	—	—	—	—
14	7.45	—	—	—	—	—
15	7.74	—	—	—	—	一部検出不能
16	7.64	—	—	(9.0)	—	—
17	7.47	推(243.9)	台形	18.5	13.5	—
18	7.50	—	—	—	12.5	—
19	7.65	—	—	—	—	—

水田計測表(6区 13層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.53	—	—	—	—	一部調査区外
2	8.79	—	—	—	—	一部検出不能
3	8.70	—	—	—	—	—
4	8.57	—	—	(2.7)	(1.8)	—
5	8.83	—	—	—	(2.1)	一部調査区外
6	8.74	推 8.4	長方形	(3.8)	(2.0)	一部攪乱
7	8.68	6.9	正方形	2.7	2.3	—
8	8.58	7.2	正角形	2.8	2.3	—
9	8.84	—	(長方形)	—	—	一部調査区外
10	8.74	—	(長方形)	—	(2.7)	一部攪乱
11	8.68	6.9	台形	2.9	2.4	—
12	8.62	10.4	台形	3.4	3.1	—
13	8.83	—	—	—	—	一部調査区外
14	8.79	—	—	(2.8)	—	一部攪乱
15	8.71	6.3	台形	2.8	2.0	—
16	8.61	15.8	正方形	4.3	3.7	—
17	8.82	—	—	—	—	一部調査区外
18	7.76	—	—	—	(2.2)	一部攪乱
19	8.70	4.8	台形	—	1.9	—
20	8.73	—	—	—	—	一部調査区外
21	8.65	8.3	長方形	3.8	1.9	—
22	8.55	12.2	正方形	3.7	3.3	—

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
23	8.68	—	—	—	—	一部調査区外
24	8.64	推 8.2	台形	4.2	1.1	—
25	8.45	—	—	—	—	一部検出不能
26	8.56	—	(長方形)	5.9	3.0	—
27	8.52	—	(正方形)	(5.7)	(5.5)	—
28	8.52	36.3	長方形	9.7	3.9	—
29	8.34	38.6	長方形	9.8	3.6	—
30	8.46	—	(長方形)	4.0	3.3	一部検出不能
31	8.52	—	(長方形)	(4.0)	3.7	—
32	8.47	33.2	鉤形	7.7	3.8	—
33	8.47	5.9	台形	3.2	1.8	—
34	8.46	23.0	正方形	5.0	4.6	—
35	8.29	21.0	長方形	5.4	4.0	—
36	8.32	14.3	台形	4.8	3.8	—
37	8.54	—	—	—	—	一部検出不能
38	8.60	—	—	—	—	一部調査区外
39	8.46	—	—	—	—	—
40	8.34	—	—	3.6	2.0	一部検出不能
41	8.36	—	—	3.9	—	一部調査区外
42	8.49	3.7	台形	2.2	1.7	—
43	8.44	8.4	台形	4.2	2.2	—
44	8.25	6.4	台形	3.5	1.3	—
45	8.31	9.4	長方形	4.1	2.3	—
46	8.20	9.3	長方形	3.6	2.4	—
47	8.16	11.4	台形	4.8	2.5	—
48	8.18	11.2	長方形	3.7	2.6	—
49	8.29	12.1	台形	4.5	2.9	—
50	8.20	—	—	—	—	一部試験坑
51	8.17	—	—	—	—	一部調査区外
52	8.37	9.6	正方形	3.3	2.6	田面浸食
53	8.30	8.3	台形	3.2	2.9	—
54	8.21	13.6	長方形	4.8	2.7	—
55	8.10	5.9	長方形	3.2	1.9	—
56	8.11	8.8	長方形	3.4	2.4	—
57	8.12	15.9	長方形	4.9	3.4	—
58	8.25	11.8	台形	4.1	2.9	—
59	8.31	8.1	台形	3.4	2.4	—
60	8.30	—	—	—	—	一部調査区外
61	8.46	—	—	—	—	—
62	8.48	9.2	四角形	3.2	2.6	—
63	8.36	7.5	長方形	3.4	2.1	—
64	8.26	6.8	長方形	3.3	1.8	—
65	8.14	13.8	長方形	4.5	3.0	—
66	8.16	6.9	正方形	2.9	2.4	—
67	8.13	5.8	長方形	2.6	2.0	—
68	8.12	5.4	台形	2.8	1.9	—
69	8.10	6.1	正方形	2.5	2.3	—
70	8.06	5.9	長方形	2.7	2.1	—
71	8.02	4.7	長方形	2.8	1.6	—
72	8.10	5.4	台形	2.6	2.0	—
73	8.47	—	—	—	—	田面浸食
74	8.46	推 5.2	正方形	2.4	2.2	田面浸食
75	8.49	推 4.8	台形	2.4	2.0	—
76	8.42	推 3.7	(長方形)	(2.3)	(1.5)	—
77	8.30	—	(長方形)	(2.2)	—	—
78	8.21	—	(長方形)	—	—	—
79	8.16	3.6	長方形	2.7	1.3	—
80	8.05	4.7	台形	2.5	1.6	—
81	8.05	4.7	台形	2.4	2.2	—
82	8.00	5.8	正方形	2.7	2.5	—
83	7.98	推 5.3	長方形	(2.8)	1.9	一部調査区外
84	8.08	—	(台形)	—	—	—
85	8.17	—	—	—	—	—
86	8.49	—	—	—	—	—

第44表 6区水田計測表1

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
87	8.52	推 4.0	正方形	2.0	2.0	田面浸食
88	8.48	--	--	--	--	"
89	8.37	--	--	--	--	"
90	8.33	--	--	--	--	"
91	8.22	--	--	--	--	"
92	8.21	2.9	長方形	2.1	1.4	
93	8.14	4.9	正方形	2.3	2.1	
94	8.07	4.9	台形	2.3	1.9	
95	8.06	6.8	長方形	3.0	2.1	
96	8.02	6.0	正方形	2.6	2.1	
97	8.03	--	--	--	--	一部調査区外
98	8.33	--	--	--	--	田面浸食
99	8.22	5.8	正方形	2.3	2.1	
100	8.24	4.0	台形	2.1	1.8	
101	8.19	3.3	正方形	2.0	1.6	
102	8.14	3.1	台形	2.0	1.6	
103	8.15	3.3	台形	2.4	1.4	
104	8.13	3.0	長方形	1.9	1.6	
105	8.07	--	--	--	--	一部調査区外
106	8.31	--	--	--	--	田面浸食
107	8.26	推 9.3	長方形	4.9	1.7	
108	8.50	4.7	台形	2.4	1.5	
109	8.19	推 4.0	--	(2.3)	(1.8)	一部調査区外
110	8.11	--	--	--	--	"
111	8.03	--	--	--	--	一部検出不能
112	8.43	--	--	--	--	田面浸食
113	8.36	2.4	長方形	2.0	1.1	
114	8.33	5.7	長方形	4.4	1.5	
115	8.37	--	(長方形)	--	--	田面浸食
116	8.37	3.9	長方形	2.7	1.6	
117	8.33	推 7.5	(長方形)	4.3	1.5	一部調査区外
118	8.26	--	--	--	--	"
119	8.30	--	--	--	1.9	"
120	8.24	--	--	--	--	"
121	8.12	推 4.4	長方形	2.5	1.8	
122	8.08	推 5.6	--	2.8	(1.9)	一部検出不能
123	8.18	--	--	--	--	"
124	8.18	--	--	--	--	"
125	8.21	--	--	--	--	一部調査区外
126	8.32	--	--	--	--	田面浸食
127	8.33	--	--	--	--	一部調査区外
128	8.37	--	--	--	--	"
129	8.32	--	--	--	--	一部調査区外
130	8.23	推 5.8	台形	2.6	2.1	
131	8.15	4.5	台形	2.5	1.7	
132	8.13	4.0	台形	2.1	1.8	
133	8.14	2.8	正方形	1.8	1.5	
134	8.18	4.2	正方形	2.1	1.9	
135	8.18	--	--	--	--	一部調査区外
136	8.17	--	--	--	--	"
137	8.21	--	--	--	--	"
138	8.26	--	--	--	--	"
139	8.20	--	--	--	--	"
140	8.04	--	--	--	--	"

水田計測表 (6区 11層)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	8.96	--	--	--	--	一部調査区外
2	8.93	--	(長方形)	--	(6.8)	"
3	8.96	--	(多角形)	--	(6.1)	"
4	9.03	--	--	--	--	"
5	8.90	--	--	--	--	"
6	8.76	--	(長方形)	--	(9.4)	"
7	8.67	61.4	長方形	10.2	5.1	
8	8.73	61.6	五角形	9.3	5.1	
9	8.83	推 72.9	五角形	(13.0)	(4.6)	一部検出不能
10	8.65	推 101.4	長方形	(14.6)	(6.5)	"
11	8.71	--	--	--	--	田面浸食
12	8.70	--	--	--	--	一部区外
13	8.66	--	--	--	--	" 田面浸食
14	9.05	--	--	--	--	"
15	8.84	推 142.6	(正方形)	(11.6)	(10.3)	
16	8.62	推 65.5	長方形	11.5	5.4	一部検出不能
17	8.58	推 94.7	長方形	21.6	3.9	
18	8.38	推 381.8	陶形	22.3	--	
19	8.52	--	--	--	--	一部調査区外
20	8.41	--	--	--	--	"
21	8.57	--	(長方形)	--	--	"
22	9.03	--	(長方形)	--	--	田面浸食
23	8.89	推 61.2	(長方形)	(10.4)	(6.1)	
24	8.76	推 81.6	(長方形)	10.4	7.3	田面浸食
25	8.68	推 76.5	長方形	14.4	4.6	"
26	8.74	28.0	正方形	5.3	4.7	
27	8.78	推 75.5	長方形	(10.7)	(5.7)	一部調査区外
28	8.74	--	(長方形)	--	--	"
29	8.44	--	(長方形)	--	--	一部田面浸食
30	8.57	推 67.9	長方形	12.1	4.8	
31	8.62	--	--	--	11.0	"
32	8.66	--	--	--	--	一部田面浸食
33	8.40	推 148.3	--	(15.5)	(9.8)	"
34	8.48	--	--	--	--	"
35	8.54	--	--	--	--	田面浸食・一部調査区外
36	8.60	--	--	--	--	"
37	8.55	--	--	--	--	一部調査区外
38	8.58	--	--	--	--	"

11層水田測定上の留意点:

1. 田面23・24は、一筆として計測すると149.7㎡となる。
2. 田面33は、検出できなかった畦畔をその対辺と平行に存在したとして作図した。
北西側の畦畔相当部分に浸食痕跡の段差があり、畦畔が存在したことによって残った地形ではなかったかと推定する。

水田計測表 (6区 5層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.67	--	--	--	--	田面浸食
2	10.04	--	--	--	(16.5)	"
3	10.17	--	--	--	--	一部調査区外
4	9.71	--	--	(14.0)	--	田面浸食
5	9.64	--	(長方形)	(13.5)	(6.0)	"
6	9.75	--	--	--	(4.5)	一部調査区外
7	9.82	--	--	--	--	"
8	9.46	--	--	--	--	田面浸食

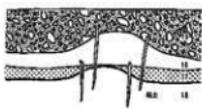
第45表 6区水田計測表 2

瀬名遺跡 6区 19層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央。
	② 地形面の变化	調査区全体では西高東低で、10cm強/10m。遺構が検出された東部では同様の傾斜で南へ下る微傾斜地。畦畔状の遺構が検出された調査区南東部が最も低い。現標高7.2~6.7m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区東部の方に還元色の粘土が分布し、畦畔状の高まりはその南部に検出された。18層水田の遺構と重なった部分が少ない。精査面積約2,200㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	18層水田土壌(灰茶褐色粘土)が直に接する。東側排水溝と中央トレンチ交点付近では19層直上に明緑灰色の砂泥が、数cmの厚さで断続的に存在する。西部では19層の粘土質が存在せず、16層下部が20層上部砂層に接する。
	⑤ 水田土壌	明青灰色粘土(18層の主体をなす粘土よりも明るい色)。下部で同色の砂(20層上部)に漸移する。
	⑥ イネのプラントオパール	<C35地点> 19層上部 6,100個/g 19層下部 900個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	20層(砂~砂泥の水性堆積)。
	⑧ 畦畔の規模	精査面の南東部に大規模な畦畔状の遺構が検出された。枕列は伴わない。高まりの下端幅は2m強、田面からの比高は高いところで10数cm。検出は直上層粘土との色彩の相違のみを頼りに行った。
	⑨ 畦畔の構造	(18層下面に直に接していたことから、18層水田の耕作等による変形を受けていると考えられるが) 枕列を伴わず、上面平坦な盛土のみからなる。
	⑩ 水田区画の方法	(不明) 畦畔状の高まりが畦畔であれば、枕列を伴わない盛土畦畔によるということが出来る。
	⑪ 水田区画の形	(不明) 畦畔状の高まりにしたがえば矩形の田面であろう。
用排水の状況	⑫ 枚数と面積	(不明) 畦畔状の高まりにしたがえば4面。
	⑬ 田面の状態	精査面北東部に流水痕跡類似の凹地が広がる。直上の明緑灰色砂泥(18C層)が分布する範囲の断面では上面に波状の巻き揚げなどは見られない。
	⑭ 水源	標高について6区19層と5区塚跡周辺と比べると、塚跡周辺のほうが10数cm高い。また、塚跡から6区の方へ伸びる導水路らしき遺構も検出されていることから、雨水は直接にはここから導かれていたとも考えられる。6区の流水痕跡類似の凹地はここからの流水の浸食痕跡であろうか。
遺物の年代観	⑮ 自然流路	(なし)
	⑯ 水路	(なし)
	⑰ 水口	(なし)
その他	⑱ 遺物の種類	凹地内から検出された土器片約100点。ただし、少なからぬものが18層から検出された土器片と接合された。
	⑲ 年代推定の根拠	直接の判断材料なし。
遺構確認面とその図	⑳ 隣接区との対応関係	5区13層。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 決定的な証拠はない。水田が営まれていたという推定に矛盾しない材料を以下に列記する。 ・イネのプラントオパール 6100個/g。 ・5区13層の塚跡からの導水路と思われる遺構が6区の方へ伸びている。 ・19層粘土が還元性の水田土壌のように見える。 ・不明瞭ではあるが畦畔状の遺構が検出された。 19層の平面精査時には明度・色彩によって18層を見分け、除去した。

第46表 6区水田観察表 1

瀬名遺跡 6区 18層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央。
	② 地形面の変化	北東から南西に下る微傾斜地。10cm強/10m。現標高7.1~6.8m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区東部のみ。畦畔が検出されたのはその南部のみ。精査面積約810㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂層(17層)に被覆される。東側排水溝の断面ではこの水性堆積砂層を切る自然流路の断面がみられる。西部では被覆砂層が存在しないだけでなく、18層自体がほとんど存在しない。18層と思われる水田土壌が断片的にも見られるのは、中央トレンチにおいてはグリッド39列まで。それ以西の中央トレンチでは18層はまったく見当たらない。
	⑤ 水田土壌	上部は暗灰色粘土。下部は灰褐色粘土。上部は下部に比べて、茶系統の色に近い。断面の観察と触感では砂粒の混入は認められなかった。18層下部は、火山灰類似の白粒と炭化した植物の碎片~粉末とを含む暗灰色粘土。19層の堆き揚げと思われる明青灰色粘土が斑状に混入する。明青灰色粘土の混入は下部に偏る。
	⑥ イネのプラントオパール	<C35地点> 18a層下部 0個/区 18b層 900個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	19層水田(明青灰色粘土)。
	⑧ 畦畔の規模	大きな畦畔と小さな畦畔が検出された。畦畔盛土は大きな畦畔で下地幅100cm強、田面に対する比高10数cm、小さな畦畔で下地幅30~40cm、比高2、3cm。
	⑨ 畦畔の構造	大きな畦畔は杭列を伴い、小さな畦畔は盛土のみ。
	⑩ 水田区画の方法	大きな畦畔と小さな畦畔による。
	⑪ 水田区画の形	不等辺の四角形と推定。
	⑫ 枚数と面積	畦畔の両側に田面が存在するとして8面。面積を確定できるもの無し。
	⑬ 田面の状態	足跡が密集する。密度の高い区域においては、足跡が重なりあって、個別に認定することができない。遺構面南部には線跡と想定できる小凹部群数百が検出された。
用排水の状態	⑭ 水源	東側の5区12層との標高比較では、5区西側を南流する水路を用排水路とすることが可能と思われる。
	⑮ 自然流路	(なし)
	⑯ 水路	(なし)
遺物	⑰ 水口	(なし)
	⑱ 遺物の種類	四又鍬1点。鍬の跡柄1点。田舟の一部1点。梯子1点(畦畔盛土上面より)。梯子は畦畔上面から、他はいずれも畦畔盛土内から出土した。土器片数個体分が田面に散乱した状態で検出された。
年代	⑲ 年代推定の根拠	隣接調査区との土層の対応から推定。
	⑳ 隣接区との対応関係	5区12層水田。7区との対応関係については未検討。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 砂層(17層)によって被覆された畦畔を含む遺構が検出された。他に田面の足跡群、線跡らしきもの数百、畦畔から出土した農耕具(四又鍬)がある。

第47表 6区水田観察表 2

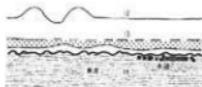
瀬名遺跡 6区 16層水田(時期 弥生時代後期～古墳時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央。
	② 地形面の変化	全体的には南へ下る微傾斜地。傾斜は5～10cm。精査面中央のグリッド38列を貫いて南へ流れる流路の周辺はこれに向かって落ち込む傾斜を作っており、築地時に流路に流れこんだ氾濫流によって浸食されたものと推定した。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出した。精査面積2,950㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	15層(砂層)。礫の分布はほぼ流路SR61601を埋める部分に限られ、遺構直上を覆うのは15層下部の細砂である。
	⑤ 水田土壌	16a～c層(a:暗赤褐色粘土、b:暗青灰色粘土、c:明茶褐色粘土)。東側排水溝においては16d層(C層と同質の硬質粘土層)まで分層できる。
	⑥ イネのプラントオパール	<C35地点> 16a層泥炭質 0個/8 16b層上部 2,700個/8 16b層中部 2,600個/8 16b層下部 900個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	調査区東部では17層(砂～砂層)。西部では20層(砂層上部の砂)。
	⑧ 畦畔の規模	盛土が残存するものは、下端幅約200cm、田面からの比高10数cm。地形の傾斜を横切る走向に杭列などの補強が密な畦畔が貫く。盛土の全く検出できなかったものもある。より小規模な畦畔は検出されなかった。
	⑨ 畦畔の構造	杭・矢板・横板・芯材によって補強される盛土畦畔。補強材は大半を針葉樹と推定した。補強構造にはこれら補強材の組合せ方によりいくつかの型に分類できる。
	⑩ 水田区画の方法	畦畔の交点はT字またはY字形をなし、十字形の交点は見られない。1区画あたりの広さはほぼ確定した2面の平均で240㎡と大規模。16層水田の畦畔を踏襲したような状況が遺構東部中央で見られる。
	⑪ 水田区画の形	確定された田面の形は不等辺の四角形。その他田面も同様と推定する。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	19面(盛土を伴わない疎らな杭列も全て畦畔とみなし、その両側に田面が存在するとして数えた場合)。面積を推定できたものが2面(234㎡と244㎡)。平均239㎡。
	⑬ 田面の状態	足跡は検出されなかった。中央の流路周辺の田面は流路に向かって緩く傾斜する。
	⑭ 水源	(不明)
遺物の種類	⑮ 自然流路	(不明)
	⑯ 水路	(不明)築地時の浸食痕跡と区別する判断材料が不十分であるが、本流が遺構中央を南北に貫き2本の支流を持つ流路跡が検出された。本流跡SR61601は幅3～5m、深さは水田面から100～130cm。
	⑰ 水口	(なし)
年代観	⑱ 遺物の種類	土製品では、小型埴(グリットC48S、畦畔盛土内の表面近くから完形に近い形で正立して出土)。木製品では、梯子、鼠返し等の建築物からの転用材。木製農具では、二又鍬7点、四又鍬1点、田下駄17点。羽物(部分)1点。
	⑲ 年代推定の根拠	隣接区との土層の対応から推定。畦畔盛土内から小型埴を検出。
	⑳ 隣接区との対応関係	5区10層。7区10層。
遺構確認面とその図	㉑ 自然科学的分析	花粉分析ではスギ花粉が優勢。
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)
	(説明)	厚い部分では1mに近い砂層が粘土層を覆い、砂層の除去により粘土層上面から畦畔状の盛土が検出され、盛土の中からは補強のためと思われる杭・矢板・横板・芯材が多数検出された。

第48表 6区水田観察表3

(6区)

瀬名遺跡 6区 14層水田（時期 古墳時代中期）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡のほぼ中央。
	② 地形面の変化	南に下る微傾斜地。約10cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域に暗茶褐色粘土が広がる。精査面積約2,700㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	西部では13層水田（西部の13層下部は水性堆積）。東部では11層水田（13層水田と11層水田の境界を分層不能）。
	⑤ 水田土壌	14層最上部は暗茶褐色粘土であるがその直上を覆う薄い粘土層が見られる（北側法面グリッド41列の断面のみで確認）。
	⑥ イネのプラントオペール	<E39地点> 900個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	全域で16層水田を埋没させた15層（砂礫）。
	⑧ 畦畔の規模	木道状遺構として検出したのみ。木道状遺構の幅は60～70cm。
	⑨ 畦畔の構造	木道状遺構は杭列を伴わない。 北側法面で断面として検出された畦畔状の高まりは、水平な粘土上面からの比高10cm余、下端幅は70cmと100cm。13層水田の水路を挟んで並走する畦畔と同じように考えて高まり2つをあわせて置れば、断面での下端幅約330cm。ただし、この畦畔状の高まりは14層とした暗茶褐色粘土層の上に乗る灰色の粘土のみからなる高まりであり、木道状遺構とは重ならない。
	⑩ 水田区画の方法	（不明）
水田区画の形	⑪ 水田区画の形	（不明）
	⑫ 枚数と面積	（不明）
	⑬ 田面の状態	茶褐色粘土層上面は波状に乱れる区域と平坦な区域とがある。
用排水の状態	⑭ 水源	（不明）
	⑮ 自然流路	断面のみで凹地の連続を検出（東側排水溝北部・中央レンチ・杭列土層断面東部・南側排水溝で検出した。平面的には14層の等高線の分布にかすかに読み取ることができる）。
	⑯ 水路	（なし）
遺物の種類	⑰ 水口	（不明）
	⑱ 遺物の種類	古墳中期の高環1点・同時期の壺1点・高環脚部・輪かんじき型田下駄・扉。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	古墳中期の高環。同時期の壺形土器。
	⑳ 隣接区との対応関係	5区不明。7区9層。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	（模式図） 
		（説明） 木道状遺構の認識のしかたと、北側法面の土層に見る直上層の畦畔状の高まりから水田であった可能性が生じる。

第49表 6区水田観察表4

瀬名遺跡 6区 13層水田(時期 古墳時代中期以降平安時代末以前)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央。
	② 地形面の変化	南へ下る微傾斜地。傾斜は2~5cm/10m。14層泥炭質土壌の地形をほぼそのまま反映する。
	③ 水田の範囲と面積	遺構が検出された範囲は西半分。東部では被覆する砂層が存在しないだけでなく、13層の土壌自体が分明でない。土層断面においても検出できなかった。精査面積約3180㎡。
	④ 直上の層の土壌	精査面西部では12層(砂~砂泥の水性堆積、粒徑0.1mm以下)。精査面西部はこれにより緩やかに被覆される。北西隅の空白部は11層を赤絶させた水流によるもの。東部では土層断面の観察でも13層を部分的にしか検出できなかった。土壌の厚さは西部で厚く20~30cm。東へ行くに従い漸減し、遺構が途切れるグリッド38列付近で消滅する。
	⑤ 水田土壌	明灰白色~淡茶褐色の粘土。上部数cmの範囲で、現状にまたは均質に細砂の混じり込みがあり、それ以下で黒色リミナが疎らに見られる。中層で微細な砂の連続混入がみられ、大きな砂粒の中では水性堆積と思われる堆積状況が見られる。下部は14層と漸移的に接する。
	⑥ イネのプラントオパール	<E39地点> 13層上部 900個/g 13層下部 0個/g
	⑦ 直下の層の土壌	13層水田遺構の全面で14層(暗茶褐色粘土)。13層の精査面東部では14層上面が細かく波打ち、13層水田の耕作による巻き揚げと推定する。13層土壌が厚い西部では、14層上面の波打ちは見られない。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	大きな畦畔は以下の3種。①農遺跡の畦畔(調査区西端、下端幅約200cm、田面からの比高10数cm。杭列を伴わない)。②水路を挟む堤を兼ねた畦畔(西部、2本あわせての下端幅約250cm、田面からの比高10cm弱~10数cm。一部に杭列が疎らに見られる。盛土上面は平坦な部分が多い)。③緩く蛇行しつつ、ほぼ南北に走る畦畔(調査区北辺から水路を挟む畦畔より分岐して並走する。下端幅100cm強、比高数cm~30数cm。杭列を伴わない)とそこから直交する畦畔。小さな畦畔は盛土のみ。下端幅40~50cm、高さ5cm以下。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみからなる。大きな畦畔はいずれも上面が平坦。
	⑩ 水田区画の方法	調査区西端の農遺跡の畦畔とその東約20mにあって水路を挟む畦畔は、ともに南北に走る。さらに東には蛇行する大きな畦畔が水路を挟む畦畔に並走する。これらの大きな畦畔によって分けられる大きな区画の中を更に小さな畦畔が区画する。小さな畦畔は、大きな畦畔から別の大きな畦畔までを直線的につなぐものと、他の小さな畦畔に突き当たってT字形の交点を作るものがある。
	⑪ 水田区画の形	大きな区画の形は不明。大きな畦畔の中には蛇行するものも見られる。小区画の一筆ごとは主として正方形に近い四辺形。蛇行する畦畔の周囲を除けば驚然と配列しているようだ。
	⑫ 枚数と面積	部分的な検出も含めて140面。このうち面積を確定または推定して計測したものは74面。その平均8.4㎡。
	⑬ 田面の状態	一部に足跡が散在する。
	用排水の状態	⑭ 水源
⑮ 自然流路		(検出されず)
⑯ 水路		遺構中央を南流する。並走する盛土畦畔を両側に伴い堤にしている。水路を挟む畦畔には一部に杭が見られるが、補強構造といえるほどではない。並走する畦畔の盛土は、田面からの比高約10cm、畦畔と水路を併せての底辺幅は約250cm。水路の深さは最深部で田面から下へ約10cm、水路を挟む畦畔の上面から測る水路の深さは20数cm。
⑰ 水口		明確でないが、水路畦畔の北端東側が切られているように見える。水路畦畔と蛇行する畦畔とに挟まれる区画の最上流にあたるため、これら一群の田面の取水口を設けるとすれば適切な位置といえる。
遺物	⑱ 遺物の種類	土器片10数点(年代決定の材料となるものなし)。
年代	⑲ 年代推定の根拠	隣接調査区との土層の対応から推定。
	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区8層、7区8層に対応する。
その他	㉑ 自然科学的分析	花粉分析ではスギ花粉が優勢。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 水性堆積の砂に被覆され、大小の畦畔や水路などの水田遺構が明確に検出された。

第50表 6区水田観察表 5

瀬名遺跡 6区 11層水田(時期 平安時代後期~中世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央。
	② 地形面の変化	ほぼ南へ下る微傾斜地。20数cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	ほぼ全域にわたって検出された。精査面積3,400㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	水性堆積の砂(10層)前代の11層水田を埋没させた北西からの水流によって、遺構面の西部が浸食されているものの、ほぼ全域にわたって砂礫層に被覆された良好な状態で検出確認できた。
	⑤ 水田土壌	茶褐色粘土。
	⑥ イネのプラントオパール	<C35地点> 1,900個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	調査区西部では12層(水性堆積砂)。西側排水溝では厚さ20~50cm。11層との境界は平坦明瞭。東部では14層(暗茶褐色粘土)。
	⑧ 畦畔の規模	大きな畦畔の盛土は、下端幅約120cm、田面からの比高約30cm。小さな畦畔では、下端幅60~80cm、比高10数cm。
	⑨ 畦畔の構造	大きな畦畔は、交点付近に縦りに杭が見られる。小さな畦畔は盛土のみからなる。
	⑩ 水田区画の方法	大きな畦畔と小さな畦畔により区画される。大きな畦畔は5層水田に踏襲される。大きな畦畔同士の間には面積100㎡弱の小凹地があり、大きな畦畔はこれを囲むような形でY字形に変化する。小さな畦畔同士の間には十字形をなす例は少なく、三叉路が組み合されてほぼ長方形に近い亀甲形になる。畦畔の方向は条里型地割に対応している。
	⑪ 水田区画の形	一帯毎の区画は概ね長方形。亀甲形もあり。
用排水の状態	⑫ 水源	(不明)
	⑬ 自然流路	(なし)
	⑭ 水路	(なし)
遺物	⑮ 水口	大きな畦畔の北西部に切れ目があり、小杭列を伴う。
	⑯ 遺物の種類	畦畔に伴う杭は角杭を主として38本。曲物の底板。土師器の坏3点が11層直上の砂礫層最下部の同じ位置から出土。
年代	⑰ 年代推定の根拠	隣接調査区との土層の対応から推定。11層直上のほぼ同位置から土師器の坏3点が検出された。
	⑱ 隣接区との対応関係	5区5層、7区7層に相当。一帯に広がる条里型地割の水田域の一部と考えられる。交差する大規模な畦畔は界碑線にあたるのではないだろうか。
その他	⑲ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	⑳ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 水性堆積の砂に被覆された粘土層として存在。畦畔の存在から水田遺構と認定した。田面から多数の足跡も検出された。

第51表 6区水田観察表 6

瀬名遺跡 6区 5層水田(時期 近世)

水田の遺跡	① 水田跡の位置と立地	遺跡のほぼ中央。
	② 地形面の変化	南西に下る微傾斜地。約25cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の南東部、1/5の範囲で遺構を検出。精査面積700㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	水性堆積砂層(4層)。北方からの水流により田面が被覆され(4層)、さらに北東からの水流(3層)によって浸食、被覆廃絶されたと推定。プラントオーバー0~800個/8。
	⑤ 水田土壌	茶褐色粘土。5層上半部には、水田土壌に均一に混じり切らない砂の斑状混入がある。砂斑の分布は水田面から下へ10数cm。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C35地点> 2,900個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	中央トレンチ東端(グリッドD35N)では以下のように重なる。厚さ30数cmの5層の下に、6層(暗茶褐色粘土)数cm、7層(暗青色砂質粘土)数cm、8層(暗青色粘土)数cm、9層(砂礫。粒径3~4cm、最大10cm)40~60cm、10層(砂層)9cm~50cm、11層水田(5層田面から130~140cm下)。
	⑧ 畦畔の規模	大きな畦畔は、下端幅約100cm、田面からの比高約20cm。水路を伴うものは、水路とあわせて幅約220cm、比高20数cm。小さな畦畔は、下端幅約50cm、比高10数cm。
	⑨ 畦畔の構造	(大きな畦畔) 角杭・丸杭・粗朶が密に打たれ、踏み込まれる。材の大半はマツを中心とした針葉樹材と推定。北西-南東に伸びる畦畔は並走して水路を挟んでいたらしいことが南東部の盛土と北西部の杭列から推定される。11層水田(推定:平安~中世)の大きな畦畔を踏襲する。 (小さな畦畔) 隆絶時の浸食により盛土の形は不明確。疎らな杭列を伴う。粗朶などはほとんど見られない。
水田の状況	⑩ 水田区画の方法	大きな畦畔と小さな畦畔による。大きな畦畔同士の交差が検出された。
	⑪ 水田区画の形	一筆の形を確定できる田面はない。しかし、検出された畦畔はすべて、互いに並走または直交していることから、長方形に区画されていたものと推定する。
	⑫ 枚数と面積	確定できる田面なし。 畦畔の両側に田面があるととして8面。
	⑬ 田面の状態	グリッドD35~36では北東方からの水流による浅い浸食痕跡が幾条も並んで見られる。比較的残存状態の良い南東部の田面には足跡が散在する。
用排水の状態	⑭ 水源	(不明) 南流する水路の上流方向と推定するのみ。
	⑮ 自然流路	(なし)
	⑯ 水路	S D60501。北西-南東方向に走る大きな畦畔が水路を挟んで渠を兼ねていたと推定。大きな畦畔同士の交点以南では残存する盛土から水路の存在が明らかだが、交点以北では盛土が流失しており、水路を挟んで並走する畦畔が存在したことは残存する杭列の並び方から推定している。
遺物	⑰ 水口	(なし) グリッドC36Sの畦畔交差点付近にあったのではない。
	⑱ 遺物の種類	漆器(9層内)。ヒトのものと思われる頭蓋骨(5層直上の砂礫層最下部)。馬鐙の刃1点。土器は検出されなかった。
	⑲ 年代推定の根拠	隣接調査区との土層の対応から推定。
年代観	⑳ 隣接区との対応関係	5区3層。7区2層。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 杭列畦畔を伴う水田土壌が河川の氾濫による砂礫に被覆されており、明確だった。

第52表 6区水田観察表7

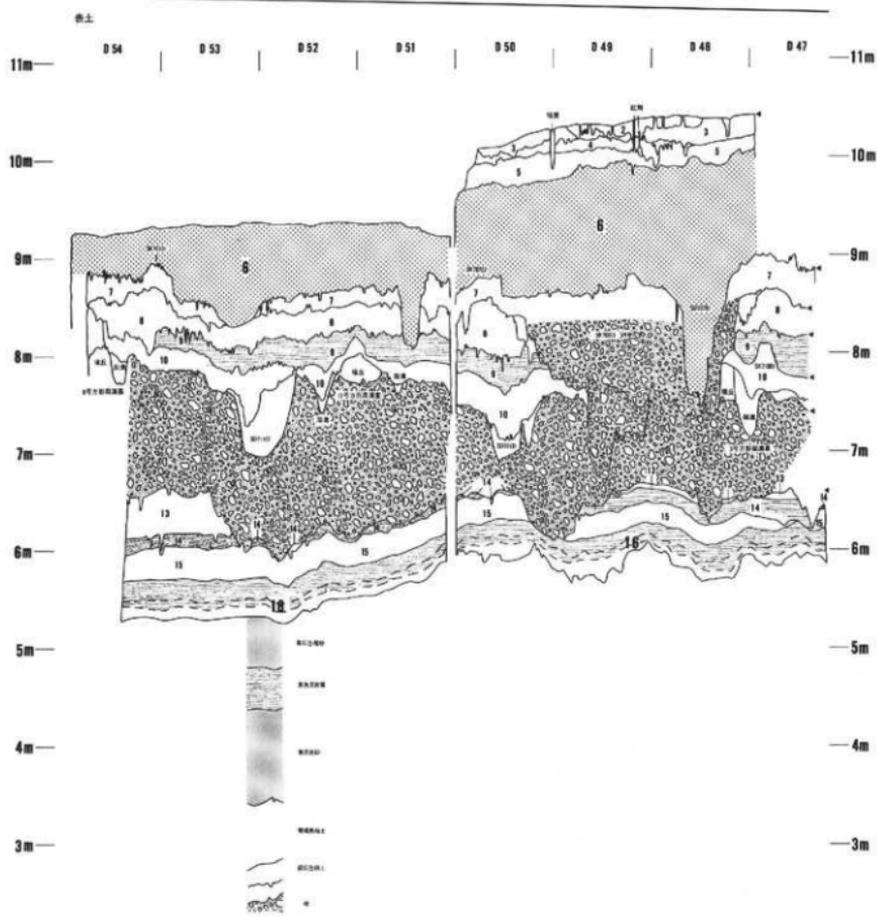
第5節 7区において検出された遺構

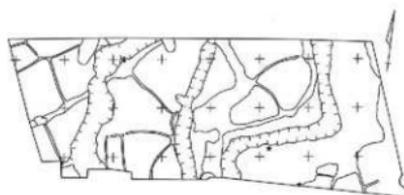
1. 基本層序

7区は西側半分が地表下約3mまで、産業廃棄物などによって攪乱をうけており、基本層序は発掘調査の結果を基に作成したものである。従って基本層序といっても全地点で堆積状況が同じという訳ではない。土層中には中世・弥生時代の2回の洪水流によって、それぞれ約1mにおよぶ砂礫の堆積があり、その間で弥生時代から平安時代までの遺構が検出される。本区においては縄文時代晩期とされる火山灰、カワゴ平バミス・大沢スコリアは海拔約5.5mの16層中で検出される。その直上の15層より上層で約二千数百年にわたる人々の生活の跡が検出された。検出した遺構は水田5面、方形周溝墓群1面、木道状遺構1面、その他1面である。

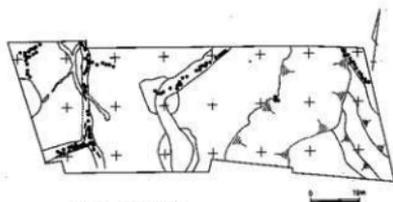
層序	土色および土質	観察	イネのプラントオパール採取地点 (個/層)	遺構	年代観
表土(1層)		現耕作土・客土・建築廃材			
2層	暗緑灰色 粘土	管状が見られる	C46 1000	水田	(中世~近世)
3層	灰褐色 粘土	基本的に2層と同一部分に分層が不可能	" 1000		
4層	黒褐色 粘土	部分的な堆積	" 0		
5層	暗灰色 粘土	青灰色粘土(シルト質)が小さなブロックで混じる	" 1800		
6層	灰色 砂礫	洪水堆積	未採取		
7層	暗青灰色 粘土	耕作土	C46 3600	水田	(平安)
8層	暗緑(青) 粘土	上位から下位へシルトから粘土へ変化	C53 800	水田	(奈良)
9層	暗茶色 腐植混じり粘土	泥炭質土壌	C46 0	木道状遺構	(古墳中期)
10 a層	暗茶灰色 粘土	耕作土 白色砂 小礫を含む粘土層	" 1000	枕形水田	(弥生終末~古墳前期)
10 b層	暗茶褐色 粘土		" 1700		
11層	黒褐色 腐植混じり粘土	12層方形周溝墓の低位部分に堆積した腐植土	未採取		
12層	砂礫	シルト 砂 礫から構成されるが、場所によって違う	未採取	方形周溝墓群	(弥生中期)
13 a層	灰色 粘土	自然堆積	C46 0	枕形	(弥生中期)
13 b層	灰色 粘土	自然堆積 下位にシルトとのラミナを含む	" 0		
14 a層	黒色 泥炭質土壌		C47 2100		
14 b層	黒色 泥炭質土壌		C47 0		
15 a層	黒灰色 粘土	火山灰をわずかに含む	C47 0	溝状遺構	
15 b層	緑灰色 砂質粘土	腐植と砂質粘土との互層ラミナ	E50 E53 0		
16 a層	黒色 泥炭質土壌	火山灰をわずかに含む	C47 0		
16 b層	黒色 泥炭質土壌	大沢スコリア・カワゴ平バミスを含む	E50 E53 0		
16 c層	黒青色 粘土	自然堆積	" 0		
17層	粗砂	自然堆積 礫を含む	"		

第53表 7区土層観察表

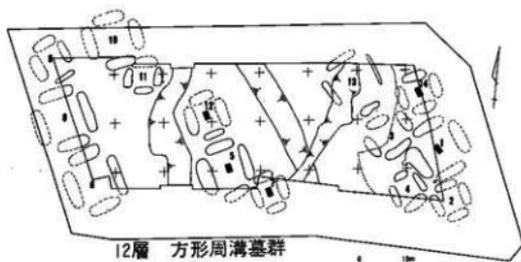




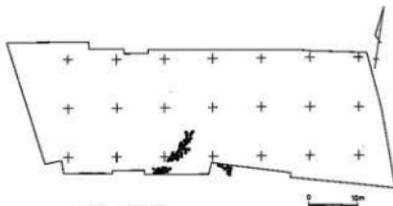
第133図 7区遺構変遷図 1



10層 水田跡



12層 方形周溝墓群



13層 杭列

第134圖 7区遺構実測図 2

2. 遺構の変遷

15層上で検出された遺構

15 b 層 <溝状遺構> [第135図]

15層は植物質の包含の差によって2層に分層している。下層である15 b層は腐植と緑灰色砂質粘土がラミナを形成している。上層の15 a層は黒灰色粘土である。両層は同一層であり、15 a層は15層上位が表土化したものであるとみられ、14層の未分解の植物質を含んだ黒色泥炭質土壌が被覆するまでは、比較的長期間にわたったと考えられる。

調査区東側のグリッド47列において、南北に走行する長さ約20m、幅2m、深さ30cmの溝状遺構が検出された。また調査区中央のグリッド50・51列では不定形の落ち込みが検出された。両者ともに性格は不明である。年代を決定する遺物は出土しなかった。

13層上で検出された遺構

13 a 層 13 b 層

方形周溝墓群が構築されている12層（砂礫層）によって被覆されている。洪水による大量の砂礫の流入によって、13層は殆ど削平されて流出している状況である。12層の砂礫は隣接の8区にまで広がりを見せている。13層は灰色粘土のa層と灰色粘土とシルトのラミナを形成するb層に分層できる。

<杭列> [第136図, 図版149・150]

調査区中央部南側部分に、5mほどの長さにわたり、杭列が検出された。ただしこの13層に伴うものであるかは断定できないので、隣接区（8区）の土層との対応から性格を考えてみたい。

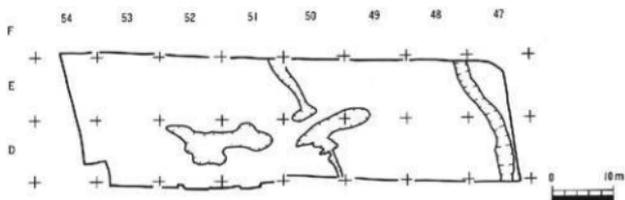
- (1) 杭列の頭の標高6.5~7.0mを示し、いずれも検出した13層上面より高いことから検出した層は13層であるが、上層面で打ち込まれた杭であると推定できる。
- (2) しかし、13層の被覆土は洪水堆積である。この洪水堆積は8区の19・20層に対応し、砂礫と砂層の互層である。8区ではその下に21層黒色粘土が堆積しており、条痕文系の土器や打製石斧が出土している。8区21層下部は、7区の13層と同質の黒灰色粘土で下層においてラミナが観察できる。
- (3) このことから、7区でも8区の21層に対応する黒色粘土が堆積していたが、激しい洪水流により黒色粘土は流出してしまった可能性がある。杭はその層に伴っていたと考えたい。
- (4) 12層の方形周溝墓群に伴う土器が弥生時代中期中葉を示していることから、それ以前の年代が与えられようか。

合掌形 塚の可能性

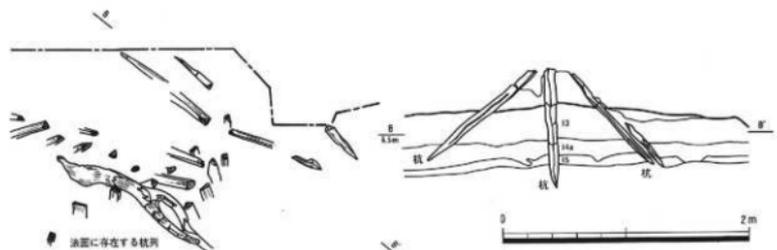
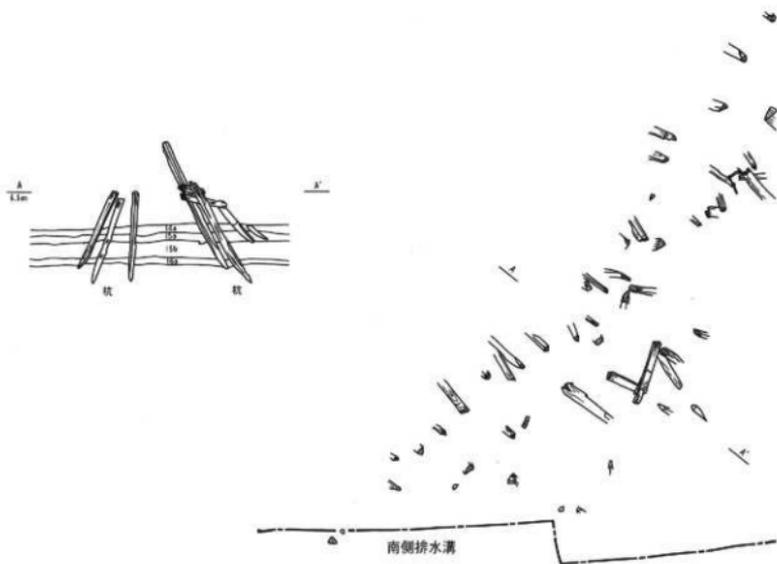
この杭列は残存状況も良好といえないため、正確なところは不明であるが、2列または3列で合掌形に打ち込まれている状況がうかがえる。このことから推定できるのは堰の存在である。13層の時期に流路があったのだろうか。しかし、堰にしては、杭が深く打ち込まれ、3列になる部分もあり、頑丈すぎる構造とも考えられる。畦畔や土塁のようなものだった可能性もある。調査区3ヶ所において13層~16層までのイネのプラントオパール分析を実施した結果、下層である14 a層（黒色泥炭質土壌）のグリッドC47地点において2100

P. O. 値 個/gをカウントした。

年代を推定できる遺物は出土しなかった。



第135图 15層遺構概念図



第136图 13層杭列実測図

12層上面で検出された遺構 方形周溝墓群、溝状遺構

〈方形周溝墓群〉 [図版134・140・145]

12層で検出した方形周溝墓群は12層上面に堆積した厚さ10~20cmの暗褐色粘質シルトをベースとして微高地上に構築されている。調査区内において検出することができたのは14基だが、隣接する6・8区から同時期の方形周溝墓が見つかっていない点、南北方向に部分検出のものがある点から、更に墓域が南北方向に拡大する可能性が高いといえよう。12層上面では2本の溝状遺構SD71101・71102が確認されており、方形周溝墓群を区画している。

溝状遺構

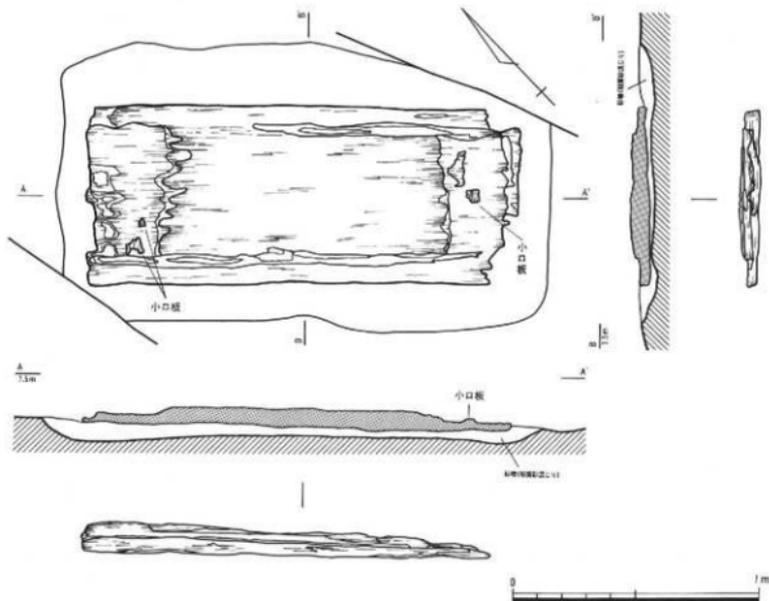
各方形周溝墓の平面形態は部分発掘が多いため断定はできないが、検出状況や同時期の方形周溝墓の形態の傾向から、4隅が切れるタイプと判断した。10基の方形周溝墓で墳丘を、7基から主体部の墓域（そのうち4基からは木棺の存在）を確認した。低湿地という地理的条件が後世の掘削から免れ良好な残存状態を可能にしたといえるであろう。

墳丘墓

(1) 1号方形周溝墓 [第137・138・157図, 図版136]

調査区東端グリッドBC46・47に位置する。東辺排水溝により一部破壊されているが、4本全ての溝を検出した。方台部は南北9.39m×東西8.34mの南北方向がやや長い方形を呈している。周溝底部からの高さは約85cmであり、旧表土層の暗褐色粘質シルト上に35cm程の盛土がなされている。盛土は5つに分層されるが、砂礫・シルトが用いられている点で周溝を掘削した際に排出された土を積み上げていることが想定される。南西側の陸橋部

方台部盛土



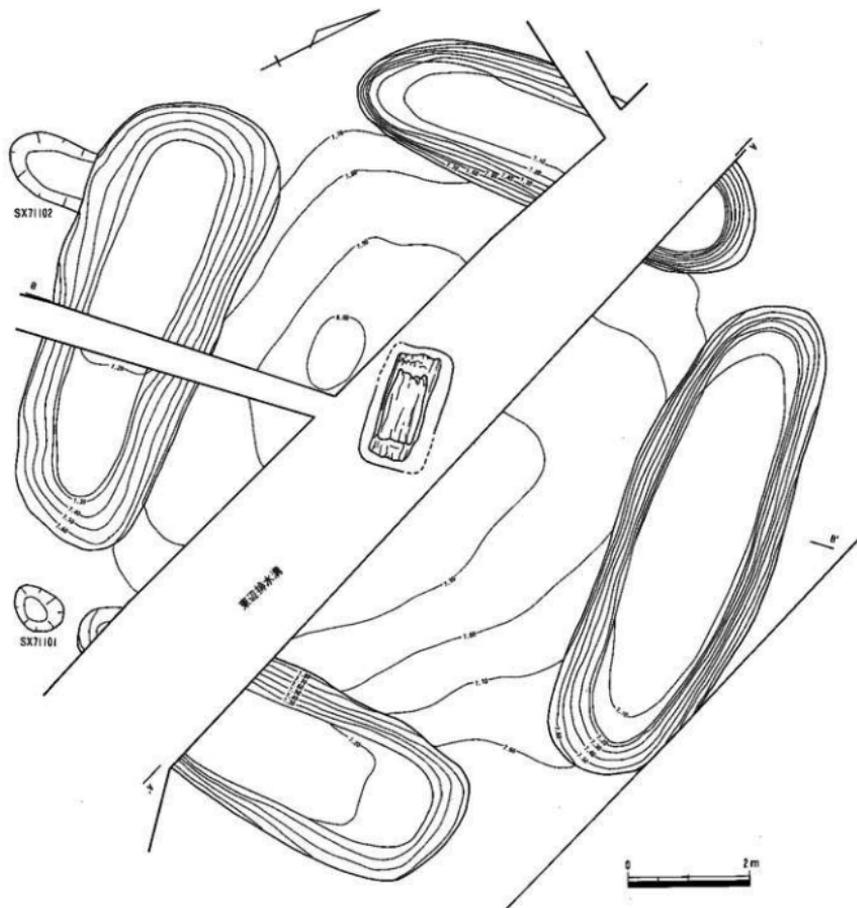
第137図 1号方形周溝墓主体部実測図

南側からは南北0.6m、東西0.9m、深さ約25cmの土坑状遺構SX71101が検出されている。周溝墓に伴うものと判断されるが、出土遺物等がなかったため施設としての意義づけはできなかった。

土坑状遺構

各溝は幅が広く、東側周溝を除き溝中央部よりも片側の端部が広がる傾向が見られる。北側周溝は長さ6.96m、幅2.26m深さ約50cmを計測する。断面はコーナー部分が穏やかな逆台形を呈するが、墳丘側がきつく直線的に立ち上がる。東側周溝は長さ8.34m、幅2.63m、深さ約0.6mである。底面はほぼ平坦だが外側に段があり、やや内湾しながら立ち上がって

周溝



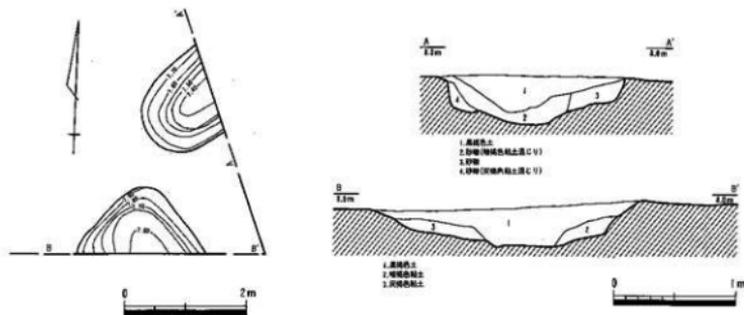
第138図 1号方形周溝墓平面実測図

いる。南側周溝は墳丘側がやや深く掘り込まれ、立ち上がりもきついようである。規模は、長さ7.03m、幅2.53m、深さ約50cmを計測する。西側周溝は、長さ7.58m、幅2.76m、深さ約60cmを計るが、北側部分で長さ約70cm、幅約50cm、深さ約20cmの土坑状遺構SX71102を切って形成されている。4本の周溝の中では最も幅が広く、特に北側端部の膨らみが顕著である。各周溝の覆土の様相は若干の相違があるが、大きく4層に分けることができる。上層は若干の礫が混じる黒褐色粘土、下層は黒色腐植土、その間に墳丘からの流れ込みと考えられる砂や礫の混じる粘土が堆積している。

- 主体部** 主体部は方台部ほぼ中央より検出されたが、墓壇は排水溝の掘削により、掘り方底部付近での平面プランを確認したのみである。長さ1.87m、幅1.18mの隅丸長方形を呈するも
- 木棺** ので、砂礫層を掘り込んで形成されている。主軸方位はN44°Wである。木棺は底板と小口板の一部を検出した。底板は、長さ171cm、幅74cm、厚さ7cmの杉材である。形態は底板に小口板がのるタイプで底板には、小口板を立てるための溝状の掘込みが端部より約15cmの
- 木取り** 所に作られている。また側板部分には幅約7cmの段状の削り取り加工がなされている。木取りは底板、小口板とも板目であるが、小口板は横板目が用いられている。木棺は砂礫層を平坦に整地した上に直置きされていたが裏込の礫混じりの粘土を確認することができた。
- 遺物** 遺物は、南側・西側周溝及び墳丘上より土器を出土している。墳丘上の上層の水田に伴うもので弥生時代後期の壺型土器の破片である。周溝内の土器は小片で摩滅が著しく、器形・時期ともに判断することができなかつた。また、北側周溝からは長さ69.5cm、幅2.5cmの棒状の木片が底部より約5cm浮いた状態で出土した。

(2) 2号方形周溝墓 【第139図、図版135】

- 調査区東南端グリッドB47において北側・西側周溝の一部を検出したのみで、残りは排水溝による破壊及び調査対象外となった。東辺排水溝の壁に北側周溝の断面が見られないことから方台部が4m前後の小型の周溝墓と判断できよう。方台部には盛土は確認できず
- 方台部** 平坦である。北側周溝は残存長1.48m、幅1.22m、深さ約20cm、西側周溝は残存長1.60m、幅1.67m、深さ約15cmを計測する。覆土は上層に黒褐色土、下層には礫を含む粘土及び粘土を含む砂礫が堆積している。主軸方位は西側周溝の向きからN37°Wと考えたい。
- 周溝**



第139図 2号方形周溝墓実測図

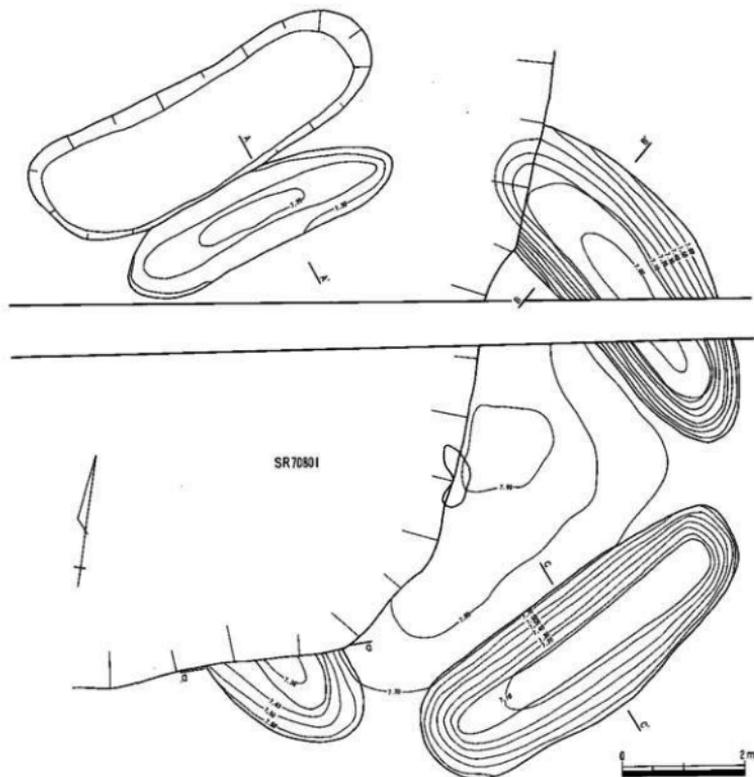
(3) 3号方形周溝墓 [第140・141・142図, 図版137]

調査区東側グリッドC47・48に位置し、13号方形周溝墓と接続している。古墳～奈良時代の確認面で検出された流路SR70801により南側周溝以外は破壊されている。方台部は南北8.43m、東西は残存した部分が約7.2m、周溝底部からの高さは約90cmである。盛土は方台部南側で確認されたが、暗青灰色砂質粘土が下部に、その上に微砂の混じる灰褐色粘土が中央部分を中心に検出された。

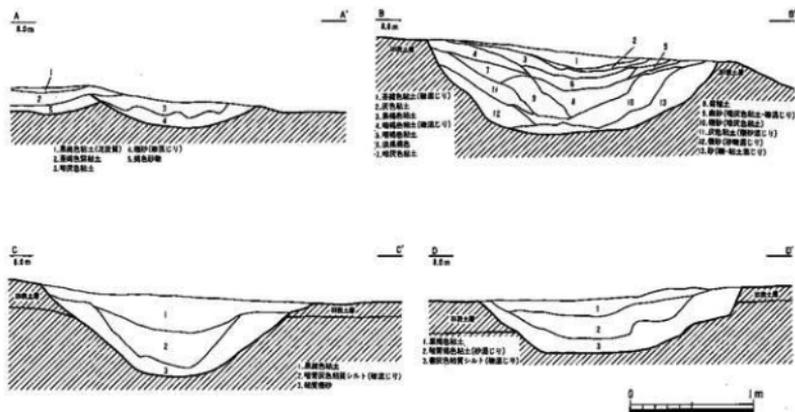
方台部
盛土

北側周溝は削平により底部を検出したのみである。規模は残存部の長さ4.77m、幅1.28m、深さ約30cmを計測する。外側へやや弓状に張り出しており、周溝断面は丸く緩やかに立ち上がり、13号方形周溝墓南側周溝と切り合っている。覆土の残りが悪いため明瞭さに欠けるものの、堆積状況から3号方形周溝墓が13号方形周溝墓を切っていると判断した。東側周溝は北側先端部分が破壊されているが、SR70801内に引くことができたコンターラインから全長5.96m、幅2.30m、深さ約70cmを計測した。底部がやや平坦で緩やかにカーブを描

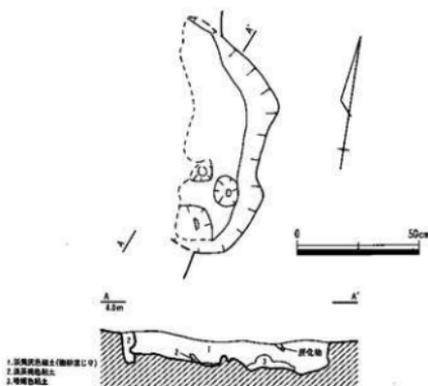
周溝



第140図 3号方形周溝墓平面実測図



第141図 3号方形周溝墓周溝断面実測図



第142図 3号方形周溝墓主体部実測図

主体部 主体部は方台部中央で墓塚の南端部分を確認しただけである。残存部分は非常に荒れており、全体としての形態は不明であるが、隅丸長方形と予測される。残存部分の全長約0.7m、幅0.8m、深さ約10cmを計測する。墓塚を掘り込んだ面は周溝構築時の旧表土であり、それ以下の層には達していない。

遺物 遺物は東側周溝底部直上から2点の土器片を検出している。摩滅が激しいが、弥生時代中期の壺形土器と判断される。

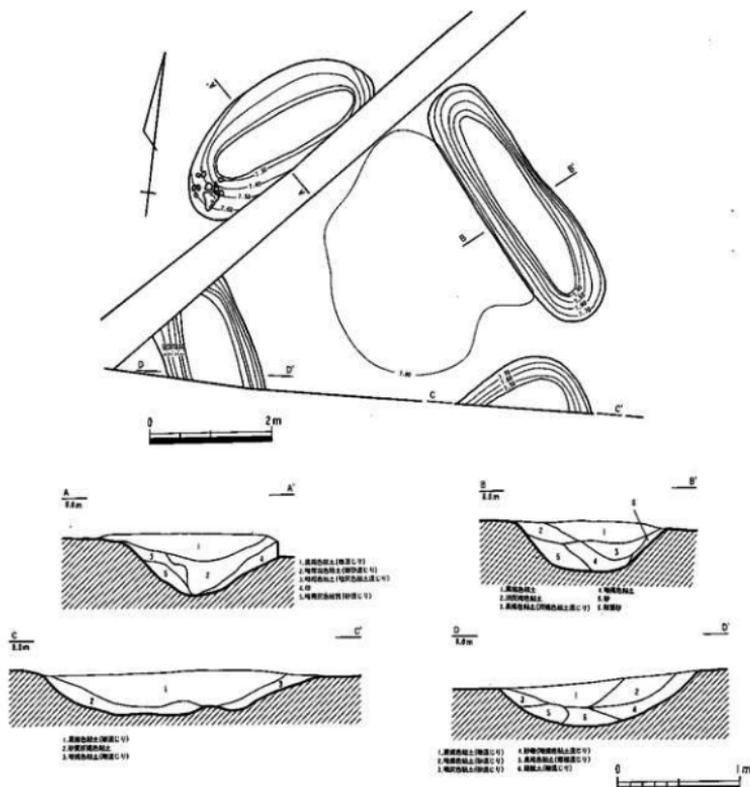
(4) 4号方形周溝墓 [第143図, 図版137]

調査区東側南端グリッドB47・48の範囲から検出され、1号墓・2号墓の西側に位置する。南辺排水溝及びトレンチにより破壊されており、完全な形で確認できたのは東側周溝のみである。方台部の規模は南北5.26m、東西5.04mのほぼ方形に近い形態である。周溝底部からの高さは約60cmを計測する。削平が著しく、旧表土層の暗褐色シルトを確認することができたのは方台部中央部分のみである。断面からは旧表土の中央部分に深さ約5cmほどの浅い凹みが見られるが、主体部として確認することはできなかった。

方台部

周溝

北側周溝はトレンチにより南側部分が破壊されているが、全長3.56m、全幅は残存部で約1.5m、深さは約50cmを計測する。長さには幅が広い長楕円形を呈している。周溝断面はトレンチにより墳丘側の立ち上がり不明だが、丸みを帯びた底部が緩やかに立ち上がっている。東側周溝は全長4.40m、幅1.18m、深さ約50cmである。全長に比べ全幅が狭く、南側で幅が広がる。周溝断面は底部で若干の平坦部分を確認できるが、墳丘側が直線的に

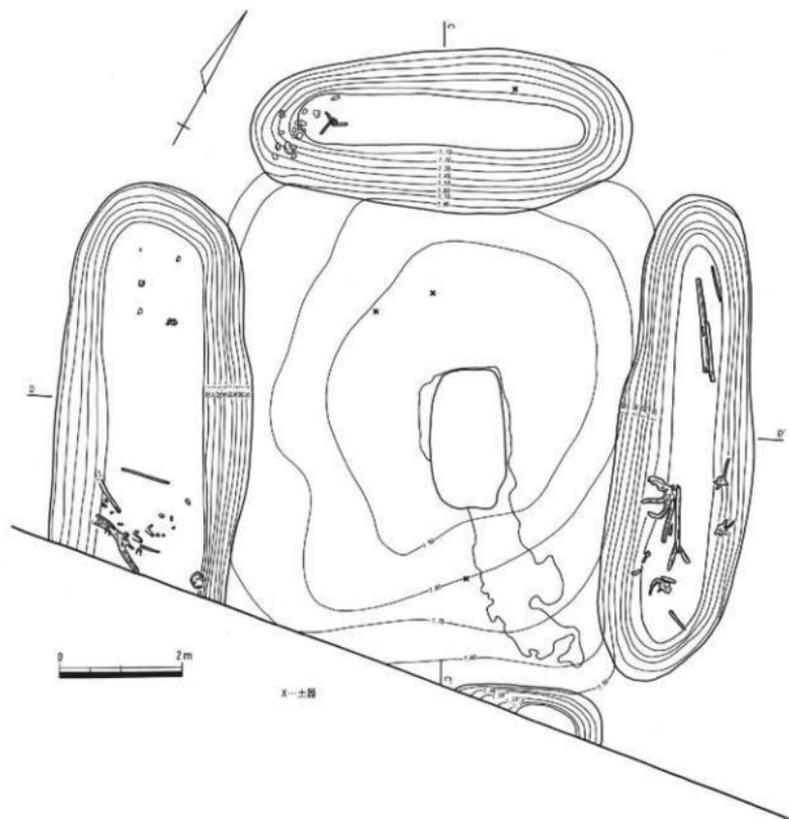


第143図 4号方形周溝墓実測図

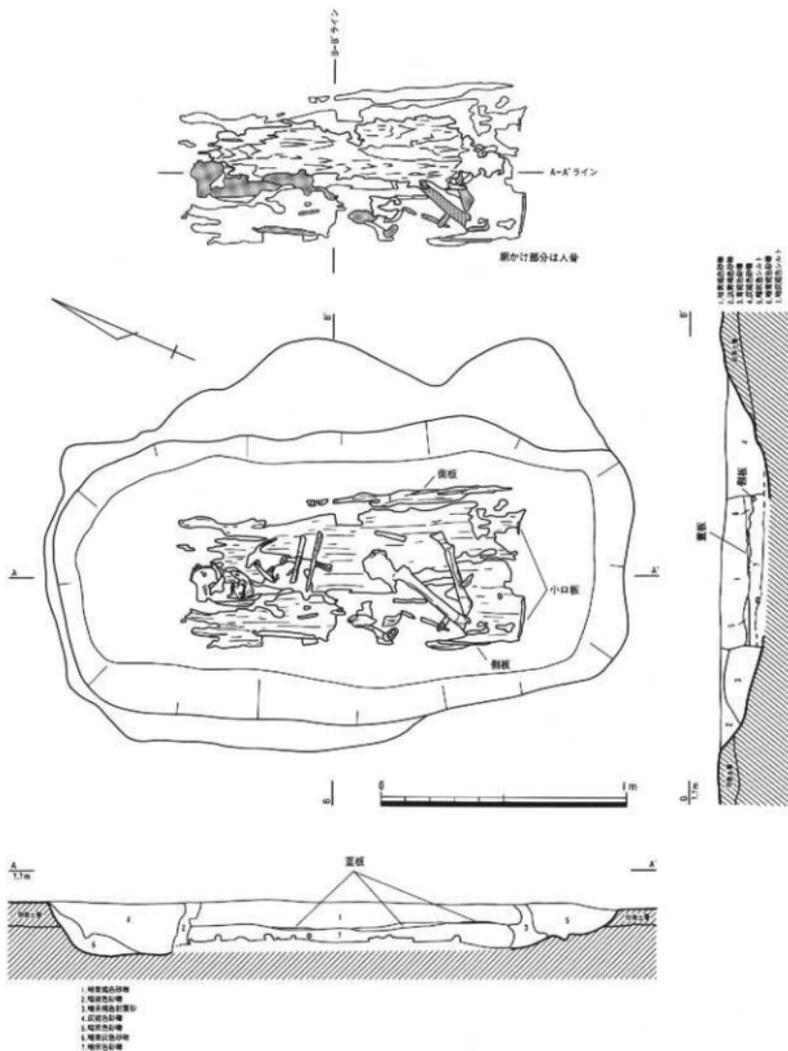
緩く立ち上がっている。南側周溝は南辺排水溝による破壊のため、先端部のみの検出である。残存部分は、1.70m、幅1.34m、深さ約30cmを計測する。西側周溝もトレンチ、南辺排水溝による破壊のため、中央部分のみの検出である。残存部は全長1.97m、全幅1.50m、深さ40cmである。周溝覆土は下層に砂礫や砂が、上層に黒褐色土が堆積しており、早い段階に墳丘の盛土が崩落したと考えられる。

遺物 遺物は東側周溝の覆土上層より土器片が2点出土しているが、摩滅が著しく器形及び時期の決定はできなかった。また北側周溝からは底部より約30cmほど浮いた状態で、径5cmほどの鏝を20点出土した。

主軸方位は東側周溝の方位から $N35^{\circ}W$ と想定した。



第144図 5号方形周溝墓平面実測図



第145図 5号方形周溝墓主体部実測図

(5) 5号方形周溝墓 [第144・145・157図, 図版141・142・143]

調査区中央を流れる2本の溝状遺構に挟まれた微高地に位置するグループに属し、グリッドB・C51・52から検出した。南辺排水溝により南側および西側周溝が破壊されている。

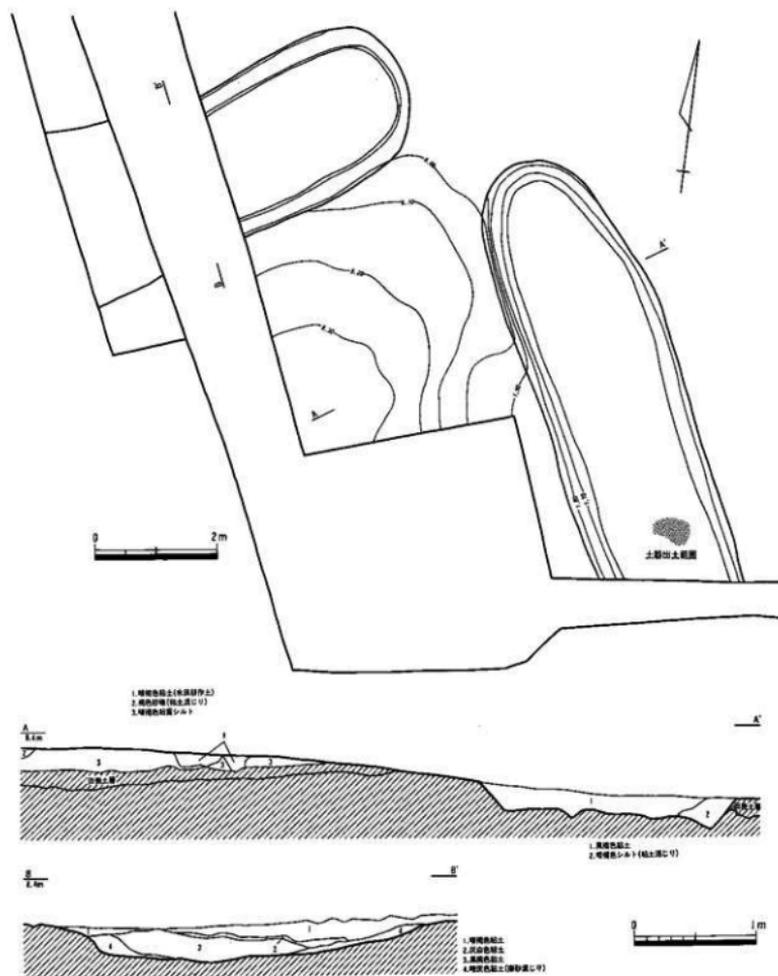
- 方 台 部 方台部の規模は、南北約9.17m、東西7.69m、周溝底部からの高さ約1.1mである。
- 盛 土 盛土は旧表土層である黒青灰色粘質シルト上に周溝掘削土のシルト及び砂礫を積み上げたものである。主体部設置後、中央部分と墳丘肩部に周溝掘削土を小さくマウンド状に積み上げ、その後周マウンドの間を埋めながら土を盛り、墳丘を形成するという行程を想定することができる。墳丘の残存状況は非常に良好で弥生時代後期から古墳時代初頭に比定される10層水田では、墳丘が微高地として、畦畔の役目を担っていた。
- 墳 丘
- 水田畦畔とし利用
- 周 溝 北側周溝は長さ6.26m、幅2.67m、深さ約60cmを測るが、中央から東側部分に大きく膨らんでいる。底部は墳丘側が深く掘り込まれ、立ち上がりは墳丘側がきつく、外側は大きく開いている。東側周溝は長さ7.98m、幅2.28m、深さ約50cm、中央付近で一度屈曲し、南側部分で幅が広がっている。底部は丸く、墳丘側は非常に緩やかだが直線的に立ち上がる。南側周溝は調査範囲外となり東側部分のみの検出だが、長さ約2.4m、幅約0.8m、深さ約50cmを測る。西側周溝は南端部分を南辺排水溝により破壊されている。残存長6.83m、幅3.24m、深さ約50cm、断面は底部が不整形だが、墳丘側はやや直線的に砂層を削り出して形成している。覆土は下層に黒褐色腐植土、黒褐色粘土、上層に10層の水田耕作土である暗茶褐色粘土を堆積している点で共通しており、盛土の崩落による埋没は考えられない。
- 主 体 部 主体部は方台部ほぼ中央より木棺1基を検出した。木棺を設置した墓塚は長さ2.37m、幅1.27m、深さ約15cmのやや不整形な隅丸長方形を呈している。旧表土から掘り込んで形成されているが、床面は下の砂層にまで達している。墓塚東側は径5～20cm大の礫が非常に多く含まれており、これらは南東側の陸橋部へ幅約70cm、深さ約5cmほどの浅い凹みとなって連続している。この礫は旧表土下の礫層の礫と状況が類似している点や凹みが旧表土内である点から、人為的なものであると判断した。主体部への墓道の可能性を考えているが、不整形な点で疑問が残る。木棺は杉材を用いたもので、残存状態は悪いものの蓋板・小口板・側板・底板を確認することができた。規模は1.36×0.63m、内法1.35×0.56m、主軸方位はN18°Wである。構造は底板外側に側板・小口板を設置し、裏込めをした構造であり、裏込めには周溝掘削による砂礫を用いている。木棺内部からは仰臥屈肢状態の人骨1体を検出した。上肢の状況は不明だが、下肢の屈曲度は31°を計測する。性別・年齢等は今後予定されている専門的鑑定に委ねたい。
- 木 棺
- 仰臥屈肢葬
- 遺 物 遺物は南側周溝を除く各周溝から確認されている。北側周溝からは壺形土器1個体分、西側周溝からは甕形土器の小片を出土している。北西の陸橋部に近い周溝端部に集中しており、層位は低位から中位にかけてである。弥生時代中期中葉に位置付けられる。木片は東側・西側周溝が卓越しており、いずれも底面直上から出土している。

(6) 6号方形周溝墓 [第146図, 図版146]

調査区南西端グリッドB・C53・54に位置し、8号墓に近接している。排水溝及び調査区外となるため、検出されたのは北側周溝と西側周溝の一部のみであり、全体の様相は不明である。残存した部分の規模は南北8.31m、東西6.87m、周溝底部からの高さ約64cmである。盛土は旧表土層である暗褐色粘質シルトの上にシルト・砂・礫が確認されており、周溝を掘削時に排出された土を用いていたと考えられる。

- 周 溝 北側周溝は残存長5.94m、幅2.95m、深さ約30cmである。先端部は幅が広く、北辺排水

溝付近で一度くびれ、さらに中央部分で膨らんでいる。東側周溝は長さ7.55m、幅2.43m、深さ約30cmを計測するが、顕著に膨らまず、直線的に伸びている。両溝とも他の周溝基の溝に比べて浅く、底部が幅広い傾向にある。覆土は中央部分に黒褐色粘土が堆積している点で両溝は共通している。



第146図 6号方形周溝基実測図

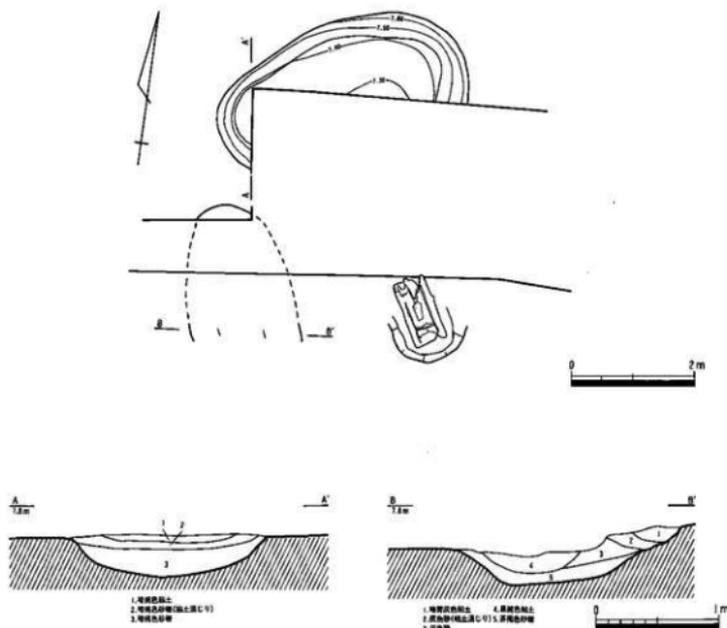
主体部は調査区外のため未検出である。南北軸方位はN27°Wであるが東側周溝方位より判断した。

遺物 遺物は東側周溝南半より、底部より約10cmほど浮いた状態で1個体分の甕形土器の破片を出土した。復元することができたのは口縁部から胴部中位までだが、弥生時代中期中葉のものと判断した。

(7) 7号方形周溝墓 [第147・148図, 図版142]

盛土 調査区中央南端グリッドB50・51から検出され、5号墓の南東側に近接している。調査区外となるため、検出されたのは、主体部及び北側周溝と西側周溝の一部である。北側周溝の規模や主体部の位置から判断して長軸が5m前後の小型のものと考えられる。盛土は南側法面を確認することができたが、旧表土の上に砂礫及びシルトが盛られており、厚さは約15cmである。北側周溝は全長4.16m、残存部の幅約1.5m、深さ約40cmの東側が膨らむ長楕円形をなしている。周溝断面底部は丸く、緩やかにカーブを描きながら立ち上がっている。覆土は下層に粘土混じりの砂礫、上層に暗褐色粘土が堆積している。西側周溝は北端部分を約20cm検出したのみである。

主体部 主体部は南側法面から木棺1基を検出することができた。墓壙は北側部分が排水溝によ



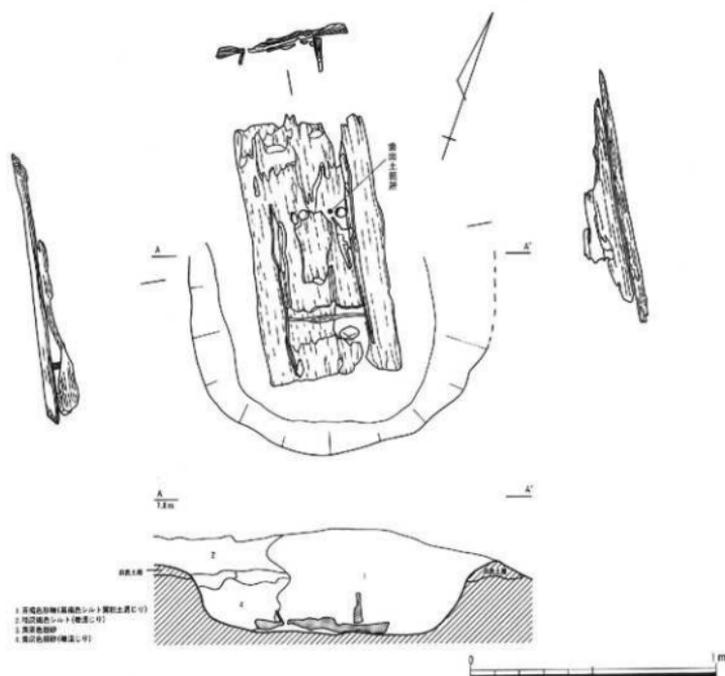
第147図 7号方形周溝墓実測図

り破壊されたが、隅丸長方形を呈すると考えられ、残存長1.4m、幅1.2m、深さ約25cmを計測する。旧表土層を掘り込んで形成され、底部は下層の砂礫層に達している。断面は、底部が平坦な逆台形を呈しており、裏込めに用いられたと考えられる砂礫を検出することができた。木棺は底板・盖板・小口板・側板を検出した。長さ1.11m、幅0.55m、内法0.62m、幅0.3mを計測する小型のもので、主軸方位は、N27°Wである。盖板の残存状況は悪かったが、小口板・側板は直立した状態のまま検出された。底板の残存状況は良好で、厚さ約4cmの杉材の追征目板を用いており、小口板を立てるための溝状の掘り込みと側板を立てるための削取り加工がなされていた。木棺内部からは北東部分より、歯17点を検出した。また近接する場所から径約4cmの円礫3点を出土したが、位置から頭部を支えるために用いたと考えることが可能である。

遺物は、北側周溝底部から土器片2点を出土した。小片で、摩滅も著しいため、器形・時期ともに判別することができなかった。

(8) 8号方形周溝墓 [第149・150・157図, 図版146]

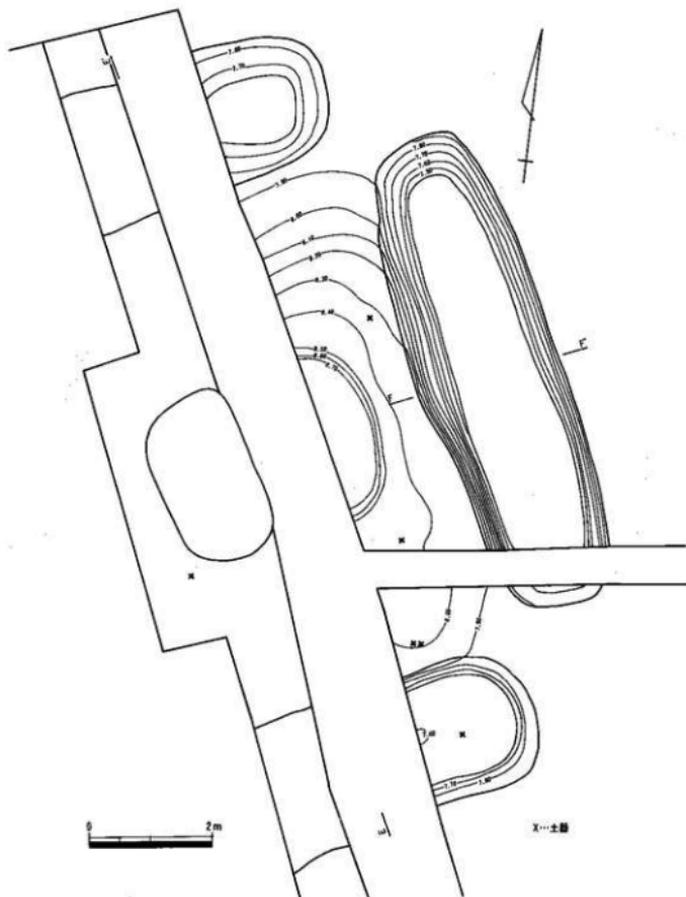
調査区西端中央グリッドC・D54から検出され、6号墓と9号墓の間に位置している。調査区外となっているため、北・南周溝の一部と東側周溝の検出である。方台部



第146図 7号方形周溝墓主体部実測図

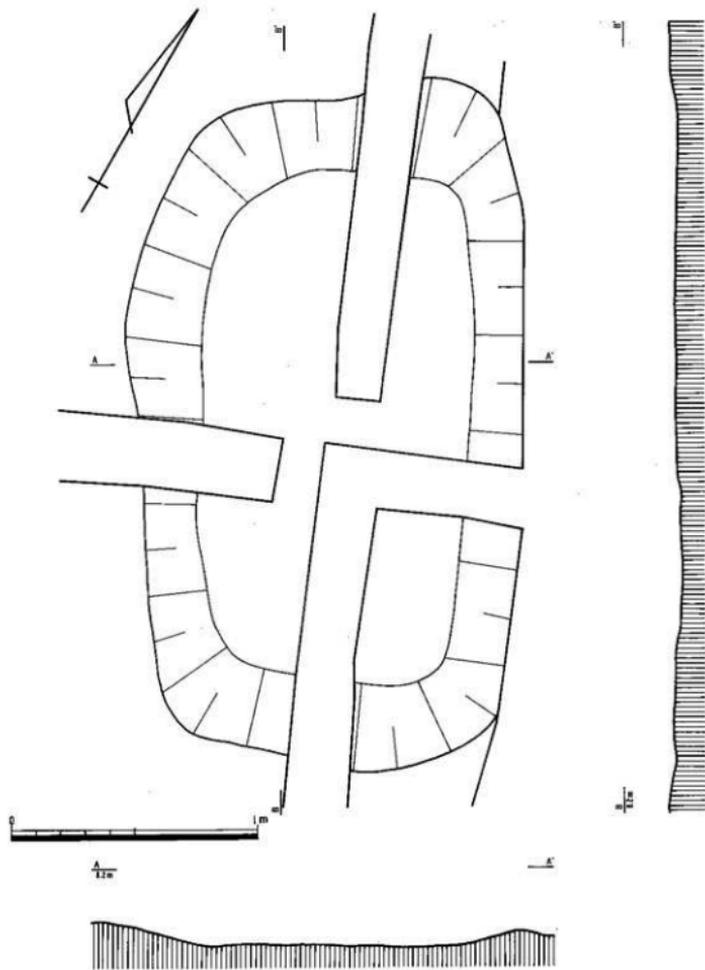
墳
周

分を検出しただけであり、東西の規模は把握しえない。南北は8.20m、東西残存長は5.83m、周溝底部からの高さは96cmである。東西長は主体部の位置から8m程度と考えられる。上層の10層水田においても削平されておらず、墳丘の残りは非常に良好である。方台部中央に主体部を覆うため小マウンドが砂礫で形成され、その後は小マウンド周辺部に土を積むことにより墳丘を構築している。北側周溝は確認長4.23m、幅2.31m、深さ約50cmである。底部は平坦な幅広で、緩やかにカーブを描きながら立ち上がっている。東側周溝は全長8



第149図 8号方形周溝墓平面実測図

m、幅2.34m、深さ約50cmを計測する。中央部分で若干の膨らみを持ち南側へ向かい1度緩やかに屈曲する。溝断面は底部の幅が広く中央部分が一段深く掘り込まれ、他の周溝に比べ直線的でややきつい立ち上がりである。南側周溝も部分検出だが、残存長4.58m、幅2.51m、深さ約50cmを計測する。中央部分が外側へ膨らんでおり、6号基北側周溝と近接している。周溝断面は不整形だが、幅広の底部を持っており、墳丘側が外側に比べきつい立ち上がりを示している。



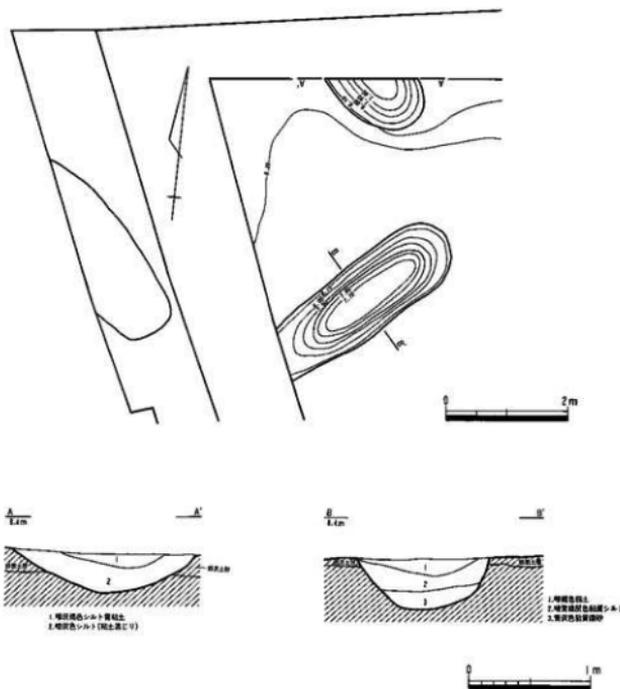
第150図 8号方形周溝墓主体部実測図

主体部 主体部は西側排水溝法面より土壌を検出している。上端は南北2.85m×東西1.65m、下端は2.07m×1.1mのやや幅広い隅丸長方形で、主軸方位はN28°Wである。床面は平坦で小口溝等がなかったことから、底板の上に小口板がのるタイプと予想される。主体部からは何も検出されなかった。

遺物 各周溝の覆土上層より土器の破片を出土している。南側周溝からは壺型土器の口縁から胴上半部までの破片を出土しているが、12号基西側周溝の土器と接合関係にある。時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

(9) 9号方形周溝墓 [第151図, 図版147]

調査区西側北端グリッドD・E54に位置する。調査区外となるため、北側周溝は検出されなかった。方台部の規模は南北存長約4.3m、東西約4mの小型のものと予想される。墳丘はすでに削平を受けており形状は不明である。また主体部も検出することができなかった。



第151図 9号方形周溝墓実測図

周溝は全て排水溝による破壊や調査区外にあたるため完全な形で計測できるものはなかった。東側周溝は長さ1.36m、幅1.20m、深さ約40cmである。南側周溝は長さ3.37m、幅1.16m、深さ約40cmを計測する。断面は底部が広く、墳丘側の立ち上がりがややきつものである。覆土は3層に分かれ、下層に青灰色微砂、中層に暗青灰色シルト、上層に暗褐色粘土が堆積している。西側周溝は北辺排水溝法面での平面プラン確認だけである。長さ3.28m、幅1.17m、中央部分がやや膨らむ。南側周溝より土器片を出土しているが、器形・時期ともに判断できなかった。主軸方位は東側・西側周溝の方位から $N44^{\circ}W$ とした。

(10) 10号方形周溝墓 [第152図, 図版147]

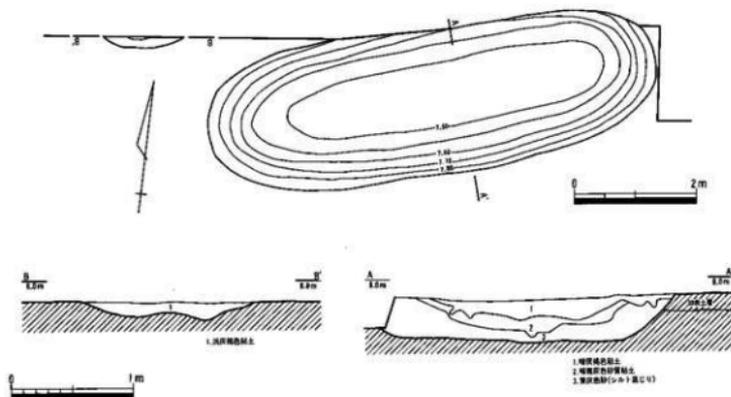
調査区西側北端グリッドF53・54に位置する。調査区外となるため検出されたのは、南側周溝と西側周溝の南側先端部分のみである。

南側周溝は長さ7.54m、幅2.43m、深さ約35cmの幅広の周溝である。墳丘側の立ち上がりは排水溝による破壊のため不明だが、平坦で幅の広い底部からゆるやかにカーブしながら立ち上がっている。覆土は3層に分かれ、下層にシルト混じりの砂、中層に暗青灰色砂質粘土、上層は暗灰褐色粘土が堆積している。西側周溝は長さ18cm、幅1.24m、深さ10cmを計測したが形状等は不明である。覆土は南側周溝上層と同じ暗灰褐色粘土である。

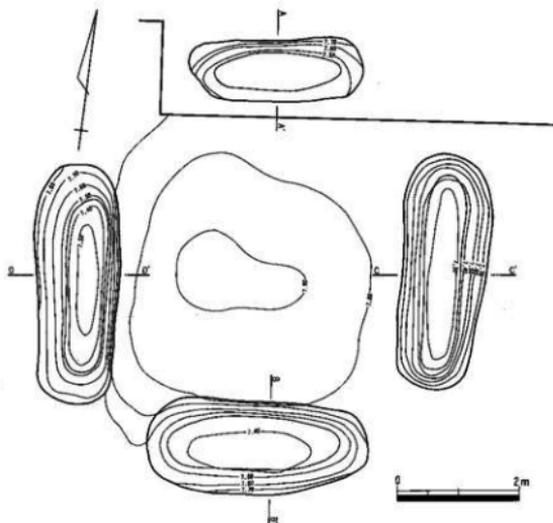
南側周溝より土器片を出土したが、小片で摩滅も著しいため、器形・時期を判断できるものではない。

(11) 11号方形周溝墓 [第153・155図, 図版147]

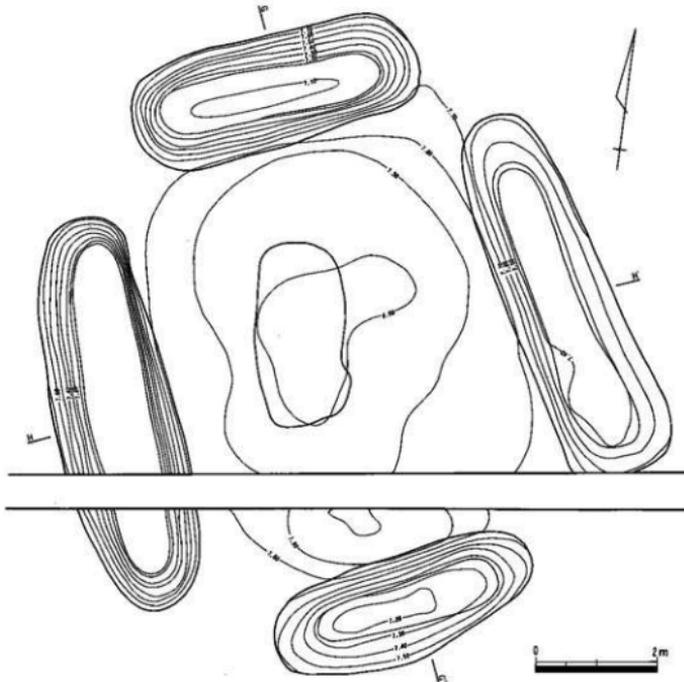
調査区西側グリッドD・E53内、10号墓の南東に近接している。規模は南北5.36m、東西5.18mを計測する。南北軸方向は、 $N5^{\circ}W$ である。墳丘は削平が進み、上層(10層)の水田耕作に伴う攪拌や抗の跡も見られるなど残存の状況は悪く、わずかに盛土と考えられる小礫を含む暗褐色粘土が一部で確認されただけであり、主体部を検出することはできな



第152図 10号方形周溝墓実測図



第153图 11号方形周溝基平面实测图



第154图 12号方形周溝基平面实测图

(7.82)

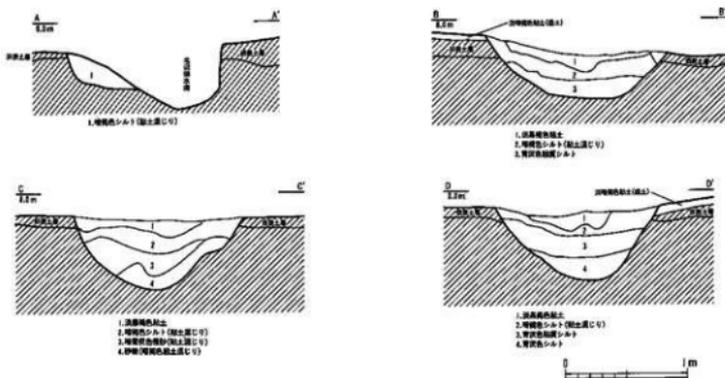
かった。

北側周溝は底部のプランの検出のみだが、長さ約2.3m、幅0.68mを計測する。東側周溝は中央部に膨らみを持たずに北側から南側へかけてやや幅が狭くなる。全長3.87m、幅1.48m、深さ約60cmを計測する。底部は丸く、墳丘側がやや内湾して立ち上がる。南側周溝は全長3.67m、幅1.53m、深さ約40cmである。東西の周溝に比べ幅広で、外側の張り出しが大きいく、断面の立ち上がりが緩やかという特徴を持っている。西側周溝は長さ3.94m、幅1.37m、深さ約50cmである。断面は東側周溝と同様、墳丘側の立ち上がりがきつくなっている。周溝覆土は下層から中層にかけてシルト、上層に黒褐色粘土が堆積している点で共通しているが、東側周溝は下層に砂礫が堆積している点で様相を異にしている。

南側周溝底部より土器片1点を出土したが、小片で摩滅が著しいため、器形・時期を判断することはできなかった。

(12) 12号方形周溝墓 [154・156・157図, 図版144]

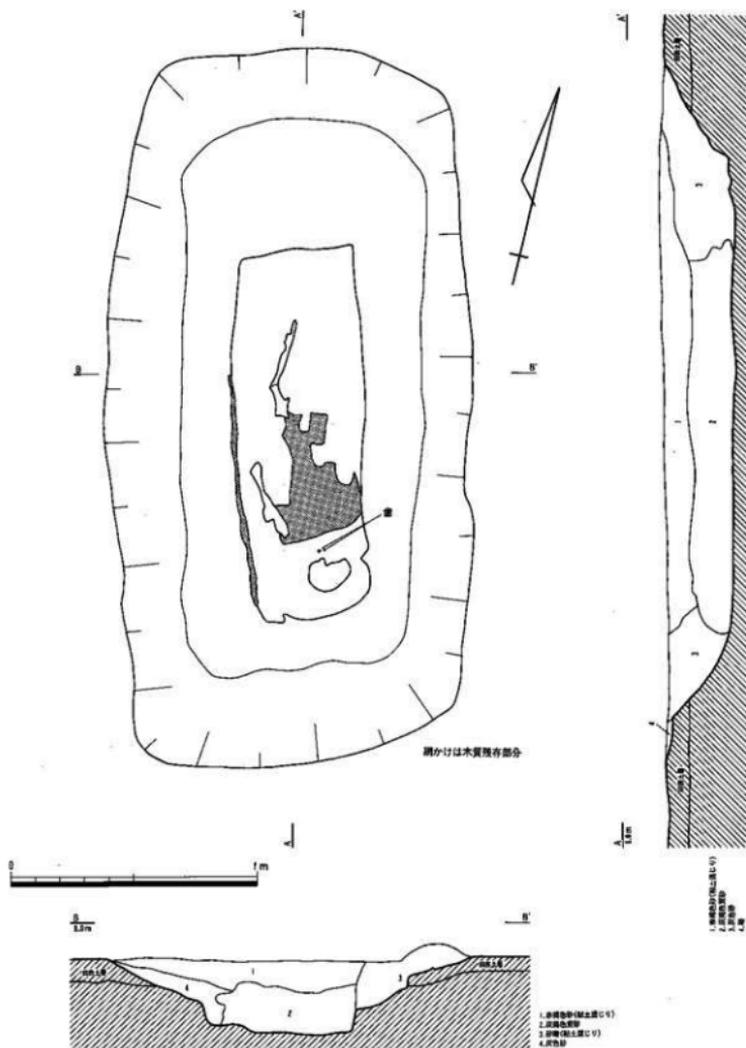
調査区中央グリッドD・E51・52内、5号墓の北側に位置する。南北長7.82m、東西長6.56m、やや南北に長い方形を呈している。周溝底部からの高さは98cmである。墳丘は、旧表土層である暗褐色粘質シルト上にシルト・砂礫・砂を盛ることにより形成されている。中央部分にはシルトが盛られ、主体部を覆う小マウンドが作られている。また東端部分には砂が低く盛られ、最終的に中央と端部の盛土を埋めるように砂礫を積み上げている。4本の周溝は中央東西トレンチにより、東・西側周溝が一部破壊されたが、良好な状態である。北側周溝は全長4.83m、幅1.91m、深さ約60cmを計測する。中央部分から東側にかけて幅が狭くなり、断面は外側に大きく広がるV字型を呈している。東側周溝は南端部分の幅が広がる全長6.35m、幅1.84m、深さ約30cmの浅い周溝である。断面は平坦部がなく、丸く緩やかに立ち上がっている。南側周溝は全長4.47m、幅1.79m、深さ約50cmである。中央部分がやや外側に膨らみ、東端部分の幅が狭くなる。断面は外側部分が深く、墳丘側がやや内湾しながら立ち上がっている。西側周溝は、長さ6.60m、幅2.03m、深さ約70cmを測る。中央部分で若干膨らみながら、先端へ向かい狭くなる。断面は墳丘側が深く、また立ち上がりも外側に比べきつい。各周溝の覆土は大きく3層に分けられるが、下層に砂



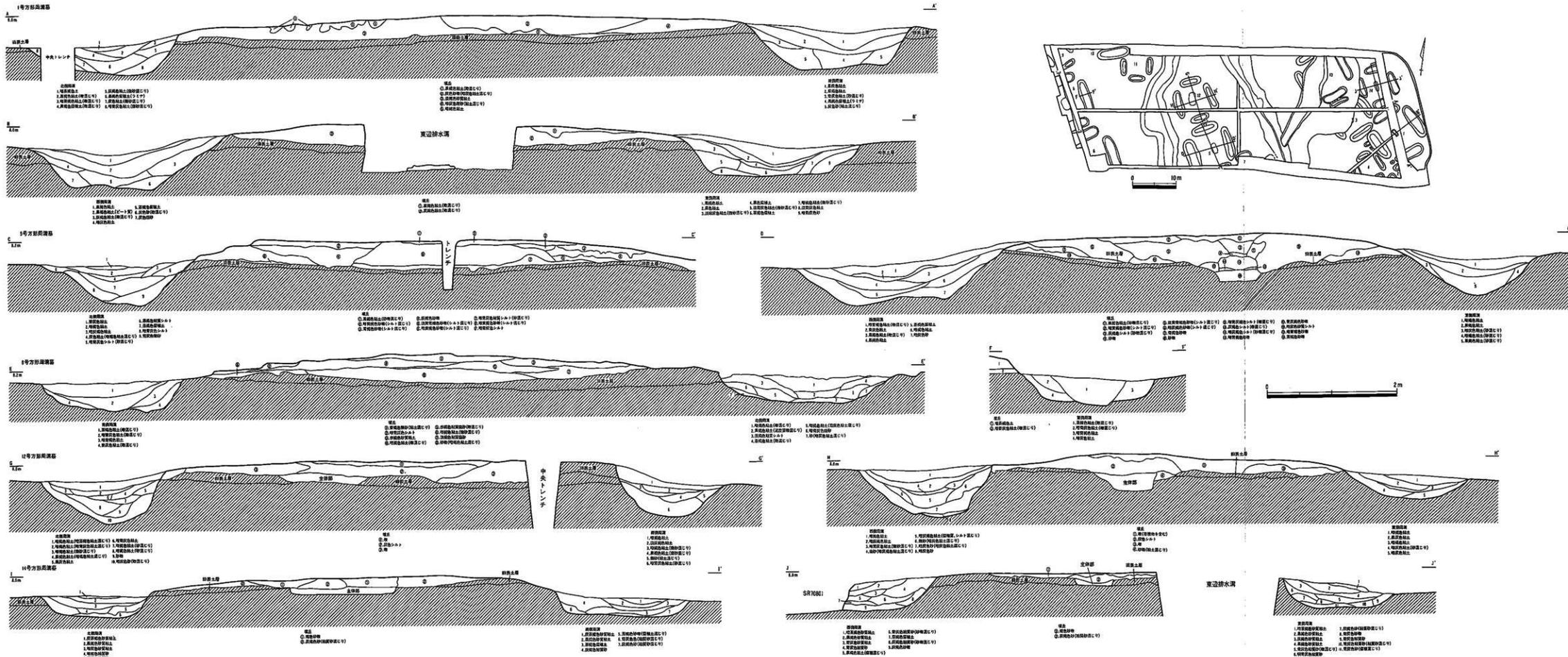
第115図 11号方形周溝墓周溝断面実測図

及び砂礫、中層に黒褐色粘土、上層には10b層が堆積している。

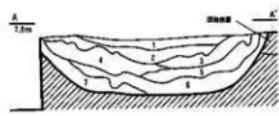
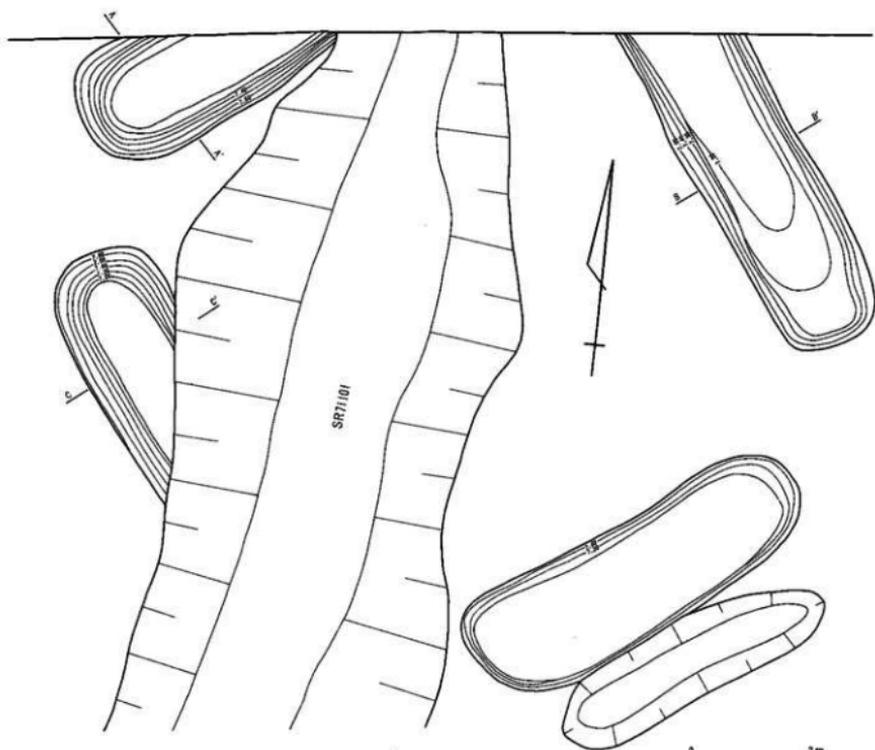
主体部 主体部は中央やや北西寄りに墓壇と木棺の痕跡を検出した。墓壇は旧表土層及びその下の礫層を掘り込むことにより形成されており、木棺を据える箇所を一段深く方形に掘り込



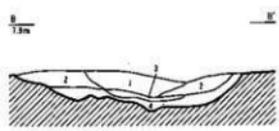
第156図 12号方形周溝墓主体部実測図



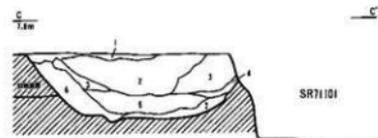
第157图 方形周清墓土層断面实测图



1. 灰褐色砂质粘土
2. 灰褐色砂质粘土
3. 灰褐色砂质砂
4. 灰褐色砂质粘土
5. 灰褐色砂质砂
6. 灰褐色砂质砂
7. 灰褐色砂



1. 灰褐色砂质土
2. 灰褐色砂质土(砂质心?)
3. 灰褐色土
4. 灰褐色砂



1. 灰褐色砂质砂
2. 灰褐色砂质砂
3. 灰褐色砂质砂
4. 灰褐色砂质砂(砂质心?)
5. 灰褐色砂质砂
6. 灰褐色砂质砂
7. 灰褐色砂质砂(砂质心?)

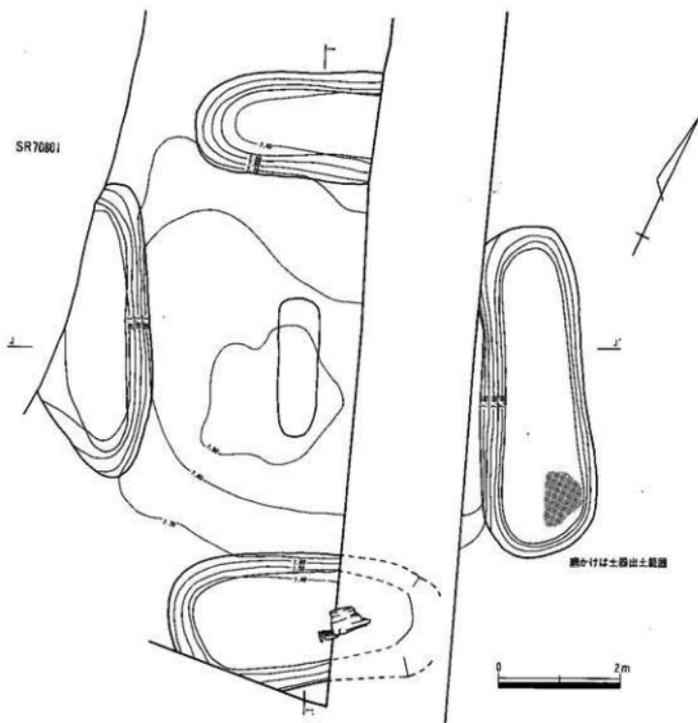


第158图 13号方形周溝墓实测图

木
棺
人
骨
遺
物

んでいる。全長2.91m、全幅1.51mの隅丸長方形で、西側部分が若干外側に膨らんでいる。木棺の設置箇所は、墓壕内やや南寄りに位置しており、全長1.50m、幅0.54m、深さ約10cmを計測し、主軸方位はN10°Wである。木棺は底板及び側板の一部と思われる痕跡を確認したにとどまった。墓壕床面の状況から木棺は床面に直置きし、底板の上に小口板を乗せるタイプであると判断した。内部からは頭位を南とした人骨1体分が出土している。頭蓋骨、腕・脚部と思われる骨及び歯であるが、残存状況が悪く、詳細は不明である。

遺物は土器片及び木片を検出した。土器片は墳丘内部と西側周溝より出土している。墳丘内部のものは、主体部の墓壕中心部に相当する位置で、主体部を覆う小マウンド上で発見された。壺型土器の胴部から底部にかけてのものである。西側周溝からは2個体の土器片を出土している。1点は周溝中央部の底部より約10cmほど浮いて出土した壺型土器の底部である。もう1点は、北端部から出土したもので、底部より約15cmほど浮いた状態で出土した。底部から胴下半部にかけての破片で、8号方形周溝墓出土の壺型土器の破片と接合することができた。また木片は西側周溝より出土したもののだが、用途等は不明である。



第159図 14号方形周溝墓平面実測図

(13) 13号方形周溝墓 [第158図, 図版137]

調査区東側、グリッドE・F48・49に位置する。SR71101・70801により西側部分が破壊されており、全体として残存状況は非常に悪い。

方台部は南北9.74m、東西約9.3mを計測し、南北軸方向はN37°Wである。盛土は削平により確認することはできなかった。

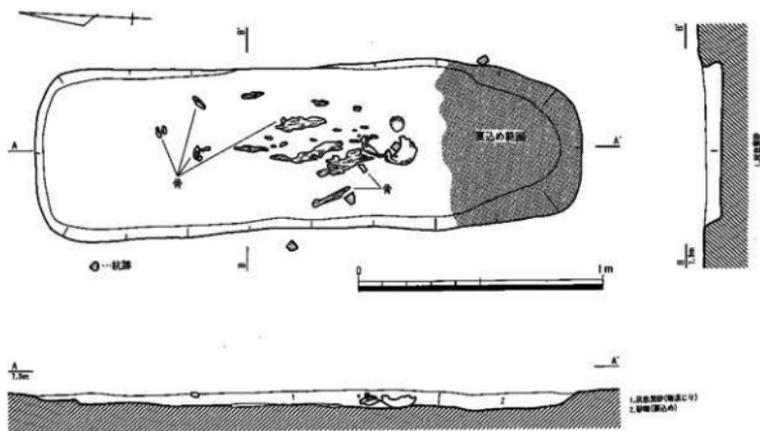
周溝は、削平等のため、完全な形態で残されたものではなく計測値は全て残存部のものである。北側周溝は4.32m、幅2.07m、深さ約50cmを計測する。底部は幅がやや狭く、緩やかな立ち上がりである。東側周溝は6.32m、幅1.87m、深さ約30cmで、南側先端部がやや内側に屈曲する。断面は不整形な底部を確認しただけで、墳丘側の立ち上がりも不明瞭である。南側周溝はやや外側に張り出し、3号方形周溝墓に切られている。断面は丸い底部を持ち緩やかに立ち上がっている。全長6.01m、幅1.92m、深さ約20cmである。西側周溝は北側約半分の検出だが、長さ4.22m、幅1.89m、深さ50cmを計測する。底部はほぼ平坦で、逆台形の断面を持つが、墳丘側がやや緩やかな立ち上がりである。周溝覆土は、北側・西側周溝は粘質砂が主体となり、東・南側周溝は下層に砂、上部に腐植土が堆積している点で異なる様相を呈している。

遺物は東側周溝・南側周溝より、土器片と木片を出土した。東側周溝出土のものは溝中層の土器器杯片であり、流れ込みと判断される。南側周溝からは底部より、弥生時代中期に比定される壺型土器の破片を出土した。木片は東側・南側両周溝より出土しているが、いずれも底部より10cm程浮いた状態で出土した。

(14) 14号方形周溝墓 [第159・160図, 図版138・139]

調査区東側北端グリッドD47・48に位置する。東辺排水溝及び流路SR71101による破壊を受けているが、4本の溝と盛土・主体部を検出することができた。

方台部は南北6.86m、東西6.22mのやや南北方向に長い方形である。周溝底部からの高



第160図 14号方形周溝墓主体部実測図

- 盛土** さは約45cmである。盛土は旧表土の上に褐色砂礫と灰褐色粘質砂が一部で確認されただけである。東西の土層から墳丘中央部分（主体部の上部）に灰褐色粘質砂が盛られ、その上に褐色砂礫を積むという過程を考えることができる。
- 周溝** 北側周溝は東辺排水溝によって東側部分を切られており、残存部分は長さ3.07m、幅1.83m、深さ約30cmを計測する。断面は底面が平坦で幅広い逆台形を呈している。立ち上がりはともに緩やかである。東側周溝も東辺排水溝により北側の先端部分を欠いている。全長5.45m、幅1.92m、深さ約20cmを測り、南端部分の幅が広がる。底部の幅が広く、墳丘側が直線的にややきつく立ち上がり、外側は丸く緩やかに立ち上がっている。南側周溝は東辺排水溝・中央トレンチにより破壊されており西側部分のみの検出となった。残存した部分の長さは2.89m、幅2.27m、深さ約30cmである。西側が幅広い不整形円形を呈すと考えられる。底面は平坦で幅広い逆台形をしているが、外側の立ち上がりは緩いカーブを描きながら立ち上がっている。西側周溝は流路SR70801により北西部分が削平されている。全長4.83m、残存部分の幅1.9m、深さ約50cmである。底部は平坦で、緩やかにカーブしながら立ち上がっている。覆土は主に砂質粘土だが、南・西側周溝は下部には礫が堆積しているのに対し、北・東側周溝では砂が堆積しており様相が異なっている。
- 主体部** 主体部は方台部ほぼ中央より検出した。全長2.21m、幅0.71m南側部分がやや狭くなる隅丸長方形の墓壇と木棺の痕跡である。旧表土を掘り込んで形成されたと考えられるが、検出した面が旧表土層中だったため正確な深さは不明である。断面は南北の立ち上がりが緩やかで南側部分には浅い段が付けられているのに対し、東西方向はほぼ垂直に近いという相違がある。裏込め部分から木棺内法規模は、南北約1.5m、東西約0.6m程度と想定される。木棺は腐植が著しく、残存した部分でも厚さ5mm以下であった。床面の状態から底板を直置きし、小口板をのせるタイプであると考えられる。内部からは頭位を南とした頭蓋骨と骨の一部を検出したが部位は不明である。頭蓋骨の東側約10cmの部分に径5cm程度の円礫を検出したが、頭部を支えるために使用されたと考えることができよう。また主体部調査時に北西から南東に走る上層の杭跡が検出され、うち1本は頭蓋骨を直撃している。
- 木棺**
- 人骨**
- 遺物** 遺物は東側周溝の南端に近い部分のほぼ底部に集中していた壺形土器2個体分の破片と南側周溝から出土した壺形土器の破片であるが、いずれも時期は弥生時代中期中葉に位置付けられるものである。また南側周溝からは板材と木片4点を出土した。板材は周溝底部から出土したもので、長さ65cm、幅40cmを測るものである。

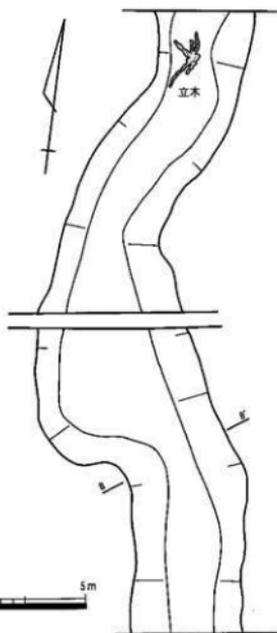
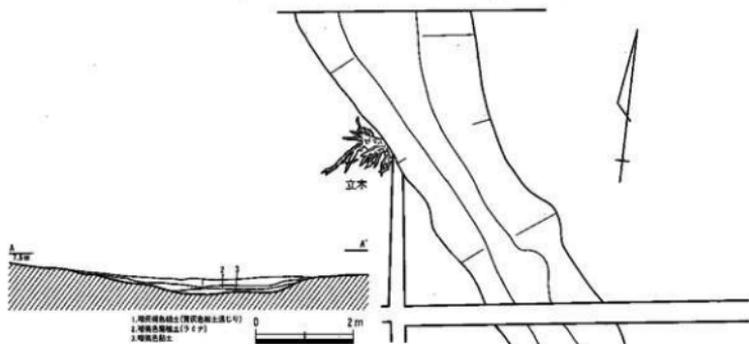
〈溝状遺構〉〔第161図、図版148〕

(1) SD71101

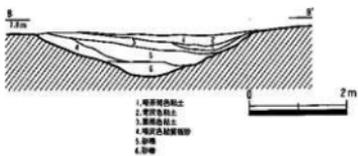
グリッドB～E49～51から検出された。幅約3.5～6.3m、深さ0.8～1.3mを計測する。底部の幅は狭く、非常に緩やかに立ち上がっていく。底から中層までは砂礫が厚く堆積し、上層は腐植土と暗褐色粘土が堆積している。遺物は覆土上層より弥生時代中期後葉以降と考えられる土器片を出土した。

(2) SD71102

グリッドB～E52～53から検出されたもので、緩やかにカーブを描きながら、南北に走る溝状遺構である。幅約3.5～6.9m、深さ約0.8～1.1mを計測し、非常に緩やかなU字型の断面を呈している。覆土はSD71101と同様に下層から中層にかけて砂礫が、上層に暗褐色粘土が堆積している。遺物は弥生時代中期以降に比定される土器片を出土している。



SD71101



SD71102

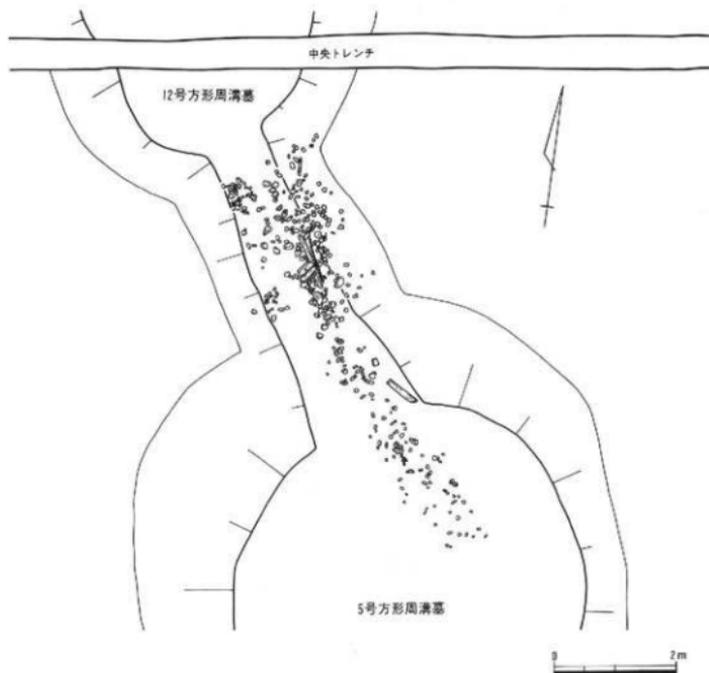
第161圖 溝状遺構突測圖

10層で検出された遺構 水田跡、杭列 (10 a層)、礫群 (10 b層)

〈水田跡〉 [第162・163・164図, 図版129・130・131・132]

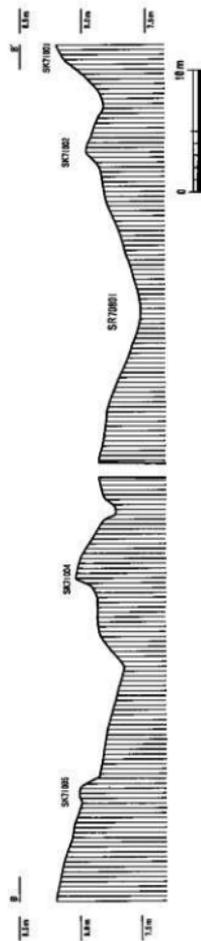
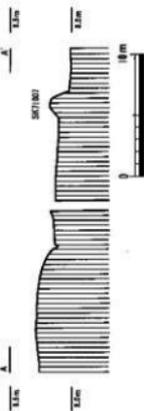
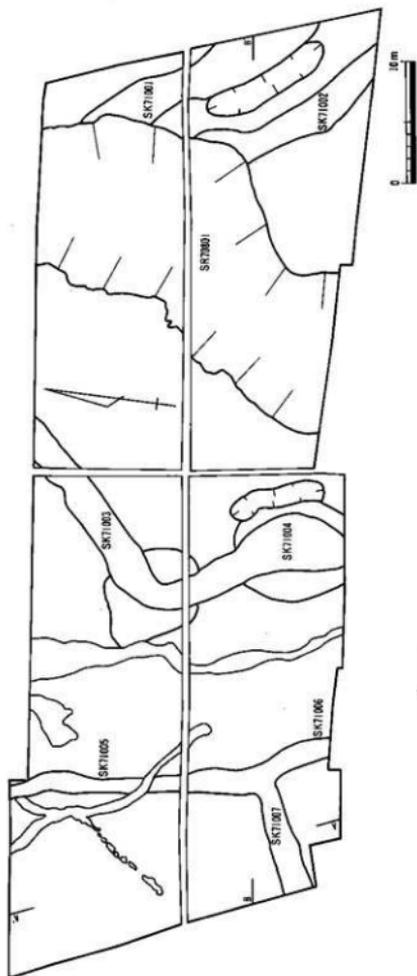
弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての水田跡である。この水田の下層は12層の方形周溝墓の構築により、地表面に様々な変化がある。シルト・砂礫からなる填丘部分の盛土、周溝から填丘裾部にかけての低位の部分に堆積した黒褐色粘土、12層上面に堆積した暗褐色粘質シルトである。10層で検出された水田はその不安定な地表面上に堆積した粘土層を耕作土として形成されている。この粘土層は径1mm程度の砂を均一に含む粘土層であるが、色調により10 a・10 b層の2層に分層される。水田耕作が行われたのは上層の暗褐色粘土層 (10 a層) である。畦畔6本を確認しているが、出土地点から東・中央・西の3つのグループに分けることができる。

(1) 東側グループ 東側のグループは約4mの間隔を持って位置する2本である。両畦畔とも後世の旧河川SR70801により、北西側が破壊されており、畦畔相互の関連は不明である。北側に位置するSK71001は幅2.5~4.0m、高さ約30cm、南側のSK71002は幅2.4~3.0m、高さ約20cmを計測する。両畦畔ともに径5~10cm程度の礫を含む暗青褐色粘土を台形に盛って成形しただけの簡単な構造である。両畦畔に挟まれた部分は12層上面の1号方形周溝墓の東側周溝にあたり、湿地化し耕作面になったと考えられる。



第162図 10 a層水田SK71004填丘接続部分平面実測図

(7区)



第169図 10a 層水田エレベーション図 (水平: 400垂直: 20)

(2) 中央グループ 中央の畦畔はグリッドE51・52付近で約150°の角度で「く」の字型に屈曲する。屈曲点から北側のSK71103はN63°Wで、幅約2.7m、高さ約20cmを計測するものである。杭の他に横板・敷板・敷石が密に用いられ、強固な補強がなされているが、構造的に3つのパターンが考えられる。北辺排水溝から約8mまでの部分では横板の両側に約10cm程の間隔で、角杭が打たれており、そのほかに建築用部材を転用した敷板が用いられている。それに続く約3mの部分では横板の使用はなく、杭と敷板及び円礫を敷石として補強している。次の屈曲点までの部分では若干の杭と敷板のみみられるものの、主体は礫である。この構造上の相違は地表面高と強い関連を持っており、田面が低くなる北側方向に向かい、補強が緻密になっている傾向を窺うことができる。SK71004は微高地上になっている下層の方形周溝基、5号方形周溝基と12号方形周溝基の墳丘を連結させて畦畔としたものである。5号方形周溝基の墳丘にあたる箇所からは敷板に用いられたと考えられる板材を1点出土したのみで、径5~10cm大の円礫が疎らに置かれているだけであった。12号方形周溝基も同じ様な傾向にあり、屈曲点付近には板材・礫が密集しているものの墳丘南側裾部に至るまでは土盛りだけであった。両墳基間を繋ぐ部分には板材・田下駄などを用いた敷板・敷石による補強が行われている。

(3) 西側グループ 西側のグループは南北方向2本SK71005・06とT字型に交差する東西方向の畦畔SK71107によって構成されている。幅約2m、高さ30cmほどの規模を持ち、内部は杭・横板などによる補強がなされている。3本の畦畔は内部の補強方法が異なるが、SK71005では横板と杭による部分、敷石が集中している箇所、敷板と礫による部分などに区分される。SK71006では杭と横板による基礎が作られている。SK71007は杭と横板を基本とするが、交差部分付近では敷石を使用し、また杭も密であるのに対し、6号方形周溝基の墳丘部分にあたる西側では8~10m程の間隔をあけて杭を打ち横板を渡す構造になっている。

10層を耕作土とする水田は下層の方形周溝基による地形の人為的变化を再利用することにより、区画が行われていたと考えることができる。耕作土が堆積した後も方形周溝基上は微高地として安定していたのに対し、周溝や墳丘裾部は湿地化し、耕作に適した部分となっており、その地形を生かして畦畔が形成されたが、そのことは、畦畔の構造上の相違となって顕著に現れている。

遺物は畦畔中及び耕作土中より壺形土器・甕形土器が出土している。長胴壺が1点混入しているが、その他は弥生時代後期後半から古墳時代前期の範疇に取まるものと判断しており、水田も同時期に位置付けたい。

<杭列>

SK71001の東辺から約50~80cm離れた場所から発見された杭列である。畦畔と平行に走るもので、30~70cm程の間隔で角杭が打たれていたが、SK71001に伴うかは不明である。

<礫群> [図版133]

10b層からは、グリッドC~E50~53の北西から南東の方向にかけて不規則に土中に浮いた状態で、多量の礫が出土した。下層の方形周溝基群中の5号基と12号基を中心とした部分に顕著であり、また12層の砂礫と類似しているため、墳丘上の礫が崩落し、水田耕作時に攪拌され散乱したものである。10b層内部からは弥生時代中期後葉の範疇に含まれる土器片が散在していたが、明確な遺構は発見されなかった。

人為的变化
の再利用

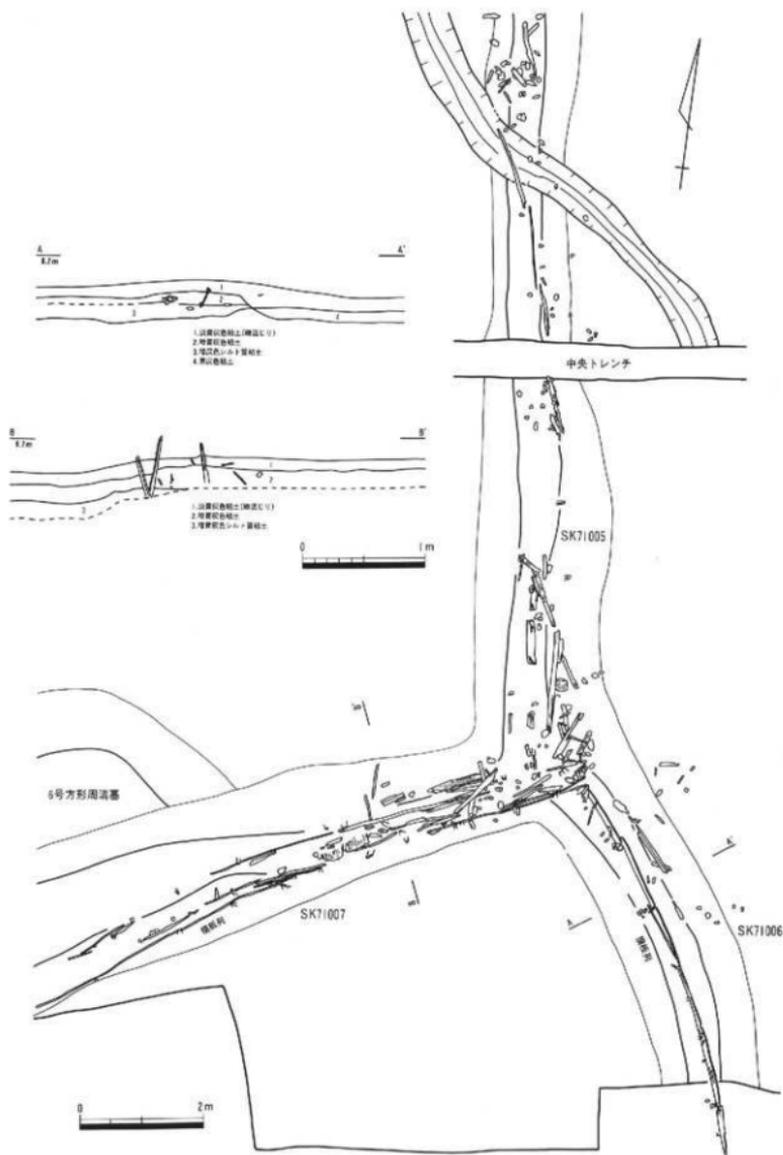
横板と角杭

杭と敷板
礫

墳丘の連結

墳丘間の補
強

補強の相違



第164図 10a層水田西側グループ畦畔実測図

9層中で検出された遺構 木道状遺構

〈木道状遺構〉〔第165図、図版128〕

泥炭質 10a層水田は、環境に変化があったのか、9層の泥炭質の強い暗茶色腐食混じり粘土に被覆される。ヨシ類が長い間密生して繁茂していた時期であったのだろう。未分解の植物や泥炭質が20~25cmの厚さをもって堆積している。2区及び5区では、同時期の泥炭質土壌上層部から多量の土器が出土しており、7区でも土器片を含め、鉄鍬や環が出土している。部分的に遺物を含有しているが、自然堆積で、遺構は存在しないと考えていたが、調査区西隅のグリッドE・F54列で木道状の遺構が検出された。これは、調査区西端の8号方形周溝墓の墳丘の高まりから北方向へ、木を敷き並べるように設置されている。前述した10a層の遺構は9層の直下で、杭及び横板を伴う畦畔をもつ水田遺構であるため、当初はこの杭列の一部、または杭列が崩壊した残骸とも考えたが、以下の点で杭列との相違があり、他の性格の遺構と考えた。

水平に敷いた木材

- (1) 水平に敷きならべた木材のみであり、伴う杭は1本もない。
- (2) 木道状遺構の木材は9層最下部、ほぼ10層上面とも言えるが、10層より若干深い。 (10層杭列の横板及び敷板は10層中または、畦畔の盛土の中に中に埋め込まれた状態で検出)
- (3) 10層からは、4世紀代のものと考えられる甕の破片が出土しているが、木道状遺構を検出した本層からは高坏を中心とした5世紀頃の土器が出土していることから時期差がある。
- (4) 木道状遺構と10層水田の杭列畦畔とは調査区北隅で交差するが、その後の方向がずれてしまう。
- (5) 10層杭列の横板及び敷板に比べ、材が厚い (木道状遺構の材は、板というより、角材及び丸太材といえる)

角材・丸太材

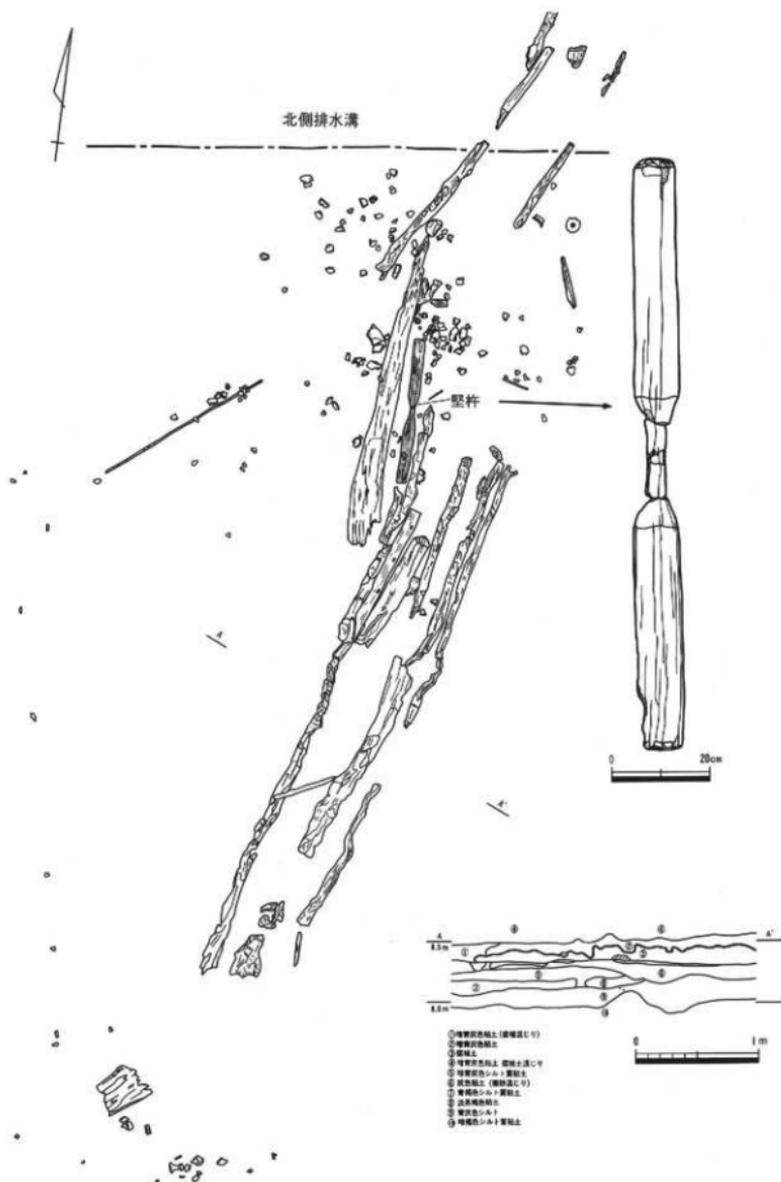
木道状遺構は南方向はグリッドE54で終息し、北方向は調査区外へ延びているとみられ、

建築材転用

長さ7.8m、最大幅約80cmを計測する。使用している材は、建築材の転用が多く、2列に敷いた形跡が窺える。また、長さ1.2mの完形の堅杵が材の間より出土した。

堅杵

本遺跡西半部の各区でも、9層に対応する泥炭質土壌層中よりこうした木道状遺構が検出されている。その目的・用途については、湿地帯における交通路であるか、水田区画に伴うものであるかは不明である。西端部の10区では木道が一定の区画を示すことから水田に伴うものという推定をしているが、本区では木道が直線的であり、盛土や杭列も検出できなかったことから水田区画の可能性は低いと考えられる。



第165図 9層木道状遺構実測図

8層上で検出された遺構 水田跡 流路

<水田跡> [第166図, 図版123]

9層の泥炭質化をもたらした湿地上に、再び水田耕作が行われるようになっていった。8層水田から出土した土器類から明確な年代を導き出すことは難しいが、古墳時代後期から奈良時代の長い時間で捉えたい。この水田域は調査区東部に限られるが、6区13層水田域につながるものと考えられる。水田は7層水田による攪拌を受け、SR70801以西では検出されなかった。SR70801の両岸からは溝およびピットを検出している。

6区13層

大規模畦畔

小規模畦畔

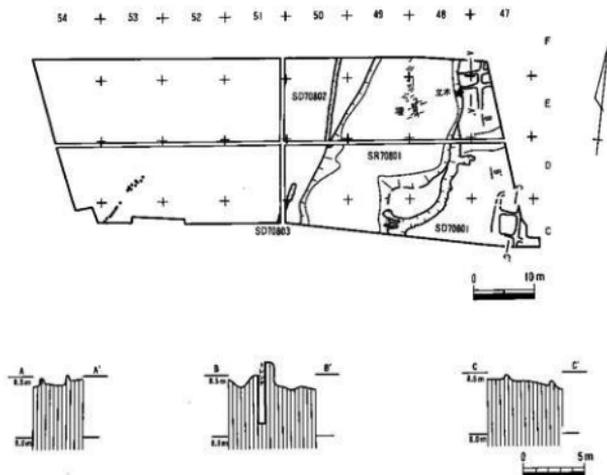
小規模区画

西側に枕列

漸移的变化

水田を構成している畦畔は、下端幅2.5~2.8m、高さ10~15cmを計測する大規模な畦畔SK70801と下端幅50~60cmの小規模な畦畔7本である。畦畔はいずれも杭を伴っていない。明確に水田区画が検出できたのは小規模な区画1面のみで、面積は約8㎡を計測し、ほぼ正方形であると推定される。足跡や水口は検出されなかった。グリッドC・D53列において北東から南東にかけて走行する長さ約12mの枕列を検出したが、周辺では水田区画の検出が不可能であったため、共存するものであるかは明らかにできなかった。

出土遺物は、SR70801以西のグリッドD54・E54で付け札状木製品3点、グリッドD50で奈良時代とみられる復元可能な須恵器環1点が出土している。土壌としては上位から下位にかけてシルトから粘土へ漸移的に変化しており、部分的に上面に砂が被覆している砂とシルトの境に若干の凹凸があるもののほぼ直線的であり、またシルトと粘土は漸移的变化であるため、明確な分層は困難な状況であった。



第166図 8層水田エレベーション図 (水平1:400垂直1:40)

〈流路SR70801〉〔第167・168・169・170図，図版123・126・127〕

SR70801は、8層上面より約1.1mの深さがあり、12層の砂礫まで達している。最大幅は18.6m、最小幅は約13mを測る。調査区内で検出した長さは30mで、主軸はほぼ南北を向き北から南へ底の比高差約0.5mで低くなっている。限られた範囲での検出であるが、河床約5/300の急勾配であり、本河川が急流だったことは想像に難くない。

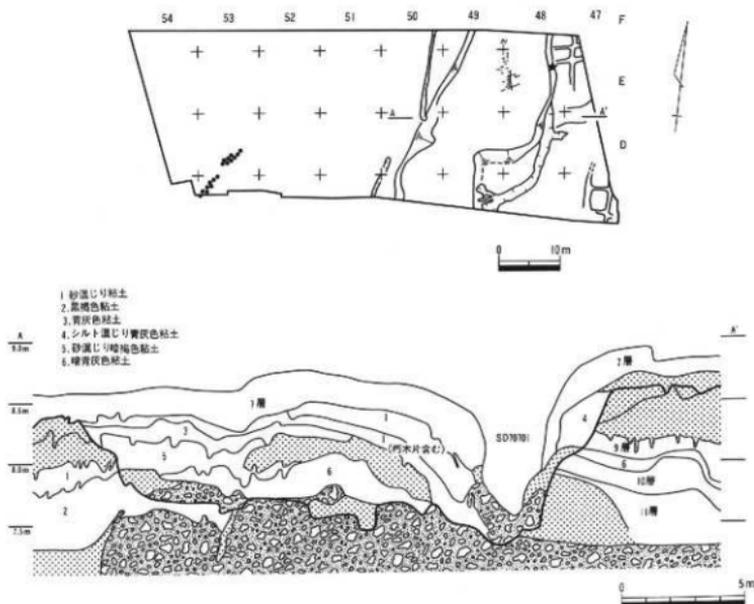
SR70801の川底に堆積した砂礫の上層の砂層からは縄代の他、奈良時代のもと考えられる須恵器の長頸瓶・刀子・齊串・挽物・曲物の蓋・垂木などの建築材・田舟・杭などの多種多様な遺物が出土している。SR70801の南側では左岸（東岸）が若干張り出しており、この張り出し部においては、8層上面から古墳時代後期のものと考えられる土器群が出土している。時期幅の大きい土器の出土や河道の形状から、長期間にわたって様々に河道を変えて流れていた流路であると考えられる。SR70801からは縄代を伴う堰が検出された。それらの遺構が8層水田と同時期のものであるか、河川からの検出であるため、断定が困難であるが、その可能性は十分に考えられるところである。以下、それらの遺構についてふれてみたい。

急勾配

多種多様な遺物

張り出し部

河道の変化



第167図 8層SR70801断面実測図

〈堰状遺構〉

2 列 堰状遺構はSR70801の上流側で、2列検出した。河道の変化に応じて構築されたものであろう。両遺構が同時期に存在していたかについては断定はできない。

(1) 1号堰・網代 [第168図、図版125]

方 向 調査区の北辺部のグリッドF48・49列で検出され、流路の中心よりやや西寄りに構築されている。流路の主軸に対してほぼ直角の85度の角度をもち、全長約1.8mを計測する。観察できる丸太杭は8本である。堰は水位を上昇させる役目を持たせていたのか、下流が高く、上流側が低い。しかし覆土や土厚によって圧縮され、標高差はわずかである。堰をはさんで、上流側には流木や枝材、下流側に建築部材を転用したと思われる幅約12cm、長さ1.6mの杭や板材などが散乱している。

網 代 網代は川底の標高より約40cm高い位置にあり、下流側の堰高がわずかに高い。網代本体は長辺約2m、短辺約80cmの長方形を呈し、直径5mm程のヨシまたは割竹を5～7本組み合わせて1単位を作り、網代編みにしている。材と材の間に隙間はなく堅牢な作りである2枚以上重ねている可能性もある。

丸太材には、径6～10cmの丸太材が川底に対し、斜めに組まれ、支えている材も太く、水流に耐えられるような構造となっている。なお、網代を現状で保存するため、背丸太材ごと発泡ウレタンによる梱包、取り上げを実施したため、断面図等については作図不可能であった。

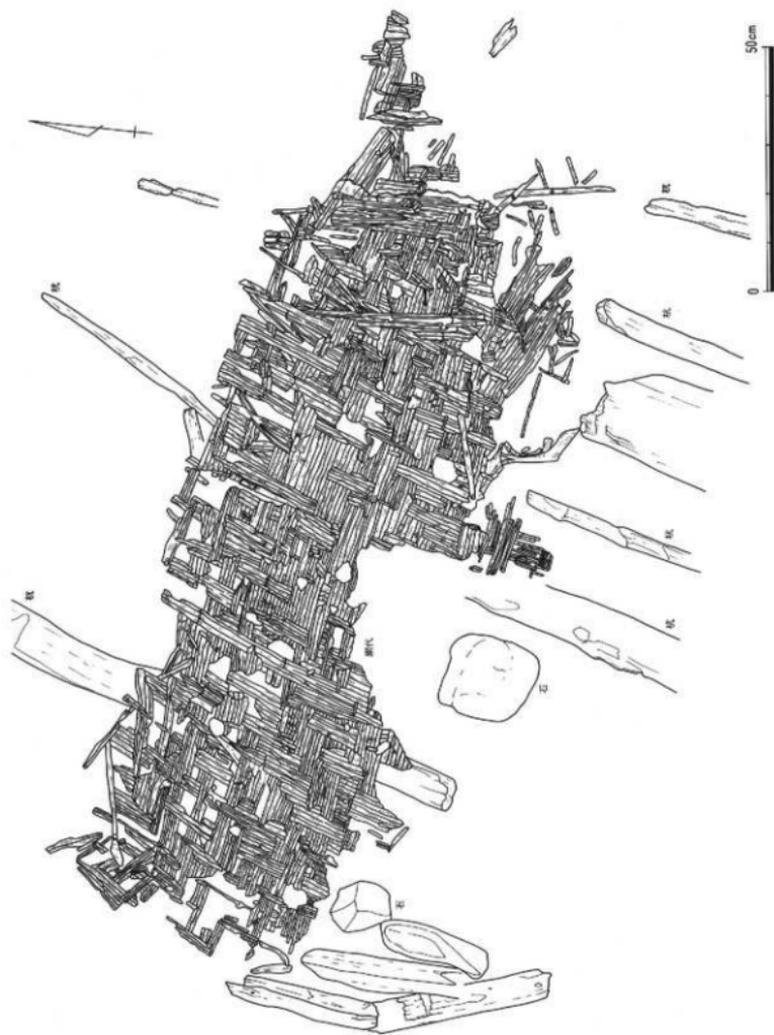
(2) 2号堰 [第169図、図版124]

方 向 グリッドE48の西側で検出し、ほぼ川の中心に位置している。川に対して32度の角度で構築されている。1号堰よりの距離は南方に約7.5mで、やや東寄りに位置し、2号堰の軸方向を延長すると、1号堰の東角にぶつかる。検出した標高は川底に近い。堰の上流側は木材などが散乱している状況はないが、下流側は長さ約30cmの杭や枝材が多数出土している。

合 掌 形 堰の形態は合掌形で、その上流側に簾を張りつけてある。簾の材は不明であるが、おそらくヨシなどであろう。それを幅20cmを1単位として、縦方向に、5cm程の厚さに敷き並べてある。敷き並べた方向は縦方向が大部分で、若干斜めのものがあるが、完全に直交する方向のものはない。

杭は直径6～8cmの丸太杭を使用し、横木が杭の上端から3分の1のところから1本掛け渡されている。横木は全長3.4mを計測する。それより上には簾は検出されなかった。横木を軸に垂れ下げた形態であったのだろう。構造は簾を下流側を高く、上流側が低くなるように斜めに取り付けられている。

2号堰の延長上にSD70801が存在することからみて、導水の役割をもっていたと推定される。



第168図 8層SR70801内1号埋藏物測図



第170図 8層SR70801内遺物出土状況実測図

〈溝状遺構〉

(1) SD70801 [第171図]

バイパス状 SR70801の左岸、岸が張り出した部分にバイパス状に掘削されている。上端幅約1.5m、下端幅約1m、深さ30~40cmである。総延長は約22mで、比高差30cmの勾配で北から緩やかに下がっていき、出水口の手前約3mで急に20cm程下がって再びSR70801に注いでいる。覆土は、微砂混じりの暗褐色粘土及び暗青灰色粘土と砂であり、腐植物や炭化物の粒子を含んでいる。鬼高式土器並行とみられる古墳時代後期の横俵塚が出土している。また網代の破片も出土している。

(2) SD70802 [第171図]

覆土 SR70801の右岸に、流路に対して20度の角度をもって南北に掘削されている。南端は、流路に接する直前で直角に東に曲り流路に合流しており、北側はそのまま区外へ延びている。上端幅55~60cm、下端幅35~45cm、深さ30~40cmである。長さは14m、検出レベルはほぼ水平であるが若干北から南へ下っている。覆土のほとんどが砂で青灰色粘土が下部に堆積している。溝からは、古墳時代後期の土師器が出土している。また、溝の両側および溝を切る形で計5つのピットが検出されている。炭化物・暗褐色粘土が覆土であるが、性格は不明である。

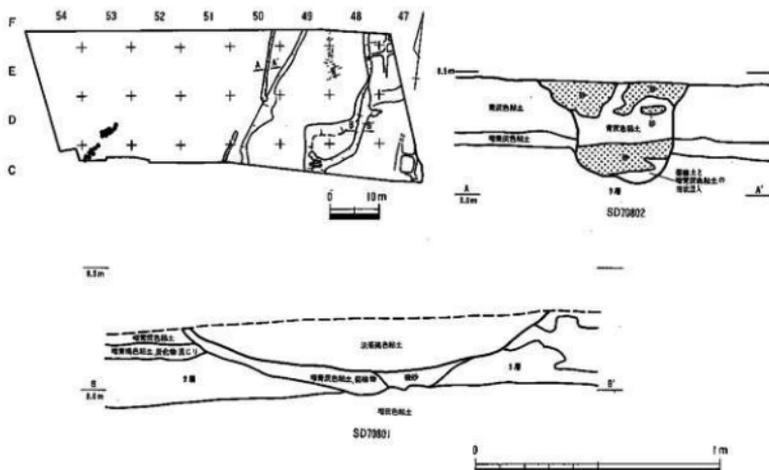
溝脇ピット

(3) SD70803

SR70801の右岸に南北に掘られている。南は区外へと延び、北端は途中で切れ、流路には注いでいない。SD70802とSD70803は覆土、形状とも同様のものではあった。

〈流路状遺構 SX70801〉 [図版125]

グリッドD・C48で検出された遺構で、複雑に湾曲した形をしており、深さは20~30cmを計測する。SD70801に切られている。覆土は粘土混じりの青灰色シルトで、部分的に砂が堆積している。覆土中から駿東壺とみられる壺の頸部、胴部が出土している。



第171図 8層SD70801・70802土層図

(7区)

7層上で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉〔第172図, 図版121・122〕

7層水田の土壌は暗青灰色粘土で、厚さ150cmに及ぶ砂礫（6層）に被覆されており、分層が明確にでき、検出は容易であった。同層は調査区内西部及び中央部に砂礫によって挟まれた洪水痕跡が南北に走っている。調査区東半部には周囲に自然堤防状の微高地を伴う水路がクランク状に走行している。大規模な畦畔を2本、小規模な畦畔を約20本検出した。水口と考えられる遺構は小規模な畦畔の交差部で3ヶ所検出した。

砂礫被覆
洪水痕跡
水口

（1）大規模な畦畔SK70701

SK70701は調査区北西部を北東から南東に走行し、下端幅1.7m、高さは20～30cmを計測する大規模な畦畔である。グリッドE52では立木の跡が検出されている。グリッドE53で洪水痕跡により寸断されている。この畦畔を延長すると、隣接する8区13層水田のSK81301と調査区の南方で交差するとみられ、静岡平野北部にみられる条里型地割の方向にほぼ一致している。

立木
条里型地割

（2）大規模な畦畔SK70702

SK70702は調査区中央を北西から南東にかけて走行し、下端幅は2.7mを計測する。北方の調査区外でSK70801と直交すると考えられる。グリッドE50付近で水路SR70701が周囲の微高地と直結してしまうため、明らかな畦畔はそこで終息してしまうように見える。グリッドD・C50付近の微高地は湾曲しており、複雑な様相を呈している、SK70702が変形肥大しているように見える。

畦畔の変形

（3）その他の畦畔と区画

小規模な畦畔は下端幅平均75cm、高さ5～10cmを計測する。しかし畦畔の走行状態はさまざまである。調査区北西部であるグリッドE・F53・54の部分は基軸であるSK70701と方向性を同じくする。この部分の交差部では亀甲形を呈しており、8区13層水田と類似している。また、北西方向から南東にかけて畦畔を境に段階的に低くなり、棚田状の様相を呈する。一方、調査区中央の小規模な畦畔は規格がみられず、SK70702から扇状に畦畔が延びる特徴がみられる。SK70702が地形的制約を受けた結果、区画も変化せざるを得なかったのだろうか。

亀甲形交差
棚田状構造
地形的制約

〈水路SD70701〉〔第173図〕

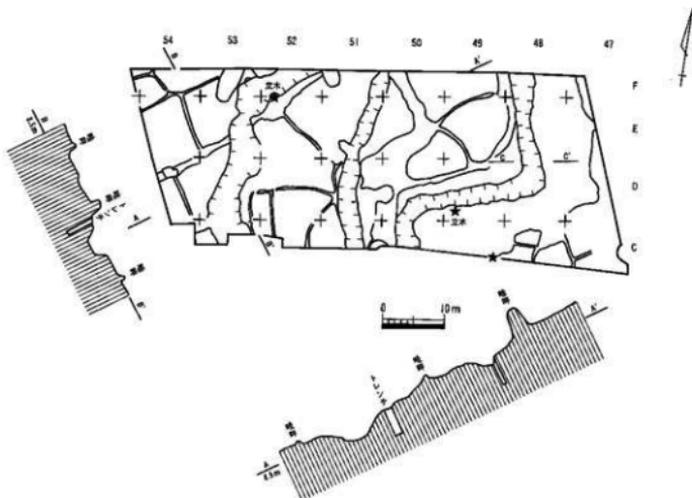
8層水田の項で述べた流路SR70801はその後、徐々に川幅を狭めていき、両岸に砂礫の堆積を見るようになり、広い自然堤防の微高地を形成している。SD70701はSR70801の最終的な河道を利用した水路であり、幅約10m、深さ約50cmを測る。覆土は砂であった。微高地の南側には、数本の立木の痕跡があった。

広い微高地
立木

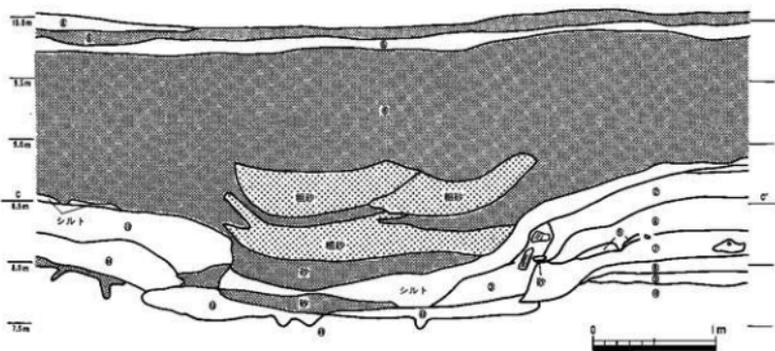
〈出土遺物〉

灰軸陶器・土質質の坏などが出土しているが、詳細な年代を明確に決定しうる遺物は少ない。SD70701内の砂層中からO-53窯式と考えられる灰軸陶器が出土していることから7層の時期を平安時代の幅の中で考えたい。

灰軸



第172図 7層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①. 暗青褐色粘土(朽木片含む) ②. 暗黄灰色粘土(朽木片含む・自然堆積層) ③. 白土の中層(細砂混じり) ④. 茶褐色粘土・凝結粘土(くずれ落ちて水中にあった感がある) ⑤. 黄(緑)灰色粘土(自然堆積層) ⑥. 明緑(黄)灰色粘土 ⑦. 砂混じりの② ⑧. 暗褐色粘土の層に黒地と黄灰色粘土がブロックでまじる ※ ③層か?・自然堆積層 | <ul style="list-style-type: none"> ⑨. 洪赤灰色粘土 ⑩. 砂混じり黒褐色粘土(1層か?) ⑪. (野)灰色砂(しまり強, 自然堆積層) ⑫. 砂層 ⑬. 粘土混じり砂層 ⑭. 白土同一層(⑬よりしまり強く腐植層が多い) ⑮. 砂混じり茶褐色粘土(朽木片含む) ⑯. 白土質 ⑰. ⑯は自然堆積層 |
|---|---|

第173図 7層SD70701断面実測図

2層中で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉

7層水田が経営されていたある時期、本区は再び洪水に襲われることになったようで、部分的に礫が混じる厚さ約1mの砂層で7層水田は覆われてしまう。隣接区の6区では厚さ1.5mに及ぶ砂礫層が形成されており、その洪水流の末端が及んだものであろう。この洪水流が運んだ砂層の上に粘土質の土壌が堆積し、ふたたび水田耕作が行われるようになったのだらう。2層は暗青灰色粘土であり、管鉄が密に集積している。3層は2層より暗い色調ではあるが基本的には2層と同一土壌である。西半部が攪乱により消滅しているため、遺構の確認は中央部から東半部にとどまった。

(1) 杭列 [第174図, 図版119・120]

グリッド49・50列で北東から南東に走行する2列の杭列を検出した。畦畔の痕跡と考えられる。東に隣接する6区5層水田でも南北方向の畦畔に密集した杭列が伴っていた。調査区内での長さは約35m、2列の杭列の平均的な幅は60cmを計測する。北方向は調査区外に延びているとみられるが、南方向はグリッド48における攪乱で、形態を把握できなかった。

杭列に用いられている木材は杉材とみられ、長さは1mに満たないものがほとんどである。建築材を転用したと推定される。杭の打ち方には規則性がみられ、ほぼ等間隔に打たれている。幅40cmごとに長さ60~80cmの長さの杭を打ち、その間に長さ30~40cmの短杭を打ち込んでいる。杭がほぼ垂直に打たれているのも特徴である。杭は全体で500本近くを数えた。

杭列に平行及び直角に切るトレンチを設定し、側面・断面の観察を行った結果、杭列の両側幅1~2mに砂層が堆積していることが確認された。この砂層は杭列周辺以外にはない。砂層の上面及び中からは多量の木片が出土しており、多くは木切れや枝であり、杭も目立つ。これらの木片等は人為的に敷きつめた形跡はなく、状況としては杭列周辺に散在している状態である。木片を含む砂層が人為的に敷きつめたものかどうかは即断を許さない。また、2列の杭列の内側には砂混じりの粘土が存在し、外側とは異なった堆積を示している。畦畔内部に粘土を詰めた状況を示しているのではないだろうか。4層下部には部分的に砂礫が堆積しており、打ち込まれた杭は4層上位の砂層は突き抜けているが、下位の砂礫層までくいこんでいる杭はほとんどない。

畦畔の構築状況は杭を打ち込んだ後、杭の内側に土を埋め込んだものと思われる。2層より4層まで掘り下げ、4層(黒褐色粘土)上面では精査も実施したが、部分的な堆積にとどまり遺構の確認できなかった。

(2) 出土遺物

年代を明確に決定しうる遺物は出土しなかった。検出面の下層の4層中より、輪かんじき型田下駄の足板と曲げ物の一部および種子(桃か)が検出されている。隣接区との対応関係と下層の調査結果から、中近世に営まれた水田であると考えられる。

土 壤

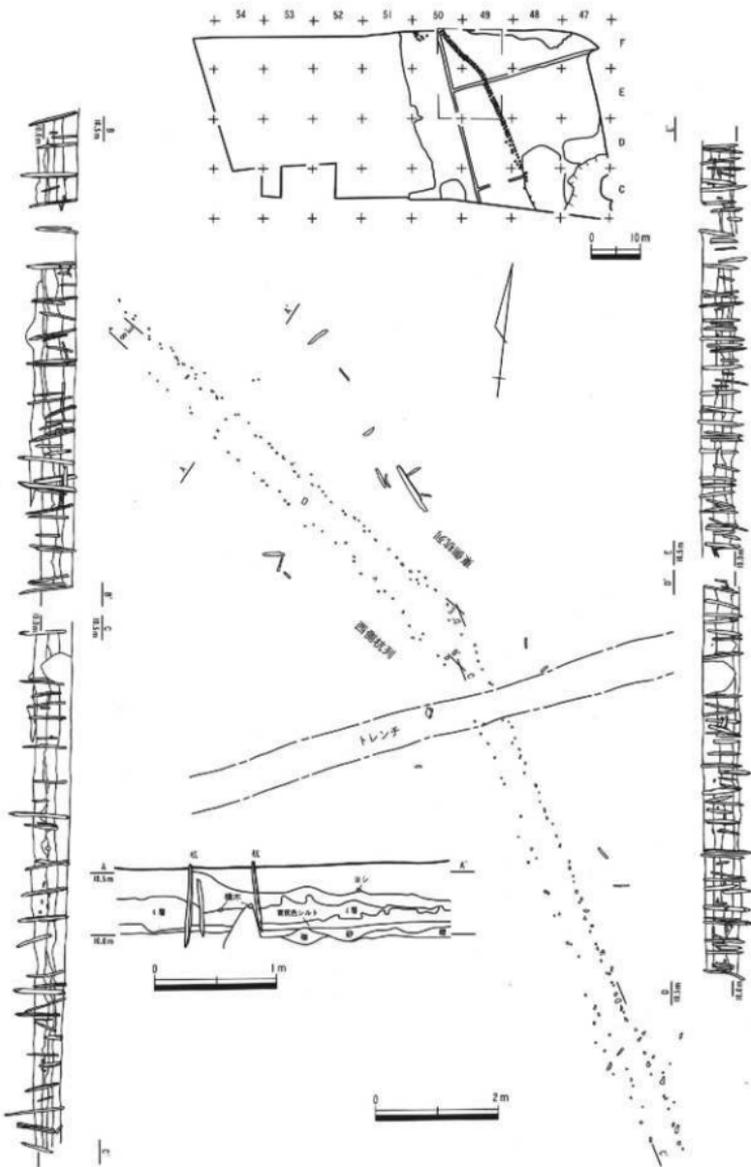
畦畔の痕跡
6区5層

規 格 性

杭周囲の砂

杭間の寄土

畦畔の構造



第174図 2層杭列実測図

水田計測表 (7区 10層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.05	—	—	—	—	浸食・一部区外
2	7.90	—	—	—	(2.5)	大
3	7.76	—	—	—	—	狭
4	7.70	—	—	—	—	狭
5	7.95	—	—	—	—	区
6	8.20	—	—	—	—	面
7	8.00	—	—	—	—	

水田計測表 (7区 8層水田)

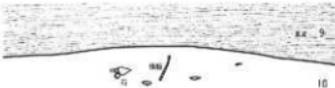
No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.45	—	—	—	—	一部区外
2	8.44	—	—	—	1.5	
3	8.50	—	—	—	—	
4	8.42	—	—	—	—	
5	8.42	—	—	—	1.5	浸食
6	8.49	—	—	—	—	
7	8.43	—	—	—	—	一部区外
8	8.31	—	—	—	—	
9	8.43	—	—	—	—	
10	8.42	8.4	長方形	3.2	2.3	
11	8.35	—	—	—	—	一部区外

水田計測表 (7区 7層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.92	—	—	—	—	一部区外
2	8.84	—	—	—	—	
3	8.67	—	—	—	—	
4	8.67	推 31.3	台形	6.7	3.2	浸食
5	8.59	—	—	—	(6.0)	一部区外
6	8.62	—	—	—	(3.8)	
7	8.57	6.0	四辺形	3.2	2.1	菱形
8	8.51	—	—	—	—	一部区外
9	8.78	—	—	—	(11.8)	
10	8.66	71.0	扇形	—	(10.0)	菱形
11	8.61	43.8	台形	9.1	2.9	
12	8.60	—	—	—	12.9	浸食
13	8.59	—	—	—	—	
14	8.66	—	—	—	—	
15	8.58	—	—	(19.0)	—	
16	8.54	—	—	9.4	—	一部区外
17	8.62	—	—	(5.8)	—	
18	8.62	—	—	—	—	
19	8.49	—	—	—	2.8	
20	8.52	—	—	—	—	
21	8.66	—	—	9.2	—	
22	8.68	—	—	—	—	
23	8.82	—	—	—	—	
24	8.65	—	—	—	5.5	浸食
25	8.90	—	—	—	—	一部区外
26	8.93	—	—	—	3.9	
27	8.82	—	—	—	9.8	

第54表 7区水田計測表

瀬名遺跡 7区 10a層水田(時期 弥生時代末～古墳時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	本道跡のほぼ中央に立地しており、隣接区の6・8区とは現用の道路によって分かれている。
	② 地形面の変化	北から南にかけての傾斜が認められるが、東西方向は下層の方形周溝墓の墳丘・周溝の影響から傾斜は顕著でない。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域にわたり検出されるが、東側は旧河川により畦畔・水田ともに破壊されている。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	20～25cmの厚さをもつ腐植土層によって覆われている。この土層からは土器片の他鉄線・環が出土している。
	⑤ 水田土壌	白色砂・小礫を含む粘土層だが、色調により、a層、b層に分層される。a層は暗茶灰色粘土、b層は暗茶褐色粘土である。10b層と11層の間には漸移的变化が認められる。
	⑥ イネのプラントオパール	<C46地点> <C53地点> 0個/8 800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	直下は11～12層となるが、11層は12層を掘りこんで構築された方形周溝墓の周溝に堆積する黒褐色粘土である。12層は礫層であるが、その上部には暗褐色粘質シルトが10～20cmの厚さで堆積している。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔は下端幅2～4m、高さ20～40cmだが、盛土だけのものと、杭・横板などの補強材をもつものがある。下層の方形周溝墓のマウンドをつないだ畦畔が検出された。
	⑨ 畦畔の構造	5本の畦畔のうち、3本に杭・横板などの補強材が打たれている。最も東側にある畦畔(SKT1002)の東北部に杭列があるが、位置のずれがあるため畦畔に伴わない。
	⑩ 水田区画の方法	西側のグリッド53・54は南北1本、東西1本の畦畔がT字型に交差する大きな区画であるが、他の部分は主軸方向が異なるため、不明である。
	⑪ 水田区画の形	長方形が基本と考えられるが、四周が検出できた区画がないため、大きさ・形にも不明。
	⑫ 枚数と面積	枚数・面積ともに不明。
用排水の状態	⑬ 水源	不明。
	⑭ 自然流路	なし。(SR7010a1は洪水による一時的な自然流路)
	⑮ 水路	検出できず。
	⑯ 水口	検出できず。
遺物	⑰ 遺物の種類	畦畔内部より杭の他、建築部材・田下駄・四又鎌(鋤)、耕作土および田面より土器を出土している。
年代観	⑱ 年代推定の根拠	10a層出土の土器から推定した。
	⑲ 隣接区との対応関係	6区16層 8区17a層
その他	⑳ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉑ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 腐植土層に被覆される形で検出された。畦畔の内部構造および高まりによって認定される。

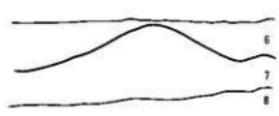
第55表 7区水田観察表1

瀬名遺跡 7区 8層水田(時期 奈良時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	本遺跡のほぼ中央に立地しており、隣接区の6・8区とは現用の道路によって分かれている。
	② 地形面の変化	全体的には南へ傾斜しているが、7層で検出した洪水流路の痕跡部分およびS R 70801付近は標高がわずかに低くなっている。南北方向10cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区東半のグリッド47列で検出した。面積135㎡。西半は7層の耕作が及んだためか、削平され検出することができなかった。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	7層。暗青灰色粘土。耕作土と考えられる。
	⑤ 水田土壌	暗緑(青)色粘土(上位から下位へシルトから粘土へ変化する。)
	⑥ イネのプラントオーバー	<C53地点> 800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	9層。暗茶色腐植混じり粘土(泥炭質土壌)。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔S K 70801は下端幅2.5~2.8m、高さ10~15cmを計測する。小規模な畦畔は7本検出され、下端幅50~60cmを計測する。
	⑨ 畦畔の構造	盛土による畦畔と考えられ、検出した畦畔については杭列等による補強は認められなかった。グリッドD・C47列で、北東から南西にかけて走行する杭列を検出したが、水田に伴うか不明。
	⑩ 水田区画の方法	小規模な畦畔の方向はほぼ真北を指向する。
	⑪ 水田区画の形	大規模な区画は不明だが、小規模な区画は長方形が基本であると推定される。
	⑫ 枚数と面積	11枚以上と推定される。面積が確定できたのは、小規模な区画の1面で、約8.4㎡を計測する。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	ほぼ平坦な面で、足跡および農具による痕跡などは検出されなかった。
	⑭ 水源	流路S R 70801から供給されていたと推定される。
	⑮ 自然流路	S R 70801は幅13~19mを計測し、長期間にわたって流れていたと考えられる。
	⑯ 水路	水田に伴うものか不明であるが、S R 70801内に2基の堰状遺構を検出した。2号堰の延長上にS D 70801が存在する。
年代観	⑰ 水口	検出できず。
	⑱ 遺物の種類	付け札状木製品・古墳時代後期の土師器の横楕円、S R 70801内から古墳時代中期から奈良時代段階の甌や環などの土師器、壺・高坏などの須恵器が出土した。
その他	⑲ 年代推定の根拠	8層中から出土した須恵器・土師器の示す年代から推定した。
	⑳ 隣接区との対応関係	6区13層の小規模な区画の水田。
遺構確認面とその図	㉑ 自然科学的分析	
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	<p>(模式図)</p>  <p>(説明)</p> <p>7層の耕作土が被覆をしていたが、8層は上位がシルト質であるため、7層の暗青灰色粘土とは分層が可能であった。土層断面観察による畦畔の盛り上がりから遺構として認定した。</p>

第56表 7区水田観察表2

瀬名遺跡 7区 7層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	本遺跡のほぼ中央に立地しており、隣接区の6・8区とは奥用の道路によって分かれている。
	② 地形面の変化	全体的には、南へ傾斜している。田面の標高は9.7mを計測する。東西方向は調査区中央の洪水流による痕跡の部分の標高が低く、調査区東は標高9mを計測する。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出された。面積約2000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	厚さ150cmに及ぶ砂礫(6層)に被覆されている。調査区西部および中央部には洪水によって削られた痕跡が南北に走行する。
	⑤ 水田土壌	暗青灰色粘土。
水田の状況	⑥ イネのプラントオパール	<C46地点> 3,600個/㍎
	⑦ 直下の層の土壌	暗緑(青)粘土。耕作土。上位から下位へシルトから粘土へ変化する。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔が2本、小規模な畦畔が約20本検出された。大規模な畦畔S K70701は北西から南東にかけて走行し、下端幅約1.2~1.5m、高さ20~30cmを計測する。大規模な畦畔S K70702は下端幅約3mである。小規模な畦畔は下端幅75cm、高さ5~10cmを計測する。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみによる畦畔、杭列などの補強は認められない。
	⑩ 水田区画の方法	西半部は条里型水田の区画を思わせるものであるが、東側は埋没河川を利用した水路があるため、畦畔の走行が規則的ではない。大規模な畦畔の方向は、条里型地割に対応しているようであった。
	⑪ 水田区画の形	調査区西半部の畦畔の交差点は亀甲形を呈するが、調査区中央から東半部の畦畔は扇状に走行し、交差点は放射状を呈している。
	⑫ 枚数と面積	27枚以上と推定される。面積が確定または推定できたのは4枚で最大71㎡、最小は6㎡を計測する。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	足跡が田面を中心に検出されたが、明確な歩行状態を示すものではない。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然水路	洪水痕跡が2ヶ所で検出された。(6層の洪水流の際に7層水田の地形の低い場所を削って流れたと考えられる。)
	⑯ 水路	東部に埋没河川を利用したS D70701がクランク状に南北に走行する。(取水口は検出できなかったが、人工的に掘削しているところから、水路と考えられる。)
	⑰ 水口	畦畔の切断部分を3ヶ所検出した。
遺物	⑱ 遺物の種類	灰胎陶器(O-53窯式)。 泥よけ。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	層中より出土した灰胎陶器が示す年代から推定した。
	⑳ 隣接区との対応関係	8区13層水田等、瀬名遺跡全体に広がる条里型地割の水田域の一部と考えられ、大規模な畦畔は境界線にあたるのであろう。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 明確な畦畔の盛り上がりがあり各トレンチの土層断面で観察できた。被覆土壌が洪水流による砂層であるため、畦畔の現存状況は良好であった。プラントオパールの数値も7区では最高値を示す。以上の2点から認定をした。

第57表 7区水田観察表3

瀬名遺跡 7区 2層水田(時期 中世~近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	本遺跡のほぼ中央に立地しており、隣接区の6・8区とは現用の道路によって分かれている。
	② 地形面の変化	東西方向はほぼ平坦であるが、南北方向は南に傾斜している。30cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区西半分は攪乱により消滅しており、東側1,400㎡を検出した。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	表土以外に建築廃材が土中深く埋め込まれており、調査区東半で地表下約1.2m、西半で約2mは攪乱している。
	⑤ 水田土壌	暗青灰色粘土(管鉄が密に見られる)。
	⑥ イネのプラントオパール	<C46地点> 1,000個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	3層灰褐色粘土。4層黒褐色粘土。5層暗灰褐色粘土。
	⑧ 畦畔の規模	畦畔の盛土は攪乱により消滅しており、南北に走行する間隔約60cmの2列の杭列を検出した。
	⑨ 畦畔の構造	盛土畦畔に杭列で補強していたと推定される。
水田区画の状況	⑩ 水田区画の方法	区画は杭列が1方向のみなので不明。 盛土による畦畔。杭列の高側幅1~2mおよび4層(黒褐色粘土)の上面に砂が堆積している。 砂の上面から多量の木片が出土している。数きつめたものではなく、ばらまいた状態である。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	平坦で顕著な特徴は認められない。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
遺物の状況	⑯ 水路	不明。2層水田に伴うものではないが、近代になって構築された暗渠も共に検出した。
	⑰ 水口	なし。
遺物	⑱ 遺物の種類	下層の4層より輪かんじき型田下駄の足板が出土した。他に曲物、種子(桃)、陶器片が出土している。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	年代を決定する遺物が出土していないので隣接区との対応関係から推定した。
	⑳ 隣接区との対応関係	6区5層水田 8区6層水田
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 
		(説明) 杭列は東西に各1列ずつ存在する。盛土は失われていたが、2列の杭列が平行に走行することから、畦畔を補強していた杭列と判断した。杭は総数で500本近くを数えた。以上のように残存していた遺構から認定した。

第58表 7区水田観察表4

第6節 8区において検出された遺構

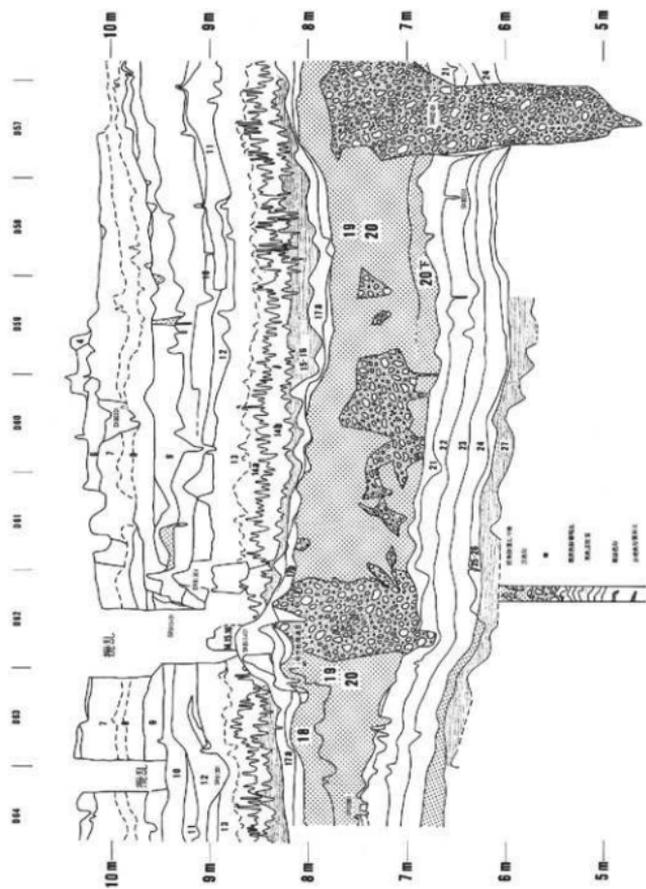
1. 基本層序

8区の基本層序は昭和62年度(1988年3月)に行われた試掘の結果によっている。その際には現地表面(海拔約11m)より下約6mまで確認し、36層の区分をしている。調査においてはその区分を踏襲した。地表面は客土がされており、多少、攪乱されている地点もある。地表面下約4.5mの洪水による砂礫層を挟んでいるものの、比較的穏やかな堆積状況を示す。天城山より降灰したカワゴ平パーミス、富士山の噴火により降灰した大沢スコリアは8区においては地表面下約5mの27層の黒色粘土層で認められる。降灰した年代は縄文時代晩期に比定されているので、これより上層において、約二千数百年の人々の生活の跡が確認されることになる。調査・確認した遺構は水田7面、疑似畦畔1面、方形周溝基1面、自然流路2面、土器集中群および木道状遺構1面、小穴群1面、掘立柱建物1面、その他1面である。

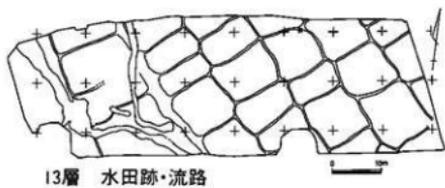
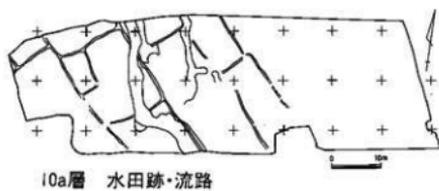
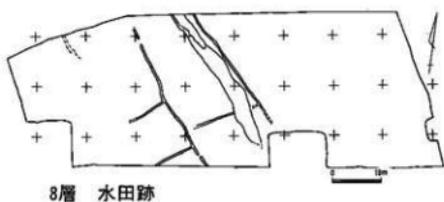
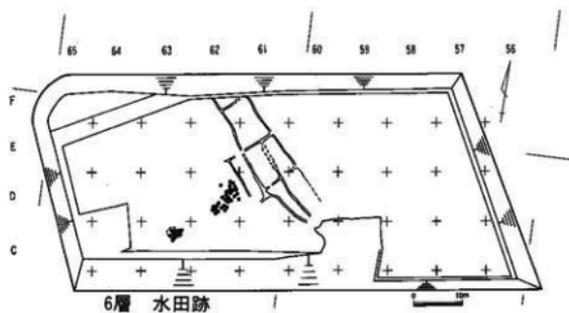
昭和63年度末に表土除去を行い、平成元年4月より、本格的な調査を開始し、平成2年10月をもって終了した。

層序	土色および土質	観察	イネのプラントオパール採取地点(個/g)	遺構	年代期
表土		表土(畑土)	未採取		
1層	暗青黒色 砂質粘土	現代の水田	D64 1800		
2層	青黒茶色 粘質砂	床土 鉄分・マンガネン	" 1900		
3層	青黒色 砂混じり粘土	耕作土 上部に砂が混じる	" 900		
4層	青黒茶色 砂混じり粘土	床土	" 0		
5層	青茶色 砂混じり粘質砂	自然堆積	" 0		
6層	茶青色 砂混じり粘質砂	耕作土	" 900	水田	(中世～近世)
7層	灰黒色 砂質粘土混じり粘土	耕作土 タンニン鉄を多く含む	" 900		
8層	灰黒色 砂質粘土混じり粘土	耕作土 タンニン鉄を多く含む	" 2800	水田	(中世～近世)
9層	青茶灰色 砂混じり粘質砂	砂と腐植土のラミナを形成	" 0		
10 a層	灰茶青色 砂混じり粘質砂	耕作土	E59 0	水田	(平安)
10 b層	灰茶青色 砂混じり粘質砂	耕作土 一部 分層が不可能	E59 0	水田	(平安)
11層	青茶灰色 砂質粘土	自然堆積 最下位でラミナ形成	D64 0		
12層	茶灰色 腐植土混じり粘土	自然堆積	" 0		
13層	緑灰茶色 砂質粘土	耕作土	C59 600~2600	水田	(平安)
14 a層	茶灰色 粘質砂	耕作土の可能性があるが、13層との分層が不可能	C59 4300~4700	疑似畦畔	(平安)
14 b層	茶褐色 粘土	機拌痕跡が顕著	C59 2800		
15層	茶褐色腐植土 砂質粘土混じり粘土	自然堆積 泥炭化していく過程の土質を示す	D64 0	木道状遺構	(古墳)
16層	茶灰色 粘土	未分解の植物質を多く含む	" 900	土器集中群	
17 a層	灰茶褐色 粘土	耕作土	" 2800	水田	弥生末～古墳前期
17 b層	暗茶褐色 粘土	耕作土 畦畔部で暗褐色が顕著	" 0	水田	(弥生後期)
18層	黄・砂質粘土混じり砂	自然堆積 シルトと礫の互層	" 0	方形周溝基	弥生中期
19層	砂混じり砂	洪水堆積	" 0		
20層	青茶色 腐植土混じり砂	自然堆積	" 0	自然流路	
21層	黒色 腐植土混じり粘質砂	タンニン鉄が発達 産卵が腐植して残存	D63.800 E62.8300	自然流路	
22層	黒灰色 粘土	下部のグライ化が顕著	C59 0	上面小穴 溝	
23層	青色 腐植土混じり粘質砂	茶色腐植土とのラミナを形成	" 0	掘立柱建物	
24層	黒灰色 粘土	礫砂が混じる	" 0		
25層	黒灰色 粘土	自然堆積だが、東側の一部で堆積している	" 0		
26層	緑白色 粘土	自然堆積だが、東側の一部で堆積している	" 0		
27層	黒茶色 粘土	大沢スコリア・カワゴ平パーミスを含む 腐植質土層	" 0		

第59表 8区土層観察表



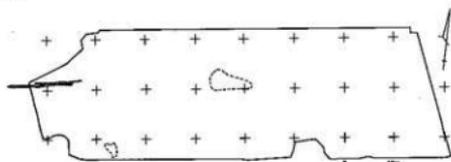
第175图 8区基本土层模式图(水平1:500剖面1:50)



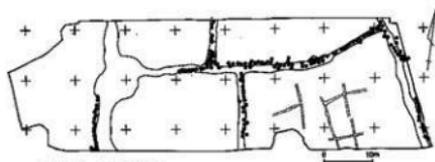
第176図 8区遺構変遷図1



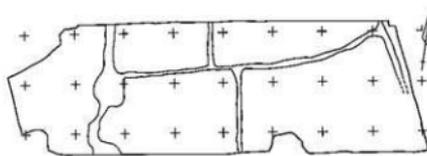
14a層 水田跡(擬似畦畔)



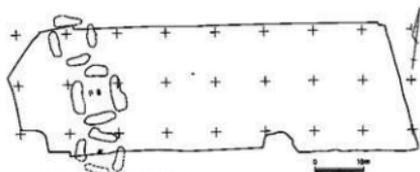
15・16層 木道状遺構・土器集中群



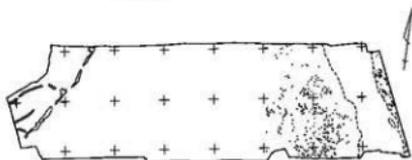
17a層 水田跡



17b層 水田跡



18層 方形周溝墓



22層 小穴群・溝状遺構

第177図 Ⅱ区遺構変遷図2

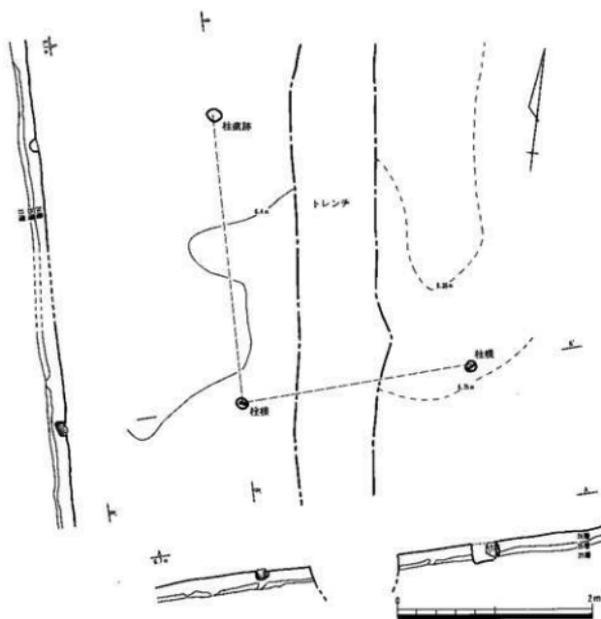
2. 遺構の変遷

24層上で検出された遺構 柱穴

〈柱穴群SX82401〉 [第178図, 図版181]

8区において、最初に人々の生活の跡が確認されたのは弥生時代前期と考えられる24層黒色粘土層である。当初は火山灰が含まれていると考えていたが、詳細に観察した結果、微砂が混入しているようであった。

24層は厚さ約10cmで、土層観察においてはほぼ平坦な面である。グリッドE60において柱根が2本確認され、周囲の精査の結果、柱根の痕跡らしいものも1カ所確認された。それら3点の間隔は、東西約2.4m、南北約3mを測る。建物跡の条件である四方形を構成していないが、配置がほぼ直角を示す。柱根のまわりには上層の自然堆積である23層に類似した青色砂質粘土が覆っている。したがって、少なくとも23層が24層を被覆した後に構築されたもので、24層に伴う遺構ではないと考えられる。柱根は広葉樹の丸柱で下部は削られており、直径約8cmを測る。被覆土壌の23層は下部で茶色腐植土とのラミナを形成しているところから、堆積状況は比較的緩やかであったと想像される。



第178図 24層SX82401実測図

22層上で検出された遺構 小穴群 溝状遺構

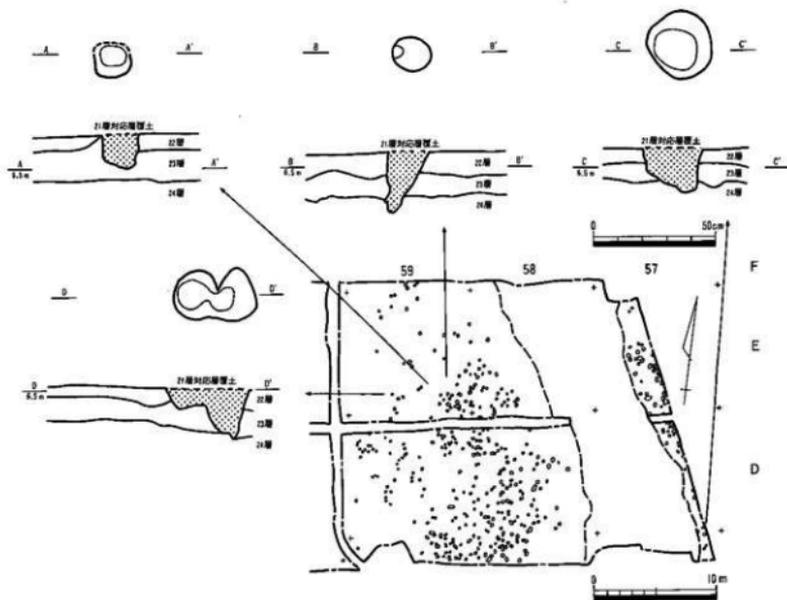
22層は粘土層であるが、下部は23層から漸時変化したようで、腐植土と思われる茶色粘土とのラミナを形成している。上部は灰黒色青粘土層であり、遺構は上部で検出された。

〈小穴群SX82201〉〔第179図，図版178・179・180〕

調査区東側の自然流路であるSR82101（後述）の両岸にあたる部分に直径15cm～20cm、深さ20cm～50cmの小穴が総数で284検出された。そのほとんどは覆土として21層の土壤が入り込んでいた。小穴の形は楕円また不定形なものでさまざまである。調査時においては、柱穴の可能性も考えられたが、以下の点で疑問が残った。

- (1) 平面的に、住居跡や掘立建物跡のプランが検出できない。
- (2) 小穴の中から、礎板や柱根の痕跡が一切検出されない。
- (3) 32ヵ所の小穴について、断面を観察したが掘り方は検出できず、内部が複雑に湾曲している。

覆土の面からは、上層21層の段階で何らかの作用があったことを示しているのではない。上層の痕跡だろうか。小穴群の分布や形状からは確定することができない。



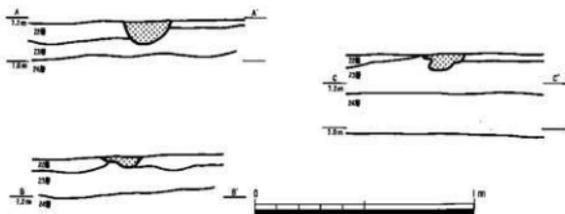
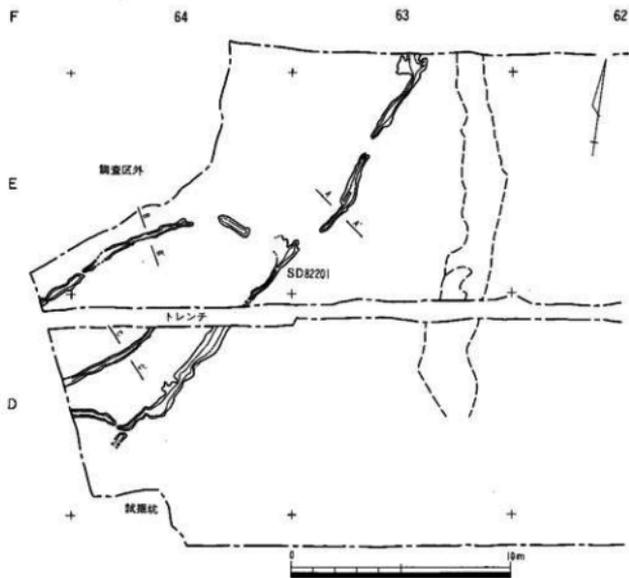
第179図 22層SX82201ピット土層図

〈溝状遺構SD82201〉〔第180図，図版178・179〕

調査区西側（グリッドE63・64、D64）で検出された溝は、小穴と同じく21層の黒色腐植まじり砂質粘土が被覆している。幅15～20cm、深さ2～10cmを測る。調査区内においては北東から南西へ走行するが、連続したものではなく、途中で幅約1mほど切れる箇所がある。これも小穴群と同様に、上層21層からの作用による痕跡と考えられる。

〈出土遺物〉

打製石斧、剥片がそれぞれ1点出土している。また弥生時代の特徴を示す黒曜石の石鏃も出土した。上面での出土が多いので、あるいは21層に伴う遺物と考えることもできる。



第180図 22層SD82201実測図、土層図

21層上で検出された遺構 流路 杭列

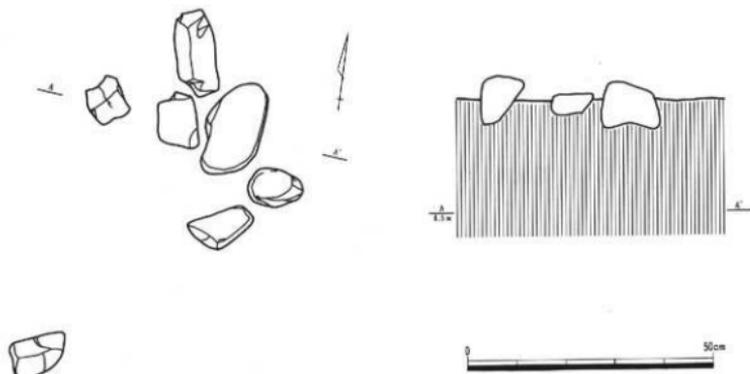
黒色腐植混じり砂質粘土である21層上には、洪水堆積である20層が堆積している。堆積状況は下層と同じく、ほぼ平坦な堆積状況を示しているが、直下の22層に比べ、黒色を呈している。グリッドE58から弥生時代中期初頭段階とされる丸式土器と思われる条痕文系の土器の破片5点が出されている。〔第182図〕

黒色粘土層
砂礫被覆
条痕文土器

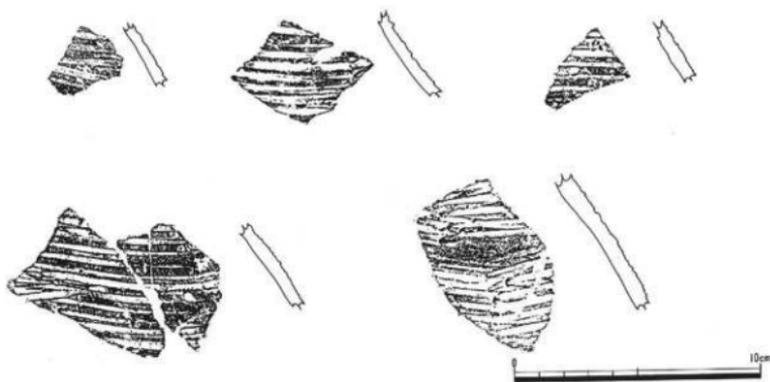
〈集石遺構SX82101〉〔第181図、図版177〕

被覆土壌を除去した際に、上面より自然石が7点集中する地点を検出した。表面が磨耗していることから、河原石であろう。加工した痕跡はない。周囲には全く石の出土はないため、人の手によって運ばれた可能性が高い。

河原石



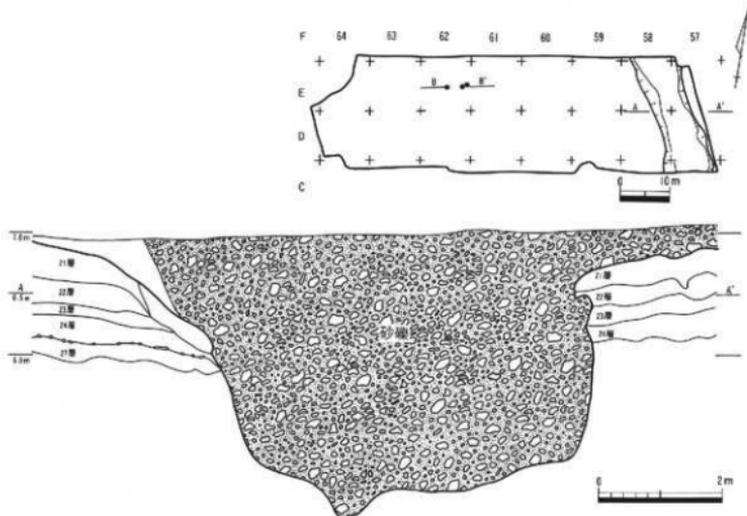
第181図 21層SX82101実測図、エレベーション図 (水平1:10 垂直1:1)



第182図 21層出土土器拓影

〈流路SR82101〉 [第183図, 図版177]

調査区東グリッド57・58列では南北方向に流路SR82101を検出した。幅約7~10mを測り、標高約5mで川床が検出された。堆積土は多量の砂礫で、覆土から縄文式土器の破片が磨耗した状態で多数出土している。被覆土である上層の洪水堆積との分層が不可能であったため、流路が形成されていた時期は不明であるが、21層を切っているため、同層の堆積後に規模の大きい流路が形成され、大量な砂礫を供給する流路であったと推測される。

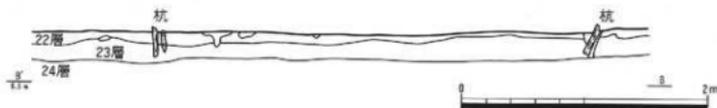


第183図 21層SR82101土層図

〈杭列〉 [第184図]

グリッド E62で21層の解体中に3本検出したものである。1本が針葉樹で、あとは広葉樹である。杭列というには数が少なく性格も不明である。杭の長さは19~24cmの短杭で直径約2cmを測る。広葉樹の杭は先端を加工してある。杭列ということから水田耕作にともなう畦畔の可能性を探るべく周囲を精査したが、杭以外の遺構は確認できなかった。しかしながら、同層はイネのプラントオパール分析の結果、8300個/gという高いカウントを示している。下層に残った小穴群や溝の痕跡とともに、21層上で水田が営まれていた可能性は否定できないであろう。しかし、明確な区画が検出できないのは何故だろうか。

P. O. 値
水田可能性



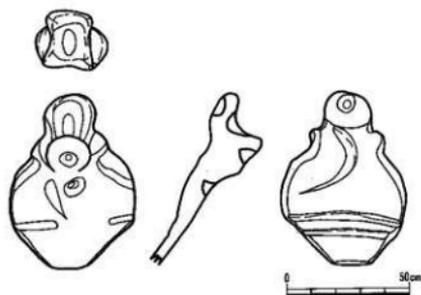
第184図 21層杭列実測図

〈出土遺物〉

明確な人工的遺構の検出はできなかったものの、解体時に土器・打製石斧および剥片、凹石などが豊富に出土した。土器はいずれも破片であるが、同層の年代を推定する根拠になったものである。土器片はいずれも条痕文が施されており、壺の胴部の破片と思われる。前述したように弥生時代中期初頭の丸子式土器と考えられる。

グリッド E58 では 21 層土中から縄文式土器 1 片が出土した。縄文時代後期中葉の「加曾利 B II 式土器」の把手の部分と見られる。胎土は長石、黒色粒子、砂粒を含み、色調は淡暗灰黒褐色で、焼成は良好である。[第 185 図] 破片の断面は摩滅しており、洪水流に運ばれ、調査区にとどまったものと考えられる。石製品では破損した打製石斧が 3 点出土している。使用痕は明確ではない。他に剥片が 4 点、磨製石斧片 1 点、黒曜石剥片 1 点、凹石片 1 点が出土した。

打製石斧



第185図 21層出土土器実測図

	出土地点 グリッド	遺物名	備考		出土地点 グリッド	遺物名	備考	
石 製 品	C58-北	打製石斧		木 製 品	E61-南	杭	針葉樹	
	F61-南	〃			E62-南	〃	〃	広葉樹
	E60-北	〃			〃	〃	〃	〃
	E60-南	石片		土 器	E58	土器片	丸子式土器と思われ る条痕を施した壺の 胴部の破片	
	E62-南	〃			E58-北	〃		
	E59-北	整石			〃	〃		
	E62-南	石皿片			〃	〃		
	F59-南	石			〃	〃		
	E59-北	〃			〃	〃		
	F63-南	剥片			黒曜石	出土位置不明		〃
E62-南	整石	石						

第60表 21層出土遺物一覧表

20層下で検出された遺構 溝

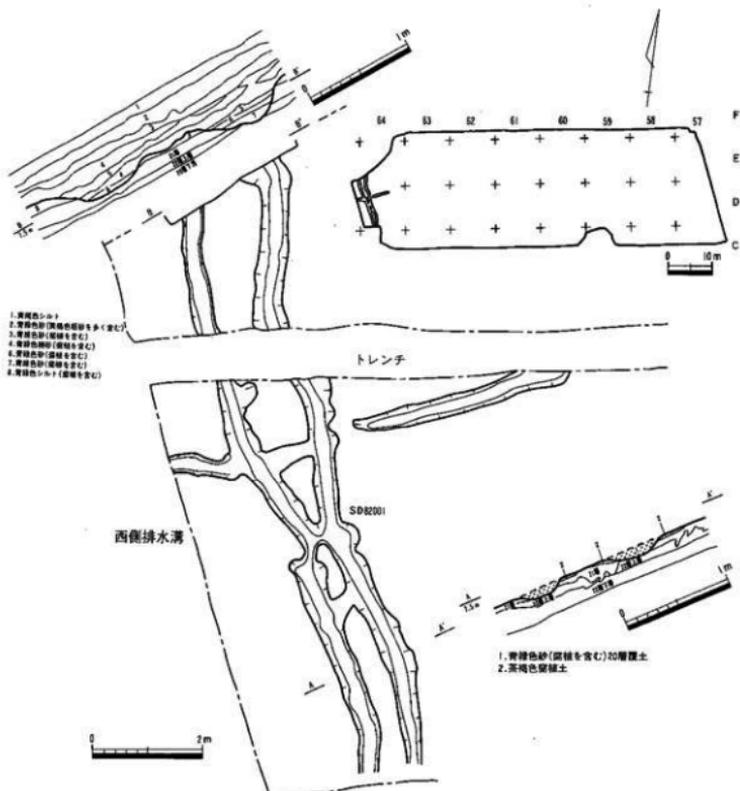
〈溝SD82001〉〔第186図, 図版176〕

自然堆積層

SD82001は調査区西側で検出した遺構である。20層は洪水による自然堆積層で、最下部で茶黒色の腐植土とラミナを形成している。断面観察では21層に伴う遺構と考えていたが、平面調査時に詳細に検討した結果、下部のラミナを形成している部分より落ち込んでいることが分かり、20層下部の遺構とした。平面的にみると、溝は調査区のグリッドD・E64列、面積約250㎡に限られ、東西に平行するように2本検出され、南北方向に走行し、調査区外へ延びている。調査区内では長さ約12m、幅約40cm、深さ約20cmを計測する。幅26~

覆土砂

30cm、深さ約8cmの浅い東西方向の溝が両者を繋いでいる。被覆土壌は灰色砂であり、木の葉や枒の実などが多量に混じっている。2本の溝が平行して地形の傾斜に従い走行すること、東西方向の溝が存在することなどから人工的に掘削された溝であると考えられるが、性格は不明である。



第186図 20層SD82001実測図

〈倒木〉 [第187図, 図版175]

20・19層の大規模な洪水堆積は、後述する方形周溝墓の基盤層をなしているもので、厚さ約1mに及んでいる。この洪水堆積は7区の12層に対応するものと考えられ、時期差があるものの、同じく方形周溝墓群を構築している基盤層である。

土層観察表では18、19、20層の分層をしてあるが、19、20層は同一の洪水堆積で、基本的には砂、礫の互層である。ここで報告する木材は調査時、19・20層を中間層として重機で除去する際の上層部分より出土したものである。20層の遺構として認定したSR82001より上層から出土したものである。洪水によって運ばれ、調査区内に溜まったと考えられるもので、人為的に運ばれたものではないことは出土した土壌から明確であり、当初は流木として廃棄する予定であった。よって、調査区内における位置・標高等は確かめなかった。ところが、部分的に焼け焦げた痕跡が認められたことから、取り上げた後、詳細に調査を始めた。

樹種は杉で樹令は約250年を数え、全長約3m、直径約60cmを測る。木口面は劣化が激しく、判然としませんが、根元より約1.6mの位置で伐採を行なったと考えられる人為的な痕跡が認められる。また焼け焦げた痕跡は根・幹などに散在しているが、はぎ取り痕跡と見られる長さ約2m、幅約40cmの部分で顕著である。また、劣化が激しいものの根部などの破損が比較的少ないところから、山中から流れてきたのではなく、近隣の湿地に群生していたものである可能性も考えられる。木口面やはぎ取り場所に道具の使用痕跡が明瞭に残存しないので、即断はできないが、このような大木を山中で伐採し、加工したとは考えにくく、むしろ近隣に杉林が群生・繁茂していた状況を示しているものではないだろうか。

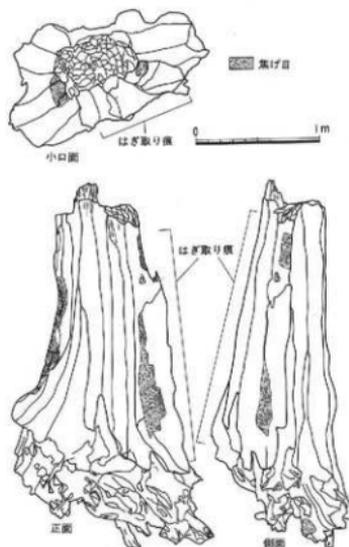
洪水堆積

砂・礫の互層

代 採 痕

はぎ取り痕

周辺の杉材



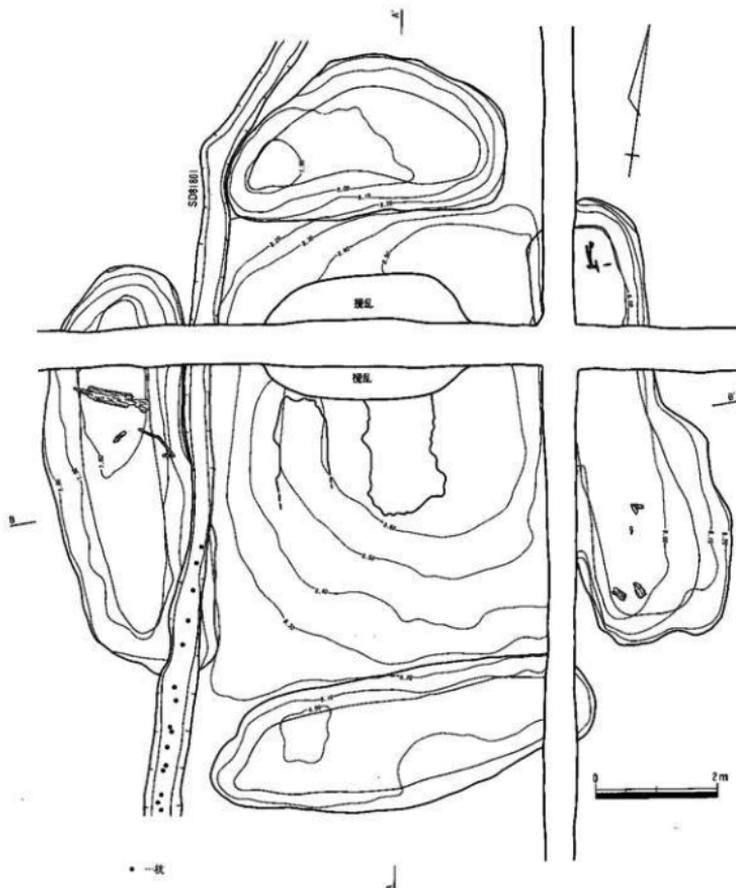
第187図 20層出土木材実測図

(8区)

18層上で検出した遺構 方形周溝基群、溝状遺構

〈方形周溝基群〉〔図版171〕

調査区西側の微高地上に立地する方形周溝基群である。下層の19・20層は洪水による砂・砂礫だが、その上の旧表土層である黒褐色土をベースとして構築されている。調査区内で3基検出しているが、基域は東西には広がらず、方位を異にしながら、南北方向に列状に配置されている。



第188図 1号方形周溝基平面実測図

(1) 1号方形周溝墓 [第188・189・190・194図, 図版172]

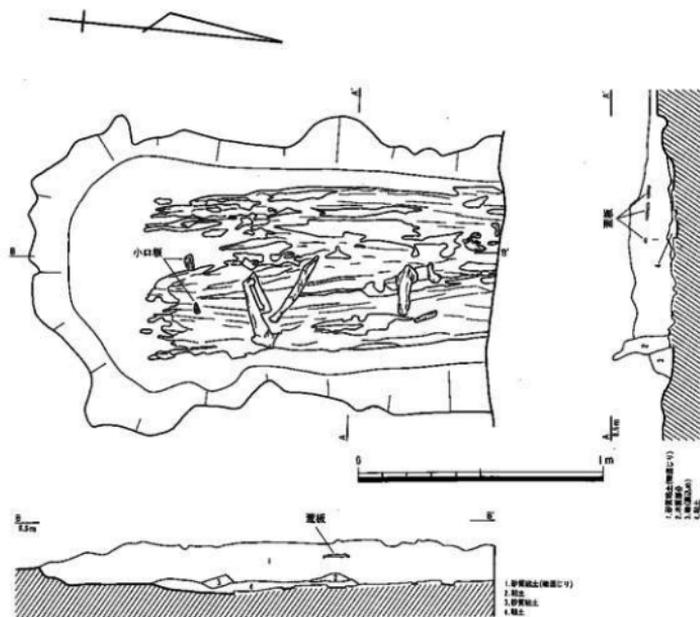
調査区西側グリッドD・E62・63より検出されたもので、3基の中で中央に位置するものである。トレンチ及び産業廃棄物を埋めた穴による部分的な破壊はあるが、4本の溝と盛土・主体部を検出する事ができた。方台部は南北12.22m、東西10.91mの南北にやや長い方形を呈しており、周溝底部からの高さは56cmである。墳丘は上層の17b層水田の畦畔として用いられており、比較的残存状態は良好である。盛土は旧表土の黒褐色粘土層上に砂礫及び青灰色シルトを積み上げている。墳丘中央部には、主体部が崩壊し、凹地になった際に堆積した腐植土の混じる暗褐色粘土を確認した。

方台部

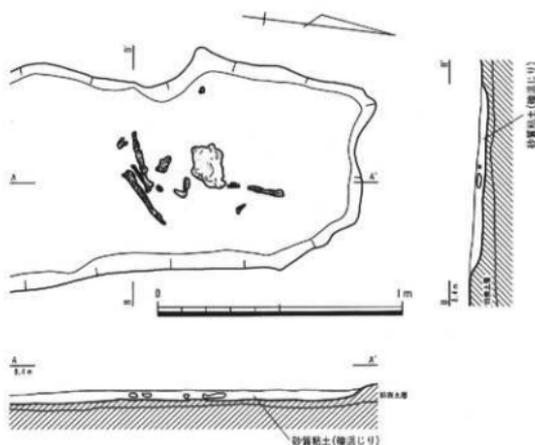
盛土

周溝

周溝は4本とも幅が広く浅い点で共通している。北側周溝は、全長4.64m、幅2.56m、深さ30cmを計測し、外側に大きく張り出す不整形円形である。周溝断面は逆台形を呈し、直線的に立ち上がるが、墳丘側は緩やかである。東側周溝は中央部分から南にかけ外側に大きく張り出している。全長7.34m、幅2.56m、深さ約20cmである。トレンチにより墳丘側の立ち上がりは不明だが、緩やかなU字型を呈している。南側周溝は中央部分で外側にやや張り出している。全長6.43m、幅2.20m、深さ7cmである。非常に浅い溝のため、断面は不明瞭だが、底部が平坦な逆台形である。西側周溝は外側に緩く弓状に張り出している。全長6.77m、幅2.38m、深さ20cmを計測する。上層の溝状遺構及び杭列により南側部



第189図 1号方形周溝墓第1主体部実測図



第190図 1号方形周溝墓第2主体部実測図

分が破壊されており、周溝断面の立ち上がりは不明だが、底部が丸い緩やかなU字型を呈している。覆土は礫の混入した黒褐色粘土が下位から中位にかけて堆積している。その上に上層の水田耕作土である茶褐色粘土が覆っている点で共通しており、墳丘盛土の流れ込みは認められなかった。

- 主体部は方台部中央やや北側に位置する地点で2基検出された。検出順に、東側を第1主体部、西側を第2主体部とした。第1主体部は北側部分が破壊されており、全体の様相は不明であるが、墓壇と木棺を検出した。墓壇は残存長南北1.92m、東西1.12mを計測する。平面プランは隅丸方形を基本としているが非常に不整形である。旧表土を約5~10cm程掘り込んで形成しており、底面を平らにした逆台形を呈している。木棺は底板に小口板を乗せるタイプのものであり、蓋板・底板・側板・小口板を確認する事ができたが、底板を除き残存状態は不良である。確認部分の長さは南北1.40m、東西0.65m、主軸方位はN4°Wである。材は杉が用いられており、底板は追根目板、小口板は板目板が用いられているが、側板は炭化しており判定不能であった。内部からは頭位を北にした横臥屈肢状態の人骨1体分を検出した。20~30才の成人男子で、顔を西に、それ以外の部位を東に向けた状態(東京国立科学博物館山口敏先生の鑑定による)である。残存状況は悪いが、上肢の屈曲度は62°、下肢52°を計測する。第2主体部は旧表土層を5cm程掘り込んで作られたものであるが、南側部分は明確に平面プランを検出する事はできなかった。確認できた規模は南北1.43m、東西0.76m、主軸方位はN3°Wである。内部からは、部位不明の人骨が出土しているが、性別・年齢等は不明である。両主体部は設置された位置や方向、盛土内に掘方が検出されなかった事から、同時に埋葬された可能性が高いといえよう。
- 遺物 遺物は東・西側周溝より土器片・木片を出土している。土器は両周溝とも上層から出土

しており、弥生時代中期から後期に至る時期幅を持っている。東側周溝の木片は南・北端に集中しており、共に底部直上から出土した。西側周溝の遺物は北側部分から出土しているが、何れも中層から上層にかけてである。

(2) 2号方形周溝墓 [第192・193・194図, 図版173]

1号墓の南側グリッドC・D62・63に位置するが、南側部分は調査区外で、未検出となるため、全体の形態は不明である。方台部は南北の残存長3.52m、東西7.32m、周溝底部からの高さ約40cmを計測する。盛土は旧表土層の上に小礫を含む黄褐色土が確認されている。旧表土層下は砂礫層である事から、盛土には客土を用いたと考えられる。

北側周溝はトレンチにより東側部分の一部が破壊されているが、全長6.09m、幅2.52m、深さ約16cmである。中央部付近で一度くびれ、西側部分が大きく外へ広がる。またその部分では長さ約1.5m、幅約0.9m、深さ約50cm程の断面V字型の西側部分が広がる不整形円形のピット状の掘り込みが検出された。周溝断面は底部が平坦で、墳丘が緩やかに立ち上がる。東側周溝は南辺排水溝により、北側先端部分を検出したのみである。長さ0.36m、幅0.78m、深さ約9cmである。西側周溝は北側半分の確認だが、外側へ弓状に張り出す形態と考えられる。長さ3.30m、幅1.94m、深さ約50cmを計測する。周溝断面は底部が丸く、墳丘側が緩やかに内湾しながら立ち上がっている。覆土は各周溝で若干の相違はあるものの礫の混入した暗褐色土が堆積している点で共通している。

主体部は方台部ほぼ中央より墓壇及び木棺を検出したが、南辺排水溝により南側を欠いている。墓壇はベース土を掘り込むことにより形成されているが、残存長1.29m、幅1.26m、深さ約15cmである。平面プランは隅丸長方形を呈しているが、コーナー部分が若干外側に張り出している。木棺は底板・側板・小口板が残存しており、更に蓋板の痕跡を確認する事ができた。厚さ13cm程の角材状の西側板を除いては残存状況は不良であった。規模は長

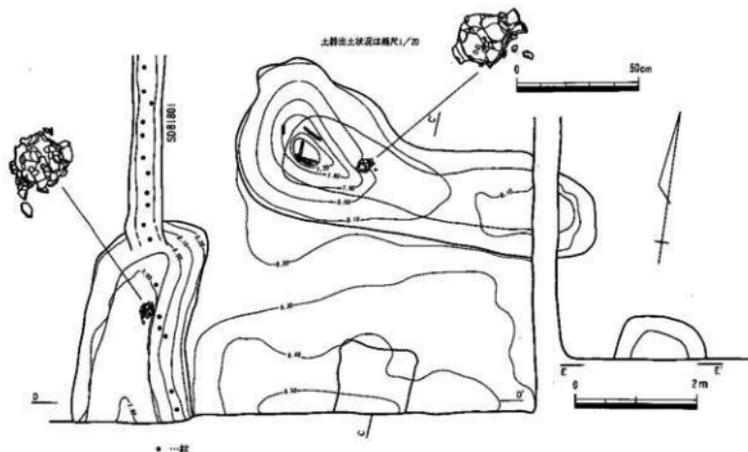
方台部
盛土

周溝

ピット状の掘り込み

主体部

木棺

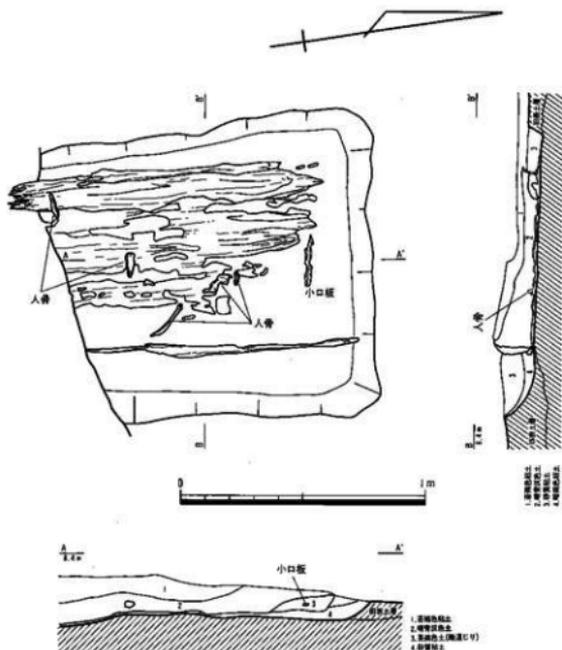


第191図 2号方形周溝墓平面突測図

木取り人骨 さい3.30m、幅0.56m、内法は長さ1.01m、幅0.54m、主軸方位はN12°Eである。杉材が用いられており、底板は桁目板、その他の部分は板目板が用いられており、部位による使い分けがなされている。内部からは頭位を北にした一体分の成人人骨を確認した。検出した部分は右下顎骨・上腕骨・大腿部等だが、下顎骨の状況から顔を東に向けた横臥屈肢状態と考えられよう。

遺物 遺物は周溝より出土した土器及び木片である。北側周溝からは西側部分の底部直上より、壺型土器一個体分が横になった状態で検出された。胴部を一部欠いているものの口縁から底部までを復元できるものである。西側周溝からは北側部分で壺型土器を検出している底部直上でつぶれた状態で検出した。底部及び胴部約2分の1が欠けている。胴下半部にはカーボンが付着しており、二次焼成を受けた可能性が高い。両土器とも弥生時代中期後葉に位置付けられるものである。木片は北側周溝のピット状の掘り込み内の覆土から検出されたものである。さらにピット状掘り込み南側の周溝肩部からは焼けた木片がレンズ状に堆積していた。

二次焼成の可能性



第192図 2号方形周溝墓主体部実測図

(3) 3号方形周溝墓 [第193・194図, 図版174]

3基の周溝墓中北側に位置するもので、グリッドE・F63・64の範囲から検出された北
 辺排水溝による破壊や調査範囲外となるなど全体の形態は不明瞭である。墳丘は後世の削
 平により、盛土・主体部ともに確認することはできなかった。方台部規模は確認部分で南
 北7.90m、東西6.98mを測り、やや南北に長い方形を呈す。主軸方位は東西の周溝からN
 11°Wと判断した。

方台部

東側周溝は北辺排水溝により、北端部分を欠いている。確認部分の長さ3.80m、幅1.66m、
 深さ約30cm、中央部分から南側にかけてやや膨らむ。周溝断面は底が丸く非常に緩やかに
 立ち上がっている。南側周溝は中央部分で外側に張り出すもので、全長5.01m、幅1.70m、
 深さ約0.3mを計測する。断面は墳丘側が緩やかで直線的に立ち上がる。覆土は大きく3層
 に分かれるが、下層に暗灰褐色粘土、中層に黒褐色粘土、上層に暗青灰色粘土層が堆積し
 ており、墳丘からの流れ込みと考えられるものはなかった。

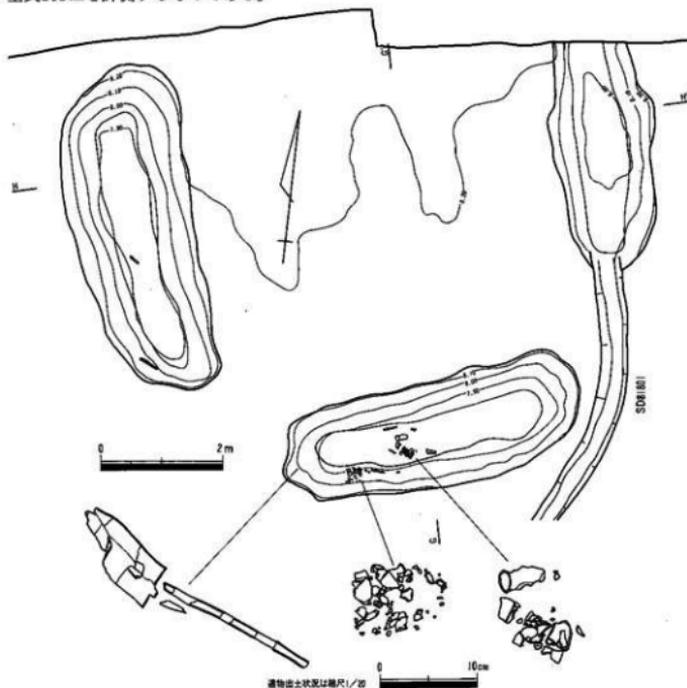
周溝

南側周溝の中層から下層にかけて壺形土器1個体を検出したが、周溝中央部および西側
 の2ヶ所に集中して出土している。胴下半部には焼成後と考えられる穿孔が施されており、
 またカーボンも付着している。時期は弥生時代中期後葉に位置付けられるものである。さ
 らに西端の底部直上からは組み合わせ鋤が完形の状態でも出土している。身の長さ38cm、幅
 15cm、全長108cmを計測するものである。

遺物

穿孔

組み合わせ
鋤

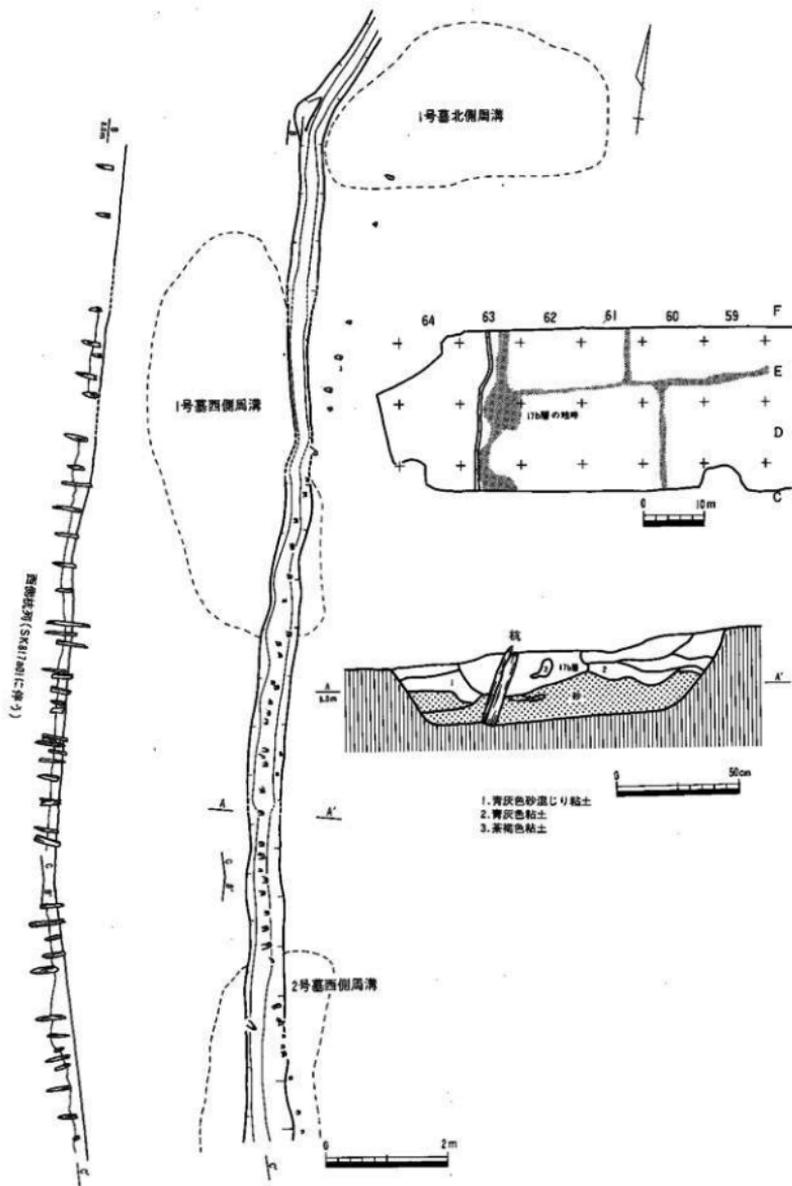


第194図 3号方形周溝墓平面実測図

(8頁)

〈溝状遺構SD81801〉〔第195図，図版169・170〕

- SD81801は各方形周溝墓検出の際に伴って検出された、グリッド63列を南北に延びる溝状遺構である。2号方形周溝墓西側周溝のほぼ中央から1号方形周溝墓の西側周溝と盛土の間、3号方形周溝墓東側周溝の中央を通り、調査区外へ延びており、各方形周溝墓の周溝の覆土をきっている。長さ約26m、幅約30cm、深さ約30cmを計測する。グリッドC・D63
- 杭 列** では杭列も併せて検出した。特に2号方形周溝墓西側周溝中央では、溝のほぼ中央に杭列が打たれており、両者の関連性に注目した。溝の中央に杭を打つことは溝の機能から考えにくく、また杭列は北に走行するにつれて溝から離れていくことから、両者の関連性は薄いと判断した。溝の覆土は、下部に砂、上部に粘土および17b層の暗茶褐色粘土が堆積しており、全面を17a層の灰茶褐色粘土が被覆している。杭列は長さ16～32cmの比較的短い
- 杉材の小杭** 杭が使用されており、樹種は杉材とみられる。先端は削られており、形態は後述する17a層水田の杭に似ている。以上の調査から、溝および杭列の構築順序は各方形周溝墓の構築⇒周溝の被覆⇒SD81801の掘削⇒SD81801の被覆⇒杭列の構築であると推定した。溝と杭列に時期差があることから、杭列は17a層水田の大規模な畦畔SK817a01に伴い、溝は1・2号方形周溝墓のマウンドを繋ぐように構築された、17b層水田の大規模な畦畔SK817b01の
- 水路の可能性** 西側直近を走行することから、水路の可能性も考えられる。



第195図 18層SD81801・SK817a 01西側枕列実測図

17b層上で検出された遺構 水田跡

〈水田〉〔第196図，図版168〕

1号・2号方形周溝墓（グリッドD・E62・63）の墳丘部は、弥生時代後期になって水田耕作を行う際に畦畔として利用するようになったようだ。方形周溝墓は自然堤防上に築かれており、17b層の平均的な標高より約50cm高くなっており、地形的条件を巧みに利用している。一方、3号方形周溝墓は周溝を残して削平を受けて消滅している。3号墓の墳丘部は盛土が多量ではなく、開墾の際には掘削が容易であったと考えられる。この17b層水田は昭和63年の試掘調査においては確認されていなかった。17a層の水田は17a層水田の調査における畦畔の断面観察で確認されたものである。17a層の畦畔の下にレンズ状を呈した暗茶色粘土が存在したため、17層を2層に分層することになった。土色がわずかにb層の方が暗色であるだけで、土質はa・b層とも粘土質である。17a層水田の畦畔断面を観察すると、どの箇所断面にも、この暗茶色粘土は存在していたため、17b層水田の区画はほぼa層と同じであるとと考えられる。b層水田からa層水田へと区画が踏襲され、比較的、長い水田耕作の期間であったと推定される。田面はa層水田の攪拌を受け土色がほとんど変わらないものになったが、畦畔部分は攪拌を受けていないため、本来のb層の土色を残していると思われる。

大規模畦畔 (1) 大規模な畦畔SK17b01

1・2号方形周溝墓のマウンドを繋ぐように構築された下端幅4～9m、高さ約50cmを計測する大規模な畦畔である。グリッドE63付近では幅を狭くする。

(2) その他の畦畔

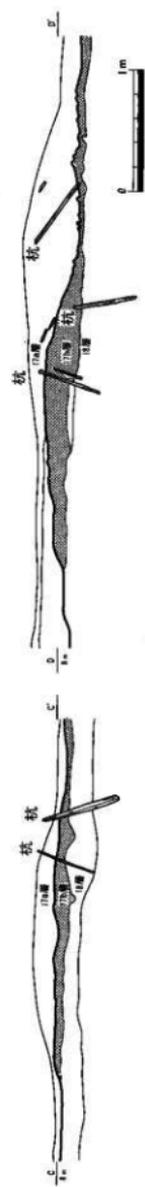
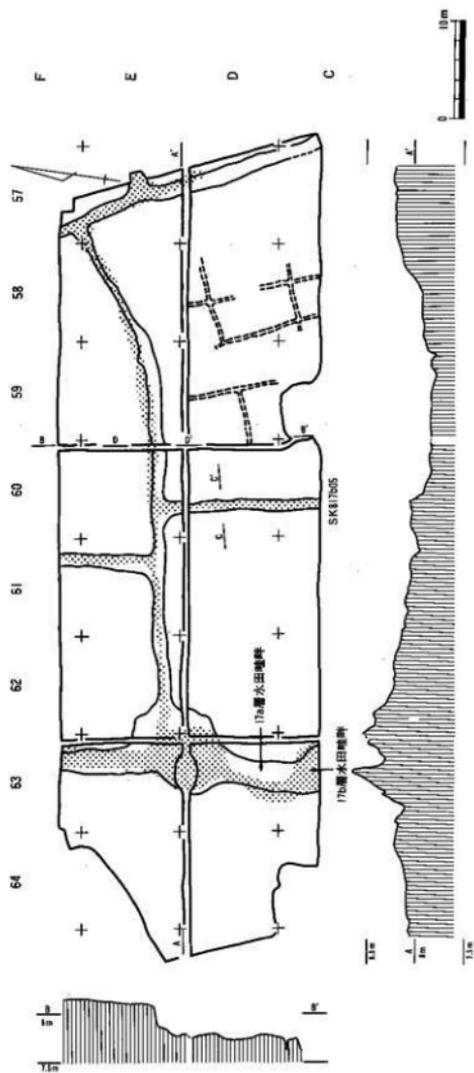
SK817b01から、下端幅約2.5mを測る東西畦畔が北寄りにやや湾曲しながら走行し、調査区外へ延びている。調査区中央の南北畦畔は東西畦畔とほぼ同じ規模を持ち、直線的に東西畦畔と交差する。しかし調査区東端のグリッド57列の南北畦畔は東西畦畔と直交せず、北西方向から南東方向へやや傾いている。

〈区画〉

盛土のずれ b層水田はa層水田と同区画であるが、両層の畦畔の盛土を比較してみると、若干ずれがある。それは、a層水田経営時にb層水田の畦畔にさらに盛土をした際に生じたものと考えられる。東西の畦畔では全体的に北へずれ、南北では西にずれる。つまり、b層水田はa層水田に比べ、全体的に北西よりに構築されていたようである。a層水田とb層水田の畦畔上端の標高差は約10cmあり、遺構解体時に検出した杭列の上端はa層水田畦畔に合致するものが多い。従って杭列はa層水田に伴うものである可能性が高い。一部の杭列について、断面を観察してみると、杭の上端が17b層水田の畦畔に合っているものが存在したが、一定の列を為しておらず、b層水田に伴う杭列としては判断はできない。区画の規模は、調査区内で四周をめぐる畦畔が検出されていないため確定できないが、東西幅15～25mを計測する大規模なものなのであろう。田面は北から南に傾斜しており、高低差約50cmを計測する。小規模な区画の畦畔や足跡などの検出はできなかった。

〈出土遺物〉

畦畔解体時に出土した遺物のうち、年代を推定できる遺物は少ないが、僅かに弥生時代後期の特徴を示す土器片が出土している。a層水田が他の区の弥生末～古墳時代初頭に廃絶された水田と対応することからも、このb層水田は、それ以前の年代と考えられる。



第186図 17a層・17b層 畦畔跡群図・17b層水田エドレベーション図

17a 層上で検出された遺構 水田跡

〈水田〉 [第197・198図, 図版165・166・167]

「杭列水田」 17b 層とほぼ同区画のこの水田は、ほぼ全ての大規模畦畔に杭列を伴う。隣接区でも同様の特徴をもった水田面が検出されている。各区との対応、遺物の出土状況から、弥生末から古墳時代初頭のいずれかの時期に経営され、上層16層の泥炭質土壌に示されるように湿地化していくに従い、廃絶されたものであろう。密集した杭列から、排水能力が低い土地柄で、畦畔の維持が困難であったと想像される。

大規模区画跡 畦 護
小規模区画
(1) 区画と畦畔
b 層水田と同じく、方形周溝基の盛土を畦畔として利用しており、そのSK817a 01を主軸に大規模な畦畔が区画を構成している。畦畔の下端幅は約1mで、全域に渡って杭列が検出された。前述したSD81801と共に検出された杭列もSK817a 01西側を補強するもので、本水田に伴うものであると考えられる。グリッド63以西には畦畔は延びておらず耕作が行われていたかは不明である。グリッドD58・59では小規模な区画の痕跡を検出している。

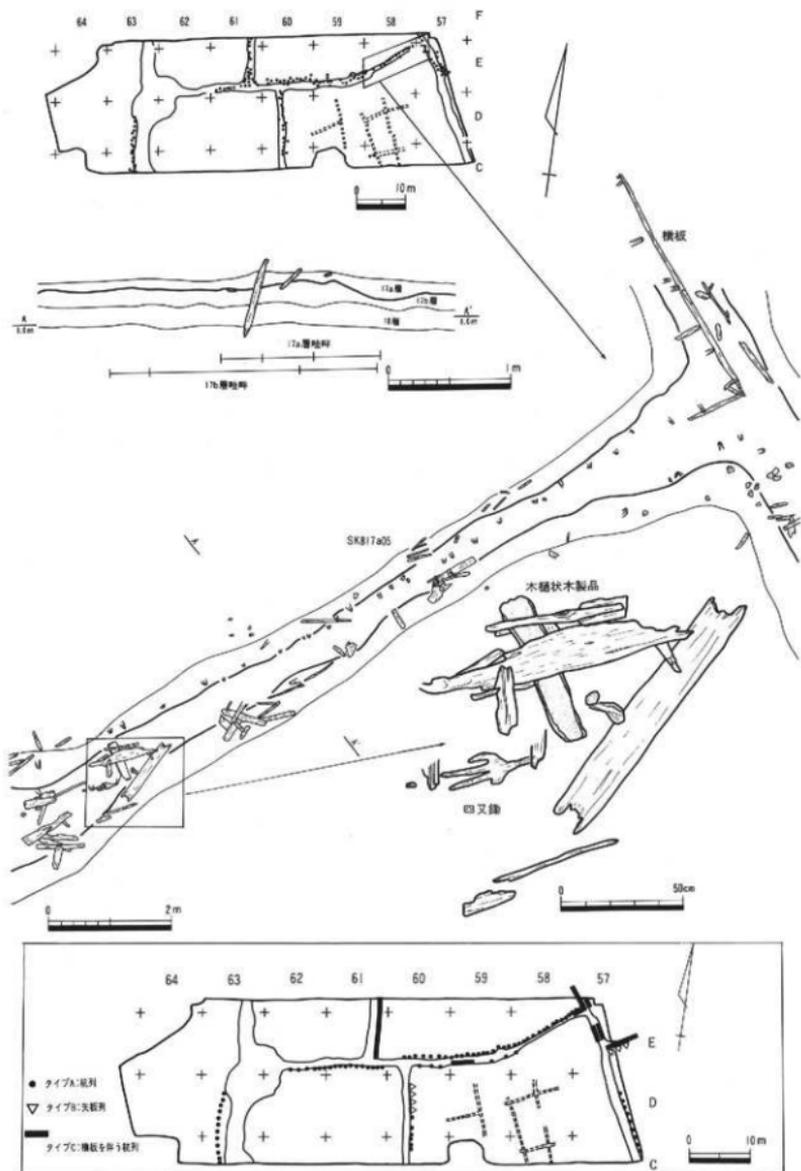
杉 割 材
建築材転用
(2) 杭列 [第197・198図, 図版166・167]
畦畔補強に使用されている杭はほとんどが杉材を用いており、割材で先端に加工を施してあるものである。杭の長さは平均して約1mで建築材の転用が多いと考えられる。杭列は杭間に50cm～1mの間隔があり、杭列は粗密に差がある構造をしている。杭列の構造から以下のような大別をした。[第197図]

横 板
矢 板
A群 長さ約1mの杭を約1m間隔で打ち込んである列
B群 A群に加え、横板(幅約30cm、長さ約3m)を畦畔の内部にかませている杭列
C群 矢板と杭が交互に打たれている列

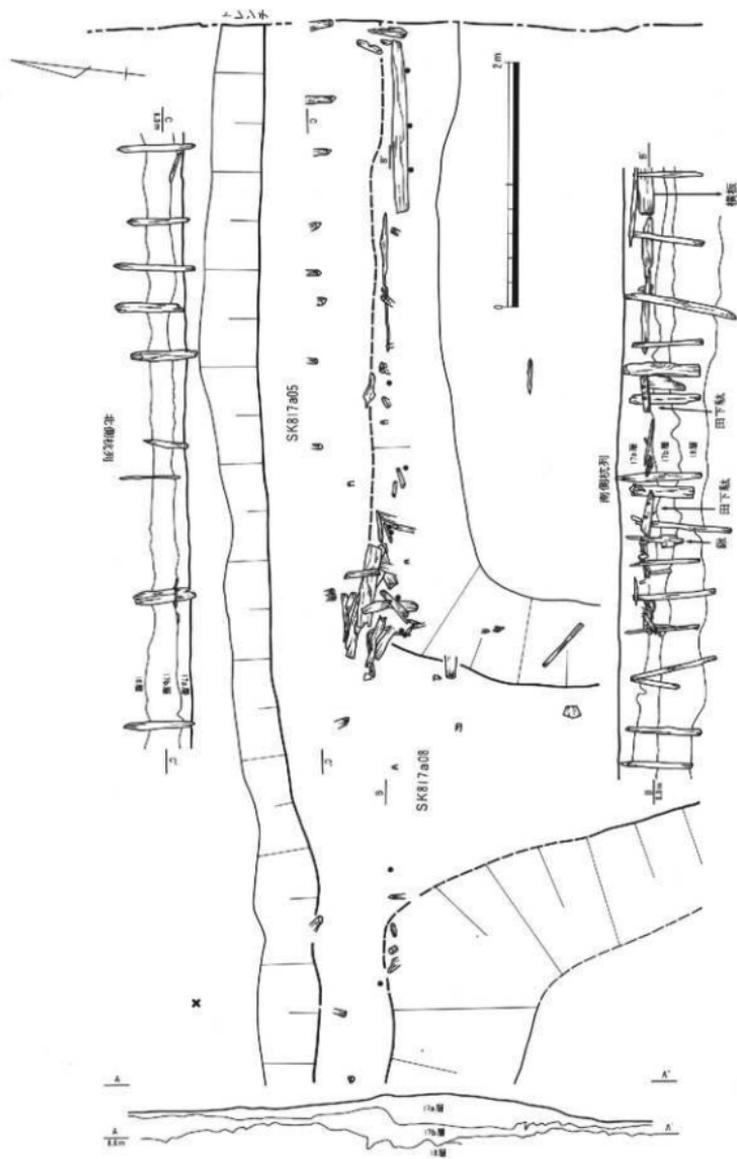
芯 材
農具転用
この3群を、畦畔を維持するために、排水の状態や土地の傾斜の違いによって使い分けたと考えられる。また、杭列の間には、板材や粗梁を埋め込み、土の流出を防ぐ手立ても講じられていた。SK817a 06の南側杭列の中には破損した鋤または鎌と考えられる農具を杭に転用した状態が検出された。さまざまな転用材を畦畔補強材に利用していることが窺える。

(3) 木樋状木製品 [第197図, 図版166]
グリッドE58のSK817a 05から導水に用いたと思われる木樋が出土した。幅約12cm、長さ64cmを測り、畦畔を横切るように敷設され、底が北から南に約15度傾斜している。主軸方向の両端には高さ5cm程の立ち上がりをもった樋状の加工がなされ、導水を容易にしている。材質は杉材が用いられている。木樋が使用されなくなった後さらに畦畔上に板材を敷きこんだようで、木樋は板と土厚によって、湾曲した状態で検出された。なお、グリッドE61の中にも同様の木樋が出土している。周辺の地形はやや南に向かって傾斜しており、水源・水路の存在は確認できなかったが、水源は北方に存在すると推定される。木樋は大規模区画をつなぐ水まわしのため設けられたのだろう。

水まわし
〈出土遺物〉
グリッドE58付近の木樋の近くからは四又鎌が破損した状態で出土した。完形ではないが、身長約30cm、幅16cm、柄の残存部約10cmを測る。田下駄の完形は少ないが、破片が13点出土している。その他に二又鎌の身の一部も出土している。



第197図 17a層水田SK817a05実測図、木桶出土状況図



第198図 17a層水田SK817a05坑列実測図

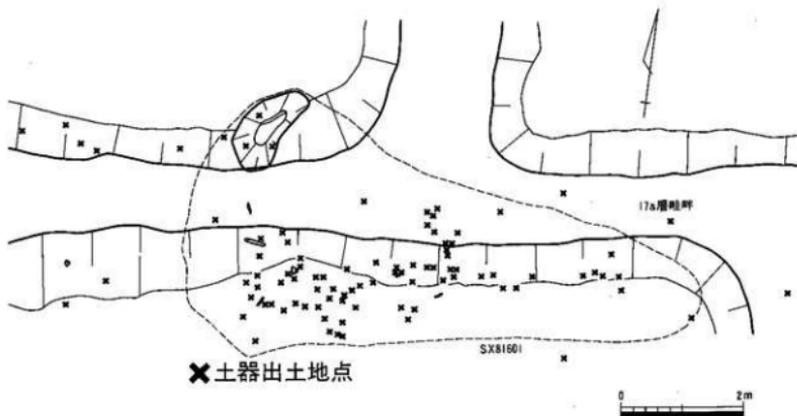
16・15層中で検出された遺構 土器集中群 木道状遺構

17a層水田は16層の泥炭質土壤に覆われていく。この時代の水田を泥炭質土壤が被覆しているのは他の調査区や静岡平野の他の遺跡でも見られ、何らかの気象変化に影響を受け、環境が変わったことも考えられる。

本区では、この泥炭質土壤である16層において土器が集中する地点が検出された。上層の15層は茶褐色の腐植土混じりの自然堆積層であるため、遺構はないと考えていたが、調査区西端のグリッドE64・65で木道状の遺構が検出された。ヨシなどが繁茂して、水田耕作が不可能になった状態でも、土地に対して人々は何かしらの働き掛けをしているようである。

〈土器集中群SX81601〉 [第199図, 図版164]

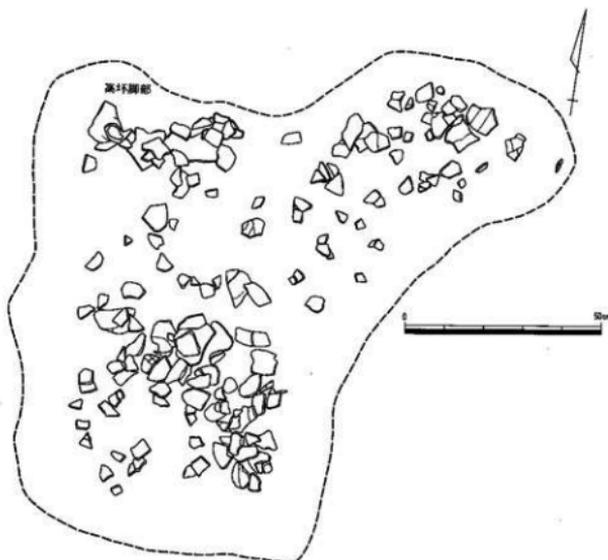
土師器を中心とした破片が集中して出土した場所である。東西約4m、南北約1.4mの範囲で検出された。古墳時代中期の高坏・壺とみられる。下層の17層水田の畦畔の交点にあたる部分の直上で検出された。散乱しているのではなく、一か所に集中することから、意図的に置いた可能性が考えられる。なんらかの祭祀的な遺構ではないかと考えられるが、確証は揃わない。



第199図 16層SX81601実測図

〈土器集中群SX81602〉〔第200図，図版164〕

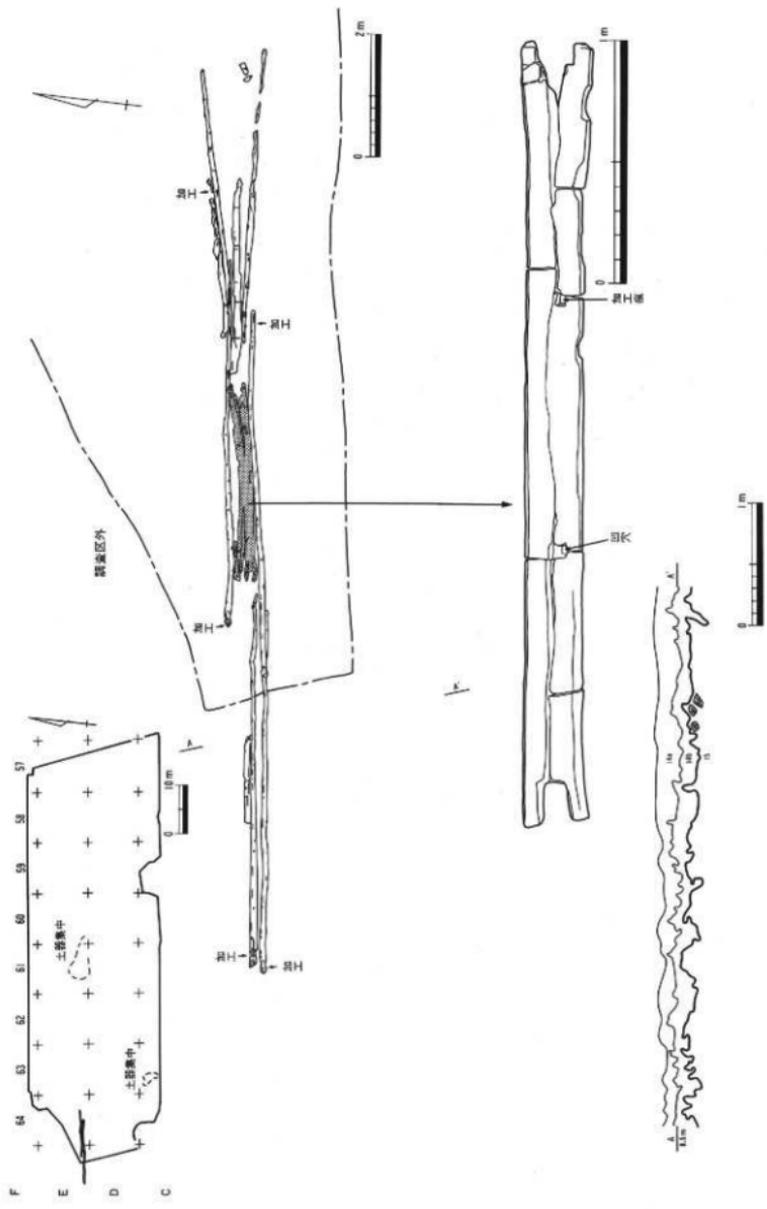
グリッドC64で検出された土器集中群である。やはり5世紀代と見られる土師器が約1㎡にわたって散乱している。高環・甕などの破片とみられるが、個体数は判然としなない。SX81601と同じ時期のものと考えられる。この土器集中群も17a層の畦畔SK817a01上にあたる部分に存在しており、意図的に置かれた可能性が高い。泥炭質土壌の発達はSK817a01上では顕著ではなく、15層の茶褐色の腐植混じりの粘土が被覆するまで、畦畔の形状をとどめていたと想像される。



第200図 16層SX81602実測図

〈木道状遺構〉〔第201図，図版163〕

調査区西端のグリッドE64・65から検出された。長さ約15m、最大幅約0.5mの範囲で垂木などの建築材、広葉樹の自然木などを平行になるように敷いてある。使用されている木材は最大長約6mを測る。この木道状の遺構はその延長線が、17a層のSK817a01と直交し、さらに東西の畦畔へと延びるような方向性をもっている。調査区内ではグリッドE64・65以外からは類似した遺構は確認できず、特に湿地状態が顕著な部分に木道を構築したのではないかと考えられる。本遺跡では西端の10区において、対応すると考えられる層から木道状遺構を検出し、盛土・杭を伴っており、水田区画の可能性を示している。8区の木道状遺構が水田区画を示しているという即断はできないが、低湿地に通行のみの機能をもった木道を構築するとは考えにくく、前述した土器集中群が、水田耕作に関わる祭祀の痕跡とみるならば、この木道状の遺構は湿地化の進んだ土地でも水田経営を試みた名残とは考えられないだろうか。



第201図 15層木造遺構実測図

14層中で検出された遺構 擬似畦畔

14層は、昭和63年の試掘の時には茶灰色粘質砂層として、一つの層として報告されている。調査時に土層観察の結果、15・16層の泥炭質粘土から漸次変化し、茶褐色を呈している部分を14b層とした。14b層は上部の14a層水田の耕作による攪拌を受けたとみられる複雑な土壌で、明確な遺構を検出することができなかった。

14 a 層
14 b 層

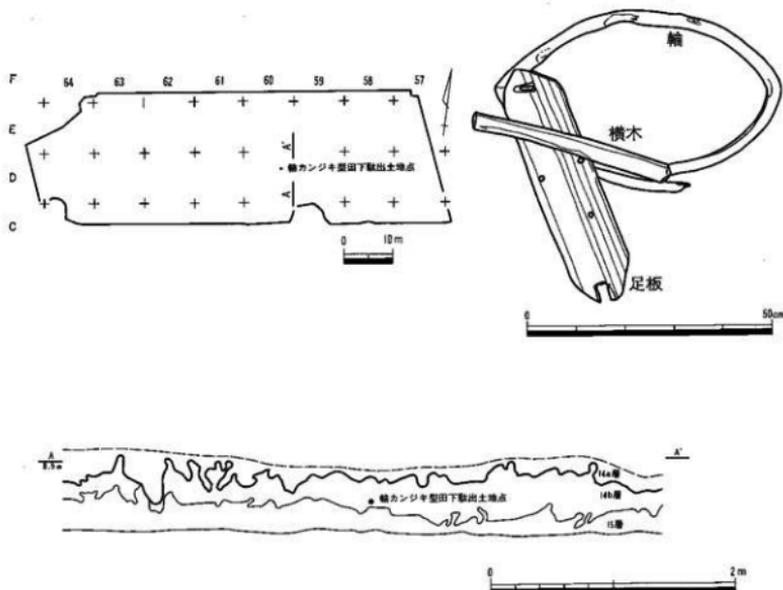
14a層は明瞭に13層と区分できる訳でなく、漸次、砂の塊が入り、砂質を強める層で、調査区全域に存在する層でもない。後述する13層から14層をはさむ15・16層の泥炭質土層までは複雑な層が重なり、単純ではない。

14b層では層中より輪カンジキ型田下駄が出土した。

〈輪カンジキ型田下駄の出土〉 [第202図、図版162]

グリッドD60の北側より出土した。10区でも同型の田下駄がほぼ年代を同じくして出土している。14b層をa層の攪拌痕跡とみると、この遺物は、14a層水田耕作期に田面に放棄され、沈み込んだものとも考えられる。「輪カンジキ型田下駄」は輪、横板および足板の3つの部位からなりたっている。本区では、下から輪、足板、横板の順で重なりあって出土した。輪は針葉樹の枝材を半分に割り、輪状にたわめたもので、輪にした状態で横58cm、縦34cmの楕円形をしている。輪の上に長さ51cm、幅12cmの足板がのっていた。足板は杉材を板目にとり、中央部に3つの穴、上部・下部に横に大きい穴が穿たれていた。上部・下

輪
横
板
足
板



第202図 14b層輪カンジキ型田下駄出土状況図

部ともに先が尖った形状をしている。足板の上にやや厚みのある横板が置かれていた。横板の両先端部付近には緊縛用の溝が削り出されている。当時の低湿地における水田農耕技術について良好な資料といえる。なお、年代を示す有効な遺物が出土していないが、グリッドD64より灰釉陶器碗が出土した。しかし、上層からの沈み込みの可能性もある。

〈擬似畦畔〉〔図版161〕

14a層上面の検出作業では明確な畦畔の盛土は把握できなかった。そのため、土層断面の分層線を目安に同じレベルで検出面を広げていくと、調査区ほぼ全域にわたり灰色砂のラインが走り、それを追っていくと隅丸方形の水田区画を示した。盛土は検出不可能であったため、ほぼ平坦な面で遺構を検出した。検出された状況が形態的に畦畔に類似することから、いわゆる「擬似畦畔B」と考えた。〔『富沢一富沢遺跡第15次発掘調査報告書』1987年仙台市教育委員会（p91～92）同報告書では「水田直下に認められる」下層上面の「畦畔上の高まり」を擬似畦畔Bと名付けている。高まりはなくとも上層水田の「耕作の影響をさほど受けない畦畔直下において」下層上面が「畦畔状に残存したものである」とふれられている。〕14a層中の灰色砂のラインは上面の区画の残存状態を検出したものではないだろうか。

擬似畦畔の成立状況は以下のように推測できる。もともと14a層中の一定のレベルでは、薄い砂層が全域にわたり堆積していた。ところが後世（14a層上面の水田）の起耕等により、畦畔部分でない水田面の部分は灰色砂層が攪拌され消滅してしまった。故に、畦畔直下の部分のみ砂層が残存し、灰色砂のラインが水田の区画を示すことになったのだろう。擬似畦畔を生じさせた水田を遺構と確認できなかったのは、13層とほぼ同区画の水田であり、堆積状況も同質の土壌が被覆していったことによると思われる。

（1）大規模な畦畔SK814a01

上層の13層の大規模な畦畔SK81301はその規模と方向から静清平野北部において確認されている条里型地割の坪境に対応している可能性がある。しかし、この擬似畦畔の段階に大規模な畦畔が存在していたかについては、断定が困難であった。それは13層のSK81301直下のグライ化した灰白色粘土が14a層上面でも残存していたこと、断面観察で14a層から大規模な畦畔の立ち上がりを確認できなかったによる。灰白粘土の範囲は第204図の全体概念図中、破線で示した部分である。13層水田のSK81301とほぼ一致する。14層の調査では、灰白色の粘土帯の周囲に灰白粘土と平行した灰色砂のラインが観察できた。灰白色粘土の下部には灰色砂の堆積がなく、畦畔の存在を確認できなかった。

調査の状況からみれば、13層水田が若干の区画の差があるものの14層水田を踏襲して、構築された水田であると思われる。灰白粘土帯の周囲の灰色砂のラインの中にはわずかに東西方向に走行するものが存在するため、大規模な畦畔は存在せず、灰白粘土を挟んで小規模な畦畔が走行していたとも考えられる。一方、SK814a01が存在し、その裾部に水田耕作により攪拌されずに残存した砂のラインであるという推定もできる。そうなるともSK814a01は存在し、坪境の畦畔を示すことになり、13層水田と同じく条里型の水田である可能性がでてくる。ここでは、坪境畦畔が存在したと想定して、裾部に灰色砂のラインがなぜ残存したのか堆積状況を模式図で推定してみたが〔第203図〕、上記の報告のとおり、両論を述べることにとどめ、断定を避けることにする。

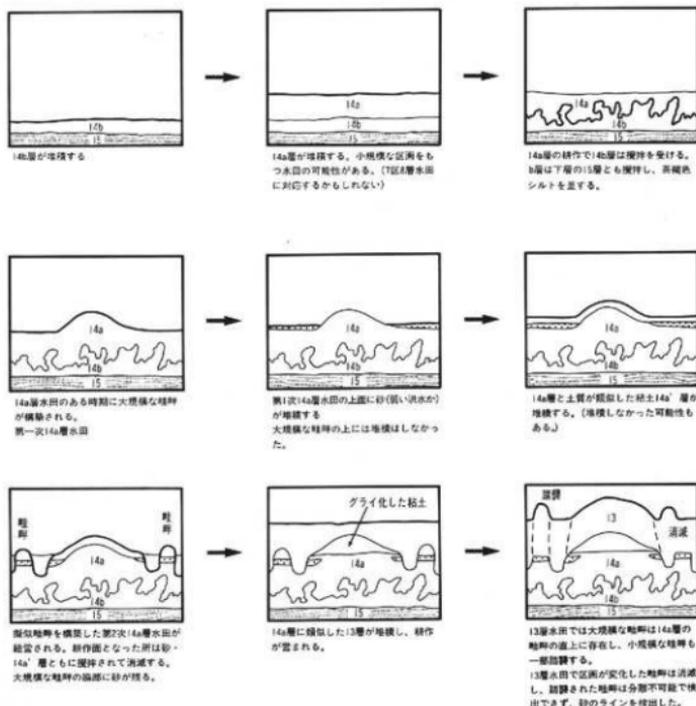
上面での区
画検出不可

砂のライン

層中の砂層

攪拌

坪界線の存
在可能性



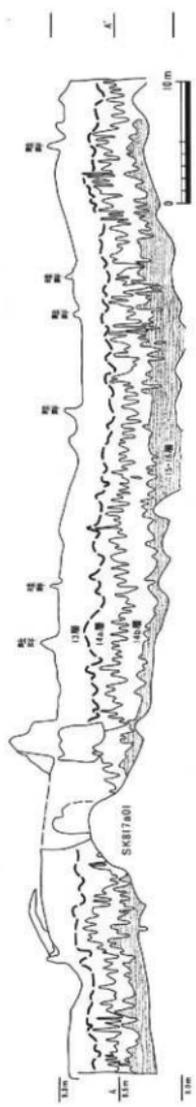
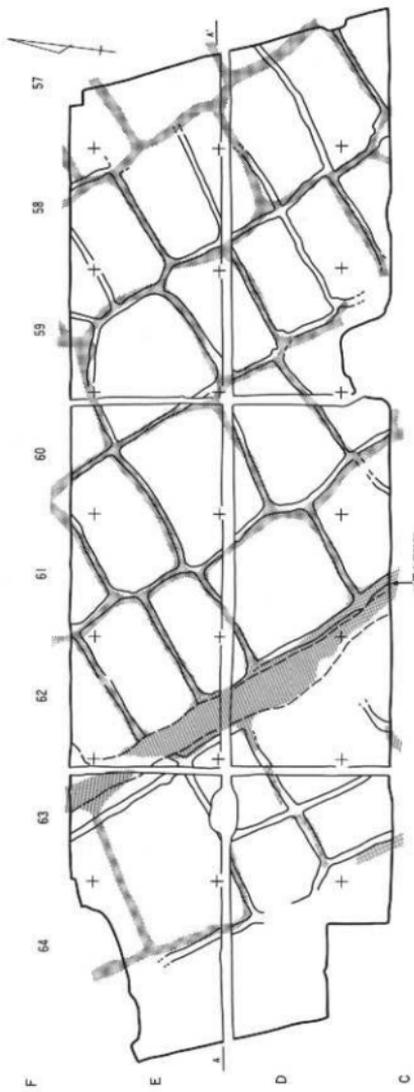
第203図 15層～13層堆積状況模式図

(2) その他の畦畔

この14 a 層の擬似畦畔と上層の13層水田の比較をしてみる。[第204図] 両者は調査区ほぼ中央部においては、踏襲関係を示している。大規模な畦畔から北東に延びる小規模な畦畔4本は完全に一致する。しかし、調査区の北東部、グリッドD57・58列の小規模な区画は13層水田の区画と明確に異なり、より区画が小さく設定されている。13層水田の交差部が亀甲形に近い区画なのに対し、14層水田ではグリッドD57・58列に存在する畦畔は南北畦畔と東西畦畔の交点は直交する。両者とも、東西に等間隔に分けた、いわゆる長地型の区画であると推定されるが、14 a 層の方がより区画が細かく設定されている。

(3) 出土遺物

14 a 層中より土師器片及び須恵器片が10数点出土した。土師器碗は底部に深切り痕を残す。灰釉陶器片は3点出土している。遺構の年代を明確に示すには乏しい出土遺物であるが、平安時代の幅に取まる遺構であると考えられる。



第204図 14a層・13層畦畔路関係図

13層上で検出された遺構 水田跡 流路

<水田跡> [第205図, 図版157]

12 層
11 層

13層水田の耕作土は緑灰茶色の腐植混じり粘土であり、調査区中央では12層の茶灰色腐植混じり粘土、東側及び西側では11層青茶灰色砂質粘土によって被覆されていた。14a層水田で畦畔の盛土が検出できなかったのは、前述したように13層水田耕作の攪拌や、一部、畦畔が踏襲されたことによる消滅であると思われる。

(1) 大規模な畦畔 [第206図, 図版158・159・160]

グリッドF63からC61にかけて南北に走行するSK81301は、後述する10a層水田期のSK810a01の直下で検出されており、下端幅1.0m~2.5m、水田面からの高さ20cm~25cmを測る。方向は北西方向に真北より約38度傾き、7区7層水田・6区11層水田の大規模な畦畔とほぼ平行であり、それぞれの間隔が約105~110mを測る。SK81301は静岡平野北部における条里型地割の坪境を示している可能性がある。以後平安期から近世まで8区では畦畔の基軸方向となる。残存状況はグリッドE62でほぼ完全な状態で検出されていたが、他の地点では洪水による浸食を受けており、グリッドD62、C61では幅を狭くする。グリッドC61では洪水による畦畔の崩落後、粗朶を敷き込んで補修した痕跡が検出された。また、グリッドF59では畦畔上に立木跡が検出されている。

条里型地割

畦畔補修

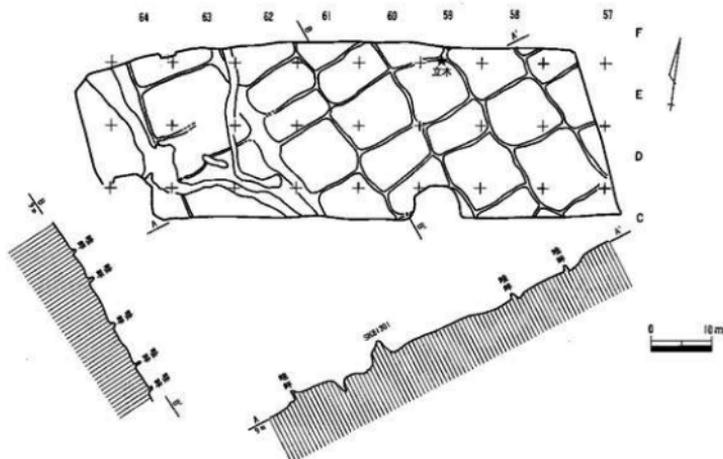
(2) その他の畦畔

水田の区画の方向は大規模な畦畔に規制され、小規模な畦畔によって区画がなされている。グリッド62以東の南北方向の畦畔は9~12m間隔でほぼ規格性を持っており、その間を東西畦畔が4.9~8.2m間隔で走行し、両者の接合部は亀甲状を呈している。南北畦畔の間隔が10m前後の数値を示すことは長地型の区画を示しているのではないだろうか。一方、SK81301以西の南北畦畔は1方向のみ検出されたが、SK81301との間隔が約15mあり、間隔が広く、やや様相が異なっている。南北方向の小規模な畦畔にも粗朶を敷きこんだ部分が検出されている。

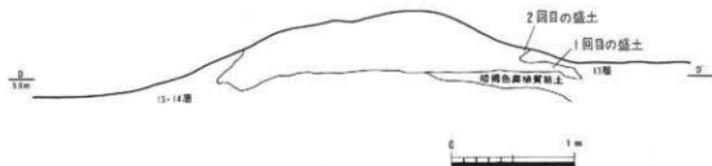
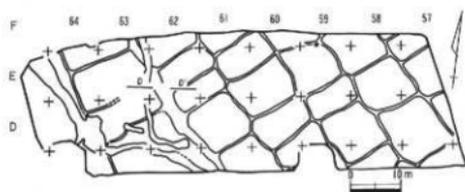
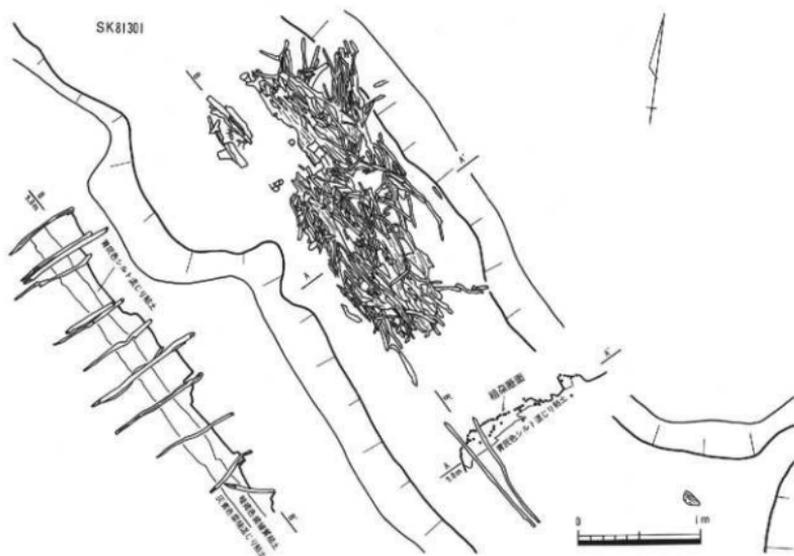
畦畔間隔

亀甲形交差

長地型区画



第205図 13層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



第206図 13層水田SK81301修復状況実測図

10b層上で検出された遺構 水田跡

〈水田跡〉〔第208図, 図版156〕

砂の被覆

10b層水田の耕作土は後述する10a層水田と同様に砂混じり砂質粘土であり、青灰色の細砂によって被覆されていた。同水田経営時に、弱い洪水によって田面に砂が覆ったものと考えられる。遺構は調査区東側のグリッド56～59列で検出されたが、西側のグリッド60～65列においては10a層水田の耕作により攪拌をうけ、分離は不可能であった。13層と10b層の間の田面には自然堆積と見られる12層（茶灰色腐植土まじり粘土）、11層（青茶灰色砂質粘土）が堆積しており、一時的に耕作が行われない状態があったことを示している。

(1) 大規模な畦畔

方向踏襲

同水田は後述するa層と共に糸里型地割の方向を踏襲する水田と考えられるが、SK81301の直上では10b層水田経営期におけるSK81301に類似した大規模な畦畔を検出するには至らなかった。その原因は被覆土の青灰色細砂がa層水田の耕作により攪拌をうけ、消滅しているためである。SK810a01がSK81301に盛土をして踏襲しているところから、規模は確認できなかったが、坪境畦畔SK810b01も存在はしていたと考えられる。

坪境畦畔

(2) その他の畦畔・水口

調査区東側に広がる畦畔は長方形の区画を構成する。東西畦畔は3.2～7.6mの間隔、これと直交する南北畦畔は3.0m～11.2mの間隔で設定されている。一部に13層水田の畦畔を踏襲しているとみられる畦畔もあるが、長地型の地割は行われていないようである。畦畔は下端幅50cm前後で耕作土の厚さが10cm前後と薄いため、直下に堆積している11層の砂質粘土が畦畔直下に畦状に残り、その上に盛土が2～3cmほど覆っている状態であった。またグリッドE58では畦畔の交点に1.2m×0.7mほどのテラス状に張り出した部分が検出されている。水口はグリッドE59において1ヶ所検出されている。田面には足跡が多数検出されたが、歩行状態を明確に示すものは少ない。

(3) 出土遺物 〔第209図〕

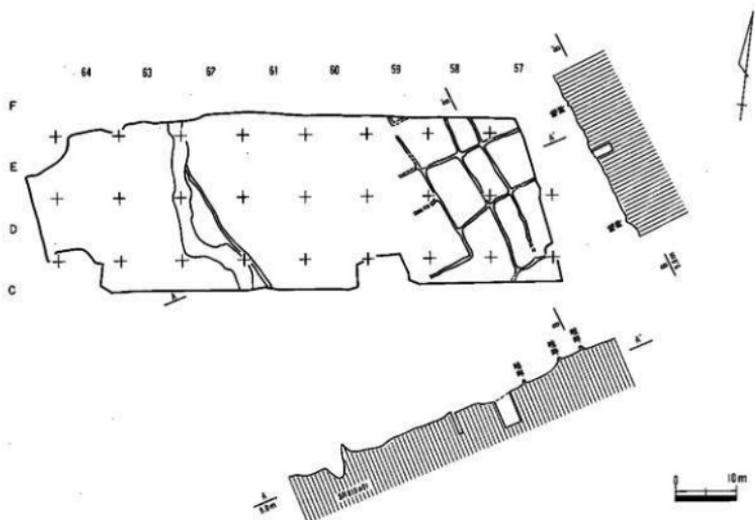
灰 釉

グリッドD58から10b層水田耕作土の被覆土の青灰色細砂の上面より旗指17号窯式と考えられる灰釉陶器が出土している。出土状態から自然堆積である青灰色細砂中の遺物であり、10a層水田耕作により、破壊されたものと考えられる。またグリッドE59・60を中心に種子などの自然遺物が出土した。

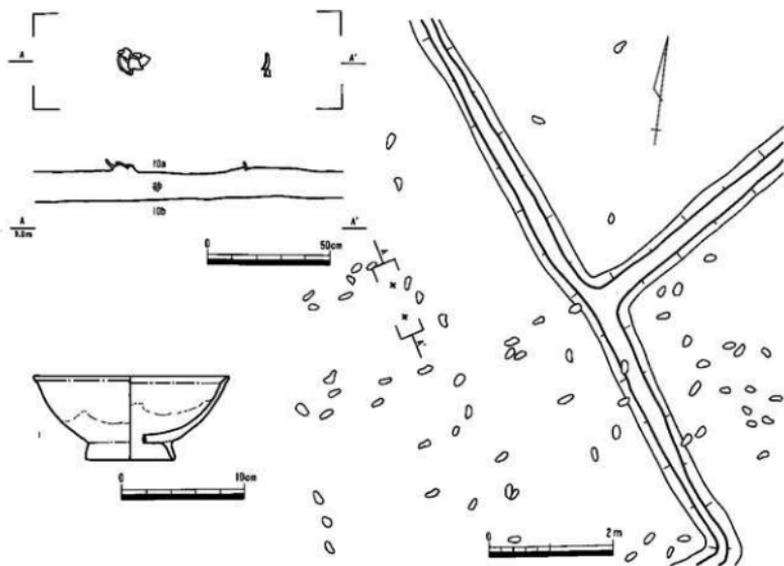


第207図 10b層水田畦畔詳細図

(6区)



第208図 10b層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第209図 10b層直上土器出土状況図

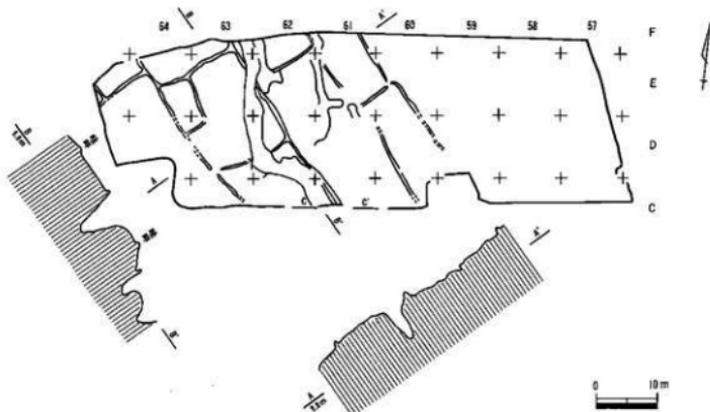
10a層上で検出された遺構 水田跡、流路

〈水田〉〔第210図，図版154図〕

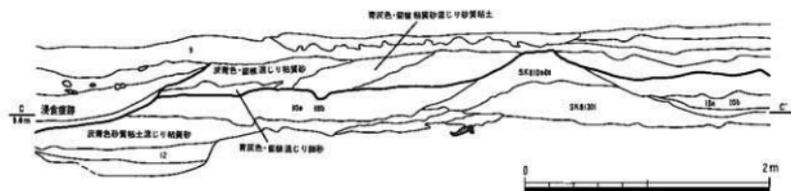
土 塚 10a層水田は調査区中央から西側のグリッド60～64列で検出した水田である。10a層水田の耕作土は砂混じり砂質粘土で層厚は約20cmを測り、シルトを主体とする9層によって被覆されていた。b層水田経営時の弱い洪水堆積による被覆の後、a層水田の経営が開始されたようであるが、a・b層ともに同一の土壌を示す。年代は明確ではないが、前項でふれた灰軸陶器がa・b層の中間で出土していることから平安時代中期以降と考えられる。

(1) 大規模な畦畔SK810a01 〔第211図，図版155〕

SK810a01の検出範囲はグリッドC61～E63で、下端幅約70～140cm、高さ22cm～30cmを測る。土層観察の結果、13層水田に認められるSK81301にシルト混じり粘土を客土をして構築している。その位置を後述する8層水田の畦畔と照合すると、一部踏襲されているのが上層に踏襲確認できる。



第210図 10a層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第211図 10a層水田SK810a01・SK81301踏襲状況土層図

(2) その他の畦畔

同水田はグリッド56～59列にかけて良好な残存状況を示す。SK810 a 01を主軸として水田が展開している。SK810 a 01と並行する畦畔は9.1m～13.8mの間隔、これと直交する畦畔は9～18mの間隔で設定されている。下端幅約40～60cm、高さ約3cmを測る。

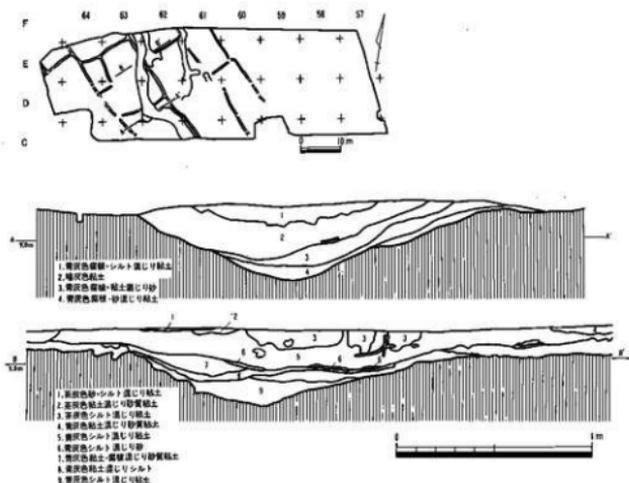
10 a 層水田は耕作中のある時期に洪水に襲われ、2本の浸食痕跡を残している

(3) 浸食痕跡1 [第212図]

グリッドD62～F63にかけて検出されたやや深い浸食で、その規模は幅1.75m～3.2m、深さ60cm前後でグリッドD・E～62・63においてクランク状に屈曲して北西から南東に走行する。覆土は微砂・シルトを主体にして腐食質が混入している。グリッドE62で人頭大の円礫とともに磁石1点、グリッドC・D62で円礫を主体とした集石や灰釉陶器1点・緑釉陶器1点・土師器数点が出土した。SK810 a 01をグリッドE62・63において浸食している。しかしそれを修復した様子は見られない。グリッドE・D62・63付近のSK810 a 01には3本の丸木杭が打ち込まれていた。杭が打ち込まれた時期は洪水の浸食を受けて消失している地点にも分布することから、洪水痕跡1が埋没した後に打ち込まれたものと推定される。

(4) 浸食痕跡2

グリッド61・62にかけて検出された浅い痕跡で、幅1.2m～3.4m、深さ25cmを測る。グリッドD61・62においてやや西側に屈曲している。覆土は11層と同様にシルトを含む細かい砂で、土層断面の観察では10 a 層水田を被覆する11層青灰色砂層と分離することが困難であった。このため11層が堆積する過程で、襲来した洪水の痕跡と考えられる。遺物はグリッドE61付近で種子が出土している。グリッドD62においてSK810 a 01を浸食しているが、シルト・砂と混じる粘土によって修復され、その上に立木の痕跡も認められた。



第212図 10 a 層水田浸食痕跡土層図

9 層

8層上で検出された遺構 水田跡

10a層水田は9層の青茶灰色泥じり粘質砂によって被覆をされていた。9層は層厚約20cmを測り、腐植土と砂がラミナを形成するところから、8層水田耕作開始まで、やや時間が経過していると思われる。

〈水田跡〉〔第214図、図版153〕

8層水田は地表下約1.2m、調査区中央のグリッド60～62列にかけて検出した水田で、調査区中央の低地に展開している。これを被覆する7層は砂・シルトを主体とする耕作土層である。同層はグリッド60～62列において5cmほど堆積しており、8層水田の遺存状況は良好であった。一方それ以外の場所グリッド56～59列およびグリッド63～65列においては7層の堆積が薄く、6層水田の耕作が8層水田に達していたようで畦畔を検出することはできなかった。

(1) 畦畔と区画

方向は舗装

8層水田で検出した畦畔は、下端幅約60cm、高さ約10cmで、杭・矢板による補強は認められなかった。検出した畦畔を数ヶ所の土層断面で観察したところ、8層水田耕作土によって築かれており、腐食土等の客土は認められなかった。主軸を北西から南東にとり、方向としては糸車型地割を踏襲しているようである。しかし、埋没河川上にあたる低地に沿ってつくられた結果のようである。調査区内においては大規模な畦畔は確認されなかった。また、検出範囲の畦畔からは明確な区画は検出できなかったが、南北畦畔2本の間隔は約15m、その間を区画する東西畦畔は約10mの間隔で設定されている。

(2) 水口 〔第213図、図版153〕

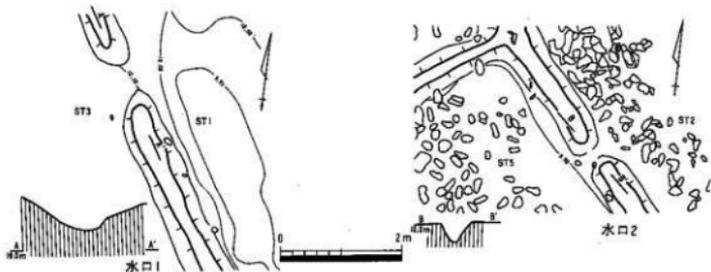
水口はグリッドF62とD61の2ヶ所で検出されている。グリッドE62では下端幅約50cm、グリッドC61では幅約18cmにわたって畦畔が切れており、後者には杭が1本打ち込まれていた。

〈浸食痕跡SX80801〉〔第215図〕

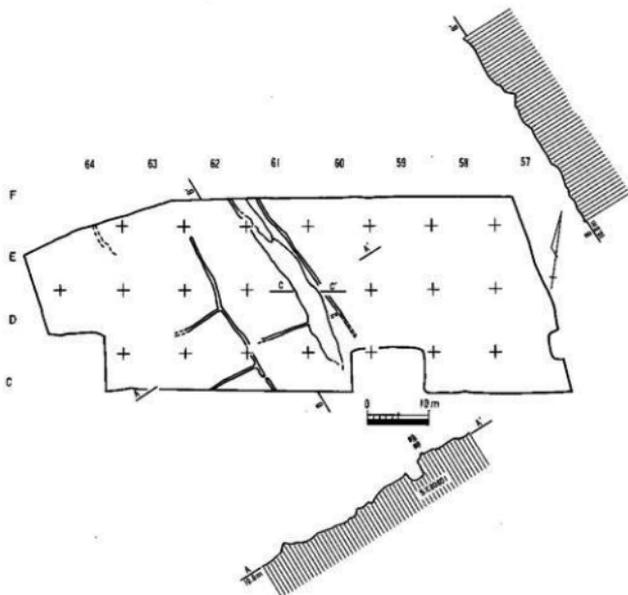
SX80801は、調査区中央の低地に沿って検出された。8層水田の平均的な標高より約25cm低く、規模は長さ約22m、幅約3m、深さ約30cm程で、浅い溝状を呈し、覆土は耕作土ブロックおよび自然堆積層である砂・シルトが混在する。内容物は8層水田の耕作土に比較して砂やシルトが多く、腐食質・泥炭等の混入は認められなかった。底部からは足跡を検出している。

〈出土遺物〉

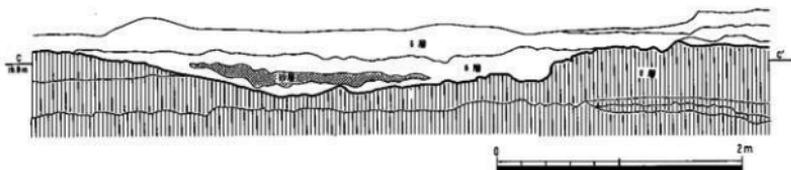
耕作土中から木製品・骨・陶磁器・種子が出土した。木製品は板状の破片数点、骨は四肢骨の一部2点、土器は3点のうち1点は灰釉陶器、他の2点は土質質の土器片である。種子は桃を中心として15点出土した。これらはグリッドE62とグリッドD61の2ヶ所に集中する傾向にある。SX80801に伴う遺物として、2枚貝1点、種子2点がある。種子2点は他の種子と同様、桃であると思われる。



第213図 8層水田水口実測図



第214図 8層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



第215図 8層水田SX80801土層図

6層上で検出された遺構 水田跡

8層水田より6層水田は灰黒色砂質粘土まじりの粘土を挟んで、漸次的に推移する。中間層である灰黒色砂質粘土まじりの粘土（7層）も水田耕作土であろう。7層の遺構の検出が不可能であったのは、攪拌によるものと思われる。7層ではイネのプラントオパールを900個/gカウントしている。

〈水田〉 [第217図, 図版151]

調査区中央グリッドC～F・60～62列に展開する畦畔は、調査区中央に北西から南東にかけての低地に沿って展開している。小規模な畦畔を検出し、その規模は下端幅40～100cm、高さは最大約15cmを計測する、植物質の混入や杭列等の補強構造は認められなかった。この畦畔によって区画された水田は、南北畦畔8.9～9.0m、東西畦畔4.0～10.0mと幅に差異が著しい。従って区画の大きさもまちまちであると思われる。枚数は5枚以上と推定されるが、四周が検出できた区画がないため、面積等は確認できない。

(1) 水口 [第216図]

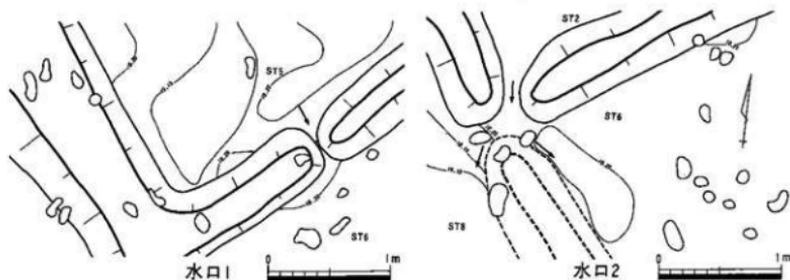
水口はグリッドD61（水口1）、グリッドE61（水口2）の2ヶ所で検出した。水口1がST5とST6の田面をつなぐのに対して、水口2はST2、ST5、ST6をつなぐ。傾斜はともに南にむけて下がっており、水源は北方向に存在すると推定される。畦畔が切断された幅は20～40cmで、高低差10～20cmを作っている。

〈杭列SX00601〉 [第218図, 図版152]

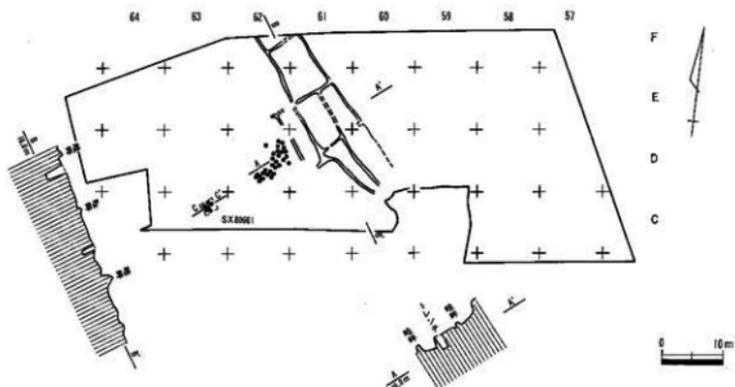
グリッドC～D・61～63列に展開する杭列であり、これらは数箇所の集中地点として検出される。杭列は北東～南西に走行しており、杭は広葉樹を主体として竹・針葉樹等の丸杭を15～65cmの不等間隔に打ち込んでいる。杭列の断面を観察したところ、一部に5層下部に認められる砂礫層が残存することが明らかになった。杭列付近の水田上面より10×10×30cm大の円礫3点、5×10×20cmの角礫2点、5×40cm大の木片数点が出土した。杭列は杭列を補強する芯材と考えられる。同水田に伴う遺構と考えられるが、杭列の配列は規則性に乏しく、水田面を区画する畦畔と認定するには至らなかった。

〈出土遺物〉

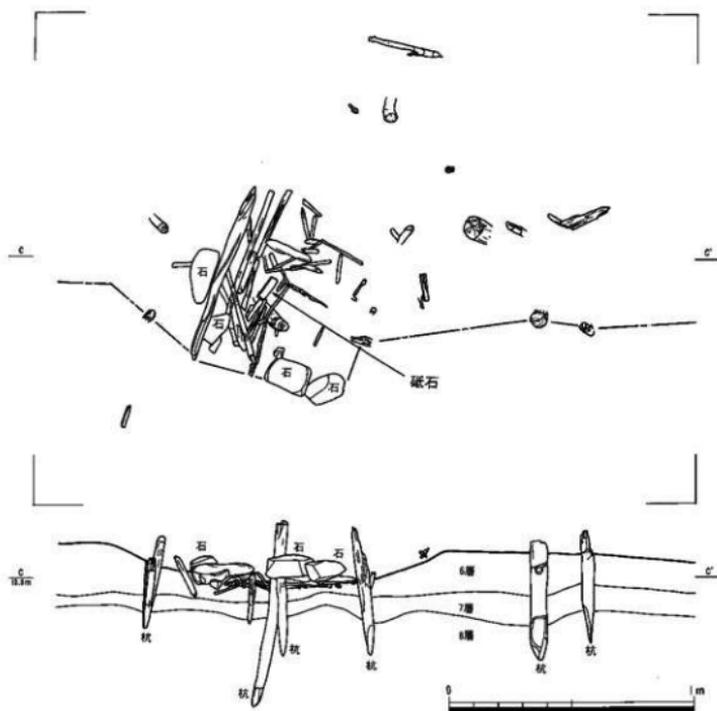
水田に伴う遺物としてはグリッドC63出土の砥石がある。グリッドD61からは漆器片1点、ヒトと思われる頭蓋骨片1点が出土し、ともに水田面直上で検出されている。グリッドE62からは陶器片1点が下層より出土した。年代を明確に示すものではない。



第216図 6層水田水口実測図



第217図 6層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第218図 6層水田SX80601実測図

水田計測表 (8区 17b層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.20	—	—	—	(32.7)	一部区外
2	7.93	—	—	—	(27.5)	区大
3	8.30	—	—	—	(17.5)	区狭
4	8.15	—	—	—	(20.0)	面積

水田計測表 (8区 13層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.00	—	—	—	—	一部区外
2	8.95	—	(長方形)	—	4.7	—
3	8.91	—	—	—	8.1	—
4	8.84	—	—	—	—	—
5	9.02	—	龜甲形	9.6	8.4	—
6	8.95	83.9	正方形	9.0	8.2	—
7	8.96	109.0	正方形	12.1	8.5	—
8	8.91	—	—	—	—	一部区外
9	8.97	—	—	—	(8.1)	—
10	8.93	80.0	扇形	9.0	6.9	—
11	8.84	50.3	長方形	9.1	4.9	—
12	8.83	—	(正方形)	10.0	8.6	一部区外
13	8.85	—	—	—	3.3	—
14	8.90	—	—	—	3.2	—
15	9.07	—	—	—	—	—
16	9.03	63.7	長方形	10.7	5.1	—
17	8.91	90.0	長方形	11.8	7.8	—
18	8.90	70.6	台形	10.5	5.3	—
19	8.87	—	(台形)	9.9	3.6	一部区外
20	8.82	—	—	—	—	—
21	9.05	—	—	—	9.7	—
22	9.01	54.6	長方形	9.5	4.9	—
23	9.02	44.2	長方形	9.2	4.1	—
24	9.00	86.7	正方形	9.4	8.8	—
25	8.97	—	—	—	(9.5)	一部区外
26	9.22	—	—	—	12.1	—
27	9.16	—	台形	(13.7)	7.5	S R 浸食
28	9.17	—	—	—	(13.6)	—
29	9.09	—	—	—	(13.7)	—

水田計測表 (8区 17a層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.29	—	—	—	—	一部区外
2	8.25	—	—	—	—	区大
3	8.19	—	—	—	(32.8)	区狭
4	8.06	—	—	—	(28.5)	面積
5	8.34	—	—	—	(15.5)	—
6	8.17	—	—	—	(18.0)	—
7	8.10	—	—	—	—	部分の檢出
8	8.08	—	—	—	(8.2)	—
9	8.00	—	—	—	—	区小
10	8.01	—	—	—	(4.3)	区狭
11	7.99	32.2	(長方形)	8.1	3.3	面積
12	7.96	—	—	—	3.7	一部区外
13	8.05	—	—	—	—	部分の檢出
14	7.93	—	—	—	—	—
15	8.05	—	—	—	—	—
16	8.01	—	—	—	—	—

水田計測表 (8区 14a層水田) 擬似畦畔

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.72	—	—	—	—	部分の檢出
2	8.71	—	—	—	—	—
3	8.70	推 46.4	長方形	9.8	5.1	—
4	8.70	—	—	—	4.4	部分の檢出
5	8.74	—	—	—	4.4	—
6	8.65	—	—	—	4.7	—
7	8.66	—	—	—	6.3	一部区外
8	8.64	—	—	—	—	—
9	8.70	—	—	—	(10.3)	—
10	8.69	75.1	扇形	9.7	8.2	—
11	8.64	49.6	台形	9.5	4.0	—
12	8.61	42.6	長方形	8.8	4.6	—
13	8.57	推 45.2	長方形	9.3	4.5	部分の檢出
14	8.61	—	—	—	—	一部区外
15	8.61	—	—	—	—	—
16	8.77	推 62.3	長方形	10.6	5.5	—
17	8.67	91.8	台形	11.1	8.1	—
18	8.67	67.2	台形	10.4	4.6	—
19	8.66	—	—	—	9.9	一部区外
20	8.89	—	—	—	—	部分の檢出
21	8.82	—	(長方形)	—	5.5	部分の檢出
22	8.84	46.7	長方形	9.3	4.2	—
23	8.82	90.4	正方形	9.7	8.5	—
24	8.75	—	(台形)	8.5	5.0	一部区外
25	8.68	—	—	—	—	—
26	8.90	—	—	—	(13.0)	部分の檢出
27	8.84	38.0	台形	7.6	5.1	—
28	8.81	—	—	—	—	部分の檢出
29	8.83	37.2	龜甲形	6.2	5.8	—
30	8.85	—	—	—	4.5	一部区外

水田計測表 (8区 10b層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.32	—	—	—	—	一部区外
2	9.28	—	—	—	8.2	—
3	9.28	—	—	—	11.5	—
4	9.33	—	(長方形)	—	3.3	—
5	9.29	90.8	長方形	8.6	3.4	—
6	9.29	34.4	長方形	12.2	2.8	—
7	9.28	—	—	—	—	一部区外
8	9.21	—	—	—	—	—
9	9.20	推 61.8	(台形)	8.3	6.3	—
10	9.15	58.6	台形	10.4	5.6	—
11	9.15	—	—	—	10.8	6.1
12	9.16	—	—	—	—	—
13	9.13	—	—	—	—	5.8
14	9.08	—	—	—	10.1	—
15	9.13	—	—	—	—	—

第61表 8区水田計測表 1

水田計測表 (8区 10a 層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.41	—	—	—	5.9	一部区外 S R 浸食
2	9.56	—	—	—	7.2	部分の抽出
3	9.47	—	—	—	(10.9)	" S R 浸食
4	9.37	—	—	—	10.4	" S R 浸食
5	9.59	—	—	—	12.8	一部区外
6	9.56	—	—	—	8.0	部分の抽出 S R 浸食
7	9.56	33.7	台形	8.0	3.9	
8	9.54	—	—	—	7.3	部分の抽出 S R 浸食
9	9.48	—	—	—	12.2	" S R 浸食
10	9.45	—	—	—	7.2	一部区外
11	9.45	—	—	—	—	部分の抽出
12	9.42	—	—	—	—	一部区外

水田計測表 (8区 6 層水田)

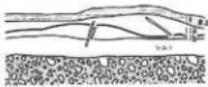
No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	10.37	—	—	—	—	一部区外
2	10.34	—	(長方形)	8.9	—	部分の抽出
3	10.22	—	(長方形)	(7.9)	—	"
4	10.22	—	(長方形)	—	(3.1)	"
5	10.25	30.6	長方形	8.5	3.7	
6	10.19	—	三角形	—	—	部分の抽出
7	10.10	—	—	—	—	"
8	10.07	推 23.7	長方形	10.1	2.9	
9	10.14	—	—	—	—	部分の抽出
10	10.15	—	—	—	—	"

水田計測表 (8区 8 層水田)

No.	標高 m	面積 m^2	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	9.96	—	—	—	15.2	一部区外
2	9.95	—	—	—	15.3	"
3	10.10	—	—	—	—	部分の抽出
4	10.10	—	—	—	10.1	"
5	9.94	—	—	—	—	一部区外

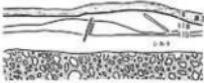
第62表 8区水田計測表 2

瀬名遺跡 8区 17b層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在藤川(長尾川支流)が南北に流れる。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	西部の地形が高く、東に行くに従って低くなる。特にS K817b01以東は顕著である。南北は北から南へ行くに従い、低くなる。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出されたが、グリッド63列の大規模な畦畔 S K817b01の西側での水田耕作の可能性は湿地状態のため、低いと考えられる。面積約1,600㎡を検出した。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	17a層灰茶褐色粘土。耕作土。
	⑤ 水田土壌	暗茶褐色粘土(畦畔部はより暗茶色が顕著である。)
	⑥ イネのプラントオーバー	<D64地点> ① 2,800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂混じり砂質粘土。自然堆積。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔 S K817b01は1号・2号各方形周溝墓のマウントを繋ぐように構築されており、下端幅4~9m、高さ約50cmを計測する。その他の畦畔は下端幅約2.5mを測る。南北・東西畦畔共にほぼ同規模である。
	⑨ 畦畔の構造	17a層水田の畦畔が杭列を伴うのに対して、17b層は杭列の存在が確認できなかった。杭頭の標高が一律に17b層よりも17a層の標高に合致するためである。したがって、土盛りによる畦畔構造であると推定される。
	⑩ 水田区画の方法	17a層水田と区画は同様である。方形と考えられる大規模な区画をとり、東西畦畔は東に行くに従い、弓状に湾曲する。
	⑪ 水田区画の形	長方形と推定される。南北畦畔は東西畦畔に直交するが、調査区東側の南北畦畔はやや西に傾いている。
用排水の状況	⑫ 枚数と面積	4枚以上と推定できるが、面積は確定できなかった。共に大規模な区画を示す。
	⑬ 田面の状態	足跡および農具による痕跡は検出されなかった。
	⑭ 水源	不明(地形の傾斜を考慮すると北方向に存在していたと推定できる。)
遺物の種類	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	下層の方形周溝墓を検出する際に杭列およびS D81801を検出した。杭列とS Dは同時期ではないことが調査から判明した。杭列は17a層水田に伴い、S Dは17b層水田の水路と考えられる。
	⑰ 水口	検出できず。
年代観	⑱ 遺物の種類	弥生土器。
その他	⑲ 年代推定の根拠	弥生時代後期と考えられる土器片が畦畔中より出土したことから推定した。
	⑳ 隣接区との対応関係	9区40層。
遺構確認面とその図	㉑ 自然科学的分析	花粉分析では、他の層と同じくスギ属が卓越している。コナラ属の出現率も大きい。
	㉒ 水田道槽としての認定根拠	(模式図)  (説明) 17a層水田畦畔直下に観察される暗茶褐色粘土が高まりを示す。水田面は判然としないがa層下層に暗茶色の粘土がわずかに存在する。

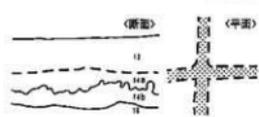
第63表 8区水田観察表1

瀬名遺跡 8区 17a 層水田（時期 弥生時代終末～古墳時代初頭）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、龜川（長尾川支流）が南北に流す。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	東西方向では西に高く、南北方向では北が高いので、北西方向から東南にかけて地形が低くなる地形と考えられる。南北方向で30cm/10m、東西方向で20cm/10mを計測する。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出された。面積約1,900㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	茶灰色泥炭層（16層。不明瞭ながら黒色腐植土と緑灰色粘土とのラミナを形成する）。
	⑤ 水田土壌	灰茶褐色粘土。耕作土。
	⑥ イネのプラントオーバー	<D64地点> ① 2,800個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	暗茶褐色粘土。（17b層）
	⑧ 畦畔の規模	グリッドE63列をはば北西から南東にかけて、直下の18層で検出した1号・2号各方形溝溝底の墳丘部をつなぐように大規模な畦畔が走行する。幅約1m、高さ約30cmの畦畔は東西・南北それぞれに走行する。グリッドD58・59では小規模な区画の痕跡が検出された。
	⑨ 畦畔の構造	小規模な区画の畦畔の痕跡を除くすべての畦畔には杭・矢板・横板による補強がされている。
	⑩ 水田区画の方法	方形溝溝底をつなぐ大規模な畦畔SK817a01を基軸に、東西畦畔が延びる。北東に向かって弓状に緩やかに湾曲しているのが特徴である。南北方向はほぼ直線的に、東西畦畔に直交する。
	⑪ 水田区画の形	検出範囲で、最大東西約29m、南北約28mの大きな区画を示す。方形を意識した区画と考えられるが四方をめぐる畦畔が検出されていないので、詳細は不明である。
	⑫ 枚数と面積	大規模な区画は6枚以上と推定されるが面積は確定できない。小規模な区画で面積が確定できたのは1枚で32.2㎡を計測する。
用排水の状態	⑬ 水源地	不明（地形を考慮すると北方向に展開していたことが想像できる）。
	⑭ 自然流路	なし。
	⑮ 水路	なし。
遺物の種類	⑯ 水口	木桶状の木製品が2ヶ所で出土した。主軸を南北に向けて東西畦畔を横切るように敷設してあった。導水の役目をしていただと考えられ、広義の水口と考えてよい。
	⑰ 遺物の種類	弥生土器。古式土師器。西本輪（線）。田下駄。二又鋤。
年代観	⑱ 年代推定の根拠	年代を示す有効な遺物は出土していないので隣接区との対応関係から推定した。
	⑲ 隣接区との対応関係	7区10a 層水田。9区38層水田。
その他	⑳ 自然科学的分析	花粉分析における木本花粉のうち、スギ属は8区における最大出現値を示す。
	㉑ 水田遺構としての認定根拠	（模式図）  （説明） 泥炭質土壌に被覆されていたので、遺構の残存状況は良好であった。畦畔の高まりおよびそれを補強する杭列・横板等によって認定される。

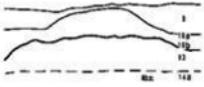
第64表 8区水田観察表 2

瀬名遺跡 8区 14a層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、懸川(長尾川支流)が南北に流れる。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	ほぼ平坦な面で地形的変化は少ない。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出された。面積約1,700㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	13層。緑灰茶色砂質粘土。
	⑤ 水田土壌	上層は茶色シルト、下層は灰褐色シルト層に分層される。しかし、この14a層は明瞭に13層と分層できない。
	⑥ イネのプラントオパール	<C59地点> ① 4,700個/g ③ 2,800個/g ② 4,300個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	14b層は15・16層の影響をうけ灰褐色を呈し、攪拌痕が顕著である。
	⑧ 畦畔の規模	砂のラインが残存していたところから、「疑似畦畔」として認定をした。「富沢遺跡第15次発掘調査報告書」1987仙台市教育委員会。
	⑨ 畦畔の構造	詳細は不明だが、盛土による畦畔であったと推定される。
	⑩ 水田区画の方法	埋没条里制にともなう水田区画と考えられるが、坪境を示す大規模な畦畔が検出できなかった。大規模な畦畔が北西に約38度傾く13層に極めて近い区画である。
	⑪ 水田区画の形	長方形を基本とするが、グリッドE59の北側で弧を描く小規模な畦畔があり、形が不定形である。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	30枚以上と推定される。面積が確定できるのは8枚で、平均で約58㎡を計測する。最大は約92㎡、最小は約37㎡である。
	⑬ 田面の状態	13層と明瞭に区分できないため、土層断面を手がかりに検出したところ、砂のラインが畦畔を構成していた。平面に検出したため、畦畔の規模は確認できない。
遺物の種類	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	検出できず。
	⑰ 水口	検出できず。
年代観	⑱ 遺物の種類	土師質土器。須臾器。灰輪陶器。
	⑲ 年代推定の根拠	出土土器と前後の土層の関連による。平安時代の範囲に収まること以外は不明。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	
	㉑ 自然科学的分析	13層と明瞭に区別できないため、詳細は不明だが14b層からは、他の層と同じくスギ属の卓越した出現が認められる。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 明瞭に13層と分層ができないので、分層線に従って一定のレベルで面を広げたところ、畦畔状に残る砂のラインを検出した。「富沢—富沢遺跡第15次発掘調査報告書」1987 仙台市教育委員会 でいわれたところの疑似畦畔Bとして認定した。

第65表 8区水田観察表3

瀬名遺跡 8区 13層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、総川(長尾川支流)が南北に流行する。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	北西から南東にかけて傾斜している。S R81301の方向も同一である。南北方向に30cm/10m傾斜している。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域で検出され、面積約2,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	12層。茶灰色腐植層じり粘土。
	⑤ 水田土壌	13層。緑灰色砂質粘土。
	⑥ イネのプラントオーバー	<E59地点> ① 1,400個/g ③ 600個/g ② 1,500個/g ④ 2,600個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	14層。茶灰色粘質砂。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔S K81301は幅1.0~2.5m、高さ20~25cmを測る。
	⑨ 畦畔の構造	盛土による畦畔。杭列による補強は認められない。大規模畦畔は洪水により破壊された箇所を粗雑などで修復した遺構が検出された。
	⑩ 水田区画の方法	埋没条里坪壇の畦畔と考えられるS K81301は北西に約38度傾き、それを基軸に小規模畦畔が区画する。グリッド62以南の南北方向の畦畔は9~12m間隔でほぼ規格性を保っているが、S K81301以西では南北畦畔の幅が15mを計測し、やや様相が異なっている。
	⑪ 水田区画の形	隅丸長方形を基本とし、畦畔の区画は亀甲型を呈する。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	29枚以上と推定される。うち面積を推定できるものは10枚で、平均約73㎡を計測する。最大は109㎡、最小は44㎡である。
	⑬ 田面の状態	ほぼ平坦で、足跡が検出されている。歩行状態を示すものは少ない。
	⑭ 水源	不明。
遺物の種類	⑮ 自然流路	S R81301。
	⑯ 水路	検出できず。
	⑰ 水口	2か所。
	⑱ 年代推定の根拠	年代決定できる遺物が出土していないので、詳細は不明だが、前後関係から推定した。
その他	⑲ 隣接区との対応関係	1区の19層。2/3区の6層。5区の8層。6区の11層。7区の7層。9区の20層。 埋没条里型地割の坪壇と考えられる大規模な畦畔が確認される。
	⑳ 自然科学的分析	花粉分析で、上・中・下と3ヶ所の試料を分析した。各試料とも他の層と同じくスギ属、コナラ属が卓越する。草本花粉はカヤツリグサ科、シダ類胞子が出現している。
遺構確認面とその図	㉑ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 大規模な畦畔および小規模な畦畔の高まりによって認定をした。

第66表 8区水田観察表4

瀬名遺跡 8区 10b層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、瀬川(長尾川支流)が南北に流れる。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	東西方向は西から東にかけて30m/10m傾斜し、南北方向は北から南にかけて傾斜しているが、変化は少ない。
	③ 水田の範囲と面積	被覆土壌が堆積しているグリッド56~59列では水田遺構が検出できたが、グリッド61~65列では10a層との分離ができず、水田遺構の検出はできなかった。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	10a層灰茶青色砂混じり粘質砂(一部砂が被覆する部分がある)。
	⑤ 水田土壌	砂混じり粘質粘土・砂質粘土。
	⑥ イネのプラントオパール	<D・E59地点> ① 0個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	青茶灰色砂質粘土(自然堆積。最下部でラミナを形成)。
	⑧ 畦畔の規模	10a層で検出した大規模な畦畔は10b層でも存在したと考えられるが、分離ができず、明確ではない。しかし、10a層の大規模な畦畔S K810a01は13層の大規模な畦畔S K81301から踏襲していることが、土層断面で確認できたので、存在していたと考えられる。
	⑨ 畦畔の構造	盛土による畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な畦畔は検出されなかったが存在はしていたと考えられる。それを基軸に小規模な畦畔が敷定されており、並行する畦畔は3.2~7.6mの間隔、直交する畦畔は3~11.2m間隔である。
	⑪ 水田区画の形	北西から南東方向を主軸とし、区画は長方形を基本とする。長地割区画は踏襲されていないと推定される。
	⑫ 枚数と面積	15枚以上と推定されるが、面積が確定または推定できたのは4枚で、最大は推定61.8㎡、最小は30.8㎡を計測する。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	グリッドE58では畦畔の交差部にテラス状の張り出し部が検出されている。長辺1.2m、短辺0.7mを測る。田面には多数の足跡が検出されているが、歩行状態を明確に示すものは少ない。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	洪水による浸食が2本検出された。
	⑯ 水路	不明。
遺物の種類	⑰ 水口	1か所。
	⑱ 遺物の種類	灰釉陶器。種子。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	水田を被覆する青灰色細砂上面より出土した灰釉陶器が、平安時代中頃を示すことによる。
	⑳ 隣接区との対応関係	
その他	㉑ 自然科学的分析	
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 大規模な畦畔の検出は不可能であったが、小規模な畦畔の残存状況が良好であった。 プラントオパールのカウントは0個/8であったが、小規模な畦畔の盛土が検出できたことから認定をした。

第67表 8区水田観察表5

瀬名遺跡 8区 10a層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、樺川(長尾川支流)が南北に流行する。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。洪水による浸食もほぼ同じ方向をとっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区中央から西側に限られ、東側は6・7層水田の耕作により消滅している。約1,900㎡の水田を検出した。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	9層。青茶灰色砂混じり粘質砂。
	⑤ 水田土壌	10a層。灰茶青色砂混じり粘質粘土。
	⑥ イネのプラントオパール	<E59地点> ① 0個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂混じり粘質粘土(10b層)。
	⑧ 畦畔の規模	埋没条里型水田と考えられる区画をしており大規模な畦畔を基軸に小規模な畦畔が展開する。その大規模な畦畔は幅0.86m、高さ0.22mを測る。
	⑨ 畦畔の構造	盛土による畦畔。杭列による補強は認められない。大規模畦畔は下位の13層水田の畦畔にシルト混じり粘土を盛土して構築してあった。
	⑩ 水田区画の方法	条里坪境畦畔と考えられるSK810a01は北西に約38度傾き、それを基軸に小規模畦畔が区画する。
	⑪ 水田区画の形	長方形を基本とした長地型の区画。8層水田に比べ、より長方形に近い形である。
用排水の状況	⑫ 枚数と面積	12枚以上と推定される。うち面積を推定できるものは1枚で33.7㎡を測る。
	⑬ 田面の状態	グリッド60～65では自然流路によって、田面が侵食をうけている。またグリッド56～59は上層の8層水田の耕作で、田面が削平を受け、検出不可能であった。足跡が多数検出されたが、歩行状態を示すものは少ない。
	⑭ 水源	不明。
遺物の種類	⑮ 自然流路	洪水による浸食痕跡を2本残す。
	⑯ 水路	検出できず。
	⑰ 水口	1か所。
年代観	⑱ 遺物の種類	灰輪陶器。緑輪陶器。土師器。
	⑲ 年代推定の根拠	10a・10b層の間より出土した灰輪陶器が示す年代より推定した。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	2/3区の3層・5区の3層・6区の5層。
	㉑ 自然科学的分析	花粉分析ではスギ属、コナラ属などの出現が顕著である。イネのプラントオパール分析検査では、0個/8であったが、花粉分析では、イネ科の花粉が検出されている。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
	(説明)	9層青茶灰色砂混じり粘質砂層によって被覆をされているので、畦畔の残存状況は良好である。大規模な畦畔および小規模な畦畔の高まりによって認定される。

第66表 8区水田観察表6

瀬名遺跡 8区 8層水田(時期 中世~近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、瀬川(長尾川支流)が南北に流れる。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	ほぼ平坦な面であるが、グリッドE63にやや傾斜の高い地点がある。東方向へ20cm/10m傾斜する。
	③ 水田の範囲と面積	推定で約2,900㎡。このうち調査区中央で約900㎡の水田跡を検出した。調査区中央部以外の場所は、7・6層の耕作が速して削平されたようであり、畦畔を検出することは不可能だった。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	7層。粘質粘土混じり粘土・腐植土、粘質砂混じり粘土(タンニン鉄を多く含む)。耕作土と考えられる。プラントオーバーも900個/8カウントしている。
	⑤ 水田土壌	8層。粘質粘土混じり粘土・腐植土、粘質粘土混じり粘土。
	⑥ イネのプラントオーバー	<D64地点> ① 2,800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	9層青茶灰色砂混じり粘質粘土(自然堆積で砂と腐植土が不明瞭ながらミナを形成)。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔は検出されず、小規模な畦畔で構成される。畦畔の形状は6層水田に似ている。中央部の幅24mほどの低地に沿って畦畔を検出した。下端幅約60cm、高さ11cmを計測する。
	⑨ 畦畔の構造	畦畔を補強する杭列は認められなかった。畦畔の解体時に3本の杭を検出したが、いずれも単独で出土したものである。
	⑩ 水田区画の方法	長地型と思われる地割で、小規模な区画であると思われる。検出した南北畦畔の間隔は約15m。その間を区画する東西畦畔は約10mの間隔を計測する。
	⑪ 水田区画の形	北西から南東方向を主軸とし、区画は長方形を基本とする。上層の6層水田の区画よりも長方形に近い。
用排水の状況	⑫ 枚数と面積	5枚以上と推定されるが、面積が確定できる面はいずれも調査区外へのびているため、不明である。
	⑬ 田面の状態	被覆土壌が堆積した後に7層水田の耕作が8層水田の一部を削平している。部分的に足跡が検出された。
	⑭ 水源	不明。
遺物の種類	⑮ 自然水路	なし。
	⑯ 水路	検出できず。
	⑰ 水口	2か所。
年代観	⑱ 遺物の種類	板状の木片。骨(四肢骨)。土器(土師質土器・陶器)。種子(桃)。
	⑲ 年代推定の根拠	8層中から出土した陶器の示す年代から推定した。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	9区10層水田。
	㉑ 自然科学的分析	花粉分析の結果、スギ属の出現は他の層に比べても卓越している。イネ、カタツリグサ、シダ類種子も出現している。
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 被覆土壌が耕作土と考えられるため、削平を受け調査区一部の検出にとどまったが、グリッド60~62列の標高が低い部分において被覆土壌が厚さ約20cmにおよび、畦畔の残存状況が良好であった。高さ約11cmの畦畔の盛土によって認定される。

第69表 8区水田観察表7

瀬名遺跡 8区 6層水田(時期 中世~近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の中央やや西側に立地し、西に隣接する9区との間には、現在、継川(長尾川支流)が南北に流行する。東隣の7区との間には幅約3mの現用道路をはさむ。
	② 地形面の変化	緩やかに南へ傾斜する。10cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	推定3,210㎡。このうち490㎡の水田を検出した。調査区中央の低地以外では、4層の耕作、産業廃棄物の投棄による攪乱をうけ、畦畔の確認ができなかった。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	第5層。青灰色砂質砂混じり粘質砂。灰青色粘質砂、砂礫(自然堆積)による被覆。
	⑤ 水田土壌	第6層。茶青色砂混じり砂質粘土および腐植土、粘質砂混じり粘土(耕作土)。
	⑥ イネのプラントオパール	<D64地点> ① 900粒/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	灰黒色砂質粘土混じり粘土(タンニン鉄を多く含む)。
	⑧ 畦畔の規模	小規模な区画を構成する畦畔で、下端幅42~118cm、最大高14.7cmを計測する。
	⑨ 畦畔の構造	盛土による畦畔。数か所の杭の集中地点が検出されているが、配列に規則性がなく、水田を区画する杭列と認定するには至らなかった。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な畦畔は検出されず、主軸を北西から南東にかけて設定した長地型の小規模な区画である。南北畦畔は8.9~9.0mであるが東西畦畔は4.0~10.0mと幅に差がある。
	⑪ 水田区画の形	長方形を基本とするが、低地の等高線に合わせて長軸を設定しているため、形は不定形である。
用排水の状態	⑫ 水取	不明。
	⑬ 自然水路	なし。
	⑭ 水路	検出できず。
年代観	⑮ 水口	2か所で水口とみられる畦畔の途切れる箇所がある。ともに南にむけて下がっている。
	⑯ 遺物の種類	陶器。漆器碗。頭蓋骨。磁石。
	⑰ 年代推定の根拠	層中より出土した陶器の示す年代から推定した。
その他	⑱ 隣接区との対応関係	7区2層水田。
	⑲ 自然科学的分析	花粉分析の結果、木本花粉は、マツ属が他の層に比べ卓越して出現しており、杉属は大幅に減少する。
遺構確認面とその図	⑳ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 自然堆積とみられる砂礫および砂質粘土に被覆されていたため、調査区の一部の検出にとどまったものの、畦畔は良好な遺存を示した。箇所によっては畦畔の高さに差異があるが、しっかりと盛土により認定をした。

第70表 8区水田観察表 8

第7節 9区において検出された遺構

1. 基本層序

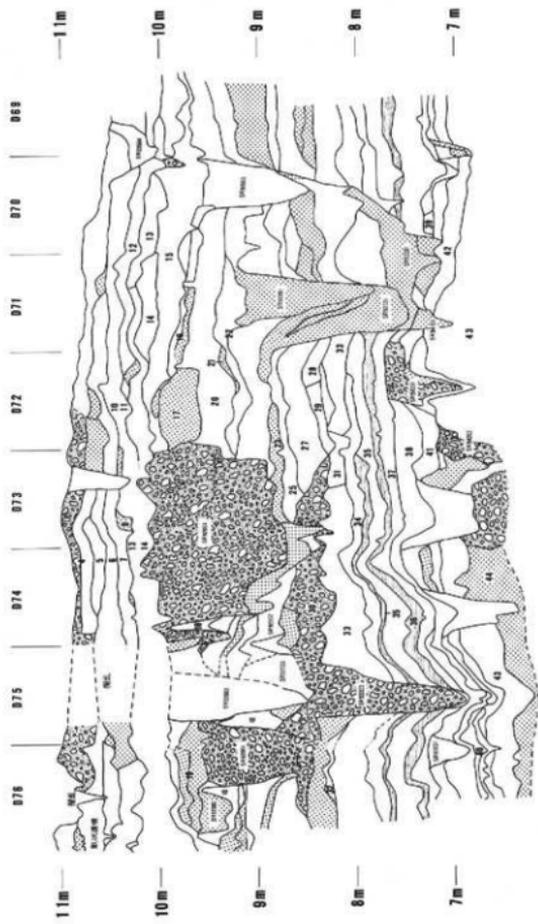
9区は、平成元年度4月より調査を開始した。翌年平成2年11月までの20ヵ月間で、地表下約5mの深さまで掘り下げ、土層を大きく45層に分層し、そのうち13面にわたる遺構面を重層的に検出することができた。

弥生後期から近世までの8面の水田跡、弥生中期の方形周溝墓、そして各時期にわたる流路跡である。

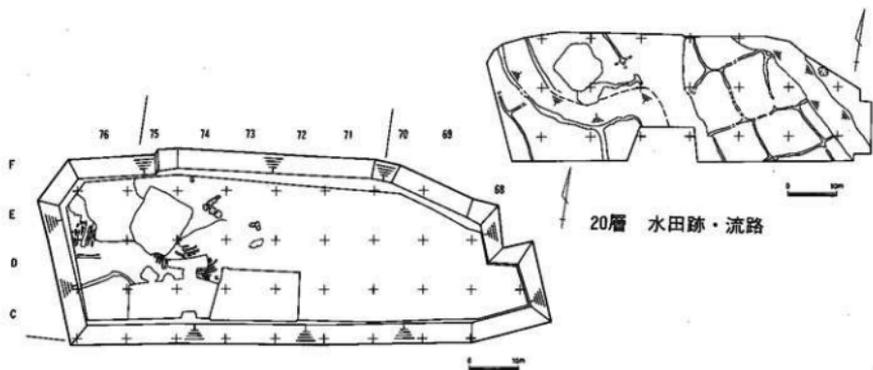
層序	土色および土質	観 察	イネのプラントオパール採取地点 (個/g)	遺 構	年 代 期
1 層	灰青色 礫・腐植混じり粘質砂	表土(畑土)	C72: 1900		
2 層	茶灰褐色 礫・腐植混じり粘質砂		" 0		
3 層	灰色 粘質砂	………ここまで客土とみられる………	" 0		
4 層	青灰色 砂		" 0		
5 層	暗褐色 礫混じり砂質粘土	耕作土 西側にのみ存在 管状発達	" 0~ 900	鉄伏遺構、土坑	近世~近代
6 層	暗灰青色 砂・腐植混じり砂質粘土	S R 90501 砂と粘質砂のミナチ ~ S R 90504 により供給、侵食を受け それぞれ一部にのみ存在	" 2000		
7 層	暗灰青色 礫・砂混じり砂質粘土		" 0		
8 層	青色 礫・粘質砂混じり砂		" 0		
9 層	灰褐色 砂・腐植混じり砂質粘土		" 0		
10 層	青灰色 腐植・砂混じり砂質粘土	耕作土 東半にのみ存在	" 0	水田	近世
11 層	灰青色 腐植混じり砂質粘土	東端にのみ存在 10層と分離困難	" 0~ 900		
12 層	暗褐色 腐植混じり砂質粘土	東半にのみ存在	" 0		
13 層	暗灰青色 砂混じり砂質粘土	耕作土 西側で厚く、粘性強い	" 0~ 900	水田	(中世末~近世)
14 層	高灰色 砂混じり粘土	西側では13層と分離困難 東側では黄色砂含む	" 900		
15 層	茶灰色 腐植・砂混じり砂質粘土	東側にのみ存在 青灰色の点多く含む	" 1700		
16 層	青灰色 腐植混じり砂質粘土	東側一部にのみ存在 S R 92005からの供給	" 0~ 3800		
17 層	灰褐色 腐植・砂混じり砂質粘土	東側一部にのみ存在 S R 92004からの供給	" 600		
18 層	青灰色 砂混じり砂質粘土	西側にのみ存在			
19 層	青灰色 粘土混じり粘質砂	西側にのみ存在 S R 92001からの供給	" 1300		
20 層	青灰色 粘土	耕作土 2層に層分でき、下層は暗い色 炭酸鉄混	E72:5200/D76:9400	水田、流路	中世
21 層	青灰色 砂	中央の一部にのみ存在	C72: 0		
22 a 層	青灰色 砂質粘土	S R 92201からの供給	E72: 0/D76: 900		
22 b 層	青灰色 腐植混じり粘土	耕作土 覆持されている 東手でa層と分離可能	C72: 1600	水田、流路	平安末~中世
23 層	青褐色 砂混じり粘質砂	西側にのみ存在	C72: 0		
24 層	青色 粘土混じり砂質粘土	西側にのみ存在	" 0		
25 層	茶褐色 粘土混じり砂質粘土	耕作土?	E72: 0/D76:2900	流路、流路	平安
26 層	青褐色 砂混じり粘質砂	中央にのみ存在	C72: 0		
27 層	灰青色 砂混じり粘土		E72: 0/D76:1700		
28 層	青灰色 砂混じり粘土	中央にのみ存在	E72: 1900		
29 層	明青灰色 砂混じり砂質粘土		C72: 0		
30 層	青色 砂礫	S R 93303の覆土			
31 層	青褐色 腐植混じり砂	S R 93302の覆土			
32 層	暗灰色 腐植混じり粘土		" 500		
33 a 層	灰褐色 粘土	耕作土	D76: 0	水田、流路	古墳後~奈良
33 b 層	茶褐色 粘土				
34 層	暗灰青色 粘土				
35 a 層	黒褐色 黒泥		D69: 700~ 4300	木道伏遺構	古墳中
35 b 層	青灰色 黒泥腐植混じり粘土	黒泥質のラミナあり			
36 層	黒褐色 黒泥	最も植物質多く含む	" 0		
37 a 層	暗灰色 粘土	耕作土	" 5400~10900	水田	弥生末~古墳初
37 b 層	青灰色 砂質粘土	西側一部にのみ存在 S R 93801より供給			
38 層	暗青灰色 砂混じり粘土	耕作土	" 4000~10900	水田(流路)	弥生中後~古墳初
39 層	灰褐色 砂質粘土	西側一部にのみ存在 スコリア含む			
40 層	黒灰色 粘土	耕作土 西側と東側にのみ存在 41層を巻き上げる	D71: 0/C76:8300	水田(流路)	弥生中後~弥生後
41 層	青灰色 砂質粘土	周溝墓基盤礫層 S R 94202より供給	D69: 700~ 2500	方形周溝墓、溝	弥生中後
42 層	黒灰色 黒泥質粘土		" 0~ 5300	溝、流路 石岸	弥生中
43 層	暗青灰色 粘質砂		" 0		
44 層	青灰色 粘質砂		E71: 0		
45 層	青灰色 砂礫		" 0		

第71表 9区土層観察表

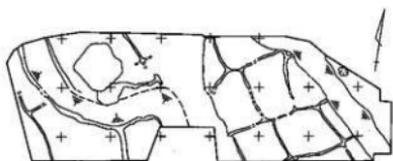
(9区)



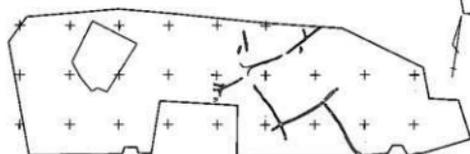
第219图 9区基本土壤横式图 (水平: 500厘米; 50)



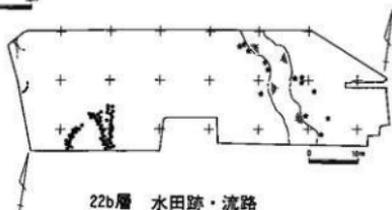
5層 畝状遺構・土坑



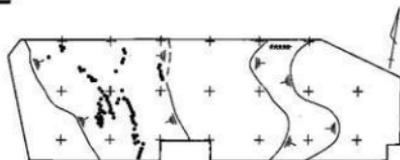
20層 水田跡・流路



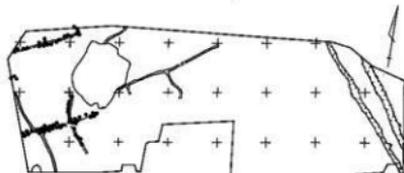
10層 水田跡



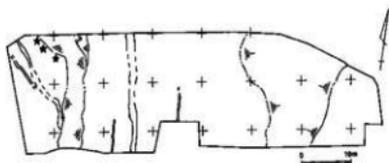
22b層 水田跡・流路



25層 流路・杭列

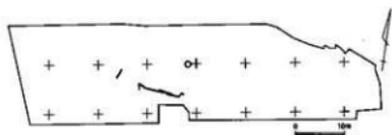


13層 水田跡

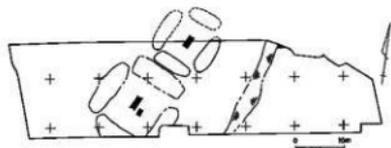


33層 水田跡・流路

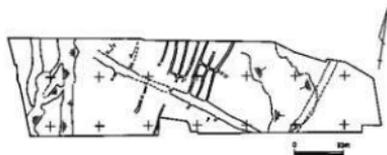
第220図 9区遺構変遷図1



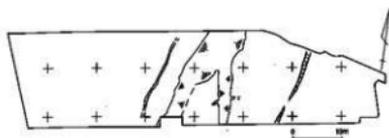
35層 木道状遺構



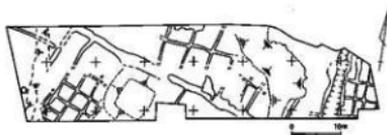
41層 方形周溝墓



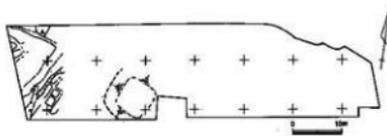
37a層 水田跡



42層 流路・溝状遺構



38層 水田跡



40層 水田跡

第221図 9区遺構変遷図2

2. 遺構の変遷

泥炭質 42層上で検出された遺構 流路・溝
9区において最も古い人間の営みのとらえられたのは42層上面である。42層は泥炭質の非常に強い粘土層である。

〈自然流路〉

調査区の中央に、北から南に向かって流れていたと思われる自然流路があり、東西トレンチ付近で2本に枝分かれしている。流路の幅は最も広いところで約8mあり、枝分かれした後は、東側の流路(SR94201)が約2m、西側の流路(SR94202)が約4m程であった。深さは約60~70cmを測る。砂の堆積の上に多量の礫がレンズ状にたまっていたことから、後にこの流路に沿って洪水流が走ったことがわかる。

〈溝状遺構〉 [第223図, 図版208]

人工的なものとみられる溝が3本確認されている。うち2本は、流路とほぼ平行に南北方向につくられている。東側の溝(SD94201)は幅1.5~2m、深さ20~30cmで、底が狭く深く掘り込まれていた。西側の溝(SD94202)は幅約0.5m、深さ10cm以下の浅いものであった。他に遺構がみられないので、この溝の性格については不明だが、西側の溝(SD94202)は、ちょうど上層で1号方形周溝墓の主体部、2号方形周溝墓の第2主体部のあったところを結んでおり、南北両端ともその部分で途切れている。周溝墓の構築過程との関係も考えられるかもしれない。東側の溝は掘り方上端がはっきりしなかったところから、時期が異なり、上層の41層中につくられたものとも考えられる。もう1本の溝(SD94203)は流路の支流(SR94201)を横切るようにつくられている。幅が0.5~0.7m、深さが15~30cmで、流路に近づくほど広く深くなる。全長は約6m程で、流路を中心に両側へ約2mずつ枝が出されているように見える。流路を利用した水利施設である可能性が高いが、何のために、何処へ水を引いたのか、周囲から対応する遺構は検出されなかった。ただし、42層の土壌からはイネのプラントオパールが高い値で検出されており、水田土壌である可能性もある。もし42層が水田であったならば、SD94203は流路から水田へへの導水路であった可能性がある。

導水路

P. O. 高値

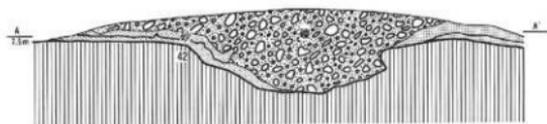
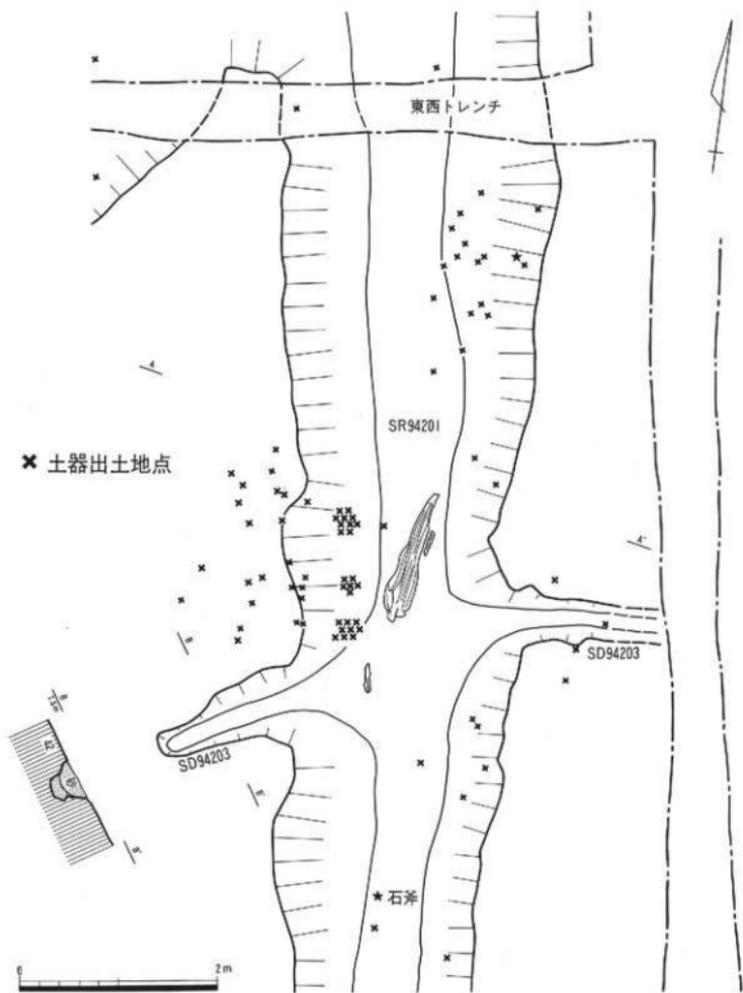
条痕文土器

〈遺物と年代観〉 [第222図, 図版208]

42層中からは、打製石斧破片2点、弥生中期のものと思われる条痕文の付いた土器片が1片出土した。また、層の直上と流路内からは、120片程の土器細片が出土し、条痕文の付いたものが数片みられた。特にSR94201内のSD94203が横切る北側辺りに集中しており、祭祀的な性格も考えられそうである。



第222図 42層上SR94201内出土土器拓影



第223図 42層上SD94203実測図

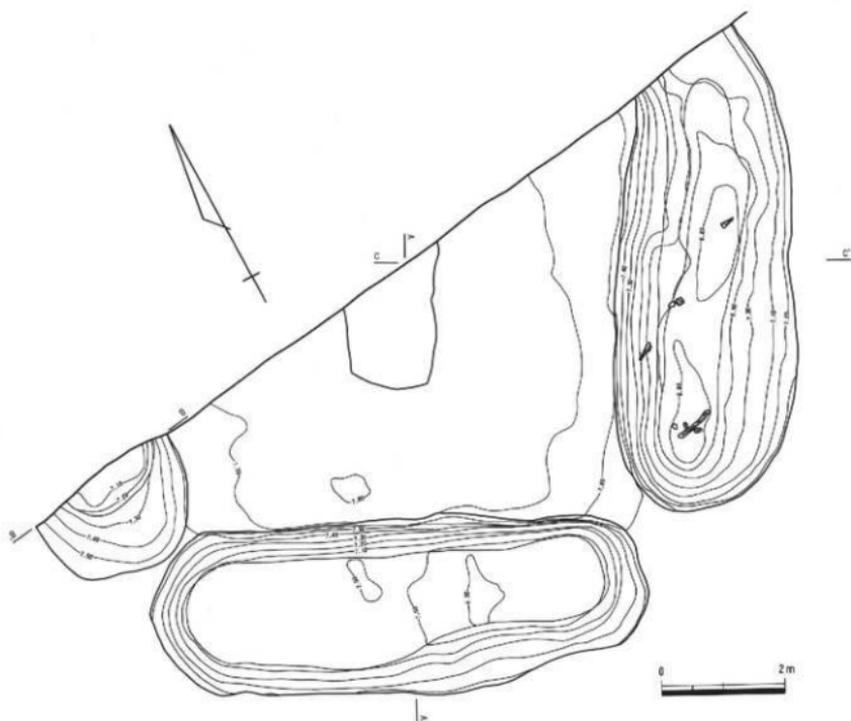
41層上面で検出された遺構 方形周溝墓・溝

〈方形周溝墓〉

(1) 1号方形周溝墓 [第224・225図, 図版203・204]

調査区中央、グリッドE72・73に位置する。北辺排水溝により、北西部分が破壊されたため、正確な形態は不明である。方台部は南北の残存長4.70m、東西8.26m、周溝底部からの高さ約1.1mを計測する。盛土は旧表土の上に約20cm程確認することができたが、周溝を掘削した際に排出された土が混在した形で積まれている。

周溝 東側周溝は北辺排水溝により北側先端部分を欠いている。残存長7.54m、幅2.84m、深さ約75cm、南半部分に最大幅を持ち、北側部分がやや西に振れている。周溝断面は底部東側を一段深く掘り込んでいる。立ち上がりは墳丘側が内側へやや張り出しているのに対し、外側は緩やかである。南側周溝は全長8.08m、幅2.82m、深さ約65cm、東側部分で一度屈曲し、外側に膨らんでいる。断面は底部が平坦で幅が広い逆台形を呈しており、墳丘側が



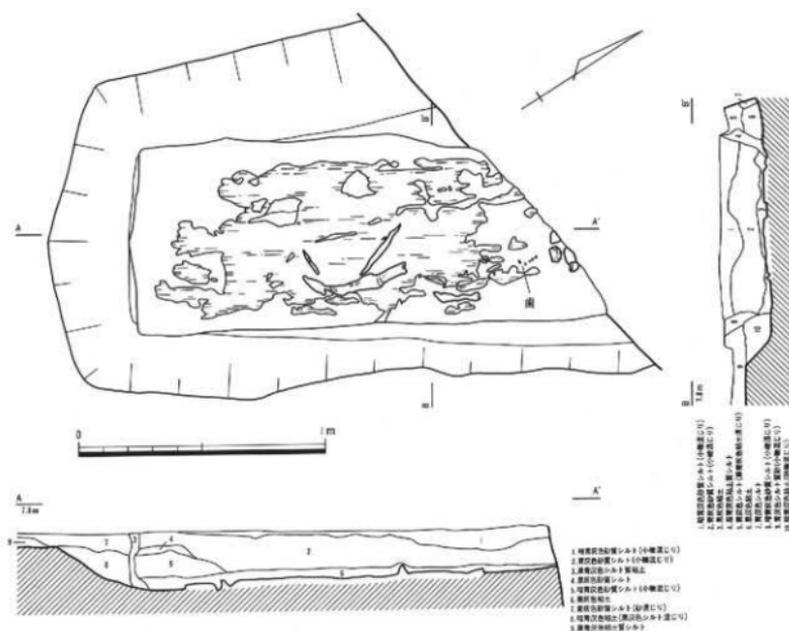
第224図 1号方形周溝墓平面実測図

ややきつい立ち上がりである。西側周溝は北辺排水溝により、南端部分を検出したのみであるが、南側周溝との陸橋部は幅約10cmと狭いものである。残存長1.76m、幅2.64m、深さ約60cmを計測する。周溝断面は底部が不整形なU字型を呈しており、墳丘側の立ち上がりがきついものである。覆土は下層に青灰色シルトと黒灰色粘土が混在した土、中層に黒灰色粘土、上層に暗青灰色粘土が堆積している。

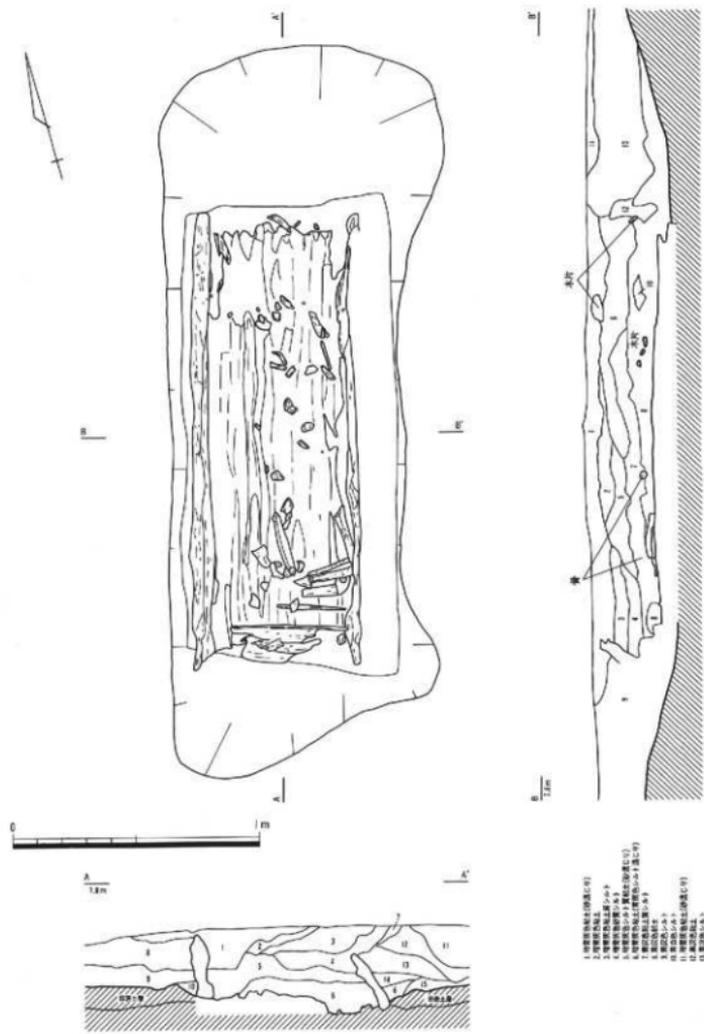
主体部は方台部のほぼ中央から墓竈と木棺を検出した。主軸方位はN36°Eである。北辺排水溝により北側部分を欠いているため、全体の形状は不明である。墓竈は南辺中央部が外側へ張り出す隅丸長方形のもので、旧表土を約15~20cm程掘り込んで形成されている。確認した規模は、上端で南北2.03m、東西1.43m、下端で南北1.71m、東西0.74m、床面を平坦にした逆台形である。墓竈内では木棺の裏込に用いられたと思われる粘土が確認された。木棺は底板を検出したが、残存状況は不良である。床面の状況から、底板に小口板を乗せるタイプと考えられる。内部からは頭位を北にした一体分の人骨・歯を検出したが、部位等は不明である。

遺物は土器片及び木片を出土している。土器は盛土直上及び東側周溝で出土したものである。そのうち東側周溝のものは、底部直上から出土した壺型土器の胴下半部で、内外面にカーボンが付着している。時期は弥生時代中期後葉に位置付けられるものである。木片

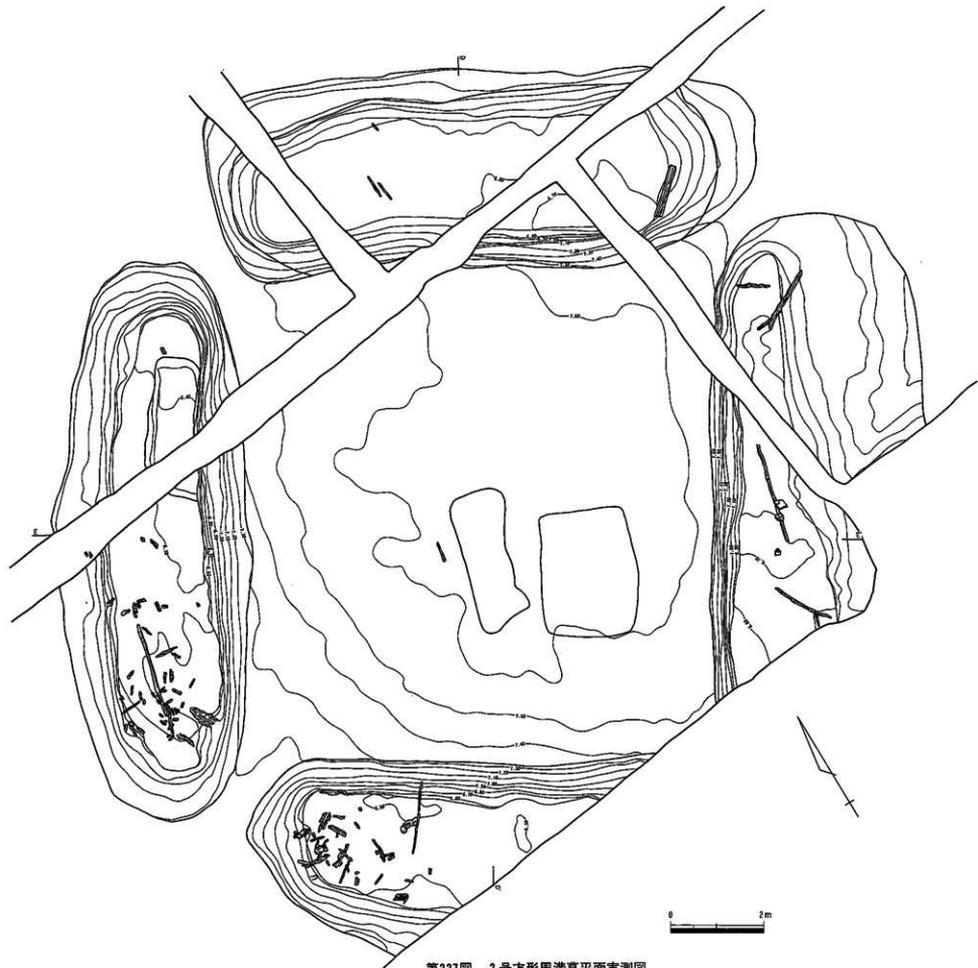
主体部
木棺
人骨
遺物



第225図 1号方形周溝墓主体部実測図



第226図 2号方形周溝墓第1主体部実測図



第227图 2号方形周溝基平面实测图

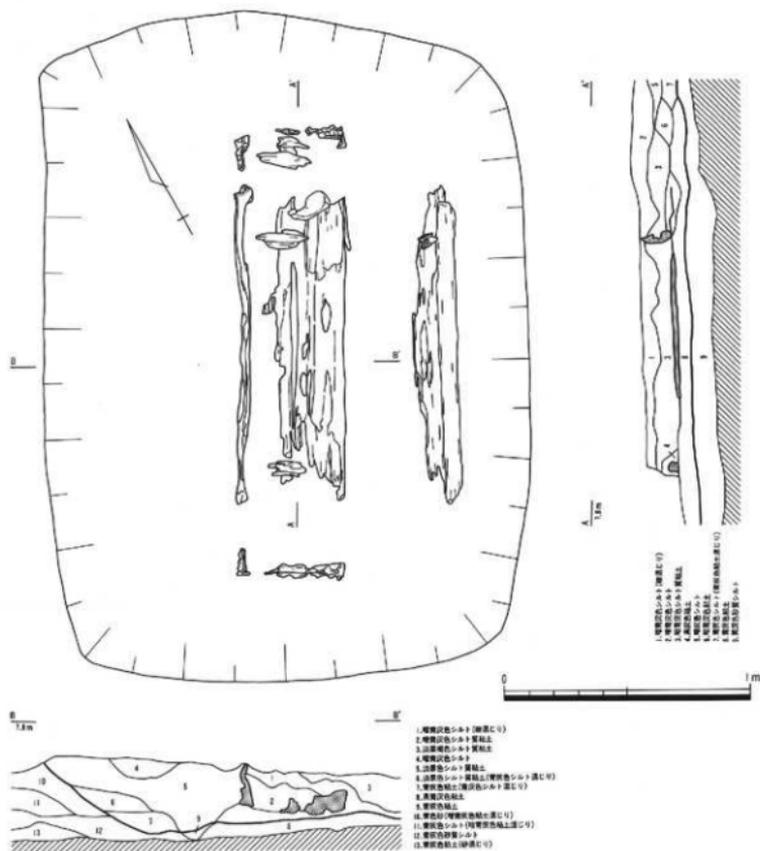
は、東側周溝より出土しているが、周溝底部より若干浮いた状態であった。

(2) 2号方形周溝墓 [第226・227・228図, 図版205・206・207]

1号方形周溝墓の南、グリッドC～E73～75に位置する。南辺排水溝により、東側周溝・南側周溝が破壊されているが、盛土・主体部を確認する事ができた。方台部は南北12.40m、東西11.40m、周溝底部からの高さ約0.95mを計測する。盛土は旧表土の上に最大25cm程残存していたが、何れも周溝の掘削によって排出された土を用いたと考えられるものである。

北側周溝は2号墓南側周溝と近接しており、約40cm程の間隔である。幅広で中央付近で若干内側に張り出している。全長11.54m、幅4.22m、深さ約65cmを計測するが墳丘側底部を深く掘り込んでいる。トレンチによって墳丘側の立ち上がりは不明瞭だが、外側は非常に

方台部
盛土
周溝



第228図 2号方形周溝墓第2主体部実測図

緩やかに広がっている。東側周溝は南端を欠いており、正確な規模は不明だが、残存長9.12m、幅4.54m、深さ約65cmである。排水溝により東側部分は不明だが、墳丘側が深く掘り込まれ、立ち上がりもきつい。南側周溝は東側部分を欠いており、残存長8.60m、幅4.20m、深さ約40cmである。残存部の状況から外側へ弓状に張り出す形態と考えられる。断面は平坦で幅広い底部を持ち緩やかに立ち上がる逆台形である。西側周溝は全長11.74m、幅4.40m、深さ約70cm、中央部分が内外に張り出している。周溝北寄りの墳丘側では長さ2.9m、幅1.0m、深さ約10cmの土壌状の掘り込みが確認されたが、覆土は各溝とも、黒青灰色系の粘土が厚く堆積している。

土壌状の掘り込み

主体部 主体部は2基検出したが、中央やや南側のを第1主体部、南東側のを第2主体部とした。第1主体部は墓塚と木棺を検出している。墓塚は旧表土を約10cm程掘り込んで形成されているが、南北2.90m、東西0.95mの南北に長い方形を呈している。北側部分は幅が

第1主体部

木棺

人骨

第2主体部

木棺

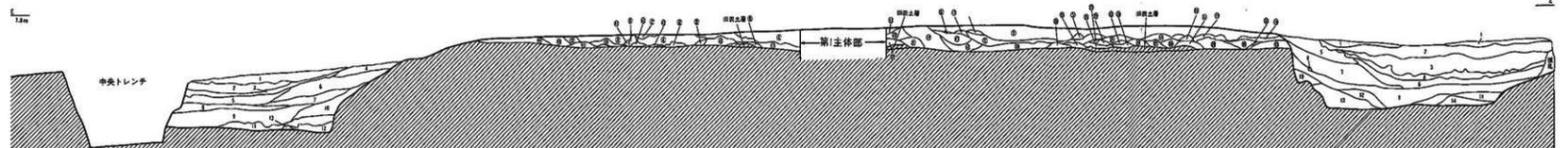
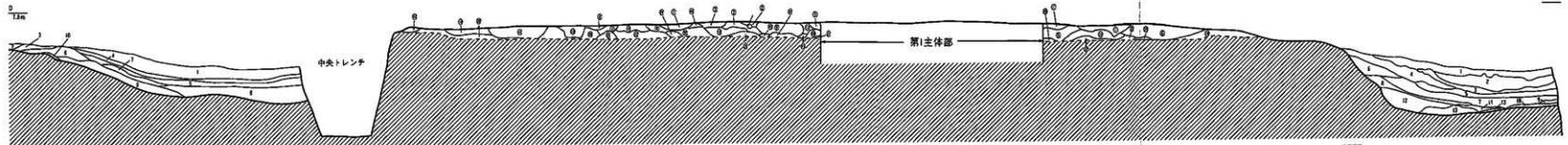
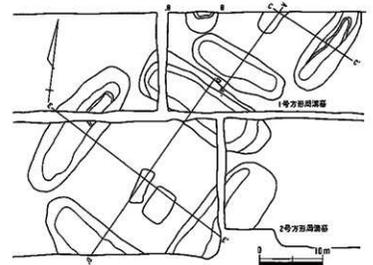
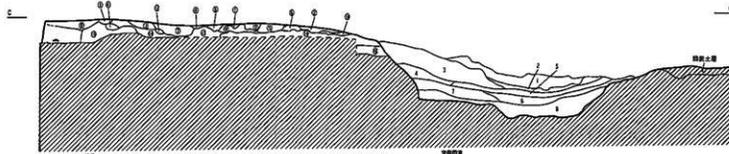
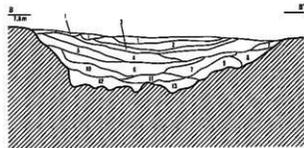
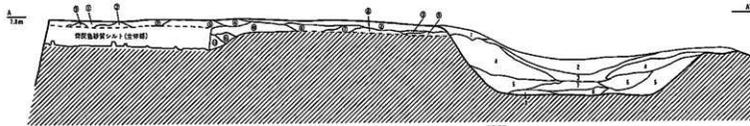
遺物

ながらきつく立ち上がる。墓塚内からは側板外側部分に裏込めの粘土を検出した。木棺は底板・側板・小口板を確認したが、底板に小口板がのるタイプのものである。南北長1.80m、東西0.72m、内法は南北約1.6m、東西約0.5m、主軸方位はN25°Eである。内部からは頭位を北にした人骨1体分を検出した。第2主体部は第1主体部から南東へ約60cm程離れた場所に位置する。南北2.71m、東西1.96mの幅広い隅丸方形を呈しており、墳丘盛土の砂礫を床面として形成されている。内部の木棺は底板に小口板がのるタイプのもので、南北1.25m、東西0.41m、内法は南北0.87m、東西約0.35mを計測する。主軸方位はN41°Eである。底板・側板の残存状況は良好であったが、内部より、人骨等の検出はなかった。墳丘上部には砂礫が一面に盛られており、第2主体部設置後、さらに砂礫で墳丘全体を形成している。

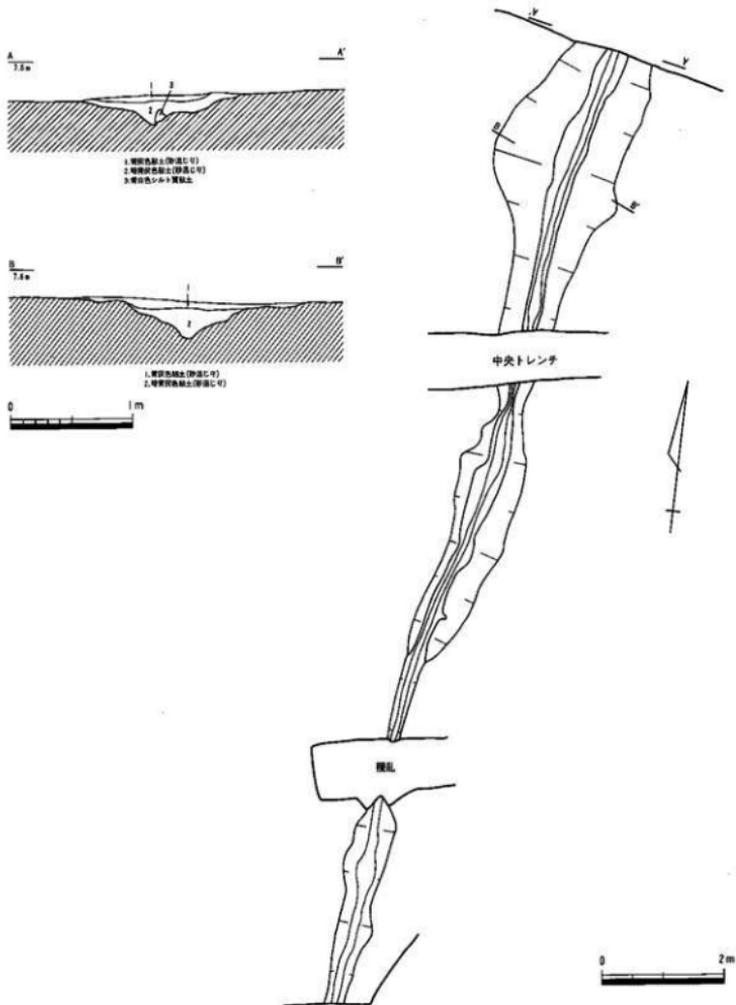
遺物は土器と木片を出土している。土器は周溝及び盛土から検出しているが、この中で復元可能なのは東・南側周溝出土のものである。東側周溝出土のものは周溝ほぼ中央の底面から20cm程上の黒灰色粘土層中より出土している壺型土器の破片である。南側周溝のものは周溝西端部の底面から約5cm程浮いた状態で出土している。胴下半で2分割されており、胴部にはカーボンが付着している。時期は何れも弥生時代中期後葉に位置付けられるものである。木片は全ての周溝から出土しているが、南・西側周溝では南西側の陸橋部を挟んで多量の木片が集中していた。ほぼ底部から5~10cm程浮いた状態で出土しているが、何れも自然木の枝を切ったものであり、用途は特定できなかった。

〈溝状遺構SD94101〉〔第230図〕

方形周溝墓群の約10m東に位置する北東から南東方向の溝状遺構である。幅約0.2~4.6m、深さ約20~40cmを計測する。北側部分では上部が緩やかに広がっているが、全体的にV字型断面の溝である。覆土は上層に砂の混じる青灰色粘土、下層には暗青灰色粘土が堆積している。遺物は下層より土器片を出土している。



第229図 方形周溝墓土層断面表測図



第230図 41層上SD94101実測図

40層上で検出された遺構 水田跡

40層の黒灰色粘土は、調査区の地形の低い部分（東端と西端）で確認され、41層の周溝基直上には見られなかった。また、調査区の東側は、上層の流路の底が及んでいるため、遺構は調査区の西端で部分的に検出できたのみである。当初、全体に広がっていたのかどうかは判断できない。

〈水田跡〉〔第231図、図版202〕

小規模区画 40層上からは、広い水田区画の一部と、その内を更に細かく分けた水田区画が検出された。全体的な推定はできないが、形状が明確な2枚の小規模な区画については、一辺約1.6～2.0mで正方形に近い。畦畔の規模は、大規模な区画を形成する南北方向の畦畔（SK94001）が下端幅約1.4m、盛土の高さが約10cm、東西方向の畦畔（SK94002）が下端幅約0.8m、盛土の高さ約5cmであった。小規模な区画を形成する畦畔は、下端幅約40～50cm、盛土の高さが約2cmとほとんど高まりが残っていない。

広葉樹の杭 大規模区画を形成する畦畔には杭列が伴っており、全て広葉樹材であった。南北方向の畦畔に比べ、東西方向の畦畔のほうが杭が密集して打たれているようであった。これは盛土の規模とは逆である。〔第70表〕

（1）大規模区画の畦畔SK94002の杭列 〔第232図〕

先端加工のない杭 大規模区画を形成する東西方向の畦畔である。盛土の南側に1列、約15cm間隔で、長さ50～60cmの杭が打ち込まれている。打たれた角度はほぼ垂直に近い。杭は板状のものと自然木の枝をそのまま利用した棒状のものとが混在している。全て、杭の先端部を鋭くする加工はなされていなかった。南北方向の畦畔SK94001との交差部付近では、盛土の北側にも杭が打たれており、この3本だけは、長さ10～20cm程の短く細い枝を利用した杭である。

交差部補強 (2) 大規模区画の畦畔SK94001の杭列 〔第232図〕
南北方向の畦畔SK94001にも、盛土の西側に1列の杭列がある。SK94002との交差部より北では盛土がはっきりしなかったが、杭列は南からの延長が認められた。交差部に近いところは、1本のみ矢板状の杭が使用されており、SK94002の北側の杭列と同様、畦畔の交差部を補強していたものと思われる。

（3）その他の杭列

水田と墓域 盛土は不明瞭であったが、大規模区画の畦畔の存在を示す杭列が、調査区の北端グリッドE75で確認されている。SK94001の延長線に垂直に交差するような東西方向の杭列で、基本的には1列だが、やはり、交差部近くではその北側にも杭列がある。盛土の南側に1列の杭列を伴う畦畔が存在し、SK94001との交差部付近では北側にも補強のため杭列が打たれていたであろう。ただ、この畦畔が東へどこまで続いていたかは問題である。この時期41層の周溝基は完全に埋設していないと思われるからである。墓域であったとわかっていたとすれば、どのように水田を構築するだろうか。この畦畔の東への延長線が2つの周溝基の間を通ることは偶然であろうか。偶然でないならば、墓域だったことを意識して、水田をつくる過程で、畦畔の位置は主体部のあるマウンドから外したことも考えられる。しかし、逆に、8区ではマウンドを利用して大規模区画の畦畔を構築している状況がみられる。興味深いことである。

（4）畦畔脇の溝SD94001 〔第232図〕

水まわし 大規模区画の畦畔SK94001の東側には、小規模区画との間にSK94001にほぼ平行の浅い溝SD94001がみられる。この溝は大規模区画内の水まわしの際にできた可能性がある。

40層水田では、大規模区画の畦畔と小規模区画の畦畔が連結している部分はみられなかった。大規模区画とその内側の小規模区画の間には、もともと畦畔をつなげず、耕作しなかった部分があったのではないだろうか。水まわしの際に大規模区画の畦畔に沿って水が流れたり、畦畔沿いに人が歩くなどしてつながらなくなった等の他に、大規模区画に比べ小規模区画が一時的なもので、大規模区画の内側に状況に応じて水まわりの良いように細分しているからだとも考えられないだろうか。恒常的に固定されている畦畔とはちがいで、何度もつくり直すので、もとよりつなげていないのではないだろうか。

小規模区画
の 性 格

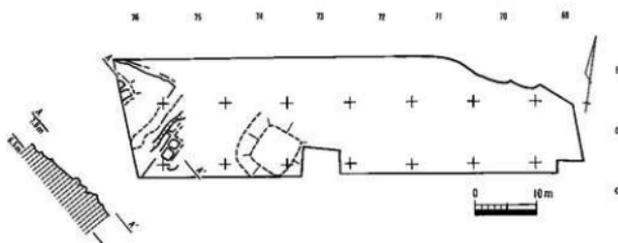
〈遺物と年代観〉

40層上からは、約70点の弥生土器片、田下駄1点が出土している。土器は細片がほとんどであったが、41層出土のものとはほぼ同じ段階と思われる櫛歯文の壺片も含まれ、この水田には、方形周溝墓の時期からさほど遠くない弥生時代中期後葉から後期あたりの時期が与えられようか。

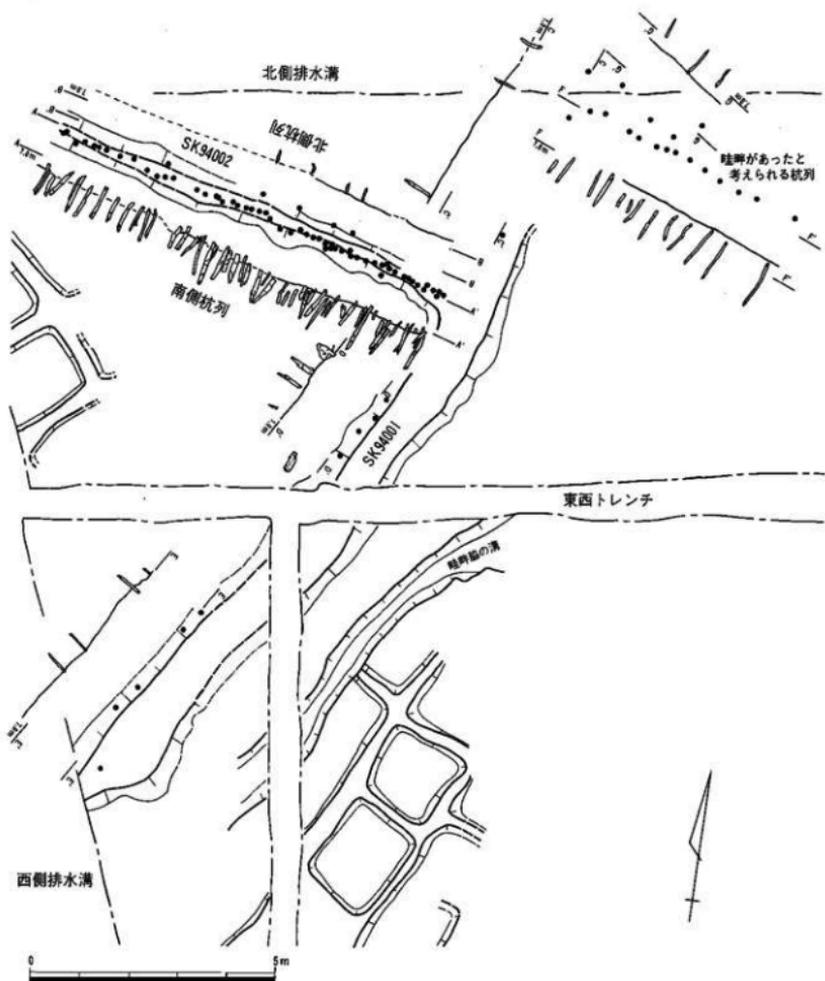
S K No.	列	番	幅面 (m)	線数 (本)	材質 (本)		板用材 + (本)	隙間 cm	線のレベル 平均 (cm)	箱	板の長さ 平均 (cm)	番	位置・配列	傾斜・埋没状態 ・状況	備 考
					針葉樹	広葉樹									
4001	1列	西	18	10	0	10	0	60	690-696	×	40-50	×	交差部にのみ裏側に伏	傾斜に近い 矢板1	交差部近くのみ矢板
4002	3列	南	12	50	0	59	0	≈15	685-690	○	50-60	○	裏ほど密・裏へ傾斜	傾斜に近い	先端加工なし
		北	2	3	0	3	0	50	670-675		10-20		交差部のみ		
4003 横列のみ	3列	南	5	13	0	13	0	60	710-715		60-70	×	裏ほど長い		先端加工なし 板を利用した小銃
		北	2	3	0	3	0	50	706-710		40-50		交差部のみ		

* ここでいう板用材とは、建築部材や農具等、一見して板とされる巨輪の本来の用途が判別できるもの。部分的なノズクや切り込み、表面の面取り調整はこの他に多く見られたが、食んでいない。

第72表 40層水田畦畔杭列整理表



第231図 40層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第232図 40層水田SK94001・SK94002杭列実測図

38層上で検出された遺構 水田跡・水路

38層は暗青灰色の砂混じり粘土で、調査区全域に堆積していた。40層、39層は、41層の周溝墓マウンド上にはなかったが、この38層の段階には完全に埋没していたと思われる。

〈水田跡〉〔第236図、図版199〕

38層上からは、大規模な区画とその内を細分した小規模な区画の水田が検出された。大規模区画は調査区中央を東西に横切る畦畔SK93802と南北方向の畦畔SK93801が交差していると仮定すると、東西辺は約47mと推定できる。調査区の西側、大規模区画の南北方向の畦畔SK93803と東西方向の畦畔SK93804は、下層40層水田の畦畔と全く同じ位置にあり、大規模区画はそのまま踏襲されてきたようである。

小規模区画は、SK93802を境に北側（STⅡ）が大きく、南側（STⅢ）が小さい。前者が5～7m×4～4.5mの南北に長い長方形の区画と推定され、後者が3～4m×2～3mの正方形または南北に長い長方形の区画である。調査区東側の水路SD93801以东の小規模区画水田（STⅠ）は、3～3.5m×1.5～2mの南北に長い長方形となっている。大規模区画毎に内側の小区画の形状も異なるのであろう。全体的に、40層水田の区画より整然とつくられているようである。小規模区画の畦畔は、下端幅40～60cmで、高さは約5cmしかなかった。なおグリッドD74付近では小規模区画を検出できなかったが、ここは41層の周溝墓のマウンド上であり、地形が高くなっている。当初より水田とされなかったのか、検出できなかっただけなのかは判断できない。グリッドE73の調査区北端にある島状の微高地も周溝墓のマウンド上にあたる。

大規模区画の畦畔のうち東西方向のSK93802が他の畦畔より大きく、下端幅約1.5～2m、高さ約10～15cmを測る。他の大規模区画の畦畔は、下端幅約0.7～1m、高さ約10cmである。大規模区画の畦畔には、全て杭列が伴い、調査区の西側へいくほど密集して打たれている傾向がみられた。杭は全て針葉樹材であった。〔第71表〕

（1）大規模区画の畦畔SK93802の杭列 〔第234図、図版200〕

調査区中央を東西に横切る畦畔である。ほぼ中央部に、水口と思われる盛土の切れた部分がある。SK93802の杭列は、ここを境に東側では盛土の南側1列、西側では盛土の両側南北2列で打たれている。南側の杭列は、長さ70～80cmに揃った細い板状の杭よりなり、横板を伴っている。横板は部分的には連なっており、全部で11枚あった。横板は幅15～20cm、長さ1.5～3mで、細かいホゾ穴の見えるものがあり、建築材からの転用と思われる。横板に対し、杭は全て外側から押さえるように打たれている。他の部分にも当初は横板を伴い、杭はそれを支えるためのものであったのではないだろうか。杭の間隔は、横板が残っている部分では約40cmだが、西側の南北方向の畦畔SK93803との交差に近い部分のみ、隙間のないぐらゐり密集して打たれ、杭の形状も幅広い矢板状のものが含まれていた。交差部の補強を意識しているのであろう。

盛土北側の杭列は、西側のみ部分的に存在する。長さ60～70cmの細い板状の杭の中に一部矢板状のものもみられる。グリッドD73西北隅付近では2枚重ねた横板を2本の杭で外側から支えている状況がみられた。この部分は南側の杭列でも横板の内側に更に横板を立て、外側から2本の杭で支えており、並列にした横板により強固に土留めしようとする意識がみられる。北側の杭列はSK93803との交差部付近で密集して打たれていた。

西側の盛土内からは、多くの木材、木製農具片が検出された。とくにSK93803との交差部近くに密集しており、交差部補強のための芯材として埋め込まれたと考えられる。

墓域埋没

大規模区画

跡

小規模区画

場所より
変わる模様

島状微高地

「杭列水田」

針葉樹の杭

水口

南側杭列

横板列

交差部密集

北側杭列

3列の横板

交差部密集

芯材

(2) 大規模区画の畦畔SK93803の杭列 [第235図, 図版200・201]

東側杭列強規格性 調査区西側に位置する南北方向の畦畔である。盛土の両側に東西2列の杭列があり、東側の杭列と西側の杭列とは、打たれた状態が全く異なる。東側の杭列は、長さ60~70cmの細い板状の杭に揃っており、5~10cm間隔で整然と並んで打たれている。北側ほど若干長い杭が使われているように思われた。全体的に西側に傾けて打ち込まれているようで、盛土を押さえるような格好になっている。杭の先端は皆同様に鋭く加工されており、加工した後先端の手前に矢じりの様に「返し」を入れ、抜けにくくなるような工夫のなされたものが少なからず含まれていた。

西側杭列 これに対し、西側の杭列は長さが揃っておらず、60~70cmのものが多い中にも100cm程の長いものも少なからず含まれている。細い板状の杭が多いが、東西方向の畦畔SK93804との交差部付近では3本に1本程の割合で矢板状の杭が含まれている。矢板状の杭は細い板状の杭より盛土の内側に打たれているようであった。また交差部から離れているところでも一ヶ所横板を伴う部分があった。横板は幅約10cm、長さ約2.5mで、杭が外側から支えている状況がみられた。杭の間隔は整然としておらず、交差部より南で30~50cm間隔、交差部付近で10~30cm間隔であった。全体的に東へ傾けて打ち込まれているようで、東側の杭列と合わせると盛土を「ハの字」形に押さえるような格好になっている。杭の先端は、東側の杭列とは異なり、加工されていないものが多かった。鋭く加工されているものは、一定間隔で配されているようであった。これが意識的なものなのか、打たれた時期の違いを示すのか判定はできなかった。

ハの字構造 SK93803は40層水田のSK94001の直上にあり、西側の杭列の中には40層の杭が頭を出していた。40層の杭は、広葉樹の細く短いもので、38層の杭列より若干内側にあった。38層の畦畔は、40層の盛土と杭を意図的に踏襲して、その外側から杭を打ち込んで補強したものとみられる。

芯材 SK93802との交差部付近では、盛土内に多数の木材を埋め込んでおり、補強のための芯材とされていたようである。

有頭棒状杭 この他、横板は、南北方向の畦畔SK93801の東側杭列の一部にもみられた。また、このSK93801東側杭列には、前述のSK93803東側杭列にみられたような、杭先端の「返し」状の折り加工も認められた。しかし、これらには鋭い先端加工がなされておらず、先端手前の折りが杭としての利用のためでなく、転用される以前からのものであった可能性がある。つまり、有頭棒状製品を転用したものであった可能性がある。[第233図, 図版201]

(3) 杭列の位置と水の方

南北方向の畦畔SK93801では、盛土の東側に横板を並べて、盛土が崩れるのを防いでいる。SK93803も、盛土東側に杭を密集させている。また、有頭棒状の木製品を転用したり、杭の先端に返しの加工をして抜けにくくしてあった。東西方向の畦畔SK93802は、盛土南側に横板を並べ、南側に盛土が崩れるのを防いでいる。SK93804も盛土南側に杭列がある。このことから、大規模区画内の水の流れは、西北の方向から来るようで、この流れに対し、畦畔を固定し、盛土流出を防ぐような位置に杭列が打ち込まれたようである。

矢板の用途 38層の段階では針葉樹で長さ60~70cm程の細い板状の杭が一般的で、幅の広い矢板状の杭は、畦畔と畦畔との交差部の補強のため特に使用されているようであった。横板や盛土の芯材としては、建築材からの転用とみられる大型の木材が使用されていた。SK93801北側の盛土内には、横板に重ねて長さ約2mの梯子が埋め込まれていた。各畦畔の横板も、板

の厚さと細かいホゾ穴の存在から建物の壁材のようなものではないかと考えている。

(4) 水口

SK93802のほぼ中央部、SK93803とSK93804との交差部では盛土が切れており、大規模区画を越えて水まわしを図る水口と考えられる。前述のような畦畔の補強の仕方から考えると北側の水田面から南側の水田面へ、西側の水田面から東側の水田面へという水の通過が想定される。小規模区画については、グリッドD75の西南隅の畦畔に水口らしき切れ目がみられるが、全体的には田越して水まわしをしていたと思われる。

水まわし

〈水路SD93#01〉

幅約2.5m、深さが15～30cmで、底が二段に掘られている。両側にわずかながら堤状の高まりをつくって、小規模区画の畦畔と連結している。しかし大規模区画の畦畔SK93801とは平行でなく、堤も強固なものとは思われないことから、この水路は一時的なものではないだろうか。小規模区画水田面を切って流れた洪水流の痕跡の底を掘り直し、堤をつくって利用したものとも考えられる。調査区西側でSK93804、SK93803を切っている洪水流の痕跡SR93801とほぼ同じ方向で、北から流れてきたのだろう。

一時的利用

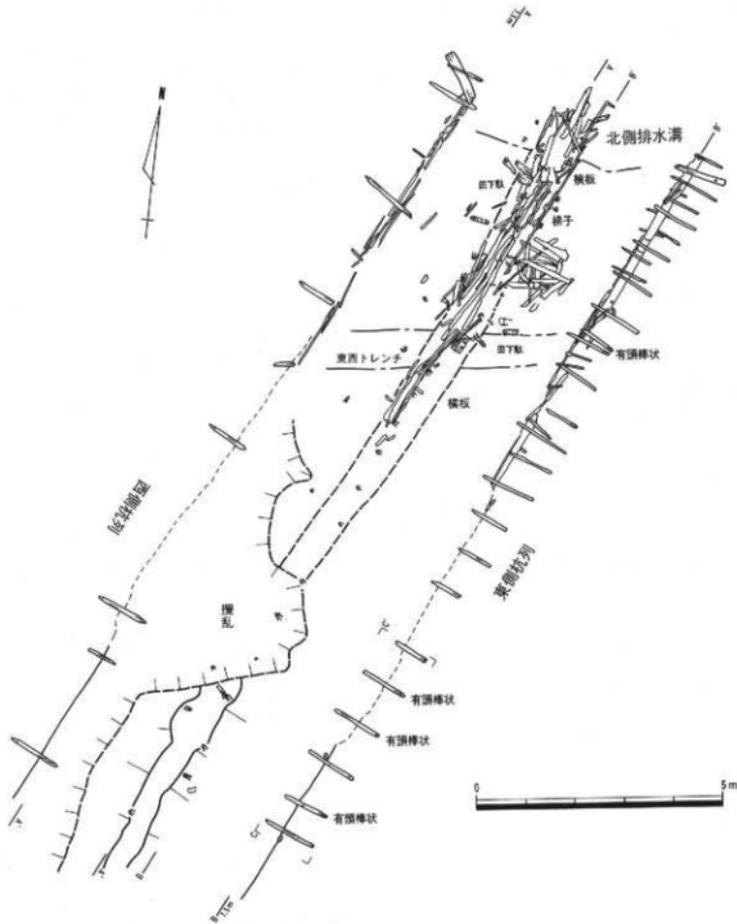
〈遺物と年代観〉

遺物としては、前述した通り大規模区画の畦畔内部から多数の田下駄、農具の破片、建築材が出土した。SK93804の杭列横からは壺の破片が集中して出土し、完形が割られたような状態であった。他にも畦畔内から土器片が出土しており、壺のプロポーション、壺の口縁、小型の土器等の存在、また、直上層からS字状口縁の壺が出土していることから、38層上の水田は弥生時代末から古墳時代初頭までのいずれかの時期ではないかとみられる。

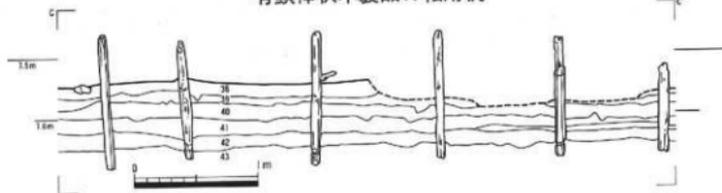
S K No	列	縦	幅 (m)	総数 (本)	材質 (本)		転用材* (本)	跡数	幅のレベル cm間隔	幅の長さ 平均(m)	掘	傾	位置・配列	傾斜・傾斜欠陥 ・状況	備 考	
					針葉樹	広葉樹										
3801	2列	東	17	36	25	0		掘1 遺1	*60	760-765	○	70-80	○	北ほど密*	横板2(龍) 西へ傾斜	先端加工なし 部分的に 直しをつけたものあり
		西	17	12	12	0		掘1	*100	760-765		90-100	×	北ほど密*		先端加工なし
3802	2列	南	30	108	108	0			*40	760-760		70-80	○	西ほど密* 東ほど長い	北へ傾斜 欠陥5 横板11(龍)	
		北	20	18	18	0			*40	760-745	×	60-70	×	西ほど密*	南へ傾斜 横板3(龍) 欠陥1	
3803	2列	東	18	187	187	0			10	710-715	○	60-70	○	西へ傾斜		鋭い先端加工 部分的に 直しをつけたものあり
		西	20	83	83	0			*40	710-705	○	80-70	×	北ほど密* 南ほど長い	東へ傾斜 横板1(龍) 欠陥12	先端加工なし
3804	2列	南	12	54	54	0	掘1	*20	700-705	○	60-70	×	東ほど密*	北へ傾斜		
		北	2	10	10	0			10	700-705		40-50	×	03との交差部のみ	欠陥3	先端加工なし

* ここでいう転用材とは、遺構部材や農具等、一見して穴とされる以前の本来の用途が判別できるもの。部分的なホゾ穴や切り込み、裏面の面割調整はこの他に多く見られたが、含んでいない。

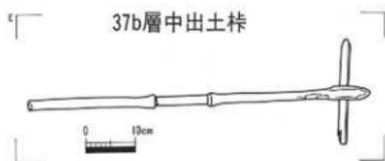
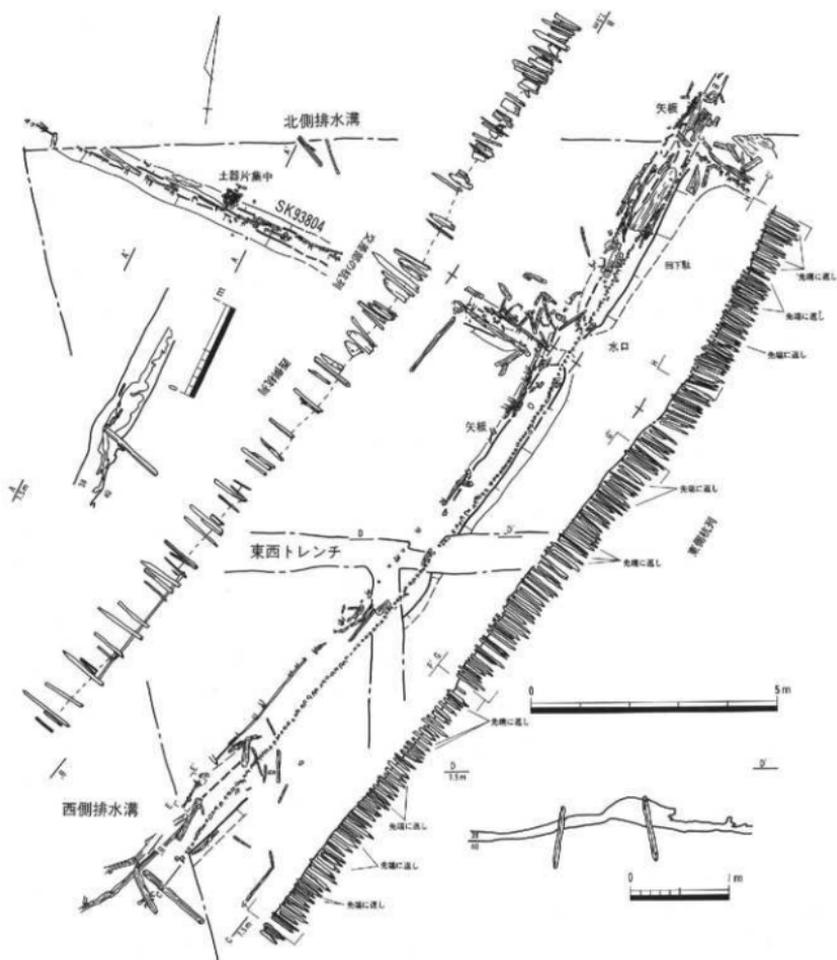
第73表 38層水田畦畔杭列整理表



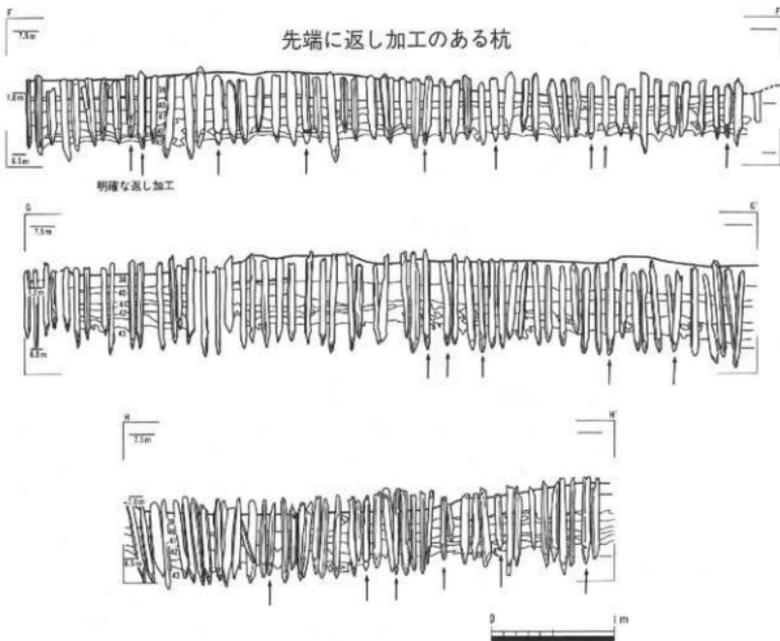
有頭棒状木製品の転用杭



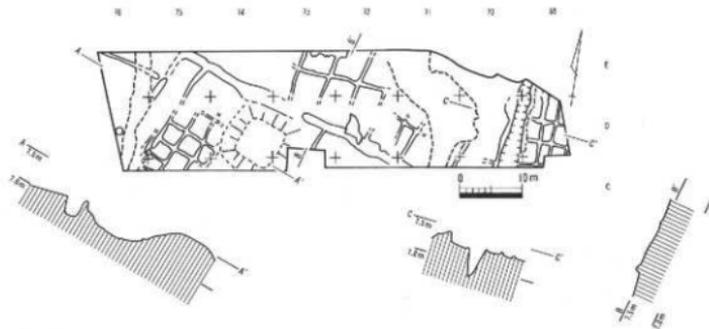
第233図 38層水田SK93801杭列実測図



第235図 38層水田SK93803杭列実測図(1)



38層水田SK93803杭列実測図(2)



第236図 38層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

37a層上で検出された遺構 水田跡・流路

<37b層>

38層上面の西端部を深く抉った洪水流 (SR93801) は、調査区西半に青灰色砂質粘土の堆積を残した (37b層)。この洪水流が運んできた多数の流木片が38層上面の畦畔杭列に堰止められた状態で残っていた。その中には農具片 (組合二又鍬の身、柄) や田下駄 (円形、正方形の田下駄) とともに、糸巻きを使う杵があった。一方は欠損しているが、長さ推定80cm程の丸く丁寧に成形した軸棒の両端に、長さ20cm程の板材を十字に組み込んだものである。

神

黒泥被覆

37a層の暗灰色粘土は調査区全体に堆積しており、特に東半で厚くなっている。直上を非常に植物質の強い黒泥層に覆われており、検出の際の分層は容易であった。上面の地形はグリッド74以西で次第に低くなっていく。

<水田跡> [第238図, 図版196]

37a層上面では、大規模な水田区画の畦畔の一部とその内側の小規模な水田区画、そして流路跡が検出された。

(1) 大規模区画の畦畔SK93701 [第240図, 図版196・197]

踏 襲

38層水田の大規模区画の畦畔SK93802をそのまま踏襲している。下端幅約1.5~1.8m高さ約5~15cmの規模で、杭列を伴わない盛土畦畔である。東西トレンチ南側付近で切られており、大規模区画から大規模区画へと水を移動させる水口がつくられているのも38層水田の場合と同じである。この水口の北側には、横板が1枚架け渡されており、小杭で両側から支えられているような状況であった。水口を通る水を調節するための水門のような施設だと考えられる。大小のホゾ穴が数箇所空いており、建築部材を転用したものであろう。

水 口

水 門

この畦畔の盛土は、西側の流路 (SR93701) にさしかかるあたりで途切れている。

(2) 大規模区画の畦畔SK93702と流路SR93701 [第237図, 図版196]

自然堤防上

38層水田を踏襲しない新しい位置につくられた南北方向の畦畔である。38層上面を流れた洪水流 (SR93801) のつくった自然堤防の高まりを利用してつくられており、37層上面の流路SR93701ともほぼ平行な方向である。下端幅1.7~2.5m、高さ10~15cmの規模で、杭列を伴わない盛土畦畔である。畦畔は東西トレンチの南側あたりで途切れていて、そこから南へは続かない。

SK93702のすぐ東側の流路SR93701は、幅2.6~4.3m、深さ20~30cmの規模である。西側に自然堤防の高まりをもっているが、この自然堤防は2箇所溝状に切り込まれている。この溝状の切り込み (SD93701、SD93702) は、北から流れてくる流路から自然堤防を越えて西南の方向へと水を取り込む導水路なのであろう。おそらく同様の導水路は、調査区外の北側にも何箇所かあり、そこから取り込まれた水はSK93702と自然堤防の間を通って南へ流れ、SK93702が途切れる部分から西側の水田域 (STⅢ) へと広がっていったのであろう。大規模区画を単位とした水利系統の一端のとらえられる遺構なのではないだろうか。

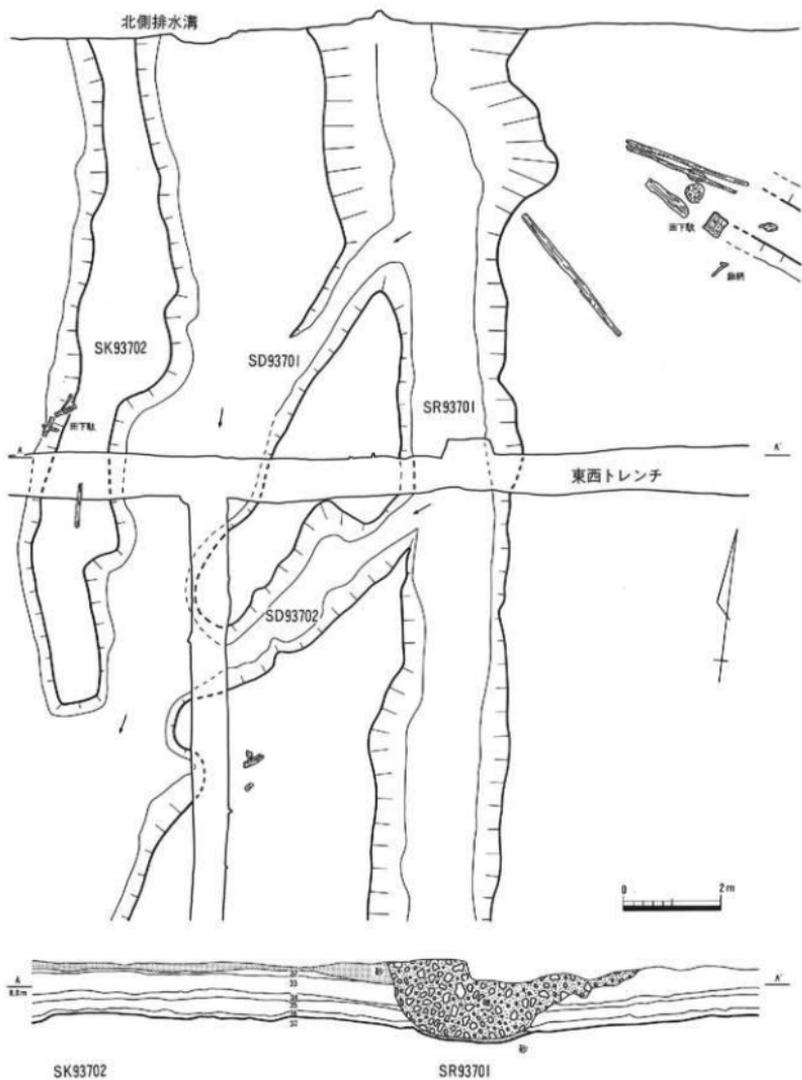
導 水 路

水利系統

(3) 小規模区画水田

長方形区画

SK93701の北側の水田域 (STⅠ) では小規模区画の水田がとらえられた。水田は、南北に長い長方形で、東西辺は約1.4mで一定しているが、南北辺は約6.3m以上で一定していない。南北方向の畦畔は一直線につながり、間隔が一定なのに対して、東西方向の畦畔は一定していないのである。水田区画ははっきりととらえられなかったものの、南側の大規模区画 (STⅡ) では、南北方向の畦畔ばかり数本認められた。このことから、水田のつくり



第237図 37a層上SR93701・SD93701・93702実測図

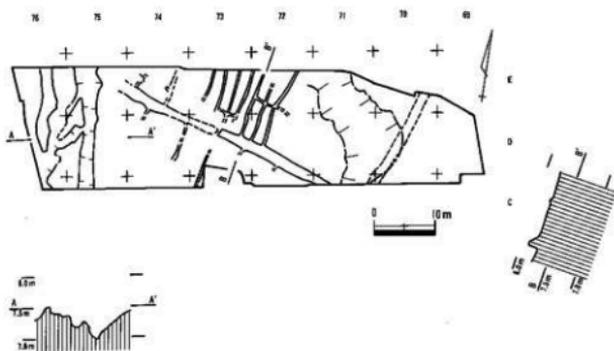
区画構築順 れた手順が推測できる。まず、大規模区画の畦畔を基準に両側へ一定間隔になるよう垂直な南北方向の畦畔を伸ばしてゆく。この後に状況に応じて東西方向の畦畔をつくり、南北方向の畦畔と畦畔の間を区切ってゆくというものである。小規模区画の畦畔の規模は、下端幅約60cm、高さ約5～6cmであった。

(4) 足跡

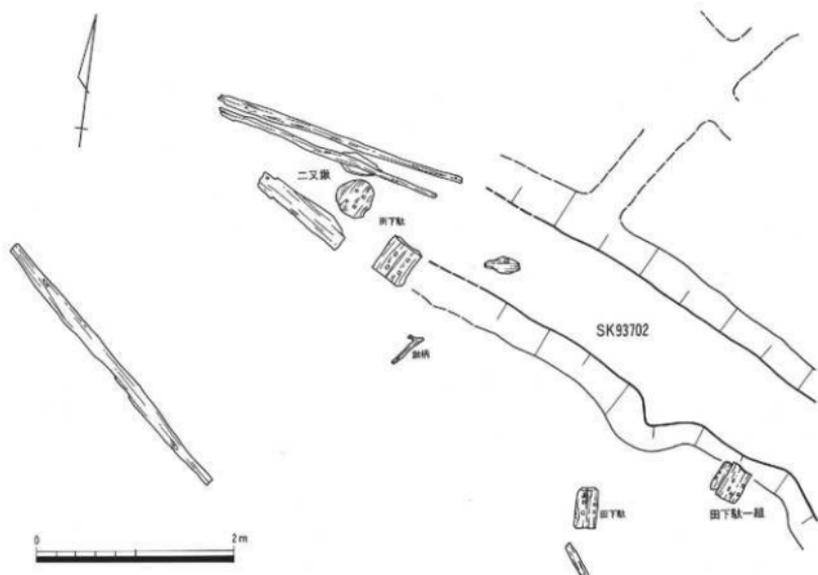
水田面の足跡は、グリッドD72、E73、D74、E76に認められた。E73からD74にかけての部分では、南北方向に水田区画を無視して歩行している状況がみられ、特にSK93701の南側では足跡が連なって溝状になっていた。

〈遺物と年代観〉 [第239図, 図版198]

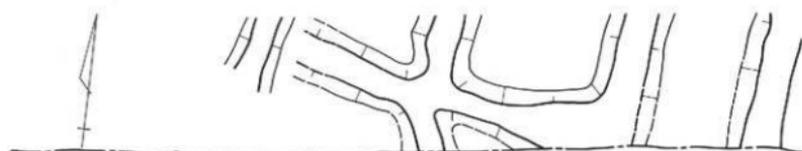
S 字 壺 37a層に伴う遺物としては、グリッドE74のSK93701周辺から、一組が重なった田下駄や木製農具の一部と思われるもの、そしてS字状口縁をもつ台付壺1個体が割れた状態で出土した。この台付壺の出土から、この水田は弥生時代末から古墳時代初頭のいずれかの時期に営まれていたと考えることができる。



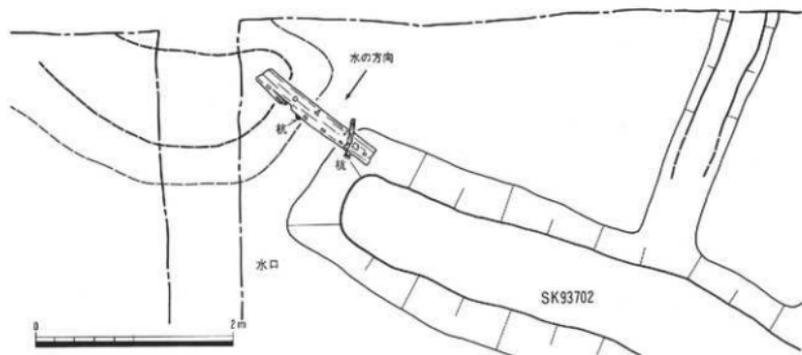
第238図 37a層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第239図 37a層水田畦畔上木製品出土状況図



東西トレンチ



第240図 37a層水田水門状遺構実測図

(9区)

35層で検出された遺構 木道状遺構

〈黒泥層〉

黒泥層 37層水田が放棄された後、しばらく湿原になっていたようで、厚さ40～50cmの厚い黒泥質の層が一律に堆積していた。瀬名遺跡の他の調査区にもこの時期こうした黒泥質または泥炭質の層が存在し、清水市長崎遺跡等周辺の低湿地遺跡でも認められた。周辺一帯が湿原化するような環境であったのではないだろうか。

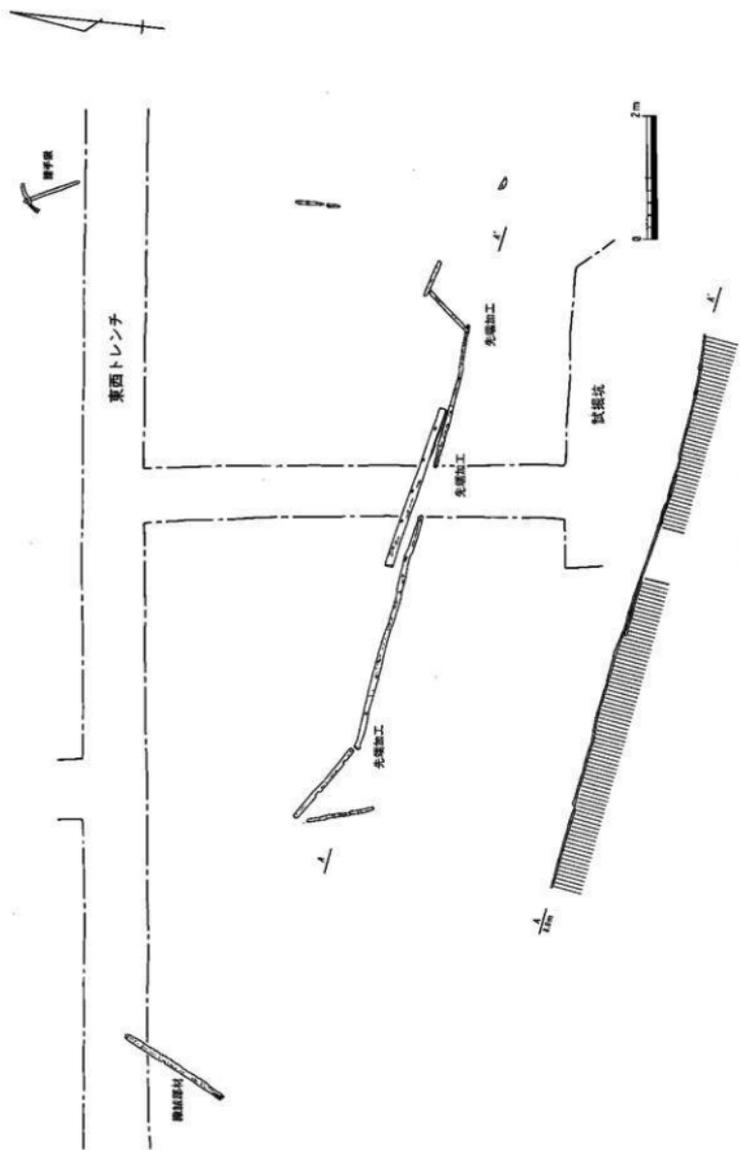
35b層と35a層 黒泥質の層は3層に細分ができた。37層を被覆する最下層は、厚さ約10cmで未分解の植物を多く含んでいた(36層)。中間の層は厚さ30～35cmで黒泥質をラミナ状に含む灰色粘土層であった(35b層)。最上層は厚さ約5cmの黒泥層であった(35a層)。

〈木道状遺構〉〔第241図、図版195〕

建築材転用機 最上層の35a層を掘削中、20数点の木材が一定レベルで出土し、あたかも敷き並べられたように直線的な配置を示した。特にグリッドD73では、8本の板状や棒状の木材が、約9mにわたって一定方向に並んでおり、湿地帯を歩く際の道板、もしくは木道のようなものを連想させた。木材のほとんどが、ホゾ穴をもっていたり、先端の加工された建築部材であり、中には織機の部材らしきものも含まれていた。この「木道」の方向は、グリッドE75やD72に点在する木片も含めて、西北西から東南東を指向している。この方向は、40層水田以来、38層、37層と踏襲されてきた大規模区画水田の東西方向の畦畔の方向にほぼ一致する。西隣の10区でも同一面と思われる黒泥層中に、やはり「木道」状の木材配置が検出されたが、南北方向のものと東西方向のものとが交差して区画をつくっており、部分的に盛土がのせられ、杭列も伴っていた。9区においても、35b層は黒泥質にはさまれながらも程度安定した粘土層でイネのプラントオパールも高いカウントで確認されている。

芯材 この「木道」状の木材配置は、盛土はなされなかったものの、水田畦畔をつくる際の芯材として敷き並べられたものなのではないだろうか。37層水田が放棄された後、湿原となっていたところに再び水田をつくろうと木材を配置し区画をなしたのであろう。区画は、37層水田の大規模区画の畦畔の高まりがわずかながら湿原上にも影響し、これを踏襲したものと考えられる。また、37層水田検出時において、グリッドD72とE75で畦畔とはずれた南北方向の杭列を取り上げたが、この2本の杭列は37層に伴うものとしては杭頭レベルが高かった。これが35層に伴うものだとすると、ちょうど「木道」状の木材配置から北側へ伸びるものと考えられる。35層の「木道」状の木材配置は、古墳時代中期頃、湿原だったところをあえて耕地化しようと試みた痕跡だったのではないだろうか。

諸手鋸 グリッドE73から諸手鋸が出土している。これも35層を耕地化しようとしていたことを示すものであろうか。



第241図 35層中木造柱遺構実測図

33 a 層上で検出された遺構 水田跡・流路群

35層上での開発を示す「木道」状の木材配置も再び湿原の中に埋もれた後、粘土層の自然堆積がなされていった(34層、33b層)。

33 a 層は灰褐色の粘土層で、上面を数本の流路によって浸食されており、水溜まり状の落ち込みや細かい表面の凹凸が無数にあった。

〈流路群〉

33 a 層検出中に確認した流路は、調査区東半を南北方向に横切る大規模なSR93301と調査区の西半をやはり南北に横切るSR93302、SR93303の3本である。SR93302とSR93303はほぼ同じ河道で、SR93303のほうからSR93302の覆土を切って流れている。3本とも河岸は33 a 層よりも上層にあり、33層に伴う流路ではなく、後から浸食したものである。

(1) SR93301

川幅が最も狭いところで10mはあり、調査区北端の最も広くなるところでは20m以上となっている。蛇行して川幅を広げていったのであろう。川底の深さは最大で約130cmで、41層にまで影響している。南ほど深くなる傾向にあったので、北から南へと流れていたと考えられる。しかし、この河道は上層の流路にも踏襲されたようで、川岸が上層の流路から浸食を受けており、実際の川幅や深さはわからなくなっている。より広く深い流路だったのであろう。

(2) SR93303 [第242図、図版193]

川幅約4m程で、深さは約100~120cmを測る流路である。36層まで川底が及んでいた。SR93301と同様、南のほうが高く、北から南へと流れた流路だと考えられる。37 a 層上のSR93701河道とほぼ同位置で踏襲している。SR93303もそれに切られたSR93302も33 a 層上の遺構を切っていることから、これらの流路は水田の時期に伴うものではなかったとみられる。なお、SR93303の西岸には立木が数本生えていたらしく、根株が残っていた。

〈水田跡〉 [図版193]

33 a 層上の水田遺構としては、南北方向の畦畔が5本検出された。最も規模の大きな畦畔SK93301は、下端幅1.7~2.5mで、高さ約10cm程の盛土畦畔である。これに対して、SK93301の東西両側にある畦畔は、どちらも下端幅60~70cm、高さ5cm以下と小規模な盛土畦畔である。この3本の畦畔はほぼ平行に並んでおり、北位が正方位より約10°西へ傾いているような方向であった。調査区西端の2本の畦畔のうち、SK93302は比較的規模が大きく、下端幅約1.5m高さ約5cmである。この畦畔はSK93301とは異なり、北位が正方位より約40°西へ傾くような方向である。

東西方向の畦畔が検出されず、各畦畔の間に方向や間隔等の規則性も認められないので、水田の区画は推定できない。しかしSK93301とSK93302はその規模から、大きな水田区画を形成する畦畔で、他の3本の畦畔は、その内を更に細かく区画する畦畔だと考えられる。東西方向の畦畔が検出されなかったのは、元々南北方向しかない部分であったのか、この水田が南北方向の畦畔を基軸にもち、東西方向は一時的につくものであったためなのかどちらかであろう。

〈遺物と年代観〉 [図版194]

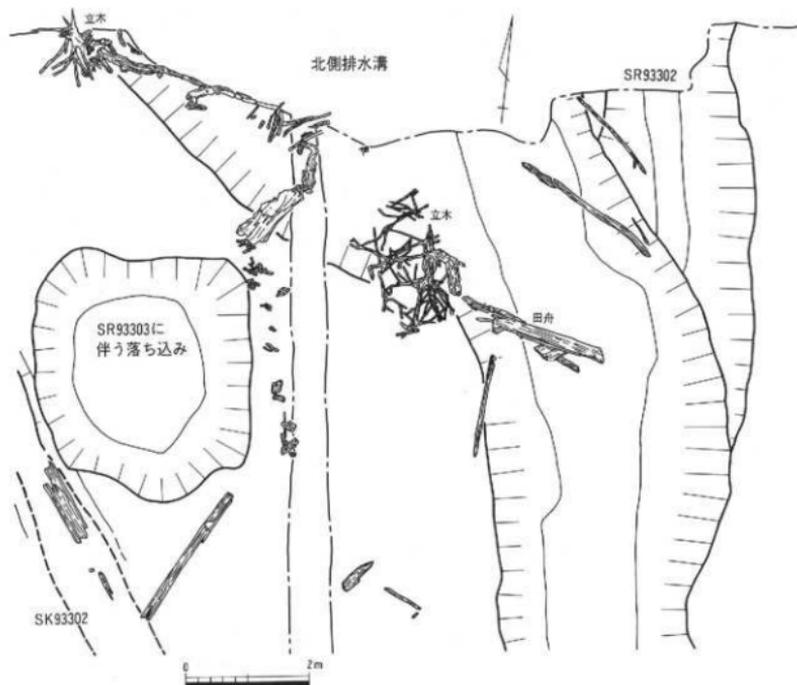
SR93301からは、約160点以上の木製品が出土したが、曲物の破片や斎車の可能性もある板状のものが多かった。また、鉄製の刃が木製の柄と組み合わさったままの鎌が一丁出土した。獣骨片も10点出土し、馬の頭骨とみられるものがあった。

17点出土した土器片の中には、ほぼ完形に近い須恵器甕があり、これは古墳時代後期から奈良時代にかけての時期になるものと思われる。

SR93303からは、土器の出土が多く、140点を数えた。これらの土器は、古墳時代後期のものを中心に非常に幅の広い時期のものが含まれていた。木製品は100点出土したが、齧串の可能性のある板状のものが多かった。グリッドE75のSR93303西岸の立木の根に引っ掛かったような状態で全長2 m近い田舟の破片が出土した。瀬名遺跡全体の田下駄の大量出土とともに当時かなりの低湿な水田であったことを推測させる遺物である。

大型田舟

流路から出土した土器から、33 a 層上の水田が営まれた時期も古墳時代後期から奈良時代にかけてのいずれかの時期と思われる。



第242図 33 a 層上SR93303西岸立木群実測図

25層上で検出された遺構 流路・杭列群

31 ~ 26 層 33 a 層上を流れた流路SR93302とSR93303は、調査区の西半に厚い砂と礫の堆積をもたらした(31層、30層)。砂と礫の及ばなかった調査区中央から東側には、起伏の差を埋めるような形でシルトや粘土が自然堆積していた(29層、28層、27層、26層)。このうち27層は砂混じり粘土層で、部分的にイネのプラントオパールが検出された。遺構は認められなかったが耕作土の可能性がある。25層は粘性の強い砂質粘土層で、調査区内に全体的に堆積していた。イネのプラントオパールが検出され(調査区西端)耕作土と思われたが、畦畔等水田区画を示す遺構は検出されなかった。調査区の西側と東側を南北に流路が横切っており、流路内には数本の杭列があったが、これは25層に関係するものであろう。

<流路>

(1) SR92501と杭列 [第246図, 図版191]

SR93501の河道を踏襲し、調査区内で大きくクランクしている流路である。川幅は狭いところで約6m、広いところで約10mあり、川底までの深さは約1.3~1.5mある。南のほうが深くなっており、北から南へと流れていたのであろう。流路内グリッドE71の北端に、流路を垂直に横切るような杭列がある。20本の杭が南と北に2列になっており、北側の杭は北からの水の流れて全て南へ傾き、それを南側の杭列が合掌形になるように支えている。横板や網代らしきものは認められなかったが、この流路に取り付けた堰のような施設だと考えている。この流路内からは100点以上の木製品が出土したが、曲物、挽物の類が多く、40点を数えた。骨片の出土も30点を越え、馬とみられるものもあった。また、グリッドE71の中央、流路底東岸近くに桃の種子が多数集められているような状況で出土した。意図的に集め置いたものならば、何らかの祭祀に伴うものとも考えよう。桃の種子の集中地点の対岸にあたる流路底では、馬のものともみられる骨片が散乱していた。SR92501から出土した土器には、内側に黒漆のある埴や墨書で吉祥句の書かれた碗など平安時代でも後期とみられるものがあつた。

(2) SR92502・92503と杭列 [第244・245図, 図版192]

2 時期河道 調査区西半のほとんどを占める大規模な河道は、覆土の砂礫の観察から、時期の異なる2本の流路だとわかつた。まず西側をSR92503が流れ、その東側を切ってSR92502が流れたようである。検出された河道の西岸はSR92503のもので東岸はSR92502のものということになる。狭いところで約16m、広いところで約29mの幅をもち、川底まで深いところで50~60cm、浅いところで20~30cmの深さがあつた。2本とも幅のわりに浅い流路だったようである。

河道内杭列 河道内には多数の杭が打たれており、点在するものもあつたが、数本の南北方向の杭列が形成されていた。杭は長いもので約80cm、短いもので約20cm、細い角材状にした杉材か樹皮をつけたままの広葉樹の枝を使っており、いずれも先端を鋭く加工している。全体的に東西トレンチの南のほうに広葉樹が多く使用されている傾向がみられた。また、グリッドD74、D75の北半に並ぶ3本の杭列は特に杭が密集して打たれており、長いものが含まれていた。これらの杭列は、当初、流路に浸食される以前の25層上面に打たれた杭列か、または下層の33 a 層に伴うものとも考えられたが、25層上面では河道内以外に杭列がみられないこと、また、33 a 層上の畦畔は流路に対応するような方向でないことから、違つと判断した。それぞれ、区画性を示すものではなく、流路の流れた方向に沿っているようにみえることから、この河道に水が流れていた段階にその岸か内部に打たれた護岸、あるいは

は水利・導水に関わる施設ではないだろうか。

なお、上層22層に伴うものとして検出した3本の杭列は、平面的な位置を25層の杭列と合成したところ、同一の杭列の延長と判明した。〔第243図〕詳細は22層の項に記述した。

〈遺物と年代観〉〔図版192〕

杭列の周辺を中心にこのSR92502・92503河道内からは約130点の木製品が出土したが、ある程度まとまった位置にあったため、単に流れてきたものとは考えられない。特に、グリッドE75からE76にかけては大きく5ヶ所程にまとまっていた。そのうち、グリッドE76東北隅で杭列に近接しているまともには長さ50～70cmの刀形木製品が数本含まれていた。全て東西方向を向き、重ね置かれたような状況であった。この他にも細長い板状のものや先端を鋭くした杭状のものが多く、これらも齧串や刀形の破片か末製品である可能性がある。

22層杭列

刀形木製品

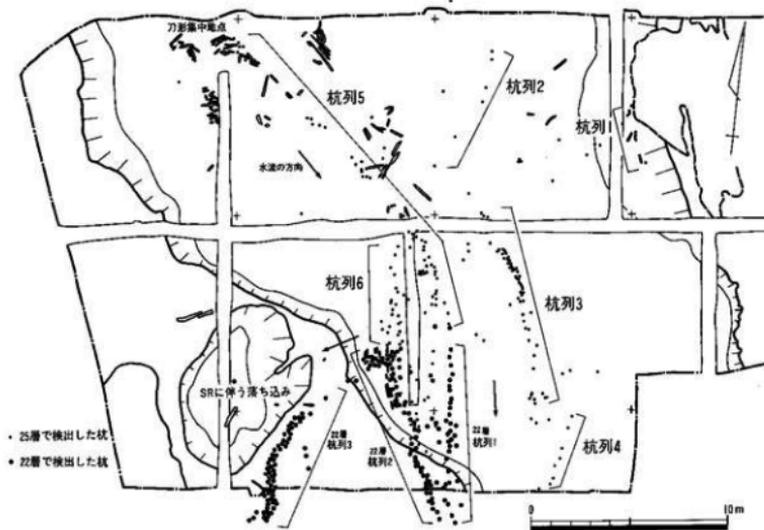
齧串

灰釉

SR92502・03から出土した土器は105片あった。下層SR93303の覆土に川底が及んでいる部分もあったためSR93303と同様の古墳時代の須恵器や土師器もあったが、新しいものでは灰釉のかかった罎、碗の類も数点含まれていた。SR92502・03が流れていたのは、平安時代中頃以降ということは考えられようか。

〈水利と儀礼〉

25層上面では、水田区画を検出することはできなかったが、水利に利用したと考えられる流路内の杭列を確認した。また、SR92501では堰状の杭列のすぐ下流から桃の種子と馬の骨の集中、SR92502・92503では、流路内の杭列周辺から刀形や齧串状の木片の集中が認められた。水利施設の周辺では何らかの儀礼が行なわれていたであろうか。



第243図 22層・25層杭列平面合成図



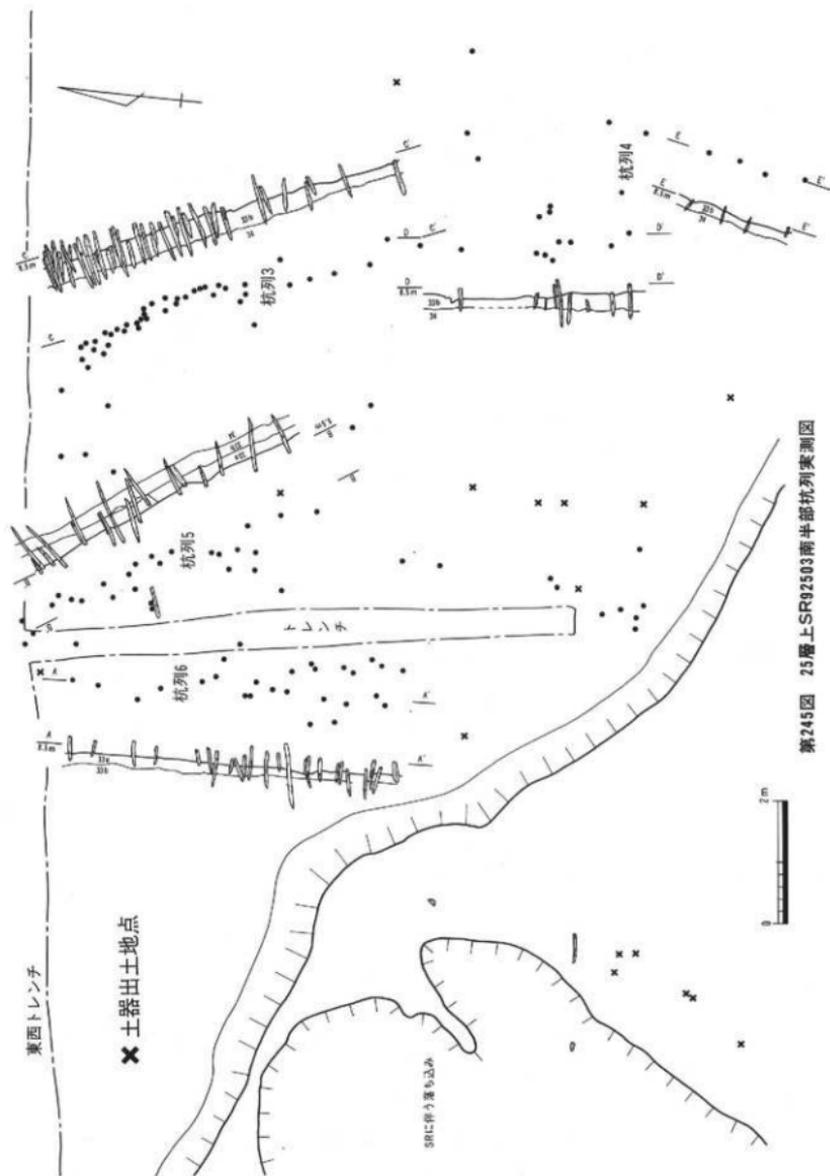
✕ 土器出土地点

北朝排水溝

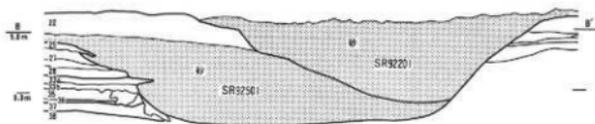
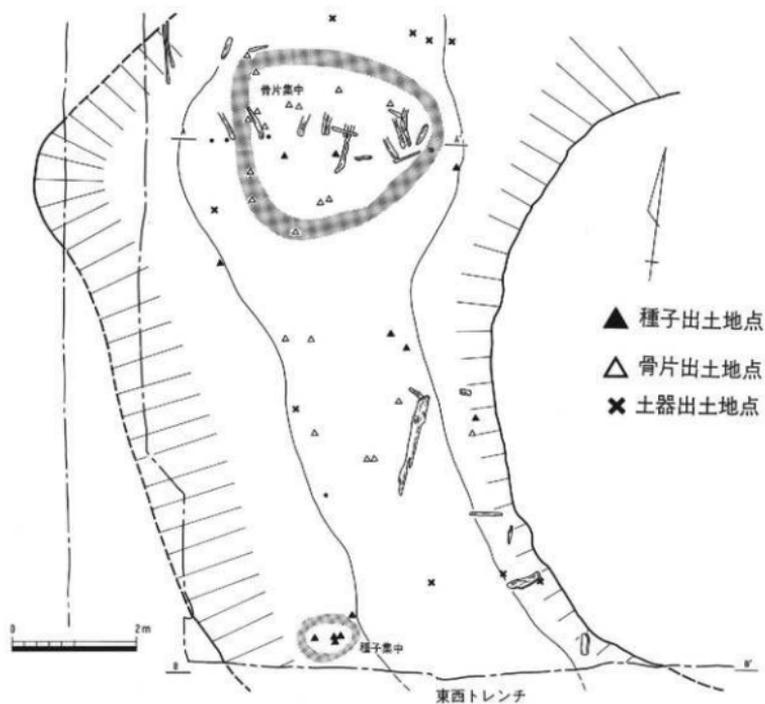
中朝留置木釘打

杭列5

第244图 25層上SR92503北西杭列5 周辺遺物出土状況图



第245図 25層上SR92503南半部杭列実測図



第246図 25層上SR92501内壕状遺構周辺実測図

22b層上で検出された遺構 水田跡・流路

22層の青灰色粘土層は、腐植混じりの下層と腐植は混じらず砂質を含む上層とに細分でき、上層を22a層、下層を22b層とした。遺構の検出されたのは22b層である。

22 a 層
22 b 層

<流路>

調査区の中央から西北部にかけて上層の3本の流路 (SR92002、92003、92004) によって深く下刻され、22層の粘土は広い範囲で失われていた。また調査区東半には北から南へと流れた流路SR92201があり、周辺が浸食されている。SR92201は、幅約4.3~5.5m、深さ1~1.2mを測る。幾度も蛇行を繰り返していたのであろう。河道を中心に幅約20mの間に、河道から枝分かれしたような浸食の痕跡が多数みられ、広い氾濫域をつくっている。本流の岸に沿って13箇所木根やその痕跡が認められ、蛇行していた流路がこの河道に安定した後、両岸に立木のある情景であったと考えられる。

流路の浸食

河岸の立木

<水田跡> [図版189]

調査区西南部に残った22層粘土層の上面には、水田が営まれていたことを示す遺構が検出された。グリッドE76とD76には、下端幅約40~60cm、高さ約15cmの盛土畦畔が検出された。しかしそれぞれ断片的で、水田区画の規模や形状については推定できない。

しかし、試掘調査では、試掘坑部分で東西方向、南北方向の大規模な盛土畦畔を確認したと報告されている。

<杭列> [第247図, 図版189・190]

グリッドD75からC75にかけて、南北方向に3本の杭列が検出された。東側の2本(杭列1、2)は接近しており、ともに1列で、広葉樹の枝材のみで構成されている。これに対し、西側の杭列(杭列3)は、方向が他の2本とは異なり、2列で打たれている。材質の点でも広葉樹だけでなく、針葉樹の板材と交互に打たれているようである。これらの杭列は、当初、杭列畦畔の痕跡かとも思われたが、25層で検出された杭列と方向、材質が類似しており、平面図を合成【第243図】してみたところ、25層上流路内の杭列の南への延長らしいことがわかった。杭列1と杭列2の周囲には多数の木材が絡んでおり、これも25層の状況と同様で、流路の中にあつたことを示しているようである。

25層 杭列

杭列3は25層上流路から出て西側へ伸びていくようだが、杭列の西側には大きな水溜まり状の落ち込みがある。一連の杭列群が流路からの導水施設ならば、水は杭列3に沿って外へ出されたのであろう。水溜まり状の落ち込みは、流路からの水を一端溜めておくためのものではないだろうか。杭列3の伸びていく先には水田の存在も想定できる。

導水施設
溜池状遺構

<遺物と年代観> [図版190]

22b層上面に伴う遺物として、木製品では、SR92201の覆土中から下駄、曲物の破片、土壇中からは曲物の破片、漆塗りの椀等が出土している。漆塗りの椀は2個体あり、杭列2と3の間より出土している。前者は黒漆で内外に桜花文を散りばめてある深めの椀で、後者は黒漆の浅い椀で、内側に朱で竹林の上を飛ぶ鳥が描かれている。

漆 椀

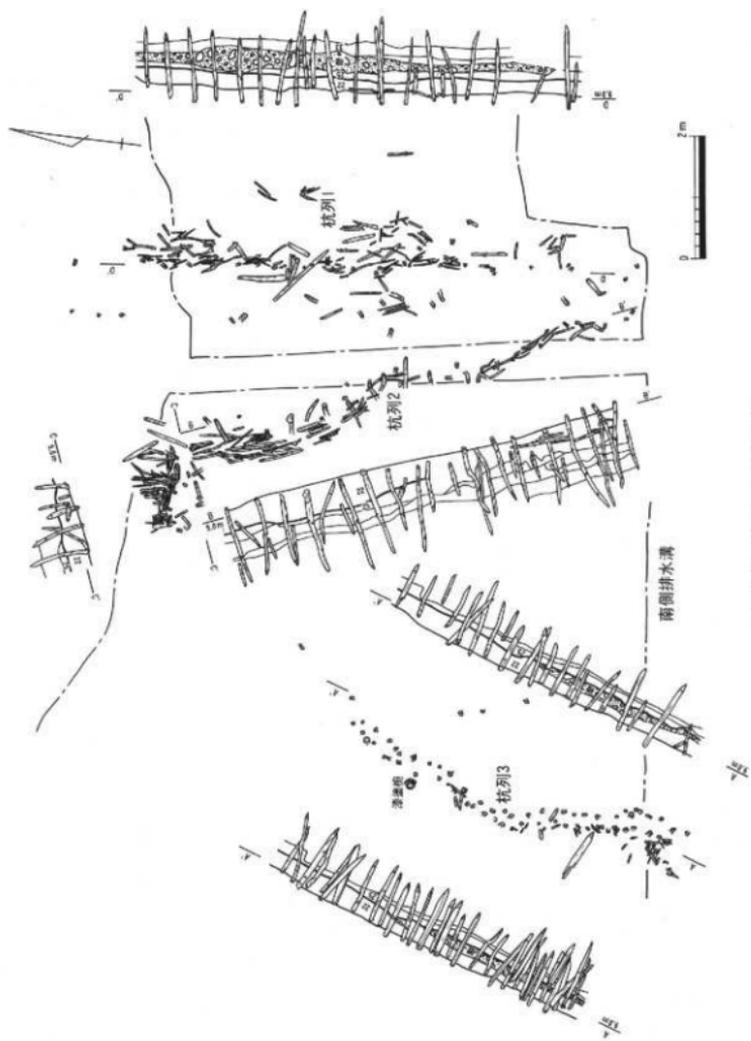
土器は、SR92201の覆土中、土壇中から40点程出土しており、土師器、灰釉に混じって緑釉のかかった陶器片、白磁片がみられる。

陶磁器

浸食された水田面から銭貨「元豊通宝」が出土している。「元豊通宝」は1078年初鑄の中国銭である。

中国銭

これらの遺物から22b層上面の年代を推定するならば11世紀代以降、中世の初め頃を含んでいるといえようか。



第247图 22层上抗列实测图

20層上で検出された遺構 水田跡・流路

22b層上面の水田が埋没した後、再び営まれた水田の遺構は20層上面で検出された。20層上面には、調査区西北端から中央南の試掘坑付近へ大きくクランクして流れる流路SR92001とその両側に広がる水田区画、調査区東端には微高地がみられる。しかし、水田面の大部分は、後の時期に北から南へと流れた4本の自然流路によって浸食されている。

〈流路SR92001〉〔第249図、図版186〕

SR92001は、水田面を挟んでいる他の流路と異なり、両岸に堤がつくられ、この堤が水田の畦畔とつながっていることから、20層上面の水田と同時に存在した水路とみられる。川幅は、約4～5.5m、深さは、約1～1.5mである。北から南へと流れていたと考えられ、河道の西岸側、つまりクランクの外側が激しく扶られていて、流水の勢いを物語っている。

堤は、下端幅約1～1.5mで盛土の高さが水田面から約20～30cmである。部分的に杭列を打ったり、芯材を埋め込んだりして補強されている。

(1) 堤の構造 〔図版187〕

グリッドE76の河道西岸の堤(水田畦畔を兼ねているのでSK92002と呼ぶことにする)には、約4mにわたって松等の針葉樹材の粗朶がていねいに埋め込まれており、河道側に杭列が打ち込まれていた。粗朶は全て南に上を向けて敷かれており、松の葉をまとめてある部分もあった。杭は、粗朶と同じ材で、枝を切りはらい先端を鋭くしたものを使っている。ここは河道がカーブし始める部分で、堤の内側はかなり激しい浸食を受けオーバーハングした状態であった。粗朶数と杭列は堤の補強のためなのであろうか、それにしては構造が丁寧すぎるような印象を受けた。

グリッドD76のSK92002上にも同様の杭列があった。この部分は堤の盛土が低くなっており、堤の外側、水田の畦畔と交差するあたりに浅い落ち込みがみられる。SR92001から水田面に引水するための水口(水口1)と考えられ、落ち込みは水を落とした部分が浸食されたのであろう。杭列は水の流れ込んでくる水口部分の縁を補強していたのではないだろうか。または水門状の施設だったのかもしれない。SR92001から水田面への水口はグリッドD75にもみられ、堤を約30cmの幅で断ち切っている。堤の外側に凹みはみられないが、これもSR92001から南側の水田面に引水したものと考えられる(水口2)。

(2) 人骨・祭祀的遺物の出土 〔図版186〕

グリッドE76の河道底から、人骨、梅または桃の種子、銭貨、斎串、土器片等が集中して出土している。人骨は、頭骨とその周辺に骨片が散乱しており、同一人物のものと考えられる。頭骨の小ささから子どもであると推測できる。人骨のすぐ南側から種子が約20個体まとまった状態で出土した。銭貨も種子のすぐ近くから2枚出土している。中国銭「正隆元宝」(1156年初鑄)、「皇宋通宝」(1039年初鑄)であった。斎串と土器片も人骨の周辺に散乱していた。遺物の出土状況、組合せから、これらは流れてきたものではなく、この場で祭祀的なことがおこなわれたと考えることができる。水路内での葬送儀礼なのであろうか。前述した堤上の粗朶敷き遺構との関係も考えられないだろうか。

〈水田跡〉〔第248図、図版186・187〕

SR92001の堤は、水田の畦畔を兼ねており、西岸の堤SK92002は南北方向の大規模な畦畔SK92001と交差している。SK92001は、下端幅が約1.8m、高さが約30～40cmの盛土畦畔である。その他の畦畔は下端幅約60～80cm高さが約10～15cmであった。全て盛土をした畦畔で、一部に杭列、芯材で補強がなされていた。ST12の北側の畦畔東端には3本だけが針

流路の浸食

水田の水路

両岸に堤

松の粗朶敷
杭列

護岸補強

水路の水口

水口脇浸食
水口の杭列

人骨
種子
中国銭
斎串

大規模畦畔

部分的杭列 桑樹の小杭が打たれていた。ST16の北側畦畔には、5 mの間に22本の杭が打たれ、芯材も埋め込まれていた。杭は広葉樹が多く、針葉樹の中には竹も含まれていた。ST19の北側畦畔の東端には、数本の木材が埋め込まれ芯材とされていた。これら補強された3ヶ所はいずれも東西方向の畦畔であり、水田区画の東隅に位置している。

**亀甲形区画
交差部水口** 水田は、20枚を数えることができる。SR92001以東、調査区東端の微高地までの間にある水田は、不揃いながら正方形に近い形状をしており、1枚が約90～95㎡程の面積であることが推定できる。畦畔は直交して交差することがなく、交差部近くには水口が切られているものが多い。

棚田状構造 西側をSR92004、東側をSR92005によって失われているこのST 5～20の水田面では、ST 5、11、15、18からST 6、12、16、19、さらにST 7、13、17、20へと南北の畦畔を境に東から西へと段々に水田面が低くなっていく、いわゆる棚田状を呈している。

(1) 水口 [第250・251図、図版188]

水口陥没食 水口の一方の側の水田面には浅い落ち込みがあるものがみられる(水口3、4、5)。この落ち込みは低いほうの水田面にあり、水を落とす際に浸食されたものと考えられる。同様の落ち込みは、畦畔の切られていない部分にもみられるが、これらも畦畔が周囲より低くなっており、水口とみなしてもよいであろう(水口10、11、12)。こうした水口の位置と水田面のレベル、落ち込みの位置から考えると、この水田の水まわしは、北東方向から南西方向へと順々に送られたことがわかる。SR92001以東の水田の水の供給源はSR92001ではなく、調査区の北東外にあるのであろう。SR92001以西の水田には、前述のように堤を切った水口から流路の水を引いていたのであろう。

水まわし SR92001以西の水田は3枚のみ確認できるが、水路のすぐ脇であることからあろう、形状、規模とも一定していない。

(2) 畦畔の方向

条里型地割 大規模な畦畔SK92001の方向は、正方位の北から約20°西へ傾いているが、SR92001以東の水田区画の南北方向の畦畔は、正方位の北より西へ約40°程傾いている。この、正方位より約40°傾く方向というのは、現在古絵図や地籍図、実際の発掘例等確認されている範囲で、静岡平野北部にみられる条里型地割の方向と一致している。

(3) 足跡

水田面には足跡らしき凸凹が全面的にみられた。SK92001西側には同一人物が南北方向に歩行している様子のわかるものがあつた。

<微高地>

井 戸 調査区東端グリッドE 69、D 69に水田面より一段高くなった微高地がある。その西縁は流路SR92005によって削られているが、水田の東西方向の畦畔とつながっていたと思われる。微高地には井戸が掘られていた。直径約2 mで、深さは3 m以上あつた。すぐ隣の区画で水路が整備されているので、この井戸から水田へと引水したとは考えにくい。微高地には水田域ではなさそうであり、調査区の東外側にひろがっていたと思われるこの微高地に水を供給するためのものであつたのだろう。

<水田面を浸食した流路群>

20層水田は、時期を異にして北から南へと流れた最低4本の流路によって、埋没し、また、深く水田面を浸食された。SR92002は、SR92001のすぐ西側の水田面に砂礫層を堆積させた流れである。SR92003は、SR92001の覆土の上から東側にかけて流れているが、グリッ

ドE75付近は現代の攪乱によってはっきりしない。SR92004は、河道が大きく、西側ではSR92003の東側を一部削っており、東側では水田面を広く浸食している。最も川幅の広いところで約30m近くある。SR92005は、調査区の東端、微高地の縁を浸食している約5mの幅の流路である。新旧関係は切り合いから考えると、SR92001⇒SR92002⇒SR92001の氾濫⇒SR92003⇒SR92004⇒SR92005である。

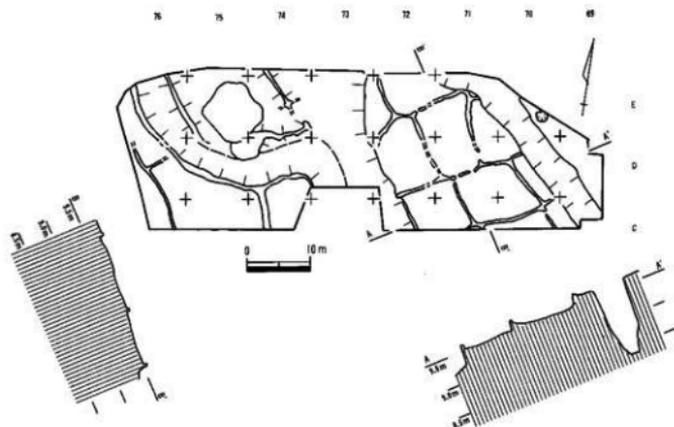
流路の新田

〈遺物と年代観〉

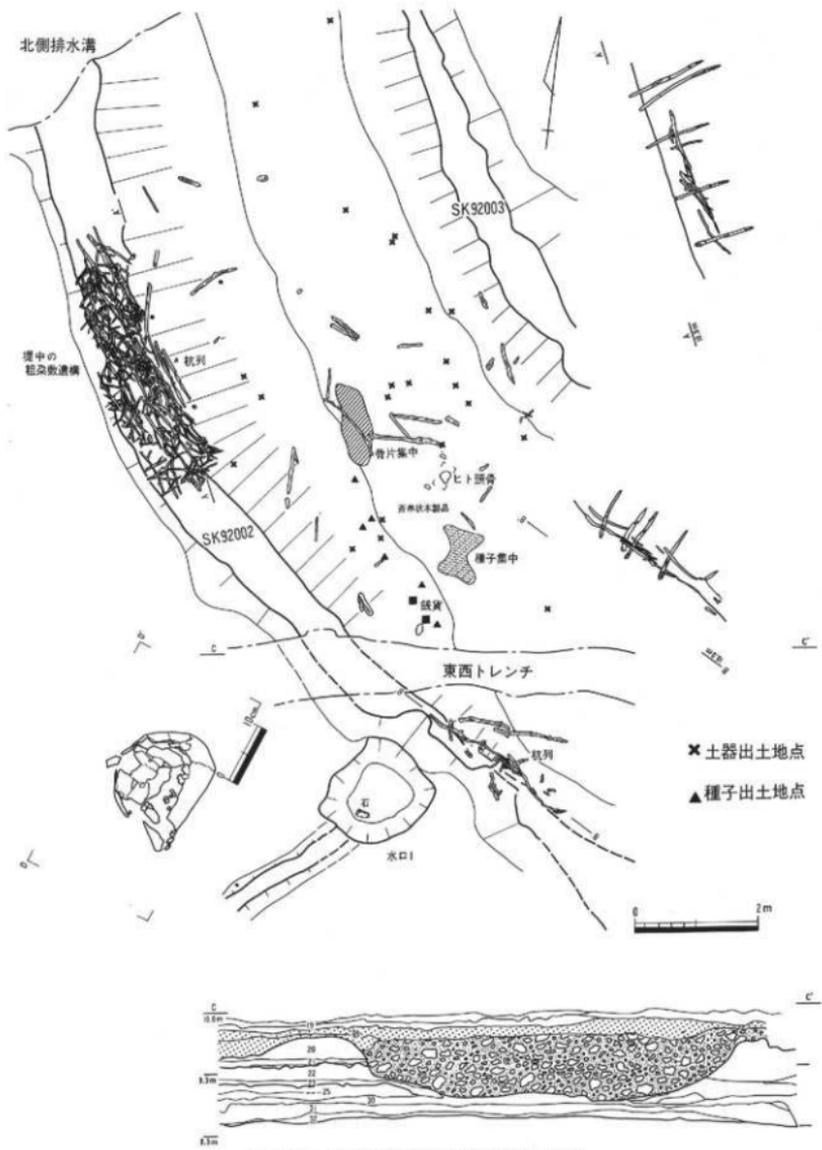
20層水田に伴う遺物はほとんどなく、グリッドE72の耕作土中から鉄製の鎌刃が、SK92005の杭列の近くから下駄が出土しているぐらいである。流路内からは、前述したようにSR92001の底から人骨、種子、銭貨2枚、斎串2本、土器片が出土している他、覆土の砂礫層からも銭貨、土器片が出土している。土器片は、土師器、須恵器に混じて灰釉、山茶碗が数点あり、施釉されたものや白磁もみられた。水田面を浸食している4本の流路の覆土中より出土した土器片の構成も、それぞれ土師器、須恵器が多い中に、灰釉が数点、白磁や青磁、施釉されたものが1点か2点混じっている。

山茶碗
陶磁器

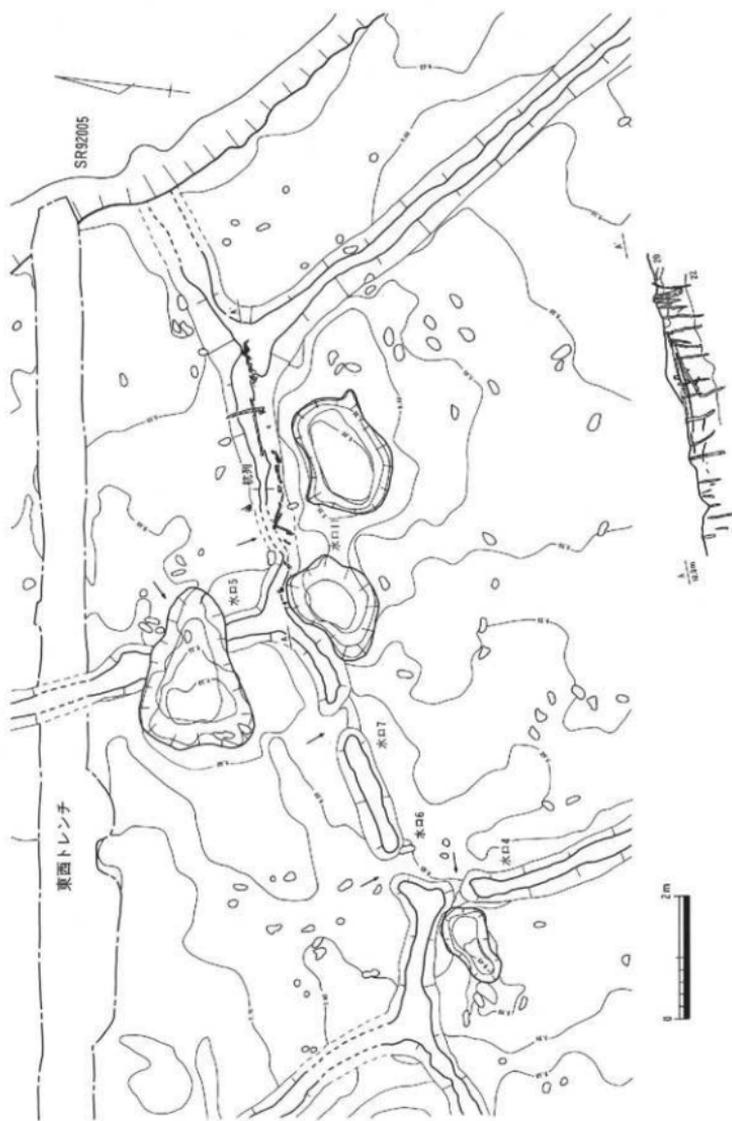
20層上面の水田の時期は中世あたりであろうか。



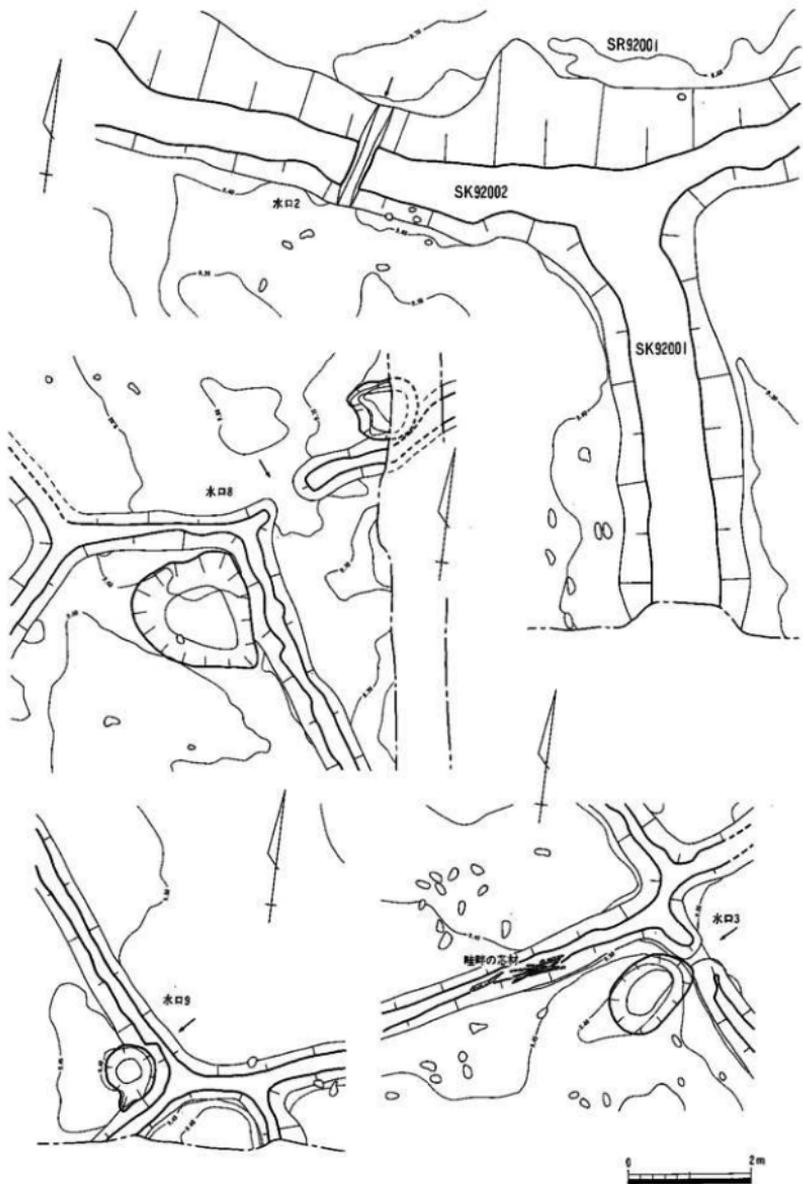
第248図 20層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



第249図 20層上SR92001内遺物出土状況図



第250図 20層水田畦畔水口実測図1



第251図 20層水田畦畔水口実測図2

13層上で検出された遺構 水田跡

20層上を浸食して流れた流路群は、厚い砂礫やシルトの堆積層(19~16層)を形成していった。13層はその上に営まれた水田の耕作土で、暗い灰青色の砂混じり砂質粘土である。

13層は、調査区の西半では粘性が強く、東半では粘性が弱かった。13層上面では水田遺構はグリッド72以西の調査区西半にのみ検出され、東側には検出されなかった。東側の地形は低く、水田面の浸食の度合いによって検出できなかったものとも考えられたが、土壌の成分も変わっているようで、実際には途中で検出面を誤ってしまったようである。上層の水田面とした10層とは本来同一遺構面であった可能性がある。なおグリッドE75とD74付近は、現代の高圧電線鉄塔と産廃物投棄によって攪乱されていた。

〈水田跡〉[第254図, 図版184]

13層上面の水田遺構では、水田区画の規模や形状は明確にならなかった。水田面に洪水流によるものと思われる浸食が多いことと、東西方向の畦畔に比べ、南北方向の畦畔の残存状態が悪かったためである。畦畔は、下端幅約60~85cm、高さ10cm以下の盛土畦畔であった。東西方向の畦畔は盛土が連続して検出されたが、南北方向の畦畔は東西方向の畦畔から枝が出たような状況でしか盛土が検出できなかった。おそらく、東西方向の畦畔を基軸として区画が行われていたのであろう。この東西方向の畦畔は、真東より約32°~42°北へ傾いており、静岡平野北部で確認されている条里型地割の方向性にほぼ一致している。

畦畔には、部分的に杭列が打ち込まれていた。グリッド75以西、調査区の西端に近い部分である。

(1) SK91301の杭列 [第252図]

東西方向の畦畔SK91301には、樹皮をつけたままの広葉樹の杭ばかりが打ち込まれている。杭と杭との間隔は一定していないが、24本の杭の間の7ヶ所が約30cmの間隔であった。失われたものもあると考えれば、当初はこれぐらいの間隔であったのだろう。SK91301は西側で盛土がほとんど失われていたが、杭は西側へいくほど長いものが使われているようであった。杭は盛土の南側に位置するものが多かった。グリッドF75には、SK91301の延長線と直交するような南北方向の杭列がある。やはり樹皮をつけたままの広葉樹の細い杭で、約10cm程の間隔で9本が並んでいる。盛土は認められなかったが、SK91301と交差する南北方向の畦畔があったのであろう。

(2) SK91302の杭列 [第253図, 図版185]

東西方向の畦畔SK91302には、盛土の南側に40数本の杭が打ち込まれている。杭は、樹皮をつけたまま先端のみ加工した広葉樹材で、西側へいくほど長いものが使われているようである。杭と杭の間隔は一定しておらず、グリッドD76の南北方向の畦畔との交差点東側付近が1箇所だけ非常に密集している。約3mの間に18本の杭が打ち込まれ、この部分だけ特別に長い杭が使用されているようである。

(3) SK91303の杭列 [第253図, 図版185]

グリッドD75でSK91302と交差する南北方向の畦畔SK91303にも盛土の中央に広葉樹の杭列があった。やはり先端のみを加工した杭を使っており、短いものばかりである。杭と杭の間隔は約40~60cmで揃っているようであった。SK91302と交差する他の南北方向の畦畔にはこうした杭列はない。また、SK91303とSK91302のあるグリッドD75付近の水田面には洪水による浸食の痕跡があることから、杭列は畦畔築造当初から打たれたのではなく、洪水流により崩壊した部分を後から補強したものと思われる。

19~16層

10層と同一

現代の攪乱

区画基軸

条里型地割

部分的杭列

広葉樹の杭

交差点密集

崩壊部補強

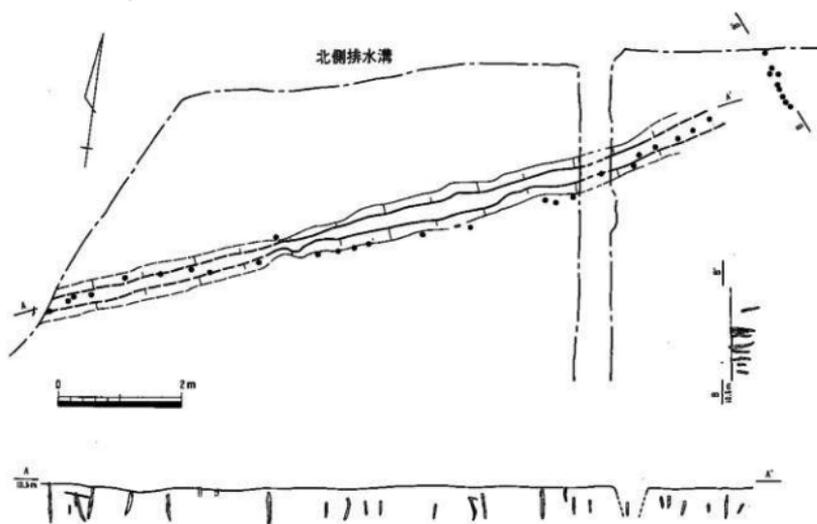
グリッド E77 の調査区西端にも東西方向に 3 本の広葉樹の杭が打たれていた。盛土はみられなかったが、これも東西方向の畦畔を補強していたものであろう。

(4) 足跡

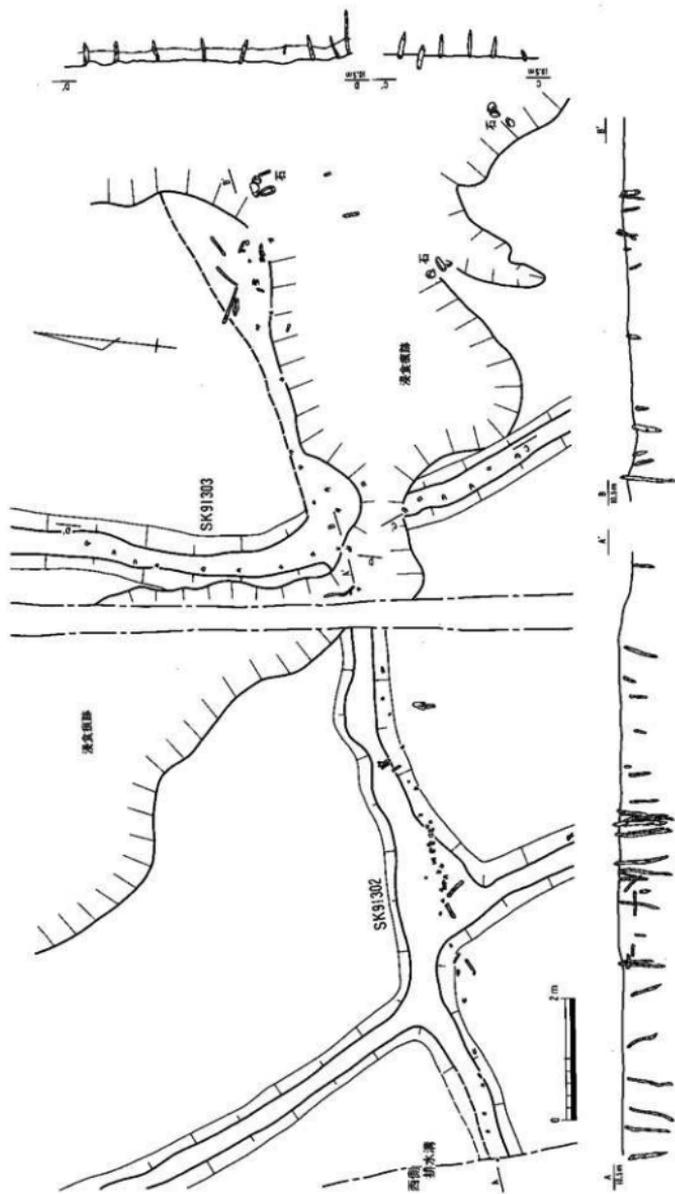
13 層上の水田域には、ほぼ全面にわたって足跡が残っていたが、形状は不明確なものも多く、分布や方向に規則性は見出せなかった。

<遺物>

13 層に伴う遺物は非常に少なく、グリッド C71 の 13 層上面から長さ約 8 cm の鉄製刀子が出土した他、杭列に絡んだ若干の木片、13 層の内部や上面からの土器片が数点あるのみである。土器片には、山茶碗が含まれていた。



第252図 13層水田SK91301杭列実測図



第253图 13層水田SK91302・91303枕列実測図

10層上で検出された遺構（13層水田の東半部分）

10層は高植混じりの砂質粘土層で、調査区の東半部のみ存在していた。10層と13層の間の11層・12層も13層上の地形が低くなっている東半部のみ堆積しており、西半部には存在していない。10層上の覆土を除去すると、東半で10層の遺構面、西半で13層の遺構面が現われることになった。そこで、10層の調査を先に行い、東側を掘り下げてから13層の調査を行った。しかし、実際には10層と13層の平面的な境ははっきりわけることができなかった。実際には土壌が変わっても同一遺構面であった可能性がある。

〈水田跡〉〔第254・255図、図版183〕

10層上面では、下端幅約60cm、高さ約5cmの盛土畦畔が東西方向に2列、南北方向に2列検出され、水田であったことがわかる。しかし、四方を畦畔に囲まれる区画は残っており、水田の規模、形状ははっきりわからない。同じ方向の畦畔の間隔で推定するならば、一辺約10～12mの若干南北に長い長方形の区画ではないだろうか。

畦畔の方向は、東西方向のものが東位で正方位より約40°北へ傾いている。これは13層上面の水田畦畔の場合と一致している。また、東西方向の畦畔のうち南側のものは、その延長線が13層上面のグリッドC72にある東西方向の畦畔に一致する。こうしたことから、10層上面と13層上面の水田は耕作土の堆積状況が異なるものの、同時期に営まれた可能性がある。13層上面の地形の低い部分に11層、12層が堆積した後、10層上面にも13層上面にも同じ水田区画がつけられたのではないだろうか。

畦畔と畦畔の交差点付近には水口らしい盛土の途切れた部分が5ヶ所確認できる。足跡らしき凸凹は全面に存在するが、浸食により確定はできなかった。

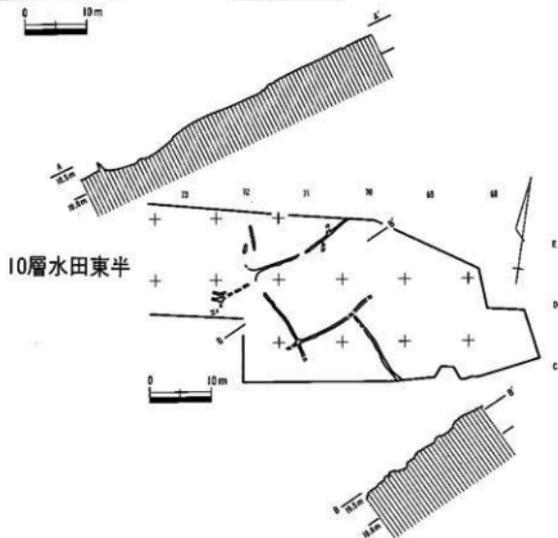
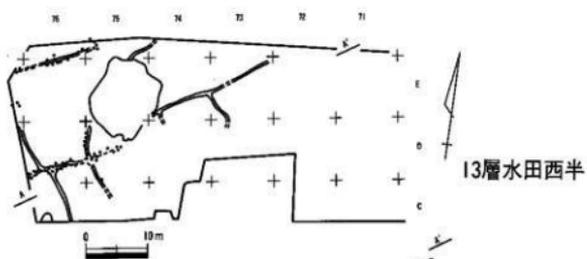
10層上面と13層上面が同時期とすると、この水田は、調査区の東側（10層側）で地形が高く、西側（13層側）が低かったことになる。東側（10層側）では数ヶ所水口が設けられているのに対し、西側（13層側）では1ヶ所のみとめられず、水田面に浸食が多いのも水田面のレベルの差によるものであろうか。

〈遺物と年代観〉

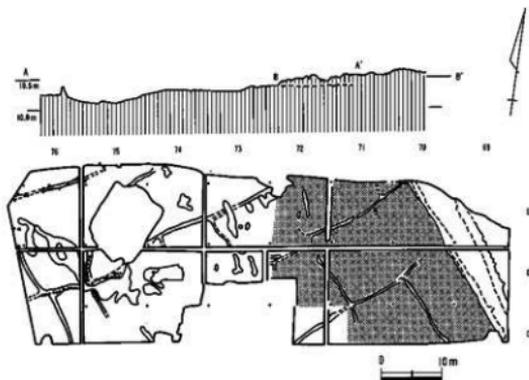
寛永通寶 10層上から出土した遺物には、10数点の土器片と銭貨「寛永通寶」がある。土器片の中には磁器や皿、すり鉢等近世のものが多く、「寛永通寶」とあわせて、10～13層の水田の営まれた年代を表している。

〈流路〉〔図版183〕

水 路 なお、5層の調査の段階でグリッドE70からC69にかけて南北方向の流路SR90504が検出された。10層上面の水田と同時期である可能性がある。この河道と10層上面の南北方向の畦畔は平行しており、水路として利用されていたとも考えられる。



第254図 13層水田・10層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



第255図 13層水田・10層水田平面合成図

5層上で検出された遺構 畝状遺構・埋礫土坑群・流路

9区で最も新しい年代の調査面である。1層と2層は近代以降の客土で、現地表面では畑が営まれていた。3層、4層としたのは、洪水により堆積したと思われる砂・砂礫で、これを掘り下げると5層上面の遺構が現われた。

現地表面には、グリッドE75の位置に高圧電線の鉄塔が立っており、調査前に移設してもらったが、土台の跡が大きく調査区内に残ってしまった。また、調査区西北端グリッドE76付近と調査区南半グリッドC75、D74、C74、C73付近には、産業廃棄物が投棄されており、周辺は著しく攪乱、変質を受けていた。

現代の攪乱

〈畝状遺構〉〔第256図、図版182〕

5層上面には、地形に段差のついている部分が多いが、段差を境に地形の高いほうから低いほうに向って細長い舌状の高まりが節状に数本まとまって延びている状況がみられた。グリッドD74、D75、E76に4群みとめられるが、東側にある畝状遺構1と2は西から東へと高まりが伸びており、畝状遺構3と4は北から南へと伸びている。地形に応じてつくられているようである。

地形に対応

個々の舌状の高まりは、幅約20cm程、長さが3～4mのものが中心で、それぞれ30～40cm程の間隔が空けてある。よく観察すると、これらは水田畦畔のように盛土されているのではなく、逆に、それぞれの間隔部分を溝状に削ることによってつくられていることがわかった。こうした構造は、畑の畝によくみられるものである。調査面には攪乱部分が多く全体像はつかめないが、おそらく微高地部分の半島状の縁を利用してつくられた畝で、等高線に沿って畑が分布していた痕跡と思われる。

等高線に沿って畑分布

〈畦畔状遺構〉

調査区の西南隅グリッドD76に、畦畔状の遺構が2本みられる。下端幅約0.8～1mに対し、高さが約1～2cmと畦畔としては低く、平坦すぎる印象を受けた。水田を区画するというより、農道のようなものではないだろうか。この遺構から南側は地形が低く足跡も多くみられることから、水田域と畑作域を画しているものとも考えられる。

水田域

〈埋礫土坑群〉〔図版182〕

礫の詰まった土坑は、地形の高いグリッドE73、E74付近に集中して9基検出された。最も北側の1基を除けば、グリッドE73の3基（土坑群1）とグリッドE74の5基（土坑群2）にグループが分かれているようであった。土坑群1は、掘り方の形状が長径約2～3m、短径約0.8～1mの長楕円形で、深さが約30～40cmを測る。土坑群2は、直径約1～1.5mの円形の掘り方で、深さは約40～60cm、深いものは底を2段に掘ってあった。

洪水埋藏

こうした土坑群は、西隣の10区、更に西へ現長尾川を越えた宮下・川合遺跡にもみられ、洪水によって地表を覆った礫を片付けたものとされている。礫の詰まった土坑群から東側では、遺構らしきものは見付けられず、土地利用のされない微高地であったと考えられる。

非耕作域

この5層上面では、南西ほど低くなっていく地形の上に、低いほうから水田域、畑作域、非耕作域と分布している様相がみられたのではないだろうか。

〈遺物と年代観〉

5層上面に伴うとみられる遺物は出土しなかった。しかし、現地表面の客土層からすぐ下層ということから、遺構の時期は近世～近代であることはまちがいないであろう。

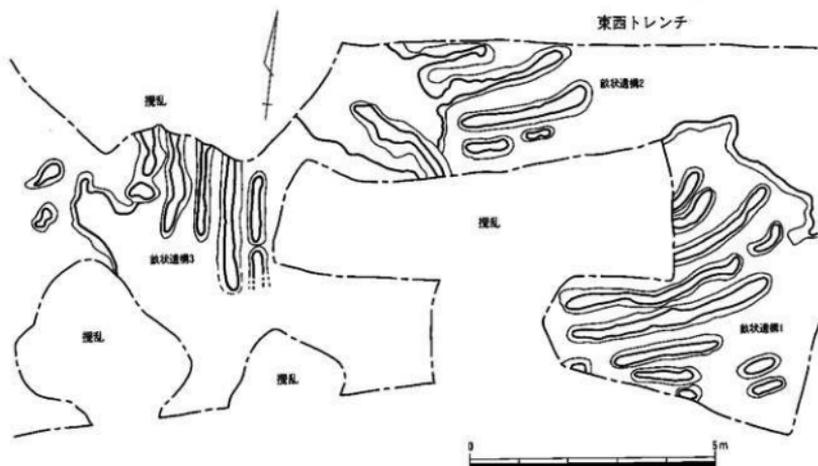
〈流路群〉

なお、5層上面調査当時、廃土置場であったグリッド68～70の範囲について、後になっ

て調査をしたところ、南北方向の流路が4本検出された。このうち最も西に位置するSR90504は、両岸の層位から、10層上面の水田と併存していたことがわかった。他の3本については、河道が重なっており、個々の層位の同定は困難であったが、西端のSR90503が最初で、続いて中央のSR90502、最後に東端のSR90501が流れたことが、覆土の切り合いによりわかった。

流路の新田

遺物は、SR90504から漆塗りの椀が、SR90502から「少佐」という文字の読める木札が出土した他は、摩滅した数片の土器細片があるのみである。



第256図 5層水田畝状遺構実測図

水田計測表(9区 40層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	6.85	--	--	--	--	部分的検出
2	6.94	--	--	3.3	1.2	"
3	6.85	--	--	--	--	"
4	6.92	2.0	台形	1.4	1.2	"
5	6.97	2.2	台形	1.8	1.1	"
6	6.89	--	--	--	(1.0)	部分的検出
7	6.90	--	--	--	(0.9)	"
8	6.72	--	--	--	--	"
9	6.74	--	--	--	--	"
10	--	--	--	--	--	一部区外
11	6.65	--	--	--	1.4	"
12	6.70	--	--	--	1.3	"
13	6.75	--	--	--	--	部分的検出
14	6.80	--	--	--	--	"

水田計測表(9区 38層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.28	--	--	--	--	一部区外
2	7.29	--	--	--	--	"
3	7.24	--	(長方形)	3.0	2.3	"
4	7.22	--	--	--	2.3	"
5	7.29	--	(長方形)	--	1.8	"
6	7.24	4.7	長方形	3.0	1.3	"
7	7.20	推 4.4	長方形	3.0	1.4	一部区外
8	7.17	--	--	--	--	"
9	7.30	--	--	--	(2.0)	"
10	7.25	推 7.5	台形	3.4	(2.0)	"
11	7.19	推 7.5	長方形	3.1	1.9	"
12	7.18	--	--	--	2.5	一部区外
13	7.26	--	--	--	--	部分的検出
14	7.23	--	--	--	--	一部区外
15	7.55	--	--	--	--	"
16	7.53	--	--	4.9	--	浸食
17	7.60	--	--	--	2.1	部分的検出
18	7.61	推 9.1	長方形	5.2	2.0	一部トレンテ
19	7.65	--	--	--	--	部分的検出
20	7.72	--	--	5.5	--	"
21	7.64	--	--	--	(4.0)	"
22	7.70	--	(長方形)	8.1	3.4	"
23	7.58	--	--	--	4.0	一部区外
24	7.58	--	(長方形)	(7.3)	4.0	部分的検出
25	7.81	推 13.5	四辺形	4.8	3.1	扇状畝高地に面する
26	7.68	--	(台形)	6.4	(4.7)	部分的検出
27	7.74	--	--	--	--	"
28	7.68	--	(台形)	6.8	(5.3)	"
29	7.37	--	--	--	--	"
30	7.04	--	--	--	--	一部区外 大区画
31	7.61	--	--	--	--	"
32	7.50	--	--	--	--	部分的検出
33	7.34	--	--	--	--	部分的検出
34	7.35	--	長方形	3.5	1.7	"
35	7.29	4.8	台形	2.6	1.7	"
36	7.30	--	--	--	--	一部区外
37	7.31	--	--	--	--	部分的検出
38	7.23	推 10.0	台形	3.6	2.6	"
39	7.27	8.5	台形	3.1	2.7	"
40	7.17	推 11.1	長方形	3.5	2.9	一部区外
41	7.08	--	(長方形)	--	2.7	部分的検出
42	7.03	8.0	台形	3.0	2.5	"
43	7.12	6.1	長方形	2.9	2.3	"

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
44	7.18	4.4	台形	--	2.6	1.5
45	7.13	--	--	--	--	一部区外
46	7.11	--	長方形	16.3	3.9	浸食
47	7.06	--	--	--	--	一部区外
48	7.04	--	--	--	--	大区画

水田計測表(9区 37層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	7.83	--	--	--	--	部分的検出
2	7.91	--	--	6.4	--	"
3	7.80	--	(長方形)	--	1.0	一部区外
4	7.81	7.9	長方形	6.4	1.0	"
5	7.73	--	(長方形)	--	1.0	一部区外
6	7.76	8.5	長方形	6.4	1.3	"
7	7.80	--	(長方形)	--	0.8	一部区外
8	7.88	--	(長方形)	--	1.3	"
9	7.75	--	--	--	--	部分的検出
10	7.89	--	(長方形)	--	1.2	一部区外
11	7.73	--	--	--	1.3	部分的検出
12	7.89	--	(長方形)	--	(1.2)	"
13	7.83	--	--	--	--	"
14	7.85	--	--	--	--	"
16	7.77	--	--	--	--	"
17	7.72	--	--	--	--	"
17	7.86	--	--	--	--	"
18	7.74	--	--	--	--	"
19	7.78	--	--	--	--	"
20	7.40	--	--	--	--	"

水田計測表(9区 33層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.24	--	--	--	--	浸食
2	8.35	--	--	--	--	"
3	8.14	--	--	--	--	"

水田計測表(9区 20層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.15	--	--	--	--	浸食
2	9.20	--	--	--	--	"
3	9.37	--	--	--	4.5	一部区外
4	9.55	--	--	--	--	"
5	9.37	--	--	--	--	浸食
6	9.77	--	--	(12.0)	--	"
7	9.50	--	--	--	--	"
8	9.07	--	--	--	--	"
9	9.09	--	--	--	--	"
10	9.38	--	--	(16.5)	(4.8)	一部区外
11	9.62	--	--	10.7	--	浸食
12	9.70	91.6	台形	12.1	6.3	"
13	9.62	--	--	11.2	--	浸食
14	9.33	--	--	--	6.6	一部区外
15	9.63	--	--	9.2	--	浸食
16	9.50	95.3	台形	11.0	8.5	"
17	9.52	--	(台形)	--	8.0	一部区外
18	9.56	--	--	--	--	浸食
19	9.43	--	--	--	(9.8)	一部区外
20	9.39	--	--	--	--	"

第74表 9区水田計測表 1

水田計測表 (9区 13層水田)

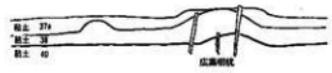
No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	10.35	—	—	—	(9.2)	一部区外
2	10.30	—	—	(16.0)	(7.0)	浸食
3	10.28	—	—	—	—	一部区外
4	10.34	—	—	(24.8)	—	部分的檢出
5	10.30	—	—	—	8.0	一部区外
6	10.30	—	—	(18.0)	—	部分的檢出
7	10.28	—	—	—	5.5	〃
8	10.24	—	—	—	—	一部区外
9	10.28	—	—	—	—	部分的檢出・一部区外
10	10.34	—	—	—	—	〃
11	10.27	—	—	—	—	〃

水田計測表 (9区 10層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	10.46	—	—	—	—	一部区外
2	10.50	—	—	(13.3)	—	〃
3	10.52	—	—	—	—	部分的檢出
4	10.48	—	—	(12.0)	—	〃
5	10.50	推 125.5	—	12.5	9.0	〃
6	10.58	—	—	(11.8)	(5.5)	部分的檢出
7	10.43	—	—	—	—	一部区外
8	10.49	—	—	—	9.2	〃
9	10.54	—	—	—	—	部分的檢出

第75表 9区水田計測表 2

瀬名遺跡 9区 40層水田（時期 弥生時代中期後半～後期）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川現河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在懸川（長尾川支流）が流れている。		
	② 地形面の変化	部分的で不明確。ただし、調査区中央は下層の周溝墓のマウンドによって高くなっており東と西に向かって低くなっていった。		
	③ 水田の範囲と面積	調査区の西端のみ。約200㎡。		
土層の状況	④ 直上の層の土壌	粘土。39層砂質粘土層の一部にしかなく、38層耕作土直下といえる。		
	⑤ 水田土壌	黒灰色粘土。黒泥質が強い。厚さ約10cm。		
	⑥ イネのプラントオパール	<F70地点> 600個/g	<C76地点> 8,300個/g	<F73地点> ① 2,200個/g ② 2,300個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。方形周溝墓基盤層。		
	⑧ 畦畔の規模	3種類の大きさの畦畔がある。大きな畦畔は下端幅約140cm、高さ約10cm、小さな畦畔は下端幅約40～50cm、高さ約2cm、中間の大きさの畦畔は下端幅約80cm、高さ約5cm。		
	⑨ 畦畔の構造	大きな畦畔と中間の大きさの畦畔には枕列が伴っており、小さな畦畔は盛土のみの畦畔。枕列は基本的に1列で全て広葉樹材。交差部付近では2列になったり、矢板を伴って補強している。		
	⑩ 水田区画の方法	大きな区画をつくり、その内側を小さな区画で更に細分している。大きな区画と小さな区画の間には間隔がある。		
	⑪ 水田区画の形	正方形に近いと推定。		
	⑫ 枚数と面積	14枚。うち面積の確認できるもの2枚。約2㎡。		
用排水の状況	⑬ 田面の状態	はっきりした足跡は確認できなかった。		
	⑭ 水源	不明。		
	⑮ 自然流路	なし。		
	⑯ 水路	なし。		
遺物	⑰ 水路	なし。		
	⑱ 水口	なし。		
遺物	⑲ 遺物の種類	水田上面から土器細片70点、田下駄出土。		
年代	⑳ 年代推定の根拠	水田上面から出土した土器の中には下層41層の方形周溝墓周溝遺跡出土と同じ時期とみられるものが含まれ、周溝墓発地からさほど時間の経っていない弥生中期末～後期頃くらいと推定。		
	㉑ 隣接区との対応関係	西隣10区の36層水田と同一面の可能性あり。		
その他	㉒ 自然科学的分析			
遺構確認面とその図	㉓ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 		
		(説明) 大きな畦畔は38層水田の大きな畦畔とほぼ同じ位置にあるが、盛土の上端は若干ずれていた。枕は38層水田のものとは材質が異なり、頭のレベルも異なっている。小さな畦畔は土層断面では確認できず、平面で粘土の土色の違いが帯状に現れる部分を探した。畦畔による区画が確認されたことと土壌のプラントオパールが高値を示したことにより水田と認定。		

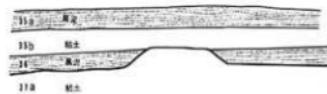
第76表 9区水田観察表1

瀬名遺跡 9区 38層水田(時期 弥生時代末～古墳時代初頭)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川現河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在鹿川(長尾川支流)が流れている。
	② 地形面の変化	調査区中央が高く、東と西へ低くなっている地形。南北方向は若干北から南へ傾斜。下層に周溝溝のマウンドがあるためである。中央から東西への傾斜はどちらも約20cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全域。約1,300㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	粘土。砂質粘土の37b層は部分的なもので、全体的には37a層の耕作土の直下。
	⑤ 水田土壌	暗青灰色砂混り粘土。厚さ10～20cm。
	⑥ イネのプラントオパール	<Dの地点> ① 4,000個/g ② 10,800個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。
	⑧ 畦畔の規模	3種類の大きさの畦畔が存在する。最も大きな畦畔は下端幅約150～200cm、高さ約15cm、小さな畦畔は下端幅約40～60cm、高さ約5cm、中間の大きさの畦畔は下端幅約70～100cm、高さ約10cm。
	⑨ 畦畔の構造	大きな畦畔、中間の大きさの畦畔には、全て杭列が伴う。小さな畦畔は全て盛土のみ。杭列は盛土の両側へ2列が基本で、全て針葉樹材。横杭列で土留めしている部分もあり。
	⑩ 水田区画の方法	大きな区画をつくり、その内側を小さな区画で更に細分している。大きな区画は下層の水田を踏襲し、杭列で補強している。
	⑪ 水田区画の形	若干南北に長い長方形。大きな区画毎に若干形状と規模が異なる。
	⑫ 枚数と面積	48枚。うち面積の確認できるもの13枚。最大約13㎡。最小約4㎡。平均7～8㎡。
	⑬ 田面の状態	明確な足跡は検出できなかった。
用排水の状況	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。S R93801は後に水田面を浸食して流れたもの。
	⑯ 水路	S R93801。自然流路を利用したものと考えられ、自然堤防と小さな区画の畦畔がつながっている。
遺物	⑰ 水口	2ヶ所。S K93802の切られている部分とS K93803とS K93804との交差部に盛土のない部分がある。大区画と大区画との間の水まわしを示している。
	⑱ 遺物の種類	大きな畦畔内部より田下駄多数、農具片、建築材が出土。土器も割られたような状況で細片となって数個体出土している。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	畦畔内出土の土器に折り返し口縁の壺、小型土器が含まれていること、直上層からS字壺が出土した等の理由から、弥生時代終末から古墳時代初頭と考えている。
	⑳ 隣接区との対応関係	西隣10区の33層水田、東隣8区の17a層水田と同一水田域であると考えられる。瀬名遺跡全域に同様の杭列畦畔がある。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 大きな畦畔は、37a層水田の大きな畦畔とほぼ同位置に土層断面で確認された。37a層と38層はともに粘土層で分層は困難であったが、38層には杭列が伴い、大きな畦畔の存在は明確であった。小さな畦畔は土層断面では確認できず、平面的に土色の違いが帯状に現れる部分を探した。畦畔による区画の確認と土壌のプラントオパールが非常に高値だったことから水田と認定。

第77表 9区水田観察表2

瀬名遺跡 9区 37a 層水田(時期 古墳時代前期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川現河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在龍川(長尾川支流)が流れている。
	② 地形面の変化	北東が高く、南西に向かい低くなっている傾斜約10cm/10m。しかし、調査区中央は下層のマウンドにより周囲より若干高くなっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区西側2/3。約1,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	黒泥。未分解の植物質を多く含む。
	⑤ 水田土壌	暗灰色粘土。厚さ約20cm。37b層は西側一部にのみ存在。
	⑥ イネのプラントオパール	<D69地点> ① 5,400個/8 ② 10,800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘土。
	⑧ 畦畔の規模	大小2種類の畦畔がある。大きな畦畔は下端幅約150~250cm、高さ約15cm、小さな畦畔は下端幅約60cm、高さ約5cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大きな区画をつくり、更にその内を小さな区画で細分している。大きな区画は下層の水田からの踏襲。小さな畦畔は南北方向が優越で、南北方向を基軸にして区画していると考えられる。
	⑪ 水田区画の形	南北に非常に長い長方形。短冊形。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	20枚。うち面積の確認できるもの2枚のみ。約8㎡。
	⑬ 田面の状態	大きな畦畔の周囲を中心に足跡の集中箇所がみられ、畦畔を越えて南北方向に、また畦畔に沿って東西方向に歩行しているものが多いようである。足跡が通らない溝状になっている部分あり。
	⑭ 水源	不明。S R93701は西側(10区側)の水田面に向かい水を供給していたと考えられる。
遺物	⑮ 自然水路	S R93701。S K93701はここで途切れている。西岸には自然堤防がある。
	⑯ 水路	S D93701・02。S R93701から自然堤防を切って西側の水田面へと導水しようとするもの。S K93702はS R93701に沿って、水を南へと導く堤も兼ねていたと考えられる。
	⑰ 水口	1ヶ所。S K93701が切られており、北側の区画(S T1)から南側の区画(S T2)へと水を移動させていたと考えられる。水門らしき横板もあり。
年代観	⑱ 遺物の種類	S K93701がS R93701に近付いて途切れるあたりから、田下駄、農具片等の木製品と1固体分の台付甕が出土。
	⑲ 年代推定の根拠	畦畔中から出土した台付甕がS字状口縁をもつものであったことから、弥生時代末から古墳時代初頭あたりであることが考えられる。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	西隣10区31a層水田。 杭列水田の直上で、木遺状遺構のある黒泥層の直下という層序関係が共通。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 黒泥層に被覆され、良好な状態で遺構を検出できた。 土層断面でも明確に畦畔の高まりが確認でき、プラントオパールも非常に高い値を示した。ことから、水田と認定。

第78表 9区水田観察表3

瀬名遺跡 9区 33a 層水田（時期 古墳時代後期～奈良時代以降）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川規河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在藤川（長尾川支流）が流れている。
	② 地形面の変化	北東が若干高いのは、流路S R 93301の自然堤防ができていたためか。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の西半のみ。約800㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	粘土。東半はS R 93301により供給された砂に被覆されているが、西半は腐植混じりの粘土層に被覆されている。
	⑤ 水田土壌	灰褐色粘土。厚さ約10cm。下層33b層とはほとんど同質。
	⑥ イネのプラントオパール	<D76地点> 0個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘土。
	⑧ 畦畔の規模	3種類の規模の畦畔が存在する。最も大きな畦畔は下端幅約200m、高さ約10cm、小さな畦畔は下端幅約60cm、高さ約5cm。その中間の大きさの畦畔は下端幅約150cm、高さ約5cm。
	⑨ 畦畔の構造	土盛りの畦畔。
水田の状況	⑩ 水田区画の方法	南北方向の畦畔のみ確認され、南北方向は基軸とした区画だった可能性あり。大きな区画をつくり、更にその内を小さな区画で細分していると推定。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	足跡は確認できなかった。 流路に伴う水溜まり状の侵食痕跡や細かい凹凸が無数にあった。
	⑭ 水原	不明。しかしS R 93301は水田と同時期であると考えられる。
	⑮ 自然流路	S R 93301。後には、水田面を侵食してS R 93302・03が流れている。
遺物	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
	⑱ 遺物の種類	S R 93301より、曲物の破片や畜串状の板、獣骨片、鉄製の鎌刃、土器片。S R 93303より、畜串状の板多数、大型の田舟、土器片。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	S R 93301出土の須恵器⑩は古墳後期～奈良と推定される。流路内の遺物なので遺構面の年代はそれかそれ以後ということになるだろう。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 土壌は薄く、プラントオパールも検出されなかったが、南北方向の畦畔が5本確認された。特に大規模なものは土層断面においても明確に確認されており、大規模な区画と小規模な区画をもつ水田であることが考えられる。

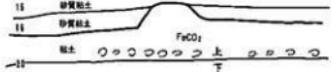
第79表 9区水田観察表4

瀬名遺跡 9区 22b層水田(時期 中 世)

水田の造成	④ 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川現河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在懸川(長尾川支流)が流れている。
	⑤ 地形面の変化	調査区東側の流路S R 92201の両岸は自然堤防になって地形が高くなっている。水田面の傾斜はほとんどなく平坦。
	⑥ 水田の範囲と面積	調査区の西南部のみ。約400㎡。他は流路によって浸食されている。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。S R 92201により供給されたと考えられる。
	⑤ 水田土壌	青灰色腐植混じり粘土。厚さ20~30cm。攪拌された状態。東側へいくとS R 92201から供給された砂層をはさみ上層22 a層と分層できる。
	⑥ イネのプラントオパール	<C 82地点> 1,600個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。
	⑧ 畦畔の規模	小さな畦畔のみ。下端幅約40~60cm、高さ約15cm。断片的で不明確。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	不明。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	5枚。面積の確認できるものはなし。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	浸食激しく不明。
	⑭ 水源	調査区東側の流路S R 92201と考えられる。
	⑮ 自然流路	S R 92201。両岸に立木群のある流路で、広い氾濫域をもつ。
	⑯ 水路	なし。
遺物	⑰ 水路	なし。
	⑱ 水口	なし。
年代	⑲ 遺物の種類	耕作土中、S R 92201内から土器細片40点。鉄製鎌刃、銭貨。木製品には曲物破片が多い。黒漆塗り縄2個。
	⑳ 年代推定の根拠	銭貨は「元豊通宝」で1078年初鋳の中国銭。また土器片の中には、白磁や緑釉が含まれており、平安末~中世あたりと考えている。
その他	㉑ 隣接区との対応関係	不明。
	㉒ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉓ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 2本の土盛畦畔も平面では確認できた。しかし盛土は土層断面では確認できなかった。 土壌が攪拌されており、プラントオパールも検出されていること。そして盛土畦畔を確認したことで水田と認定。

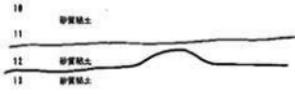
第40表 9区水田観察表 5

瀬名遺跡 9区 20層水田(時期 中世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川環河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在藤川(長尾川支流)が流れている。
	② 地形面の变化	全体的には北東が高く南西に向かい低くなる。傾斜約10cm/10m。また、調査区東端に微高地がある。S T 5~20の水田面は南北の畦畔を境に東から西へ3段の段差があり棚田状を呈する。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の東半と西南隅。約950㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	砂質粘土土。調査区中央の流路群から供給された砂質粘土の堆積はそれぞれ部分的で全体に広がるものはなかった。砂礫と泥炭質を含んでいる。
	⑤ 水田土壌	青灰色粘土。厚さ20~30cm。2層に細分でき、下層はより暗い色。上層下層の境に炭酸鉄痕がみられた。
	⑥ イネのプラントオパール	<B72地点> 5,200個/8 <D76地点> 9,400個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂。
	⑧ 畦畔の規模	大規模なものと同規模のものがある。大きな畦畔は下端幅約180cm、高さ約40cm、水路の堤を兼ねた畦畔は下端幅100~150cm、高さ30cm。小さな畦畔は下端幅約60~80cm、高さ10~15cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛り畦畔。小さな畦畔のうち、東西方向のもので交差部近くに数本の小板列を伴うものがあった。堤を兼ねる畦畔には護岸的な板列が部分的に打ち込まれていた。
水田区画の方法	⑩ 水田区画の方法	水路S R 92001とその堤を中心に東西に大きく区画され、さらに小規模な畦畔により区画している。畦畔の方向は、南北方向のもので正方位より約40°西へ傾いている。
	⑪ 水田区画の形	正方形に近い。
	⑫ 枚数と面積	20枚。うち面積を確認できるもの2枚。90~95㎡。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	全面に足跡が残っていた。S R 92001の南側水田面には南北方向に歩行しているものが多かった。また、小さな畦畔の水口を越えて歩行しているものもみられた。
	⑭ 水源	S R 92001。西側の堤に水口あり。西側の水田域に水供給か。
	⑮ 自然流路	後にS R 92001河道周辺に最低3段階にわたる河道があった。
遺物の種類	⑯ 水路	S R 92001。両岸に畦畔を兼ねた堤を伴い、西側の水田面に向けて水口を開いている。
	⑰ 水口	水路S R 92001の西側に2ヶ所。西側に水の落ちた浸食跡あり。小規模な畦畔の交差部付近に10ヶ所。西または南側に水の落ちた浸食跡あり。
	⑱ 遺物の種類	水田に伴うものは鉄製鎌刃、木製下駄。S R 92001内からは、土器細片だけでなく、人骨、桃種子、斎串、中国銭が出た。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	土器の中に山茶碗、白磁、施釉陶がみられ、中国銭が「正隆元宝」(1156初鑄)「皇宗通宝」(1039初鑄)であることから中世と推定。
	⑳ 隣接区との対応関係	
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 20層は安定した土壌で、プラントオパールも非常に高い値が出ていた。土層断面でも平面でも明確に畦畔の高まりと区画が見出され、水田と認定。

第81表 9区水田観察表6

瀬名遺跡 9区 13層水田(時期 中世末～近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川現河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在藤川(長尾川支流)が流れている。
	② 地形面の変化	北東の地形が若干高く、南西へ低くなる。傾斜約6 cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	*調査区の西半のみ。約1,300㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。10層水田の耕作土から12層までは泥炭質を含む。
	⑤ 水田土壌	暗灰青色砂混じり砂質粘土。厚さ15～30cm。西側へいくほど厚く、粘性が強くなる。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> ① 0個/g ② 900個/g
	⑦ 直下の層の土壌	砂混じり粘土。西側へいくほど分層困難。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	小さな畦畔のみ。下端幅約60～80cm、高さ5～10cm規模は均一ではなく、杭列のあるものは若干大きい。
	⑨ 畦畔の構造	盛土畦畔。部分的に(西側へいくほど)広葉樹の簡単な加工の小杭列を伴う。
	⑩ 水田区画の方法	東西方向に比べ、南北方向の畦畔がはっきりしない。東西方向を基軸としてつくられている可能性あり。東西方向の畦畔は真東より北へ約30～35°傾いている。
	⑪ 水田区画の形	南北に長い長方形と推定される。
	⑫ 枚数と面積	11枚。しかし面積を確認できるものはなし。
用排水の状況	⑬ 田面の伏態	ほぼ全面にわたって凹凸があったが、足跡と認定できるほどははっきりしていない。S K91303の北への延長線上やS K91302周辺に多い。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然水路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
遺物	⑱ 遺物の種類	上面と内部から土器細片数点。上面から鉄製刀子1本。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	層位、水田の形状・方向から10層水田とさほど遠くない時期と考えられ、中世末～近世。
	⑳ 隣接区との対比関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 10層から13層までは皆砂質粘土層であったが、10層～12層は13層に比べ泥炭質が含まれ暗い土色をしていたことから土層断面で分層し、畦畔の高まりを確認した。また、部分的には畦畔壁に砂層の入っていることがあった。 プラントオパールと土層断面・平面の東西南北の畦畔のなす区画により水田と認定。 *部分的な精度だったため10層水田と分けてしまったが、同一遺構面の可能性あり。

第82表 9区水田観察表7

瀬名遺跡 9区 10層水田(時期 近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西側、長尾川環河道まで10区をはさんで約100mの位置にある。東に隣接する8区との間には現在豊川(長尾川支流)が流れている。
	② 地形面の変化	狭い範囲だが、南西の地形が高く、東に向かって低くなっている。傾斜約7cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	*調査区の東半のみ。約750㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土・粘質砂。調査区東端の流路群から供給された厚い堆積に被覆されている。それぞれ部分的で全体に広がるものはなかった。砂・礫を含んでいる。
	⑤ 水田土層	青灰色腐植・砂混じり砂質粘土層。厚さ10cm以下。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 0個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土層。10層と類似の土色・成分で、分層困難であった。
	⑧ 畦畔の規模	小さな畦畔のみ。下端幅約60cm、高さ5cmでほぼ均一。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	東西・南北方向の畦畔がそれぞれ正方位より左まわりに約40°傾いている。畦畔を西へ延長するならば13層水田の畦畔につながりそうな平面位置である。
	⑪ 水田区画の形	若干南北に長い長方形と推定される。
	⑫ 枚数と面積	9枚。しかし面積を確認できるものなし。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	足跡状の凹凸が全面に存在するも、浸食により形状が不明確。
	⑭ 水源	不明。しかし調査区東端の自然流路S R90504は同時期に存在したと考えられる。
	⑮ 自然流路	調査区東端を南北に流れるS R90504。
	⑯ 水路	なし。
遺物	⑰ 水口	5ヶ所。うち4ヶ所は、南北方向の畦畔が東西方向の畦畔に交差する部分。
	⑱ 遺物の種類	上面より、土器細片10数点。「寛永通宝」1枚。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	「寛永通宝」の出土と磁器片、皿、すり鉢片の存在から近世。
	⑳ 隣接区との対応関係	
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  <p>(説明) 被覆していた砂質粘土や粘質砂は砂・礫を多く含むラミナ状の堆積もみられ、10層とは土色や成分が異なっていた。また、畦畔脇に砂層が入っている部分もあり、10層水田のわずかな畦畔の高まりが土層断面で確認できた。</p> <p>プラントオーバーは0個/8であったが土層断面・平面での畦畔の存在により、水田と認定。</p> <p>*部分的な精査だったため、13層水田とは実際には同一面である可能性が高い。</p>

第83表 9区水田観察表 8

第8節 10区において検出された遺構

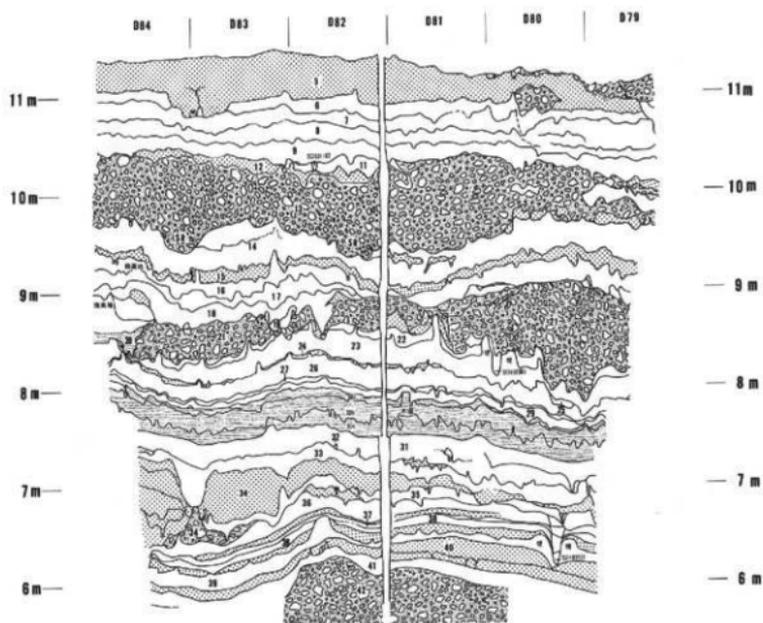
1. 基本層序

10区は昭和63年度末に表土除去の一部を行い、平成元年度4月から本格的に調査を開始した。翌年平成2年7月までの16ヵ月間で、地表下約6mの深さまで掘り下げ、土層を大きく42層に分層し、そのうち16面にわたる遺構面を重層的に検出することができた。

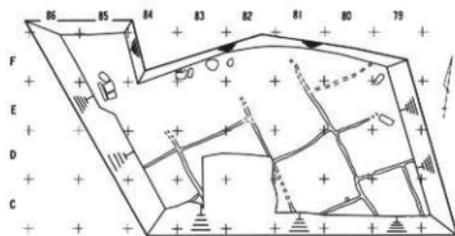
11層を除く全てが水田の遺構である。弥生中期から近世までの各時期の水田形態の変遷が、狭い範囲のなかでとらえられた。

層 序	土色および土質	備 考	イネのプラントオパール 採取地点 (層/層)	遺 構	年 代 観
1 層	灰褐色 礫・腐植層じり粘土	表土(粗土)	(単位は個/層) 0		
2 層	黄灰色 砂				
3 層	灰褐色 礫層じり粘質砂		900		
4 層	黄灰色 礫・粘質砂混じり砂	……………ここまで客土とみられる……………	1900		
5 層	青色 砂	西側で厚い堆積 下部はグライ化	0		
6 層	黄灰色 砂混じり砂質粘土	耕作土	0	水田	(近世～近代)
7 層	青褐色 砂・腐植層じり砂質粘土		グライ化 3400		
8 層	青褐色 砂・腐植層じり砂質粘土	砂・腐植質のラミナがみられるグライ化	0 ~ 2300		
9 層	茶褐色 砂・腐植層じり砂質粘土	耕作土	1400 ~ 2400	水田	(中世～近世)
10 層	茶褐色 砂・腐植層じり粘土	11層の濃層土 一部にのみ存在	2600		
11 層	灰青色 砂混じり粘土	一部にのみ存在	グライ化		
12 層	青色 砂	西側で厚い堆積	0		
13 層	青色 砂礫	西側で厚い堆積	0		
14 a 層	茶褐色 砂質粘土	耕作土	0 ~ 800	水田	(平安後)
14 b 層	茶褐色 砂質粘土	耕作土 a層との間に薄い砂礫有り		水田	(平安後)
15 層	茶褐色 粘質砂		0		
16 層	暗茶褐色 砂質粘土	耕作土	0	水田	(平安)
17 層	青灰色 腐植層じり砂質粘土	西側に堆積 東側には部分的に存在	グライ化		
18 層	茶青色 粘質砂	西側に堆積 東側には部分的に存在			
19 層	暗茶青色 腐植層じり砂質粘土	耕作土 東端と西端にのみ存在	800	水田	(平安)
20 層	明茶色 砂混じり泥炭	西端一部にのみ存在	0		
21 層	青色 砂礫	東端で厚い堆積			
22 層	暗茶色 腐植層じり粘質砂		800		
23 層	暗茶色 砂質粘土	耕作土	800	水田(枕列)	(古墳後～平安)
24 層	青灰色 粘質砂		0		
25 層	茶褐色 砂質粘土	東側一部にのみ存在	0		
26 層	茶褐色 粘土	耕作土	5400	水田	(古墳中～平安)
27 層	青灰色 砂質粘土		700		
28 層	暗灰色 腐植層じり粘土	ほとんど均層と分離できない 一部にのみ存在	1300		
29 層	暗灰色 腐植・砂混じり粘土	腐植質のラミナがみられる	0		
30 a 層	茶褐色 黒泥	灰青色粘質砂のラミナがみられる		水田	古墳中期
30 b 層	茶黒灰色 黒泥混じり粘質砂	黒泥質非常に強い	600 ~ 3200	水田	
30 c 層	茶褐色 黒泥	灰青色粘質砂のラミナがみられる下層ほど黒色強		木道伏遺構	
31 a 層	黒褐色 黒泥・砂混じり砂質粘土	耕作土	800 ~ 2200	水田	(古墳初～中期)
31 b 層	黒褐色 黒泥・砂混じり砂質粘土	工作土 a層との間に薄い砂礫有り		水田	(古墳初～中期)
32 層	青色 砂礫	南側にのみ存在			
33 層	黄灰色 粘質砂	工作土	グライ化 700	水田(枕列)	(弥生末～古墳初)
34 層	灰茶青色 砂混じり粘質砂・砂	西側で厚い堆積 西端では8層程に細分できる	0		
35 層	茶灰青色 粘質砂	工作土 ほとんど34層の流水が割平	グライ化 0 ~ 400	水田(枕列)	(弥生後～古墳初)
36 層	暗茶褐色 砂混じり粘質粘土	工作土 下層程砂質多くなる	0 ~ 2000	水田(枕列)	弥生後期
37 a 層	緑灰色 泥炭混じり粘質砂	泥炭と緑灰色粘質砂のラミナ			
37 b 層	緑褐色 泥炭・砂混じり粘質粘土		0		
38 a 層	青灰色 腐植層じり砂質粘土		0		
38 b 層	青灰色 腐植層じり粘質砂	黒泥と青灰色粘質砂のラミナ			
39 層	茶黒色 黒泥混じり砂質粘土	工作土 黒泥質強い	2200 ~ 8800	水田	弥生中期後
40 a 層	緑灰色 泥炭混じり粘質砂	黒泥と緑灰色粘質砂のラミナ			
40 b 層	緑灰色 黒泥混じり粘質砂		0 ~ 1100		石岸
41 層	黒色 黒泥		0 ~ 2600		
42 層	青灰色 砂礫				

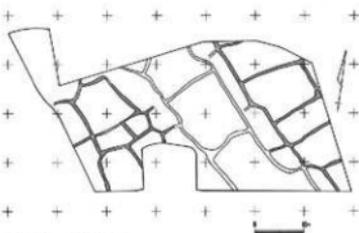
第84表 10区土層観察表



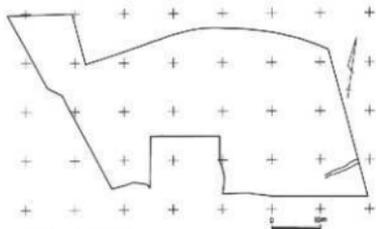
第257图 10区基本土层模式图 (水平1:500垂直1:50)



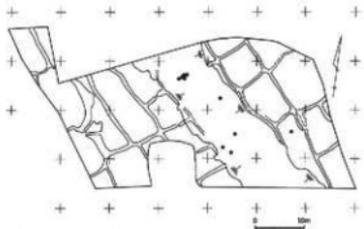
6層 水田跡



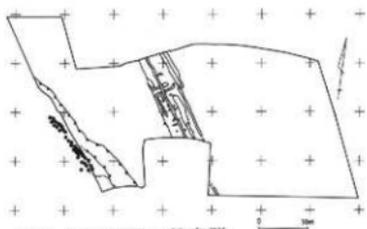
14層 水田跡



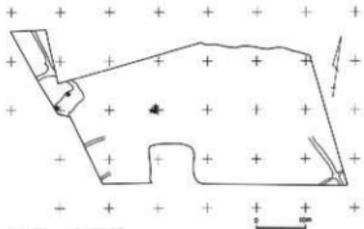
9層 水田跡



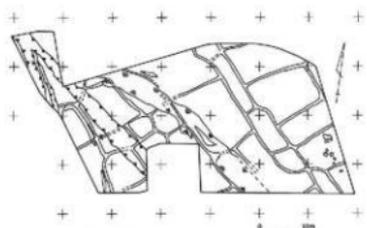
16層 水田跡



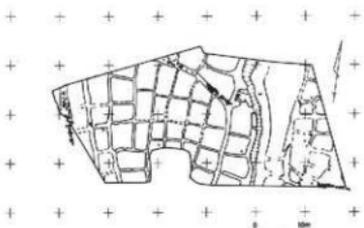
11層 溝状遺構・柱穴群



19層 水田跡

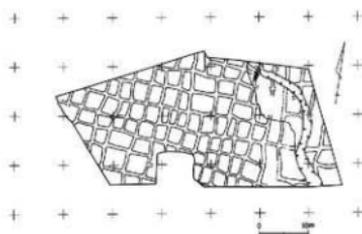


14a層 水田跡

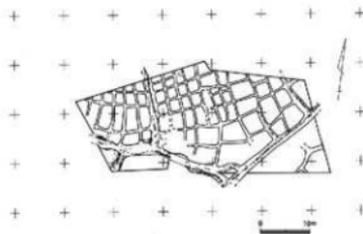


23層 水田跡

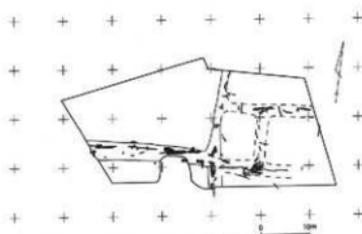
第258図 10区遺構実測図1



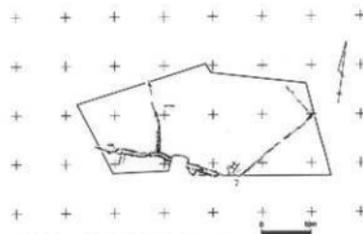
26層 水田跡



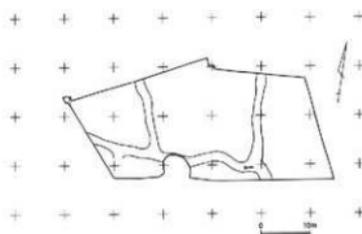
33層 水田跡



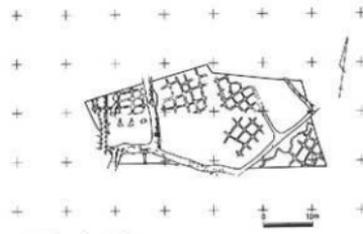
30b層 水田跡・木道状遺構



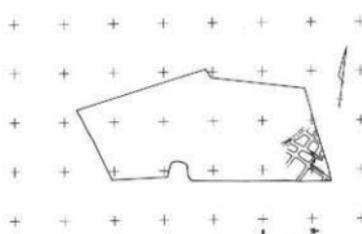
35層 水田跡(杭列のみ)



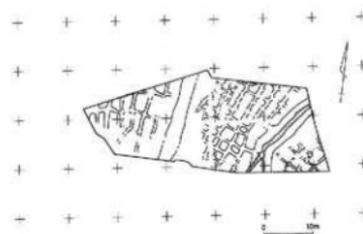
31a層 水田跡



36層 水田跡



31b層 水田跡



39層 水田跡

第259図 10区遺構実測図2

2. 遺構の変遷

39層上で検出された遺構 水田跡・水路

10区において確認された最も古い遺構(39層)は、弥生時代中期後葉段階と考えられる水田跡である。

<水田跡> [第261図, 図版241]

P. O. 高値 土壌中のイネのプラントオパールを分析したところ、10区の遺構の中で最も高い値を示し、砂質の強い38層に被覆されて畦畔や水路の残存状況も良好であった。非常に黒泥質の強い土壌を開墾しており、地形の転換点に大規模な畦畔SK103903をつくり、その周囲に小規模な畦畔をもって細かい区画の水田を営んでいた。

(1) 大規模な畦畔SK103903 [第262図, 図版241]

小規模区画 下端幅2.5m、高さ20~25cmと大きなものである。小規模な区画の水田は、SK103903を境にして規模が変わっており、そこから東側(STⅡ)が一辺1~2m、西側の地形が低くなっていく部分(STⅢ)では一辺2~3mと大きい。

区画基軸 小規模な区画の畦畔は、南北方向のものは明瞭な高さを残すが、東西方向のものははっきりしない。南北方向のものを基軸につくったのであろうか。区画のつくり方に規則性が感じられる。

(2) 水路SD103901 [第264図, 図版242]

両岸に堤 大規模な畦畔とほぼ平行に設けられた水路SD103901には、畦畔を兼ねた堤SK103901・02が設けられ、底は水田面より10cm程丁寧に掘り下げている。水路の幅は0.8~1.5mである。このように整備された水路をもちながら、調査区域内では、堤にも小規模な区画の畦畔にも取排水のための水口はみられない。

後に37層の段階で、この水路に沿って洪水流が流れたようで、南側に堤の一部が決壊している。

(3) 大規模区画と小規模区画 [第262図, 図版241]

大規模区画 大規模な畦畔は小規模な畦畔とはつながらないようである。もし、大規模な畦畔が広い範囲を区画しているものならば、大規模畦畔による区画が恒常的なに対して小区画が季節的一時的であることを示しているのだろうか。

畦畔内土器 水田面からは全く出土しなかった土器片が、大規模な畦畔の内部から集中して出土している。破片を一定範囲内に蒔き、盛土したような状況であった。畦畔をつくる際に土器を伴う何らかの儀礼をしたものではないだろうか。小規模区画の畦畔がつかないのは、大規模な畦畔が小規模区画の畦畔にはない特別な性格を帯びていたということもあるのではないだろうか。

(4) 足跡 [第262・264図, 図版242]

連続歩行 水田面に足跡は多いが、特に水路の両側では、堤に沿って足跡がつながり、溝状になっている。大規模な畦畔の周囲にも同様に足跡のつながりがみられた。耕作者が畦畔や堤の上を歩かず、その脇を歩いている光景が思い浮かべられる。このことは、水田畦畔が現代のように「畦道」ではなかったことを示しているのではないだろうか。

<出土遺物>

水田に伴う遺物としては、水路の堤SK103902の内部より、農具の柄の部分のみが出土している。組み合わせ式の鋤または鍬の柄と思われ、身を装着する木の皮が巻きついたまま

であった。また、大規模な畦畔SK103903内部出土の土器片は、弥生時代中期後葉段階（有東式）にあたる壺形土器であった。〔第263図〕

〈水田の廃絶〉

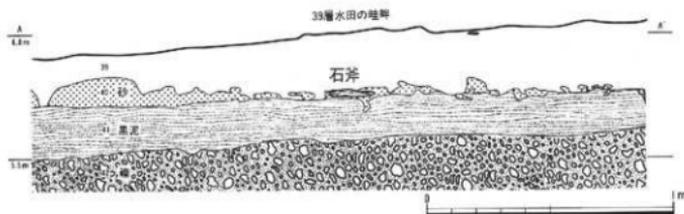
39層の水田面は、地下水位の上昇により冠水して放棄され、その後しばらく湿地帯になっていたようである。38層、37層は黒泥質混じりのシルト層である。

38・37層

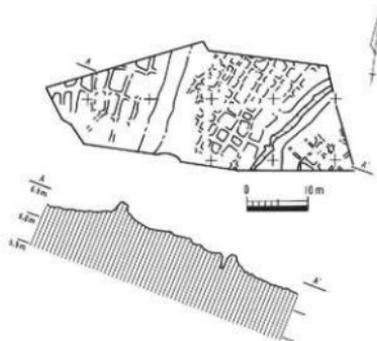
〈40・41層〉〔第260図〕

39層直下の40層は非常に黒泥質の強い粘質砂層、41層は黒泥層そのもので、39層上面の水田が開作される前には湿地帯であったと思われる。しかし、40層からは大型の打製石斧が1片出土しており、41層からは、遺物はなかったが、イネのプラントオパールが確認された。調査区以外での水田跡の存在を示すものなのであろうか。弥生水田の整った形態がこの地に取り入れられる以前にも、イネそのものが伝播している可能性はありえるだろう。

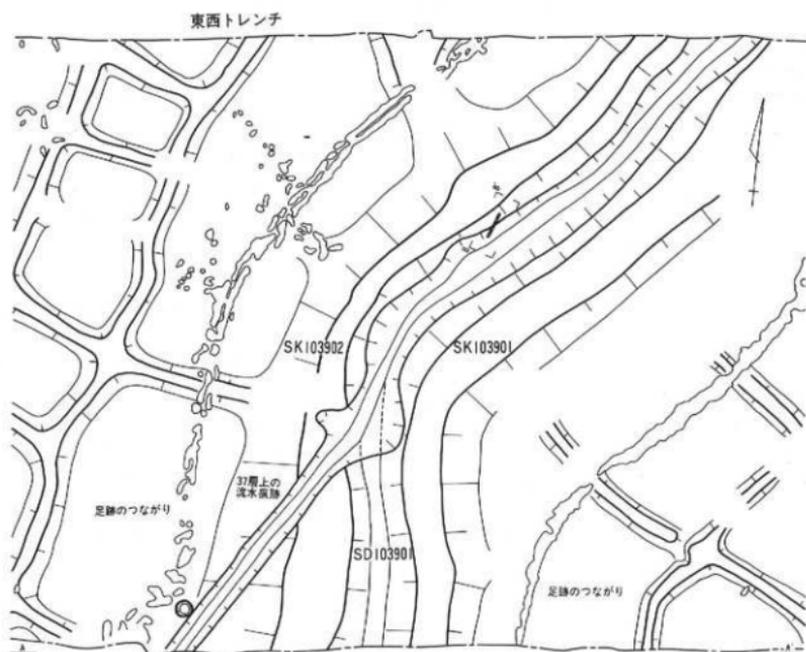
黒泥層
打製石斧
P. O. 値



第260図 40層中打製石斧出土状況図



第261図 39層水田エレベーション図（水平1：800 垂直1：80）



第264図 39層水田SD103901周辺実測図

36層上で検出された遺構 水田跡

36層上面の遺構は弥生時代後期段階と考えられる水田跡である

〈水田跡〉〔第265図、図版239・240〕

小規模区画

下端幅1~2mの大規模な畦畔に囲まれた内側に、小規模区画の水田が営まれている。

大規模畦畔

大規模な畦畔は基本的に地形の転換点につくられているが、更にそこから杖状にとりつけられたような中規模なもの（SK103603）もある。この中規模な畦畔は他の大規模な畦畔と交差することなく途切れてしまっている。他の大規模な畦畔とは異なり補助的なものとも考えられる。大規模な畦畔の成す区画の規模はこの調査区内だけでは判定できないが、グリッドC81あたりに南北方向の畦畔との交差点があるとすれば、この大規模区画の東西方向の規模は調査区北側の水田で約25~30m、南側の水田で約25mということになる。

中規模畦畔

小規模な区画は、一辺2~3mで全体的にほぼ均一の規模でつくられているようであった。小規模区画を成す畦畔は下端幅約50cmの盛土畦畔で、高さは約2~3cmと、ほとんど残っていなかった。

部分的杭列

大規模な畦畔には杭列を伴うものがあり、特に調査区西側の一段低くなった水田面を囲む畦畔には多くの杭が打ち込まれている（SK103605・06）。全体的に、杭は1mを越えない短いものが多く、広葉樹材が多く利用されていた。ここで畦畔毎に杭列の構造をまとめてみたい。〔第83表〕

広葉樹の杭

（1）SK103601の杭列

交差部集中

盛土の北側にあり、特にSK103602との交差部近くに集中している。横板が1箇所残っており、その部分では杭は横板を支えるように打たれている。材質は2:1の割合で針葉樹材が多い。

（2）SK103604の杭列

交差部集中

盛土の南北両側にあり、特にSK103602との交差部近くに密集している。両側とも材質は3:1の割合で広葉樹材が中心である。なお、この畦畔盛土上には部分的に杉の皮らしきものが敷かれていたようである。

（3）SK103605の杭列

交差部集中

盛土の中央と東西両側の3列の杭列である。ただし、東側と西側は部分的に存在する。特に東側は交差部近くに集中しており、他の2列より杭の長さが短い。中央の杭列は最も数が多く、長さが均一に揃っている。材質は6:1で針葉樹材が中心であった。杭の間隔は密集部分と疎らな部分があり、密集部分では5cm以下の間隔になっている。西側の杭列では、杭の材質は3:1の割合で広葉樹材が多かった。

（4）SK103606の杭列

盛土の中央と南北両側の3列があるが、中央の杭列というのは、1枚の横板を支えるように打たれた3本のみである。中央の3本を除けば、南北両側の杭は全て広葉樹材が使用されている。

（5）水路・水口

調査区内では、水路らしきものは確認できず、はっきりとした水口も見いだせなかった。大規模な畦畔脇に狭い溝SD103601や浸食痕跡（SK103603の南側）があることから、この水田の水まわしは、地形の高いところからのオーバーフローを利用しており、大規模区画を画する畦畔脇に沿って水が流れていく際に溝ができたことが考えられる。

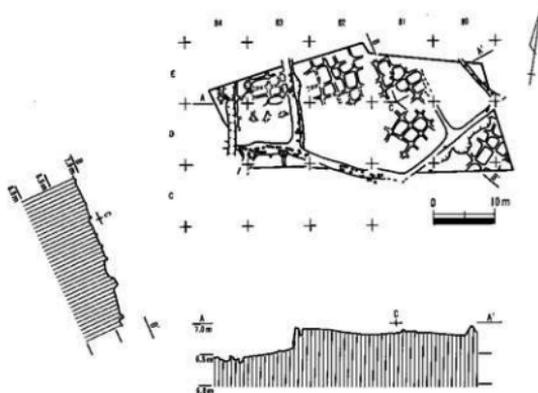
畦畔脇溝

水まわし

S K No.	列	側	幅間 (m)	総数 (本)	材質 (本)		転用材* (本)	設置 間隔 cm	鋼のレベル 平均 (cm)	鋼の長さ 平均 (cm)	種	位置・配列	橋脚・橋脚欠損 ・状況	備 考
					針葉樹	広葉樹								
3001	1列	東	7	13	0	4		*40	670-680	×	30-40	部分的に集中*	橋脚1(橋)	交通部西側に特に集中
3004	2列	南	7	13	3	10		*30	680-690	×	70-80	交通部に集中*		南北の数が一致するが 対応はしない
		北	7	13	3	10		30	690-700	×	50-60			
3005	3列	東	4	13	9	4		*5	680-690		30-40	交通部に集中*		
		中	13	02	53	9		*5	680-690	○	70-80	○ 部分的に集中*		
3006	3列	西	9	19	4	15		10	670-680		60-70	部分的に存在		南北の数が一致するが 対応はしない
		南	7	12	0	12		20	690-670		50-60			
3006	3列	中	2	3	3	0		60	670-680		70-80	部分的に存在	橋脚1(橋)	南北の数が一致するが 対応はしない
		北	4	12	0	12		20	690-670		30-40			
3007	2列	南	3	13	2	11		10	650-660		100-110			西列のほうが密
		北	2	4	4	0		20	640-660		90-100			
3008	2列	東	2	5	0	5		20	640-660		10-20	南側にのみ存在		西列のほうが密で長い
		西	2	9	7	2		10	660-670		100-110	南側にのみ存在		

*ここでいう転用材とは、建設部材や農具等、一見して取とされる以前の本来の用途が判別できるもの、部分的なノブや切り込み、表面の歪取り調整はこの他に多く見られたが、含んでいない。

第05表 36層水田畦畔枕列整理表



第265図 36層水田エレベーション図 (水平1:100 垂直1:80)

35層で確認された遺構 畦畔杭列のみ

35層は当初遺構面と確認しておらず、調査の予定はなかった。しかし、33層の大規模区画の畦畔を解体し、36層を検出してゆく際、33層と36層の中間の補強段階と思われる杭列を確認した。断面図を検討した結果、35層に対応するものと考えられ、杭列の配置図を作成して、35層水田として大規模区画の畦畔のみ復元を試みた。

机上で復元

〈水田跡の復元〉

前面に杭列
修復

一度は廃棄された36層の畦畔を、そのまま全面的に杭列を打ち込んで修復している。杭は長さ1m前後のものが多く、ほとんどが針葉樹材で広葉樹材は部分的にまとめて使用されているようであった。畦畔毎に杭列の構造をまとめてみたい。[第84表]

針葉樹中心

(1) SK103501の杭列

広葉樹多い

盛土のどちら側かは不明だが、1列の杭列である。1箇所横板を伴っており、矢板状の杭も部分的にみられる。材質は5:1の割合で広葉樹材が多い。

(2) SK103502の杭列

交差部密集

約10cmの間隔で延々と1列に打たれている杭列で、盛土のどちらか側にあつたかは不明である。特にSK103503との交差部に近づくとき密集しているようである。横板を伴う部分が3箇所のみ認められ、長い板状の木材が多数杭列の北側に集められていた。これらの木材が盛土の芯材と考えられるならば、この杭列は盛土の南側にあつたことにならう。横板も集められていた木材にも、加工され、細かいホゾ穴の空いたものがあり、建築材等からの転用と考えられる。杭の材質は全て針葉樹材であった。

建築材転用

(3) SK103503の杭列 [第268図, 図版237・238]

南列密集

北列横板

盛土の南北両側にあたり、南側は、約5cm間隔で密集して打たれた杭列、北側は横板を隣間なく並べてそれを支えるように打たれた杭列である。南側の杭列は、特に東側、SK103502との交差部に近くなるほど密集している。北側の杭列は横板をはさんで支えるように打たれていた。横板は端と端が重なるように並べられており、非常に強固に固定されていた。この他にもこの2本の杭列の間には、多数の木材が埋め込まれており、特に補強しようとする意志が感じられた。杭の材質は針葉樹材であった。

芯材

(4) SK103504の杭列 [図版237・238]

東列横板

西列交差部

盛土の東西両側にあたり、東側は、横板をすきまなく並べてそれを支えるように打たれた杭列である。西側は、SK103505との交差部近くに密集して打たれている杭列である。東側の杭列と横板の状況はSK103503北側の杭列と類似しており、一連のものとしてつくられたと考えられる。西側の杭列には1:3の割合で広葉樹材が混じるが、東側の杭列は針葉樹材であった。

(5) SK103505の杭列 [図版238]

南列密集

北列広葉樹

盛土の南北両側にあたると思われる位置にある。南側は約5cm程の間隔で密集して打たれた針葉樹材の杭列で、SK103503の南側の杭列と一連のものと考えられる。しかし、北側の杭列は長さの揃った広葉樹材の杭列で、明らかに南側とは様相が異なる。打たれた時期が異なるのであろうか。

(6) SK103506の杭列 [第266図]

SK103507との交差部を境にしているが、SK103505とは一連の盛土があつたと思われる。盛土の南北両側にあたる位置に杭列がある。南側には長さ1mを越える針葉樹材の杭が打たれており、盛土が一続きとはいえず、SK103505の南側の杭列の倍の長さである。北側には

針葉樹材と広葉樹材の杭が2:1の割合で打たれている。広葉樹材の杭は針葉樹材の杭より外側にあるように見える。針葉樹材の杭を打った後に打たれたのであろうか。

北側杭列の外側(北側)には倒れた状態の杭がままとまっていた。流れてきたものが集中しているのではなく、整然と並んでいるような状況であった。よく観察すると、3、4本の短くしっかりした杭に数本の加工痕の見られない長い木材が直行しているようであった。すぐ近くの南側杭列に引っ掛かったような状態で網代の一部らしきものもみられるところからも、これらは堰・しがらみの類が倒れたものと考えられることもできる。SK103506は西へいくと流路を横切る堰に繋がっていたのではないだろうか。SK103506の杭列の平面的な配置はこの辺りから不規則になっているようにもみられる。

網代
堰しがらみ

(7) SK103507の杭列

盛土の東西両側にあつたとみられる。西側のほうが東側より密集して打たれており、杭の長さも長いものが使用されている。杭の材質は全て針葉樹材であった。

(8) 横板列 [第267・268図, 図版237]

SK103503の北側からSK105304の東側にかけて、長さ2m程の横板を10数枚重ねて杭列に組み込んでいる。横板の並べ方の強固さと、このL字形の部分が大規模区画の南西の角ということ考えると、この横板列は単に畦畔盛土の土留めだけではなく、大規模区画の水まわしの際、畦畔に沿って流れていく水からの浸食を防ぐためのものだったのではないだろうか。北側から流れてくる水がこの横板に沿って、南のちょうどSK103502とSK103503との交差部あたりに抜けていく状況があつたのではないだろうか。この横板には、細かいホゾ穴が一定間隔で空けられており、建物部材の一種かと考えられる。SK103503は、他にも扉材と思われるもの等数点の建築部材が埋め込まれ補強されていた。SK103503南側杭列には、南から直交するように数枚の矢板が打たれていた。南北方向の畦畔があつた痕跡なのであろうか。他に杭列中、矢板を使用しているものはなかった。

横板の用途

矢板列

S K No.	列	種類	幅 (m)	積数 (本)	材質(本)		総材 (本)	間隔 (cm)	平均 (m)	径	位置・配列	種類・構造 ・状況	備考	
					針葉樹	広葉樹								
3501	1列	?	8	25	4	22		30	690-700	○	80-90	部分的に2列	横板 1(重) 矢板 1	
3502	1列	?	21	157	157	0		*10	700-710	○	60-70	西ほど密*	横板 3(重)	
3503	2列	南	10	117	116	1	1建	*5	700-710	○	60-70	東ほど密*	南から直交する矢板列	細葉樹材を芯材に転用している
		北	10	53	53	0	1建	20	710-720	○	70-80		横板 9(重)列	横板をききむような状況
3504	2列	東	15	100	98	2	2建	10	720-730	○	60-90	○ 03北側と一連	横板 6(重)列	横板をききむような状況
		西	7	35	27	8	1建	10	700-710	○	100-110	交差部に近いところのみ		
3505	2列	南	6	113	110	3		5	600-670	○	60-70	○ 03南側と一連		南側のほうが密 北面は広葉樹
		北	7	45	1	44		10	670-680	○	90-100			
3506	2列	南	6	39	30	0		20	680-690	○	120-130		南へ傾斜	南側には網代が引っ掛かっていた →畦畔杭列の延長上に 堰の存在か
		北	2	15	10	5		20	650-660	○	70-80	広葉樹は全て外側	北面に倒れた杭群	
3507	2列	東	2	11	11	0		20	650-660	○	90-95			西側のほうが密で 長いものが多い
		西	2	15	15	0		10	680-690	○	100-110			

* ここでいう転用材とは、建築部材や農具等、一見して杭とされる以前の本来の用途が判別できるもの、部分的なホゾ穴や切り込み、表面の凹凸調整はこの他に多く見られたが、含んでいない。

第86表 35層水田畦畔杭列整理表

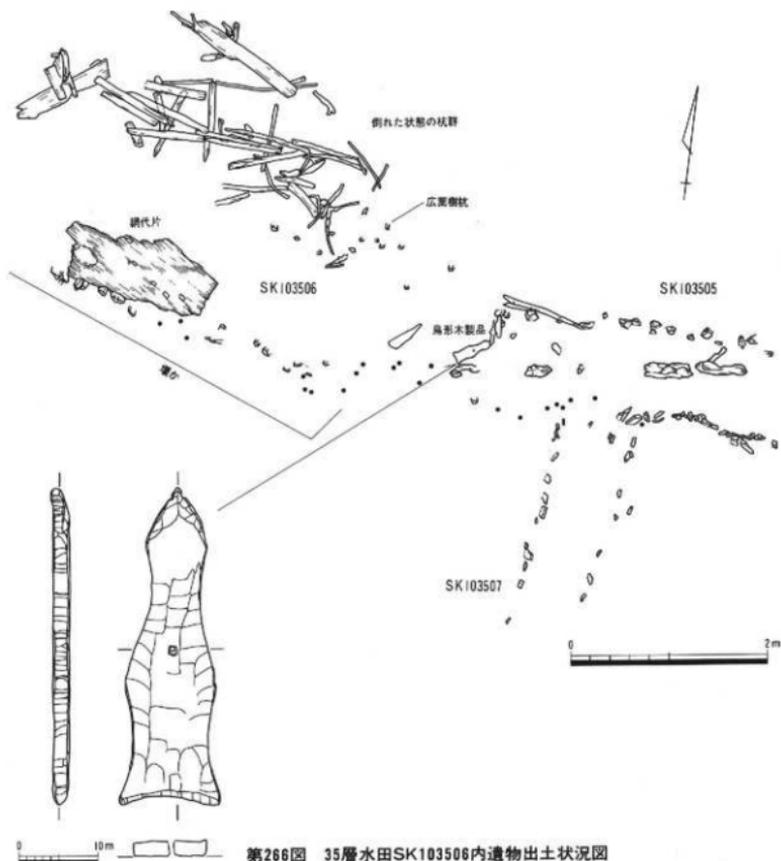
〈出土遺物〉

鳥形木製品

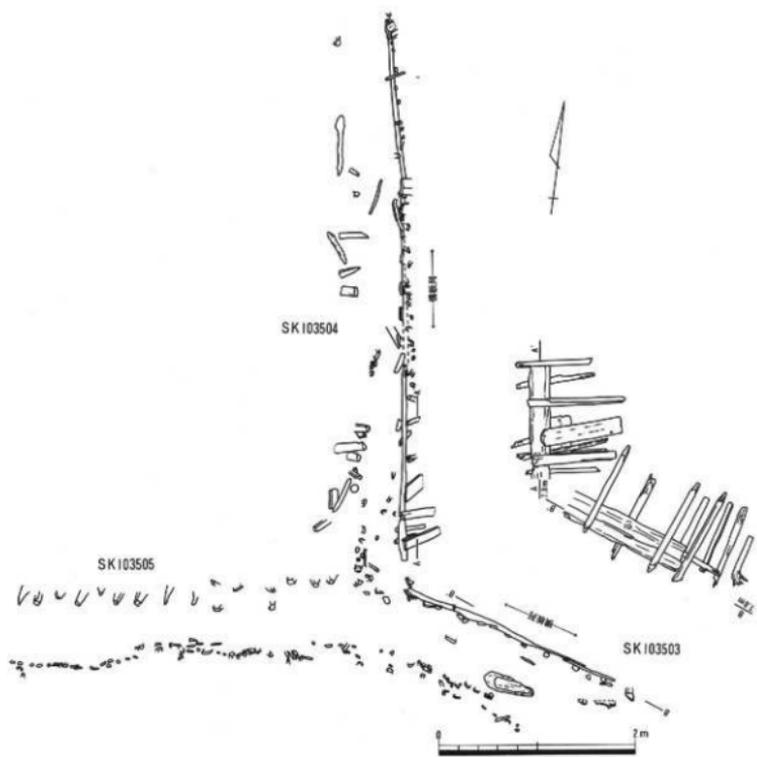
SK103506の杭列と杭列の間、盛土があったとすればたぶんその中央と思われるあたりから、鳥形木製品〔第266図、図版238〕が出土している。全長40cm程の平面的なタイプで、胴部中央に穿孔し、羽根の部分を取り付けるようになっている。羽根の部分はみつけれなかったが、胴部だけが盛土の中に埋め込まれたような状況であった。畦畔上での儀礼を考える一つの材料となるのではないだろうか。

〈水田の腐絶〉

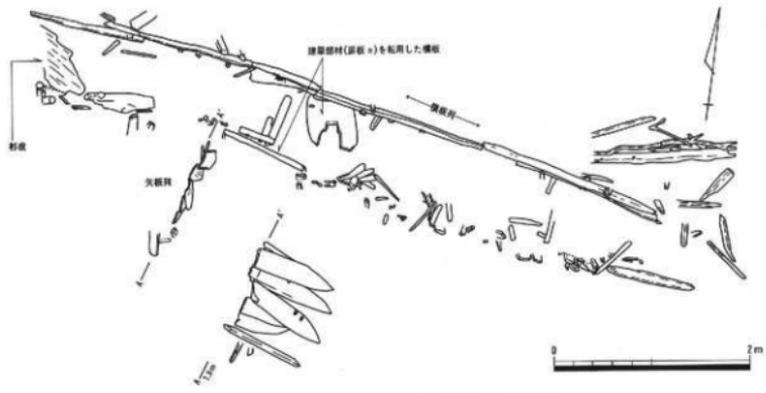
34層の砂の堆積をもたらした洪水流は、もとより地形の低かった調査区西側を激しく浸食したのであろう。35層は耕作土がほとんど削り取られ、北から南へと走った浸食痕跡は36層上にまで及んでいる。この時、SK103506の延長上にある堰しがらみは倒れてしまったのであろう。



第266図 35層水田SK103506内遺物出土状況図



第267图 35層水田SK103503・103504横板列実測図



第268图 35層水田SK103503南側矢板列実測図

33層上で検出された遺構 水田跡

34 層 35層水田は、畦畔への大がかりな補強にもかかわらず、激しい洪水流により西側の田面が深く抉られ、全体的にも砂(34層)に覆われて放棄されたのであろう。その後地下水位が高く、冠水していた時期があったようで、33層のグライ化した粘質砂層が形成されている。ここに再び水田を営んでいた遺構が確認された。

<水田跡> [図版230]

大規模区画の補強跡裏
「杭列水田」
小規模区画地形により変わる規模

35層水田に打ち込まれた畦畔の杭列はこの段階でも表面に少し頭が出ており、粘質砂の堆積も杭列に沿って若干高まっていたのであろう。33層上の水田では、再び大がかりな杭列の補強を行なって、36層から踏襲されてきた大規模区画をそのまま利用している。そしてこの区画の内に、小規模区画を設けている。小規模区画の並び方は不揃いで、規模も均一ではない。大きなもので一辺4~5m、小さなもので一辺1m程である。ただ地形の高いところの水田は小さく、低いところの水田はより大きいという傾向がみられた。

畦畔は、大規模なもので下端幅1~2.5m、高さ10~20cmを測り、小規模なもので下端幅約50cm、高さ約5cmを測る。その中間で、下端幅0.5~2m、高さ約10cm程のものもあった。

(1) 足跡・耕作痕

水田面には無数の足跡が不規則に残っていたが、一部(グリッドD82)には、鍬か鋤といった農具でつけたと思われる半月形の痕跡が集中している地点も認められた。

まず大規模区画の畦畔への杭列補強の状況をそれぞれまとめてみたい。[第85表]

(2) SK103301の杭列 [第269図, 図版231]

大規模畦畔

長さの揃った針葉樹材の杭が、35層の広葉樹材の杭列の間隔を埋めるように規則的に打たれている。しかし、35層の杭とは異なり全て東へと傾斜している。

(3) SK103302の杭列 [第270図, 図版232]

南北方向

盛土の東西両側にある。(SK103302は、他の畦畔との関係から、傾いてはいるが南北方向の畦畔ととらえられるため) 東側と西側の杭列では全く疎密度の程度が異なり、東側は10cmと間隔をあげずに100~110cmの長さに揃った杭が密集しているのに対し、西側では約2m間隔で70~80cm程の杭が打たれている。南側の杭列は、35層のSK103502の杭列より外(東)側に打たれており、35層の杭列の存在を意識したうえで補強していることがわかる。横板の伴う部分が8箇所あり、盛土内に多数の木材が埋め込まれていた。SK103302を境に水田面の地形が北から南へと一段低くなっており、この東側の杭列は盛土の土留めをしていたのだろう。杭は全て針葉樹材であった。

横板
棚田状構造
中規模畦畔

(4) SK103303の杭列 [第270図, 図版231]

先端加工のない杭

SK103302から枝が出たような、途中で途切れる中規模な畦畔である。ここにある杭列は、長さ30~40cmの非常に短く揃った杭列で、針葉樹の板材を先端の加工をせずに打ち込んでいる。先端の加工のない杭は調査区内で他にはみられなかった。

(5) SK103304の杭列 [第271図, 図版233]

交差部密集長大

盛土の南北両側にある。SK103302の場合と同様、南側の杭列のほうが密集して打たれており、長い杭が使用されている。南側の杭列の密集の程度は調査区内でも特に著しく、全く隙間なく、二重、三重に重なりあっている。しかも東側のSK103302との交差部に近いほど密集し、長い杭が使用されている。全て針葉樹材の杭であった。

(6) SK103302とSK103304との交差部の杭列 [第271図, 図版233]

交差部形状

この交差部は、南側が排水溝にかかってしまい盛土の状況がはっきりしなかったが、単

純な交差ではなく中央が落ち込んだ三角形の形状をしていると推測される。大規模区画内を流れた水が畦畔に沿ってこの部分に集まるのであろう。北からの流れに対して「V」字形の交差部の内側（北側）に盛土をして補強したのではないだろうか。内側（北側）の盛土部分には、長さ50~70cmの短い杭が疎らに打たれている。外側（南側）の交差部には、長さ2~3m以上という非常に長大な板状の杭が10数本集中して打ち込まれていた。この部分だけSK103304の南側の杭列より明らかに長い杭が使われ、杭列の延長線より若干南へずれた位置にある。これらの杭は、皆南へと傾いていた。北からの強い力を受けたことを示しているのであろうか。それともはじめから斜めに打ち込まれたのであろうか。杭は全て針葉樹材であった。

(7) SK103305の杭列 [第272図, 図版234]

盛土の東西両側に杭列がある。東側の杭列のほうが西側の杭列より密集して打たれ、長い杭が使用されている。東側の杭列は35層のSK103504の東側杭列の外側に並んでおり、35層の杭列がまだ頭を出している段階で補強を意図して打たれたのであろう。東側・西側とも、SK103304・06との交差部から離れたところ（グリッドE83）では、針葉樹材の杭と広葉樹材の杭が一定間隔で組み合わせられていた。東側の杭列では、針葉樹材3本から5本に1本の割合で広葉樹材が、その盛土の反対側の西側の杭列では、逆に広葉樹材5本に1本の割合で針葉樹材が組み込まれていた。杭列全体では、針葉樹材と広葉樹材の割合が、東側で3:1、西側で3:2であった。西側の杭列は、SK103306との交差部近くで途切れており、代わりに、更に外側（西側）に、SK103306の北側まで一続きで交差部の角を補強するような杭列があった。SK103305の盛土の中には多数の木材が埋め込まれていた。

3 m の 杭

一定間隔の
広葉樹材

志 材

(8) SK103306の杭列 [第273図, 図版235]

盛土の南側に1列あり、針葉樹材の杭が5cmの間隔もないほど密集して打たれている。杭列の東の端は、SK103304の南側杭列の西端とは明らかにずれており、一度に打たれたものではないことがわかる。杭列の西の端は、SK103308との交差部の内まで延びている。

(9) SK103305と06との交差部杭列 [第272図, 図版235]

畦畔交差部の角を補強するような形で、南からみると鉤形（逆「L」字形）の杭列が設けられている。使用されている杭は、1.2~1.5mの長い針葉樹材で、2m近いものもあった。杭の表面はきれいにいくつもの面を取って加工されており、全て、断面が八角形以上の多角形をした柱材のようなものを割って転用したものである。こうした断面多角形の杭は、SK103305の盛土中央に2、3本打たれていた。他の杭列より頭のレベルが高く、後から補強のために打たれたのだろう。SK103305の西側杭列は、この交差部の杭列があるところにはつくられておらず、SK103306の盛土の北側にも杭列はなかった。

区画間への
鉤形杭列

多角柱の杭

(10) SK103307の杭列 [図版235]

北側と南側の2列があるが、南側の杭列はきれいに並んではない。洪水流の浸食によって盛土が失われているので、盛土と杭の位置関係は不明確である。北側の杭列が皆北側へ傾いているのは、盛土を激しく浸食した南西からの洪水流の圧力によるものであろうか。

(11) SK103308の杭列 [図版236]

洪水流の浸食によって盛土は全て削平されており、杭列のみ残っていた。盛土の東西両側にあたる場所に2列づつ4列の杭列がある。西側の2列のほうが東側の2列よりも密集して打たれ、長い杭が使われている。東西両側とも、内側の杭列が直線的に並んでいるのに対し、外側の杭列は不規則な並び方をしている。西側の杭列では、内側より外側のほ

4 列 の 杭

うが長い杭が使われており、逆に東側の杭列では、内側より外側のほうが短い。つまり西側から東側へ段々短くなっている。南西からの洪水流を意識した補強と考えられる。

〈杭列の観察〉

針葉樹の杭 33層の段階では、一般的に針葉樹材の杭が使用されている。36層、35層のものより全体的に長く、120cm以上のものが多い。これまで使用されなかったような2～3mの長大な杭も少なくない。これほど頑強な補強を要する不安定な水田面だったのであろうか。3mもの杭が打たれたこと自体、ある程度までは杭が手で容易に沈められるような軟弱な地盤であったことを示していると思われる。それにしてもSK103304の南側からSK103302との交差部にかけての杭の密集は、単に畦畔の盛土の土留めにしては大がかりすぎている。SK103304, 05, 06から南側には礫(32層)が厚く堆積し、畦畔の盛土の一部と水田面を深く抉っている。西北から東南にかけての方向で洪水流が走ったようである。この洪水流をもたらし自然流路が、調査区の南西外側にあったとすれば、SK103304の南側からSK103302との交差部にかけて、南西からやってくる水が畦畔および水田面を侵食するのを防ぐため、あらかじめ杭を隙間なく打ち込んでいたことも考えられる。つまり護岸的な目的もあったのではないだろうか。

護岸的杭列

35層の杭列は、この段階でも意識されていたようで、33層の杭は、35層の杭と杭の間隔にあたり、35層の杭列の外側からハの字形に包み込むような状態で打ち込まれていた。

SK No.	列	間隔 (m)	総数 (本)	材質 (本) 針葉樹 広葉樹	転用材* (本)	調査 区間	層のレベル 平均 (cm)	杭の長さ 平均 (cm)	層	位置・配列	傾斜・傾倒状態 ・状況	備考			
3301	1列	中	10	42	42	0	1田下敷	30	700-710	○	100-110	○	3301杭列の隙間	東へ傾斜 傾倒 1	33層杭列を貫通している
3302	1列	中	8	46	46	0		*10	710-720		30-40	○	部分的に集中*		先端加工のない縦伏杭
3302	2列	東	22	193	193	0	3田下敷	10	710-720	○	100-110	○	3302杭列の外側	傾倒 6	東列は南だが西列は 非常に緩
		西	19	10	10	0		300	700-710	○	70-80			南へ傾斜	
3304	2列	南	11	172	172	0	1田下敷	0	720-730	○	120-130	○	3302杭列の外側	傾倒 1	南列は長大な杭が二重・ 三重に打たれる
		北	7	16	16	0		30	720-730	○	100-110			南へかなり傾斜	
3302 と04の 交差部	2箇所	北	3	15	15	0		40	700-710		30-70		部分的に存在		非常に長大な杭で3m 以上のものも 設置レベルも高い
		南	3	16	16	0		*10	700-770	×	260-270	×	不規則に集中*		
3305	2列	東	15	96	71	25		10	720-740	○	110-120		3304杭列の外側		針葉樹と広葉樹が一定間 隔で組み込まれている 盛土中列に木片、石の混入
		西	12	99	36	34		30	700-710	○	70-80		交差部にはない		
3306	1列		6	72	72	0		5	710-720		110-120		3305杭列の外側		03杭列とはくい違う
3305 と06の 交差部	2列	北	3	17	17	0	17 壁	30	740-750	○	120-130	○	交差部外側から逆L字 形に傾斜		全て断面多角形の 材料の転用
		西	3												
3307	2列	南	3	24	22	2		20	720-730	×	90-100		不規則	傾倒 1	
		北	7	11	11	0		40	720-730	×	80-90				北へ傾斜
3308	4列	東	4	28	23	5		20	680-690		80-90		2列	外側が短い	西列のほうが密で 長い杭が打たれる
		西	4	42	36	6		10	700-710	○	120-130		2列	外側が長い	

* ここでいう転用材とは、建設部材や農具等、一見して状とされる以前の本来の用途が判明できるもの、部分的なノズルや切り込み、表面の取付の調整はこの他に多く見られたが、念入りにない。

第07表 33層水田畦畔杭列整理表

〈出土遺物〉〔第270・273図，図版236〕

SK103305の盛土の中、南側の杭列に近い辺りより、口縁部を2/3程欠損した土師器の壺が出土した。横になった状態であったが、盛土の中に埋め込まれたものようである。39層の大規模区画の畦畔中にあった土器片と同様、畦畔構築に関わって土器を使用した何らかの儀礼が行なわれていたことを示しているのではないだろうか。

畦畔中土器

33層では、数個の田下駄が杭列の中に横板や杭の代用として組み込まれていた。農作業中、放棄したものを利用して畦畔の中に埋め込んでいたのであろう。

田下駄転用

SK103302の盛土上には、膝柄の着いた二又鍬が置かれていた。柄と身に巻いた木の皮も部分的に残っており、着柄状態がよくわかるものであった。

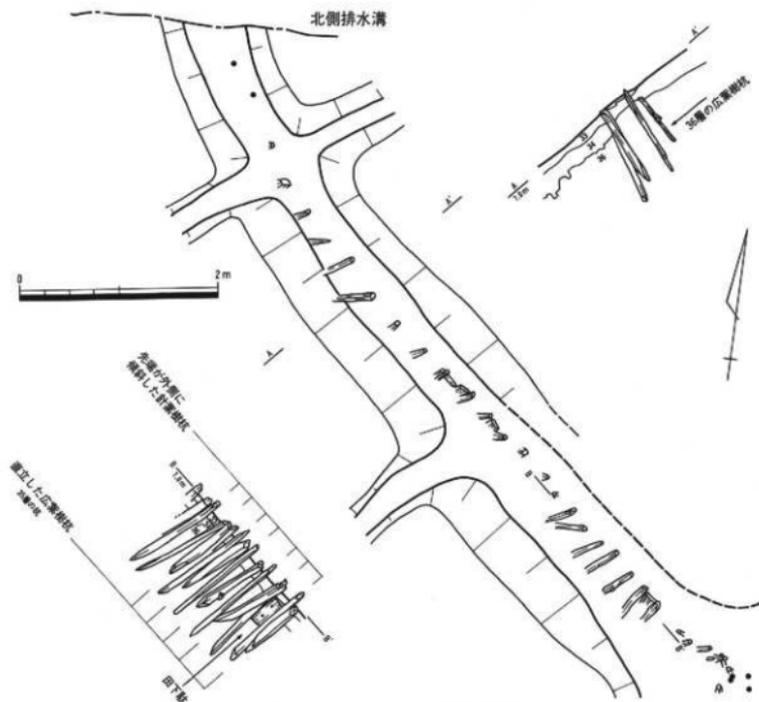
膝柄鍬

〈水田の廃絶〉

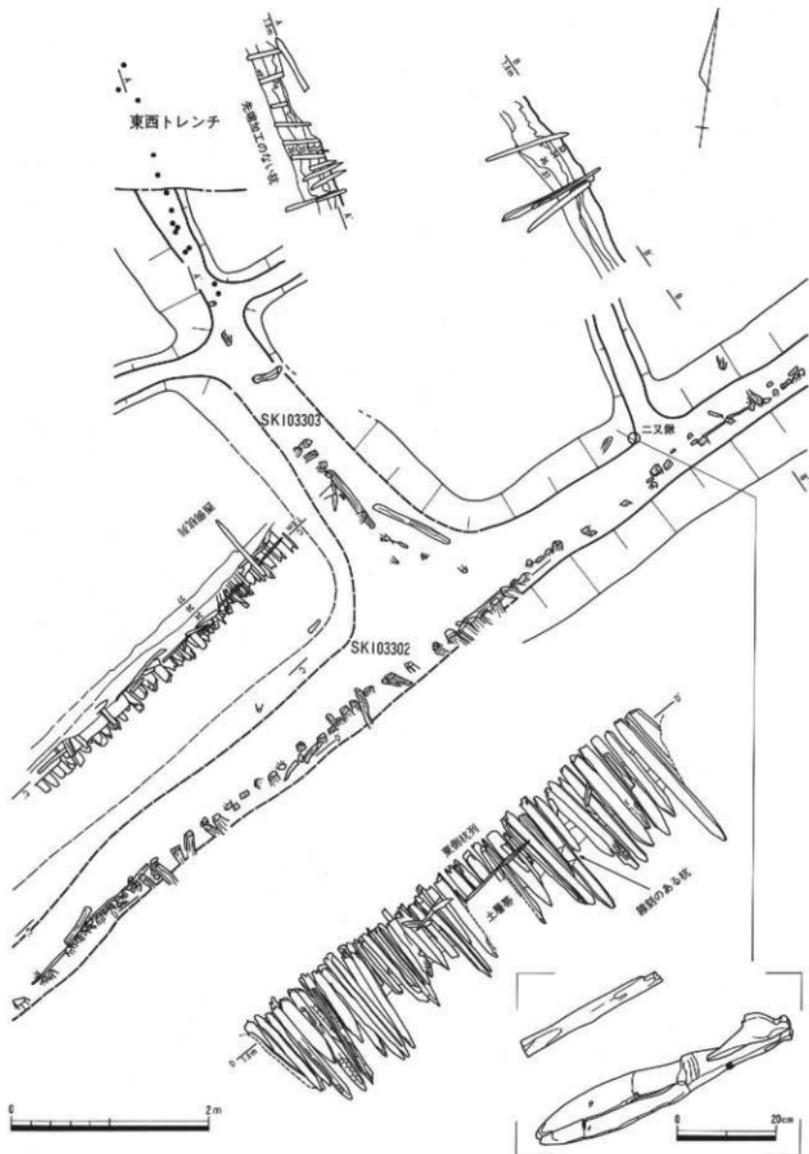
33層の水田は、つくられた当初から地下水位の高い軟弱な地盤の粘質砂層であったのであろう。36層、35層と踏襲されてきた大規模区画を多数の杭を打ち込むことで再び利用し、小規模区画水田を営んできた。しかし、南西方向からの洪水流で一部の水田面と畦畔が浸食され、砂礫で大半を覆われたこと（32層）で、耕作の続行を断念したと思われる。

何故このような悪条件のなかで、前段階の区画の踏襲に固執したのであろうか。

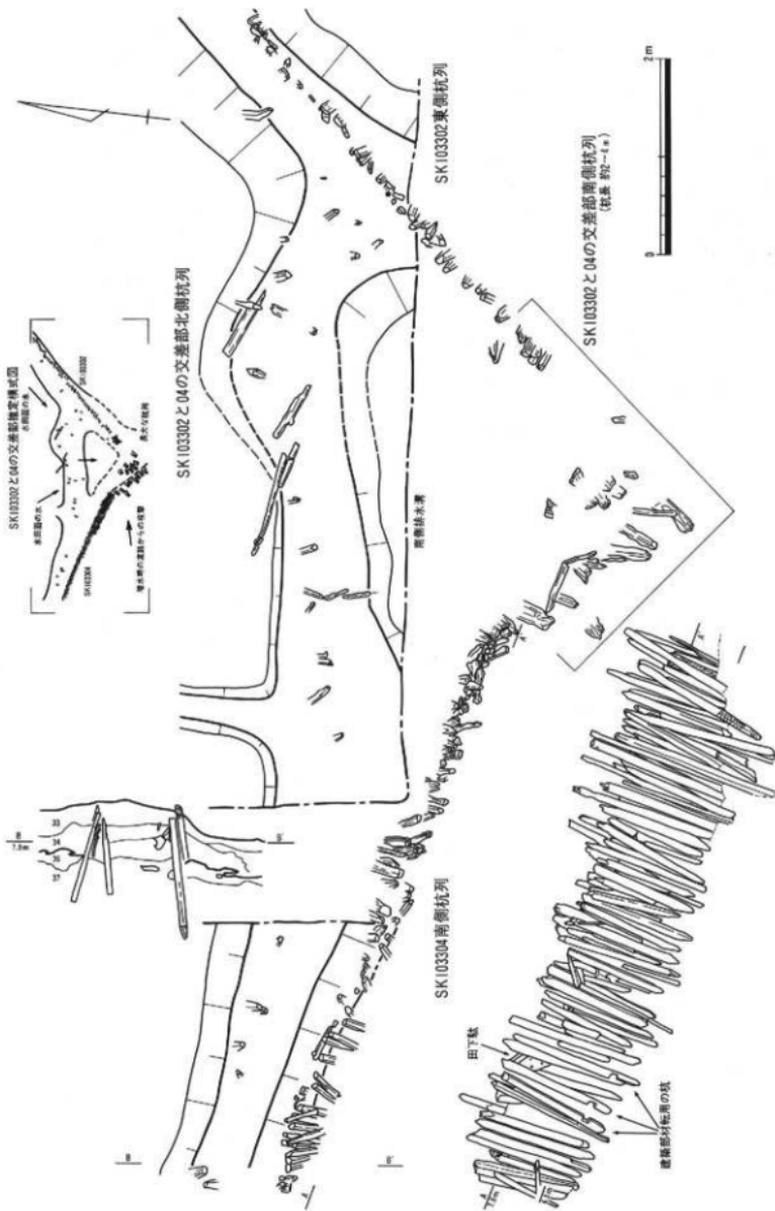
踏襲に固執



第269図 33層水田SK103301杭列実測図



第270図 33層水田SK103302・103303杭列実測図



第271図 3層水田SK103302と103304の交差部杭列実測図

31層で検出された遺構 水田跡

黒泥質

33層の水田が放棄された後、雑草の繁茂する湿地帯になっていたらしい。非常に黒泥質の強い土壌(31層)に再び水田跡が検出された。

〈水田跡〉〔第275図、図版228〕

半ば踏襲 半ば新設

検出された31層上の水田は、下端幅約2m、高さ約15cmの大規模な盛土畦畔が区画をつくっている。この畦畔には補強の杭列等は伴っていない。調査区の西半(グリッド83以西)では、この畦畔は、ほぼ33層の大規模区画を踏襲した位置につくられている。しかし、調査区の東半(グリッド82以東)では踏襲されていない。この部分の土壌は厚く、間にもう一層水田面を挟んでいる。区画の規模は、南北方向の畦畔の間隔から東西辺の長さだけを推定するとST2が20~23m、ST3が14~15m、ST4が28~30mであった。

〈31b層小規模区画水田〉〔図版229〕

踏襲利用

大規模区画の内に小規模区画水田は確認されなかった。当初からつくられなかったであろうか。31層は調査区東半でのみ、薄い砂層を挟み、上層と下層に分層できることがわかった。土壌は全く同質のようであった。下層を31b層として平面精査してみると、調査区の東南隅で、小規模区画水田が確認された。一辺2~3mの規模の水田で、少し頭を出している33層の杭列に平行する畦畔と、それに直交する畦畔でつくられている。畦畔の高まりはほとんどなく、その脇に連なる足跡らしき落ち込みによって区画が確認された。33層の大規模な畦畔SK103302上には丸太の芯材をのせてそのまま利用しているようであった。

検出された31a層の水田面以前にも、湿地上で下層を踏襲した水田区画がつくられていたであろう。31a層の耕作によって大部分は土壌が攪拌されて分層できなくなったのではないだろうか。31b層の分層できた調査区東半は粘土層が厚くなっている。

〈31a層と31b層〉

区画の新設

この31層の水田も当初は36層以来の大規模区画を踏襲し、その内側に小規模区画水田を営んでいたと考えられる。しかし、地形の低い調査区の東半は冠水してしまったのであろう。黒泥層が再び東半を覆う間も西側の水田は営まれ続け、ある段階で東半にも再び区画がなされたのではないだろうか。その際東半の畦畔は、間層が厚いため、下層からの踏襲ではない新たな位置につくられたとも考えられる。

〈出土遺物〉〔第274図、図版228・229〕

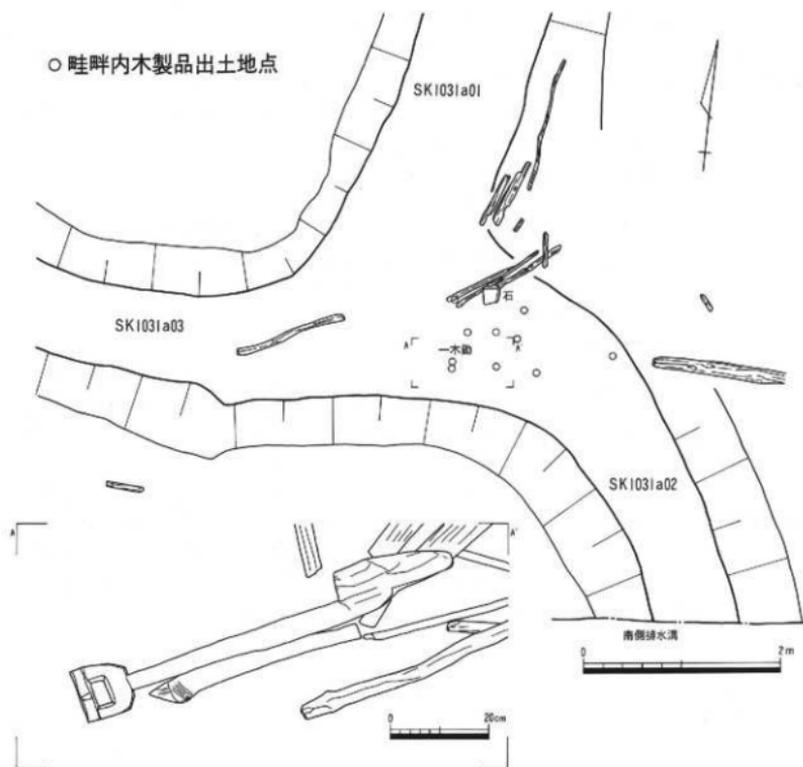
畦畔の内部からは、数枚の田下駄や広鎌の身、籾、舟形といった木製品が出土している。特に、グリッドC81とD81の境辺りから出土した籾は、一木で造られた全長70cm程のもので、指が2本しか入らないような小さめの握りがきれいに加工されている。身の部分が縦に約半分欠損しているが、欠損した側にも刃を削り出していて、再び使用していたようである。舟形木製品は舟首の部分のみで他は欠損している。全長が60cm程で、柄の部分の断面が四角形をしている。

グリッドD80の畦畔中とE80の水田面よりそれぞれ1本づつ鉄鎌が出土した。水田面のものは突き立った状態であった。弓の使われるようなことがあったのであろうか。グリッドE83の畦畔の周辺から、コイル状に木の皮を巻いたものが出土している。これは、巻き方の細かさから鉄鎌を矢に装着するためのものとも考えられる。

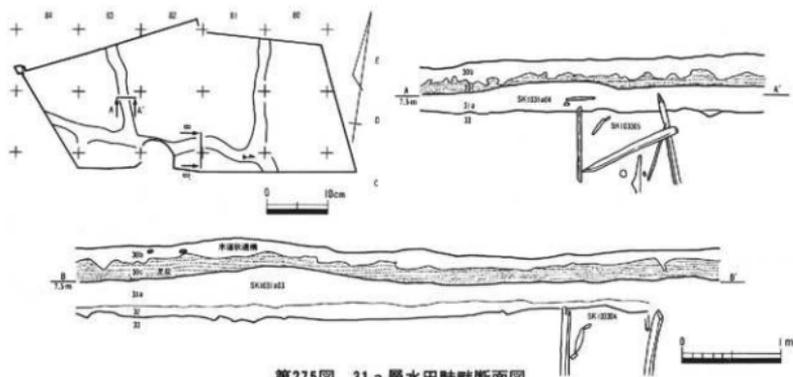
〈水田の廃絶〉

黒泥被覆

31層が放棄された原因は推測できないが、その後ヨシその他の植物の繁茂する湿地帯になっていたと思われる。上層30層は厚い黒泥の堆積であった。



第274図 31 a 層水田畦畔中木製品出土状況図



第275図 31 a 層水田畦畔断面図

30層で検出された遺構 木道状遺構・水田跡

黒泥層 30層は31層を覆う厚い黒泥・泥炭質の堆積層で、層の上部(30a層)と下部(30C層)
湿地帯 には泥炭質が強くラミナ状の堆積がみられた。湿地帯が穏やかに自然堆積していったので
であろう。層中より多量の木材が出土するため、平面的な出土位置を確かめると、泥炭質の
30b層 弱い層の中間部(30b層)で一定の配置を示すことがわかった。

〈木道状遺構〉[第278・279図、図版225・226・227]

建築材 木材は、2~3mの長さの棒状や板状で、先端部を丸く削り出して手前を扶けてあるもの(有頭棒状)、ホゾ穴を空けているもの等があり、ほとんどが屋根の垂木材、桁方向・梁方向の材、柱材といった建築部材ではないかと思われる。こうした長大な建築部材を、ほぼ正方位の東西方向、南北方向につなげて道状に敷き連ねていた。湿地帯上を歩くための木道のようなものを連想させる。

〈水田区画の可能性〉[第276図、図版226]

盛土 調査区の西半(グリッド81以西)では、この「木道」状の木材の連りの上には高さ約15~20cm程に盛土がなされている。東西方向のものと南北方向のものが直交していることから、下端幅2~3mの大規模な水田畦畔であると考えるとよいだろう。グリッドD82

文差 の交差部付近には盛土の両側に数本の杭を伴ってもいた。

杭列 調査区の東半(グリッド81以東)の盛土のない部分の「木道」状の木材も、東西方向の列と南北方向の列が直交しており、一辺10~15mの大きな区画を示しているとも考えられる。特にグリッドE80の交差部では、それぞれ長さの揃った東西方向の木材と南北方向の木材がきれいに直交するように重ね置かれている。盛土のない「木道」状の木材配置も単に湿地上を歩くだけのものではなく、水田の畦畔をつくることを意図していたものなのではな

ないだろうか。[第278図]

〈湿地帯上の開発〉

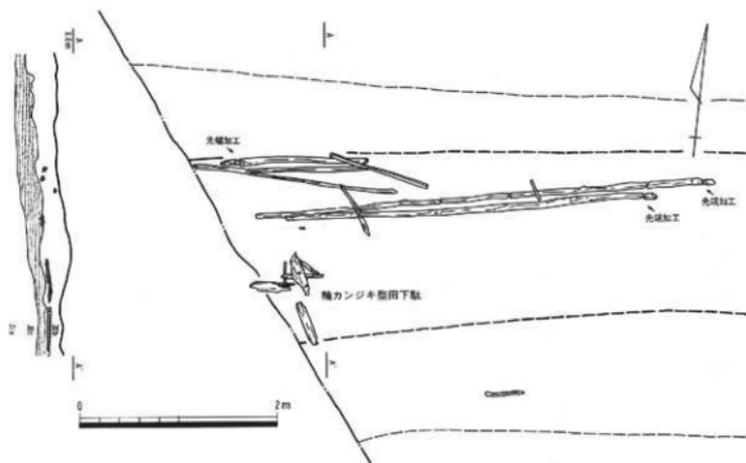
芯材 ヨシ等の深い湿地上(30C層)を開発しようと試み、不要となった建築部材等大型の木材を多量にもってきて、一定方向に敷き並べ、それを芯材にして、地形の高い部分から盛土して、畦畔を構築していったのではないだろうか。しかし、地形の低い部分では、排水・地盤が悪すぎて、木材は並べたものの盛土畦畔まではつくられなかったのではないだろうか。

P.O.値 調査区の西半にある試掘坑内からはイネのプラントオパールが確認されたが、平面的な採取はしていないため、調査区の東半の盛土畦畔のない部分のプラントオパールはわからない。実際に耕作されていたかの確認はできなかった。

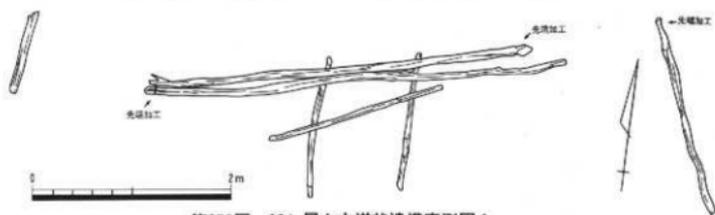
30層上の開発は一時的なもので、再びヨシ等の茂る湿原に戻ってしまったのであろう。30a層は30c層と同様に泥炭質がラミナ状に堆積した層である。

〈出土遺物〉

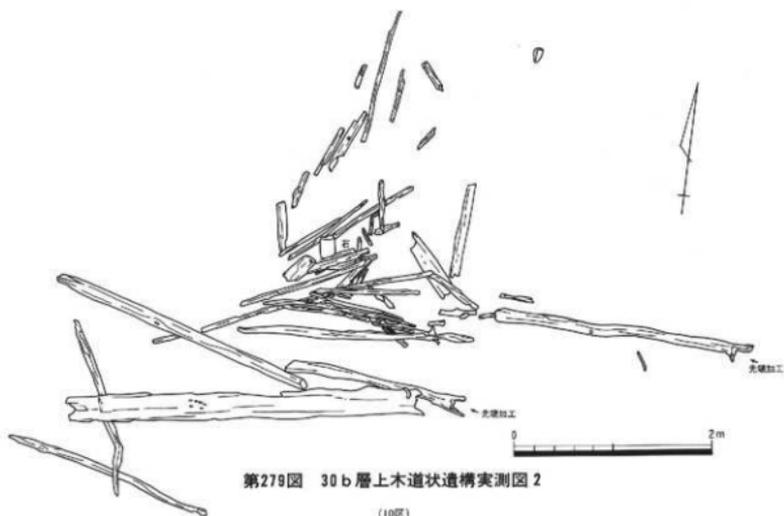
盛土中土器 畦畔盛土中からは、鍬の身や柄といった農具、輪カンジキ型の田下駄一足分(グリッドD84調査区西端)等が出土している。[第277図、図版227] グリッドD82の盛土の下、「木道」状の木材の脇からは、土師器の広口壺と小型埴が埋め込まれたかのように出土している。それぞれ胴部にスガが付着し、欠損していて完形にはならなかった。これも畦畔で行なわれた儀礼に関わるものなのであろうか。[第276図、図版227]



第277図 30b層水田SK103003内木道・遺物出土状況図2



第278図 30b層上木道状遺構実測図1



第279図 30b層上木道状遺構実測図2

26層上で検出された遺構 水田跡

30層の「木道」状遺構が埋没した湿原上には、ゆるやかな水の流れによって次第に砂やグライ化した粘土（29層，28層，27層）が堆積してゆく間、人間の働きかけはなかったようである。26層の茶褐色粘土層で検出された遺構はやはり水田跡であった。

〈水田跡〉〔第280図，図版223〕

26層上の水田では、調査区内の畦畔や区画に規模の大小はみとめられず、一辺3～4mの正方形に近い小さな区画の水田が一面に広がっている。グリッド80以東では、区画の形状が不定形で、規模も倍程の大きいものになっている。調査区は中央から東に向かって地形が低くなっているが、最も地形の高いグリッドE82の南西端付近の区画が最も規模が小さいことも考えると、地形の低いところほど大きな区画をつくっているといえるだろうか。畦畔の方向は東西方向のもの、南北方向のものともほぼ正方位であった。下端幅約50cm、残存している高さは約5cmを測る。

調査区内に水路はみられず、それぞれの水田区画にも水口らしきものは認められなかった。

(1) 水田面の浸食 〔図版224〕

グリッドE81から、グリッドC79にかけて、洪水流が田面を浸食した痕跡がある。一度ではなく広く浅い浸食の後、同じところに溝状に狭く深い浸食がなされたようである。

(2) 畦畔補強の杭列 〔第281図，図版224〕

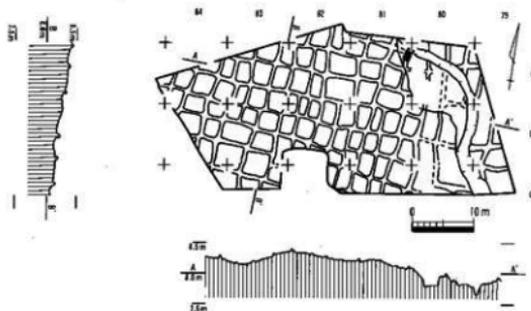
グリッドF80北東隅付近の南北方向の畦畔には丸太材を芯にして、樹皮をつけたままの広葉樹材の杭列がある。最初の浸食で盛土が失われ補強されたようだが、次の浸食で崩壊してしまっただのではないだろうか。

(3) 足跡

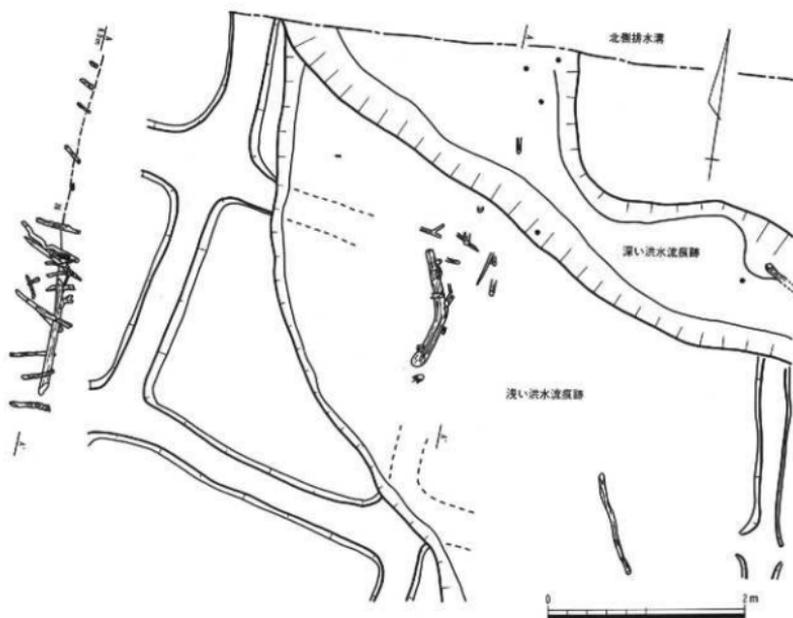
グリッドC80からD80にかけて、畦畔を越えて続く南北方向の細い溝がある。調査当時これも浸食痕跡と考えたが、おそらく足跡が連続したものであろう。

〈出土遺物〉〔第282図，図版224〕

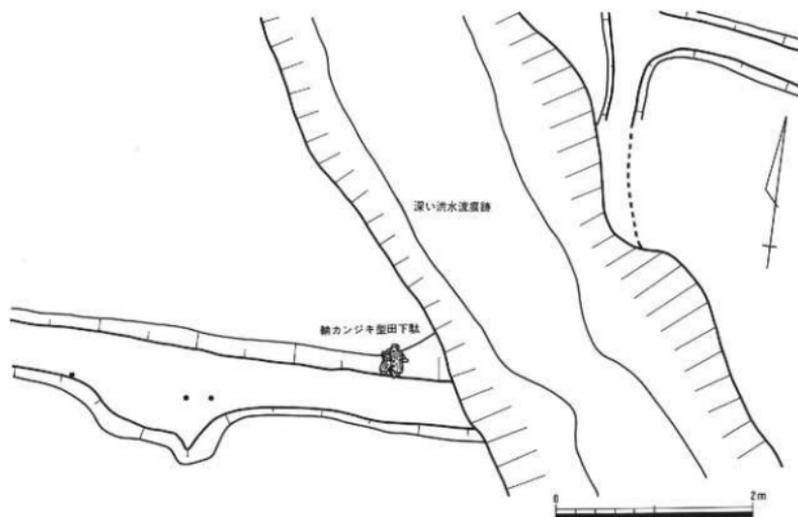
グリッドC80にある東西方向の畦畔は、他の畦畔より若干規模が大きく、粗朶を埋め込んで補強していた。この畦畔上には、一足分の輪カンジキ型の田下駄が丁寧に重ね置かれていた。



第280図 26層水田エレベーション図（水平1：800垂直1：80）



第281図 26層水田畦畔補強枕列実測図



第282図 26層水田畦畔上田下駄出土状況図

23層上で検出された遺構 水田跡・水路	
26層の水田は、25層や24層の粘質砂を運んできた洪水流により浸食され、放棄されたのであろう。その後、水路を備えた水田が23層上に営まれている。	25・24層
〈水田跡〉〔第283・288図、図版219〕	
23層上の水田面は洪水流の運んできた砂礫（22層，21層）の厚い被覆の下、非常に良好な状態で保たれていた。この水田は堤を伴った水路と大規模な畦畔、小規模な畦畔による区画により構成されている。	砂礫被覆
（1）大規模な畦畔	
調査区内に8本みとめられる。SK102301とSK102308は幅広くて低い（下端幅1.5～5 m、高さ約15cm）のに対し、SK102305の南半、SK102305・06は幅が狭くて盛土が高く（下端幅1～1.5 m、高さ約30cm）、小規模な畦畔と幅の上では明確な差がない。これは39層・36層・33層等下層の水田において大規模区画・小規模区画の畦畔は規模の差がはっきりしており、それぞれ規模が揃っていた状況とは異なる。この調査区内だけでは判断し難いが、大規模区画水田と小規模区画水田という関係が変化した可能性がある。	畦畔規模に規格弱い
SK102308は長さ30～50cmの針葉樹材の小杭を約80本、不規則に打ち込み補強している。北側へいくほど短い杭が使用されていた。〔第284図、図版220〕	部分的補強杭
SK102306では、長さ50～60cmの広葉樹材の杭列を盛土の南側に、また、先端を鋭く切った粗朶小枝を盛土の中央にそれぞれ打ち込んでおり、SK102305との交差点付近では、立木を植え込み、その周辺にやはり粗朶を埋め込んで補強していた。	小枝杭材
SK102307はSK102304と05・06を繋いでいる部分で、幅が広く、SK102306からの延長で立木が数本植え込まれていた。〔第286図、図版220〕	立木
（2）畦畔杭列〔第285図、図版201・221〕	
杭列は、大規模な畦畔以外にも調査区南東端のSK102301に直交するよう東西方向に、また、これに直交する南北方向の小規模な畦畔に、それぞれ打たれている。前者は長さ70～100cmの針葉樹材の杭が1列に打たれ、立木も植え込まれている。後者は30～100cmの針葉樹材の杭と立木を含む1列である。どちらも本来は大規模な畦畔があった位置なのではないだろうか。畦畔のつくり替えがあったのではないだろうか。	畦畔付替
水路SD102301より東側（グリッド80以東）の水田面は21層の礫を運んできた洪水流でかなり浸食されているらしく、畦畔の高さがはっきりしない。また、この水路以西の水田区画に比べて不整形な区画になっているように感じられる。畦畔が何度かつくり替えられているのではないだろうか。何度か浸食で畦畔の盛土が失われ、復旧する際に別の位置につくり、元の畦畔の杭列はそのままにして利用されたものと考えられないだろうか。	
（3）水路SD102301〔図版222〕	
下端幅1～2 m、高さ約30cmの堤が両側に伴っている。この堤は東西方向の畦畔とも交差していて、南北方向の大規模な畦畔を兼ねている（SK102303・04）。水路は水田面より10cm程掘り込んでつくられており、幅は約1～3 m、底のレベルに南と北で差がないためどちらに流れていたかはわからない。	両岸に堤
（4）小規模な水田区画	
水田区画は、水路から西側で残存状態が良好で、下端幅50～80cm、高さ約10cmの畦畔で一辺4～5 mのほぼ正方形につくられている。畦畔は東西方向のもの、南北方向のものともほぼ正方位になっている。	畦畔の方向

(5) 水口 [第286・287図, 図版222]

東西畦畔
水口の構造

ほぼ全域にあり、大規模な畦畔にあるもの、小規模な畦畔にあるもの、合わせて40箇所は数えることができる。そのうち東西方向の畦畔の一部を切って水口を設けているものが多く、32箇所である。つくり方には、盛土を完全に切断してしまうもの、一方の側から盛土を削り込むものの両方があるようで、前者は畦畔の交差部に多く、後者は東西畦畔の中央につくられているものに多かった。

水口脇浸食

大規模畦畔SK102305に交差しようとする東西方向の畦畔では、その交差部の盛土が切断され、SK102305沿いに両側に水が流れるようになっている。水田面が若干北から南へ低くなっていることから、全体的に北の水田から南の水田へと水まわしをしていたと考えている。水口の切られた部分の南側の水田面が若干凹んでいる状況のみられるものもあり、これは水口を通った水が流れ込んだほうを浸食したためできたのであろう。

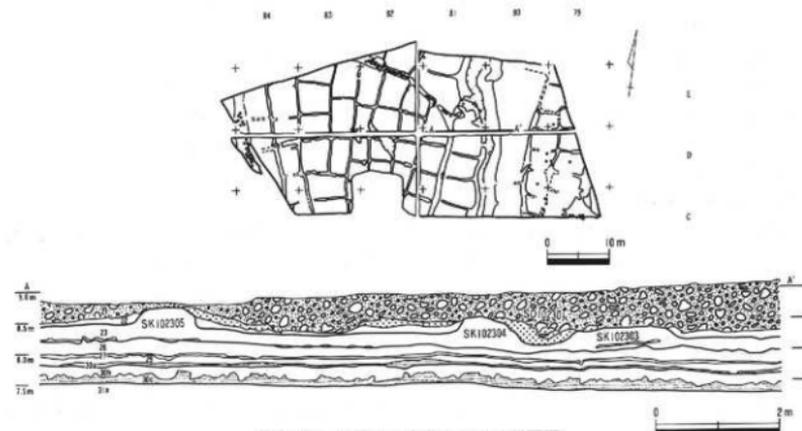
水路の導水
水まわし

大規模な畦畔をきって水口を設けている状況も8箇所のみられる。特に堤を兼ねたSK102304が切られている部分(水口6、7)は水路SD102301から西の水田面へと導水をしていたと思われる。SK102306に設けられた水口8、13、17、18はそれぞれその南側の水田へと水を通過させていたようである。全体的に北から南への水まわしが考えられる。

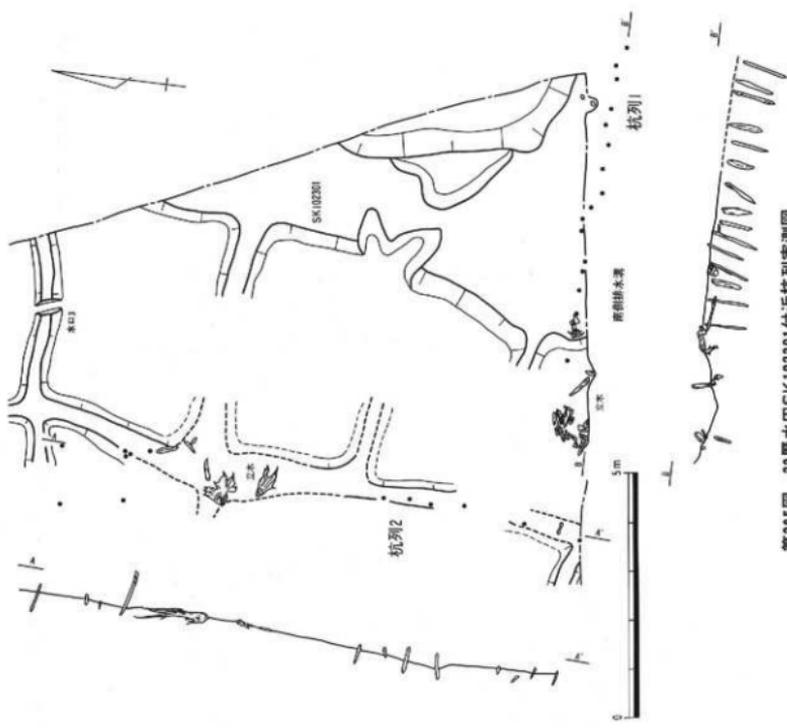
〈出土遺物〉 [第289図, 図版221]

立て札状の木製品直立

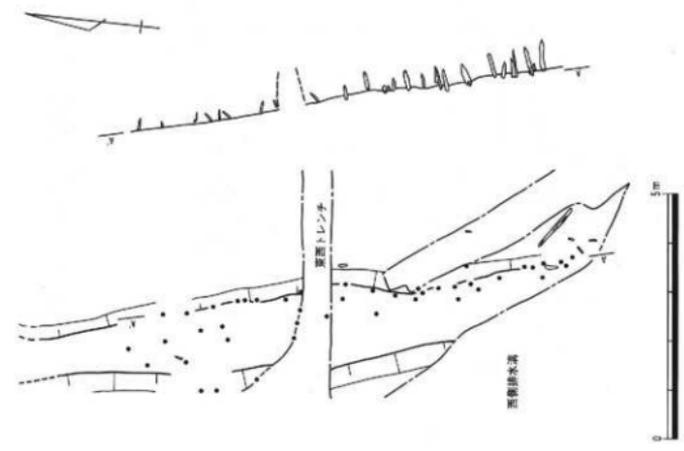
グリッドD84の畦畔の交差部に、一見「立て札」のように見える木製品が突き立てられていた。針葉樹材の一木でつくられ、一辺約18cmのほぼ正方形、厚さ約4cmの板状の頭部と直径約4cm、長さ約60cmで断面を楕円形にきれいに削った柄の部分よりなっている。柄の先端部を斜めに切って鋭くし、畦畔中に打ち込んでおり、用途は不明だが、本来農具の一種だったものを転用している可能性がある。実際の農作業中に何らかの目的で、立てられたまま使用されたものなのだろうか。また、畦畔の交差部にあり、すぐ脇に水口もあることから、畦畔や水口に関わる儀礼に関係したものなのだろうか。推測の域は出ない。また、土壌中からS扉板と考えられる建築部材も出土している。



第283図 23層水田東西トレンチ断面図

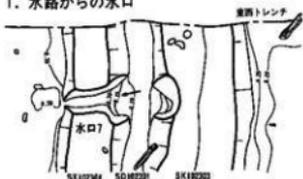


第285図 23層水田SK102301付近杭列実測図



第284図 23層水田SK102308杭列実測図

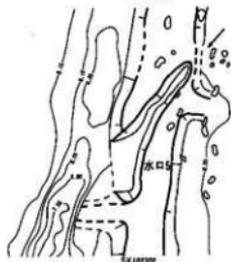
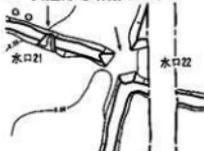
1. 水路からの水口



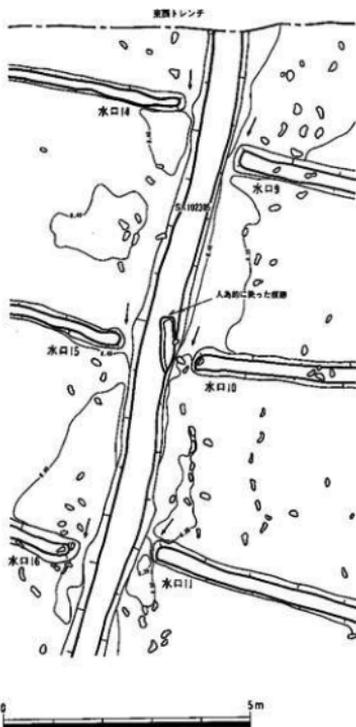
3. 盛土の一方を扶った水口



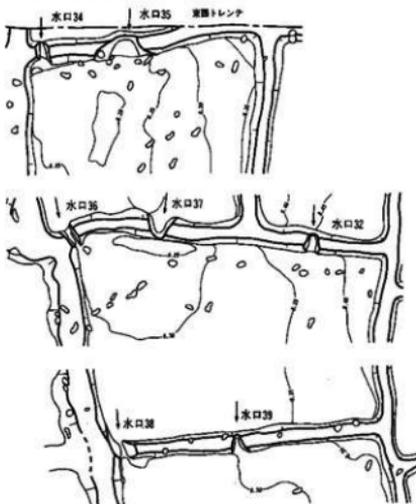
2. 交差部を切断した水口



4. SK102305両側の水口(完全に盛土を切断)

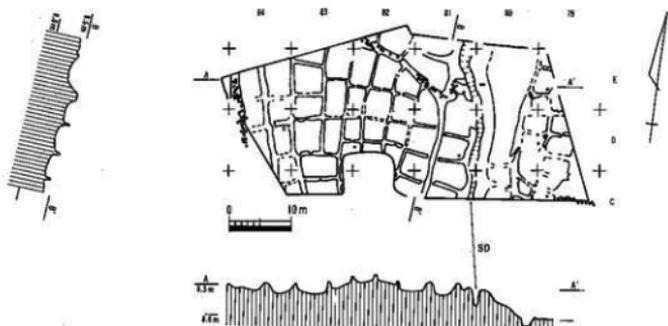


5. 交差部と中央部に並列した水口
(完全に盛土を切断)(盛土の一方を扶った)

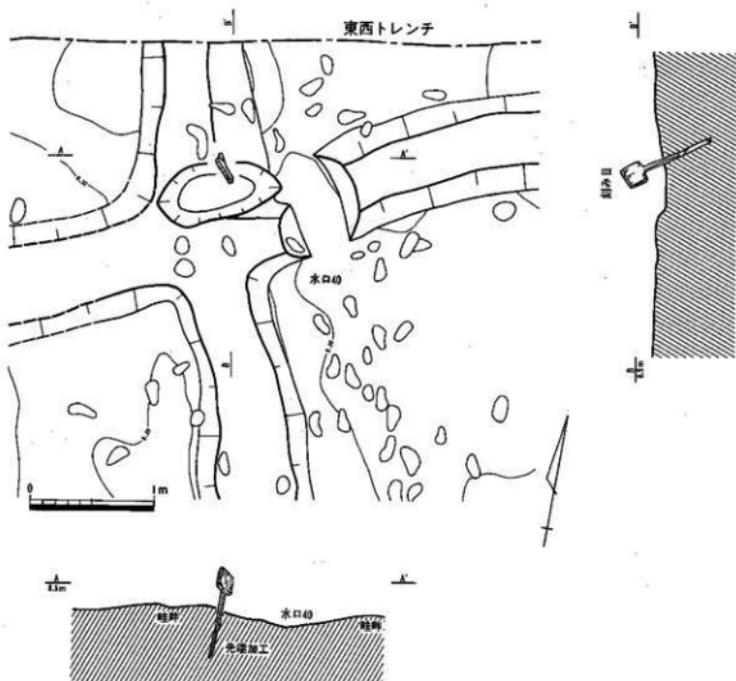


第287図 23層水田畦畔水口実測図

(10区)



第288図 23層水田エレベーション図 (水平1:800 垂直1:80)



第289図 23層水田畦畔上木製品出土状況画

19層上で検出された遺構 水田跡

23層の水田上を覆っていた砂礫(22層, 21層)はたいへん厚く、特に調査区の東側では 22・21 層
1 m を越える堆積であった。洪水流の激しさを物語っているのであろう。21層の砂礫中からは、多数の杭や槽の破片、建築部材等の木製品、350片もの土師器細片が出土している。
19層上の遺構は、この砂礫直上の砂質粘土層を開発した水田遺構である。

〈水田跡〉〔図版218〕

19層は、上層16層の段階で水田耕作された際、深く踏み込んで土壌が攪拌されたらしく、**土壌攪拌**
調査区の大部分で16層との分層が困難であった。16層の段階以前の洪水による砂の堆積(18
層, 17層)が厚い調査区の西端と東南端でのみ平面を検出できた。 **18・17 層**

東西方向、南北方向の畦畔が数本確認されたのみで、水田区画の規模やつくり方は推定
できなかった。畦畔は下端幅50~60cm、高さ10~20cmで、南北方向のものが真北より西へ
畦畔の方向
約45°傾斜した方向につくられ、東西方向はこれに直交している。この畦畔の方向はこれ以
後つくられていく上層の水田におおよそ踏襲されていくようである。

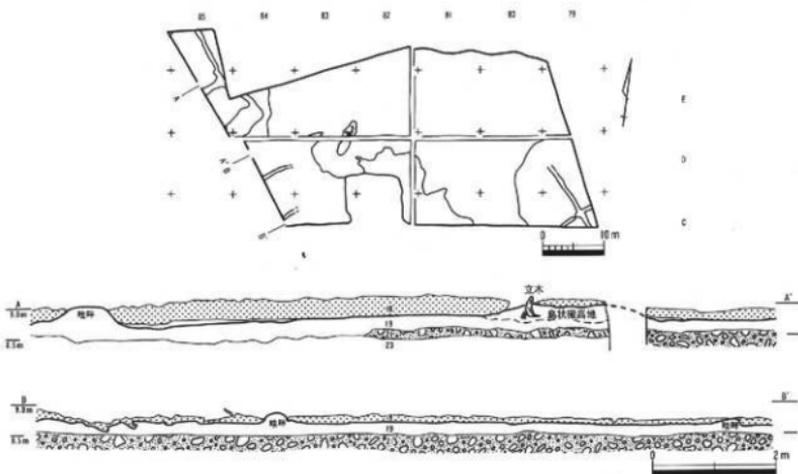
なお、グリッドE83南東隅では、土壌は失われているものの数本の立木の根が確認され **立木群**
た。水田域の中においてどのような場所にあったのであろうか。

〈島状微高地〉〔第290図〕

グリッドE84に、高さ約20~25cm程の島状の微高地がある。南北方向の畦畔につながり、
東西方向の畦畔とほぼ平行な方向に延びている。これが更に西へ延びていくとすれば、**東西畦畔か**
下端幅3m近い東西方向の大規模な畦畔の一部だという可能性もある。

〈出土遺物〉

19層の水田を覆った洪水流による粘質砂の堆積(18層)の中からは、曲物の底や挽物と
いった木製品が出土している。



第290図 19層水田西側排水溝断面図

16層上で検出された遺構 水田跡

19層の水田が廃絶された後、16層の段階で再び開田されたようである。16層上で検出された遺構も水田跡であった。

〈水田跡〉〔第291図、図版216〕

16層水田は東西が5～7m、南北が6～15mの正方形から南北に長い長方形の区画よりなり、水田一つ一つの規模は揃っていない。

畦畔の方向 畦畔の方向は、東西方向のものが真北より西へ40～45°傾斜しており、19層の水田とほぼ共通している。畦畔の規模は下端幅50～60cm、残存する高さが約10cm程で、南北方向のものに比べ、東西方向のものが低くはっきりしない。南北方向の畦畔を基軸にして水田をつかったのであろうか。

(1) 島状微高地

南北畦畔か 調査区の西端に高さ10～15cmの島状の微高地がある。南北方向の畦畔が部分的に肥大したような位置にあり、東西方向の畦畔とも繋がっている。

(2) 水口 〔第292・293図、図版217〕

島状微高地の南端で南北方向の畦畔に繋がってゆく部分には、東西に2本の溝が切られていて、水口として機能していたと考えられる。(水口5、6)

水口は、この他4ヶ所にみられる。特に調査区中央グリッドE83からD82にかけて、東西方向の畦畔の中央部を切って3つの水口が整然と直線的に並んでいる。最も北の水口2の北の水田面には水口へと水を集めるための溝がつけられている。北から南へ4枚の水田を通して水を流す構造であろう。

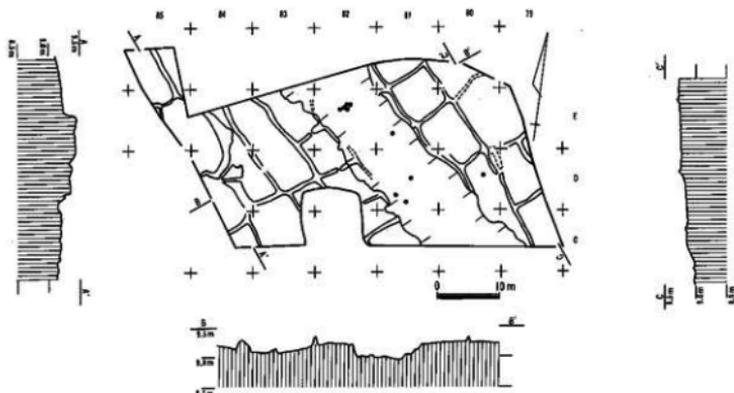
畦畔付替 グリッドD80にある水口の北にある畦畔は、2本が並列しているように見える。一方は高まりがはっきり残っており、つくり直したものと思われる。小規模な水田を区画する畦畔の中には、状況により何度かつくりかえられているものもあるのではないだろうか。

(3) 杭列 〔第293図、図版216〕

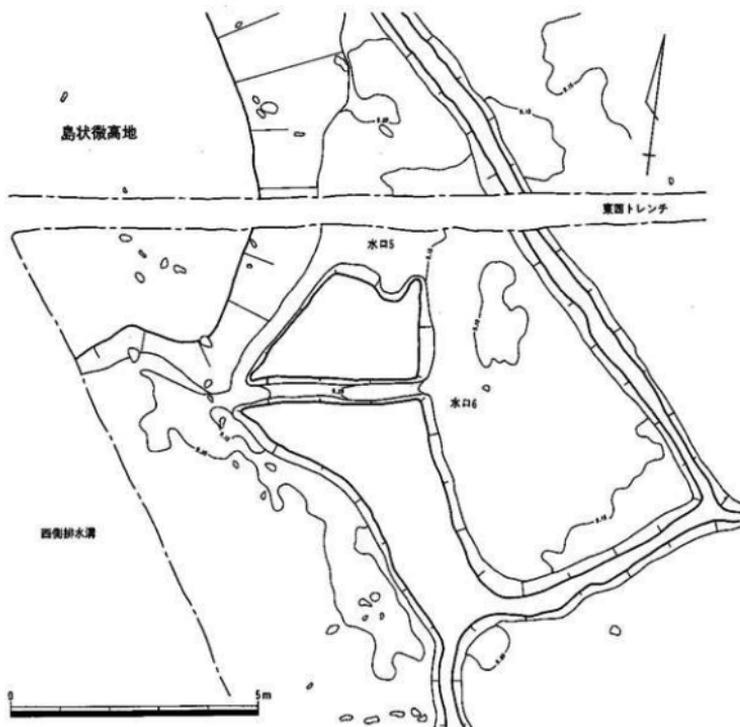
調査区中央部の水田面は、北西から南東へと走った洪水流により広く浸食をうけている。浸食された部分とその周辺には長さ20～30cm程の小杭が数本打たれている。畦畔の方向の延長線にあるような杭列を成すものがあり、畦畔を補強して水田面の復旧を計ったものと考えられる(グリッドE82)。

〈出土遺物〉

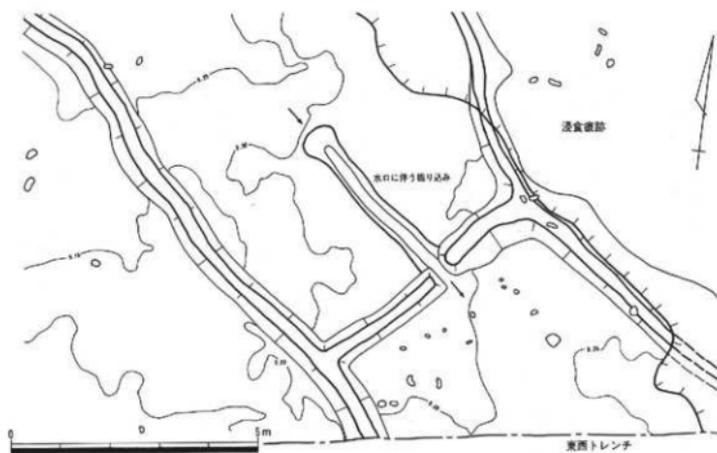
砂被覆 16層の水田は、洪水により全面に粘質砂が堆積(15層)したことによって放棄されたのであろう。この粘質砂中からは、斎串状の木製品数点、木簡の破片等が出土している。木簡は、上下左右とも欠損し、裏面も剝離している。縦7cm・横4cm、厚さ1cm程のもので、5文字が認められる。〔第295図〕上と下の2文字は不明だが、中の3文字は「戸主奈」とも解釈しうる。16層からは年代の推定できる遺物は出土していないが、21層から15層の間から出土した土器片の組成からみると、大まかに平安時代ぐらいとは考えられる。



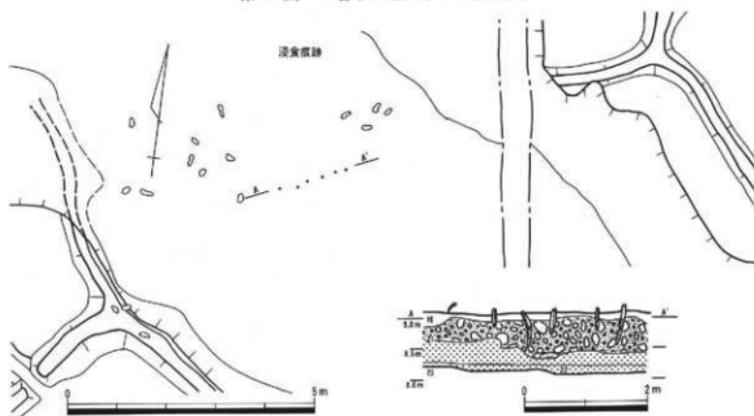
第291図 16層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



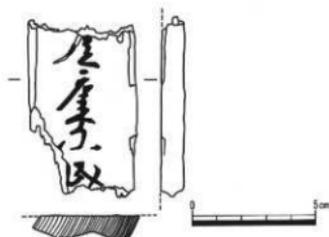
第292図 16層水田島状微高地南側水口実測図



第293図 16層水田畦畔水口2実測図



第294図 16層水田浸食痕跡内枕実測図



第295図 16層水田上(15層中)出土木簡実測図

14層で検出された遺構 水田跡

〈14b 層水田〉〔第296・297図、図版214・215〕

14層の水田土壌は、部分的に砂を挟んで上層（14a層）と下層（14b層）に分層できた。下層を部分的に調査（調査区中央部のみ精査し、その他の部分はサブトレンチにより確認）すると、上層とほぼ同位置に同方向の畦畔のあることが確認された。下層の水田が洪水等により放棄されて、それほど時間を置かず、殆どそのままの位置に復旧されたと考えられる。

復 旧

〈14a 層水田〉〔第296図、図版213・214〕

上層の水田面は、洪水流による厚い砂礫（13層）に覆われ、全面的に遺構を確認できた。水田区画は形状、規模とも不揃いで、最も小さなものは面積約16㎡、大きなもので150㎡を越えている。畦畔の基本的な方向は、南北方向のものが真北より西へ40～45°傾斜しており、19層、16層の水田とほぼ共通である。畦畔は直線的に繋がらず、交差部も直交していない。畦畔の規模は、下端幅約60cm、残存する高さ約10cmで、ほぼ均一であった。

砂 被 覆

畦 畔 方 向

水田区画は一定の形を意図したものではないようで、微細な地形の変化に応じてつくられているようである。調査区中央部のグリッドE82、D81、C80付近は周囲より地形が低く、ここにある水田区画は比較的大規模なものであった。水田面の東西方向のエレベーションを測るとST3～7からST8～12、さらにST13～15へと東西に棚田状に段差のついた水田になっている。〔第296図、図版215〕そのなかで、ST8～12は他に比べ南北に非常に細長い形状の水田が連なったものである。地形の境目にあたるため、広い範囲では水田面の水平を確保できず、狭い幅で南北方向の畦畔をつくったのであろう。

地形による
区画形態

棚田状構造

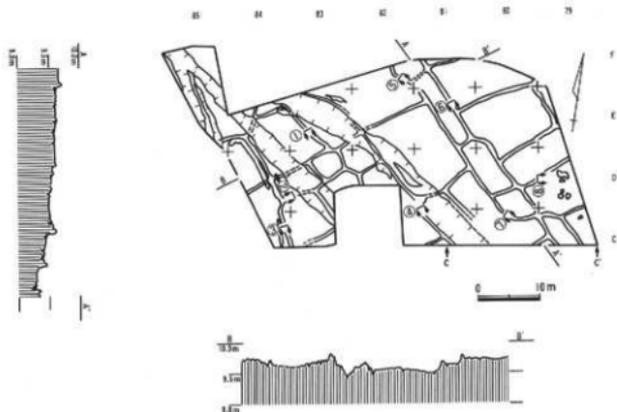
〈洪水流の痕跡〉

調査区の北西端から南側にかけて、洪水流が水田面を挟った痕跡がある。大きいものは3本あり、それぞれ狭く深い溝状になっていて、部分的には40cmもの深さがある。痕跡の方向、規模からみて、調査区の西側にはある程度の大きさの流路が存在していると考えられる。14a層水田が放棄されたのもこの洪水によってである。水田面全体に厚さ1mもの砂礫層（13層）が堆積している。

〈出土遺物〉

水田土壌中より齧串状の木片が数片出土している。しかし、下層からの出土で、平面的にも16層上では洪水流の痕跡のあった場所にあたる。16層上を浸食した洪水流の上部にあったものを14層水田の耕作中に巻き上げたものと考えられる。

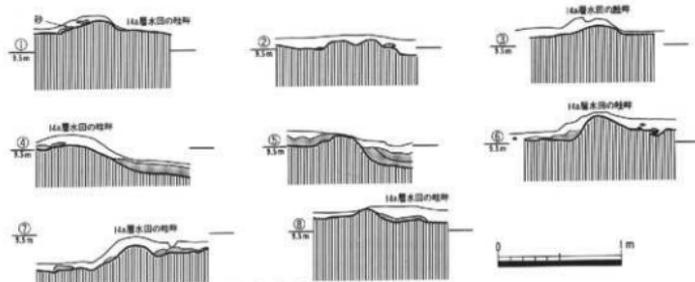
土器の出土は少なく、土壌中、被覆する砂礫層中とも須恵器、土師器、灰釉の小片がそれぞれ数点ずつであった。須恵器片は、これより上層ではみられなくなった。



1. 14a層水田エレベーション図



2. 14a層水田畦畔断面図



3. 14b層水田畦畔断面図

第296図 14a層・14b層水田畦畔断面図



第297図 14b層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)

11層上で検出された遺構 溝・柱穴群・流路

13層の隙の上に堆積した砂層(12層)と砂混じり粘土層(11層)は、深の堆積のレベルが高い部分では、上層(9層)の水田の耕作により攪拌され、分層し得なかった。11層上の遺構が確認できたのは、調査区の西側一部であった。なお、10層は11層上の溝の覆土であり、一部に存在するのみである。

〈流路SR101101と杭列〉

調査区の西端に流路SR101101があり、その西側に平行して杭列が打たれている。SR101101は川幅4～5mと推定されるが、深さは約20cm程度と浅いようであった。杭は長さが60～100cmの針葉樹材である。流路内より舟形木製品の破片が出土している。

〈溝と柱穴群〉[第298図、図版211・212]

グリッドF83からC81にかけて、帯状に盛土された部分がある。下端幅5～6m、高さが10～20cmで、調査区より更に南と北に伸びているものと考えられる。真北より西へ約40°傾斜する方向で、19層以後につくられた水田畦群の方向と共通している。

盛土の上には、中央をまっすぐに通る溝SD101102と部分的に存在するL字形の浅い溝SD101101、そして30以上の大きささまざまなピットがある。

(1) 溝SD101101、SD101102

中央の溝SD101102は、幅約50cm、深さ約20cmで、断面が半円形に非常に丁寧に成形されている。L字形の浅い溝SD101101は2つが並んでいるようにみえる。中央を貫くSD101102に比べ、明らかに粗雑なつくりである。切り合い関係からみて、SD101102より、このSD101101のほうが先にあったようである。

(2) 柱穴群SP1～18

盛土上のピット群は、大きさ、深さとも均一ではないが、大きいピットの中には柱痕が残り、明らかに柱穴と認められるものがあつた(SP8)。直径約30cmの柱穴に直径約12cmの炭化した柱痕が残っていた。礎板のようなものはなかった。また、ちょうど角材をはめ込んだような四角形のピットもあり、これも柱穴とみてよいであろう(SP10)。大きめのピットを柱穴と仮定して、建物の平面プランを考えたが、規格性がなくはっきりしなかった。盛土中央の溝に沿って両側にあるようにもみえ、住宅や倉庫等の建物にしては細長い構造になってしまう。盛土中央の溝と同様の方向性をもった柵や塀のような構造と考えたほうがよいのではないだろうか。ピット群の全てが同じ時期のものとも確定できないが、柱痕のある大きな柱穴SP8が、盛土中央の溝SD101102を切ってつくられており、この構造物はSD101102ができた後につくられたと考えられる。

〈遺構の復元〉

遺構の切り合い関係からこの盛土上の遺構を推定してみると、まず、幅広く低い帯状の盛土を水田畦群の方向と同様につくり、その上に浅いL字形の溝を伴う何らかの施設がつけられたのであろう。ピット(柱穴か)のうち、いくつかはこの時のものであろうか。その後、盛土の中央部に丁寧にまっすぐな溝を掘り込んでいる。更にこの溝に沿って、直径10～15cm程の柱を立てた塀の様な構造物をつくったと思われる。

19層以後の水田畦群の方向の共通性が、条里制等の地割の規制をうけた結果だと考えられるならば、この11層上の遺構も、同じ方向で地境を示すための一連の施設だったのではないだろうか。

13・12層

護岸杭列

帯状の盛土

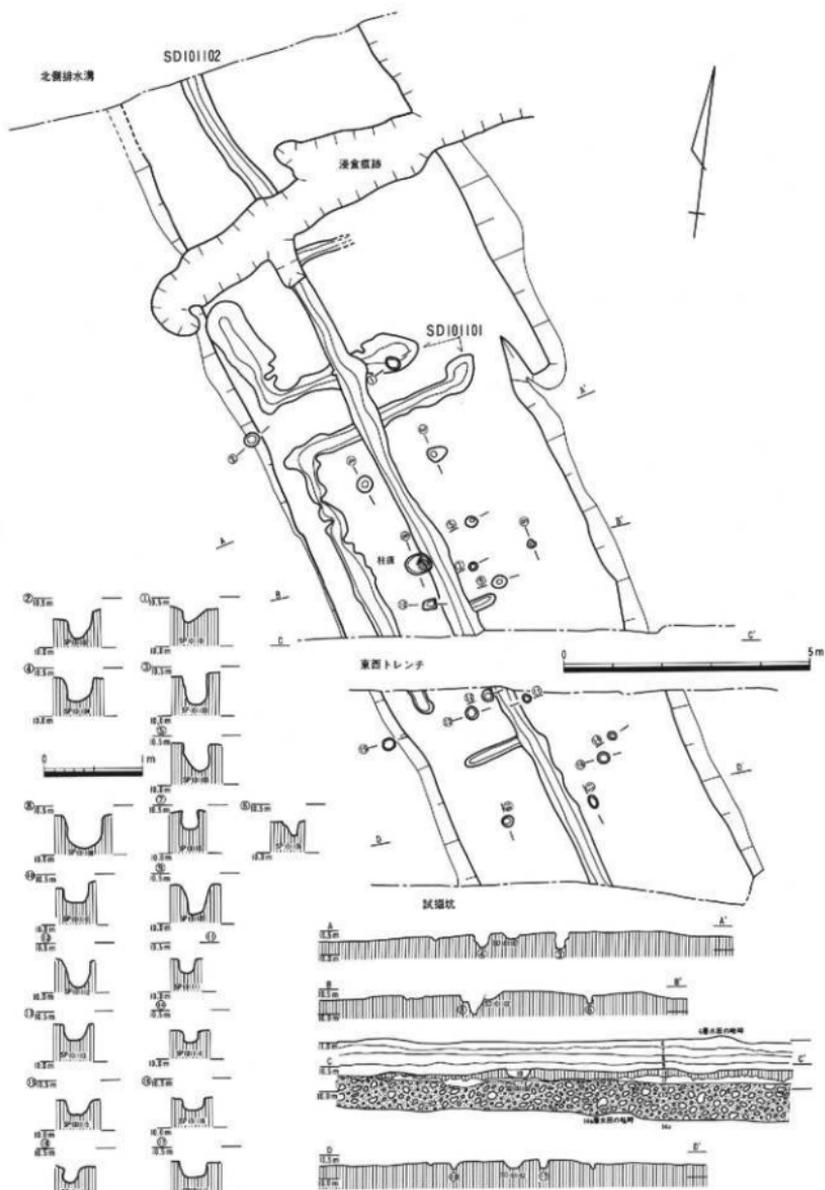
畦群の方向

盛土中央を貫く溝

柱痕

溝の両側柵・塀

条里型地割



第298図 11層溝状遺構・柱穴群実測図

9層上で検出された遺構 水田跡

11層を覆う9層砂質粘土層は、攪拌状態、下層の巻き上げ、プラントオパール分析結果から水田土壌と考えられたが、遺構としては調査区東南端（グリッドC79）に東西方向の畦畔が1本確認できたのみである。下端幅約70cm、高さ約5cmの規模であった。【図版210】

〈出土遺物〉

9層中からは、宋銭「天禧通宝」（初鋳1017年）と火鍛白、箸状木製品が出土している。直上の8層自然堆積粘土層からは、宋銭「治平元宝」（初鋳1064年）、唐銭「開元通宝」（初鋳621年）が出土している。また、8層からは磁器の細片が出土しており、これは17世紀代の伊万里焼茶碗とみられる。

中国 銭
磁 器

6層上で検出された遺構 水田跡・埋礫土坑群

6層は、現表土から約1mの深さにあり、客土層（1～4層）の下、洪水流による砂層（5層）を挟んで最初の遺構面である。区画整理以前、最後に放棄された近世の水田面だと考えられる。

現代の攪拌

調査区北半と東端には、広い範囲で上層からの深い溝状の攪乱が及んでいた。

〈水田跡〉 [第299図, 図版209]

畦畔は下端幅約50cmで、南北方向のものが真北より約40°西へ傾き、東南方向のものがそれに直交している。杭列等の補強はされていない盛土畦畔である。水田1枚1枚の区画は、一辺12～13mの正方形になっているようだ。水口は1ヶ所のみ確認でき、D80グリッド杭のすぐ北、東西方向の畦畔の一部を切って設けている。

畦畔の方向
正方形区画

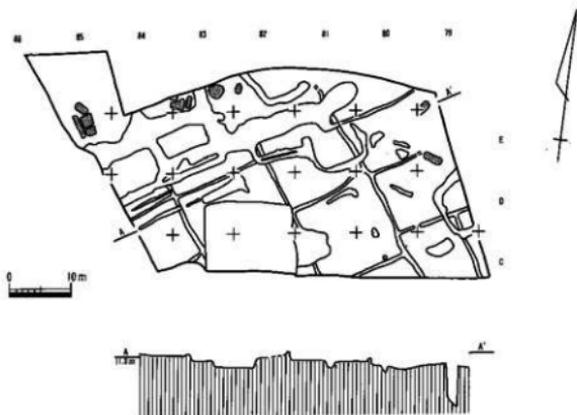
〈埋礫土坑群〉 [第300図, 図版210]

調査区の北端（グリッドE85、F83）、東端（グリッドE79）そしてグリッドC80には、長方形または円形で、深さ30～80cmの土坑が掘られている。特に調査区の北端では、3～4基毎に集まっていた（埋礫土坑群1、2）。底を2段に掘っているものもあり、全体に丁寧な成形されていた。確認できる12基には、全てびっしりと礫が詰められている。おそらく洪水によって水田面に残された礫を、区画の隅に埋塞したものであろう。水田面より若干地形が高く、畦畔のはっきりしない位置に集まっているように思われる。

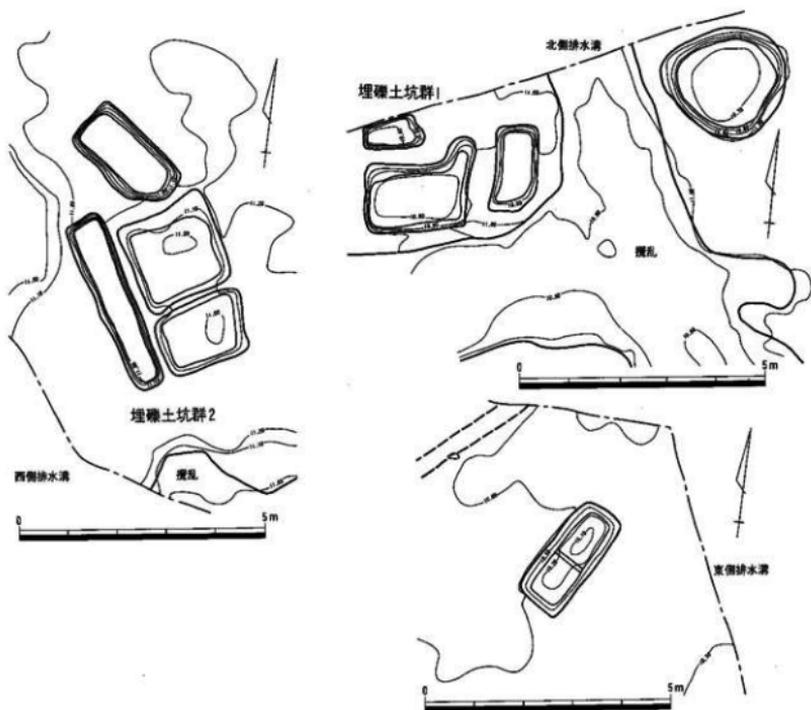
洪水埋塞

東に隣接する9区でも、畝状遺構のある部分より一段地形の高い部分に同様の埋礫土坑群が検出されている。逆に西へ現長尾川を越えた宮下遺跡、川合遺跡でも埋礫土坑群は報告されている。ただ、宮下遺跡、川合遺跡のものは、瀬名遺跡のものと違い、規格性の強い形状のものが水田面の特定の部分一帯に整然と並んでいた。

長尾川両岸



第299図 6層水田エレベーション図 (水平1:800垂直1:80)



第300図 6層水田埋藏土坑群実測図

水田計測表 (10区 39層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	6.32	--	--	--	--	一部区外
2	6.34	--	--	--	--	"
3	6.32	--	--	--	--	"
4	6.33	--	--	--	--	部分的抽出
5	6.35	--	--	--	--	"
6	6.32	--	--	--	(1.4)	"
7	6.32	--	--	--	--	一部区外
8	6.35	--	--	--	--	部分的抽出
9	6.35	推 2.8	四辺形	2.1	1.3	"
10	6.33	推 4.1	四辺形	2.0	1.9	"
11	6.28	--	--	--	--	一部区外
12	6.35	--	--	--	1.2	部分的抽出
13	6.33	--	長方形	--	2.2	"
14	6.29	--	--	--	--	" * 一部区外
15	6.35	--	--	--	--	一部区外
16	6.39	--	--	--	--	部分的抽出
17	6.41	--	--	--	1.3	"
18	6.41	--	--	--	--	"
19	6.41	--	--	2.2	--	一部区外
20	6.42	推 4.1	長方形	2.1	1.6	"
21	6.45	推 2.1	(長方形)	1.8	1.0	"
22	6.45	推 1.9	(長方形)	1.8	(1.0)	"
23	6.48	推 2.0	(長方形)	1.7	(1.1)	一部トレンチ
24	6.45	--	(台形)	3.5	1.8	部分的抽出
25	6.45	--	--	--	1.8	"
26	6.45	推 9.9	長方形	(4.0)	2.1	"
27	6.46	--	--	--	--	一部区外
28	6.45	--	--	--	--	"
29	6.49	推 2.5	長方形	1.5	1.3	"
30	6.50	推 1.5	長方形	1.7	0.8	"
31	6.50	推 2.2	長方形	1.7	1.0	"
32	6.54	推 2.9	正方形	1.6	1.5	"
33	6.53	--	台形	1.3	0.7	一部トレンチ
34	6.49	--	--	--	--	"
35	6.48	推 1.2	長方形	1.3	0.8	"
36	6.49	推 1.4	長方形	1.4	0.8	"
37	6.48	推 2.2	台形	1.6	0.9	"
38	6.47	推 1.8	台形	1.5	1.0	"
39	6.46	推 4.1	台形	2.1	1.6	"
40	6.44	--	--	(2.5)	--	一部区外
41	6.52	--	--	--	--	"
42	6.53	推 3.0	台形	2.1	0.9	"
43	6.54	推 2.6	長方形	2.0	0.9	"
44	6.55	推 3.2	台形	2.2	1.1	"
45	6.56	推 2.5	台形	2.1	0.8	"
46	6.57	推 2.2	長方形	1.9	1.1	一部トレンチ
47	6.53	推 2.6	台形	2.2	(1.0)	"
48	6.52	推 5.9	台形	2.8	2.3	"
49	6.49	2.9	台形	1.7	1.4	"
50	6.44	1.9	台形	1.6	1.0	"
51	6.44	--	--	--	0.9	部分的抽出
52	6.46	推 1.2	長方形	1.7	0.6	"
53	6.47	--	(長方形)	(2.0)	--	一部トレンチ
54	6.47	--	--	--	--	部分的抽出
55	6.52	--	--	--	--	一部区外
56	6.53	--	--	--	1.2	部分的抽出
57	6.55	推 1.9	台形	1.4	1.2	"
58	6.56	推 2.0	正方形	1.5	1.3	"
59	6.50	推 3.6	台形	2.5	1.0	"
60	6.50	推 2.0	(長方形)	2.0	1.1	一部トレンチ
61	6.50	--	--	--	1.0	"
62	6.50	--	--	--	1.1	"

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
63	6.48	--	--	--	(1.0)	一部トレンチ
64	6.47	--	--	1.7	--	部分的抽出
65	6.48	--	--	--	--	"
66	6.51	--	長方形	2.0	1.1	一部区外
67	6.52	推 1.1	正方形	1.0	0.9	"
68	6.52	推 0.9	長方形	0.9	0.8	部分的抽出
69	6.48	--	--	--	0.6	"
70	6.46	--	(台形)	(1.3)	--	"
71	6.44	推 2.6	--	2.5	1.0	一部トレンチ
72	6.45	推 2.5	正方形	1.6	1.5	"
73	6.45	--	--	--	--	"
74	6.46	--	--	--	0.9	部分的抽出
75	6.47	--	--	--	--	"
76	6.45	推 0.8	台形	1.1	0.4	"
77	6.44	--	--	1.0	--	"
78	6.46	--	--	--	--	一部区外
79	6.46	--	--	--	1.3	部分的抽出
80	6.44	--	--	--	--	"
81	6.45	--	--	--	--	"
82	6.55	--	--	--	--	一部区外
83	6.48	--	--	--	--	部分的抽出
84	6.56	--	--	--	1.9	一部区外
85	6.27	推 8.9	長方形	4.4	1.8	部分的抽出
86	6.21	推 6.4	長方形	3.0	2.0	"
87	6.17	--	--	--	--	"
88	6.39	--	--	--	--	一部区外
89	6.29	推 8.7	長方形	3.5	2.3	一部抽出不可
90	6.15	推 5.4	長方形	3.4	1.8	"
91	6.08	--	台形	--	2.2	部分的抽出
92	6.23	--	台形	--	1.7	一部区外
93	6.17	--	--	--	1.4	部分的抽出
94	6.22	--	--	--	(1.5)	一部区外
95	6.15	--	--	--	(1.5)	部分的抽出
96	6.22	--	--	--	(2.1)	一部区外
97	6.15	--	--	--	1.3	部分的抽出
98	6.23	--	--	--	1.1	一部区外

水田計測表 (10区 36層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	6.77	--	--	--	--	大規模区画
2	6.75	--	--	--	--	"
3	6.65	--	--	--	--	浸食
4	6.63	--	--	--	(1.4)	一部区外
5	6.67	--	長方形	--	1.5	浸食
6	6.65	2.3	台形	1.6	1.3	"
7	6.66	推 2.9	正方形	1.7	1.6	"
8	7.62	--	--	--	--	一部区外
9	7.66	--	(長方形)	(2.3)	--	浸食
10	6.67	4.2	長方形	2.8	1.4	"
11	7.67	3.6	長方形	2.4	1.3	"
12	7.62	--	--	--	--	一部区外
13	7.68	--	--	--	--	浸食
14	6.65	--	長方形	--	1.6	一部区外
15	6.67	--	--	--	--	"
16	6.86	--	--	--	--	部分的抽出
17	6.85	2.9	台形	2.1	1.2	"
18	6.84	--	長方形	--	1.3	部分的抽出
19	6.80	--	--	--	--	"
20	6.85	--	--	--	--	一部区外
21	6.86	--	--	--	1.1	部分的抽出
22	6.86	2.9	台形	2.1	1.5	"
23	6.83	2.4	長方形	1.7	1.3	"

第88表 10区水田計測表 1

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
24	6.84	2.3	長方形	1.6	1.3	
25	6.83	推 3.6	長方形	2.3	1.3	
26	6.79	--	--	(1.6)	--	部分的抽出
27	6.77	--	--	--	--	"
28	6.88	--	--	(1.6)	--	一部区外
29	6.86	3.0	正方形	1.7	1.5	
30	6.84	2.7	台形	1.8	1.3	
31	6.84	2.5	台形	1.7	1.5	
32	6.84	推 4.8	台形	2.9	1.7	一部トレンチ
33	6.83	推 3.5	台形	2.0	1.4	一部トレンチ・浸食
34	6.80	3.2	正方形	1.8	1.7	"
35	6.73	--	(長方形)	--	1.6	部分的抽出
36	6.83	--	--	--	--	一部区外
37	6.83	--	長方形	2.9	1.4	部分的抽出
38	6.83	7.2	長方形	3.2	2.2	
39	6.82	--	長方形	4.9	1.8	部分的抽出
40	6.84	--	--	--	--	"
41	6.86	--	--	--	2.6	"
42	6.84	3.6	長方形	2.5	1.4	
43	6.81	3.4	台形	2.0	1.5	
44	6.78	--	--	--	1.6	部分的抽出
45	6.89	--	--	--	(2.2)	"
46	6.91	2.9	長方形	1.9	1.4	
47	6.89	4.0	長方形	2.2	1.6	
48	6.84	--	--	--	--	部分的抽出
49	6.86	--	(長方形)	--	1.4	"
50	6.83	--	(長方形)	1.7	1.4	"
51	6.82	--	--	--	(1.6)	"
52	6.92	--	(長方形)	--	0.9	"
53	6.93	1.4	正方形	1.2	1.0	
54	6.87	--	(長方形)	2.1	--	部分的抽出
55	6.85	--	--	--	1.3	"
56	6.81	--	--	--	--	"
57	6.80	--	--	--	--	"
58	6.99	--	--	--	1.6	"
59	6.95	4.7	長方形	2.6	1.6	
60	6.89	--	--	--	1.4	部分的抽出
61	6.89	--	--	--	--	"
62	6.96	--	--	--	--	"
63	6.94	--	--	--	--	"
64	6.94	--	--	--	--	"
65	6.91	--	--	--	--	"
66	6.88	--	--	--	--	部分的抽出
67	6.91	--	--	--	--	"
68	6.59	--	--	--	--	"
69	6.59	--	--	--	--	"
70	6.55	--	--	--	--	"
71	6.55	--	--	--	--	"
72	6.52	--	(長方形)	(2.3)	(2.4)	"
73	6.53	--	--	--	(2.3)	"
74	6.51	--	--	2.5	2.3	"
75	6.43	--	(長方形)	3.4	1.9	"
76	6.48	--	--	--	1.9	一部区外
77	6.45	--	台形	3.3	(2.3)	部分的抽出
78	6.40	--	--	--	1.6	"
79	6.45	--	台形	--	1.9	"
80	6.40	--	--	--	2.0	"
81	6.53	--	--	--	--	一部区外
82	6.45	--	正方形	--	--	"
83	--	--	--	--	--	" 大規模区画
84	6.35	--	--	--	--	"
85	6.40	--	--	--	--	"

水田計測表 (10区 33層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考	
1	6.80	--	--	--	--	一部区外・浸食	
2	6.87	--	--	--	--	"	
3	6.81	--	--	--	--	"	
4	6.88	--	--	--	--	"	
5	6.89	--	--	--	--	"	
6	6.95	--	--	--	--	"	
7	6.92	--	(長方形)	(6.0)	2.5	"	
8	7.10	--	(長方形)	--	2.6	"	
9	7.05	9.4	台形	3.3	2.5		
10	6.90	14.2	台形	4.5	3.2		
11	7.15	--	(長方形)	--	2.5	一部区外	
12	7.14	6.5	正方形	2.5	2.5		
13	7.05	15.2	台形	5.0	2.6		
14	6.95	7.6	台形	2.9	1.7		
15	7.14	--	--	--	3.9	一部区外	
16	7.17	13.1	長方形	4.3	3.0		
17	7.14	推 12.5	台形	4.3	2.4		
18	7.05	推 13.8	正方形	3.7	3.6		
19	7.00	--	(正方形)	3.3	2.7	浸食	
20	7.22	--	長方形	--	1.5	一部区外	
21	7.34	1.3	長方形	1.6	0.7		
22	7.23	3.6	長方形	2.1	1.6		
23	7.20	5.5	長方形	3.3	1.7		
24	7.10	16.6	台形	5.2	3.2		
25	7.05	--	--	--	4.9	浸食	
26	7.31	--	--	--	(3.5)	一部区外	
27	7.35	8.0	台形	3.5	1.8		
28	7.28	1.4	長方形	1.6	0.7		
29	7.27	3.5	長方形	2.2	1.5		
30	7.25	4.8	台形	3.5	1.0		
31	7.23	--	長方形	(3.9)	(1.5)		
32	7.22	--	--	--	3.4	一部トレンチ	
33	7.22	16.4	長方形	4.6	3.3		
34	7.20	推 15.0	台形	4.3	3.1		
35	7.34	--	長方形	--	2.3	一部区外	
36	7.36	5.7	正方形	2.4	2.3		
37	7.33	5.0	長方形	2.4	2.0		
38	7.30	--	台形	(4.0)	1.8		
39	7.40	--	--	--	1.4	一部区外	
40	7.42	2.1	正方形	1.5	1.3		
41	7.43	3.6	長方形	2.3	1.6		
42	7.38	4.5	長方形	2.5	1.6		
43	7.32	6.7	長方形	3.4	1.9		
44	7.27	5.5	長方形	3.3	1.6		
45	7.27	--	--	--	--	浸食	
46	7.43	--	--	--	(1.9)	一部区外	
47	7.47	3.1	長方形	2.0	1.5		
48	7.42	3.9	台形	2.1	1.8		
49	7.40	5.2	正方形	2.4	2.1		
50	7.39	7.5	長方形	3.4	2.2		
51	7.32	--	--	--	--	浸食	
52	7.25	--	--	--	--	"	
53	7.40	--	--	--	(1.8)	一部区外	
54	7.40	2.5	長方形	1.9	1.2		
55	7.38	4.4	台形	2.5	1.8		
56	7.34	推 3.7	--	--	2.1	1.6	浸食
57	7.35	推 6.8	長方形	3.3	2.0		
58	7.35	--	(台形)	--	2.0	一部区外	
59	7.36	4.8	台形	2.4	2.1		
60	7.34	8.4	長方形	4.4	1.9		
61	7.27	4.5	台形	2.7	1.5		
62	7.36	--	--	--	1.6	一部区外	

第89表 10区水田計測表 2

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
63	7.35	4.7	台形	2.5	1.5	
64	7.30	11.6	台形	5.8	2.1	
65	7.27	9.1	台形	4.1	2.2	
66	7.38	—	—	—	1.8	一部区外
67	7.35	3.5	長方形	2.0	1.7	
68	7.30	9.9	長方形	5.2	1.9	
69	7.30	推 4.8	—	—	2.2	浸食
70	7.34	—	—	—	—	一部区外
71	7.39	推 3.8	正方形	1.9	1.9	—
72	7.32	11.6	台形	4.9	1.9	
73	7.30	推 5.1	(長方形)	(2.4)	—	浸食
74	7.47	—	—	—	(1.9)	一部区外
75	7.41	—	長方形	—	2.1	浸食
76	7.38	—	—	—	—	一部区外
77	7.45	—	—	—	—	—
78	7.45	—	—	—	—	—
79	6.80	—	—	—	—	大規模区画
80	6.70	—	—	—	—	—

水田計測表 (10区 31b 層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	6.95	—	—	—	1.9	一部区外
2	6.90	—	—	—	—	—
3	6.98	4.8	台形	2.5	1.5	
4	7.00	3.5	長方形	2.0	1.6	
6	7.01	—	—	—	—	一部区外
6	7.00	2.4	台形	2.1	1.1	
7	7.02	4.2	長方形	2.9	1.0	
8	7.03	—	—	—	—	一部区外
9	7.03	—	—	—	—	—
10	7.02	—	—	—	(3.0)	部分的検出
11	7.05	—	—	—	(3.3)	—
12	7.04	—	—	—	—	一部区外

水田計測表 (10区 31a 層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	7.25	—	—	—	—	大規模区画だけの検出
2	7.55	—	—	—	17.5	—
3	7.60	—	—	—	—	—
4	7.50	—	—	(37.5)	—	—
5	7.40	—	—	—	—	—

水田計測表 (10区 28層水田)

No.	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	7.88	—	—	—	(3.8)	一部区外
2	7.85	—	—	—	2.8	—
3	7.84	—	—	—	—	—
4	7.83	—	—	—	—	浸食
5	7.92	44.0	正方形	8.0	6.3	一部浸食・分割可?
6	7.82	—	—	—	—	一部区外・浸食
7	7.88	—	—	—	—	—
8	7.83	推 10.9	長方形	—	—	浸食
9	7.91	—	(長方形)	—	2.5	一部区外
10	7.87	—	—	—	—	浸食
11	7.84	—	—	—	—	—
12	7.87	—	—	(6.5)	(3.3)	—
13	8.14	—	—	—	2.3	一部区外
14	8.09	推 9.2	長方形	(3.6)	2.2	浸食
15	7.95	推 27.0	(長方形)	(11.4)	2.5	3区画分割可?
16	7.91	—	(長方形)	—	2.5	—
17	8.06	—	—	—	—	一部区外
18	7.98	—	—	—	—	浸食
19	8.08	—	—	—	—	—
20	8.00	推 8.5	—	—	3.0 2.8	浸食
21	8.05	7.7	長方形	3.1	2.1	
22	8.04	8.8	台形	3.8	1.6	
23	8.06	12.1	正方形	3.7	3.3	
24	8.08	—	—	—	2.8	一部区外
25	8.04	—	—	—	—	浸食
26	8.11	推 5.8	正方形	2.6	2.1	浸食
27	8.15	10.0	台形	3.5	2.7	
28	8.10	推 11.9	台形	4.2	2.8	
29	8.10	推 9.3	長方形	3.5	2.6	
30	8.10	8.8	台形	3.1	2.0	
31	8.13	6.4	長方形	3.6	1.6	
32	8.13	—	—	—	1.7	一部区外
33	8.16	推 4.8	長方形	—	3.6 1.0	
34	8.18	6.0	長方形	3.1	2.0	
35	8.16	7.4	長方形	3.5	2.1	
36	8.15	推 7.1	正方形	2.7	2.4	一部区外
37	8.17	—	—	—	—	—
38	8.19	8.0	長方形	3.5	2.0	
39	8.16	8.4	長方形	3.5	2.5	
40	8.15	11.5	長方形	3.8	2.7	
41	8.17	7.7	台形	3.7	1.7	
42	8.19	5.4	長方形	3.9	1.7	
43	8.16	—	—	—	2.8	—
44	8.16	6.3	長方形	3.4	1.8	
45	8.14	—	—	—	—	一部区外
46	8.21	—	—	(3.1)	—	—
47	8.18	推 7.6	長方形	2.8	2.4	一部トレンチ
48	8.15	—	長方形	—	2.1	一部区外
49	8.19	14.4	台形	4.6	2.8	
50	8.21	18.4	長方形	4.8	3.5	
51	8.17	9.1	長方形	3.5	2.5	
52	8.21	推 7.7	長方形	3.6	1.9	
53	8.22	—	(長方形)	—	1.9	—
54	8.28	—	長方形	—	—	一部区外
55	8.25	8.4	長方形	3.6	2.2	
56	8.30	8.4	長方形	3.1	2.3	
57	8.28	—	—	(2.8)	—	一部区外
58	8.27	—	(長方形)	—	2.9	—
59	8.27	7.1	長方形	3.6	1.5	
60	8.28	7.1	長方形	3.6	1.6	
61	8.30	5.0	長方形	2.9	1.3	
62	8.32	8.5	長方形	3.4	2.3	

第90表 10区水田計測表 3

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
63	8.27	--	--	--	2.0	一部区外
64	8.35	8.1	台形	3.3	2.3	
65	8.33	10.7	長方形	3.8	2.9	
66	8.32	5.0	長方形	3.0	1.1	
67	8.30	4.3	長方形	3.1	(1.4)	一部トレンチ
68	8.28	7.3	長方形	3.3	2.0	
69	8.21	--	(長方形)	4.9	2.3	一部区外
70	8.15	--	--	--	(2.1)	#
71	8.13	--	--	--	--	#
72	8.37	--	--	--	3.4	#
73	8.35	6.6	台形	3.2	1.7	
74	8.31	9.0	長方形	3.9	2.3	
75	8.28	推 8.8	長方形	3.5	2.4	
76	8.17	推 9.0	正方形	3.0	2.7	
77	8.13	10.1	台形	3.8	2.7	
78	8.12	15.3	正方形	3.9	3.9	
79	8.06	--	--	(3.4)	--	一部区外
80	8.30	--	(正方形)	3.1	3.0	#
81	8.21	11.9	台形	3.9	2.6	
82	8.15	推 9.7	台形	3.4	2.6	
83	8.05	推 5.9	正方形	2.5	2.4	
84	8.01	14.6	長方形	4.9	3.0	
85	8.05	17.6	正方形	4.3	3.8	
86	8.02	--	--	4.0	--	一部区外
87	8.19	--	--	--	--	#
88	8.16	8.3	長方形	3.4	2.1	
89	8.06	5.5	長方形	3.3	1.6	
90	8.03	4.4	台形	2.3	1.9	
91	8.20	推 6.6	長方形	3.2	1.9	
92	8.12	9.7	長方形	3.4	2.7	
93	8.06	6.4	台形	3.1	2.1	
94	8.07	7.1	長方形	2.9	2.3	
95	8.10	--	(長方形)	3.6	2.3	一部区外
96	--	--	--	--	--	#
97	8.27	--	--	3.2	--	#
98	8.22	12.0	正方形	3.6	3.3	
99	8.21	9.1	台形	3.7	2.6	
100	8.24	--	(長方形)	4.1	3.2	一部区外
101	--	--	--	--	--	#
102	--	--	--	--	--	#
103	8.33	--	--	3.0	2.4	
104	8.36	--	--	(2.7)	2.3	一部区外
105	8.35	--	--	--	--	#
106	8.35	--	--	--	--	#

水田計測表 (10区 23層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
1	7.94	--	--	--	(2.7)	一部区外
2	8.04	--	--	--	2.8	#
3	8.06	--	--	--	2.8	#
4	8.05	推 13.3	台形	4.5	2.6	
5	8.00	推 11.1	長方形	4.2	2.0	
6	7.95	推 6.8	台形	3.9	1.8	
7	8.10	--	--	(3.0)	--	一部区外
8	8.07	--	--	--	--	#
9	8.05	--	--	3.8	2.3	
10	7.91	5.5	長方形	2.5	1.7	
11	7.86	推 10.8	長方形	3.9	2.7	一部トレンチ
12	7.95	推 8.8	台形	3.7	2.8	
13	7.95	推 11.4	台形	--	2.5	
14	8.12	推 5.4	台形	2.8	2.0	
15	8.13	--	--	--	--	一部区外

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備 考
16	8.00	--	--	--	--	一部区外
17	8.21	--	--	--	--	浸食
18	7.95	推 11.7	台形	3.6	2.4	
19	8.10	--	--	(3.8)	--	一部区外
20	8.35	26.8	台形	7.3	3.0	
21	8.31	15.8	台形	4.7	3.1	
22	8.30	21.5	台形	5.3	3.4	
23	8.33	--	--	(4.8)	--	一部区外
24	8.44	--	--	6.0	--	#
25	8.42	27.7	台形	8.9	2.3	
26	8.42	17.6	扇形	5.7	--	
27	8.43	推 17.7	長方形	5.7	3.8	
28	8.42	16.3	正方形	4.2	3.9	
29	8.41	--	--	(4.2)	--	一部区外
30	8.48	13.4	台形	4.3	4.0	
31	8.50	14.7	台形	4.5	3.2	
32	8.53	11.4	台形	3.4	3.0	
33	8.50	--	(台形)	3.9	(3.1)	一部区外
34	8.49	--	--	--	--	#
35	8.49	--	--	--	4.3	#
36	8.57	19.3	--	5.5	3.6	
37	8.55	推 19.6	長方形	4.6	3.7	
38	8.61	推 12.0	正方形	3.9	3.3	
39	8.56	--	--	--	(3.2)	一部区外
40	8.57	--	--	--	--	#
41	8.61	20.4	長方形	6.4	2.9	
42	8.68	10.4	長方形	(4.7)	2.3	
43	8.54	9.2	長方形	3.6	2.4	
44	8.47	--	(正方形)	3.1	2.8	一部区外
45	8.42	--	--	(3.1)	--	#
46	8.37	--	--	--	--	#
47	8.58	--	(台形)	--	3.9	一部区外
48	8.49	21.1	長方形	(6.0)	2.9	一部トレンチ
49	8.45	15.9	長方形	5.9	2.3	
50	8.42	--	--	(5.4)	--	一部区外
51	8.37	22.9	台形	5.2	4.2	
52	8.35	推 16.2	長方形	4.6	3.4	
53	8.25	22.6	長方形	5.4	3.9	
54	8.34	22.3	台形	6.3	3.2	
55	8.29	--	--	(5.3)	--	一部区外
56	8.42	--	--	--	--	#
57	8.37	19.6	長方形	5.0	3.8	
58	8.28	12.0	正方形	3.8	3.6	
59	8.19	12.1	長方形	4.5	2.3	
60	8.22	推 11.5	長方形	4.3	2.7	
61	8.16	--	--	--	2.1	一部区外
62	8.42	--	--	--	3.6	#
63	8.34	15.5	長方形	4.7	3.3	
64	8.27	--	--	--	3.7	一部区外
65	8.47	--	--	--	--	#

第91表 10区水田計測表 4

水田計測表 (10区 19層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	8.92	--	--	--	--	一部区外
2	8.84	--	--	--	--	"
3	8.92	--	--	--	--	"
4	8.83	--	--	--	--	"
5	8.75	--	--	--	--	"
6	8.82	--	--	--	--	"
7	8.84	--	--	--	5.7	"
8	8.78	--	--	--	--	"
9	8.75	--	--	--	--	"
10	8.64	--	--	--	--	"

水田計測表 (10区 16層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.26	--	--	--	--	一部区外
2	8.25	--	--	(9.6)	--	"
3	9.15	--	--	--	--	"
4	9.21	--	--	9.4	4.5	"
5	9.16	--	--	--	--	"
6	9.30	--	--	--	6.7	"
7	9.27	48.0	正方形	7.0	6.7	"
8	9.23	56.9	台形	9.4	4.2	"
9	9.24	--	--	--	4.4	一部区外・浸食
10	9.16	--	--	(11.2)	--	"
11	9.14	--	--	10.5	5.7	一部雑草
12	9.11	--	--	--	--	"
13	9.25	--	--	--	4.6	一部区外
14	9.23	36.1	台形	7.0	4.4	"
15	9.30	--	(正方形)	6.5	(6.4)	一部区外
16	9.18	--	長方形	(6.7)	(4.6)	"
17	9.14	--	--	--	--	"
18	9.13	--	--	--	5.7	"
19	9.13	--	--	--	4.0	"
20	9.15	--	--	--	--	"
21	9.12	--	--	--	4.1	"
22	9.12	--	--	--	7.1	"
23	9.22	--	--	--	--	"
24	9.20	--	--	--	--	"
25	9.22	--	--	--	--	"
26	9.14	--	--	--	--	"

水田計測表 (10区 14b層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.47	--	--	--	--	一部区外
2	9.36	--	--	--	11.5	"
3	9.28	141.3	長方形	13.6	8.8	"
4	9.14	--	--	--	9.3	一部区外

水田計測表 (10区 14a層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	9.62	--	--	--	7.3	一部区外
2	9.78	--	--	--	--	"
3	9.70	--	--	(12.8)	7.6	"
4	9.72	102.9	台形	12.4	7.1	"
5	9.69	--	--	(10.5)	4.9	一部区外
6	9.67	--	--	--	4.9	"
7	9.60	--	--	--	--	"
8	9.42	--	--	--	3.0	"
9	9.67	--	--	--	3.3	"
10	9.63	32.5	長方形	12.5	2.1	"
11	9.51	37.1	(長方形)	10.3	2.1	"
12	9.46	19.7	三角形	--	3.8	変形
13	9.58	--	--	--	11.4	"一部区外
14	9.45	推147.5	長方形	13.8	9.0	"
15	9.33	--	--	--	3.1	変形
16	9.25	--	--	--	--	一部区外
17	9.34	--	--	--	4.5	"
18	9.62	--	--	--	4.8	"
19	9.87	24.2	亀甲形	5.6	4.0	"
20	9.58	--	(長方形)	14.8	4.1	一部区外
21	9.48	--	--	--	--	"
22	9.75	--	--	--	--	"
23	9.65	推 82.1	(亀甲形)	9.5	7.8	一部浸食
24	9.66	14.8	亀甲形	4.8	2.9	"
25	9.65	--	(亀甲形)	--	6.1	一部区外
26	9.61	26.0	亀甲形	7.6	3.6	"
27	9.63	--	--	(6.9)	5.2	浸食
28	9.53	--	--	--	--	一部区外
29	9.78	--	--	--	--	"
30	9.67	--	--	--	--	"
31	9.73	--	--	--	--	"

水田計測表 (10区 9層水田)

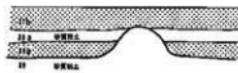
No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	10.34	--	--	--	--	部分の検出
2	10.33	--	--	--	--	"

水田計測表 (10区 6層水田)

No	標高 m	面積 m ²	平面形	最長辺 m	短辺 m	備考
1	10.71	--	--	--	--	一部区外
2	10.76	--	--	--	--	"
3	10.78	--	(長方形)	--	9.6	"
4	10.78	--	(長方形)	--	9.8	"
5	10.75	--	(長方形)	--	9.3	"
6	10.90	--	(長方形)	--	13.2	一部雑草
7	10.87	推187.4	正方形	14.4	13.0	一部区外
8	10.87	--	--	--	--	"
9	10.98	--	--	--	15.3	一部雑草
10	10.92	--	--	15.2	--	一部試掘坑
11	10.93	--	--	--	--	"
12	11.10	--	--	--	--	一部区外
13	11.04	--	--	--	10.0	"
14	11.02	--	--	--	--	"

第92表 10区水田計測表 5

瀬名遺跡 10区 39層水田（時期 弥生時代中期後半）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	中央部STⅡの地形が高く、水路SD103901を境に東へ、大規模な畦畔SK103903を境に西へ、それぞれ低くなっていく。東へ傾斜約10cm/10m。西へ傾斜約20cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約700㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	粘質砂。黒泥質を含む。
	⑤ 水田土壌	茶黒色色泥混じり砂質粘土。厚さ約10~20cm。黒泥質強い。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> ① 2,200個/g ② 8,800個/g ※10区の水田跡のうち最高値。
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔と小規模な畦畔、水路の境を兼ねたものもある。大きな畦畔は下端幅約250cm、高さ約20cm。小さな畦畔は下端幅約50~70cm、高さ約5cm。水路の境を兼ねた畦畔は、下端幅約180cm、高さ約30cm。
	⑨ 畦畔の構造	全て盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な区画をつかって、その内側を小規模な区画で細分するタイプ。地形の変換点で大規模な畦畔をつくらせている。小規模な区画は、東西方向の畦畔がはっきりせず、南北方向を基軸にして区画された可能性がある。小規模な区画は、大規模な畦畔とはつながり距離をおいている。小規模な区画が一時的季節的なもののためか。
	⑪ 水田区画の形	大規模な区画毎に内側の小規模な区画の形が異なる。中央部STⅡでは正方形から東西に若干長い長方形。西側STⅢでは南北に長い長方形。畦畔の交差は直交するが、角が丸みを帯びている。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	82枚。うち面積の確認できるもの39枚。最大約10㎡。最小約1㎡。平均約3㎡。地形の高い中央部のSTⅡが特に小規模で、水路の境との間の部分を除けば平均約2㎡ほど。地形の低い東と西のSTⅠ、STⅢは若干大きめ。
	⑬ 田面の状態	足跡はSTⅢに多いが、水路の両側と大規模な畦畔の周辺には、南北方向に歩行した跡が溝状にたついている。
	⑭ 水源	水路SD103901。北から南へと流れていたようである。
遺物の種類	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	SD103901。両岸に畦畔を兼ねた盛土による堤を伴う。
	⑰ 水口	なし。東側のSTⅠに畦畔の途切れる区画がみられるが、はっきりしない。小規模な区画は、オーバーフロー式の水まわしだったのか。
年代観	⑱ 年代推定の根拠	畦畔中に埋められていた土器片は、有東式を特長付けるスタイルと甕い器描文をもつ壺になった。
遺物の種類	⑲ 隣接区との対応関係	東隣9区41層方周溝墓。周溝内出土の土器に同時期のものがある。
	⑳ 自然科学的分析	
	㉑ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 粘質砂層に被覆されており、畦畔の高まりは土層断面でも平面でもはっきり確認できた。水路を備え、大規模な畦畔と小規模な畦畔の差異の明確な、整った状態の水田といえる。 プラントオーバーも非常に高値を示した。

第93表 10区水田観察表1

瀬名遺跡 10区 36層水田(時期 弥生時代後期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	中央から西側へ、S K103605以西が約40cmの段差をもって低くなっている。中央から南東へ、S K103602以南が次第に低くなっていく。傾斜約15cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約750㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。35層耕作土直下。西側(S K103605以西)のみ砂・礫が被覆。
	⑤ 水田土壌	褐灰茶色砂混じり砂質粘土。厚さ約10~15宍。上層は粘性強く、下層ほど砂質強い。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> ① 1,700個/8 ② 2,000個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔と小規模な畦畔、そしてその中間にあたる畦畔がある。大きな畦畔は下端幅約100~200cm、高さ約15~30cm、小さな畦畔は下端幅約50~70cm、高さ約2~3cm、中間的なものは大規模な畦畔から枝分かれして、途中で小規模な畦畔にかわってしまふ。
	⑨ 畦畔の構造	大規模な畦畔には部分的に杭列を伴う。杭は広葉樹材が中心で、短いものが多く、間隔を空けて打たれたものが多い。小規模な畦畔は全て盛土のみでつくられていた。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な区画をつくり、その内側を小規模な区画で細分するタイプ。大規模な畦畔は地形の変換点につくられ、地形に比じた水田区画。段差の境にあたる畦畔には集中的に杭列がある。その内側はほぼ均一に蕃登目状に細分している。形はほぼ均一だが、大規模な区画毎に、内側の小規模な区画の規模は異なる。
	⑪ 水田区画の形	ほぼ均一で、正方形から若干北に長い長方形。畦畔の交差は直交するものが多い。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	82枚。うち面積の確認できるもの22枚最大約7㎡。最小約1㎡。平均約3㎡。地形の低い西側STVと南東STIの区画の規模が大きい。
	⑬ 田面の状態	足跡は全面に見られるが、特に地形の低いSTV、STIが多い。
	⑭ 水源	不明。
遺物の種類	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	不明。しかし大規模な畦畔の脇の溝S D103601やS K103602南側の侵食痕跡は、大規模な区画の枠に沿って水が流れていたことを示すものと考えられる。
	⑰ 水口	なし。
年代観	⑱ 遺物の種類	弥生土器細片32片。
	⑲ 年代推定の根拠	出土した弥生土器片には古い要素はみられず、壺口縁や貼文等に後期に特徴的なものがあった。
	⑳ 隣接区との対応関係	東隣9区40層水田。S字口縁の壺を伴う段階まで踏襲される杭列畦畔をもち、更に広葉樹の多い杭列の材質が類似。
遺構確認面とその図	㉑ 自然科学的分析	
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 33層、35層とは同位置に大規模な畦畔があったが、36層は盛土のピークが若干ずれていた。杭列も短く、広葉樹材が多く特徴的であった。粘性の強い36層の耕作土は35層と分層が容易で、畦畔の高まりは低かったものの、水田面はある程度はっきりと検出できた。

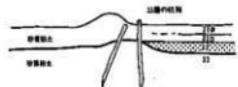
第94表 10区水田観察表2

瀧名遺跡 10区 35層水田(時期 弥生時代後期～古墳時代初頭)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	不明。平面的に調査せず。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面と推定される。約850㎡。
土層の状況	④ 直上の層の土壌	東側では粘質砂。33層水田耕作土直下にあたり、分層が困難。西側では砂・礫。西側ほど厚い洪水堆積層で、35層の土壌を削り取っている。
	⑤ 水田土壌	茶灰青色粘質砂。厚さ約5～10cm。西側では34層を運んだ洪水流が削平し、東側では33層と分層困難。全体にグライ化している。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 5cm間隔で採取。 ① 0個/8 ② 400個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。
	⑧ 畦畔の規模	不明。杭列のみ確認された。
	⑨ 畦畔の構造	大規模な畦畔には、杭列を伴っていたであろう。1列または2列で、横板をすき間なく並べてそれを支えるために杭を打っている部分もある。一か所(S K103503南側)のみ矢板列あり。杭は杉材が多く、33層のものより若干短め。横板はほとんどが建築部材の転用。
水田区画の状況	⑩ 水田区画の方法	不明。大規模な区画のみの確認。大規模な畦畔の位置は完全に下層36層の踏襲。36層の区画を補修して利用している段階。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状況	⑬ 田面の状態	不明。
	⑭ 水源	調査区西端、S K103506の延長上に堰と考えられる部分があり、南北方向の水の流れがあって、畦畔杭列の延長にそのまま堰があったと考えられる。
	⑮ 自然水路	不明。
遺物の種類	⑯ 水路	不明。
	⑰ 水口	不明。
	⑱ 遺物の種類	35層中からは、弥生土器片15片。杭列の間から、鳥形木製品、網代の破片が出土している。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	異物からは推定できず、層的に考える。36層水田から33層水田にかけて全く同じ位置の畦畔を補修して利用しており、その間の段階として35層は位置付けられる。36層が弥生後期であるから、弥生後期～古墳初頭の幅の中には入るであろう。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。他調査区では、33層と36層に対応しそうな水田が確認されているが35層に対応するものはない。水田の補修の段階としてとらえ、遺構面として認定しなかった可能性もある。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 33層水田の大規模な畦畔を解体し、36層水田を調査しはじめる中で、33層と36層の中間の段階の杭列が確認された。広葉樹中心の36層のものは異なり、盛土の外側に「八」字に打ち込む長大な33層のものとも異なっていた。横板を伴うことを特徴とするこの杭列は、36層から33層にいたる水田区画の補修の一段階とも考えられる。

第95表 10区水田観察表3

瀬名遺跡 10区 33層水田(時期 弥生時代末～古墳時代初頭)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	西の地形が高く東へと低くなっていく。傾斜約16cm/10m。 北から南へと低くなっていく。傾斜約8cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約850㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。調査区南側にのみ洪水流による砂・礫が被覆するが、全体的には31層の耕作土の直下で、分層が困難であった。
	⑤ 水田土壌	青灰茶色粘質砂。厚さ約10～15cm。粘性は強い。地下水位が高かったのか、全体にグライ化。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 700個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂・砂。特に西側で厚く堆積しており、6層程に細分できる。数回の洪水流によるもの。
	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔、小規模な畦畔、そして中間的な規模の畦畔に分けられる。 大きな畦畔は下端幅約100～250cm、高さ約10～20cm。小さな畦畔は下端幅約50cm、高さ約5cm。 中間的なものは下端幅約50～200cm、高さ約10cm。
	⑨ 畦畔の構造	大規模な畦畔と中間的な畦畔は全て盛土の両側に2列、または中央に1列の杭列を伴う。杭はほとんど杉材の長いもの(最大3m以上)で敷材が角材である。盛土の南側ほど杭が長く密集している。小規模な畦畔は全て盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な区画をつくり、その内側を小規模な区画で細分するタイプ。大規模な区画は下層からの完全な階層。数回にわたって杭列・横板で補強し踏襲することに固執している。小規模な区画は地形に応じて規模をかえているが、平坦な部分ではほぼ均等に畦畔を直交させて細分している。
	⑪ 水田区画の形	小規模な区画は、大規模な畦畔を境にして規模と形が若干異なるが、同じ大規模な区画の中で地形変化が少なければほぼ均一な善盤目状に並んだ四角形。畦畔の交差は直交している。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	78枚。うち面積の確認できるもの45枚。最大約16㎡、最小約1㎡。平均約7㎡。 地形の最も高い部分に最も小さな区画、低い部分に大きな区画を配する。
	⑬ 田面の状態	調査区中央の大規模な区画STIVに足跡が集中するが、他にはほとんどみられない。
	⑭ 水源	不明。地形傾斜から考えると調査区北西方向からの水まわしが想定される。
遺物の種類	⑮ 自然流路	調査区南西外に流路が想定され、南側の畦畔の盛土や耕作土を洪水流が削平している。
	⑯ 水路	なし。
年代観	⑰ 水口	なし。北西方向からのオーバーフロー式の水まわしであったと考えられる。
	⑱ 遺物の種類	畦畔に伴う杭列には、田下駄、鎌等の農具、杭として転用された建築材が含まれる。 また畦畔中からはほぼ完形の甕も出土している。他に土器片が数片。
その他	⑲ 年代推定の根拠	瀬名遺跡他調査区にも同様の杭列畦畔をもち同一面としてとらえられる水田跡があり、S字状口縁の甕を出土させている。10区だけでは推定できないが、弥生末～古墳初頭。
	⑳ 隣接区との対応関係	東隣9区38層水田。特徴的な杭列畦畔から、瀬名遺跡全体を通じて同一面がとらえられる。
遺構確認面とその図	㉑ 自然科学的分析	
	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 調査区南西部にのみ、洪水流のたもたし砂層が被覆しており、杭列とそれに伴う畦畔の高まりが土層断面で確認された。また31a層水田上に頭を出していた杭列が31a層の畦畔とは位置のずれていることから、33層の畦畔を想定し調査した。上層31より砂質の強い粘質砂層であったので、耕作土として疑問があったが、平面的に、杭列を伴う大規模な区画と、善盤目状の小規模な区画が確認できた。

第96表 10区水田観察表4

瀬名遺跡 10区 31b層水田(時期 古墳時代初頭~中期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸には宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	不明。31a層と同様とは考えられる。
	③ 水田の範囲と面積	調査区東南隅の一部分のみ調査。他は分層できなかった。約100㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。部分的に薄い砂層をはさんでほぼ同質の31a層水田耕作土。
	⑤ 水田土壌	黒褐色黒泥・砂混じり砂質粘土。厚さ約10~20cm調査区東半のみ31a層さ分層できた。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 31層をa層とb層に分層する前に採取。①と②は10cm間隔。②が31b層にあたるか。 ① 800根/g 粟 ② 2,200根/g 粟
	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。部分的に砂層をはさむが、33層水田直上といえる。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	均一な小規模畦畔のみ確認された。下端幅約50cm、高さ約5cm。あまりはっきりしない。
	⑨ 畦畔の構造	盛土畦畔。一部、33層水田の大規模な畦畔の直上にあたる畦畔には丸太材が置かれていた。補強のための芯材であろう。しかし31a層上の水田区画が下層に反映しているだけの可能性もある。
	⑩ 水田区画の方法	畦畔の方向は、下層33層水田の大規模な畦畔を踏襲している。また、一部そのまま利用している33層水田の区画を踏襲・復旧した小規模な区画が広がっていた段階と考えられる。
	⑪ 水田区画の形	不揃いな四角形。畦畔の交差も丸味があり、はっきりしない形。
	⑫ 枚数と面積	12枚。うち面積の確認できるもの4枚。最大約5㎡。最小約4㎡。
	⑬ 田面の状態	足跡は全面にみられるが、特に畦畔に沿って溝状につながったものが多い。
用排水の状態	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
遺物	⑱ 遺物の種類	なし。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	上層31a層と下層33層との中間の段階、または31a層と同一面とみられ、どちらにしても古墳初~中のいずれかの段階。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 31a層との間に部分的に薄い砂層をはさんでいることから、調査区東南端のみ分層し調査できた。畦畔の高まりは土層断面でははっきりせず、平面的に調査してみてもわかった。高まりというより、水田面の無数の足跡がない部分をつなげると区画になったといつてよい。

第97表 10区水田観察表5

(10区)

瀬名遺跡 10区 31a層水田(時期 古墳時代初頭～中期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	西側の地形が高く東側へ低くなっていく。傾斜約10cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約1,000㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	黒泥。31a層の水田面には上層30b層・30c層からの木材の沈み込みが多かった。
	⑤ 水田土壌	黒褐色黒泥・砂混じり砂質粘土。厚さ約10～20cm。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 31層をa層とb層に分層する前に採取。①と②は10cm間隔。①が31a層にあたるか。 ① 800個/8 拵 ② 2,200個/8
	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。部分的に薄い砂層をはさんで、31a層とほとんど同質の31b層。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔のみ確認され下幅約150～200cm、高さ約15cm。東西方向が南北方向より若干規模が大きい。
	⑨ 畦畔の構造	盛土畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	大規模な区画のみ確認された。畦畔の方向は、東西方向、南北方向ともほぼ正方位である。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	大規模な区画のみ5枚。面積不明。
	⑬ 田面の状態	全面に足跡がみられる。
用排水の状態	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
遺物	⑱ 遺物の種類	土壌中からは一木匙、舟形、櫛状の木製品、水田面からは鉄鎌2本が出土。土器器細片は23片。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	水田面に伴う遺物だけでは推定できない。下層33層が古墳初頭頃までとすれば、31層は古墳初頭～中期のいずれかの時期。
	⑳ 隣接区との対応関係	東隣9区37層水田。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 黒泥層に全面が被覆され、土層断面でも平面でも明確に畦畔の高まりが確認された。東西、南北の畦畔の存在から水田と認定。

第98表 10区水田観察表6

瀬名遺跡 10区 30b層水田(時期 古墳時代中期)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	西側の地形が高く東側へと緩やかに低くなっていく。傾斜約10cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区西半。約550㎡。 東半は、木道状遺構が区画らしきものを示すが、明確に畦畔とは認定し得なかった。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	黒泥。未分解の植物質と粘質砂がラミナ状に堆積。
	⑤ 水田土壌	茶黒灰色黒泥湿り粘質砂。厚さ約20cm。 黒泥質非常に強い。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> ① 1,900個/区 30層は当初a層、b層、c層と分層しておらず10cm間隔で採取。②がb層にあたるか。 ② 600個/区 ③ 3,200個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	黒泥。未分解の植物質と粘質砂がラミナ状に堆積。下層ほど黒色強い。
	⑧ 畦畔の規模	大規模なもののみ。東西方向と南北方向では規模が異なる。東西方向、下端幅約350cm、高さ約15cm、南北方向、下端幅約150～250cm、高さ約15cm。
	⑨ 畦畔の構造	木道状に建築材等長大な木材を敷き並べた上に盛土。 東西方向の畦畔の南北方向との交差部近くに、盛土の両側に数本ずつの杭列あり。
	⑩ 水田区画の方法	湿地上に木材を敷き並べ、木道のようなものを大きな区画を意図して配置する。それを芯材にして盛土をし、湿地上に水田をつくっていったと考えられる。東西方向が基軸であったのであろう。
	⑪ 水田区画の形	不明。 大きな区画の一端のみ。
用排水の状況	⑫ 枚数と面積	2枚。
	⑬ 田面の状態	非常に黒泥質が強く、軟弱な地盤。足跡等は確認されなかった。
	⑭ 水源	不明。
遺物の状況	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
年代観	⑱ 年代推定の根拠	木道状遺構には、屋根の垂木等の建築材、田下駄、鍬等の農具が多数含まれていた。また2ヶ所で木道端で割られたような状態の土師器壺・埴が出土。土師器は他にも細片で数点出土している。
その他	⑲ 隣接区との対応関係	30層中から出土した土師器片には、高坏、埴等に関連でいう「和泉」式の特徴をもつものがあり、古墳中期頃と推定した。 東隣9区の35層木道状遺構と同一面と考えられる。
	⑳ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉑ 水田遺構としての認定根拠	(横式図)  (説明) 黒泥質が非常に強く、耕作土の可能性は薄いと思われたが、木道状遺構に部分的に土盛がなされており、杭列も伴っていた。他調査区では木道状遺構のみ確認され、水田とは認定し難いが、10区ではこれを水田区画と認定したい。 プラントオーバーも高値を示している。

第99表 10区水田観察表7

瀬名遺跡 10区 26層水田（時期 古墳時代中期～平安時代）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	調査区中央部の地形が高く、東と西に向かって低くなっている。特に東側が低く、傾斜約10cm/10m。北から南に向かっても若干低くなっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約1,100㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	粘質砂。
	⑤ 水田土壌	茶褐色粘土。厚さ約20cm。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 5,400個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。
	⑧ 畦畔の規模	均一な規模の畦畔。下端幅約50cm、高さ約5cm。高さははっきりしなかった。ST5とST6の間の東西方向の畦畔のみ若干大きく下端幅約70cmであった。
	⑨ 畦畔の構造	盛土畦畔。ST25・26の東側には、南北方向の畦畔の延長線上に広葉樹の小杭列と丸太の芯材がある。ここだけ補強されたのであろう。
	⑩ 水田区画の方法	最も地形の高い中央部の区画が最も小規模で、低い東側、南側の区画が大規模である。畦畔の方向はほぼ正方位に揃っている。
	⑪ 水田区画の形	正方形から若干南北に長い長方形。畦畔の交差に規則性はなく、直交とも亀甲形ともいえない。
用排水の状態	⑫ 枚数と面積	106枚。うち面積の確認できるもの60枚。最大約44㎡。平均約10㎡。
	⑬ 田面の状態	足跡は全体に少なかったが、ST12・5・16では南北に歩行した足跡がつながって溝状になっている。調査区東側には、南北に流れた洪水流の侵食跡がある。
	⑭ 水源	不明。洪水流は北西から流れてきたとみられ、北西の方向に流路があると考えられる。
遺物の種類	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。オーバーフロー式の水まわしか。
年代観	⑱ 遺物の種類	畦畔上から田下駄1組、水田面から土師器細片数片出土。
	⑲ 年代推定の根拠	水田面に伴う遺物では推定できない。単に層序的に考えるならば、下層30B層が古墳中期に、上層23層が平安までなりそうなので、26層は古墳中期以降平安までのいずれかの時期。
その他	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 全体的に薄い粘質砂に被覆されていて、土層断面、平面でも畦畔の高まりと水田区画が確認された。しかし、畦畔の上端は23層水田耕作土の直下となっており、高まりはある程度23層の耕作によって巻き上げ削平されたと考えられる。 プラントオーバーも非常に高値を示した。

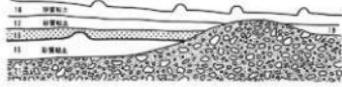
第100表 10区水田観察表 8

瀬名遺跡 10区 23層水田（時期 古墳時代後期～平安時代）

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。	
	② 地形面の変化	調査区中央部地形が高く東と西に低くなっている。傾斜東へ約30cm/10m。特にS D102301とその地以东で一段低くなっており、50cm近く低くなっている。北から南へも若干低くなる。	
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約1,200㎡。	
	土層の状態	④ 直上の層の土壌	礫・粘質砂。最大120cmもの厚さがある。東側ほど厚い礫層の下、薄い粘質砂層が全面を覆う。激しい洪水による堆積と考えられる。
		⑤ 水田土壌	褐茶色砂質粘土。厚さ約20cm。
		⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 800個/8
		⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。
水田の状況	⑧ 畦畔の規模	大規模な畦畔と小規模な畦畔の2種類がある。大きな畦畔は下端幅約100～500cm、高さ約15～30cm。小さな畦畔は下端幅約50cm、高さ約15cm。大規模な畦畔には、水路の堤を兼ねるもの、幅は狭く高さがあるもの、幅は広くても低いもの等タイプがあり、規模は一定していない。	
	⑨ 畦畔の構造	大規模な畦畔8本のうち、3ヶ所で杭列を伴う。小杭を打つもの、小杭と先端のみを加工した小杭を併用したもの、立木と先端のみを加工した小杭を併用したものである。小規模な畦畔の中にも2ヶ所で杭列を伴う。こちらは加工された杉材の長い杭を使用している。	
	⑩ 水田区画の方法	大規模な畦畔による大きな区画をつくり、その内側を小規模な畦畔で更に細く区画している。大きな区画は地形に応じているようだが、小さな区画は畦畔がほぼ正方位を指向した碁盤目状。	
	⑪ 水田区画の形	大きな区画は地形に応じ様々であるが、小さな区画は正方形から若干南北に長い長方形。畦畔の交差は、東西方向のものが直交せず、南半方向が区画の基礎であると考えられる。	
	⑫ 枚数と面積	65枚。うち面積の確認できるもの36枚。最大約27㎡。最小約5㎡。平均約16㎡。S D102301とその堤を境にして、若干形態が異なる。東側は畦畔が低く幅広い。交差部には丸柱がある。	
	⑬ 田面の状態	足跡は南北に歩行するものが多く、特に水口を通っているものがみられる。S T57からS T61にかけて、南北方向に歩行するものが集中している。	
用排水の状態	⑭ 水源	S D102301により供給。ただし底のレベル差がなく、水の方は不明。	
	⑮ 自然流路	なし。	
	⑯ 水路	S D102301。両側に大規模な畦畔を兼ねた堤が設けられ、西側の大きな水田区画に対して水口が2ヶ所切られている。西側の水田へと水を供給していたと考えられる。	
⑰ 水口	10ヶ所。東西方向の畦畔に設けるものが大半で、位置は畦畔の中央か交差部脇。つくり方にし、完全に盛土を切断するタイプ、一方の側から一部を削るタイプがある。北から南へと水まわし。		
遺物	⑱ 遺物の種類	水田面から土師器片数片。またS T58とS T63の間の南北方向の畦畔上に立柱状の木製品がたてられていた。被覆していた礫・粘質砂中から、土師器片34片、須恵器4片、灰粘土1片。	
年代観	⑲ 年代推定の根拠	水田面に伴う遺物は少なく根拠は弱い。被覆する洪水堆積層から出土した多量の土師器片の中に灰粘土、新しいタイプの須恵器、土師器が含まれることから、古墳時代後期～平安とは考えられた。	
	⑳ 隣接区との対応関係		
その他	㉑ 自然科学的分析		
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図)  (説明) 洪水による厚い礫層と粘質砂層に全面が被覆され、非常に良好な残存状況であった。 土層断面でも平面でも明確な高さの畦畔が確認され、水路、水口を伴う整備された水田区画が横出された。	

第101表 10区水田観察表 9

瀬名遺跡 10区 19層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	19層の土壌は大半で失われているが、直下21層の砂・礫層のレベルから推定すると、東から西に向かって低くなっている。北から南に向かって若干低くなっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区の西半と東南隅のみ。約500㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	西半は粘質砂。東半は砂質粘土。16層水田の耕作土の直下といえる。
	⑤ 水田土壌	褐茶青色腐植混じり砂質粘土。調査区西半と東端にのみ存在。厚さ20cm以下。東半は直下の21層砂礫が高く盛り上がり、19層の土壌は直上16層水田の耕作により巻き上げられてしまったと考えられる。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> 800個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂・礫。東側で厚く高く堆積している。
	⑧ 畦畔の規模	鳥状微高地に隣接した大きめの畦畔とその他の同一規模の畦畔。大きな畦畔は下端幅約100cm、高さ約15cm、小さな畦畔は下端幅約50cm、高さ約10cm。鳥状微高地は下端幅約3m、高さ20cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
水田の状況	⑩ 水田区画の方法	南北方向の畦畔は基本的に真北から約40～45°西へ傾いている。鳥状微高地が調査区外西側へと更に延びているとすれば、東西方向の大きな畦畔の可能性もある。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	10枚。しかし面積の推定できるものなし。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	足跡は西半に線らに存在し、東南隅では確認できなかった。全体的に上層からの削平、巻き上げをうけている。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
遺物の状況	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	1ヶ所。ST3とST4の間の交差部横の東西方向の畦畔を切っつけている。
	⑱ 遺物の種類	水田面からは土師器細片数片。直上の粘質砂層中から土師器細片と曲物の底、換物皿といった木製品若干出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	水田面に伴う遺物は少なく、根拠に弱い。灰粒が出土しないが、木製品のパリエーションから平安時代とは考えられる。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 19層の土壌が残っている西半では、粘質砂に被覆され、畦畔の高まりが上層断面でも平面でも確認された。

第102表 10区水田観察表10

瀬名遺跡 10区 16層水田(時期 平安時代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	東と西から中央に向かって低くなっている。傾斜約10cm/10m。北から南に向かって若干低くなっている。傾斜約4cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面。約1,400㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	粘質砂。
	⑤ 水田土壌	暗茶褐色砂質粘土。厚さ約15~20cm。東側で厚い。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> 0個/区
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。
	⑧ 畦畔の規模	均一規模の畦畔で、下端幅約50~60cm、高さ約10cm。一部、南北方向の畦畔が肥大したような鳥伏微高地があり、下端幅約2~7m以上、高さ約10~15cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。洪水流に削平された部分に、東西方向の畦畔と同方向の小枕列が1ヶ所あり、畦畔の補強であったと考えられる。
	⑩ 水田区画の方法	地形の傾斜に応じて南北方向の畦畔がつけられているようだが、基本的に真北より約40~45°西へ傾く方向になっている。東西方向の畦畔が低くはつきりしないので区画の基軸は南北方向か。
	⑪ 水田区画の形	一定していない。正方形から南北に長い長方形が多い。畦畔の交差は東西、南北とも直交しない亀甲形。
	⑫ 枚数と面積	26枚。うち面積の確認できるもの8枚。平均は47㎡。最小約36㎡、最大約57㎡。しかし、100㎡を超える大規模なものもあり。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	調査区中央を南北に貫く洪水流の浸食痕があり、幅10m以上水田面を削平している。足跡は中央部の洪水流跡に不規則に密集しており、水田面には少ない。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
遺物	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	6ヶ所。鳥伏微高地南側に東西方向の溝が2本。ST13からST16にかけては、同様に東西方向の畦畔の中央が切れられ、北から南へと4枚の水田に水を通すようになっている。
	⑱ 遺物の種類	水田面からは須恵器・土師製の細片出土。直上の15層からは、串状の木製品数片、木葉片が出土。
年代	⑲ 年代推定の根拠	水田面に伴う遺物が少なく根拠に弱い。層序的なところから、大まかに平安時代。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(横式図) 
		(説明) 粘質砂層に全面的に被覆されており、土層断面、平面とも明確に畦畔の高まりが確認できた。 全く検出されなかったプラントオパールの値に反して、明確な水田区画が検出できた。

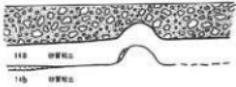
第103表 10区水田観察表11

瀬名遺跡 10区 14b層水田(時期 平安時代後半)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の变化	14a層と同様。一部を発掘し、全体は小トレンチで畦畔の位置を確認したのみなので、明確にはわからない。
	③ 水田の範囲と面積	調査区全面と推定される。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。部分的に薄い砂層を間にはさんでいるが、14a層耕作土直下といえる。
	⑤ 水田土壌	茶褐色砂質粘土。厚さ約15~20cm。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> 14a層と分層する前に採取。②が14b層にあたると思われる。 ① 0個/g ② 800個/g ※
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	粘質砂。
	⑧ 畦畔の規模	14a層と同様の規模で、下端幅約60cm、高さ約10cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	14a層とほとんど同様。しかし、一部で畦畔の位置が異なる。(14a層におけるS T13西側の畦畔、S T15とS T17の間の畦畔)
	⑪ 水田区画の形	14a層と同様。
用排水の状況	⑫ 水源	不明。
	⑬ 自然水路	なし。
	⑭ 水路	なし。
遺物	⑮ 水口	なし。
	⑯ 遺物の種類	水田面から、須恵器、土師器、灰釉それぞれの細片が数片出土。
年代観	⑰ 年代推定の根拠	遺物が少なく根拠に弱い。層序、遺物の形態から14a層とほぼ離れていない時期と考えられる。14a層以上の層には含まれなかった須恵器が出土している。
	⑱ 隣接区との対応関係	不明。
その他	⑲ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	⑳ 水田遺構としての認識根拠	(横式図)  (説明) 当初1つの層として認識していた14層は、部分的に砂層を間にはさみ、a層とb層に分層できることがわかった。b層には、土層断面からa層と同位置に畦畔があることがわかったが、工程面の関係上、調査区中央部のみを発掘し、他の部分は小トレンチを設定して畦畔の位置のみ確認した。

第104表 10区水田観察表12

瀬名遺跡 10区 14a層水田(時期 平安時代後半)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	東と西から中央に向かって低くなっている。傾斜約10cm/10m。水田が棚田状につくられている。北から南に向かって低くなっている。傾斜約7cm/10m。
	③ 水田の範囲と面積	調査区はほぼ全面。約1,300㎡。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂・礫。水田面に激しい浸食痕跡があり、北西からの洪水流によるものとみられる。
	⑤ 水田土壌	茶褐色砂質粘土。厚さ約15cm。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> 14b層と分層する前に採取。①が14a層にあたると思われる。 ① 0個/8畝 ② 800個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。部分的に薄い砂層をはさんでほぼ同質の砂質粘土層(14b層)。
	⑧ 畦畔の規模	全て同一規模の畦畔で下端幅約60cm、高さ約10cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
水田の状況	⑩ 水田区画の方法	地形の転換部に畦畔がつくられており、棚田状の水田区画になっている。区画は地形に応じて形状・規模が異なる。しかし南北方向の畦畔は基本的に真北より約45°西へ傾いている。
	⑪ 水田区画の形	地形に応じて不定。地形の低い部分、地形の転換部には小規模な区画があるようである。畦畔の交差は東西方向のものが直交しない亀甲型。
	⑫ 枚数と面積	31枚。うち面積の確認できるもの7枚。平均は54㎡だが、面積は一定しておらず、最小約18㎡、最大約150㎡である。
	⑬ 田面の状態	足跡はほぼ全面に広がっている。特に地形の低い中央を南北に横切っているものが多い。北西から南東の方向へ向かって洗れた洪水の浸食痕跡が3本みられる。
用排水の状態	⑭ 水源	不明。しかし地形の傾斜と洪水流の方向からみて、調査区の北西外あたりに流路が想定される。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	なし。
遺物	⑱ 遺物の種類	水田面から土師器、灰釉の細片数片出土。被覆している砂・礫層中からも土師器・灰釉の細本が出土。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	土師器、灰釉が出土し、須恵器と山茶碗がないことから、平安時代でも後半から鎌倉以前ぐらいと推定。しかし遺物が少なく、根拠が弱い。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
	(説明)	全面的に砂・礫に被覆されており、土層断面でも平面でも明確に畦畔が確認できた。 土壌のプラントオーバーは低値であったが、明確に水田区画が現れたことで認定。

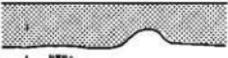
第105表 10区水田観察表13

瀬名遺跡 10区 9層水田(時期 中世~近世)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の变化	ほぼ全面的に平坦。
	③ 水田の範囲と面積	不明。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂質粘土。腐植質含む。
	⑤ 水田土壌	茶褐色砂・礫混じり砂質粘土。厚さ10~15cm。
	⑥ イネのプラントオパール	<C82地点> ① 1,400個/g ② 2,400個/g
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂。
	⑧ 畦畔の規模	畦畔1本のみ確認。下端幅約70cm、高さ約5cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	不明。
	⑪ 水田区画の形	不明。
	⑫ 枚数と面積	不明。
用排水の状態	⑬ 田面の状態	足跡等は確認されなかった。
	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
遺物	⑰ 水口	なし。
	⑱ 遺物の種類	宋銭「天禧通宝」(初鑄1017年)1、箸状木製品1、火きり臼1。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	上層8層から17C代のもともみられる茶碗片、宋銭「治平元宝」(初鑄1064年)が出土している。しかし遺物が少ないので、層序から中世~近世と幅広く考えたい。
	⑳ 隣接区との対応関係	不明。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) (説明) 砂質粘土どうしの分層で、明確に遺構を検出し得なかった。腐植質を含む8層と砂や礫の混じる9層で、土色、成分を観察しながら分層発掘したが、畦畔1本のみ確認に終わった。 プラントオパールが検出されたこと、8層にあるラミナ状の地積が9層になく、覆拌されているような状況であったことから水田と考えられたが、畦畔が1本のみでは認定根拠は弱い。

第106表 10区水田観察表14

瀬名遺跡 10区 6層水田(時期 近世~近代)

水田の造成	① 水田跡の位置と立地	遺跡の西端。現長尾川の東岸堤防に隣接している。現地形は堤防から平地へと地形が緩やかに傾斜している部分にあたる。長尾川の西岸以西は宮下遺跡である。
	② 地形面の変化	西北から東南に向かい地形が低くなっていく。傾斜約7cm/10m。 グリッドF列以北は、水田面より高くなっている。
	③ 水田の範囲と面積	調査区南東2/3。約1,000㎡。 地形のレベルからみても調査区の北西部は水田域ではないと考えられる。
土層の状態	④ 直上の層の土壌	砂。西側ほど厚く、西側(現長尾川方向)の河川増水によるものと考えられる。
	⑤ 水田土壌	青灰色砂混じりの砂質粘土。厚さ15~20cm。
	⑥ イネのプラントオーバー	<C82地点> ① 0個/8 ② 0個/8
水田の状況	⑦ 直下の層の土壌	砂質粘土。
	⑧ 畦畔の規模	全て同一規模の畦畔。下端幅約50cm、高さ約10cm。
	⑨ 畦畔の構造	盛土のみの畦畔。
	⑩ 水田区画の方法	畦畔の交差点において、南北方向の畦畔は直線を書いている。南北方向を基軸に区画がなされた可能性がある。畦畔の方向は、南北方向のものが約40°西へ傾いている。
	⑪ 水田区画の形	ほぼ正方形。一定していると推定される。 畦畔の交差は東西方向のものが直交しない亀甲形。
	⑫ 枚数と面積	14枚。しかし面積の確認できるものはなし。推定すると180~190㎡ぐらいか。 一定していると推定される。
	⑬ 田面の状態	足跡は疎らで、区画の東南隅(低い部分)を横切っている。調査区北半には、礫を詰めた土坑群があり、水田を覆った洪水による礫を壅塞したものと考えられる。広い範囲に深い溝状の擾乱。
用排水の状態	⑭ 水源	不明。
	⑮ 自然流路	なし。
	⑯ 水路	なし。
	⑰ 水口	1ヶ所。東西方向の畦畔が切られている。
遺物	⑱ 遺物の種類	6層に伴う遺物はなかった。
年代観	⑲ 年代推定の根拠	4層以上が現地表面を載せる客土であるので、区画整理以前最も新しい水田面と考えられる。下層8層からは17世紀代の伊万里焼とみられる茶碗片が出土している。
	⑳ 隣接区との対応関係	9区5層。起伏遺構がみられ畑地らしいが、10区側では地形が低く畦畔状の高まりもあり、10区の水田域につながるものと考えられる。
その他	㉑ 自然科学的分析	
遺構確認面とその図	㉒ 水田遺構としての認定根拠	(模式図) 
		(説明) 砂層に被覆されており、土層断面、平面とも明確に畦畔の高まりを確認できた。 しかし、土壌のプラントオーバーは0個/8であった。

第107表 10区水田観察表15

瀬名遺跡報告書の構成

瀬名遺跡Ⅰ（遺構編Ⅰ）	本文編	1992年3月
	図版編	〃
	図面編	〃

瀬名遺跡Ⅱ（遺構編Ⅱ）	予定
瀬名遺跡Ⅲ（遺物編）	予定

瀬 名 遺 跡 Ⅰ
遺 構 編 Ⅰ

昭和61-62-63・平成元・平成2年度静岡・イ・バス（瀬名地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書
（本 文 編）

1992年3月30日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印 刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
T E L (054) 282-4031

報 告 書 抄 録

ふりがな		せな いせき I (いこうへん I)					
書名		瀬名遺跡 I (遺構編 I)					
副書名		昭和61・62・63・平成元・2年度静岡バイパス (瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査報告書					
巻次							
シリーズ名		静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告					
シリーズ番号		第40集					
編著者名		宮村典雄・一杉高徳・伊林修一・中鉢賢治・小村孝誌					
編集機関		静岡県埋蔵文化財調査研究所					
所在地		〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL.0543-67-1171(代)					
発行年月日		1992年3月30日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 〇〇°	東経 〇〇°	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
瀬名遺跡	静岡県静岡市 瀬名	22201	35度 0分 18秒	138度 25分 31秒	19860403～ 19911115	182、834	静岡バイパス (瀬名地区) 埋蔵文化財発掘調査業務
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
瀬名遺跡	生産遺跡	弥生時代 中期	水田 方形周溝墓 溝		弥生土器、鏝、鉢、田下駄、 杭、打製石斧	当地方の初期農耕段階の 水田。	
		弥生時代 後期 古墳時代 前期	水田 堀立柱建物 溝 塚		弥生土器、古式土師器、鏝、 鉢、田下駄、田舟、ヨコヅナ、 竝作、編織、かせい、網代、 桶、木製高坏、刺物、舟形木 製品、鳥形木製品、木棺、柱 根、梯子、ネズミ返し、杭、 舟材		
		古墳時代 中期	木遺状遺構		土師器、鏝、田下駄、竝作、 舟形木製品、刺物、杭、柱材、 垂木、梯子、鉄錘、鉄削		
		古墳時代 後期 奈良時代	水田 溝 自然流路		土師器、須恵器、田下駄、 田舟、ヨコヅナ、曲物、挽物、 刺物、漆碗、刀形木製品、 畜串、舟形木製品、箸、下 駄、木簡	桑里型地割を示す水田区 画を確認。	
		平安時代	水田 溝 堀立柱建物 自然流路		土師器、陶器、田下駄、田 舟、ヨコヅナ、曲物、挽物、 刺物、漆碗、刀形木製品、 畜串、舟形木製品、箸、下 駄、木簡		
		中・近世	水田 自然流路		土師器、陶器、田下駄、挽物、 曲物、漆碗、箸、畜串、 木簡、平塔婆、銭貨、鉄錘		

※このうち、本書は主に遺構について取り扱った。